
異世界で殺伐とするかもしれないお話

妄想爆発

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で殺伐とするかもしれないお話

【Nコード】

N8531M

【作者名】

妄想爆発

【あらすじ】

周りから見たら少し変わっているだけの青年が異世界の少年に憑依した。
混乱はしても自棄にはならない、その程度には前向きな性格をした彼が、いろいろするお話。

作者は基本、気の向くままに一気に書いているので文章構成がめちゃくちゃなのはご了承ください。

憑依って記憶の転写はどうなってるんだろ

「自分という人間を簡潔に表現しなさい」と言われて、すぐに頭に思い浮かぶのは

「性格破綻者」もしくは「社会不適合者」といった所だろう。

別に暗い過去があるとか家庭環境がよろしくないとかそういうのではない。

むしろ家庭環境に関して言えば良い部類に入ると思う。

厳しくもやさしい母、誠実で酒もタバコもやらない父、要領がよく割とお調子者だが気にかけてくれる兄。このような中で育ったにもかかわらずなぜこんなダメ人間ができたのか自分でも不思議である。

まあ、そうはいつでもあからさまに表に出しているわけではなく頭の中だけでのことなので周囲の人達の評価は「ちよつとずれた変な奴」程度である。例をあげると

小学生の時、登校時に野良ネコと戯れてたらいつの間にか放課後だったり

中学生の時、修学旅行に面倒だから行かないと親に駄々こねたり、

高校生の時、文化祭準備だけ全力でやって当日家でゴロゴロしたり。

自己紹介はこの程度に本題に入ろうと思う。

寝ていた体を起こし周りを見渡す。

巨木が生い茂り、その木々の根はこけむしている。

永い時間、人の手が入らなかった原生林。

巨木の枝の間から日光が差し込み、時間は昼間であるにもかかわらず若干薄暗く、鳥の鳴き声と風の音しか聞こえない。

そんな生まれて初めて見る光景の言葉に表せぬ美しさに感動して……

「って、違う違う」

自分が覚えているであろう最後の記憶と現在の状況が結びつかない。今日は釣りをしに海へ行つて、釣果もまずまずと帰ろうとしたら立ちくらみがしてそのまま……

「海に落ちたんだっけ」

海に落ちて溺れた。

ついでに言っておくとカナヅチではない。むしろ二、三キロメートルぐらいは普通に泳げる。流れが速くなければ。

急に落ちたもんだから海水を飲み込んでしまつて冷静になれなかつたんだろう。

そのまま気を失つて、

「現在に至ると」

いやいやおかしい。

普通そのまま死んで何もなくなるはずだろう。死後の世界など存在するわけではない。

まあ あつたらあつたで面白いけども……

改めて状況を確認しようと立ち上がる。違和感を感じた。来ている服も違つし、どこかこう自分の体じゃない様な。

「体が軽い。それに何だ、なんか変なものが見える」

疲れがとれて軽いかそんなレベルじゃなかった。今なら一八ロンの十二秒とかで走れそうだ。

「流石に馬より速いわけないか、四足歩行じゃないし。それよりもこいつらは一体何だ。」

青い光の粒がたくさん周囲を動いていた。

舗装されていない、というか道すらない原生林の中を歩く。太い木の根っこが壁のように行く手を阻み進むスピードは遅い。時折苔で足を滑らせそうになったり、柔らかい地面に足を取られそうになる。

「日本じゃお目にかかれないな。まったくついて……るのか？」

見知らぬ土地で一人であるにもかかわらず足取りも気分も軽い。全く、いい性格してる。

絶望したり、パニック状態になる訳でもなく自然とこの状況を受け入れている事に自嘲する。

そう考えていると、水の匂い？らしきものがしたのでそのまま歩いて行ってみた。

十五分程歩いてようやく、匂いの発生源である沢についた。

……おかしい。いくら道が無くて歩きにくいからと言って直線距離は七、八百メートルはあった筈。

そんな遠くからこんな小さい川の（水の）匂いをかぎわかるなんて……。

ついでにいうと半分くらいの距離でせせらぎも聞こえた。

………おかしい。

疑問を感じつつも喉の渇きのほうが強かったのか、しゃがんで両手で水をすくい一口。

澄んだ川の水はことのほか美味かった。

冷たい水は喉を通過するたびに快感を与える。

そのまま満足するまで飲み続け渇きが癒されると妙なことに気づいた。

「誰？」

水面に見知らぬ少年が映っていた。

「中途半端にアルビー。」

少年の容姿を一言で言うなら大体そんな感じ。

髪は初老の男性のように白髪の中に所々黒髪が混じり、肌は白いが何か微妙な白。

だがひとつだけ 少なくとも日常では見ることはないであろうものの 目が紅かった。

それこそ写真でしか見たことがないようなルビーのように。

よく見ると水面に映っている少年は自分を真似ているように見える。こちらが右手あげると向こうもあわせて……

「……は？」

これが自分であると認識するのにはばらくかった。

幾分パニック状態になりつつも冷静さを取り戻し再度考える。

「つまり（水面に）映ってるこいつが僕でいいのか？」

……若返ったな。自分の体じゃないけど。

良く見ると前の体の時より顔立ちは整っている。

見たところ年齢は12〜3といったところか。

この体の持ち主よ、すまない。君の分も生きるから！
などと悠長に考えていると今度は

「獣臭い」

匂ってきた。昔飼ってた犬の匂いに似ていた。あゝもふもふしたい。

そこでやっぱり違和感を感じる。

後になって考えたら、これがよくバトルものである『気配』という
やつなのかもしれない。

その『気配』は忍び足で迫っていた。

どうやらむこうさんは狩りの最中のようだ。じりじりと複数で取り
囲むように距離を詰めてきている。

数は分からない。

悪寒が背筋を走る。

この流れから考えると狙われているのは自分である。

視界にオオカミが現れた時、それは確定した。

「戦略もなくそも無い撤退〜！」

脱兎のごとく走り出した。

犬は走るのが速い。

競技犬ともなれば最高時速は六十キロメートル容易く超えてくる。

もちろん平地でだが。

その先祖であるオオカミもそれくらいで走るのだろうか。知識に無いので分からない。

そして今、大型犬も真つ青なサイズのオオカミの群れに追いかけていている。

……食われるのは嫌だ。生きたままは特に。

恐怖と高揚感が混じり呼吸は荒くいつもより余計に酸素を取り込もうとする。

必死になりながら走るのだが、あることに気づいた。

オオカミとの距離が広がっている！？

そして自分がオオカミよりも速く走りながら、木をよけて走っていることに驚愕した。

反応速度が異常だった。

しかし、思考に集中力を取られると速度も落ち獣の群れに距離を詰められる。

考えるのは後、と言いつ聞かせる。

一時間弱走っただろうかオオカミの気配は消えていた。
かなりの速度で走ったからか、息が苦しい。
極度の緊張から解放され深く呼吸する。

……危なかった。

あと少しで食われるところだった。まいたとはいえ相手は獣。
追いかけてくるかもしれない。

「移動しよう」

再度、歩きだす。

ああめんどくさい。なんでこんなことに。
胸中で文句を垂れた。

「都合主義発生」

「ひろいなー」

最初と比べると木々のサイズは小さくなっていった。

歩き始めてからすでに八時間は経っている。いい加減おなかも空いてきた。

相変わらず青い光の粒が周囲をうろろしている。

歩きつつ検証してみると、どうやらこいつらの光は特殊な物のようだ。

見ている分には相当の光量であるにもかかわらず周囲に影響を与えていない。

光っているのに明るくならない。光が木に当たると影ができるはずなのに影がない。

なんとも不思議な光。

不思議できれいでもおなかはふくれない。

空腹は良くない。

ある程度のすきつ腹なら思考が冴えてくる。

しかし、空腹も過ぎると状況によっては不安やら恐怖が湧きあがってくる。

日もだいぶ落ちてきた。

ああ、白いご飯と納豆。あと味噌汁でもあれば言うことないな。

何はともあれとりあえず人里に下りないと。

空腹で注意力が散漫になってきた。

足元もどこかしつかりしないし、倦怠感を感じる。完全に緩み切っていた。

そして、ふと覚えのある匂いがすると振り向こうとしたときにはすでに肩に鋭い痛みを感じていた。

しまった。追いつかれた！

昼間のオオカミの群れだった。

こういった動物は時速三十キロメートル程度のペースなら1日中走っていることができるのだ。

向こうも追跡による空腹からか気性が荒くなっているように見える。昼間よりも余計にプレッシャーを感じた。

とりあえずまた距離を離すべく走り出す。

しかし、疲労と空腹で思うように速度が上がらない。

オオカミとの距離は広がらないが縮められてもいない。

だが野生動物と人間では長引けば前者に軍配あがる可能性のほうが高い。

ジリ貧

集中力が切れてしまったのか（体も限界だったのかもしれないが）自分が走る速度に対応しきれなくなり目の前の木のぶつかってしまった。

「ぐっ」

とっさに体をひねりけをしていないほうの肩のほうからぶつかり、鈍い音をたて木を揺らした。

肩からの衝撃は傷口に伝わり、痛みを強くした。
全身を強く打ちつけたせいか動きも鈍いし、頭が揺れている。

このままでは食われると思いつつ身を起こすが既に囲まれてしまっていた。

体は動くだろうか。少し休めば違つかもしれないがそうもいってられない。

オオカミたちは少しずつ距離を詰めてくる。逃がさないように囲みながら。

食われんのは嫌だな。生きてままだ特に。

とうかこのオオカミども統率がとれてるなと感心して眺めてみると

群れのうちひとまわり大きいオオカミが襲い掛かり、それに続いて他のも襲い掛かってきた。

嫌だ！　こんな奴らの胃に収まるのは。

急に生存への欲求が高まる。

蹂躪される側の恐怖と酷い嫌悪感でいっぱいになり、目の前の『こいつら』を消してしまいたいと思った。

その瞬間、青い光の粒が一定の意志を持つかのように周囲を回転し始めたかと思うと

すさまじい強風が起こりオオカミ共を吹き飛ばした。

鈍い痛みを感じる。

睨越しに光も。

目をあけるとご都合主義よろしく「知らない天井だ。」というように保護されて

傷の手当てがされている……わけがなかった。

日も割と高いことからあれからずいぶん経っていることがわかる。

目の前にはオオカミの死体が3つ。

木の枝に刺さってたり切り傷で血まみれになってたり軽くスプラッタだった。

昨日の群れは少なくとも5頭はいたから残りは吹き飛ばされて逃げたか、

それとも死んだか。

それにしても生存本能っていうのは倫理観とかつそちのけだな。

こうして顔だけみると何ともかわいらしい。殺したのは僕だけど。

ここにきてようやく理解した。少しだけだけでも。

あの青い光の粒たちはなんとというか風そのものなのだ。

なぜそうなのかと言われても感覚的にわかったとしか言えないが。

3つの死体のうち一番傷の少ないもの（といっても腹にでかい穴が開いていたが）を

抱え川を目指し歩き出した。

とりあえず空腹が限界である。

といっても血生臭いオオカミの生肉を食べる気にもなれずこうして川を目指している。

肉だけだとバランス悪いな。そもそもどうやって焼こうか。

鋭くなった五感のおかげか川は思ったよりもすぐ見つかった。とりあえずオオカミの死体を川の水に浸して血を流しつつナイフに見立てて砕いた石で皮をはこうとしてみる。

鶏を潰したことはあるけど、中々大変だな。

思った以上に弾力があり苦戦しているとイライラしてきたのか

「腹減ったー！」

こちらにきて怪力と言ってもいいレベルになったその腕力で引き裂いた。

「最初からこうすればよかった。」

ここ二日、ちょっとした不幸？続きたったここへ来て少し運が向いてきたようだ。

後は火種、火種、と思って周囲を見渡す。

小屋があった。廃屋かもしれないが何か道具があるかもしれない、と小屋に近づいた。

「はいはい。誰か人がいて助けくれたらなー、とか都合のいいことはないか。」

無人の小屋だった

いけない。空腹だとろくなこと考えないな。

助けをあきらめつつ、火を起こせるものがないか探していると摩擦を利用した火おこしの道具を見つけた。

ひもが切れているのを着ているシャツの袖を引き裂いて代用する。

苦戦しながらも火はつき、たき火が完成した。

目が覚めたら自分の体じゃなかったり、命の危険やらがあったわけだが
ようやく食事でありつくことができいくらか平常心を取り戻すことができた。

「オオカミつめえ。」

この体で目覚めてから初めての食事は空腹もあいまってオオカミの肉は全部なくなった。

お金が全てじゃない。でもお金がないと何もできない

とりあえず人里を目指そう。

小屋にあった麻のような材質のふくろに剥いだオオカミの皮を詰め
小屋から歩き出す。

何かの役に立つかもしれない。

川沿いに行けばなんとかなるだろ。

まあ、集落は見つかった。あいかわらずどこにいるのか分からない
けれども。

一体ここはどこなんだ。

ようやくたどり着いた人里が、もうなんか現代人からすると文化的
生活？なにそれ？なほど牧歌的だった。中世ヨーロッパ？

舗装されていない土の道路をまばらであるが人は歩いている。

とりあえず人が集まりそうな場所へ移動しようとその流れに沿って
行くことにした。

道行く人を観察していると白人コーカソイドのような人種が多いようで、

なんか、見られてる。

それもそのはず現在、黒髪混じりの白髪、紅目の少年である。その
色の異様さが目を引いたようだった。

そうしながら歩いているうちに露店が目につき、行商と思われる若

い茶髪の男性と目が合った。

「よう、坊主。ここらじゃ見ねえ顔だな。」

特になんでもない、唯、珍しさが目を引いたのか、向こうから話しかけてきた。

「ええ、東のほうから来たので。僕みたいなのは珍しいんですか？」
とつさに答えてしまった。

“東のほうから”まあ、間違っちゃいない。村の東口から入ったから。

「そうだな、赤髪、緑髪なんてのは見たことあるが、少なくとも白髪で紅目ってのは初めて見た。それにしても東方が。」

東方にやたら反応するあたり何かあるのだろうか。

やっぱり、この容姿は必要以上に目立つらしい。まったくやっかいな。目立つのは嫌いだ。

「そうですか。あのこの辺に毛皮を買い取ってもらえる所ってありますか？」

何をするにもまず先立つものがなければ。

それにこの辺のことも知りたい。

そしてその店主はひげをいじりつつ答えた。

「毛皮？うちでも扱ってるから物によるけど買い取るぜ。見してみ。」

言われて麻袋を渡す。

「おお、こいつはなかなか大型じゃねえか。ちょっと傷が気になるが8エキューってところか。」

オオカミなんて見たことないし、それに日本じゃ滅びているのだ。犬を基準にした大きさしかわからないが、どうやらあのオオカミは結構な大型らしい。

エキュー？何それ？はじめて聞く通貨だな。ここで聞いておくか。

「あの、それってどのくらいなんですか？こつちには最近来たばかりで物価がよくわからないんですよ。」

「ん、まあそうだろうと思ってたぜ。こいつはサービスだ。」
そうだろうと思ったってどこで判断してんだよ。

説明によると銅貨がドニエ、銀貨がスウ、金貨がエキュー
—エキュー＝百スウ＝千ドニエ、他に新金貨がありこつちはエキュー
—金貨の四分の三の価値、平民の平均年収が百二十エキュー。といったかんじらしい。

「にしても飲み込み早いな計算も早い。おまえさん実はいいところ坊ちゃんだったりする？」

まあ日本では当然なんだけど。

「いいところの坊ちゃんだったら毛皮売って路銀稼ぎなんてしませんよ。」

当たり前障りないように、適当な理由をつけてばかす。

「いや、どっかの没落貴族とかさ。」

貴族。そんなものが存在するというのが。それに加えてあの力。いよいよ覚悟をきめなければならいかもしれない。

「じゃあ、ぼくは先を急ぎますので。」

適当にはぐらかして逃げようとする

「おい、俺はエリック。坊主、おまえ名前は？」

なんか馴れ馴れしい。ここの人達はみんなこんなものなのだろうか。まあ、名前ぐらいいいか。

「葉」
「葉は」

どうやらこの村は、行商の中継地としての役割があるようで割とにぎわっているようだ。

とりあえずすきっ腹を満たそうと僕は酒場と思われる場所に入ってみた。

店に入ると昼時は過ぎているようで酒を飲みながら談笑している人たちほら。

そして一斉に僕の方ををみる。

時間ずらしといてよかった！

僕は心の中で叫びつつ、カウンターの隅の席に座った。

「あら、かわいいお客さんね。」

顔をあげてみると金髪の割と美人なお姉さんがニコニコしているではないか。

かわいい…だと。

現在の身長約百五十センチ。

「そういうお姉さんも美人さんですね。」

お世辞でも言っておけばおまけしてくれるかもしれない。
そんな思考が先行してつい言ってしまった。

「あら、お上手。それでご注文は？」

「ミルクと何かおなかにたまるもので。」

お姉さんは注文を取ると奥に引っ込みすぐ戻ってきた。

「君、一人で旅行？すごいわねえ。」

「ええまあ、気の向くままにぶらぶらと。とりあえず今は南のほうへ行こうかと。」

「へー、でも目的でもないならロマリアには行かないほうがいいわ
よ。」

もうあれだ、異世界確定。
文字が読めなくせに、言葉が通じるのはこの体のせいなのだろうか。

話によるとここはガリアとロマリアの国境近く。

お姉さんは口減らしのため売られそうになった所を逃げ出し、ロマリアから出国した。

途方に暮れていた所でこの酒場のオーナーと出会い結婚したらしい。ロマリアはブリミル教の宗教国家。

表向きは「光の国」だとか呼ばれているらしいが実態はそんなことではなく、神官が幅を利かせ好き放題している。

彼女の話 요약するとすればこんな感じ。
口にせずとも相当嫌ってることがわかる。

ロマリアという名前にゲーム的懐かしさを感じていたのにその酷評にちょっと悲しくなった。

と言うか初対面で身の上話とかどう反応したらいいか分からない。

「その話が本当なら余計に見てみたくありませんね。好奇心、という点で。」

何にせよ今はやめときます。」

お姉さんは少しほっとしたかのように、

「それに君の髪の色や目の色で悪魔だーとかなんクセつけられて異端審問とかあるかもしれないわよ。」

今度は悪戯っぽく笑いながらいった。

「ちよつ、僕ってそんなに見た目凶悪ですか？」

「冗談よ。」

異端審問。歴史の教科書でしか知らないこと。

キリスト教でよく取り上げられる。

他宗教の弾圧を始め、かなり強引なものも存在する。魔女裁判とか。

冗談じゃない。ほんとこの手の類が一番恐ろしい。そしてめんどくさい。

内心、自分はとんでもなく危険な所に行くところだったのでは？と思うとぞっとしない。

食べ終わり会計を済ませようとするとミルクの代金をおまけしくれた。

21

酒場から出て、今後のことを考えていると、

「おーい、ナツメー」

さつきぶりエリックさんが手を振りながら走ってきた。

何やら少し興奮気味のようだ。

「何かあったんですか？」

曰く、

さつき買い取ってもらったオオカミの毛皮が希少種スコルというのものだったらしく

偶然露店を見に来ていたガリア貴族が大枚はたいて買っていったらしい。

「そんなわけで8エキューじゃ悪いと思っつてな。」

わざわざそれをいいに来たのか。いい人なのかもしれない。打算かもしれないけども
そう言いつつ金貨の入った袋を渡してきた。

「俺は王都に店を構えるのが夢でよ、お前のおかげで開店資金の算段が付きそうなんだ」

ありがとう、と

少しいい気分になった。信用できそうなので頼んでみることにした。

「あの、王都までの道程ご一緒させてくれませんか？」

「ああ！？商売しながらになるからゆっくりになるぞ。」

「構いません。迷って王都につけないよりはずっといいです。」

「おし、それじゃ出発は明日の朝にするから必要なものがあつたら買っつけよ。」

王都行き僕が考えてるよりスムーズにいきそうだった。

こちらの一般常識が欠けているのでエリックさんに手伝ってもらいながら混乱しつつも買い物無事終えることができた。

というか剣高すぎ！普通のロングソード60エキューとかおかし

だろ！

エリックさん曰くメイジが作っているからだとか。

要するに、製鉄技術がないので鉄が少ない。メイジが作るしかない。値段が上がる。

加えてこの辺には平民の鍛冶師も少ないらしい。

そもそもメイジって何？と僕が言うと、

「何い！そんなことも知らなかったのか！？」

すごい驚かれた。

メイジとは魔法使いのことを指し、また貴族は全てメイジなんだと。

そんなやり取りをしつつナイフ二本、大きめのローブ、干し肉などを買った。

ちなみにナイフは二本で二十五エキューもした。

翌日、道中、馬車の上で

「なあ、スコルの毛皮なんてどうやって手に入れたんだ？」

なんでもスコルはそのサイズはふつうのオオカミ倍近くあるにもかかわらずすさまじい速度で走り、群れで行動し知能も高い。加えて山奥に住んでいる。

そんなに危ないわんこだったんだ。

まあ、確かに死にかけたし、あれは確実に時速七十キロメートルは出てたね。

「いやあ、おなかすいてさまよってたら偶然死体を見つけて。」

本当のことなんて言えるわけがない。

危機的状況で力が覚醒とかどこの中二病だよ。

「お前がそういふのならそうなんだろうな。」

なんだかばれてるのだろうか。

この日は野宿で明日の午後次の町に着くらしい。

エリックは既に就寝。

僕の周りにはあの青い光の粒たち 便宜上、風の精霊と呼ぶことにする が

相変わらずうようよしている。

どうやらこいつらはほかの人たちには見えならしく、スルーし続けるのが辛かった。

スコルの群れにおそわれたときを思い出す。あの時は僕の意志に応じてなぜをおこしていた。

そしてそれと同時に何かをぐっそりと持って行かれ意識がシャットダウンしたようだった。

少し試してみよう。

もちろんあの時のような強い風ではなく、そよ風をイメージしながら

……精霊さん、精霊さん。ちょっと力を貸して。

風の精霊たちが集まって行くのを感じる。

少し集中すると目の前に小さなつむじ風が出来上がり砂を巻き上げていた。

「つちにも事情がある

「ねむい」

僕は寝ぼけ眼で独り言を言った。

風の制御の練習について夢中になって気がつくとき夜明け前だった。とりあえずできる事が少しわかった。

風を起こすことと、自分と風を同調させることで知覚能力を拡張すること。

「なんだ眠れなかったのか。眠いならこれかじっとけ。」

エリックはナツメにそう言って何やら乾燥した葉っぱをよこす。

「いい香りですね〜これ。」

その葉っぱはミントを強烈にしたような香りだった。

……あれ？そもそも嗅覚がものすごく強化されてるんだからこんな匂いなら卒倒しそうなのに。

まさかこれも風の精霊の恩恵なのだろうか。

「エリックさん。メイジって人より五感が優れたりします？例えば耳がすごくよかったですか。」

「さあ。俺は魔法は専門じゃないからわからん。知っていることと言えば魔法には五系統あり、それらは火、水、風、土、そして失われた系統があるってことぐらいだな。」

エリックさんは続ける。

「魔法のことを知りたいのなら王立図書館にでも行けばそれ専門の本もいろいろあるだろうがまあ、あそこは貴族しか入れないしな。」

「うーん。流石に特権階級は違うな。」

「それよりお前の旅の話でも聞かせろよ。」

十割ねつ造ですけどかまいませんか？

町に着いたのは午後だった。

エリックは町の商人ギルドで手続きをしてくるようなので、僕はそれに付いて行くことにした。

道すがら眺める異世界の町並みは十分に感動を与えてくれる。

馬車の中から、おお、と感じ入っていると不意に違和感を感じた。

頭の端に何かが突っかったような感覚。

荷馬車の中を振り返りみると半透明のうねうねしたものがエリックの金貨の入った袋を持ち去ろうとしていた。

「そおい！！」

僕はすぐさまそれに駆け寄り、つかみ引き裂いた。

粘土のような空気のような感触が手に残る。

「どおしたあ！？」

僕の掛け声に驚いたのか、エリックさんの声はうわずっていた。

「泥棒です。なんか半透明な奴が金貨を持ち去ろうとしてました！」

「半透明〜！？」

エリックさんが僕の返答に疑わしそうな目を向けると同時に

「おい！ 大丈夫か！」

通りでは人が倒れていた。

杖を握り締めた状態で。

人だかりができ、倒れた当人は運ばれるのかと思いきやすぐに起き上がった。

何やら拳動不審に辺りを見回すと何かに怯えたように走り去る。

一体何なんだ？

馬車を預け商人ギルドに向かう途中、

「さっきの事なんだが」

エリックさんは何か解ったのか僕に向かって言った。

「お前が言った半透明のやつは魔法なのかもしれない。」

「へっ？」

「外で倒れた奴の手には杖が握られていた。そして倒れたタイミン
グはおまえの声が出た直後。以前にもメイジのスリにやられてね、
これでも警戒していたつもりなんだが。」

「あれが魔法？　　といかなんで外にいたそのメイジは倒れたんでしょうね。」

「さあ、そこんところはよくわからんが一つだけはつきりした。ナツメ、おまえメイジだろ。違うか？」

まあ、もともと信用はしてたし話してもいいか。

「不思議な力が使えてそれが魔法だというなら、間違いじゃありません。」

「見たとこ杖は持っていないようだが」

「えっ、魔法つて杖ないと使えないんですか？」

驚きの新事実。

「ほんとに何も知らないんだな。メイジは杖を媒介に魔法を使うんだ。」

「へえー」

「気の抜けた返事だな。しかしこれは大事なことだ。お前の力は人前では使うな。異端に指定される可能性がある。ブリミル教をあまり信じちゃいない奴でもそう言った事には敏感だからな。気をつけた方がいい」

「怖！　　といかエリックさんやたら詳しいですね。さっきの指摘も可能性としては高いと思いますけど。本当にメイジじゃないんですか？」

「商人て言うのはこういつた観察力や情報が命なんだよ。」

商人ギルドでの手続きも滞りなく済み、今日から3日、僕は自由な時間を手に入れた。

なんだか子供扱いである。中の人の年齢と比べれば大した差はないのに。

とりあえず、日が暮れるまで露店を見て回ることにする。

上に着ているシャツも血のシミがところどころについており、また破いて使ったりということもあつて結

構ボロボロであつたので買い替えようと思つたのだ。

もう既に正午から大分時間が経ち、露店もそろそろたたみはじめている。

さっさと買って帰ろう。

と並べられている商品を見て回った。

宿への帰り道、背後から三人、前のまがりかどに一人つけてきていることが風の索敵でわかる。

明らかに敵意を感じる。人攫いの類だろうか。可能性としては十分ある。

確かに見た目が珍しいのは認めるけど、攫うのではないわ。

次の瞬間後ろの三人が動き、それと同時に僕もそれに合わせて走り出す。

前方の曲がり角の一人が待ち構えているのがわかる。

そのまま、タイミングを合わせ、

曲がり角から出てくる瞬間、

渾身の右を振りぬく。

こぶしはそいつの右肩にあたり、

メキヤツ と嫌な音をたて

きりもみして吹っ飛んで行った。

おお……、これはこれはなんとも。

「ば、化けものだあー！」

三人の内、誰が言ったか分からなかった。

逃げて行ったし、追うのも面倒、空腹状態でもあったので宿へもどった。

翌朝

路上で一人の男が頭から血を流して死んでいるのが見つかった。

夕暮れ時に外に出ていたこともあって衛兵の詰め所で取り調べを受けることになったが死体の惨状を見れば僕がやったとわかる者はいないだろう。昨日の三人を除いて。

詰め所から出ると、遠巻きに僕に向けられた視線に怯えが混ざった者がいた。

とりあえず目があったのでニコツと笑っておいた。

「全く物騒なもんだ」

エリックはこれ以外特にナツメに何も言わずに仕事に行った。

人攫いの男A

全く冗談じゃねえ！あの腐れ商人が選んださらうガキは、子供の姿をしたバケモンだった。それに今は町が封鎖されちまつてる。このままじゃ殺されちまう……。

どうやらあのガキが詰め所から出てきたようだ。遠くから見ていると奴の視線がこっちに向きやがった。そして

ニヤリ

不気味な笑いを浮かべやがった。あれはまるで

ニガサナイ

といってるようだった。ああもうおしまいだ。

宿の一室で意識を集中し、自身を風に同調させ意識を共有させる。

自分の領域が広がるイメージを作り、風による索敵を始める。

人攫いの実行犯、当然攫った後運ぶ奴らがいるはず、と。

一番は人攫いたちのリーダーがいいんだけど。

ああいうのは後の障害になったりしないように今の内に絶っておかないと。

まだ複数の人間を追うなんて器用なまねはできないのでとりあえず三人のうちの一人在風で後を付ける。その男は商人風の太った男に話しかけ二人で路地裏に入って行った。

商人風の男は何やら不機嫌そうに、人攫いの男のおびえた様子など

お構いなしにはなしはじめた。

「どういうことだ。私はあのガキをさらって来いと言った筈。まさかガキ一人さらって来れないような無能なのか？ 貴様は」

「冗談じゃない！あれっぼちの報酬であんなバケモンの相手なんてするわけねえだろ。いや、もう今はいくら金を積まれてもアレの相手だけはしたくねえ！」

怯え、まくしたてるように言った。

「ただ殴っただけだったんだ。あの野郎ただ殴っただけで……
……。
とにかく俺は殺されるくらいなら自首してでも匿ってもらおう。あんたも早く逃げたほうがいい。」

「さて、それでは私のことがばれてしまうではないか！ たかがガキ一匹でなんて様だ」

商人は怒りを露にしてどなるが、男の態度が変わることはなかった。

「たかがガキなんかじゃなかった。オーク鬼やコボルトなんてあれにくらべたらかわいいもんだ」

そう言って人攫いの男は去って行った。

「さて、話は終わってないぞ！」

……なんだあいつこんな豚を気にかけるなんて中々義理堅いじゃないか、って違う違う。
どうしよう、自首なんかされたら僕のことばれるじゃない。
ああ、くそ！気がそれたらあの男がどこにいるかわからなくなった。仕方ない。とりあえずこの太った商人を追跡することにする。
小声でぼそぼそ何か言ってるようだった。

「こう……ま……ら……油断……危険……兵メイジを雇……ガキを、三人は……に処理させるか」

こいつ……僕とあいつらを消す気か？

そこまで聞いて集中力が切れたのか風との意識の共有はきれてしまった。

……くそ！こつちに来てまだ一週間も経ってないのにもう死亡フラグがたつてしまった。

死亡フラグうんぬんの前にお前も殺してるだろうかと言いたいかもしれないが、このナツメという男、基本的に自分勝手である。生きるためなら命を奪う事ためらうことはない。

平和な日本ではそれが表に出ることがなかっただけで、割り切りが早すぎるのもそのためである。

まあ、こういう奴なので次に考えることと言えば一つである。

あの商人は確実に消す。人攫い三人は後回し。とすると犯行は夜中か。

あの商人も子供を殺す依頼なんておおっぴらには出せないだろうし
依頼を出すにも直接金をつかませるだろう。
とすると今することは……

腹黒い事を考えだした。

珍獣扱い（前書き）

事もあるつに話の前半部分が抜けている事に気が付きませんでした。
9月19日

珍獣扱い

風と同調して感覚を広げつつ、宿から出ていく。

まず傭兵ギルドのほうへ行くと、あの奴隷商人は思っていたよりも、すんなり見つかった。

あとをつけてみると 杖を腰にさした金髪を短く刈った筋肉質の男がリーダーなのだろうか 傭兵の一団に話しかけていた。これがメイジの一般的な格好なのか、と考えながら風を操る。

するとそのリーダーらしき男ともう一人剣士風の赤みがかつた茶髪を後ろで結んだ女が立ち上がり商人の男について行った。

ああ、やっぱり。もう接触しちゃったか。戦闘になるのかな。あゝ痛いのは嫌だ。

殺すほどの悪意、そんな物を含む暴力を人から向けられるのはこれが初めてである。

未だ体験した事のないその事象に怯えながら、ナツメは彼らの話に耳を傾ける。

風による追跡を続けると、奴隷商人が泊まっているらしい宿屋にいた。

やはりおおっぴらに話せることではないらしく宿の一室に入ってく。僕は彼らに風を張りつかせ近くの広場にあった石に腰かけた。

「で、依頼のことですが、」

「失礼」

メイジの男が商人の話を遮り、杖を取り出し呪文らしきものを唱え始めた。

しばらくすると

「どうやら聞いているものはいないようだ。話の続きを」

あの呪文は何かを感知するためのもののようなのだ。

とりあえず風でこの部屋に意識を割り込ませていることは気付かれていないらしい。

「実は、町に吸血鬼が紛れ込んでいるのです」

は？ ナツメは固まった。

「今朝の騒動の犯人もそいつの仕業でして」

血も吸われてないだろ！あくまできれいな仕事として処理するつもりかこいつ。

「それだつたらギルドで正式に依頼を出せばいいでしょう」

女は答えるが、それに対し商人は

「吸血鬼は非常に狡猾な化け物です。依頼など出したことが奴に知れたら逃げられてしまうでしょう」

理屈としちゃ通ってるけど前提に無理があるだろう。

「犯人の特徴は？」

メイジの男はとりあえずといったような声色で聞く。

「白髪紅目で150センチ程の子供です」

「あら、その子だったら私見ました。ルビーのような眼をして可愛かったな」

こんな状況でなければこの後あなたの所に急行……げふんげふん

メイジの男は少し考え、

「わかった。依頼は引き受ける。逃げられないためにも今夜にでもそれと前金として報酬の半分を頂きたい」

「ありがとうございます。このことはくれぐれもご内密に」

結局依頼はすんでしまった。戦闘は避けられそうにない。

メイジの戦闘力やこの世界の剣士の実力がどれほどのものか分からないけれども

あの男の堂々とした態度や無骨な杖を見るに結構な自信があるのだろう。

かたやこっちは数日前まで命のやり取りなんてしたことのない一般人。

いくら身体能力がすごかろうと、不思議な力を扱えようと勝つイメージが浮かばない。

エリックさんに被害が及ぶのはあまりよろしくない。タイミングを見計らって宿から離れないと。

「フランツさん、どうしてあの依頼を受けたんですか？いくらなんでも怪しすぎます。それに子供を狙うなんて」

剣士の女は少し怒ったようにいった。

「マール、団長と呼べ。おまえは剣の腕はいいがもう少し頭を使っただほうがいい」

フランツと呼ばれた男は諭すように言う。

「おかしいなんてとくに気づいてる。それに今朝の事件の犯人は吸血鬼ではない。もっと別の奴だ」

「どうしてですか？」

「お前は死体を見ていないからわからないだろうが、出血は頭からだけで血を抜き取られた跡もない。

それに死体の男は殴り飛ばされたっていうのはきてるだろ。

吸血鬼つてのはな確かに頭はいいがあまり力は強くないんだ」

「それなら尚更依頼を受けた理由がわかりません。吸血鬼じゃないって言うんなら、」

マールと呼ばれた女は自分の上司をいぶかしげに見たが男は続けていった。

「だが人間かどうかも怪しい。あの商人の部屋でディテクトマジックを使っても反応はなかったが中の空気には違和感を感じた。目に

は見えなかったが何かがいるような」

そして一番の理由。

あいつを見たとき背筋が凍りつきそうなほどの鋭い何かがあるのを
駆けた。傭兵としての勘がつけるアレがヒトではないと。まどつて
いる雰囲気そのものは柔らかいとその存り方がおかしい。奴とやり
合えば俺はさらなる高みへ登ることができる気がする。そう思って
しまった。

「また団長の悪い癖ですか？ いい加減、その戦闘力にこだわる
の止めないと碌な死に方しませんよ」

マールは辟易とした様子で言った。

このフ란ツという男、貴族のそれも伯爵家の男として生まれたの
だが、地位や権力というものにあまり執着しない。というより嫌っ
ている節さえ見える。彼曰く

「地位なんて高くなつたて責任や仕事が増えるだけだ」

こういう風に言えるのも実家が所有する領土では後を継いだ兄が馬
車馬のごとく働いているからなのだが。家風なのか貴族を絶対視し
てるわけでもないの身分を捨てることに抵抗がなかった。

そういうわけで15で家出。現在傭兵9年目である。

「俺は戦いが好きってわけじゃないんだが、こいつは滅多にお目に
かかれるもんじゃねえ」

「あの子がねー。そんなにすごいんですかね？」

マールは不思議そうにこたえる。

「なににせよ対峙すればわかることだ」

ふたりは傭兵ギルドへは行って行った。

人攫いの商人は傭兵メイジを雇った。

僕を消すために。

なんか奴らの認識では僕の事は力の強い吸血鬼と勘違いされているように傭兵団まるまる一つが雇われていた。

オーバーキルもいい所だ。

また、僕がが奴らの話を能力を使用して盗聴している様子は、傍から見れば変な子供がうんうん唸っているように見えていたようで、

「お前何やってんだ？こんな所に座って変な唸り声上げてるし」

仕事が一段落したエリックさんが呆れ顔で眺めていた。

どうやら商売の方は早ければ今日中に終わってしまううらしかった。

「この仕事が終われば後は王都リュティスに行くだけ。くく楽しみだぜ」

自分の店を持てるのがよほど嬉しいようだ。

ここで逃げるのは簡単だ。僕の足なら一日もあれば誰も追って来れないくらい遠くまで行けるだろう。

それじゃ僕と一緒にいたこの人に迷惑がかかる。

吸血鬼かもしれない子供と行動していたなんてことがばれてしまえば最悪命の危険さえある。

どうにか傭兵たちを退け、あの商人を殺し、人攫いの男達に口止めをする。

考えてみると最善の結果を得るのはかなり難しい。

というか後ろの2つだけなら何とかなったのに増えた一つがよくてとても無傷じゃ済まないような難題だ。

ああどうしこうなったのか。こんなの僕の役回りじゃないのに。

時間も夕方になり宿で食事をとる。エリックさんは知り合った商人の人達と飲みに行った。

僕は酒が苦手だ。

というか弱い。これでもかというほど弱い。この体はどうかかわからないけれども。

酒にはいい思い出がない。

酔った勢いで本音や抱えていたものが出てしまうことがあるのが怖い。

そのおかげで対人関係いろいろまぶさくなったり、変な眼で見られたり。

夜も更け、エリックさんが酔っ払って帰ってきた。

彼が寝たのを確認しつつ、僕は部屋を出る。

この宿が襲撃されてしまったては意味がないのでわざと宿の主人に見られるように外へ出ていく。

……やっぱり誰がいる。それも一人や二人じゃない。

僕は気づいていないふりをして昼間の広場に向かった。

暗闇は不安を増長させる。

しかし、この光源にならない光　風の精霊たち　と共に歩いていると何だか心強い味方がいるようで恐怖はいくらか和らいだ。

まあ、和らぎはするのだが、消える事は無かった。

緊張の余り心拍数が跳ね上がり手が震え、足取りも重い。ふと急にその精霊たちの動きが激しくなる。

僕は首筋のあたりにゾクゾクとした感覚を感じると、とっさに伏せた。

すると、民家の石の壁に大きな切り傷が目に入っていた。

やばい、と思いながら風との同調を全開にしながら広場へ全力で走りだす。

奴隷商人に雇われた傭兵だった。

傭兵たちもこっちの動きに合わせて、後を追ってくる。軽鎧の金属音がする。

走り出すとさっきの震えも止まりある程度冷静さを取り戻せた。

この町の広場は南北にくわえ北西の方角へ街道が続いている。

僕は南の方から広場に入りその中心で止まり後ろを振り返った。

あの金髪傭兵メイジはどこにいるかわからないが剣や斧を持った男たちが走ってきた。

そして逃げ道をふさぐようにそれぞれの道に剣や弓矢をかまえた男と昼間の茶髪のポニーテールの女剣士もいた。

……数は、南に5、北に6、北西に3。どうするか。町を犠牲にすれば

あのオオカミと対峙した時のような竜巻を起こせるかもしれない。

しかしそれでは駄目だ。下手に圧倒すれば追手も増えてしまうし、なによりエリックさんに危険が及ぶかもしれない。

そうこう考えてるうちに南通路の方から違和感を感じた

「ラナ・デル・ウィンデ」

聞き覚えのある声が聞こえたと同時に僕は後ろへ飛ぶ。

するとその瞬間大きな風の塊がさっきまでいた場所を通過する。

「ほう、初撃の回避の見事なことといい今のエアハンマーまで簡単によけるとは。

そのくせ構えは素人、一体どうなってやがる」

傭兵メイジだった。

「あの、僕何で狙われてるんですか？」

いたいけな少年を演じてみる。

「お前が吸血鬼だという嫌疑がかけられててな俺たちはその討伐を依頼されたものだ」

「吸血鬼って。僕、血よりも甘いお菓子が好きなんですけど」

軽くチャラけたセリフを吐くのだが、そんなやり取りが通じるはずも無い。

背後の空気が動くのを感じ横に飛んだ。

見ると女剣士がロングソードを振りおろしていた。

「完全な不意打ちを2度もかわすとは」

金髪傭兵メイジは感心したようにつぶやく。

「どつやらこつちも本気で取り掛からなきゃいかんらしい」

するし

「かかれ！」

メイジの号令と共に矢が飛び、傭兵たちが斬りかかってきた。

実は結構沸点が低い

傭兵たちが斬りかかってくるのが見える。不思議と恐怖はあるが震えはない。

今ならこっちからいった方がいける!!

剣を持ったひとりの傭兵に向かって走り右肩を前方に突っ込む。

以前考えたことがある。某球を七つ集めると願いがかなうお話で残像拳なる技があった。

小さい頃は何の疑問も感じずに普通に見ていたが、年齢を重ねつい懐かしくなって読み返すと突っ込んでしまった。

残像拳とは凄まじい速さで動いたり止まったりすることで残像を作り、相手を攪乱する技。

このような使い方をしているので思わずツツコミを入れた。

「いや、これで体当たりしろよ」

つまり何が言いたいのかというと、オオカミをも圧倒する速度で子供一人分の体重の塊が迫ってきたら

すごい運動量が発生する。これで体当たりなんかされたらすごい痛いだろうなーという事。

まあ、これには誤算もあってすぐに封印することになるのだが。

ドツツ……!!

「ブヒヤッ！」

情けない声をだして傭兵は吹っ飛ぶ。そしてその空いた隙間から包囲を抜け出した。

・・・ナニコレ、すっごい痛い。

当たり前だ。

痛みを我慢して前方を見ると風の精霊が密集しているのが見える。槍のように長く細く鋭さが感じられる密度の高い空気。

「エアスピアー」

それがこちらに向かって放たれた。横に転がりよけ、体制を立て直す。

相打ちになってたりしないかなと振り返るがすでに傭兵たちは散って風の槍は通り過ぎていた。

風の力を使おうにも、風で攻撃するなんて芸当ができるはずもなくできることといえば

せいぜい感覚を広げ迫る攻撃をかわし近づいて各個撃破。

どうやら呪文を唱えないと魔法を発動できないらしくひとつの魔法から次の魔法まで少なくとも数秒のタイムラグ

があるようだ。金髪メイジは次の呪文を紡ぐべく鉄杖を掲げる。

・・・これで決める！！

地面を蹴ると石畳は割れる音がした。金髪メイジは呪文を唱えつつ

も避けようと足を動かす。
が、今の僕感覚からすればそれはまるでゆっくり歩いているかの
様な速度に感じられ、
その努力は迫る右ストレートの威力とあたる場所を若干修正しただ
けだった。

そのがっしりした体が殴り飛ばされふっ飛ぶ。

一番の戦力を撃破したことに一瞬でも安心して動きを止めてしまっ
たのがいけなかった。

背中 of 皮膚に鋭いナニカが当てられているのを感じる。体をひねっ
てかわそうにも遅かった。

それは皮膚を貫き肉を切り裂き鎖骨の下から顔を出した。

焼けるような痛み。それを初めて感じ、動きが止まってしまっ

・・・ああ、斬られるってこんなに痛いんだ。

そして剣は引き抜かれ、僕は膝をついた。

・・・痛い、いたい、イタイ。

痛みに気を取られてると周囲に傭兵たちが集まってくる。

「すげえ隠し玉でもあるかと思ったたらトンだ拍子抜けだな。」

金髪メイジが左肩を抑えながら言った。

・・・やっぱり、あたりが浅かったか。

「いや、これで拍子抜けって団長はどんな化け物を想定してたんですか!？」

傭兵の一人が言うと次々と

「さっきの体当たりでリッツはかなり重症ですよ。長引かなくてほんとによかった。」

「早くは治療しないと、あー治療代がー。」

「団員に水メイジがいりゃな。」

「新しく入れるなら女の子がいいっす。」

・・・etc

全くさつきまで命のやり取りしてたとは思えない。

なんだか気が抜けて馬鹿らしくなってきた。

そんなやりとりを見ているとさつき僕を突き刺した女剣士が僕の前
にしゃがみこみ

僕の両頬に手を添えるようにして親指を口に突っ込み、無理やり広
げさせられた。

「団長、この子牙ないよ。」

美人というよりも可愛らしいその顔が近付いたのは、彼女いない歴
〇 年齢の僕には刺激が強すぎた。

傷も熱いが頬も熱くなってくるのを感じる。

「まあそうだろうな」

団長と呼ばれたその金髪メイジの言葉によって僕の熱は急にさめた。

どうしてこんなことになってる？・・・目の前のお姉さんに刺さ
れたから。

お姉さんは何で刺した？……………傭兵として雇われたから
誰が雇った？……………あの肥え太った商人（ブ
タ野郎）。

・・・アイツか。あんな奴のせいだ僕の生涯は幕を下ろすのか。ア
イツさえ、アイツさえいなければ
アイツが僕に目をつけなければ……………

怒りで頭に血が昇る所か逆に冷めてきた。

「コロシテやる。」

その言葉に反応するかのように強風が吹き始めた。
違和感を感じた女剣士は距離をとる。

「あのクソムシがああッ！、殺してやるううううううううううう！
！」

その瞬間、爆発が起こったかのように風が吹き荒れ傭兵たちを吹き飛ばした。

一方その頃

件の商人は衛兵に金をつかませ町の北門を出ていた。

「いいかげん稼いだし、あの街を拠点にするのもこれで終わりだな。ごろつき共を丸めこむのは簡単だったしあの三人の始末も思ったより楽だったな。」

しかしあのメイジめ。人の足元みおってふっかけすぎだ。まあ、なんにせよ……」

ぐへへへへ、というような擬音が似合うような笑い声をあげながら馬車の手綱引いていると

ズドンッ

大きな音がして、その音に驚き振り返ると

白髪赤目の化け物が荷馬車を粉碎しそこに立っていた。

興奮も落ち着き、冷静になった棗は風を身にまとい上空へ飛んだ。ある程度の高度で止まり目を閉じる。彼の周りにはいつもの数倍の風の精霊がいた。

同調を開始しあの商人を探す。

・・・今ならどんなに離れている場所のことでも手に取るように分かりそうだ。

数秒して

「見つけた」

彼の口元は笑いで吊り上っていた。

そのまま飛んで行き馬車の上に乗っ込む。

荷車と離された馬に商人が乗り、スピードを上げる。

馬とは持久力にすぐれ、トップスピードも中々のものである。

しかし、トップスピードが凄いののは競走馬であるしそれもジョッキーが乗ってこそであるので
高々荷馬車を引く程度の馬がそんなに早いはずもなく加えて背に乗せているのは重い肉の塊。
すぐに追いつかれその重い肉の塊は引きずりおろされる。

商人は引きずりおろされ醜く尻もちをついて言った。

「ま、まて私のバックにはアツテムト伯爵がついているのだぞ。私に何かあつて納品が間に合わなかったら
お前もただでは済まんぞ。」

「もう充分ただで済んじゃいねーよ。こっちは生まれて初めて剣で斬られたんだ。」

こちらにためらう様子がないとわかると

「まて、助けてくれ！命だけは。そつだ荷台にある金は全部お前にやろつ。」

「何を言つてるんだ？」

僕の言葉に思考が付いていかないようである。

「どのみち僕はお前許す気なんて全くないし、お前が死んだら後ろの金も全部僕の懐に入るじゃない。」

そついうと僕は風の不可視の刃を無数に作り男に向かって放った。

「まっ
」

男は断末魔をあげることもなく分割され小さな肉片となり辺りに散らばった

実は結構沸点が高い（後書き）

戦闘描写難しい。

適当なつなぎ（前書き）

中二病な名前は現実とかぶらないようにするための配慮だと思う。

適当なつなぎ

佐伯 棗 さへき なつめ

僕の名前である。決して女ではない。小さい頃はこれをネタによくからかわれたものだ。

ついでに言うとなりの子に見間違われるような可憐な容姿をしてるわけでもなく、
すごいイケメソだったりするわけでもない。黒髪黒眼のフツメンであつた。

大学の卒論も終わりにさしかかり、就職微妙で欲望が薄い理系の21歳。

名前について小学生のときは両親にきいたら

病院側で誤診で女の子が生まれると聞かされ早期に「棗」という名前が決定され直前になって男の子であることが発覚。

でもまた名前考えるのめんどくさいからそのままでもいいや、とこの名前になってしまった。らしい。

二十歳すぎでいまだに友人にナツメちゃんと呼ばれる。いいかげん恥ずかしい。

何でこんなこと言うのかというと

「仕事とはいえごめんねー。痛かったでしょう。」

馬車の中でマールさんに抱きかかえられているからである。

彼女の身長は160後半といったところ今の僕とは15cm以上の

身長差がある。

元の世界でもこんなに女性と密着したことなどなかった僕にこの手の免疫があるはずもなく

「真っ赤になっちゃって。かわいいぞナツメちゃん。」

「ナツメちゃん、うらやましいッス。」

昨晚、殺し合いをした傭兵達にこうしてからかわれている。

・・・どうしてこうなった。

あの商人を殺した後、荷馬車の残骸をあさってみると金は一つの袋に詰まっているのがあっただけで

他に数点日用品があっただけだった。後で数えてみると三百エキユ一程で確かに大金ではあるが人身売買を商売にしているにしては少なかった。おおかた送金などして手元に置かないようにしていたのだろう。

風をまとい飛んで夜中の町に侵入した。刺されて貫通していたにもかかわらず肩の痛みはそれほどひどくはなかった。

血を見るのは好きじゃないが、傷口を洗うために井戸から水をくむ。雑菌とかが心配だけどとりあえず上着を脱ぎ

あたまから水をかぶる。傷口にがしみるが気にせずもう一杯。シャツを水に浸し傷口をぬぐうと切断された皮膚が見えた。

「うげえ」

気持ち悪さにうんざりする。しかしよく見ると傷口の端の方が既にピンク色の新しい肌、
要するにもうふさがり始めていた。

宿の正面玄関は既に閉まっていた。まあ、開いてても正面から入れるわけではないが。

2階の窓から部屋に入り自分のベットへ向かう。

洗ったシャツを貰かれた幹部に巻きつけ、ベットに横になると僕の意識はすぐになくなった。

鳥のさえずりで目が覚める。窓の外を見るとまだ日が昇ってすぐのようだった。

・・・あれから大体4時間といたところか。

体を起こそうとするとやはり右肩に鋭いたみがはしり

「うっ。」

少し声をあげてしまった。向かいのベットでエリックさんが寝てい

る。

この様子だとまだしばらくは起きそうにない

部屋から出て階段を降りると宿のおかみさんが驚いたようにいった。

「あんだ、それ一体どうしたんだい！ちょっとアンター、包帯もつてきてー。」

・・・まあ確かにところどころ服に血がついてたりしてたらそういう反応するわな。

そうこうするうちに宿のカウンターの奥に引っ張り込まれ、強引に手当された。

「ありがとうございます」

「いいのいいの、困った時はお互いさまってね。それにしてもそんなひどい傷、何かあったのかい。」

おかみさんが聞いてくるのも当然。僕は少しためらうふりをしながら言い訳を考え、

「ちょっと貴族様とのいざこざに巻き込まれました」

嘘は言ってない。あの商人の背後にはアツテムト伯爵なる人物がいるらしいから。

それにしてもアツテムト、かの勇者が魔王を倒すシリーズで魔王が目覚めて崩壊した町の名前である。

「また貴族か」

今度は主人の方がうんざりした様な様子で言った。

「また？」

どうやらこの世界、貴族の無礼打ちで平民が死ぬことが日常茶飯事らしい。

その事実を聞かされ僕は息をのむ。

無礼打ち。

昔の日本にも武士がいた時代にあった制度。と

いっても無礼打ちが実行されるのは相手側が明らかに無礼な態度、行動をとった場合のみに限られる。

しかしこちらでは明らかに言いがかりともいえる理由でも実行されるらしい。

そんな暗い話をしていると、

……チリーン

宿のカウンターについてる呼び鈴が鳴らされた。

そして音のしたほうに向くと、昨日の金髪風メイジと茶髪ポニーテール女剣士がいた。

フランスは傭兵である。昔は貴族ではあったが今は違う。それに元

々貴族のような威張った態度を好まない。

しかし腰に杖を下げている。また身につけている軽鎧もシンプルなデザインながら、材質の良い物であった。

つまり、宿屋の主人とおかみはナツメの話に出ていた？いざいざ？に巻き込んだ貴族のように映ってしまったのである。

「お取り込み中すまないが、その後ろの少年を貸してもらえないだろうか？」

できるだけ丁寧に言ったつもりなのだろう。その後ろでマールは裏に笑顔で手を振る。

「あ、あの、この坊主が何かしやしたんでしょうか？できればそのけが人なので連れまわすのは勘弁してほしいというか・・・」

主人が怯えたように言う。おかみなんかもう泣きそうである。

「いや、別にそういうわけではなくてだな。」

フランツは誤解され、しどろもどろになりつつも答える。そんな様子にしびれを切らしたのか

「あー、もうフランツさんは誤解されやすいんですから黙っててください。」

マールが口をはさんだ。

「実は昨晚、殺人事件がまた起こりまして私たちはその捜査に協力している傭兵なんです。でそっちの男の子が

目撃者かもしれないので詰所のほうでちょーっと話を伺いたいんで

すけど。」

昨日の傭兵がやってきた。

カウンター越しで話しているのを見てみるとあの女剣士がこっちに向かって笑顔で手を振っている。

・・・きのうアレだけ深々と刺した人間に対してよくそんな態度とれるな。

今度は女剣士が金髪メイジを遮り話し始めた。どうやら僕に話があるらしい。

主人が返答に困っていたので

「あの、ちょっと行ってきます」

手当てまでしてもらっておいて、ここでいざこざを起こすのは気が引けた。

それに今実力行使に出られた場合、逃げ切る自信がないのもあって大人しく従う事にした。

「大丈夫なのかい？」

おかみさんは不安そうにこちらを見る。

「ええ、けがと言っても肩だけですし、衛兵の詰め所で話をするくらいなんですから大丈夫ですよ」

そう言っって三人で宿屋を出て詰所へ向かった。

詰所につき個室に案内され、金髪メイジと女剣士と三人になるまではずっと無言だった。

「というか衛兵の詰め所に案内されたのに傭兵だけで取り調べとかいいのだろうか？」

案内された個室は、刑事ドラマに出てきそうな椅子と机。

石造りの壁には鎖のついた手錠が付いていた。拷問とかに使うんだろうか。

風の精霊と同調して警戒しつつ、いすに座る。

「衛兵の方は一緒にいなくていいんですか？」

「いいんだよ。俺はこの街では多少顔がきくからな」

金髪メイジは、なんでもないように答える。

「俺はフランス、わかってると思うが名も無き傭兵団の団長をしている。んでこっちはマール見ての通り剣士だが、俺を除いて傭兵団の中では一番強い」

「よろしくね〜」

昨日殺し合ったのに態度はとても軽いものだった。あからさまに抜けた調子は演技かもしれない。

西洋剣というのは重さ自体は大したことはない。重くても3kg程度であるが細長い形のため取り扱いが難しくかなりの熟練要し体力もいる。僕は彼女の腰に差された剣に目をやる。

これで僕はぶっ刺されたわけか。それに名前が無いことが名前って……自分で言っていてよく分からん。そうして僕が彼女の剣を見ていると、じくじくと傷が痛んだ気がした。

「けが、大丈夫？」

「一応気にはしていたようだ。」

「ええ、まあ。半分ぐらいは塞がってますし。でなければ出歩いたりなんてしませんよ」

「ええ、うそでしょ！？ 案だけ深く刺したんだよ。いくらなんでも治るの早すぎよ」

そうなのだ。刺し貫かれた傷はもうほとんど塞がっている。背中から刺した時に碎けた肩甲骨は治るのにしばらくかかりそうだが。包帯を解いてみせると二人とも目を丸くしていた。

「それより、他の団員の方はどうなったんですか？ 結構吹っ飛んでましたよね」

虚勢を張るように、軽口を言った。

「いや、人間より建物の被害の方が大きくてな」

派手に吹き飛ばしたものの一人を除き全員打撲や擦り傷で済み、昨夜の壊れた広場を片づけているという。マールさんに包帯を巻きなおしてもらいながら話し始めた。

昨日、僕と傭兵団の戦闘があつた頃の同時刻衛兵の詰め所に三人の男が駆け込んできたらしい。証言によると人身売買の商人に雇われたごろつき共から逃げてきたんだと。

そして今朝北の門を出てすぐの道にその商人のものとされる馬車の残骸と

近くには鳥についばまれていた細切れになつた人の死体が発見された。

「犯人はお前だな？」

確認するかのよつにに聞いてきた。

「ええ、まあ」

しらを切つても無駄だな、と答える事にする。

フランツさんは黙つて何か考えだした。

結論から言うと、殺人事件は全ているはずのないすごい力を持った吸血鬼に全ての罪を押し付けることになつた。

フランツさんが吸血鬼（嘘）と対峙した時のことを大げさに話、何とか退けたことになつた。

あれだけ、派手に暴れたので目撃者もいたのだが暗くてよく分らなかつたんだと。

エリックさんにはことが全て終わつてから話した。完全に蚊帳の外にされていたことに若干すねたようだった。

要は、犯人として引き渡してもほとんど金にならないし、それよりも商人の体を細切れにした方法や僕が使う力のことについての方に興味が湧いたとの事。

こうしてリュティスへの道中彼らが護衛となり、冒頭に至るわけである。

「なんだ、マール、そんな年下のガキが好みだったのか？」

グルグル巻き of 包帯が痛々しいリッツが刺々（とげとげ）しく言った。

ああ……、体当たりの犠牲者か。この言い方、絶対根に持ってる。

「むさくるしい男どもより、かわいい男の子の方がいいに決まっているじゃない。」

この傭兵団、女性はマール一人である。加えて団員は女に飢えていそうなのがちらほら。

以前いた団員の一人が彼女に襲いかかった所、ぼこぼこにされ、拳句下の物まで切り落とされたらしい。

それ以来仲間内で語り継がれ彼女を襲おうとする者はいなくなったんだと。

聞いてもないのに話してきた。毒気が抜かれる。

荷馬車中から外に視線をやると晴れた空と平原が広がっている。

慣れない野宿や初めての命のやり取りで疲れが溜まっていたのか、
馬車の揺れ方は心地良く
僕の意識は遠ざかっていった。

生きるって (ry) 前書き (

原作の20年を想定。

生きるって（ry

このハルケギニアの魔法には土・水・火・風の四系統があり、杖を振るいルーンを唱え、精神力を消費することで

発動する。ルーンは各系統ごとに異なり、系統魔法を使うときはルーンで呪文を詠唱する必要がある。

また、メイジとしての資質は遺伝によるところが大きく、そのため平民で魔法を使えるものはほとんどいない。

「また、東方にはエルフと呼ばれる種族がいる。彼らは杖を必要としない先住魔法を扱う。

これは、人間のメイジが使う魔法とは比べ物にならない程の威力があり、一般にエルフに勝つにはその10倍の戦力が必要とされる。

人間がエルフを恐れている理由の一つだな。」

現在、王都リュティスへの街道を馬車で移動中、フランスさんの魔法抗議を聞いている。

僕が魔法に対する知識がからつきしなので頼んでみると、僕の扱う精霊魔術？をみせることを条件にいろいろ教えてもらえることになった。

なんでもハルケギニアの魔法には「始祖ブリミル」という大昔のメイジが関係しているらしく、その始祖が残したものから系統魔法ができたとのこと。故ににそれ以前に広く使われていた、現在エルフが使う魔法を先住魔法としている。

また、ブリミルが偉大なメイジで、強大な力を持っていたことから現在は「ブリミル教」の中で神のように崇拜されている。

「その教義の中でエルフが始祖の敵として語られている。これらの話からわかるように杖を用いない、しかも呪文もなしで魔法を使うところを見られればエルフと勘違いされて異端指定、ということになりかねん。」

中世ヨーロッパの魔女裁判みたいなものか。と考えると背筋が冷たくなってきた。

そして、僕の方はというと極東の小さな島で閉鎖的に暮らしている一族の出身で外界を見てみたいと家を出てきた、という設定にした。

そうして話しこんでるうちに予定の距離を進んだということ、街道の隅で野宿の準備をすることになった。

すれ違う馬車も見なくなった夕方、食事の前に精霊魔術を披露することになった。

片手に木の枝を持つ僕を中心に囲むように人が座っている。

枝を上空に放る。イメージするのは無数の風の刃。

ゴウツッ！

そんな擬音とともに枝に殺到する刃。

一本だった枝は10程度に分割され地面に落ちた。

.....。

呆気にとられたかのような沈黙が流れる。

「す、すげえ。」

「今のつてエアカッター？それもあんなに連続して。」

「今のが無詠唱だなんて・・・」

驚きの声と、若干の恐怖のこもった視線を感じる。

まあ、念じれば人を殺せるだけの力を扱えるのだ。この反応は当然のものである。

「でも、これ制御が難しくってまだ満足に扱えないんですね。今のは止まった状態で集中していたからであってまだ戦いで使えるようなものじゃないんですよ。」

戦闘中に動き回りながら風を制御、そんな器用なまねができるはずもなく能力におんぶに抱っこである。

空気を薄い刃の形に圧縮して放つ。言葉にすれば簡単だが、初めて練習した時はただ空気を圧縮しただけの塊にすぎなかった。先日の戦闘でエアカッターを見るまでは。

言ってしまうえば、風系統に関しては反則である。精霊に自身の精気

?を食わせ、イメージを送る。それだけで彼らは僕が望む現象を起こしてしまう。つまりイメージさえまとまっていればあとはやりたい放題、ということになる。

これに最初気づいた時、昔見たアニメのイメージを重ねてみたが全くうまくいかなかった。

アニメが駄目ならと一時期、はまっていた某有名動画掲載サイトの竜巻動画をイメージしてみたら街道はずれの森が悲惨なことになりかけ慌てて止めた。

風系統について反則だということがわかったが他系統についてはからきしであった。

フランツさんは風のトライアングルで、水系統も少し使えるらしいので見せてもらったが発動に使われた魔力?は感知できてもそれに干渉するのはほぼ不可能のようだった。

「見せたのが俺たちみたいに変わり者でよかったな。一般人が見てたら・・・」

こういったものに寛容な人は少数派らしかった。

そうして魔法の見せ合いもお開きになり、夕食を終えると他愛もない話をして過ごした。

王都リュティスを目指す道中、あったトラブルと言えば3体オーク鬼が出てきたことぐらいだった。

その巨体を見たとき不意に力比べを試みたい衝動に駆られ一体に狙いを定め突っ込んでみた。

巨体よろしく動きはのろく顔面に拳をたたきこむのは容易で3発ほど殴るとその巨体は崩れ落ちた。

残りの二体だがそこは手練の傭兵たち。

ルーチンワークをこなすようにあっさりと倒してしまった。

王都に着いたのは出発してから5日後の夕方だった。リュティスは人口30万のハルケギニア最大の都市だが

日本のこみごみした東京の風景を知っている者としては、地方都市ぐらいの印象しか受けなかった。

しかし、建物はすごいものがある。遠くから見てもわかるほど大きなヴェルサルテイル宮殿、内陸に位置し河の沿岸

に発達している街並みはファンタジー映画に出てくる幻想風景を連想させた。

宿をとり、食事をしながらエリックさんに聞かれた。

「お前、これからどうするんだ？こうして王都に着いたはいいが何かすることでもあるのか？」

「うーん、なんにせよとりあえずお金ですね。それから風の制御も練習したいし、魔法に関する情報もほしいし。」

こういってマールさんが食いついてきた。

「そういうことなら、うちの傭兵団に来ない？魔法のことなら団長に聞けばいいし拠点マジトに行けば魔法の本も

いくらか置いてあるし。」

その提案に、思考を巡らせる。

この世界では人の命が軽い。特に平民は。口減らしで子供が売られたりすることから人身売買が別に違法でないことがうかがえる。

僕が攫われそうになったケースだってどこの誰とも知らない子どもが一人いなくなった所で大きな騒ぎになったりはしない。降りかかる火の粉は自分で払わなければならぬのだ。

・・・戦いの経験と魔法の知識、傭兵ならば命をかけているだけあって給金も高いし・・・。

「みんなもナツメちゃんが入ってくれた方がいいと思うよね!？」

マールの言葉に他の団員が反応する。

「確かにあの怪力や風魔法は魅力的だな。」

「団長に従う。」

「仕事が楽になるならなんでもいい。」

どうやら賛成と中立しかないようだ。

そのことに少し反論してみる。

「でも、しばらくしたらまた旅に出ようと思ってるんですけど、そんな人間がいてもいいんですか?」

ここでようやくフランチが口を開いた

「俺は賛成だ。確かに急にいなくなられちゃ困るが、こいつの魔法にも興味があるし。妥協するとすれば一年ごとに契約するといった所か。」

「・・・急ぎでもないし妥当かな。傭兵という職業に対する不安もあるけど手っ取り早いのはこれだし。」

「それでいいんですたら是非。」

すると、

「やったー。掃除、洗濯、その他雑用からおさらばッスー!」

新入りの仕事のようだ。

こうして名も無き傭兵団の臨時団員として働くことになった。

傭兵団で働くことになったのはいいが、エリックさんには世話になったので開店準備ぐらいは手伝おうと思いつく。しばらくの間、仕事を雑用だけにしてもらった。交易品を扱う店を開くらしいその建物は王都の中心から少し外れた場所にあった。

中心街から外れているとはいえ街の南門に通じる大通りに位置していて馬車や人通りも多い方だった。

エリックさんはこの区画で新参の商人が借金なしで商売を始められることが、

どれほど稀なことか興奮気味に語ってきた。

確かに立地条件はいいと思うがハルケギニアの経済に疎い僕には半分以上分からないことだった。

それから数日かけて店の中を掃除し、店の棚などを運びいれ、どうにか商品を入れられるようにまでなった。

そうして開店から一ヶ月近かった。

その間僕がしていたことはというと、

朝起きて掃除、洗濯などの傭兵団の雑用をしその後エリックさんの店で臨時店員として働きつつ合間に傭兵団の拠点アシトから借りてきた魔法の本を読み、夕方から夕食まで基礎訓練 走ったり、巨大な丸太を振り回したり そして就寝まで瞑想するように風の精霊との同調訓練。

まあこれは一番密度の高い日であって、魔法の本を読むのは文字の習得に苦戦していたこともあって疎かになっていた。

そうして商売の滑り出しも良かったのか思っていたより新たに店員を雇い入れる余裕ができた。

僕は傭兵団の方に戻り本格的に訓練を始めた。

訓練を始めるにあたって、戦術を決めなければならぬ。

精霊魔術がおおっぴらに使えない以上、何か武器を持つ必要がある。これにあたって最初は剣をチョイスしたが

「うーん、剣の方は見込みないね。」
「だとか

「才能がみじんも感じられない。」
やら

「いっそ、鈍器を持たせた方が金がかからなくていい。」

周りの評価が散々だったので丈夫な籠手こてで殴ることにした。

中世ヨーロッパにおいて、傭兵という安定したものではない。

基本戦争で雇われるしか収入がなく、平時は盗賊まがいの略奪をする者もいる。

というのが僕の中での認識だが、ここハルケギニアにおいてはオークやトロール、ミノタウロスといった人間の脅威となる者たちが多く存在し、戦う相手が不足する、ということはある。

名も無き傭兵団の主な仕事もこういった亜人の討伐や街道を行きかう商人の護衛である。

そして僕が参加した初仕事は近隣の森に出現したコボルトの群れの掃討だった。

初仕事あつて緊張したがほとんど危険らしい危険も無いもので、まずこの反則ともいえる風の探知で位置を特定、密集している場所にエアキャターを連射しそのとりこぼしをフランツさんの魔法とほかの団員が狩る、というものだった。

また日常においても勘違いしていることが多かった。

1年は12ヶ月であるところは地球と変わりなかったが、一週間が8日だったり一月が四週で32日で固定だったりと。

月が二つあったのを見た時はあいた口がっふさがらなかった。青いのと赤いのが並んでる様は異様だった。

・・・まるきり光の性質を無視してるよ。

この世界と地球では物理法則すら異なるのかもしれないと考えもしたがすぐにどうでもよくなった。

今はラドの月（9月）。比較的暖かいがこれから年明けにかけて寒くなるらしい。

平民の入浴と言えば蒸し風呂で汗をかき、それをシャワーで流すというもので体の芯まであったまる日本の風呂が恋しくなる。ただ、石鹸が高いとはいえ普通に売っているのは助かった。

そんなこんなでこちらの生活にある程度慣れ、3ヶ月が過ぎた。

年が明け、ヤラの月（1月）

始祖の降臨祭というものがある。なんでも始祖ブリミルがハルケギニアに現れたことを祝う祝日である。

たとえ戦争中であっても中止するほど神聖なものなんだと。

・・・神聖かどうかなんてどうでもいい。とりあえず仕事が休みで嬉しいね。

街に繰り出すとアベックがやたら多かった。この辺は日本のクリスマスマスに似たものを感じる。

この日中心街の広場ではこの国の王が来ているということなのでそっちに行くことにした。

そしてまた異世界の神秘を見た。

三人の蒼髪。王とその両脇には二十歳前後といった所の王子と思われる青年がてをふっている。前列で見ていたのでその姿ははっきりと見えた。

・・・モゲロ。

反射的にそう思ってしまふような容姿だった。

なんか王様と王子が手を振ってるだけだったのですぐ飽きてしまい、久しぶりにエリックさんの店に顔を出しに行くことにした。

生きるって (r y) (後書き)

駄文。

高等数学とか発達してなさそうなのにどうやって城とか立ててるんだろ。

深く突っ込むときりがない。

月の色に関してですが赤い光と青い光の波長が云々。

詳しくはググって下さい。

錬金チートしたかった

メイジは杖と契約して初めて魔法を使える。

そして契約は何日もかけて行い馴染ませなければならぬ。

このことを知った僕はフランスさんの相談し杖との契約に挑戦した。
なんでも契約に成功すると

契約にが完了しました。

というような感覚が頭に流れるらしい。

また契約自体、何日もかかるとはいえ三週間頑張っただめならあきらめた方がいい、言われた。

そして安いワンド型の短い杖を買ってきて、

睨みつけたり、

本を読む傍らペン回しのように弄んでみたり

孫の手のように背中をかくのにつかってみたりと。

しかし三週間たっても全く変化がなかった。

もう一週間、と続けてみてもうんともすんとも言わずメイジの資質がないことが判明した。

駄目だと悟ったときは少し落ち込んだが、風の精霊が慰めるかのよ

うに僕の周りを動きだした。

・・・ああ、僕にはこいつらがいるんだ。魔法なんてものは分不相応だったんだ。

少し癒された。

こんな行動に出たのも錬金という魔法の存在を知ってしまったからである。

本に書いてあったことや、傭兵つながりで知り合った土メイジの話ではこの魔法もやはりイメージに大きく左右されるようで、そこいらに転がっている石を鉄に錬金しするのを見せられたときはほんと混乱した。

使われたのは明らかに鉄鉱石とかでなく、白っぽい色をした花崗岩のような石。

ドット、ライン、トライアングル、スクウェアとある4段階あるメイジとしての格のうち最上級であるスクウェアになれば金も錬金できるとらしい。

科学者真つ青な光景を目の当たりにし、また科学知識を使えば稀少^{レア}金属^{メタル}とかつくれるんじゃないの？とか思ったりもして杖の契約に挑んだのだ。

・・・いいよいいよ、月の光のこともあるしもしかしたらマイクロな

部分では物理法則が地球と異なるかもしれないだし骨折り損になるよりはいいよ。

言い訳がましくも前向きにとらえることにした。

降臨祭からさらに数ヶ月が過ぎすっかり暖かくなっていた。

風の制御も慣れたもので今では風をまとして飛びながらエアカッター連射なんてこともできるようになった。

精霊魔術は射程が広い。風の探査術も精度は落ちるが半径1kmぐらいなら何があるかわかるしそれと併用して離れたところで竜巻発生なんてこともできる。

そして風の精霊の扱いにも慣れてくるとそれらに一定の意志があることがわかった。

意志と言っても単純なものでこっちに行きたい、あっちに行きたい、精気よこせのような。

最後のは吸われるとこっちは疲れるものの、馴染みがよくなり制御も楽になった。

そして系統魔法と精霊魔術の違いも一つだけだがわかったこともある。

系統魔法の方は

「めんどくせー、働きたくねえよ。」

というやる気のない精霊をルーン（魔法語）で”働け！”と命令し精神力で従わせる。

精霊魔術は

「精気がうまい。働くからもっと頂戴。」
である。

この精霊たちも生きているようで普段は空気中に存在している彼らのエネルギーにある何かを取り込んで過ごしているようだ。

また街の中ではちょっとした有名人になっていた。

その怪力と体力を活かして

あるときは、家屋を建てるのを資材の石や木材を運んだで手伝ったり
あるときは、邪魔な岩があるからどけてくれ頼まれたり
あるときは、馬が怪我して馬車が引けないから代わりに町まで引いて
てってくれなど。

最後のは、代わりの馬よこせよ！と言ってしまったが馬を借りるお金のことを言われると従う気になってしまった。鍛錬になるし少ないながらも給金も支払ってくれたが、全く貧乏気質が恨めしい。

しかし、これによって本来メイジに頼むような仕事まで格安で引受けていたので

下級貴族からは「小遣い稼ぎに執心する卑しい平民」と蔑あはまれ
平民のメイジは直接的でないにしろ、うつつしい奴だと思われるよう
だ。

また、このことを耳にしたガリアに派遣されているブリミル教の神

官は

「始祖ブリミルから授かった神聖な魔法を行使するメイジたちをないがしろにするとは。

全く下賤な平民め。」

というようなことを言ったらしい。

まあこれらはみんな酒場で聞いた噂なので本当かどうかかわからないのであまり気にしなかった。

とある虚無の曜日

毎週虚無の曜日となると前日を買っておいたパンを袋に詰め、朝早く^{アシト}拠点を出発。

王都から東に100リーグ 約100km ほど離れた森に鍛錬しに行く。

王都を出てしばらく走り、気がなくなった所で風をまとって飛びあがり数百メートル上空を移動し目的地を目指す。風の精霊の器

用さには感心する。

本来人は三次元移動 鳥のように縦横無尽に飛び回るような動きには向いていない。

それでも僕が安定して飛行を続けられるのは精霊が感覚の補助をしてくれるからである。

おかげで地に足がついていない不安も無く、僕は調子に乗ってどん

どんスピードを上げた。

30分程で森につきいつも鍛錬に使っている川原へ向かって歩き出した。

日も幾分高くなり始め、歩いてきたせいか体もあつたまり、いつの間にか走り出していた。

風を切る感覚が気持ちいい。

この感覚が好きで、日本にいた時も走るのだけは続けていた。

川原の近くに来て鍛錬場に行っている場所に3つの何かがあるのがわかった。

ひとつはかなりの巨体、残りの二つは人の大きさ。

嫌な予感がしつつも、

“私は風になる！”

というようなランナーズハイな状態を抑えきれずそのままスピードを抑えず川原に突っ込んだ。

アリス・ナバルはナバル子爵の次女で最近はいーヴアルデイの勇者という読み物がお気に入り
若干夢見る少女である。

上に兄と姉が一人ずついる、この世界においては一般的な貴族と言える。

魔法の方はというとそれなりな才能があったようで一年前8歳の時に水のドットとなった。

それは置いてといて、

今日はおつきのメイドであるジルを連れて屋敷から少し離れた、といつても馬で3時間弱程かかるこの川原に来て水遊びをしている。

護衛を連れていなかったのはこの近隣ではここ十数年亜人などの脅威となるモンスターが出たことがなかったから必要ないだろう

と。

だが、今日に限ってそれはなかった。

アリスが川の水に足をいれ遊んでいるのをジルは見守りつつも周囲に気を配る。

しかし事前の情報による油断もあったのだろう。

その巨体が、自分たちが逃げ切るのが不可能に近い距離に近づくまで気づかなかつた。

「ヴオオオオオオオオオ!!!」

その場の空気が震えるような雄たけびを上げる。

姿を現したそれは身長が5メートルはあるかと思われるトロール鬼だった。

ジルはすぐさま足がすくんで動けなくなっているアリスをつれ
ここから逃れるべく馬の方へ走ろうとするが
トロールの雄たけびに驚いてしまった馬はつながれた縄を引きちぎ
り走り去ってしまった。

万事休すか

そう思ってしまったしそんな事態になりつつもジルはその小さな少女の
手を引き下流に向かって走る。

トロール鬼がいくら動きがのろいとはいえ川原のごつごつした岩場
を移動する女二人の速度が
勝るはずもなく。徐々に距離を詰められていた。

恐怖に駆られて走り続けていると今度は反対側の林から何かが飛び
出してきた。

入り組んだけもの道をひたすら走る。
岩から岩へ飛び崖のような道を下る。
そのスピードの快感に酔いしれていると林が切れ川原が見えた。

徐々にスピードを緩めて行って川の水に足をつけたところで止まり、

「とーちやくつと。」

そう言ってさっき感じた気配の方を見ると5マイル程の巨大な生き

物 トロール に

メイドさんが追いかけていた。

向こうもこちらに気づいていたようですが、見るような眼で見られた。

「あー、じゅっくり〜。」

そう言って方向転換、この場から離脱しようとする

「ちょっと！こつこつという場面は助けるところでしょ！！何逃げようとしてんのよ。」

声の主はメイドさんに手を引かれた長い金髪をした少女（というかいたのか。）だった。

そんなやり取りをしているとトロールは進路を変えこつちにやってきた。

「ちょ、お前が叫ぶからこつちが気づかれちゃったじゃないか！！」

川原の向こうの二人に文句を言う。

トロールとは性質たちの悪いことに、争いや殺戮たを好む。

奴がバトルジャンキーかどうか知らないがこつちを標的に迫ってくることに身構える。

すると荷物（ほぼ本日の昼食）が入った袋を川に落としてしまった。

慌てて取りに行こうと水に入るがそこにトロールが、その丸太のよ

うな腕を振り上げ、勢いをつけ
おろしてきた。

とっさに後ろに飛んでよける。

水しぶきと砕けた岩の破片が飛び僕の頬に一筋の傷を作る。

そしてトロールとの距離をとっているうちに急流故か荷物ちゅうしやくは流れて
行ってしまった。

「な、なんてこと。僕のはちみつが。」

昼食のパンにはこれでもかというほどはちみつが塗ってあった。
平民にとって甘味はぜいたく品である。特に質の良いはちみつなら
ば少量でも金貨と同等の価値があるほど。

加えて棗の収入から使える金額はあまり多くない。

傭兵団に在籍してそれなりの働きをしているが新入りとあって分け
前はほかの団員よりは少ない。

その他、町の雑用をしているが旅に出るための資金をためるとい
う目的もあって

節約している最中のたまにするぜいたくのひとつであったがそれは
もう行方不明となってしまった。

「許さない……。僕の甘味をかえせー!!!」

その声に反応したのかトロールも

「グオオオオオオオオオオオオ!!!」

雄たけびを上げながら腕を振りおろしてきた。

トロールに襲われていた少女　アリス

私の名前はアリス・ナバル。

ナバル子爵の次女で9歳、現在水のドットである。

自分で言うのもアレだけでも、容姿に関しては結構いい方だと思う。

かあさま譲りのこの青い目やよく手入れされた長い髪もよくほめられるし。

そして最近の趣味と言えばイーヴァルデイの勇者という主人公の平民が剣や槍を操り竜を倒し女の子をすくいだすという物語だ。

やはり私も女の子であるのでこういう展開にはあこがれる。

貴族の家に生まれたとはいえうちは子爵。

将来はどこかの家に嫁ぐことになるんだろう。

しかし心のどこかでは私を連れ出してくれる王子さまが現れるのではないかと期待していた。

そして現在、トロールから逃亡中である。

足がすくんでしまった。

図鑑で見たことはあったが、実際あれほど恐怖を感じるとはみじん

も思っていなかった。
ジルが手を引いてくれなければ今頃私はあれにつぶされて食べられていたかもしれない。

息が苦しい。

普段そこまで激しい運動なんてしたことない私の体はジルが手を引いてくれなければ止まってしまいそうだ。

必死に走っているが後ろで荒い息使いが聞こえる。
距離が詰められているようだ。

もう駄目かと、思考が絶望に染まりそうになったとき、彼が現れた。

服装は簡素なもので明らかに平民であろうことがうかがえる。

その髪は雪のように真っ白で、目鼻立ちは整っているように見える。

年は私より少し上くらいであろう。

何よりその宝石のような紅い眼に神秘的なものを感じた。

(以上、吊り橋効果により評価3割増)

・・・ああ、ついに王子様が私を助けに来てくれたんだ。そして二人は貴族と平民の身分の差に悩みつつも恋に・・・

しかし、彼はこともあるように

「あー、しゅっくじー。」

そう言って逃げようと踵かかとを返した。

・・・何それ？ここは華麗に助ける場面でしょ！

そう思うと

「ちょっと！こういう場面は助けるところでしょ！！何逃げようとしてんのよ。」

と叫んでいた。

するとトロールは彼の方へ進路を変えた。

そしてそれに驚いたのか彼は持っていた荷物を川に落としてしまい拾いに行こうとする。

しかしトロールは彼に向って腕を振り上げた。

”あぶない！”と私が息をのんで見ていると彼はその腕を軽々と躲かわしていた。

躲した後、何か呆気にとられたかのように見えたかと思うと

「僕の甘味を返せー！！！」

・・・甘味？甘いもの？

私は混乱した。

トロールが振るってくる丸太のような腕を避ける。

避けた場所にあった岩が砕け飛ぶ。

力比で向こうに分があるのは明らかである。

元々力で勝負する気なんてない、しかし精霊魔術を人前で使わずに勝つ。

・・・やっぱり人型だけあって頭に脳があるのだろうか。あるとすれば・・・

そうして勢いをつけて一気に踏み込み飛び上りトロールの顔に向かって体当たりをする。

やはり効いたようでトロールはよろけたがすぐに耐性を立て直した。

・・・やっぱりあの巨体じゃ頭も大きい首も太い。破壊するには地面に足が付いていないと力が乗らない。

再び迫るトロールの攻撃を避けつつ考える。

・・・要は足を壊せばいいんだけど、

そうして地面を蹴りトロールの右半身の方に左足から踏み込み、バシテ ジもどきを巻いて固めた拳を

「ぶっ！」

腰を落とし間接を狙いながら息を吐きながら打ちだす。

間接にはほとんど肉は付いておらず骨の碎ける音がする。

トロールは痛みにひるみ、体制が崩れるがそれと同時に右腕を振りおろしてきた。

ゴッー！！

ガードが間に合わず、側面から殴られその衝撃で吹き飛ばされる。

・・・うええ、気持ち悪い。頭が揺れる。

飛ばされた方向が水面だったのが幸いしたのか、ガードした右腕が痛むだけで済んだ。

・・・なんつー衝撃。これ、罫ひびとかはいつてそう。

トロールの方も必死なようで、片足の間接が碎けているはずであるにもかかわらずとどめを刺そうとこちらにやってくる。

頭が揺れる感覚から持ち直し、動きの鈍くなったトロールの背後に回り折れたの右足を蹴りつけ離脱する。

・・・動きものろいしこれならあとは削るだけだ。

ヒットアンドアウェイを十数回繰り返したころ、

完全に立っていられなくなったのかうつぶせに倒れた。

まだ諦めてはいないようで、腕で体を持ち上げようとすする。

しかし重すぎるその胴体はトロールの太い腕でも持ち上がらず、ただもがくだけとなった。

僕は近くにあった大岩を持ち上げ、トロールの方へ振りかぶり、その頭を潰した。

ナバル家のメイド ジル

自分は夢でも見ていたのだろうか。

勝ってしまった。

素手でトロール鬼に。

それも平民と思われる子どもが。

トロールの注意が彼に向いた時にお嬢様をお連れして逃げるべきだったにもかかわらず

彼の立ち回りを目にするとう動けなくなってしまった。

オーク鬼でさえ一体につき熟練の戦士が5人は必要だというのにその倍以上の体格を持つトロールであるなら一体どれほどの戦力がいるというのだ。

トロールの頭を潰した時にの彼は悪魔のようで、

そんな彼に対し私は感謝の気持ちを感じつつも恐怖した。

噂の影響に追いつめられる

トロールを殺し、地面にへたり込む。

緊張をほぐすかのように息を大きく吸い込む。

投げられた方の腕は青くなり腫れていた。

川に入り腕を冷やす。所々にできた擦り傷に水が染みる。

そして何度か深呼吸をし対岸を見るとメイドさんと金髪少女がへたり込んでいた。

話しかけるのも面倒くさかったし、ついさっきまで戦闘状態だった体はかなりの熱をもっていたので

僕はそのまま浅瀬に寝転んだ。

太陽の光がまぶしく目を閉じる。

水の音と木の葉のすれる音、鳥の鳴き声が聞こえ

いたわるかのように風が肌をなで、なんだか安心した気分になる。

水が冷たいのに眠い。

・・・今日はもう鍛練いや。

そうしていると二つの足音が近付いてきた。

「なんだ、まだ居たのか。」

気づいていたにもかかわらず、今気付きましたとばかりに言う。

すると、金髪少女の方が軽く咳払いするような仕草をとり、

「危ない所を助けて頂きどうもありがとうございます。私はアリス・ナバル。このナバル領を治めるナバル子爵の次女です。あなたのお名前を覚えていただけませんか。」

逆光になって見えなかったが多分、笑顔と丁寧な口調で言った。

・・・全く、そんな気分じゃない。

「メンドクサイ」

「ああ、メンドクサイさんと・・・ってなんですってえ!」

アリスという少女は声を張り上げる。

「うるさいな。今一仕事終えた後でそんな気分じゃないんだ。話なら少し落ち着いてからにしてよ。」

少女はプルプル震えながらも答える。

「え、ええそうですわね。」

そう言って彼女は近づいてきて内出血で青くなっている僕の右手をとり

「イル・ウォータル・デル」

水の呪文”ヒーリング”唱えた。

「私はまだドットですから大した効果は期待できませんがそれでも何もしいよりはましでしょう。」

腕の腫れは引き、若干の痛みは感じるものの抵抗なく動かせるようになった。

そうしていくうちに体の熱は冷めて水から上がり岩に腰を下ろす。

「ふう……。」「

軽く溜息をつく

「治療のお礼は言っておく。ありがとう。」

「それで、あなたのお名前は？」

アリスの言葉を見無視して僕はメイドさんの方を見て言った。

「そんなことより、血の匂いに誘われたオオカミやら野犬やらが死肉をあさりに近づいて来ますよ。」

早くここを離れた方がいい。」

メイドさんはそのことに失念していたのか、はっとしたようだが

「そうですね。アリスお嬢様、この方のおっしゃる通り離れた方がよろしいかと。」

不安にさせないようにするためか、落ち着いた口調で言った。

幸い、二人が乗ってきた馬はあまり遠くへは行っていなかった。
メイドさんがアリスを乗せようとした所で

僕は王都の方向全力で逃げた。

「ちょっと、名前はー？」

という声が聞こえたが気にしなーい。

しばらく走りながら考える。

トロールと対峙したのは初めてであったが大きなけがもなかったの
で十分及第点だと思う。

あの巨体は圧巻だった。あれじゃ少人数で倒すには高位のメイジが
必ず一人は必要だろう。

・・・動きがのろいつたって今の僕が基準だし。

戦争においてはトロールやオグル（オーガ）といった巨大な亜人が
参加した例もいくつか残っている。

・・・そもそも言葉通じないのにどうやって軍に組み込むんだろ？

リュティスについたのは昼時を過ぎ休憩にお茶を飲むような時間だった。

まあ茶なんてぜいたく品こっちに来てから一度も飲んじやいないが。

拠点アジトで着替えよく食事に利用する酒場に向かう。

もう空腹でいっぱいだった。

酒場に入ると

「お、ナツメ。今日はもう鍛練終わりか？早いんだな。」

リッツやその他数人が酒を飲んでいた。

「いや、そのちよつと邪魔が入ってしまった。早めに切り上げてきたんです。」

カウンターに座り、パンとシチューとハシバミ草のサラダを大盛りで注文し答える。

「へえ、邪魔ってどんな？」

「貴族の女の子とそのお付きのメイド」

するとリッツの隣で飲んでいたニコラ 僕が入る前まで新入り扱いだった と

マールが騒ぎ出した。

「ナツメは貴族のお嬢様にフラグ立てちゃったんスか?!」

「まだ早い、まだ早いわ。お姉ちゃんは許しませんよ!」

・・・二人とも酒臭い。

「別にそんなんじゃないありませんよ。ただちょっと見られたっただけで。」

「見られたってなにを？」

「もしかしてナニを見られたんスか!？」

「下ネタ禁止!!!」

そうしてると料理が運ばれてきた。
ああ、疲れた体と空腹に染みる。

トロール事件から一ヶ月が過ぎた。

相変わらず僕は傭兵団で雑用したり、町の人の心象を良くしようとして雑用したり、

街の道路工事でタダで雑用させられたり、傭兵の仕事しをしていた。

そんな風に過ごしていたら僕の傭兵としての二つ名が「白い雑用係」になっていた。

いや、傭兵の仕事もしてただけで護衛任務で大きな戦闘はなかったし

ここ最近は護衛任務ばかりだったから。

そうして「白い雑用係」と呼ばれだしてすぐのところ

この日はエリックさんの店で臨時店員をしていた。

エリックさんはいつの間にか店員のお姉さんとデキていたらしく午後から彼女の両親に

あいさつに行くと行って出て行った。

客はまばらでハルケギニアの歴史書なるものを悪戦苦闘しながら読んでいると外から聞き覚えのある声が聞こえる。

その客が店のドアを開けるのを見ると、長い金髪、低い身長と貴族特有のマントが見える。

店に入るなり僕を見ると

「見つけたー！」

勝ち誇っているかのように僕を指差しているアリス・ナバルがいた。

なんだかどっと疲れた。

トロール事件の直後

ジルは焦っていた。
自分が仕えている主人の命を救った恩人に何のお礼もしていないのだ。
加えて命を救われた当人のアリスお嬢様はそのことを子爵様に話してしまったのだ。

しかし、子爵様はトロールを素手で打ち倒す平民などいるはずもない、と
取り合わなかったのだがここで泣き落としが発動した。

泣き落としと言っても、すごい声でおお泣きしてかわいそうというよりそのうるささに
折れたようだった。

「わかった、捜すから。捜すから泣きやんでおくれ。」

子爵がそう言つとアリスは目を泣き腫らしながら

「ぐす……、いるもん。おとうさまがいないっていてもいるもん。
しろくてきれいなあかじめをしててかっこいいんだもん」

しかし、棗の容姿の特徴が災い（幸い）したのか

「そういえば王都で最近そんな噂を聞いたような……」

買い出しに王都へ行くことがある執事がそんなことを言った。

曰く

一年ほど前王都にやってきた。

白髪紅目である。

傭兵である。

下町で雑用ばかりしている。

ものすごい怪力。

馬車馬である。

当てはまる節もあるのだが

「現場を見ないことにはわからなそうですね。」

ジルはひとりごちた。

そして、リュティス

アリスとジル、護衛のメイジとして執事を連れ聞き込みを開始しようとして軒目の酒場に入ると

「ああ、それならフランツのところのナツメ君じゃないかな。彼ここじゃちょっとした名物になっててね。」

あっさり見つけた。

「会いたいならエリック交易品店に行ってみな。今日は店番してるはずだから。」

傭兵が交易品店で店番？

一瞬耳を疑いそうになるが、店の場所を聞き行ってみることにする。

街の南門に通じる大通りに出る。しばらく歩くと看板が見えてきた。

「ああ、あったあった。早く行きましょ。」

そうしてお嬢様が店のドアを開けると店の奥には本を片手にうんざりしたような表情でこちらを見る彼の姿があった。

「というわけで、単独でトロール鬼を屠るほどのその力を見込んであなたを徴用しようというわけなの。」

アリスが得意げに話す。

「どうやら噂は結構広まっていたようである。武功に関しては傭兵団のみんなが隠してくれているので問題ないが、雑用系の噂はかなりの広がり様である。」

「・・・まあ受けた件数100じゃきかないからなあ。」

徴用について考える振りをしつつ答える

「無理。」

傭兵の契約は1年ごとだがまだ一ヶ月残ってるし、お金も貯まってきたのでここらで旅に出るつもりであった。そのことを話すと

「どうして？確かにうちは子爵で大貴族みたいに裕福じゃないけど給金だって平民よりもずっといいし傭兵なんかよりもずっと安定するのよ!？」

・・・9歳なのにしっかりしてるな。

「東方出身でハルケギニアを見て廻ってるんだよ。今ここにどどまってるのも唯の路銀稼ぎ。」

すると少し落ち着き

「一人で？」

「うん。一人で。」

「うちに仕えてはくれないのね。」

「うん。」

アリスは少しうつむき、

「じ、じゃあ一つ約束してくれる?？」

「ものによる。」

「こーいこの返事は普通」はい「でしょうが。」

「確約できないことは約束しない主義なんだよ。」

アリスはまた、考え始め沈黙のまま数分がたった。

「いつかまたここへ帰ってきて、私に見てきたもののお話を聞かせて。」

「うーん、まあいいか。うん、約束する。」

「だいぶ譲歩したつもりなのにこれでも即答しないのね。」

少し悪いことしたかな、とってしまった。

そこまで話すとアリスたちはとっていた宿に戻って行った。3日ほど滞在するらしい。

店番も終わり夕食をとりいつもの酒場へ行く。

カウンターで注文をして後ろのテーブルをみると

傭兵団の団員の多数は一つのテーブルを囲み僕の方をニヤニヤしていた。

「ナツメちよつとこつち来い。」

フランツさんが手招きしている。

嫌な汗が背中を流れる。

僕が開いている席に座ると、みんな口々に

「いや、すごいねナツメちゃん貴族の女の子ひっかけるなんて。」

「相手は子爵家の次女だと」

「大きいお姉さん方からの人気もさることながら、君の手の早さは脱帽した。」

・・・ナンデバレテルノ？

「ナツメ、明日と明後日は雑用なしでいいぞ。依頼もないしな。」

・・・なに「私空気読みました。」みたいな顔してるんですか。

すると背後に気配を感じ振り返ると

「お嬢様は、明日と明後日、王都に滞在される予定です。その間ナツメ様にご案内をお願いしたいのです。」

・・・ジルさん。あんたか。

そして、その日は拠点アジトに戻るまで散々からかわれた。

女の子って難しい

アリスは浮かれていた。

自分にも王子様（脳内で多分に脚色された）が現れたかもしれないのだ。

性格に少し難があるかもしれないが。

助けてもらったと思つたら、逃げるように（実際逃げた）消えてしまった。

そしてようやく見つけたと思つたら、今度は、

「無理。」

徴用を断つたのだ。それも即答に近い形で。

貴族からの徴用を断る。

こんなことをする平民は、ここハルケギニアにおいては本当にごく稀である。

直接貴族の庇護下に入れば一般平民よりもいい暮らしができるし、安全もある程度保障される。

それに、貴族に逆らえば「魔法」という暴力が飛んでくるという恐怖心もあり中々断ることもできない。

また、貴族にもそれなりにプライドがあり、平民ごときに自分の申し出を、それもあっさりとは、ことわられることに腹

を立てるものも存在する。

まあ、最後のはしっかりしているとはいえまだ9歳の子供でしかないアリスにはわかりにくいことだが。

ともかくこちらから徴用を申し出て断られたのだ。

アリスはそれに泣きそうになった。

それに加えて旅立つそうじゃないか。

もう、終わった。さようなら、私の初恋。

という気分になりつつ、彼の心に残るか残らないかわからない微妙な約束をしてしまった。

王都に滞在するのは初めてだが、もう何もする気が起きなかった。

そうしている所にジルの助け船が来たのだ。

彼女は棗の所属する傭兵団に手をまわし、仕事を休みにさせ王都を案内させるというのだ。

「ジル、今ほどあなたが私のお付きでよかったと思っただけではないわ。」

「ありがとうございます。ですが明日は私も付いていきますので、それについてはご了承ください。」

貴族の娘と家臣でもないただの平民が二人だけで街を歩いていれば変な噂が立つ。

それがたとえ子供同士であろうとも。

それに加えて棗の特徴的な容姿は街の人間の記憶にしっかりと残っていた。

そういうわけで二人だけにして噂がたてば子爵家に不都合なことが起こるかもしれない。

このことを考えるとジルが付いていくのは当然と言える。

アリスはアリスで理屈はわからずともそういうものだとは認識していたので特にごねることもなかった。

そうして翌日になり、棗は一人歩きながら困惑していた。

・・・どうしよう。子供とはいえ女の子と一緒に街を歩くなんてほとんどなかったからどう接すればいいのかわからない。

そうこうしていくうちに貴族御用達の高級宿の前に着く。

現在の自分の服装は何の変哲もない平民が着る服である。一番ぼろくないものを選んだつもりだが。

しかし、ここは貴族街。人の通りはまばらであるがそれでもじろじろ見られていることがわかる。

また、おまえか。

とでも思われているのかもしれない。

そんなことを考えていると宿のドアが開き、

「あら、先に来て待ってるなんて気がきくじゃない。」

「来いって言ったのはそつちでしょ。あ、ジルさん、おはようございます。」

アリスの一步後ろからジルさんが出てきた。

「おはようございます。本日は王都のご案内引き受けて頂きありがとうございます。」

・・・あなたが根回ししたんでしょうが。

そう、突っ込みつつも

「案内と言っても大したことはできませんよ。こつちに来てまだ一年も経ってませんし、

それに街に遊びに行くなんてこともなかったし。わかると言えばどこの店が安いとか最近工事を手伝った

家の間取りとかぐらいで。」

貴族が入るようなところにはほとんど行ったことがない。

「構わないわ。どうせ王都は初めてだし平民街がどんなだか興味あるし。」

アリスはそんなことどうでもいいとでも言つように手を差し出し

「ですから今日一日、エスコート、よろしくお願いしますね。」

・・・マせてんな。

そんなことを思わせるような彼女の背伸びした仕草に、微笑ましくなり頬も緩みその手を取る。

「では、お任せ下さい。お嬢様。」

初めて口にしたそのクサそうなセリフは妙に馴染んだ。

ジルさんもついて来る、と聞いた時は本当に”良かった”と思っ
てしまい、

「ほんとですか！？いや、二人だけだったらどうしようかとホント
不安だったんですよ。」

アリスはそれが気に入らなかったようで僕の脛にけりを入れた。

痛みに耐性が付いてきたとはいえ痛いものは痛い。

アリスがしきりにあれは何だ、これはいったい何に使うのか、と聞
いてくるがこの世界に来て

一年に満たない、それもほとんどの時間を鍛練と労働に費やしてき

たので娯楽関係はさっぱりで
答えられることと言えば交易品店で扱われたことがある品の商品説
明や建物工事関係の一部の事柄程度だった。

工事で思い出したことがある。

ここでは高等数学が発達していない。

数学が結構好きだった僕には少し残念なものだった。

そしてそのことから疑問がわきあがってくる。

ミクロな部分での物理現象は分からないがマクロ視点ではどう見て
も地球と同じなのだ。

それなのに遠くをみるとでかい宮殿がそびえている。

そしてこの疑問を解消するにしても何か釈然としないものを感じさ
せたのが「固定化」という魔法だった。

強度が低かろうが、バランスが悪かろうがほとんどなんでも固定化
で済ましていくさまには理系人として少し寂しさを感じた。

いろいろ質問責めにあっているとすぐに昼時になり適当な店で昼食
をとることとなった。

「東方出身ということでしたから、サハラも越えてきたのでしょうか。
あの危険極まりない場所をどうやって・・・」

あまり話に参加してこなかったジルさんが聞いてくる。

「ええと、サハラって砂漠のことですよ。普通に歩いてきました
よ。」

「そういうことじゃなくって、どうやってエルフの土地を越えてき
たか聞いているんですよ。」

アリスが補足するのに対し

「いや、だからただ素通りしただけで得には何も。」

設定すると後々面倒になりそうなので、何もありませんでしたとばかりに答えた。

「え、てっきり素手で殴り倒したのかと思ってた。」

「ええ、意外ですね。」

どうやら彼女たちの中で、僕は旅する武道家のような設定らしい。

「そんなことより東方ってどんな所なの？というか家族は？」

質問は尽きない。

午後も露店や服飾関係の店をまわった。

アクセサリー屋を見ていた時など何かをねだるような視線を向けてきたが

「平民にたかるなよ。」

と言ったらちよっと不機嫌になったりもした。

夕方になり

「ありがとう、今日は楽しかったわ。この調子で明日もお願いね。」
アリスがそう言って宿に入るのを見ると僕は拠点アシトに帰ることにした。

二日目も当たり障りなく案内は終了。明日の早朝出発して帰る予定だという。

昨日に続き買って買ってという視線に負け銀細工の髪飾りを買わされてしまった。

・・・働いてもいないのに50スウ出費・・・いてえ。

二日目の夕方宿に戻る前に、アリスがもじもじしながら何か言ってきた。

どうやらかがめとのことらしい。

すると、頬に何か柔らかい感触が・・・・・・・・・・・・・・・・しなかつた。

かがんだ瞬間反射的に左が出てしまいアリスのこめかみをつかみ締め上げた。

「痛い痛い痛い、頭が割れっ」

アイアンクロー

プロレスで使われる技。別名、脳天締め。正式名称は忘れた。握力が400kgのロボコップも真っ青になるかもしれない現在の握力でやれば頭がパーンは確実。

軽く握ったつもりだったが予想以上に痛かったらしい。

「全く、ホント信じらんない。今のところはおとなしくキスされるところでしょー!!」

「いや、ごめん。つい。」

そんなやり取りがっぱに入っただのかジルさんと執事なる人は口と腹を押さえて笑いをこらえていた。

・・・ふう、ようやく帰ったか女の子ってホント難しい。

でも最後のアイアンクローは良かった。

あれくらいの不意打ちなら完全に対応できるってことじゃないか。

進歩してるってことだね。

そんな聞かせられないようなことを思いつつも宿の窓から顔出している彼女に手を振り
宿を後にした。

「本当に変わった方でしたね。」

ジルは感慨深くそう言った。

「本当、変わってるわ！それも悪い意味で！」

ちよつと勇氣出したのに、と聞きとれない声で付け足したアリスは不機嫌だった。

「大体、どうして私よりジルへの対応の方が丁寧なのよ！」

・・・本当に変わった方です。お嬢様への態度は最低でしたが、あれはアリスの気持ちに気付いた上で、わざと子供をあしらうかのように振る舞っている。

ナバル子爵の家では別に平民を重要視しているわけではないが、かといって軽視しているわけでもない。
要は”道具”なのだ。平民は、長く大事に使う”道具”にすぎない。だから特別な感情も抱くこともない。
まだ幼いアリスにはその境界がわかっておらず棗や他の平民に対する態度も柔らかいものになっているのだ。

・・・今後、彼には会わない方がいいのかもしれないね。旅に出るとも言ってますし。

貴族と平民。この社会体制がどうにかならない限り二人が「そういう関係」になるのは難しいだろう。

ジルは買ってもらった髪飾りを片手で弄んで眺めている主人が今後見せるであろう表情を想像すると少し胸が痛くなった。

女の子って難しい(後書き)

アイコンクローでの対応は少なくとも私は見たことない。

旅立ちと言つ名のつなぎ

月日が経つのは早いもので僕がこちらに来て1年になる。

旅立ちの準備は滞りなく進み。新しい技というか反則の開発に成功していた。

他人の魔法に干渉。

ただし風系統や風系統が混ざった魔法に限定される。

ただしまだ完全とは言えず、この影響下にあつてもスクウェアクラスともなれば無理に
ラインスペルを発動できる。

何でこんなことがわかるかというところと精霊魔術の訓練には
時々フランツさんも付き合ってもらっていたからだ。

今更だが、フランツさんは風のトライアングルだが二つ名は名乗っていない。
メイジはみんなかつこつけたがりで二つ名をもつものだと思つて
いたが

「名も無き傭兵団の団長」というだけで十分通じるからいいんだと。

そしてもうすでにトライアングル上位だったせいだ

風の精霊という概念を教えるとあっさりスクウェアアスペルを成功させた。

蛇足は置いて

他人の魔法に干渉する場合使役されている精霊を説得？しなければ
ならない。

この”説得”だが精神力で従わされている精霊にこっちこっちこっ
ちこっいと

念じてみたり、へりくだって土下座してみたがそこまで効果はなく。
せいぜい発動した魔法の威力を削ぐ程度でやはり精気を与えるのが
一番効果的だった。

さながら風魔法限定の対抗呪文といった所か。

精霊に精気をたくさん与えて干渉しドットスペルすら発動できない
フランツさんが
呪文を唱え杖を振る様は滑稽なものだった。

そうして王都を発つ日になる。

現在の僕の服装は紺色のフードのついた外套を着て腰の両側にガ
ントレット、
荷物の袋を背負っている。

見送られるのはあまり好きじゃないので早朝日の出前に出発する。

見送りに来たのは名も無き傭兵団の団員と
エリックさんとその嫁（いつのまにか結婚していた）である。

団員は前日送別会のようなものを開いてくれたおかげで酒をかつく

らい多数は酒臭く、
二日酔いでふらふらなものもいた。

酒臭いマールさんにハグされ、エリックさんには饞別にナイフをもらい

僕は一年過ごした王都リュティスを出発した。

現在、リュティスから北に向かって歩いている。とりあえず北。
理由は単純なもので南がロマリアだから。

僕は別に宗教を否定しない。
いや、むしろいい印象すら持っている。

確かに異端狩り、宗教戦争などの話を聞くと、暗いイメージばかり
先行しがちだが
その教義を見ると非常にためになるものがある。

キリスト教は隣人愛を説いているし、イスラム教には弱者救済が世
界を浄化する
という概念が存在したりする。

こういった考え方をすることで、辛いことがあつたりしても
精神的に救われたりすることがあるんじゃないかと思う。

リュティスに滞在する傍ら、ブリミル教の教義に触れる機会もあった。

ブリミル教では始祖ブリミルを崇拜している。

その権威の源はメイジが行使する「魔法」であり、これを残した始祖が神格化され

そのまま神のように崇められている、というわけである。

もちろん教義の中にはメイジは魔法を使えない者を助けるべきだ、というようなものはあったが
もっばら

「始祖をあがめよ」「聖地を奪還せよ」

その二つが強調され

他の項目がなりを潜めてしまったようだ。

こういった風潮から「始祖」の権威を借り神官が好き勝手する、なんてことも聞く。

「魔法」が崇められているものだからそれを行使する大多数の貴族も増長するようである。

ブリミル教自体は悪ではなく、悪いのは腐敗なんだと思う。

一つの宗教に6000年という長い歴史があり、しかしほとんど分裂することもなく

存在すれば歪曲されて伝わってしまうものである。

2000年程度の歴史を持ち分裂もしているキリスト教ですら

教科書に載ってしまう程度に「腐敗」する。6000年ともなれば相当なものだ。

まあそれに加えてエルフは「悪」として認識されその「悪」がふるう先住魔法によく似た「悪法」を扱えるのだから睨まれない為には当然の選択である。

街道を黙々と歩く。

杖を持った振りして飛べばいいじゃない、

と言いたいかもしれないがこれは好みの問題だ。

秀囲気が出ない。

それに他の理由もある。

確かに空を飛ぶのにもそれなりに慣れ、最高時速にして約250リ
ーグぐらいのスピードを
感じるのは快感だし、野盗被害の心配もない。

しかしある程度高い高度1000マイル（海拔でなく地面からの目
測）以上に達するとたまに
ドラゴンとはち合わせる、なんてこともある。

ドラゴンの相手は骨が折れる。

体は硬い鱗におおわれ攻撃が通りにくい。
特に風竜は厄介だった。

本気で飛ばないと引き離せないほど速いし、空で暮らしている種族だからか風を読むのに
長けているようで、こちらの攻撃はひょいひょい避ける。

そのため、「点」や「線」でなく「面」で攻撃しなければならず
だそこまで制御の腕がなかった
僕は命からがら逃げ出したものだ。

火竜ならば数頭いても避けながら削る戦法でどうにかあったけど、
ついでに言うとプレスは射程も短くあたりっこないものだったが、
その火力は某巨大動画掲示板で
見たものとは比べ物にならないほどの威力だった。

歩いているとはいえ時々走ってみたりもする。

荷物が邪魔な感じもあるがあまり気にならない。

この化け物じみた強靱な肉体ならばカロリーさえとればたとえ荷物があつたとしてもかなりの距離を移動できる。

ただし荷物の中身がぐちゃぐちゃになることを気にしなければだが。

そうしてこの日、120リーグはあるかと思われる街道を10時間ほどで踏破した。

街の門で通行料を支払う。

子供が一人で街道から街に入る。しかもメイジでもなさそうなの。

王都から北側では一番近く治安もいいがそれでもシユールな光景であつた。

また衛兵の仕事ぶりもまじめそうで一人で来たことがわかると感心と同時に心配された。

「子供」という言葉に少し反応する。

この体に入って一年たつが中々身長が伸びない。

見た目12〜13歳なのだから成長期で一気に伸びていくものなのに

去年測ったときの151センチから154センチとあまり高くない。

170に満たない身長とかは勘弁してほしい。

リーチや体格差は死活問題である。

街に入るとすぐに宿泊だけの安宿をとり、油断は禁物とばかりに荷物を持って
食事をとろうと外に出る。

街の城壁のそばにあった酒場に入ると例によってカウンターの隅に座り料理を注文する。

自分に視線が集まるのにはもう慣れた。

・・・からまれるのはかんべんだけど

そうして料理が来るのを楽しみに待っていると。

「なんだ、やんのかこらあ!！」

どうやら喧嘩らしい。

注文していたミルクがきたので先に飲み干す。動いた後の一杯は格別だ。

「ウル・

それが聞こえた瞬間僕は体を翻し声のする方へとんだ。

ドンッ!!

酒場の床板がわれる。加速するために足の裏に空気を圧縮し爆発させたのだ。

「カーン

メコッ

良く聞く「ファイヤーボール」の呪文が完成する前に、声の主の顔に足が眼り込む。

そしてそのまま壁に激突し気絶した。

・・・全く、店内で魔法使うな！

そう心の中で叫びつつ伸びた声の主の方を見るとそいつはマントをつけた若い男だった。

どうやら貴族だったらしい。他に貴族らしき二人の取り巻きもいる。喧嘩をふっかけられたらしいおっちゃんも呆然としつつ僕の方を見ている。

すると貴族の取り巻きの一人が

「お、おい貴様、今のはこの方がハノーヴ侯爵のごしそ

もう確実に荒事確定なので聞くのも面倒になり、言い終える前に殴

る。

そして状況を理解した三人目が逃げようとするが襟首をつかみ

「ひっ、やっやめ」

殴る。

のびた三人目を床におろすと、酒場の客の視線が集まっているのに
気付く。

少しの沈黙の後、

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

やたらめったらに机をたたく音と客声が響いた。

どうやらさっきの貴族この辺が自領ということで大きな顔していた
らしく、

気に入らなければすぐに暴力を振るっていたようだ。

そうして、速くて見えなかったただのもしかしてメイジ殺しなど言わ
れながら背中をたたかれたり
頭をくしゃくしゃにされた。

そうされつつも、考えてみる。

自分が殴ったのは侯爵の息子。

ということはこいつらの目が覚めたら必ずお礼参りに来るはず。

今夜は野宿確定かも。

そんな考えが浮かび酒場の店員さんに料理を出すのを少し待っても
らうように言って、

のした三人をかかえて路地裏へ運び、城壁の外に一人ずつ投げる。

一晩だけでいいのだ

また明日早朝に出発するのだからその時間だけとれれば

「ぐえっ！」

どうやら起きてしまったようなので僕も跳躍し城壁の外へ出ると
三人ともうめき声とともに足や腕を抑えている。

杖を奪い忘れていたので取り上げへし折ると、三人とももう一度気
絶させてから城壁内にもどった。

・・・モンスターに食べられないといいね。

酒場に戻ると歓迎と若干の怯えを含めた視線で迎えられた。

あの三人をどうしたかは聞かれなかった。

「坊主、てめえやるな」。あんなはええの初めて見たぜ。」

店主が料理を出しながらいつてくるので、どうも、とそっけなく返事をする。

「ねえ、君つてもしかして最近王都で噂になつてる白い雑用係？」

給仕のお姉さんが話しかけてくる。

「いいえ、違います。」

きっぱりと答える。

「えーでも話に聞いた特徴は白い髪と赤い眼傭兵だつて・・・名前がたしかニヤツイール？」

・・・なんだその愉快な名前は。

「最近多いんですよ。それ聞かれるの。僕も彼の噂は耳にしますがそもそも僕傭兵じゃありませんしそれに髪の毛たつて黒髪が混じつてるでしょ。後それから僕の名前はレジイです。」

念のため偽名を名乗る。

周りにも聞こえるようにわざと声を大きくした。

「うーん、そういえばそうね。あーあ、せつかく面白いモノ見つけたと思つたのに。」

・・・ご期待にそえず申し訳ありませんね!!

そんな珍しいもの見たさ丸出しの発言に憤慨しつつ宿に戻った。

ベットに入り今日のことを反省する。

下手に高い身分の貴族に手を出せば僕が痛い目を見るところか、お世話になったあの人たちにまで被害が及ぶことになる。

・・・そろそろ杖、使うか。

メイジの振りをして、傭兵の下っ端「白い雑用係」を隠ぺいする。

とりあえず今日の影響が王都のみんなに及ばないことを祈りつつめをとじた。

旅立ちと言ひ名のつなぎ(後書き)

次回、原作の端っこにかませる予定。

あと偽名はLazy(怠け者)から。

ああ、進むのが遅いくせに駄文で・

食欲 > 性欲 (前書き)

短いかも

食欲>性欲

最初の街を出てから10日が過ぎた。現在僕はガリアとトリステインの国境付近に
来ている。

たまにすれ違う行商人の馬車や護衛の傭兵に道を聞きつつ国境を
指す。

東に少しいくと水がきれいということまで有名なラグドリアン湖が
あるらしい。

・・・今度行ってみよう。湖水浴なんていいかもな。

道中山賊から奪った剣を弄びながら歩く。

緑の風景もいい加減あきてきた。

この世界に来た当初は汚い空気にまみれた都会から解放されたよう
な気分になって
いい気分だったがやはり飽きるものは飽きるのだ。

それに少し寂しい。旅に出てからまともな会話をする相手がない
のである。

宿の主人や農村で働く村人たち。

そういった人たちからまだ、子供なのにすごいねー、だとか、
がんばれよ、

とか言われて暖かい気持ちに気持ちになったりするのだが

なんかこう、砕けた会話がしたいのだ。

・・・旅のお供に猫でもいたらなあ。

なつめ
棗は無類の猫好きである。

犬も好きだが、いつもはそっけなくて、たまに向こうから甘えてくるギャップが

たまらない。

・・・人間がやったらウザいけどね。

国境の警備兵からは、全くやる気が感じられなかった。

街道の様子は静かなもので人が通る様子もなく、詰所の中でだべっていた数人の警備兵は

久しぶりの通行人が子供一人だったので、珍しがりはしたが特に何も言わずまた通行料も取られなかった。

この傾向は地方に行けばいくほど顕著だった。

町の衛兵は違ったが、街道沿いの検問は非常に疎かなもので詰所の

中でカードや酒をかつくらっているもの

もいた。

やはり、所々飛び抜けたところはある文化レベルは低い。

権力の中心である王都から離れれば兵の士気が落ちるのも当たり前なのかもしれない。

トリスティン

伝統と格式を重んじる歴史ある国。

書物にはこう載っているが、噂に聞く話を総合すると

貴族の平民蔑視が最も酷い国。

これだけ聞くと僕にとっては死亡フラグしかない国のように聞こえるかもしれないが

伝統と歴史ある国である。

建造物や文化など見る物もあるのではと観光気分を選んだ。

しかしガリアという国から出てきて少し考えが変わってきた。

ガリアはこのハルケギニアでは最大の国、ということだが王都から少し離れてしまえば

かなり閑散としていて同じような景色が続くだけである。

・・・王都の見物とラグドリアン湖で遊んだらさっさと出よう。

しかし、現在僕は海の方へ向かって歩いている。

繰り返し言うが、地方に行けばほんと何も無い。

なぜ、そんな方向に歩いているかというところ

・・・魚が食べたい

食欲のためである。

こっちに来て海の幸を口にしていない。

交易品の中には、干物となった貝や魚はあるにはあったのだが値段のせいで手が出なかった。

たまに来るこの衝動は川魚によって解消してきたのだが、川魚になるとどうしても味が淡泊になる傾向がある。

あのイワシやサバなどの青魚にある独特の味が恋しい。

地球のヨーロッパと似たようなものなら期待はできそうである。

そう思うと自然と足取りも軽くなり、はたから見れば馬に匹敵するようなスピードで走りだした。

ダングルテール

トリスティンの西岸沿いに位置するそこは昔アルビオンから入植してきた人々が住む土地。

秀囲気としては、家もまばらで漁に使っているであろう船の数も少ない。

僕のガラスのハートは砕け散った。好きだった女の子に振られた時よりもつらい

現実をつきつけられたかのようだった。

「漁業しろー！ー！ー！ー！ー！」

トリステインでは漁業は発達していなかった。

僕が砂浜に膝をつけ打ちひしがれていると、女性の声がある。

「あの、どうなさったんですか？」

上品な、芯の通ったいい声だった。

「いいえ、お構いなく。ただ、現実ってのはうまくいかないものだということ

を改めて実感してただけです。」

そう言いながら顔をあげると

・・・うわ、すごい美人。

目鼻立ちは恐ろしいほどに整い、線は細い。

肩までかかるほどの長い金髪はあまり手入れがされてはいないよう
でくすんでいたが

それでもその美しさは際立ったものがあった。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

僕がそちらを見ながら呆けていると心配した様な表情でこちらを見て言った。

気を取り直してなんともないかのように答える。

「本当に大丈夫ですから、海に来て魚が食べられると思ってついで最初の村がこんな有様だともんで少し落ち込んでただけです。」

・・・あれ？こういうとこの村けなしてることになるじゃん。

しまったとばかりにその女性の方を見ると、くすりと上品な笑いをうかべ

「まあ、それは残念でしたね。」

その笑顔に僕はもう一度呆けてしまった。

その美人さんの名前はヴィットーリアと名乗った。

すると僕も普通に

「^{ナシメ}棄つていいいます。」

名乗ってしまった。

とっさだったのと少しばかりの緊張で偽名を出すことを忘れてしまった自分が恨めしい。

ああ、やっぱり女は苦手だ。特に美人は。

僕が旅の途中だということをつけると、

「じゃあ、今晩は泊まって行きなさいな。」

宿の提供を申し出てくれた。

新教徒

それはロマリアをはじめとするブリミル教の腐敗を正そうとした者たちから派生したブリミル教の新しい宗派らしい。

そしてここダングルテールではアルビオンから流れてきた入植者たちが集落を作り、

トリステイン王政府と度々悶着を起こしていた。

そんな地域に流れてしまった僕はというと

・・・選択肢間違えた。

自分の欲望の単純さが恨めしかった。

案内された家は簡素なもので中には、少し年老いた男一人と棗より5つか6つほど年が上と思われる少女がいた。

ヴィットーリアからは上品な雰囲気を感じられるし、家にいた男と少女は彼女に一步引いたような態度をと

っていることから

・・・どっかのやんごとない身分のお嬢様？

何らかの事情でここに来ている、ということなのかもしれない。

また、女性が苦手と言っても棗も男である。

いろいろ免疫がないといってもやっぱり美人とお近づきになるのは嬉しいことだし、

さつきから見ているとヴィットーリアからは何か暗い雰囲気が感じられそれが気になってしまった。

そんな理由や、久しぶりに素潜りでもやるか、

あなたも、ぜひ、この本を読んでください。

伏線回収が大変そうな話（前書き）

さくしゃのゆびがぼつそつする。

ちゃんと場面が伝わってるだろうか。

伏線回収が大変そうな話

ダングルテールに来て一ヶ月になる。

気温も下がってきて素潜りするの難しくなってきた。

食べ物に関して言えばだいぶ満足した。

沖に出て潜ってイワシの群れを見たときにはそれはもう歓喜した。

しかし、漁業があまり発達しておらず、加えてイワシは腐りやすい。

肥料や家畜の飼料にしか使われていなかったようで食用にはならないようだった。

そんな現状に怒りを感じ、イワシの丸干し作りに挑戦した。

脂の乗ったイワシは水分がなかなか飛ばず腐らせてしまったが、脂の乗っていないものはからっからに乾燥し日本で食べたものに近い味に少し涙が出た。

最近村の中できなくさい噂を聞く。

なんでも僕が来る前にこの地域に政府軍とのいざこざがあったらしい。

このダングルテールではトリステイン王政府はよく思われていないらしく、ある種自治区のようになっっている。

そこに王政府がトリステインの領土だとちょっとかいを出してきて、少し暴力沙汰になったようだ。

そろそろ引き時か。

もう十分に海の幸を満喫したし次は首都にいつて見ようかと思う。

僕が出来上がった丸干しを持ってホクホクしながら歩いていると、

「なっちゃん！」

短髪幼女がこちらを向いて手を振っていた。

この子、アニエスはヴィットーリアさんにとてもよく懐いてよく彼女の所に預けられている。

初対面の時

「おじいちゃん」

と言われた時は、固まった。髪が白いからって13歳（自称）を年寄り呼ばわりとは。

まあ、そうして自己紹介後、この某有名清涼飲料水のような呼び方が村で定着した。

「どうしたの？アニエス。」

小さい子を見ると微笑ましくなってくる。

「えーとね！お父さんが呼んだ。」

この子はほんと元気がいい。少し男勝りと感じるほど。
この村にしばらく滞在するということで、空いた時間に鍛練をしていると

村の小さい子たちが集まってきて真似をしてくる。

全員男の子だというのにそれに混じってはしゃぐ様子がとても可愛らしい。

・・・ほんと子供がかわいいのはこのころだけだね。

成長したらDSになるかもしれないと将来を憂いつつ、やはりこの村でも定着してしまった雑用係の任務をしにアニエスの家についていった。

雑用を終えヴィットーリアさんの家に戻る。

いつもより纏う空気が重いと、彼女を見やると頬に涙が伝っているのが見えた。

「ちよっ、え？何かあったんですか!？」

あわてながら僕がそう聞くと、彼女は嗚咽おえつを抑えきれず
小さく声あげ泣き出してしまった。

・・・いや、ホントもう何？

ただでさえこういったことが苦手な僕にとって女性に泣かれる、
という事態は思考をますます混乱させた。

・・・ええと、こういつ時に取るべき行動は、

漫画や小説の内容を思い出す。やさしい言葉をかけたり、
頭て手をおいて撫でたり、抱きしめたり・・・etc

言葉は思いつかないし、撫でるなんて年齢でもない。

・・・ああ、くそ。

ものすごい恥ずかしい。きっと今の僕の顔は真っ赤だろう。

ヴィットーリアさんの頭に手をまわし自分の胸押し付ける。

すると彼女は何か我慢していたものがドッと出てきてしまったのか、
声をあげて泣いた。

十数分経っただろうか、彼女は落ち着きを取り戻し、
泣きはらした目をこすりつつぱつりぱつりと語り始めた。

自分が実はロマリア出身で僕より数か月前にこちらに来たこと。自分かわいさに息子を一人残して国を出たこと。

ヴィットーリアさんは右手の中指にはめた指輪を見て言った。

「ヴィックはね、とても頭が良くていい子だったのよ。」

すこし、嬉しそうな顔をしながら言う。

「5歳になったばかりなのにもう難しい本を読んだりしてね、時々びつくりするぐらい大人びたこと言うのよ。」

そこまで言ってまた彼女の表情が変わる。

「でも、あの力を見て私はあの子を恐れてしまった。」

どうもヴィックという子、幼いながらも魔法を扱えるらしい。加えて頭までいい。

・・・いわゆる天才という奴か。

「聞きなれない魔法語マジックを唱えたかと思うとね、

始祖の円鏡に見たこと事もないようなものが映るの。」

聞きなれない単語を聞き流しじつと聞く。

「初めは驚くばかりでそこまで気に留めなかったわ。でもしばらくしてまた呪文を唱えたら

今度そこに映ったのは戦場のような風景だった。

見たこともないような巨大な船、

考えられないような速さで飛ぶドラゴン、そして語ることにすらはばかられるようなすさまじい爆発。」

自分の知識と符合するものを感じて息をのむ。

・・・まさか、地球の風景？

「私はその光景を見て恐れてしまった。

鏡を食い入るように眺める息子と鏡に映ったものに恐怖を抱いてしまった。」

それを言い終えると小さく細い声で

「でもね、怖くつてもやっぱり愛してるのよ。」

ヴィットーリアさんは僕がアニエスに連れられている光景を見て、ヴィックという息子のことを思い出してしまったらしい。

今の彼女は大事なものを誤って捨ててしまい
もう手の届かない所まで行ってしまったものを見るように遠くを見
ていた。

「子供がいない僕にはヴィットーリアさんがどれほど辛いかわかりません。」

親になったことない僕に親の気持ちなんて本当に理解できるわけがない。

「でも、人から愛されていることを煩わしく思う人なんていないんじゃないでしょうか。」

心の中では、まあ結構いるだろうな、と思いつつも彼女を元気づける言葉を選ぶ

「たった一言声をかけるだけでその人の一生が変わってしまうことだってあるんです。」

それこそ誰からも認められないような悪人がその一言をもらっただけで変わってしまうような。」

・・・ああ、自分で言ってる矛盾しているのを感じる。

あれだけ殺しておいて。

「小さな子どもが一人なんです。きつと心細いはずです。」

今のあなたにできることと言えば

その言葉を息子さんに伝えて元気づけることじゃないんでしょうか。

「

その言葉にはつとしたように彼女は息をのんだ

「ほんとう。本当にそのとおりね。確かに今の私にできるのはそれだけ。」

でも『それ』ができる。」

目には少しの輝きを取り戻していた。

「でも不思議ね。あなたと話していて、神官に諭されたよう錯覚しちゃったわ。

いえ、むしろ下手な神官よりずっと神官らしい。」

そうして彼女は立ちあがり家の奥へと入って行った。どうやら手紙を書くらしい。

元気を取り戻した彼女の笑顔に見とれてしまったのは蛇足。

伏線回収が大変そうな話（後書き）

SEKKYOUしてしまった。

設定も大量になつ造。

わかると思いますが 巨大な船⇨戦艦、ドラゴン⇨戦闘機、すさまじい爆発⇨原爆

あと、ヴィットーリオの愛称ヴィック（vick）はウィキペディアから。

想像で描く虐殺現場

「ああは言ってみたものの手紙なんてどうやって送るんだろ。」

夜空を眺めつつひとりごちる。

夕食の席で、どうにか送る手段がないか話し合ってみるも、あまりいい案は浮かばない。

ヴィットーリアはロマリアを出る時、「炎のルビー」を持ち出している。

持ち出すことになった原因や経緯などはわからないが重要なのはそれが「国宝」だということである。

手紙を送ればこちらの居場所に足がつく可能性もある。

そうなれば追っ手が伸びてくるのは確実である。

また、手紙が無事ロマリアについたとはいえ、

ある程度身分の高い信者であると思われるその息子にそのまま届くとも思えない。

きつと、差出人なんか書いておいたら

「敬虔けいけんな信者をそそのかす悪魔からの手紙」

などのあらぬレッテルを貼られるに違いない。

何かを笠に着ていいがかりをつけるところを何度も見ているので、可能性は十分にある。

「差出人不明じゃあなー。」

その息子 ヴィットーリオ が母親の筆跡がわかるほどの頭を持っていれば別だが

いくら天才5歳児といえども母親が書く字を見ていなければわからないはずだ。

ヴィットーリアさんにそのことを聞くと

勉強を教えていたのは私じゃなく神官だったのでおそらく見たことはないだろう、

だと。

・・・確実な方法はやっぱり、誰かが内部に潜り込んで直接渡す、か。

数打ちや当たる、のようなことをヴィットーリアさんが言っていたがそれじゃ

こちらの居場所がばれるリスクをあげてしまう。

それも覚悟の上のようだったが、

・・・「僕」が巻き込まれる可能性も上昇するわけで。

メンドクサイ。もう少ししたらここを出よう。

息子のことで少し周りが見えなくなった母親に、軽く辟易しつつ家の中に入った。

叫び声が聞こえた。

嫌な匂いもがする。

昔、火葬場に行った時にかいだ匂いのように鼻につくその刺激臭のせいで目が覚める。

時刻は深夜だろうか。

どっぴりと深い闇に包まれているはずの外からオレンジ色の光が差し込み、
空いた窓からわずかながら温かい空気が流れ込んでくる。

確信に近い酷く嫌な予感を感じ家の外をのぞくと

外は業火に包まれていた。

夜中であるのに焼かれている村は明るく、断末魔の悲鳴をBGMに炎が踊っているかのようだった。

「起きろ！夜襲だ！！」

風と同調しながら外にメイジが多数存在することを確認しつつ
ウィットーリアさんたちを起こす。

「どづしたの？」

寝起きで意識がはっきりしないようなので、頬を叩く。

「襲撃です。数は分かりませんが外に・・・」

そこまでいいかけてこの家に向かって熱いものが飛んでくるのを感じとっさに彼女と自分の前に高密度で圧縮した空気の層を展開する。

ゴオッ！

炎弾で吹き飛んだ破片を防ぎ彼女を抱え飛び出す。

命がかかっている状況である。

・・・出し惜しみはしてられない。

ヴィットーリアさんを下ろし

状況把握のために全力で風の探査を展開する。

周囲の空気の温度が高いばかりで、襲撃の犯人であろうメイジたちの存在を感知しにくい。

・・・とりあえず、この近くには7、8、・・・11人！

さっき、炎弾を放ったであろうメイジに接近しつつ風を展開していく。

僕が目の中のメイジの胸のあたりにむかって拳を突き出すとトマトが潰れたような音たて

肉を突き破った。

・・・気持ち悪い。

そう感じながら展開していた風を使って熱せられた空気を対象に向かって送りこんだ。

摂氏数百度にまで熱せられた空気が次々とメイジたちの肺を焼き絶命させていく。

そうして確認できた敵を倒し、
家の中にまだ居るであろう使用人の二人を連れ出そうと戻ろうとす
ると

二人の悲鳴が聞こえた。

・・・とりこぼし!?

熱さのせいで頭の働きが鈍っていたのであろう。敵はもう一人いた。

背中に嫌な汗が流れ、心拍数も上がってくる。

背後では焼死体が二つ出来上がり、それを見ながら下卑た薄笑いを
浮かべた男がいた。

魔法研究所実験小隊隊員 メンヌヴィル

俺は人を焼き殺すのが好きだ。

そして俺は今、とある村で人を焼いている。

なんでも疫病が流行ってるんで広がる前に焼き滅ぼせ、とのことらしい。

上も面白い命令してくれる。

俺が所属するこの実験小隊は汚れ仕事専門の部隊だ。

盗賊退治ついでに魔法が人体に与える影響を調べたり、貴族の反乱鎮圧に駆り出されたり。

そしてこの小隊の隊長がすごい。

年も俺とほとんど変わらねえってのにあの胆力、戦闘技術。

そして何より容赦がねえ。

女も子供も見境なしにただ焼き殺していくさまには惚れ惚れしたね。

今は作戦行動中で二手に分かれているが、

きっと向こうで焼死体の山でも築いてそうだ。

もう一度言つが俺は人を焼き殺すのが好きだ。

あの焼ける匂いやその際にあげる悲鳴がなんともたまらない。

ああ、そうしているうちにまた二つの焼死体ができた。
もう焼くところはないし次に行くか。

そう思って移動しようとして死体から視線をずらすと

白髪で赤い眼のガキがこっちを見ていた。

右手は血に染まっている。

その無感動な表情とまるで血のような眼から俺は悟った。

・・・こいつはおれと同類だ。

ぞくぞくする。

見れば、薄着で杖を持つてる様子もない。

手が血に染まり、近くに同僚が倒れていることから素手でやったことがつかがえる。

・・・このケモノが焼ける匂いが臭きたい。

俺は気がつくとその子供ケモノに話しかけていた。

左手に空気を圧縮した刃を作り出し、下から放るように放つ。

男の体がナナメにずれ血が噴き出す。

何か言おうとしていたが気にしない。

この男が、さつき生きているときに浮かべていたあの嫌な笑みを思い出す。

・・・殺人嗜好者

二人の人間を一瞬で焼き、炭化して崩れているのがわかる。

かなりの高温で焼き殺されたようで

この死んでいる男がそれなりのメイジであることがわかる。

・・・戦場で話しかけてくるなんて正気とは思えない。

そう思いながら、ヴィトーリアさんの方へ向き

「こっちです！」

他の生存者を捜すべく彼女の手を引き走りだした。

・・・この村はもう駄目だ。

そう思わざるを得ないほど焼きつくされている。

風の探査を延ばしても敵のメイジと思われるものしか感知できない。

ヴィットーリアさんは既に僕が行使している力の異様さに気づいているであろうに

何も言わない。

残りのメイジの肺を流れ作業のように焼いていく。

・・・熱い。感覚が鈍る。

そのせいで注意がおろそかになっていて彼女の悲鳴が聞こえたときにはもう遅かった。

一人の少女を抱えるようにしてうずくまり、その背中はやけただれ、所々炭化している。

僕はその光景を目にすると血の気が引き

その攻撃を放ったであろうメイジに飛びかかり殴り飛ばしていた。

インパクトの瞬間拳の入り方が浅いのを感じる。

・・・こいつ、後ろに飛んだ!?

衝撃の瞬間に後ろに飛んでやわらげる。

そんな初めて見る技術に

・・・この人は危険だ。

と頭の中で警鐘を鳴らす。

しかし、その技術を初めて見たのである。一瞬呆けてしまった。

「あれは君がやったのか?」

メイジの男が口を開いた。

「アレ?」

・・・この村が焼ける惨状のことを言ってるのか? ヴィットーリア
アさんを焼いておいて!

「メイジたちの死体のことだ。」

やはりこいつは村を焼いたメイジたちの仲間のようにだ。

「だとしたら何だって言うんだ。」

「この村では疫病が流行っているんだろ？彼らはそれを焼き払い
にきた。」

命令だったんだ。」

・・・なんだよそれ？一体どうなってる。

「何だよ、今更命ごいか？言っとくが僕は油断しない。アンタは強
いから全力で行く。」

「疫病が広がってしまえばさらに多くの命が失われるんだ！何でそ
れがわからない！！！」

男が声を荒げて言ったそのセリフに困惑する。

「いや、疫病って一体何の事だよ。」

どうやら双方の見解にずれがあるようだ。

・・・って、そうじゃない！

そうして、背後でうずくまって動かないヴィットーリアさんの所へ
駆けて行った。

・・・酷い火傷。

それも背中全体が焼けてしまっている。

抱きかかえられていた少女はアニエスだった。

「大丈夫。気絶してるだけ」

と、弱弱しい声で言いながら、こっちによこした。

・・・こんなときまで人の心配か。

「ねえ…私、もう駄目見たい。背中の中…感覚が全…然…なの。
いの。」

かすれた声は今にも消え入りそうだ。

「だからね、・・・お願い、手紙を。」

届けて。

その言葉をいうと、目を閉じ

「ごめんね・・・。」

息子に向けて言ったと思われるその言葉とともに

瞼からは涙が一筋ながれ、彼女は息を引き取った。

・・・全く、面倒くさい。

「めんどくせえ。自分でやってくれよ、ほんと。勝手に押し付けて死ぬなんて卑怯だろ。」

気絶したアニエスをだき抱え文句を垂れる。

背後にはさっきのメイジの男が顔面蒼白というような表情で打ちひしがれている。

「おい、おまえ。」

僕の言葉に男はびくりと反応する。

「は、はい。」

「こいつ連れてどっか行ってくれ。」

僕はアニエスを男に手渡した。

「君は、一体どうするつもりなんだ？私を殺さないのか？」

「それよりも聞きたいことがある。」

男の質問を受け付けず、

「この命令を出した人間の名前を教えろ。」

拒否権はないと言わんばかりに精一杯男を睨みつけ言った。

ヴィットーリアさんの住む家は村の外れにある。

このため今回の襲撃の手が来るのが遅く村全体が燃えるまで気がつけなかった。

「村のはずれにあったおかげで大した被害はなく、壁が壊れているだけ家は無事つと。」

・・・全然良くない。

家の中に入り焼けただれた床を踏み奥に入る。手紙はそのままふうにいれて閉じられていた。

自分の荷物を捜し、まとめておく。

「墓でも作るか」

いつもは言わない独り言が出てしまうのは精神的に追い詰められているせいだろうか。

クワをつかって穴を掘りながら考える。

新教徒

ブリミル教に宗教改革「実践教義」をとりいれた新しい宗派。この村の人間は全てこれの信者だった。

外からきた僕にはこれの違いがわからずただ真似をしているだけだった。

「どうして、寛容になれないのかね？」

これはどう見てもただの異端狩りだった。それもかなり性質の悪い。

・・・リッシュモン高等法院長

首謀者の名前を浮かべながら今後どう動くか考える。

・・・とりあえずトリスタニアに行って情報収集。ロマリアに行く方法も考えないとなあ。

そうしているうちに10程度の縦長の穴を掘り終えた。

村人全員の墓を造る義理もない。

世話になった人たちの分だけ掘る。

・・・死体捜すの大変だろうな。

焼死体なんて絶対見分けがつかない。

幸いアニエスの両親はあまり焼けてはいなかった。

どうやら窒息死らしいその苦悶の表情が固まったものはホラーとしか言いようがなく

運ぶのに躊躇してしまうようなものだった。

見つからない死体の分は空のまま、にして穴を埋めて、十字架を木で作刺していく。

キリスト教でもないのにおかしいかもしれないが即席のものがこれしか思い浮かばなかった。

そして墓の前で成仏してくれと手を合わせる。

・・・もう宗教がカオス。

不謹慎なことを考えつつ、この村でする最後の仕事が終わった。

アニエスを任せたあの男、コルベールといったか、その身のこなしを思い出し
感心してしまう。

別にその動きが凄いというわけではなく、状況判断が。

魔法についてはほとんど見ていないからわからないが僕が皆殺しにした小隊の隊長
とのこと。それなりに高位のメイジなのだろう。

そんな彼が去り際にあつたやり取りで

「君は私を憎んでいないのか？」

そんなことを聞いてきた。

全くもって無意味な質問だった。

「怒ってはいるけどそれも一過性のもんだよ。それも一ヶ月もしたら忘れるような。」

どうせもう敵対することはないのだ。対立の原因は勘違いだったのだから。

「憎んで過ごすなんて無駄だよ。あなたの背中に背負ってる子は違うかもしれないけどね。」

そうアニエスを指差す。

「大体、この惨状を引き起こしたことを悔やんでるんでしょ。だってら生きるよ。」

その方が絶対辛いに決まってる。

僕はあなたの同僚殺したことなんて気にも留めないけどな！」

そう言うと諦めたかのように、

「そうか、生きる方が辛いのか。確かにそのとおりかもしれない。」

若干下を向き言った。そして

「君は高等法院長に復讐するつもりか？」

今度は本当に不安そうな表情で言った。

「復讐はしない。多分だけど。でも敵対するなら容赦しない。何？こんな命令出す人の心配？」

何だかこんな軽口で人と話すのは久しぶりでつついっい饒舌になってしまっ。

「違う。今、君がもし高等法院長を殺した下手人だと知れば異端者に指定されるのは確実だからだ。」

コルベールの話によると今回の命令はロマリアが絡んでいるらしい。

「うーん、なるほど情報提供ありがとう。気をつけることにする。」

そういつてその場から離れた。

私は罪を犯した。

それこそ一生かけても償いきれないような。

あれだけの数の人間を殺したのだ。それも何の罪もない人たちを。

彼は生きて苦しめと言った。そういうやり方もありかとすんなり納得してしまった。

言ってることはダメ人間そのものだったのに。

彼は殺しに対する忌避感を持っていないのだろうか？
彼にまかされた少女を見て思う。

この子は私を憎むだろうか、憎んで私を殺しに来るのだろうか。

そんな未来を考えても不思議と恐怖は湧かなかった。

そして

「あ、名前聞くの忘れた。」

焼けた村を出てしばらくして気づいた。

想像で描く虐殺現場（後書き）

主人公の立ち位置を決めかねる。

次回はほのぼのの予定。

善人をそそのかす悪魔

「はあー。癒しがほしい。」

周りを見渡せば、緑、緑、緑。

涼しげで澄んだ空気は、現代日本人の荒んだ心をいやしてくれるに違いない。

しかし、現在僕が欲している癒しはこういうものではなく、なんと
いうか拗り所みたくない
ものが欲しいのだ。

・・・人死は辛い。

要は、心細いのである。

親しくなった人たちが死んで悲しい。

人として当たり前の感情ではあるのだが、程度も人によって違うわけ

・・・でもヒナが死んだ時の方が悲しかったかもしれないなあ。

ヒナとは、何の変哲もない、少し体の小さい黒猫である。

当時17歳、あの時はマジで泣いた。誰もいない夜の公園で声を殺して。

そしてその悲しみは尾を引き、長期間僕を悩ませ続けた。

ヴィットーリアをはじめダングルテールでは、いろいろ良くしてもらった。

棗が現在行動しているのは、借りを返すのと自分に都合のいいものを減らしてしまう、その要素を排除するということに基づいている。

後者がブリミル教の異端審問に似ていることに気づいた時は

・・・人のこと悪く言えないな。

しかし反省するようなこともなく、すぐ忘れてしまった。

・・・ヴィックへの手紙は届ける。ただし見込みがあればの話だけだ。

歩きながらそれを考える。

やはり一番手頃で確実なのは、信者の振りして潜入、そして接触するというものだろう。ダングルテールを焼いたメイジたちを皆殺しにした犯人の顔は

今のところ割れていないはずだ。

・・・コルベールも身を隠すって言ってたし。

しかし、今後敵になる可能性の高い組織の、それも本拠地に潜入するのである。

警戒しすぎということはない。

・・・マジックアイテムに手を出してみるか。

僕はコモンマジックを”視る”ことができる。
正確には、それに作用する魔力 精神力 を。

また、一年間の勉強の甲斐あってか知識に関して言えばしっかりと身についたと言える。

日本にいたときも、活字からものを覚える、というのは得意だったし体が若いせいもあってか吸収もいい。

そう言うわけで、効果のほどはわからないかもしれないがマジックアイテムの真贋を見分けるのは少し自信がある。

これを利用して金稼げよ、と言いたいかもしれないがそこまで頭が回らなかったし、この世界では明らかに異能に分類されるような

力のため大っぴらにはできない。

・・・しかし、トリスタニアに着いたらまず飯だね。

いやあ、このために生きてる、というようににやけながら僕は

トリステインの王都、トリスタニアをめざした。

とある王軍の士官

私はトリステイン王国王軍に所属する士官だ。

現在、調査隊の隊長として
トリステイン領の西端の海岸沿いの地域ダンゲルテールの調査に来
ている。

上からの命令によると、魔法研究所実験小隊という裏の仕事専門の
部隊を
疫病の拡大を防ぐために送るも、一向に帰還しないというので調べ
てこい、
とのことだった。

村は酷い有様だった。

疫病の拡大を防ぐためとはいえ人を焼き殺したあとなのだ。
何も感じない方がおかしい。

そうして調査を始めると、恐るべきことがわかった。

実験小隊の隊員が死んでいたのだ。

所々焼きただれ、苦悶表情が固まったまま。

住民の焼死体も多くあり、三十あるはずの隊員の死体を見分けることはできなかつた。

中には胸を貫かれていたり胴と脚部が切り離されているものもあり調査隊の新米が

胃の中のものを吐き出していた。

・・・なんだこの光景は。

おかしい。と心の中で言う。

確かにこのくらいの規模の村であればメイジもいるかもしれない。

しかし、この小隊は戦いを専門とする汚れ専門の特殊部隊なのだ。

これに対抗できる戦力を整えるのは相当難しい。

加えて隊員の死に方がほとんど全員一緒なのだ。

同一の方法で殺された可能性が高い。

・・・まさか、少数もしくは単独犯！？

その答えに行きつき、顔から血の気が引き、鳥肌が立つのを感じる。

「さながら、悪魔の仕業といった所か。」

恐怖を感じつつも、他の隊員が不安にならぬよう軽口調で言うてみる。

その言葉に反応してしまうものもいるが、無視して思考を続ける。

焼けた村からは疫病の痕跡は発見されなかつた。

そしてここはダングルテール。新教徒の住む土地。

王政府との関係はいいものではなかったし、調査を命じたのがリッ
シュモン高等法院長
であることからきな臭いものを感じる。

自分は王に仕えている。この国の不利益になることはたとえ疑問を
感じようとも

目をつぶる度量も身に付けているつもりだ。

疫病の詳細など不明瞭な点がいくつも存在することから
背後に政治的な匂いを感じ割り切らなければならぬことだと悟る。

そこまで考えていた所で調査の終了の報告を受け

「よし、引き上げだ！」

逃げるように焼けた村を出発した。

白い石造りの建物が目立つ。

流石に歴史ある国らしく建物の作り一貫性も見られ、また町の中に流れる川がその美しさを強調している。

繁華街の規模はリュティスに比べると小さいし大通りも狭い。

しかしやはり人がいるところは活気があるものである。

道端を見渡すと野菜や肉、日用品の類を声を張り上げ売る商人の姿が目につく。

人々の顔にも笑顔が見られ、少なくともこの付近での暮らしはそれなりに豊かで

あることがうかがえる。

しかし、ここは伝統と格式を重んじる国。

現在僕の格好は黒い外套と荷物の入った袋を片手に持ち、一般的な旅人の少し丈夫な服を着ている。

少し汚れてはいるのは旅をしているのだから仕方ない。

しかし汚れた服を着ている平民など珍しいわけがない。

近くで大工らしき仕事をしているおじさんは汗びっしょりだし、馬舎うまやからでてきたお兄さんは、

馬の毛やらよだれやらで面白いことになっている。

こんなことも話すのも、もう飽きてきたが

・・・見られてる。しかもいつもよりしっかり。

月目

別名 バイアイ、オッドアイ、異色症^{ヘテロクロミア}

僕が考えたかっこいい主人公（笑）の典型。

ハルケギニアでは不吉なものを象徴するらしいので忌み嫌われてい
る。

宿のおかみさんに聞いてみたら僕の赤い眼が珍しく月目を彷彿^{ほっふっ}とさ
せるらしい。

この国では、こういった伝承が殊更^{ことごと}強く信じられている。
貴族が伝統を重視する影響が平民にも出た結果か。

そしてこの日は長旅の疲れと精神的打撃もあつてか
久しぶりのベットは予想以上に気持ちよかった。

王都について二日目

宿で秘薬などのマジックアイテムの店の場所を聞き、街を観光気分で歩く。

少し空は曇っているがそんなことは関係なく大通りの市場は賑わっていた。

とりあえず薬のほうからということで大通りから外れ路地裏に入っていく。

大通りと路地裏の差は激しく、こちらは薄汚れ少しにおう。

少し進むと薬屋の看板と思いきガラスコのようなものが描かれた看板が視界に入ってくる。

そしてその少し奥には剣の形をした看板。武器屋のようだ。

・・・そういえばもうナイフがダメになってるな。

狩りや海での素潜りで使い込まれたナイフは、刃が欠けていたり折れていたりで

使い物にならなくなっていた。

そう思い、今後確実に必要になるであろう物の調達を優先して武器屋に入って行った。

店内は薄暗いものだったが、それでも壁や床には傷もほとんどなく新しくできた店のようでカウンターの奥では30を過ぎたころであるろう男が

こちらを見ていた。

こっちが軽く会釈すると、男は関わり合いになりたくなさそうなきつった笑み

を浮かべて

「おい、ここはガキの来る所じゃねえぞ。」

と言ってきた。もうこの手の対応にも慣れたもので

「買ったらすぐ出ますのでお構いなく。」

と行って商品を物色し始めた。

「何だ客か、勘違いしちゃったぜ。」

先ほどの態度とは打って変わったものになる。

ナイフを3本ほど見繕ってカウンターに持っていく。

「商売の方は最近？」

小ぎれいな店内の様子にそんな言葉が自然と出てくる。

「ああ、そうなんだよ。でもなかなかうまくいなくなってるな。」

僕から代金を受け取りながら苦笑いを浮かべて言った。

「傭兵や平民だけが相手じゃやっぱり駄目なのかね。」

基本的に金払いがいいのは貴族である。

「そりゃやっぱりある所からはしっかり頂かないと。」

店内の武器は実用的なものばかりで装飾用のものは奥に飾ってある一本のみであった。

そのことを指摘すると、この店主あまり貴族に良い印象を抱いていないようで

貴族の客を取ることに否定的だった。

それが僕の中のいたずら心に火をつけ

「いいじゃないですか、別に貴族の客が居たって。そして装飾用の武器になまくら

とかまがい物混ぜて売ったりすればあなたは儲かって、しかも貴族に仕返しができます。」

「いや、それじゃ、ただの詐欺・・・」

「この世の中、所詮きれい事だけでは生きていけないのです。」

それにあんだけ平民から搾り取ってる貴族の懐からちよつとかすめ取るぐらい

バチなんて当たりませんよ。」

「でもなあ・・・」

「ばれなければいいのです。」

それだけ言っただけ僕はその店を出て行った。

おかしな子供だった。

老人のような白い髪に赤い眼。

見る者が見れば悪魔とでもいいそうなその雰囲気。

・・・今まではすすんで人をだますなんて考えたことなかった。

そして一方的にまくしたてられ言いたいこと言ったらさっさと出て行っちまった。

よく考えるとあの小僧が言っていたことにももっともだと思っ。

貴族は平民を搾取する。

この国では特に。

それを考えるとだんだん腹が立ってきた。

・・・そうだ！向こうには散々好き勝手しているんだ。

これくらいどっつてことないはずだ！

店主は正直者をやめた。

善人をそそのかす悪魔（後書き）

はあ、猫がほしい。彼女より猫がほしい。

良く考えるとオッドアイでないにせよ主人公の容姿も十分（笑）が付く。

似非教徒（前書き）

今回は短め。

似非教徒

リツシュモンは報告を受けると苦渋の色を浮かべた。

魔法研究所実験小隊はほぼ全滅。生き残りがいる可能性も低い。
アカデミー

この事実はすなわち、ダングルテールの新教徒が
まだ生きている可能性を指し示すものである。

それも強力な力を持つメイジの。

今回の新教徒狩りはロマリア本国の要請を受けたものだ。

この失敗が露見すれば現在の地位を失うことにはならないにせよ
ロマリアの後ろ盾がなくなる可能性が高い。

トリステイン王家につかえて十年。

方々に策謀をめぐらし、わいろを贈り

ようやく高等法院の長の任についたばかりなのだ。

この座をそう簡単に明け渡すわけにはいかない。

しかしこれは完全なイレギュラーだ。

これを隠蔽した後、件のメイジによって被害が出てしまえば
最悪、罷免もあり得る。

豪華な衣装に身を包んだリツシュモンは顔をあげて目の前の報告に
きた騎士に言った。

「生き残りがいないかがないか調査せよ。」

トリスタニアのマジックアイテム専門の店で、石が木箱に詰められ売られている。

ロマリア潜入のため隠密性を上げるための道具が置いていないか探している時だった。

店員と思われる人に逐一商品説明を求め、うざがられていると店の隅に箱の中に石が詰まっているのを見つけた。

風石

風そのものが固まった石。

メイジは精神力によってその力を喚起し取り出すことができる。

その説明を受けこぶし大のものを一つ手に取ってみると

その内包された風の力に圧倒されてしまった。

こぶし大の石で、小型の台風がおこせそうな量のエネルギーを感じる。

ただし一度ですべての力を解放できればの話だが。

店内には、他にも火、土、水の石の箱があり、それぞれ手に取るも何も感じられなかった。

・・・いや、予想はしてたけどね。

少し面白くなかった。

さて、力を感じ取れることがわかると

今度はそれを扱えるかもしれないと思うのが当然である。

早速、石を買い宿の部屋に戻り、精霊を介して石の力に関しようとしてみると

石に干渉はできなかった。

というか、もし干渉できたとして、

一度に力が解放できたら宿を含めたこの近辺は更地になっていただろう。

その考えに行きつき、ほっとしたものの何か釈然としなかった。

ついでに言うと、マジックアイテム屋では
髪と眼の色を変えるメガネ手に入れることができた。

ロマリアに潜入する際、僕は信者に化けるつもりである。

そして信者になるために今の僕に足りないものと言えば、プリミル
教に関する正確な知識。

おそらく、ヴィックはロマリアの中でもかなり高い位の信者だろう。

接触するには入信したした振りをするのが一番穩便かつ確実だ。

そう言うわけで、現在僕はトリスタニアにある教会に来ていた。

先日買ったマジックアイテムの眼鏡をかけて。

現在の容姿は、金髪碧眼。この世界では十分に普通の容姿であると言
える。

僕は、ほとんど世間から隔絶された田舎で、自然崇拜を信仰してい
た異教徒である設定で

ブリミル教の教義に共感し改宗を決意した、ということにした。

それに神官の男性はいたく感動し

「異教徒、それもあなたのような子供が改宗を決意なさるとは、さぞ勇気がいったことでしょう。」

大丈夫です。始祖ブリミルは異教からの改宗であっても入信を拒むことはありません。」

諸手^{もろて}で握手され、周りにいた修道女たちからは拍手で迎えられた。

まあ、こんな風に回りくどいやり方をしているのも

『ブリミル教に入信したという事実』

が欲しいのと、ちゃんとした教典を手に入れるためである。

高いけど仕方ない。

そして、信者特典、

ブリミル教の熱心な信者を装っていれば各地の教会を寢床として活用できる。

そうして、下準備は整った。

・・・あとは行動するだけ。

そうそう、忘れていたけどリッシュモン高等法院長については割と簡単に情報が集まった。

奴が住む屋敷は貴族街の中でも指折りの豪華なもので税金の無駄遣いを感じさせるものだったし、屋敷の中に風をしのばせ話を盗み聞きするとあまりいい話は聞かなかった。

高等法院内で最大の派閥のリーダーであり、わいろによる買収はいつものことで

最近は税金の横領もしているようだ。

・・・うわ、真っ黒。

司法のトップがこれではこの国も終わりかもしれない。

これに、対するスタンスだが、これからロマリアに洗礼の旅に出るのだ。

騒ぎになると面倒なので後回しにした。

似非教徒（後書き）

い。他作品ネタは読む分にはいいけど、自分が書くこととすると入れずら

犯人の正体（前書き）

今回も短い。

犯人の正体

トリステインからゲルマニアに伸びる街道を移動する一団がいる。

彼らはゲルマニアを目指して移動中だった。

しかし一団の纏う雰囲気は、旅行中というような明るいものでなく皆が皆、沈痛な面持ちおもてで歩いていた。

服は薄汚れ、所々やぶれたり、焼け焦げたりしている。

彼らはダンゲルテールのあの夜襲から生き残った者たちだった。

空気が重い。今にも泣きそう。

そんな雰囲気を醸かもし出すのも無理もない。

自分たちの住む村が焼かれたのだ。

生き残れた者は自分たちだけであろうこの状況。

そして、それに追い打ちをかけるかのように彼らを打ちのめすような出来事があった。

↳ 数時間前

「そこを歩く一団！止まれ！！」

馬に乗り甲冑を着た兵士が叫ぶ。

後ろには10人程度の同様の格好をしたものたちと
更にその背後にはメイジと思われる、マントを着けた男が二人、
それぞれ馬に乗って控えていた。

歩いていた一団の面々は、その光景を見た途端、絶望を顔に浮かべ
た。

「おまえたちはダングルテールの生き残りか？」

後ろに控えていたメイジの片方が前に出て言った。

その言葉に反応し、ますます彼らの表情は恐怖の色を強くした。

「待て、こちらに危害を加えるつもりはない。」

もう片方のメイジは腰にさしていた杖を近くにいた兵士に渡すことで
敵対の意志がないことを表現する。

「隊長！命令では・・・」

もう片方のメイジは言いかけるが、それを遮るかきとかのように

「いいからおまえも杖を置け。」

促した。

そのメイジは渋々従うかのように杖を兵士に渡す。
そしてさっきと同じ質問を繰り返した。

「おまえたちは、ダングルテールの生き残りか？」

しかし、彼らは黙ったまま動こうとしない。その背後では子供を抱え震える女性もいる。

「答えてくれ。でないと私はお前たちを殺さなければならない。」

隊長と思われるメイジが頼むように言うと、彼らの先頭にいた男が
そっだ。

と諦めたかのように言った。そして

「村を焼いたメイジたちは全滅した。」

隊長がこう言うと、一団の面々に動揺が走る。

その中で一人の少年がほんの少し笑みを浮かべたのを

「誰がやったか知らないか？」

隊長は見逃さなかった。

「その少年、君は知っているかい？」

そう言うと、男の一人が割り込んできた。

「頼む！話すから！！話すから息子だけは！！」

少年は見ていたのだ。

彼の拳がメイジの体を貫くところを。

彼が腕を振るうとメイジの体が切断されたのを。

村から離れ移動している最中に少年はそのことを父親に話していた。

そして

名前は、ナツメ

性別、男

白髪紅目

歳は13

正体は露見した。

村は焼かれ住民の大半は死んでしまったが、自分たちが今生きているのは
彼のおかげかも知れない。

そんな人間を裏切ってしまった。

6歳になる息子の方を見る。

もう疲れて足が棒になっているはずであるのに弱音も吐かずただ黙々と歩いている。

・・・彼の影響だろうか。

少年は彼を慕っていた。彼が鍛錬をしているときはいつもそばに行き真似をしていた。

その力にある種の憧れのようなものがあつたのかもしれない。

「父ちゃん。おれ、強くなる。ナツメみたいに強くなってみんなを守るんだ。」

少年の瞳には力が宿っていた。

調査隊は王都に向かって馬を進めていた。

「良かったんですか？見逃してしまつて。」

「上官命令だ。先ほどの生き残りは全員討ち滅ぼした。それが事実だ。」

副官の言葉に隊長が返す。心なしか下士官 平民 たちは嬉しそうだった。

「大体命令とはいえ、無抵抗の人間を殺せるか？私には難しい。」
できないと言わない。彼らは軍人であるのだから。

この隊長とその副官、貴族ではあるが所詮爵位も持てない下級貴族。今回のことには彼らに同情を覚えざるを得なかった。

そしてその頃、棗は

「ヨシエナベ？・・・ヨシエナベ・・・よしえなべ・・・よせ鍋
だと！？」

トリステインのとある村で故郷の思わせる味に舌鼓したつみを打っていた。

犯人の正体（後書き）

ついに対立フラグ。

読み返すと恥ずかしい！

話し始めると止まらない

佐々木武雄

歳は60半ばといったところだろうか。

髪は白く、顔にはしわが目立つ。

しかし、背筋はピンと伸びどこか迫力のあるその老人はそう名乗った。

・・・明らかに日本人。

「明らかに日本人。」

僕が、ぼそつと聞こえるか聞こえないかわからないほど小さな声で言ったにもかかわらずカッと目を見開き

「君は日本人を知っているのか？」

驚きの表情を見せた。

タルブ村

トリスタニアの南に位置するこの村は、広く見晴らしのいい草原が特徴的な

ブドウの栽培地で、ワイン作りが主な産業である。

ロマリアに向かってトリスタニアを出発してその日のうちに着いた。今はのケンの月（10月）半ば。

夏も終り気温も少し下がってきて冬支度が始まる時期である。

ブドウの収穫も丁度終わり、ワイン作りも始まっている。

素足でブドウを踏みつけ果汁を搾りだす作業が目立つ。

そんな中で彼も、家族総出で行っているであろう搾汁に精を出していた。

元々今日は村の教会に泊るつもりで、荷物を置いたあとその光景を眺めていたら
気づいた。

・・・黒髪の間が多い。

多いといっても村人の一部であり、ほとんどは赤毛だったり栗色だったり

『見慣れたもの』ばかりだったが。

そうしてぼつっと見ているとこちらに近づいてきたのだった。

「そういうあなたは日本人なんですか？」

この世界に来て警戒する癖がついてしまったのだろう。
僕は素直に答えずまるで交渉するかのよう聞き返した。

「ああ、そうだ。大日本帝国海軍少尉 佐々木武雄 それが私の名だ。」

日本人の名前が出ることは予想できていたが、その前の肩書に驚いた。

「海軍少尉？」

そのことにそうだ、といわんばかりにうなづいた。

「あの、ここじゃちょっとまずいんでそちらのお宅にお邪魔してもいいですか？」

僕はそう言って場所を移すことにした。

マジックアイテムの四角い黒ぶち眼鏡をかけた僕は現在金髪碧眼。
佐々木さん宅にお邪魔して戸を閉めて、眼鏡をはずす。

すると、元の白髪紅目の容姿に戻りもう一度、彼を驚かせることとなった。

「初めまして。僕は佐伯 棗と言います。
わかると思いますがあなたと同じ世界から来ました。」

僕の言葉をかみしめるかのように聞き、

「ああ、懐かしい。日本人の名前だ。」

自己紹介のあと、気が付いたらこの世界にいたこと、一年間ガリアにいたことなどを
傭兵だったことや力のこと体のことを伏せて話した。

「その年でひとり旅とは中々たくましい。」

・・・能力におんぶにだっこですが。

武雄さん（そう呼ぶことにした）は太平洋戦争の真つ最中、
任務で戦闘機を飛ばしていた所、不思議な光に包まれこっちに来たらしい。

・・・不思議な光。

その言葉に反応して言う。

「僕も一応知識として魔法の基礎を修めてますけど、心当たりはありませんね。」

・・・一方通行か、いや、でも待て。最近そんな話を・・・

「訂正。やっぱりありました。」

それからしばらく、武雄さんは口をパクパクとさせ、奇妙な沈黙が流れた。

ロマリアにそれに近い能力 地球の風景を覗く を持つらしい少年がいること。

僕は彼に会いに行くために現在旅をしていることを言うと

「君は元の世界に戻るつもりなのか？」

武雄さんはもう家族もできて、この地に愛着を持っているようだ。「のままこの世界に骨を埋める気であるようだ。」

「私はこつちの世界で長く生きすぎた。今更家族を捨て帰ることなどできない。」

しかし、とそう区切って

「せめて陛下に零戦だけはお返ししたいのだ。」

昭和天皇

戦前と戦後の大きな変化の中で、かなり苦勞したであろう人物。

僕の中での認識である。

戦前と戦時中では、最高権力者（神）としてかつぎだされ、戦後は戦後で人間化され

るものの四六時中人に見られているは、公務はやたら多いはと。

・・・ほんとうに苦勞なこつて。

僕は、日本が戦争に負けたこと、天皇が現在では国民の象徴として扱われていること

そしてその過程で日本が世界有数の先進国となったことを話した。

そしてその日の夜は、地球の科学技術の進歩や未だなくなならない世界各地の戦争について本当に一方的に喋りまくり

武雄さんは僕の話をも、時々質問をいれつつ黙って聞いていた。

翌日。

零戦を見せてもらうことにした。

草原の隅に寺？のようなものが見える。

中へ入るとかなり良い状態でそれは鎮座していた。

「すごい。雑誌なんかで見たことあるけど。それに・・・」

60年以上の年月がたっているとはとても思えない。

僕がそう言つと、武雄さんはいぶかしげに

「いや、私がこれに乗ってきたのは40年ほど前だぞ。」
時間旅行までしてた。

零戦はめいじによつて固定化をかけてもらっているようだった。

「君がもし日本に帰るつもりならこれも一緒に持っていてはくれな
いか？」

「うーん、そもそもヴィックには会おうとは思ってけど帰ることは
考えてなかったな。」

「そのヴィックというのは君の知り合いか何かなのか？」

「いいえ、全く。その子の母親なら知ってますけど。」

武雄さんは少し困惑したように言った。

「ならどうして？」

「いやね、ついこの間までちょっとダングルテール地方の村に滞在
してたんですけど」

そこが焼けちゃって。あ、ダングルテールってわかります？」

昨日から饒舌になった舌が止まらない。

「そこでお世話になったヴィットーリアさんというのが、
ヴィックの母親で僕は彼に彼女の手紙を届けようってわけです。」

「村が焼かれた？どうして？その子の母親は？」

僕と武雄さんの温度差が激しい。

「疫病の拡大防止という名目の異端狩り、ヴィットーリアさんが僕が看取って

亡くなりました。」

武雄さんの顔から表情が消え、

「でも酷いですヨネー。この命令出したのがなんとこの国の高等法院長。」

とどめを刺した。

この日もタルブ村に滞在することにした。

僕としてはまだ武雄さんに語り足りなく、その日の晩も

「でね、この2ちゃんねるっていうのが・・・」

「君は・・・」

話の途中でそう切り出してきた。

「君は、どうしてそんなに前を向いていられるんだ。」

届けると言った手紙もそうだ。子供一人でなんて無謀じゃないか。」

その言葉に僕は話を止め、ふう、と一息ついて言った。

「ダングルテールでヴィットーリアさんのお世話になってたことは話しましたよね。」

彼女、自分の息子置いて国を出ちゃったんですよ。」

「なっ！子供を・・・」

捨てるなんて。そう言いかけるのを僕はさえぎる。

「地球の歴史をある程度知っているならわかると思っんですけど、」

武雄さんが言葉をのむ。

「ハルケギニアの文化レベルって所々飛びぬけているけど大体中世ヨーロッパの範疇におさまってるでしょう。異端狩りがあるんです。」

そんな中で一人だけ他とは違う、それこそ異世界を覗く異能力なんて持ってたらどうなります?。」

武雄さんは少し考えると、気づいた。

「排除される、か」

「まあ、そんなわけでヴィックの力を彼女は恐れたわけです。」

「しかしそれだけでは君が動くことはないだろう。」

反論してくる。全部話すまでは納得しないようだ。

「手紙を書くきっかけを作ったの、僕なんです。」

彼女はまだ息子を愛してると言っていました。でも息子は手の届かない所にいる。

だったらせめて何か伝えろと。」

「それに彼女の最後の言葉を聞いているのも僕だけです。まあ最重要事項は

ヴィットーリアさんが美人だったってことですけど。」

武雄さんは最後の部分をスルーした。

「そうか。」

それ以上の追及をやみ、僕は更に続けてその老体から魂が抜けそうになるまで

続けて家の人に怒られた。

話し始めると止まらない(後書き)

タルブによらせるつもりなんてなかった。
つい思いつきでやったら止まれなかった。

話の節目

「おかしい。」

・・・僕ってこんなに饒舌だったかしら？

トリスティンとガリアの国境目指して街道を一人歩いている。

今朝、タルブ村を出発するときなんか

「^{なつめ}棗って女の子につける名前じゃないのか？」

というようなことを武雄さんに聞かれた時は、両親の命名エピソードを面白おかしく語ってしまったのだ。

「いつもなら、当たり障りなく、ノーコメントとか言うのに。」

・・・ほら、また。

いつもなら心の中で言うようなことをいちいち声に出している。

そう言いつつ、度が入っていない眼鏡のレンズが汚れていたのを、拭こう、とはずす。すると白髪の少し伸びた髪が視界の中に入るのがわかる。

・・・行きと違う道で帰るのは良くないな。もうじき冬だし。

眼鏡をかけて、金髪碧眼に。

「気温も下がってくるし。」

・・・ん？

「ん？」

眼鏡をはずして元に戻る。

・・・あれ？

今度は意識して眼鏡をかける。

・・・くっ！何だ？これは。頭の中で考えていることを無性に口に出したくなる。

眼鏡には副作用があった。

髪と眼の色を変えるのと同時に、頭の中で考えていることを口にしてしまうという。

副作用の効果のほどを理解すると、意識すれば衝動は抑えられる程度のものだった。

「厄介だ。」

ほらまた。

疲れるので眼鏡は外した。

そうして、国境まで数リーグという所まで来ただろうか。

行きはなかったトリスティンの百合の紋章がはいたテントと王軍の兵士らしき

甲冑を着た男たちが遠目で確認できる。

・・・何かあったのだろうか？

そのまま歩いて近づいていくと今度はこっちを見て何やら話し始めているようだった。

気になったのでその場で風を展開、盗み聞きしようと試みる。

「おい、あれって。」

「そうかもしれない・・・にあった・・・紅目・・・」

所々聞き取れなかったが、明らかに珍しいものを見ているような雰囲気じゃない。

僕はその二人の会話を少し聞いただけで横の林に飛び込んだ。

・・・何がばれた？

そう感じながら周囲を警戒する。

兵士たちは慌てた様子で追いかけてきた。

「おい、待て！」

典型的なセリフを言うその兵士はメイジであるようで杖を抜き火のメイジの典型

とも言える魔法を放ってきた。

”ファイヤーボール”

林の中とあつて、炎弾は木にぶつかりそのまま燃やす。

僕はそのまま検問のテントからそれるようにして、再び街道に出る。風の補助も使用してどんどんスピードを上げていく。

100km/h近く出ているかもしれない。

・・・国境を超えてしまえば！

両国の詰所には一応警備兵がいるのだ。

国境を越えてしまえば問題はない。

・・・ガリアまで手が伸びてなければだけど。

ガリアとトリステインが共謀して捕まえようとするならもう血濡れの惨状になることは

覚悟しなければならない。

・・・これだけ林が多ければ隠れて遠距離からけずればいい。

自分が痛いのは嫌だ。そう思って国境を越えた。

とりあえず行きに通行料を支払わなかったので金貨を一つかみ詰所の方に投げといた。

どうやらまいたようだ。

それにしても

・・・どこから洩れたんだろ？

誰が洩らしたか、などはもう関係なかった。とりあえず逃げるか、戦うしかないのだ。

・・・捕まったらどうなるかわからん。

ハルケギニアにおいては平民に人権などないも同然だ。特に僕みたいな人には。

あまり気乗りはしないものの再度、饒舌眼鏡をかけると金髪碧眼の黒ぶち眼鏡に変化する。

「くそっ！面倒なことになった。」

罪になる要素は明らかにダングルテールのあれだ。僕の力のことも

ばれたかもしれない。

「コルベールは裏切ったのだろうか？」

いや、それは無さそうだな。っと自問自答する。
あれほどの後悔を浮かべた表情をしていたのだ。
裏切ったら相当の役者である。

それよりも、今はだれが裏切ったかではなく、

「どれほどの情報がどこまで伝わっているか。」

竜騎士隊のような存在もあるし現代の地球ほどではないにしろ数週間もすれば

諸国に広めることもできる。

ダングルテールの虐殺がたとえ裏事情のものであるうこの件には始祖ブリミル様（笑）

がかかわっているのである。多少強引な手を使ってくるのは十分に予想が付く。

「僕とのつながりがある人たちは大丈夫だろうか。」

饒舌眼鏡のせいで独り言になる。

・・・もしかしたら、全部縁を切ることになるかもしれないな。

意識していないはずなのに言葉に出なかったことに疑問も抱くこともなく、街道を南下していった。

数日後のロマリア

宗教庁には一通の書状が極秘でトリスティンから風竜便で届いた。差出人はリツシユモン高等法院長。

その内容を見た聖堂議会の枢機卿は、すぐさま議会に提出。

緊急会議が開かれることとなった。

ロマリア宗教庁は腐敗している。

特に聖堂議会の多数を占める保守派が。

この保守派の威を借り各会（各部署）の神官が好き勝手し、それに
乗じて修道士も

また禁欲とは程遠い生活をしている。

このため、ロマリア宗教庁である聖堂の周りにはごみためめのようになり浮浪者たちが炊き出しの鍋に列を作っていた。

ダングルテールの新教徒は全滅に追い込んだものの、それを実行したメイジの小隊も皆殺しになっていた。そしてそれは単独犯によるもの。

名前は、ナツメ。容姿、白髪紅目。年齢、13。メイジか非メイジかは不明。

この腐敗の主たる原因の保守派が自分たちの脅威となりうる存在をそのままにしておくはずがない。

議会では特別な異端審問認可状が発行され

棗は新教徒に与する悪魔として『晴れて』異端者に指定された。

話の節目（後書き）

ちよつと強引だったかしら。

相変わらずねっ造多いな。

物語が動く前のつなぎ

特別異端審問認可状。

通常、ブリミル教の異端審問はロマリア宗教庁が各地の司教に異端審問認可状を発行し

その裁量は司教にゆだねられる。

その過程をすつ飛ばし、^{プロセス}問答無用で異端であることを突き付けてくるのが

この”特別異端審問認可状”である。

また、教皇に次ぐ聖堂議会で決定であるので

そう簡単にはくつがえることもなく、

ブリミル教の影響の強いこのハルケギニアにおいて

この認可状が発行されるのは実に数百年ぶりのことだった。

気配を殺し森の中を移動する。

時間は、午前。太陽はまだあまり高くない。

今はウインの月（12月）最初の週。気温も下がり動物たちの活動も大人しくなってきた。

現在僕は森の中で狩りの最中である。

ナイフを取り出し、構え、標的のイノシシの背後から息を殺し近づいて行く。

標的との距離が30mほどになり気づかれるか気付かれないかのギリギリのところであろうかと思った所で腰をおろして一息つく。

その直後、一気に加速する。

前方に体を倒し、足の裏では圧縮した空気を解放し爆発的な加速を得る。

イノシシは僕が一息ついた瞬間に気配に気づいたのであろう。慌てて逃げ始めた。

基本的に四足動物は足が速い。そのまま少し距離が開くがこちらにもさらに加速し再び距離を詰める。

そうして少し追いかけてこをしたところで僕はそのイノシシの上から飛びかかり

その脳天にナイフを突き立てた。

「ふう、大漁大漁と。」

そう言いながら仕留めたイノシシを引きずり歩く。

僕はトリステインの検問を突破し国境を越えた後ガリア王都リュテイスへ向かった。

王都に着くとすぐに名も無き傭兵団の拠点アシトに顔を出しに行ったのだが

「誰？」

あいさつの後、マールさんをはじめとする傭兵団の面々はこう返してきた。

じゅうぜつきんぱつへきがんかめがね
饒舌金髪碧眼化眼鏡をかけていたので

気がつかなかったらしい。眼鏡をはずすと久しぶりの再会を喜んだ。

そしてその夜

「ずいぶん早く戻ってきたじゃないか。」

団長のフランスさんがそう切り出し、僕はこれまでにあったことを話した。

・
・
ダングルテール、トリスタニア、新教徒、リッシュモン高等法院長

「このことがロマリアに知れれば最悪、僕は異端者です。」

僕がそう淡々と言つと

「置かれてる状況の割に軽いな、お前。」

・・・慌てても仕方ないのです。

「今回、戻ってきたのはちょっとみんなにお願いがあつてですね・・・」

異端ともなればその当事者だけでなく、その周りの人間にまで異端審問の手が及ぶ。

加えて、僕は王都の人達と深くかわりすぎた。

おそらくこの先、いや、確実にくると言つていい調査の手の対策として

王都の住民が話を聞かれたら僕が悪者になるような噂を流してほしい、と

なんで、と誰かが言つた気がするがそのまま続ける。

「今のブリミル教の排他的な傾向は、はっきり言つて異常です。まあ、後に

『ただし、腐敗している部分にかぎる』ぐらいは付きそうですけど。」

その腐敗している部分が多数派なのである。
少数派が勝つことが見込めないような。
そこまで言つと

「待つて。それじゃあ、あなたが」

ひとりになるじゃない。

マールさんはそう言った。その心配がちょっと嬉しかった。

その日は拠点マントに泊っていき、旅の途中の出来事をいろいろ話した。

そして現在狩りが終わったところ

ガリアを出国後、僕は海沿いのとあるブリミル教系列の孤児院に寝泊まりしていた。

「レジィ兄ちゃん、おかえり〜。」

子供たちが群がってくる。口々にでっけーやら獲物のイノシシをつかみ、

おもい〜と運ぶのを手伝おうとしてくれる。

・・・来た時とはえらい違いだな。

この孤児院についたのは2週間余り前のこと。

資金繰りが厳しい上に寄付まで止められてしまったらしい。

そのうえこれから気温も下がり冬も深まっていく。

このままでは年も越せず飢えてしまふところだった、というものだった。

その話を、ガリガリに痩せた神官と修道女から聞き、

僕は所持金を最低限の残し、大半を彼らに渡してしまった。

どうせ宗教庁につけば清貧を重んじる敬虔な信徒を演じなければならぬのだ。

持っけていても邪魔にしなければならない。

・・・それに

痩せてはいるが、少しばかり血色の良くなった子供たちを見る。

・・・飢えて苦しむ子供たちを見るのはちょっとね。

胸糞悪い。

そういうことがあって現在、

金髪碧眼の黒ぶち眼鏡の少年レイジイはイノシシを解体している。

・・・眼鏡の呪いにもだいが慣れてきた。

まだ、時々油断すると出てしまうが。

「最近、礼拝に来る信徒の方たちが妙なことをおっしゃるんですよ。」

なんでも悪魔が出たとか。

僕が夕食の準備を手伝っているときに修道女シスターがそんなことを言った。

「へえ、悪魔ですか。」

「ええ、なんでもその悪魔、白髪で紅い眼をして名前は何だったかしら。」

ナツメ、ええそうね。変わったたからよく覚えてるわ。」

.....

「あはっははは、いやだなあ。悪魔なんているわけないでしょ。シスターも人が悪いですねえ。」

..... やつべえ。

もう完全に異端が確定していたようだ。

..... 僕はレジイ僕はレジイ僕はレジイボクハレジイ。

演技を完璧なものにするため自己暗示をかけた。

夕食の席で

「偉大なる始祖ブリミルよ、
ささやかな糧をわれに与えたもうたことを感謝いたします。」

皆でテーブルを囲んで指をくみいつもの祈りの言葉を紡ぐ。
この日は疲れていたのだろう、日本にいたときの習慣が出てしまっ
た。

両手をパチンと合わせる動作とともに

「いただきます」

それをするともみんなの注目を集めてしまった。

「それは？」

誰かが言ったので慌てて答える。

「いや、そのっこれは僕の故郷の風習でしたまたま出ちゃったと
いうか。」

「いただきますーす。」

パチン。

子供達まで真似し始めた。

「どういった意味があるのですか？」

シスターがそう聞くとみんな一斉に手を止め僕の方を見てきた。

「はあ、えーと食べながらでいいんで適当に聞いてて下さい。」

料理が冷めるのはよろしくない。

そうして、食べ物になった者たちの命をもらうから”いただきます”と

「後、これは僕個人の考えですけど始祖は『魔法』や教えを後世に残しては

いますけど、やっぱり日々の糧は今言ったようにそのものの命にも感謝したほうがいいかなって。」

・・・あれ？これって異端の考え？
まずいこといったかな、と思ったが

「いただきます”いい言葉だな。」

神官さんはそう言った。

孤児院を出発する日になった。

さすがに寄付から食料調達、子供のお守りまでしていたこともあってそれはもうえらく感謝された。

「今のブリミル教はおかしなところもあるが、あなたのような信徒が増えれば

いつか必ず変わる。」

・・・それもカオスな方向にね。

神官さんの言葉に心の中で返す。

そしてお決まりの

「あなたの旅路に始祖のかごがあらんことを」

宗教庁を目指した。

物語が動く前のつなぎ（後書き）

早く、物語を進めたいがためにダイジェスト風味にしてしまった。

はあ、それにしても相変わらず妄想ばかり膨らんで文章にしづらい。

ブリミル教の勝手な脳内設定

教皇 > 聖堂議會、司教^{トレッ}枢機卿 > 枢機卿（議會）

|| 枢機卿（諸外国） > 司教（諸地域） > 神官 > 一般信徒

悪魔が敵地に乗り込んだ。

ロマリア大聖堂

またはフォルサテ大聖堂とも言うその建造物は、魔法の系統をつかさどる
ペンタゴン
五芒星の各頂点に塔を配置そしてその中心に巨大な塔がそびえ立っている。

ブリミル教の宗教庁を兼ねているその巨大な建造物、
ロマリアの城壁で囲まれた白石で作られた美しい町並み、

そして

騎士たちの炊き出し長蛇の列を作る浮浪者や、ぼろ布をまといガリガリに
やせ細った子供たち。

・・・狂ってる。

路上はごみためのごとく薄汚れた疲れた表情を見せる人々と
豪華に着飾り談笑しながら歩く神官。

その対比がこの都市の異様さを強調していた。

・・・見ていて気持ちのいいものじゃない。

さっさと終わらせて出て行きたい。

始祖ブリミルの弟子・フォルサテが興おこした国であるロマリア連合皇国
その中心地である宗教庁がある都市ロマリアにはその日の午前中に
ついた。

城壁内に入る際、ナイフやガントレットなどの武器の類は没収され
てしまった。

どうやらこの都市内では聖堂騎士を除く一般市民は武装禁止である
らしい。

異能力持ちとはいえ、丸腰にされてしまった時はちよつと心細くな
った。

中心部の大聖堂から都市の外側に向かって歩いて行くと
だんだんと浮浪者や汚物などが増えて行くように感じる。
どうやらきれいなのは中心部だけのようでハリボテの『光の国』を
実感した。

・・・暗いわ!!

道行く人々みーんな暗い表情なのだ。
こっちまで鬱うつになってくる。

結局その日は都市の外縁部の小さな寺院に泊ることになった。

「初めて見て、この町はどうでしたか？」

この寺院を運営する神官ペトロさんが僕に尋ねた。

「いやあ、大聖堂の迫力はすごいですね。白い町並みもきれいなものでしたし・・・」

語尾が自然と小さくなってしまふ。

「やはりあなたも感じてしまいましたか。ゆがみを」

・・・どうやら大丈夫なようだ。

案内されている間にも見ていたがこの寺院、礼拝堂のステンドグラスがちよつと豪華なぐらいで他は本当に質素そのもの。加えてペトロさんの着ている服も他の神官と比べると簡素なものだった。

「暗い気分にはなりませんでしたね。信徒には清貧や禁欲を説いているはずなのに自分たちはそれとは程遠い生活をしているような。」

中には少年趣味シムタコン、少女趣味シユウコンもいるようで、洗礼と称しているいろいろ強要するようなものもいるらしい。

・・・逆に罪犯してるよ。

ちなみにブリミル教で洗礼とは罪を洗い流す、というものらしい。この洗礼、結構大変な手順を踏まなければならないのだが最近では

金さえ払えば
洗礼を受けたことにする、ということまでやってるようだ。
もう滅茶苦茶。

「私もね、この現状をどうにかしたいと思ってロマリアに来たんだけど
どうにもうまくいなくてね。」

ペトロさんは先ほどとは変わり少し砕けた口調で、しかし少し影のある表情で言った。

保守派のやつかみを受けてこの区画に押し込められたそうくさつたやつらな。
これでもまだましな方で酷くなると左遷や破門まであるらしい。

「最近も新教徒に味方する悪魔が出たと、特別に異端審問認可状まで出たいうが本当に異端かどうかも怪しい。
教えに背いているのは自分たちの方ではないか！」

嘆きが伝わってくる。

「でも、ペトロさんみたいな人がいて良かった。
せつかく改宗までしてロマリアに来たのにこれじゃあ骨折り損になるところでしたよ。」

・・・この人の所にいれば動きやすそうだ。

この人に被害が及ばない程度には利用させてもらおう。

そう思いつつも元気づけるように言ってみる。

暗い雰囲気はぬぐえなかったがそれでも少し前向きになったようで

「そうだな、こうして真面目な信徒が一人増えたんだ。喜ばしいことじゃないか。」

・・・似非えせですけどね!!

敬虔な（笑）信徒（見習）生活がスタートした。

ロマリア聖堂騎士団

白いローブを纏まといユニコーンにまたがった姿が特徴的なこの騎士の集団は

ブリミル教の各宗派ごとに構成されている。

まあ、宗派や隊の構成なんかどうでもいい。

大事なのは、この聖堂騎士団、教皇と信仰のためなら死ぬまで戦う、
というのだ。

信仰にしても個人差がピンからキリまであるが、

遠目で見てもあまりやる気のなさそうな連中は見られない。

・・・是非ともお近づきにはなりたくないね。

なんせ、教皇が一言

「やれ」

たとえば、このいっぱいいるのが一斉に敵に回るのである。

寺院のお使いがてら、この考えに至ったときは冷や汗と鳥肌が凄いことになった。

・・・礼拝って便利。

現在、大聖堂近くの礼拝堂のステンドグラスの前の長椅子に座って、指をくみ目をつぶった状態でお祈り中。

とみせかけて実は風と同調し大聖堂内部を探索している。

さて、ウィックの搜索だがやはりここは能力に頼った盗み聞きが一番安全である。

一般人にはわからないしディテクトマジックによる逆探知の心配す

らないのだ。

しかし安全ではあっても安心はできなかった。
ばれる可能性がほとんどないと思っ
ていても、どこかに穴があるの
では？

と、ハラハラドキドキものである。

「・・・悪魔の出現・・・」

「きつと神の御裁きが・・・」

「不吉な容姿・・・」

・・・さつきから悪魔のことばっか。ヴィックはどこ？

数百年ぶりに特別異端審問認可状が発行されたのだ。
悪魔の話題で持ち切りなのも無理もない。

「新教徒と言えあの背信者は・・・」

廊下を歩く神官の一人がそう言った。

そこで意識を集中し、声の解像度をあげていく。

「さあ、しかしあの子も不憫だ。親がアレだから背信者の息子などと
噂を立てられて。まだ5つか6つになったばかりだろうに。」

「なんですか？あなたはあの背信者の肩を持つというのですか？」

・・・ああもう、そんな話はいいから居場所とか具体的なものを！！

さっさと見え。

と思っていると、神官たちの向い側から反応がひとつ。

・・・小さい。子供？

何か重いものを持っているのかその移動速度はゆっくりだった。そのことに気を取られていると

「おいっ、あれって」

神官の方がざわざわしだした。

・・・ああくそ！聞き逃した。

小さい反応に気を取られていた。しかし次の瞬間、

「アレが背信者の・・・」

「おやめなさい！」

いさめる声と同時に聞こえた。

・・・この小さい反応がヴィックなのか？

その後、この子供は書庫と思われる部屋に入ると動きが小さくなり移動するそぶりを見せなくなったのでそこで風との同調を切った。

「はあー」

目を見開き、組んでいた指を外しながら深く息をする。目の前には教会の神官と修道女が数人こちらを見て立っていた。

「あのどうかしたんですか？酷く険しい顔をなさっていましたか？」

修道女の一人が座ってる僕の前にはしゃがみこみ話しかけてきた。

「いえ、大丈夫です。お祈りをしてたら少し雑念が混じってしまいそれを振り払っていたのが顔に出ってしまったんでしょう」

もう冬だと言うのに額には少し汗がにじんでいた。

お騒がせしました、と席を立とうとする。

すると、いつもより長く風と同調していたせいか立ちくらみのようによろけてしまった。

252

「完全に大丈夫、というわけではないようです。少し休んでいきなさい」

「あははは。はあ……そうさせていただきます」

「それにしても感心なことです。あれほど熱心に、それこそ人が近くに来ても

気付かないほどの祈りを奉^ねげているとは」

・・・遠くに気を取られてましたから

修道女の方たちもうんうん納得するようにつなびている。

どうやら似非信徒の演技、うまくいきそうだ。

夕方、寺院に帰りながら考える。おそらくあの子供がヴィックなのだろう。

最近、風と同調にも慣れてきたのか、特定の一か所に絞れば精密な探査が可能になっていた。廊下から書庫と思われる部屋に入った時、

「……かあさま」

と泣きそうな、震えた小声で言ったのが印象に残った。

神官たちの会話から察するに周りからあまり良く思われていないようだ。

母親に捨てられ、周りは敵ではないにせよ味方はいない。そんなことを想像させてしまう一言だった。

・・・なにせよ、さつさと渡してしまうか。

手紙と炎のルビーのことを思い浮かべる。

現在の僕は悪魔なのだ。彼の友人となり心の隙間を埋めるなどできない。

まあ、悪魔でないにしてもそんなことやらないだろうが。

・・・そこところは始祖ブリミル様にまかせよう。ああ、それにしては面倒くさい。

後ちょっと。後ちょっとで終わり、と自分に言い聞かせる。

寺院への帰り道はゴミだらけだったが、
夕焼けの赤が白い町並みに映りとてもきれいだっ
た。

悪魔が敵地に乗り込んだ。(後書き)

ブリミル教の腐敗、ちよつとやりすぎだろうか？

キリスト教の中枢がこんなに腐った、なんて話聞いたことないし。

ブリミル教の設定についてはについては、カトリックと正教のほうから引つ張ってきてます。

悪魔が敵地で姿をさらした

「グイットーリオ・セレヴァレ、ね。」

一年ほど前、母親がこの国の秘宝『炎のルビー』を持ち出し逃亡。彼はその際、連れられるわけでもなくそのまま置き去りになった。表向きでは、ただ母親が自分の子供を捨て背信行為に走ったことになっっているが

その実、息子の力を怖れた母親がその力が使われないように秘宝とともに姿を眩くらます。

・・・といった所か。

あれから数日、町で盗み聞きやさりげなく会話に混ぜて聞いたところ得られた情報と

元々知っている情報を合わせるとこんなところである。

他にも宗教庁の方を探っては見たが、教皇が保守派によく思われていないだとか

時期教皇がどうか議会の議席数の話だとか、権力闘争の話と新教徒の悪魔の話ばかりだった。

前者はどうでもいいが後者は聞いてて生きた心地がしなかった。

「2ヶ月以内に国内の教会にお触れをいきわたらせる」

だとか

「年明けにはトリステインの教会にも悪魔の情報を浸透させる」
「それより悪魔を討ち取ったものに褒章を」

・・・勝手な。

さらに、ダングルテールはアルビオンの人間が入植した土地であるがそのアルビオンに新教徒が多く住んでいるらしい。そのうち担ぎ上げられたりしないだろうか。

嫌な考えばかり浮かんでくる。

「それより、」

・・・どうやって接触しよう？

ヴィックの生活圏はやはり大聖堂が中心。外に出てもそれは近くの礼拝堂で

夜は外に出ない。見習い信徒としての接触はほぼ無理。
位いやくをあげる、という手は時間がかかるしそんなに時間をかけてはいつ化けの皮がはがれるかわかったものではない。

現在、清貧で敬虔な信徒として、朝の礼拝（にみせかけた大聖堂の構造調査）、

炊き出しの手伝い、寺院の掃除などの雑用、
休憩時間の礼拝（にみせかけた神官たちの会話の盗み聞き）

などをしているが日中はずっと眼鏡をかけっぱなしなのである。
慣れはするものの時々はずしたくなる。

それに

少し、神経質になっているようだ。起きているときはもちろん、夜寝ているときもそこまで集中してはいないにしろ

しよつちゆう風と同調してしまう。それはもう幽体離脱かと錯覚してしまうぐらいに。

・・・いかげん疲れた。もう夜でいいや。

夜、ヴィットーリオの部屋に忍び込むことにした。

とそこまで考えがまとまった？所で

「おや、終わりましたか。」

どうやら僕に雑用を頼もうとしていたのか、一人の豪華な衣に身を包んだ

神官が近付いてくる。

「お待たせしてすみません。」

「いいえ、いいのです。あなたのその熱心な祈りも始祖の御耳に届くことでしょう。」

僕の言葉に神官がそう返す。

・・・そんなこと思ってもいなくせに。

祈りの最中の信徒を強引に呼びつけるようなことをしないでまし

だが。

「少し物を運ぶのを手伝ってほしいのです。」

はい！っと僕は元気な少年を演じた。

はく息が白い。

時刻は夜中の、地球で言うと午前1時ぐらいだろうか。

現在、大聖堂の外縁部の塔の一角のてっぺんで座り下で警戒中の衛兵を眺めている。

外縁部の塔と塔の間の通路に二人ずつ、

・・・その下は、まあ、見つかりにくいだろうし、

いいか、と。

目的の部屋の前まで一気に飛び降り、風で落ちるスピードを殺す。窓のふちを手でつかむと石の冷たさが手に伝わってきた。

・・・窓のかぎは閉まっている、なら・・・

隙間から意識を同調させた風を潜り込ませ、密度を上げた空気の塊を操作していく。

ガチャツ

・・・心臓に悪い音。

小さいながらも自己主張の激しい音。外気温も低いこともあっていつもより大きな音に聞こえた。

そうして部屋に侵入すると、

「誰ですか？」

一人の少年がベットから起き上がりこちらを向いていた。

ヴィットーリオの心は揺れていた。

信じていた母は自分をおいていつてしまったし

残された自分は、「背信者の息子」として後ろ指をさされている。

幼いながらも自分の力の異質さに気づいていたヴィットーリオは、母が

自分の力を恐れていたことも知っていた。

しかし、置いていかれるとは思ってもいなかった。

母が自分に向けていた愛は偽りのものだったのだろうか。
それとも・・・

そんな考えに行きつこうとすると自然と涙が出そうになる。
だが、そこは我慢しなければならぬ。

・・・あの人は背信者。信仰を誤った者。

自分が裏切り者の息子として後ろ指を指されないためにそう言い聞かせる。

母がいなくなった後、良くしてくださる神官が

「より一層信仰に励みなさい。神学を学びなさい。

そうすればあなたを見るそんな目も変わってくるでしょう。」
と。

その言葉を受け、今自分は一心不乱に神学を学んでいる。
後ろ指を指されないために。

それでも、数日前

「アレが背信者の・・・」

「おやめなさい！」

細部は聞こえなかったが、明らかに自分に向けられた言葉だった。

ヴィットーリオは優秀だった。

言葉を話すのも、文字を覚えるのも同年代に比べるとはるかに速かったし

加えて早熟でもあり、大人たちの会話も理解できるのだ。

しかし理解はできても『受け流す』ということができなかった。

いくら早熟と言っても、もうすぐ6歳になるうかという子供にそれができるはずもなく

久しぶりに聞いたその言葉を真正面から受け取ってしまった。

真正面から受け取ったその言葉の暴力は幼い少年の心を容易にえぐり、

その日の夜はベットの途中で声を殺して泣いた。

そして現在、

ガチャッ

窓が開くとそこには誰かがいた。

背信者の息子を殺しに来たのだろうか、まあ、

・・・それもいいか。

そんなことを考えてしまうほど彼の心は暗く沈んでいた。

「誰ですか？」

ベットから体を起こし、とりあえず、といった感じで言った。

月明かりが自分の顔を照らすのがわかる。

数瞬の硬直後、目の前の人物が男性だとわかり、その人物は口を開いた。

「モゲロ」

・・・は？

ベットの上で体を起こした少年は、ヴィットーリアさんにとてもよく似ていた。

線の細い体、恐ろしく整ったその顔立ちは一瞬女の子と見間違えてしまいそうな

もの、いや、女の子と言われてもわからないだろう。

育ち方を大きく間違わない限り、間違いなく将来はイケメソである。

それも『絶世の』がつきそうなほどの。
近い未来、キヤーキヤー言われるんだろうな。

だから、つい言ってしまった。

「モゲロ」

その発言の後、ヴィックと思われる少年は口を開けたまま呆然としていたが
すぐに気を取り戻したようで

「今の言葉はいつたい？」

叫んだりして助けを呼んだりする気がないようである。

・・・肝の座った子だな。

「いや、こつちの話だから気にしないで。」

そうして話をしようと少し近づいた。

すると、少し頭が回るようになったようで

「何の用です？人を呼びますよ。」

少し警戒するそぶりを見せた。

それに対し僕は炎のルビーと手紙の入った封筒を取り出し、見せる
ことで答えた。

「それは!?!」

驚きと困惑が混じったような声で言った。

「あんまり大きな声は出すな。聞こえちゃうでしょ。」

・・・ここまでしてきた根回しがパーになる。

そんなことを考えながら、

「君がヴィットーリオ・セレヴァレ?」

少年がうなづいたので僕は手紙と炎のルビーの指輪を床に置き引き下がることで

敵対の意志がないことを伝える。

「君のお母さまに頼まれてね。」

そのセリフにビクリとヴィットーリオの体のはねるのがわかった。

「少し前にお世話になってさ。まあ、いろいろあって届けに来たんだ。」

「母がどこにいるか、ご存じなんですか!?!」

少し声が大きくうわずっていたので、口元到人差し指を当て静かにするように促した。

「ダングルテール。そこに君のお母さまは居た。」

「それって、悪魔の・・・」

恐怖の入り混じった声だったがそのまま続けた。

「とりあえず、結論から言つと彼女は死んでしまったよ。」

「ッー！」

少年の顔から生気が失われたようだった。

「大丈夫？」

ヴィットーリオの頭に手を置きながら先を話していいか尋ねる。

時刻は夜中。部屋の前を見回りが通ることもあるがその頻度も少ない。

彼は、黙ってうなづき僕に続きを、と促した。

それから、彼女に世話になった一ヶ月のことを簡潔に話し、最後の日のこと詳しく

伝えた。特にその最後の言葉を。

「ヴィック、あーヴィットーリオって呼ぶのめんどいからヴィックって呼んでもいい？」

彼はうなづいて肯定したので続ける。

「確かに、君のお母さまは信仰、に関してはどうかわからないけど、まあこれはおいといて、

親としても間違ってしまったと思うよ。

でも、それを後悔してた。悔んだ結果がその手紙。」

「ねえ、ヴィック 君はお母さま好きか？」

首を縦に振る。

「君のお母さまもそう言った。」

その言葉に少し顔色が良くなったように見える。

・・・聡い子。

「最初は沈んだような感じだったけど少なくとも手紙を書く決めてからはまえむきになってたな。」

普通、母親、それも唯一の肉親が死んだのだ。ここまでとり乱さないのは早熟だけでは片づけられない。

そして、さりげなく

「あー、言い忘れてたけどダングルテールに出た悪魔って僕のことだから。」

くびをたてにふ」

信じられないものを見るようにこっちを凝視する。

僕は眼鏡をはずすと久しぶりに白髪紅目のその容姿を人前にさらした。

「信じられない？君のお母さまの最期を看取ったのは悪魔だって。」

「おまえがかあさまをころしたのか？」

震えるような声だった。

「いや、流石の僕でも敵地に、しかも自分が殺した人間の息子に会おうなんて

思わない。殺したのはトリスティンのアカデミー魔法研究所の実験小隊。」

命令を出したのは、リッシュモン高等法院長つと。

「ダングルテールが焼かれたのは新教徒がいたからって言うのは知れ渡ってるよね。」

「はい。」

今度はうなづくのではなく言葉で答える。

「新教徒っていつでも海岸沿いで力キを拾って日々の糧に満足しているような人たちだったよ。こっちで騒がれてるような悪評になるものは見なかったし。」

そして彼の方を向き言った。

「おそらく僕を悪魔に仕立て上げたのとリツシュモンに命令を出したのは同じ勢力にいる人たちだろうね。」

・・・5歳児にぼくは何いってんだろ？

「全く振り回されるこっちの身にもなってほしいよ。」

そこまで言うと、ヴィットーリオは下を向いて黙っていた。

「憎いのか？」

「いえ、悲しくなりました。」

母の死に対するものもあるだろうが他のもの　ブリミル教の腐敗に
対しても向けられた言葉のようだった。

「この先、またダングルテールのようなことが起こるのでしょうか？」

「まあ、アルビオンの新教徒と衝突すれば戦争にはなるだろうね。」

狭量な宗教は全くもって面倒なものだ。
そう思いながら、他人事のようにいった。

「あなたは、自分が当事者であるのにどうしてそんな自然体でいられるのです？」

「いろいろ巻き込まれているうちに一々慌てるのが面倒になりました。」

「悪魔だと言われて釈明しようとは思わないのですか？」

「釈明って。そもそも結構殺してるしダングルテールときだって小隊全滅は僕の仕業だし。」

自己防衛だけど、と付け加える。すると確認するかのよう

「罪であると認識しているのですか。」

「うーん、微妙。少し悪いかなとは思ったよ。こっちは生きていた、とはいえ

殺しは殺しだし。でも人間だって普段家畜を殺しているじゃない。」

「あなたが悪魔と言われるのもわかる気がします。」

「酷いね、こっちは何もしてこなければ基本的に不干渉なのに。」

先ほどの暗い雰囲気少し変わった。

「その行いが罪かそうでないかではありません。その考えそのものが今のブリミル教では、

特に旧保守派にとって都合が悪いのです。」

・・・達観しすぎ。ほんとにこの子5歳？

それに権力闘争についてももうすでにここまで理解している。母親が恐れるのも少しわかる気がする。

「まずは、この体制を改めなければ腐敗もなくならない。その腐敗の餌食となる人々も。」

もう、母の死を悲しむだけの少年の顔ではなかった。

「僕は信仰でこの国を、いえ、ハルケギニアを変えます。」

とても5歳児に言えるとは思えないその言葉にどれほどの決意が込められているのだろうか。

・・・悪魔に宣誓するなよ。

「君なら本当にやっちゃいそうだね。まあ、頑張ってくれ。」

「えっ、当事者なのに手伝ってくれないんですか？」

どうやら、肝心な部分は年相応（本気で悪魔を利用する気ならそれはもう仰天ものだが）らしい。

「いや、悪魔が協力してたらまずいでしょ。それにさっき国を変え
るって言ったの、
見ようによつては悪魔に宣誓してることになるよ。」
納得したのかうなづき始めた。

「そう言うわけだから、早くこの状況打開して僕がいたらだるできる
世界作ってね。」

窓に手をかけながらそう言つと、

「駄目な大人の思考ですね。」

「まだ13だよ。」

・・・さっきと性格違つよ？そつちが地？

こつして雑談は終わり、寺院に帰ることにした。

外を見ると、夜明けなのか少し明るくなり始めていた。

そのまま窓から飛び一気にまで上昇し、中央の塔のてっぺんにはり
つく。

丁度、日の出だったのか日の光がまぶしい。

しかし、何か妙だ。

そう思いながら大聖堂の外に着地するとすぐにその違和感の正体がわかった。

「な、あ、あああ悪魔だああ！！悪魔が出たぞー！」

眼鏡をかけ忘れていた。

ちなみに眼鏡はヴィットーリオが持っていた。

悪魔が敵地で姿をさらした（後書き）

次期教皇に接触。わかるかと思いますが次回は殺伐とする予定。

ヴィットーリオは原作では20前後で教皇になっていきますのでやっぱり普通の人間とは隔絶したものを持っている、ということとで幼少期からすごい優秀ということに

はあ、今日はもう書かない予定だったのに、指が止まらなかった。

一人の子供におとなげない

うれしい

ヴィットーリオは嬉しかった。

確かに母の死は自分をどん底に落とすほどの悲しみを与えたがそれでも母の愛が偽りでなく本物であったことがこの上なく嬉しかった。

そして彼、ナツメは母の最期を看取り濡れ衣？を着せられたにもかかわらず

自分に母の言葉と指輪を届けに命の危険を承知で単身乗り込んで聞きてくれたのだ。

悪魔などと呼ばれてはいるが、自分の中は母の言葉による嬉しさと彼への感謝の気持ちでいっぱいだった。

ふと、視線をずらすと彼がかけていた眼鏡が机の上に置いてあるのが見える。

もう会うことはないであろう恩人の忘れものだ。

その黒ぶち眼鏡を手にとってみると永い間つけていたのか所々傷が入っている。

今日の出来事を忘れないためにも大事に仕舞っておくことにした。

そしてもう一度ベットに入り、受け取った手紙を眺め

悲しさと嬉しさが入り混じった複雑な気持ちを抱きつつもう一度目を瞑る。

・・・もう今日は眠れないな。

彼にこの世界を変えると啖呵を切ったせいaka少しばかりの興奮を覚える。

彼は一部の人間の保身のための生贄いけにえにされたのだ。

それも、その一部というのが自分たちが信仰する教えを説く者たちの頂点にいる。

今のブリミル教はこの宗教庁の中だけみてもこの有様だ。

これを変えとなると相当の労力と時間を要する。

それに

・・・一人では無理だ。

味方を作らなければ。

幸い、少数ではあるが現状を憂いている者もいるのだ。

教皇もその一人であるのだが聖堂議会の旧保守派には強く出ることが出来るほど

影響力は強くない。

ブリミル教の教皇に選ばれる条件とは

男子のブリミル教信徒、というだけでいい。

そして教皇はロマリア周辺に住む神官や聖堂議会の投票によって決まる。

しかし、魔法偏重が常識のハルケギニアでは非メイジが教皇に選ばれたことはない。

また、様々な政治的思惑が絡むので貴族から輩出されることが多く
平民から当選

なんてことは極めて稀なことである。

・・・それでも誰かがやらなければならない。僕が、いや僕でなくてもいい。

志こころざしを同じくする人なら。

達観しすぎたその少年には強い決意があった。

それから少しして

外でけたたましく鐘が鳴っていた。

・・・あー、バレちゃった。

現在、上空1000メートル程度から都市を見降ろしている。

・・・いきなり叫ぶんだもんなあ。

やたら悪魔悪魔と叫ぶものだから風の刃で頭を切り飛ばしたのだが伝令もすさまじく早く、次の瞬間、警報の鐘が町中に響いた。そして大聖堂の詰め所からわらわらと出てくるものだから風を纏って飛び上り上空へ避難した。

深夜の間ずっと話しこんでいたのに緊張感と冷や汗で意識がさえてくる。

飛び上がる瞬間、杖を使わなかったのは見られてしまっているだろう。

衛兵の驚く顔が思い出される。

市街地に風の探査を張り巡らせると聖堂騎士や衛兵やらが騒いでいるのがわかった。

ここ数ヶ月、特にこのロマリアで過剰として制御のレベルも上がっていた

せいもあつたのだろう、会話まではつきり聞こえた。

この神聖な場所に入り込んでくるとは、神をも恐れぬ冒険行為。

出会いがしらに殺すとはやはり悪魔。一刻も早く討たねば。

杖を使わずに魔法を行使していた。

聖戦を発動すべきだ。

聞いてていい気持ちがないどころか命の危険も

この世界に来て以来最も大きなものを感じる。

・・・早く逃げなくては。

そうしてガリアとの国境を目指して飛び始めた。

早朝

ロマリア大聖堂の一室、聖堂議会の会議室では緊急の召集がかけられた議員たちが集まっていた。

中には焦りや恐怖を顔に浮かべたもの、やかましく騒いでいるものもいた。

そのほとんどが旧保守派の議員であり、それとは対照的に改革派や中立派は

この事態を重く受け止めつつも落ち着いたものだった。

まあ、それもそのはず。

つい先日、悪魔に仕立て上げた人間がこれほど早くこのロマリア、しかもこの宗教庁にまで来ていたのだ。

素を生贄にした旧保守派の者たちが自分たちを殺しに来たと思うのも当然の反応である。

「即刻、討伐隊を結成し悪魔を討つべきです！」

「落ち着きなさい。現場も混乱しているのです。まずは情報収集、町の安全を確認」

してから・・・」

「それでは逃げられてしまいますぞ！そのことで始祖の名に傷が付いてしまったら
どう責任を取るおつもりか！？」

始祖の名、じゃなくて旧保守派おまえらの保身のためだろう。

そう言いたそうな顔をする者の少数派であるこの中立派の議員は
そう強く出ることではできなかった。

「教皇、ご決断を。」

一人の発言に保守派の無言の圧力の目を向ける。

大勢の脅すような視線にさらされた教皇はたじろぐそぶりを見せ

「討伐隊を、結成する。」

保守派の議員はひとまず安心というような表情を見せ、それに属さないものたちは
またか、というような疲れた顔をしていた。

・・・疲れた。

あれから二時間ほど飛んだらうかロマリアから400リーグほど離れた

街の宿のベットに突っ伏していた。

泊まる際には黒いローブを目深くかぶり主人にはチップを握らせ誰にも知らせないようにと。

・・・物分かりのいい人で助かった。

宿の主人は僕が件の悪魔であることに気づいていたようだが何も言わず

部屋まで案内してくれた。案外脅されたと勘違いしているかもしれないが。

このご時世、悪魔が泊まった宿と知れば取りつぶしか、そうでなくとも噂で客足が遠のき自然消滅なんてことが普通である。

「がんばれよ。」

にもかかわらず宿屋の主人は小声でそう言った。

そう言わせてしまうほど神官や修道士はこの国で好き勝手している人の少ない辺境に行けばそういう傾向もあまり見られないが、人の多い街では

それはもう、お布施を必要以上に要求するは拒否すれば神の裁きがどうか。

主人は僕に親指を立てて少し笑い、宿のカウンターに戻って行った。

・・・とりあえず今日は安心して寝れそう。

食事をしっかりとったこともあって満腹感が眠気を強くする。
その日はもう目が覚めることはなかった。

国境まで直線距離であと約400リーグ。

前日距離を稼いでいたこともあって、竜でも使ってこない限り
追いつかれることはないだろう。加えて竜は捕まえて従えるのも難
しく

その上維持にコストがかかる。

ロマリアでも火竜や風竜もいたが竜騎士の育成より

ハラティン
聖堂騎士の賛美歌詠唱と呼ばれる合体魔法の訓練が盛んにおこなわ
れている。

・・・確かに威力は高かったけど・・・

時間かかりすぎ。

賛美歌詠唱の成立条件は、騎士団の連携が命である。

訓練風景では一列に並んで詠唱を開始していたことから、前衛に守
られていることが

前提であり個人に対して使うものでなく広範囲にマップ兵器として
使うものだと容易に

想像がつく。

それにメイジが使う系統魔法と僕が扱う精霊魔術では射程が段違い
なのだ。

鉢合わせにでもならなければ遠くからネチネチ削れば良いのである。

そういうわけで戦況を分析したら少し気が楽になった。

疲れも取れ軽くなった足取りで歩を進める。

先ほど街で有り金はたいて買ったズタ袋に保存食やら防寒着を詰め込み肩から下げている。

冬であるせいか、雪もちらほら見えだした。

・・・国境沿いの山に行ったらすごそうだな。

火竜山脈

地球で言う所のアルプスとピレネーを合体させたような山脈。

ガリアとロマリアの自然国境的役割を果たし、冬は豪雪地帯故、通行は不可能となる。

加えて名前の通り火竜をはじめオオカミ、クマなど獰猛な生物が生息することでも

有名である。ちなみにオオカミやクマのサイズは地球の比ではない。

おそらく追いつめるとすれば国境が一番妥当だろう。

雪山で疲れたところを捕まえるか殺すか。

・・・雪山はスキーに言った以来か。

思い出に浸りだす。

・・・猛吹雪の中ペンションに戻った時の熱いコーヒーは最高だったな。

夕食のシチューもうまかったし。

もうなんかこいつ二言目には食い物なのか。

そんなことを考えていると後方から気配がした。

・・・速い。竜か？

その方向へ意識を向けると、どうやら斥候なのか風竜騎が一体空を飛んでいた。

捜しているのはおそらく僕だろう。

ロマリア特有の白いマントが見えた。

・・・油断してる。

ここは攻撃に移るより、木の陰に隠れてやり過ごすことにする。

どうやら気づいていないようでそのまま山の方へ飛び去って行った。

はあー。

心臓に良くない。

何度か経験しているはずなのに未だ慣れないこの感覚に深く息を吐きながら

うんざりする。

ホント、お願いだからもう追いかけてこないでほしい。

山脈の方を眺めてみると上の方に雲がかかっている。

火竜山脈の情報が書面通りのものなら冬である今、国境を越える方法は

雲よりも高い高度を飛んで行く、

無理やり突っ切る、

迂回して海を越える、

といったところだろう。

一つ目、酸素の薄い高所での活動が不確定要素。強化されているこの体で乗り切れるかは微妙。

二つ目、冬の雪山をなめたら死ぬ。ただしロマリアで討伐隊が編成されているならばここで迎え撃つのが最も有効。

三つ目、おそらく一番妥当で生存率が高いと思われる。時間がかかるので追いつかれる

可能性があるが。

「三つ目かなあ。とりあえずふもとの町についてから決めよう。」
と言っていた所でさっきの竜騎が戻ってきた。

・・・丁度いい。

そうして竜騎の前方に大気の壁を作り出す。

それに風竜の方が気付いたようで方向転換しようとするが、そこで大気の壁を解放、
圧縮された空気が一気に流れ出し暴風を作り出した。

竜の方はその風に少し翼を取られるがなんとか持ち直そうともがきだし、
その揺れに耐えられなくなったのか乗っていた竜騎士は振り落とされた。

墜落現場に行くと

ロマリア特有の白いマント、そして着ている軽鎧には赤い筋の紋様が描かれていた。

またこの竜騎士、メイジでもあるようだ。竜の方がメインなのか杖は短杖タクトで
僕はそれを取り上げ折つといた。

ぺちぺち

頬を叩いて起こそうとするもなかなか起きない。本当にお前兵士か？

ばちーん

そんな擬音が似合いそうなくらい思いつきりぶつたたくとようやく目が覚めたようで

「き、貴様はなにも……」

途中で言葉を失いだらしなく口を開けている。

「どうも、あなたたちが勝手に悪魔と呼んでいるものです。」

少し皮肉ったように言い放つ。

「そちらの質問は受け付けない。殺されたくなければこちらの質問に答える。」

「誰が、悪魔の言うことなど・・・」

ゴオツ！

彼の腕すれすれに風の刃を通過させた。地面はえぐれ近くの木の幹がずれていく。

「答えてくれれば見逃す。絶対に。始祖には誓えないけど僕の信じるものに誓って。」

・・・そう言えば僕って何か信じてるものってあったっけ？

細かいことは気にしない。

そう言つと、竜騎士の男はうなづいた。

「まず、悪魔の討伐隊は結成されたか、されたならその編成と大体の現在地。」

言いながら男を見つめる。
すると諦めたかのように

「討伐隊は昨日結成された。数は竜騎士20、非メイジの兵士80
0、聖堂騎士
200」

・・・一人に対してOver Killすぎだろ！！

「多いね。」

「多いな。」

「僕死ぬね。」

「ほぼ確実にな。」

そのやり取りに竜騎士は正気を取り戻した。

「上からの命令とは言えお前のような子供？いやさっきの先住魔法
を見る限り・・・」

すぐ混乱しだした。

「要するに嫌な上司が多くて困ってるんですね。お互い大変だ。」

僕の方が大変だけど。

「そう思っならさっさと捕まってくれ。こっちは朝からずっと竜を
乗り回して
クタクタだ。」

どうやらこの人あまりやる気のある人じゃないらしい。戦意もあまり感じられない。

始祖の名のもとに〜なんて言われたらそのまま首をはねる結果になってただろうが。

「いやです。あ、この後戦闘になってあった場合は容赦しませんので。」

「いやいや、約束は？誓いは？」

「有効期間はあなたが僕の視界から消えるまでです。」

何を言ってるんだ。戦場で人の気遣いなんてできるわけない。

「はー、まあいいか。おれ斥候だし。報告終わればもう仕事終わりだし。」

あーでも竜騎士はなるべく殺さないでほしいかも。」

・・・難しい注文。

同僚の心配はするらしい。

「前向きに検討します。あくまで前向きに、ですが。」

そこまで言つと彼の乗っていた風竜が飛んできた。

乗り手である彼を捜しに来るあたり両者の関係は良好なものようだ。

竜が飛び去るとあたりは葉の落ちた木と落ち葉の積もった寂しい雰囲気に戻る。

敵をどうやってまくか、もしくはどうにかして行動不能にし逃げる時間を稼ぐか。

・・・もうブリミル教嫌い。

一人の人間に対してオーバークイルな戦力を投入してくるあたり向こうも相当

焦っているのだろう。全く過剰評価はやめてほしい。

そう独り言っていると空から冷たい粒がふわふわ落ちてきた。

「雪か。」

現在年末。

このままいくと、年明けの『始祖の降臨祭』が

『血濡れの降臨祭』になるか可能性もある。

そうしている凶悪に脚色されていくのだ。

まあ、生き残ればの話だが。

・・・悪魔の降臨祭目指して頑張ろうと。

冗談混じりにそう思いながら国境のふもとを目指した。

一人の子供におとなげない（後書き）

殺伐とさせる予定だったのにその展開にまでもっていくまで引つ張ってしまった。

雪景色って素晴らしい

窓の外には白い景色が広がっている。

吹雪とともに。

もう白いどころか日の光もほとんど見えず薄暗かった。
ただじっと待つしかない。

ロマリアを出てからすでに一週間。

・・・そろそろまずいかも。

人間の体力から考えると

討伐隊の行軍速度は最大でも一日7〜80リーグが限界だろう。

・・・あの竜騎士逃がしたのは間違いだったか。

二日目の時点での僕の位置は確実に向こうに知れているはずである。
となるとその行軍速度を埋めるために船舶を使って来るはずだ。
おそらく今日か明日にでも討伐隊には追い付かれる。
やはり嘘についてでもやっておくべきだったか。

・・・というのに僕はもう4日もここに足止めと。

現在、山脈の中腹の無人の山小屋で吹雪が止むのを待っていた。

二日目に山脈のふもつについたまでは良かった。

準備もしておいたので町の人からは『天候が崩れなければ』大丈夫だろうとも言われたのだが、

・・・まさか初日から崩れるとは。

三日目の午後から急に雲が出だし、大雪になった。

それに加えて風もすごい。

同調してこの強風を制御しながら進もうとしたのだが3時間ほどしたところで

精気のほとんどを吸われふらふらの状態でようやくこの山小屋を見つけたのだ。

そして4日目の今、吹雪は弱まってきており、また事態も切迫しているのです。

ある程度天気が収まったら一気に抜けるつもりでした。

・・・とりあえず精気は満タン。心もとないのは食料と下山した後の現金だけ。

休んだせいか体の調子はいいのだが、こうもずっと室内に閉じこもっているとは

体の節々がこる。

そうしながら体を動かしているうちに数時間が過ぎ、吹雪はおさまり移動を再開した。

・・・新雪は柔らかくて進みにくい。

雪に足を取られつつも歩を進める。

雪で道はほとんど埋まってしまいかろうじてわかる程度である。

天候はまだ完全に回復したわけではなく、視界は数十メートル先で途絶えている。

討伐軍の対策として風と同調し周囲を探るべきなのだが、またいつ
天気が

崩れるかわからない。吹雪の対策として精気たிரியくをとっておこうと
考えていた所で、

「我が名はニコラス・ボツカーニ！悪魔討伐隊隊長にして……………」

┌

声が出たほうに意識を向けると同時に風と同調、

声を発した人物の首もとに風の刃を発生させ、

ストン。

その首は落ち、切り口からは紅い噴水が上がる。

もう捕まれば死刑執行確定。なりふり構わず先手必勝である。

幸い隊長と思しき人物が勝手に名乗ってくれたので

ここで殺してしまえば指揮系統は確実に乱れる。

「こ、攻撃してきたぞ！」

「名乗り終わる前に……」

期待通りの反応でひるんでいるすきに特大の範囲攻撃の準備を始める。

「ひるむな！相手はたかが一人！我らには向かうことは始祖には向かうも同然。

異端者を殺せ！！」

副官らしき聖堂騎士が叫ぶと隊列が戻り始め歩兵が前に、後方では聖堂騎士団が賛美歌詠唱の準備に入った。

……馬鹿で助かった。

準備に入った時点で頭上には巨大なそれこそ災害レベルと云っていい竜巻が渦巻いていた。

そして某宇宙の帝王様のごとく人差し指をクイツと前に倒すと

轟音とともに竜巻が地面にあたり地面を抉り、討伐隊を巻き込みながら進み始めた。

悪魔討伐隊 副隊長

悪魔。

それは始祖に仇為すもの。

我らの同胞を殺して回り世界を恐怖に陥れる存在。

今、我らはそれと対峙している。

聖堂議会の方々もこの状況を憂い討伐隊に素晴らしい戦力をそろえてくださった。

悪魔がすさまじい速度で移動しているという情報が入ったときも、即決、議員の方

自ら資金を出し船の手配まで。

このご英断の答えるためにも我らは、悪魔を確実に討たねばならない。

ニコラス隊長が隊の一步前に進み

「我が名はニコラス・ボツカーニ！悪魔討伐隊隊長にして……」

そこまで言っただけ彼の首からは鮮血が飛び散った。

な、なんだと……

確かにこれは悪魔の所業だ。我らに逆らうどころか名乗る前に攻撃してくるなど。

子供の姿をしているがこれはきつと姿を変えているに違いない。

「ひるむな！相手はたかが一人！我らには向かうことは始祖には向かうも同然。

異端者を殺せ！！」

崩れかけた指揮系統を立て直させ悪魔に攻撃を開始した。

我らには向かうということは始祖を冒瀆する行為に等しい！万死に値する！

そう思った所で地響きとともに吹き飛ばされた。

「おー良く飛ぶ良く飛ぶ。」

竜巻から逃れた人間を片っ端から風の刃で切り刻んでいく。

地面には吹き飛ばされて呻いている人間や剣や槍、弓などが転がっている。

・・・弓矢の一斉掃射は考えてなかった。

大量の矢をこの足場でよけきるのは不可能だ。自然と風を防御に回すようになる。

そのすきに賛美歌詠唱を完成させられ……

……ホント馬鹿で助かった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そんなことを考えていると

遠く上の方から大きな地鳴りとともに地面に軽い揺れを感じた。振り向くと、

……あーなるほど。

考えてなかった。

雪崩である。

新雪で柔らかく、ここ数日の大雪で一気に積もったのだ。

まだ雪同士の結果が緩い時に、さっきの竜巻による衝撃である。

雪崩は巨大な雪煙と爆風を伴い、木々をなぎ倒しながらすさまじい速度で迫ってくる。

もうすべてを飲み込むとか、そういうレベルでなく城とか軽く破壊できそうだった。

雪崩と竜巻。

勝利を確信し雪崩をよけるべく上空に飛んだ。

眼下では竜巻に吹き飛ばれた者もそうでない者も、雪崩が容赦なく呑み込んでいく。少数ではあるがメイジの中には『フライ』で上空に離脱する者もいた。

「まさに『人がゴミのようだ』」

上空の風はまだ安定しておらず、山の方から冷たい風が吹き下ろしてくる。

勢いが強く制御が難しい。

竜巻で精気を取られすぎたせいか、少し疲れを感じ地表に下りた。

・・・天候に助けられた。

上空の風は強く竜が飛べる状態ではなかった。

戦力の一部が最初から不参加だった事も幸いし、恐れていたオーバークルな戦力はことのほかすぐに片付いてしまった。

・・・後は、残りものを

始末するだけ。

宗教庁ロマシアにいずれ知れ渡るだろうが、こっちが確実に逃げ伸びるには今ここで返すわけにはいかない。

雪煙を吹き飛ばし逃れたものを捜す。

「神をも恐れぬ異端者め！この裁きは・・・」

「悪魔に裁きを・・・」

逃れた聖堂騎士^{パラディン}たちはいろいろ言っていたが疲れていたので聞く気にも
ならず流れ作業をするかのように首をはねていく。
中には

「始祖の名のもとに！」

と魔法を放ってくる者もいて、狂信者がいかに異教徒にとって危険か
まざまざと見せつけられた。

その場で座り込み
あたりを見回すと白い雪原と所々に赤い色がしみのようにぽつりぽ
つりと見える。

・・・この下に埋まってるのか。

雪崩で埋まってしまってから既に30分は経過している。
全員窒息して生きているものはいないだろう。

冷たい空気が静かな雰囲気強調していた。

結果から言うと火竜山脈は越えられた。

山脈の反対側の雪はそれほどすぐくはなく道程もスムーズで国境は
悪魔のお触れを

警戒していたが見つからずの越えることができた。
雲が晴れて天気が回復してくる。

久しぶりに見た青い空は先日の死屍累々の戦闘（といってもこっちはほぼ無傷だったか）の緊張感を忘れさせた。

「腹減った」

考えるのも面倒くさかった。

殺した人間のこと、異端に指定されて居場所がないこと。とりあえず、どうにかしてこの空腹を紛らわしたい。

・・・考えるのはそれからにしたい。

殺した聖堂騎士から金を奪っていたのでしばらくは大丈夫だ。ただし、表で生活するならば。

現在、悪魔である僕の生活基盤は確実に裏でしか作れない。

・・・新事業開拓しないと。

不安ばかり浮かぶ。

空腹は良くない。考えが後ろ向きになってくる。

腹ごしらえをすべく人里を目指そうと自然と歩調が速くなった。

見逃された竜騎士

理解できなかった。目の前の光景が。

白い雪原に飛び散った血がその異様さと同時にある種の美しさを醸かもし出していた

。

悪魔討伐隊は悪天候で竜騎士は出れなかったにしろ数にして約1000。

そのうちメイジは2000以上いたのだ。

天候も回復し、もう終わっているであろう悪魔討伐の報告を受け取りに行くだけだと思っていた。

目の前には確かに冷たくなった死体が十数体。しかし圧倒的に数が足りない。ふもとにいたときに聞いた地響きと言い、本当に奴は悪魔なのかもしれない。

上の命令で討伐隊を出すときは辟易したものだが、確かに思い当たる節があった。

偵察に出ていた時は気が付いたら竜から振り落とされ、目が覚めると奴に尋問されていた。

情報を聞き出した時、確かに奴は怯えていたのだ。

しかしふたを開けてみればほとんどの死体は行方不明。
おそらく地響きの正体は大規模な雪崩が起こったせいだろう。

・・・すると死体はこの雪の下？

しかし災害を操る魔法など聞いたことがない。
いや、確か奴は俺から情報を引き出すとき、しゃべれば見逃すと言った。

そして、竜騎士隊も見逃してほしいと言ったらしぶしぶとではあったが了承したのだ。

「まさか、この天気も？」

「おい、どうしたんだ。」

俺の様子が変に映ったのか同僚の騎士が声をかけてきた。

「いやすまない。なんでもないんだ。」

・・・やめようかな。この仕事。

竜を操る腕なら自信はあるのだ。今の風竜あせいぼつと別れるのは少々さびしい気もす

るが、一度、もしかしたら二度拾った命だ。惜しくもなる。

・・・宗教庁えいしゅうはとんでもない化け物を敵に回したのかもしれない。

とりあえず信頼できる同僚にはこのことを教えておこう。もちろん他言無用で。

悪魔は自分を売った者には容赦しないのだから。

雪景色って素晴らしい(後書き)

今回の殺伐とした話はとりあえずここで終了。

次回からはほのぼのとはしなくても少し平和にいきたい。

上には上がいるもの

どうも、ナツメです。

悪魔ということが周知のことになってから2年とちょっと経ち、16歳になりました。ガリアにはもう住めません。正確にはガリアの町や村落にですが。酒場と傭兵ギルド、教会には必ずと言っていいほど悪魔に関する情報の張り紙があります。

『悪魔を倒したものには教皇より勇者イーヴアルデイの称号を授ける』

この期に及んで資金の出し渋りなのか、褒章は称号のみの授与です。まあ、こちらとしても傭兵などを焚きつけられていない状況は助かりますが。

悪魔に関するうわさもいろいろ脚色されているようです。

例をあげると、姿を見せず気が付いたらやられている、必ず皆殺しにする、竜巻や雪崩を起こし天候まで操る、など。

これらの噂は王都リュティスの闇市で手に入れたものなので民衆がどう思っているかは

わかりませんが少なくとも好意的なものでないことは確かです。

小さな男の子が

「悪魔を倒して勇者になるんだ！」

というようなことを言っているのを横目で見た時はちょっと傷つき
ました。

・・・洗脳って怖い。全く宗教庁め、面倒なことを。

現在、火竜山脈の中腹の掘立小屋に滞在中。

付近には、サラマンダーやらグリズリーなんかが生息していて結構
危ない。

少し奥に入って行けば火竜の群れの縄張りなんかもある。

また、火竜山脈には活火山も点在し僕がいる場所も時々火山活動で
結構揺れる。

まあ、しかし、火山ということは温泉もあるということ歩き回っ
ていたら

グリズリーの一団が温泉につかって

まったりしているというシユールな光景に出会った。

なごむなー、と眺めていたら襲われたけど。

そして、今山脈の中にある活火山のうちの一つの火口に向かって歩
いている。

なんでそんな所に、なんて言いたいかもしれないがこの辺一帯を縄
張り

している連中の頭ヘッドに当たる存在に会いに行くためである。

僕がこの危険極まりない山の中で枕を高くして寝ていられるのも彼？のおかげである。

「ふうー、あちい。」

だんだん火口に近づくと周囲の温度も上がってくる。

風と同調して、彼？の存在を捜す。

ここ2年で温度が高い時での風との同調のコツがつかめていたのですぐに見つかった。

「来たか。」

低い重低音の頭に響くような声がする。息をするたびに熱い空気がこっちに流れる。

・・・相変わらず、火傷じゃ済まない息の熱さ。

風でその息をいなしながら応えた。

「来たか。じゃなくつてもうちよつとしたの方まで出て来て下さいよ。」

こっちはここに来る度にこのくそ熱い所で火傷しそうになるんですから。」

目の前の存在は圧倒的だった。

赤く光沢のある硬い鱗におおわれた巨大な体躯、胴からは一對の翼と四本の脚、

と長い尾が生え、太い首の先についている頭には

4本の角、そして鋭く生えそろうた牙。

なによりおかしいのが頭からしっぽまで入れた全長が100メートル

近くある、
ということだった。

ドラゴン

まさにドラゴン、という感想しか思い浮かばなかった。
自分がこの前見ていたものは唯のトカゲ、そんなことを思わせるその存在は

「ほう、そのような小さな体でよくそんな口が訊けたものだな。」
目の右足を振り上げてきた。

「すみませんでしたー！」

あまりの重量感に圧倒されてしまい土下座を即行してしまった。

「情けない。本当に前が私に傷をつけたのか？」

彼？との出会いは僕が温泉さがしでこの山をうろつろしているときだった。

丁度グリズリーの入浴を覗いて和んでいるときだった。
しばらくその場で座り込んでいると急に周囲に影がかかる。
雲が通過したのかなー、と上空を見たら彼？が空を飛んでいた。
討伐隊との戦闘もあって精神的な疲れもあったのだろう。

癒しばかり求めていたら、こんな巨大な生物を見逃してしまうほど油断してしまっていたようだ。

まあ、それはそれとして彼？は出会いがしら一番に食べようとしたのだ。僕を。

「あっちの方が肉いっぱいいてますよ!！」

グリズリーの方を指差して言いながら空気の圧縮を開始する。聞くかどうかも分からなかったのでありったけの精気をつぎ込み大岩なんかもバターのように切り裂いてしまいそうなほどの風の刃を作り上げ目の前のドラゴンに放った。

しかし、当たると同時にその風の刃はドラゴンの首に浅く傷をつけるにとどまり、勝利することが不可能と判断し逃走に移ろうとしたら

「なんだと・・・私の体に傷をつけるとは・・・」

しゃべった。韻竜なのか？と動きを止めてしまった。

するとドラゴンは目の前にズウンと地面を揺らしながら着地し、僕の前に顔を近づけてきた。ああ、もう駄目だ。このままこの竜の胃に収まるんだと考えていた所、

「主、名はなんという。」

声と同時に出る熱い息が周囲の空気を熱する。

「ナツメと言います。」

その時の僕はガチガチに緊張しろれつも回っていなかったと思うのだが

こう言っただつもりだ。

「くつくつくく、小さき人に傷をつけられるなどいつ以来か。それにその身から出る精気。久しぶりに面白いものを見たわ。」

というようなやり取りがあつて見逃してもらえたのだ。

それからその熱い息を我慢しつついろいろ聞かれそれにいちいち答えさせられた。

まあ、おもに宗教庁や悪魔の話だつたが。

「ぶりみる、ブリミル。確かに昔そんな奴もおつたな。」

もう何歳か突つ込む気にもならなかった。

こつちからもいろいろ聞いてみると、僕を襲つたのは精霊を行使するとき

支払う精気が彼？にとって酒のようなものらしくその香りに誘われってきたとのこと。

そして韻竜かどうか聞いてみると、もともと唯の火竜だつたが長く生きてたら

いつの間にか喋れるようになっていたらしい。

彼？によると長く生きる存在 精霊のような にとって僕の精気は人間にとっての甘いお菓子に当たるらしく、またそれを生み出す存

在もまれだという。

「そういうわけだから、よこせ。」

際限なく吸うもんだから命の危険を感じた。

こういうやり取りがあり、現在僕は精気を対価にこの山の中腹に住まわせてもらっている。

小屋から出ればすぐに温泉があり、ゲリスリー食糧やその毛皮うりものにも

困ることはない。闇市で流せば一応金にはなる。

ただ凶暴なくせしてその顔が意外と愛らしく、殺すのはためらわれたが。

階層はこの辺までにしておいて、

今日も精気を吸われに彼？の住みかに来てきたわけである。

「私がここを住処としているのはここにいれば腹は減らぬし体の調子もいいからだ。」

それはそうと、ちょっとした実験につきあってくれまいか？」

「何ですか？痛いのは嫌ですよ。」

「何、簡単なことだ。私の血を凝縮した結晶をのむのだ。」

嫌な予感。

「それって僕の体に何かとんでもないことが起きるんじゃないでしょうね？」

「うむ、ここにたどり着く人間に何度か飲ませてはいるのだが、効果のほどがいまいちばらつきがあつてわからんのでな。ちなみに私の予想ではお前が飲めば死ぬな。」

全身から血を噴き出したりして、と付け加えた。

「あー、今日はもう疲れたんで帰ります。」

「まあ、待て。お前が死ぬつて言うのはな、その体の”許容量”が既にいっぱいになっているからだと考えている。その”風”を使う能力でな。

もし”容量”に余裕のあるものが飲めばそのものの体はすさまじい力を得るだろう。」

まあ、私には遠く及ばないだろうし、あくまで予測だが。」

「全部予測じゃないですか！それ飲んで僕に死ねと？」

「馬鹿か。それだと私の甘味が無くなるではないか。」

僕の精気は必要らしい。

「誰かに飲ませてみる。これまでに屈強な戦士、メイジ、赤ん坊などにも試してきたが

五分五分と言った所での。最後に飲ませたのは・・・お前たちの言う所で千年前

といった所か。最近は何も寄り付かぬ。

刺激も無くていいかげん退屈してきたのだ。つきあえ。」

そう言っただけの前に赤い光が集まりだし、次第に収束していく。そうしてしばらくすると親指程度の赤い透明な結晶が浮いていた。それを受け取り、

「この野郎、面倒なこと押しつけやがって。」

「その発言は少し間違っている。私はメスだ。」

・・・もつどうでもいい。

「それはそうと、もしかしたら出て行くことになりそうなんですけど。」

最近、どうもきな臭いのだ。

闇市では新教徒を名乗る連中が僕のことをかきまわっているし、宗教庁では悪魔討伐『軍』が編成されたいらしい。今回の方は更に規模が大きいようだ。

「むう、人間とはいろいろと面倒だな。」

あなただっただらブレス一吹きで終わりそうですが。

「そういうわけで、先に言っておきます。』お世話になりました。』後、人間にはくれぐれも気を付けてください。」

確かにこの竜には生半可な物理攻撃や魔法なんて聞きそうにないが、そういったものの『外側』から攻められたらどうなるかわからない。

人間はするがしこい生き物なのだ。

「くっくっく、本当におかしな人間だ。同族より竜の心配をすることは。」

一方的なサウナ状態での雑談はお開きになり、山小屋の方へ帰るところにした。

上には上がいるもの（後書き）

この竜、先住魔法で人型に「なんてことにはなりませんので。唯人間には想像もつかないような上位者がいたほうがおもしろいんじゃないかと。

強力な味方（前書き）

原作読んでもハルケギニアの地理がわかりにくい。

エルフは東方以外にもいたりするのか。

アーハンブラ城ってどこ？

夏バテで妄想力が弱くなってきた気がする。

強力な味方

住処を移すにしてもそれなりに準備がいる。

そこまで移動することはもちろん、道中の旅費、食糧、その他ナイフなどの小道具。

それを手に入れるにはやはり人里に下りなければならない。

「あー、くそ。高い。」

加えて、裏の人間には自然と裏の人間が対応するようになり、人によつては足元を見たりする。

「そうは言ってもね、ここでお前のようなのを相手にしている以上は・・・」

「いや、わかってますって。それでもやっぱりいい言葉に出ちゃうんですよ。」

ガリア王都リュティスの貧民層街の一角にある店で買い物中である。^{スラム}貧民層が住んでいるといっても、ここはロマリアと違い治安の悪さを始め、買春宿
非合法的な薬、マジックアイテムの売買やそれを占めるごろつきなどが目立つ。

狭い路地裏にそれらが無秩序に立ち並び、太陽の光もあまり入ってこないこともあって

じめじめとした、それでいてどこか危ない雰囲気も放っていた。

まあ、例によつて初めてきたときはからまれ売り飛ばされそうになったし、

宗教庁が認定した『悪魔』だと知れるといろいろな喧嘩を売られたりもした。

「あーそれはやめとけ、こっちのほうが・・・」

この店主、他の客には

「嫌なら他行け。」

とそっけないのだが、『悪魔』のネームバリュー故なのか逐一応えてくれる。

「おい、あれが・・・」

「全然そんな雰囲気じゃ・・・」

「小さい・・・」

「でも中身は・・・」

店内では他の買い物客達（お客さん）がこそこそこっちを見ながら話している。

小さいとかうるさいわ！ようやく160越えたところなのに。

身長は伸びているのだが、やはり伸びるのが遅い。このまま成長を続けてくれるならいいがここで伸びが止まってしまっっては困る。

この物騒な世界では体格も死活問題なのだ。

「うーん、仕方ない。これをお願いします。」

そう言ってお金を支払おうとすると、ドンと後ろから何かがつつつてきた。

「クソガキ、邪魔だ。」

2メートル弱の筋骨隆々とした大男がズタ袋からはみ出た毛皮を取り出しカウンターに

おいた。どうやら売りに来たらしい。
後ろでは、おいあいつ死んだな、だとか、新参者が憐れな、とかそんな声がちらほら聞こえる。

「おい、横入りはルール違反だ。並べ。」

店主は僕の方をチラチラ見ながらそういった。

「ああん？ガキの買い物じゃねえか！それともなにか！？
俺はメイジ殺しの……」

何か始まった。

……どこにでもいるね。こういう短気な人って。

「いや、わかったから、わかったから本当に並んだ方がいいんだって。」

普段の口調からは考えられないようになだめ始めた。
どうやら僕がその男をどうにかしてしまつのでは、と知っているようだ。

大丈夫、僕もそのくらい空気読めますとばかりに

「また後で来ます。」

そう言って店を出た。

ナツメが出た後の店内

「おい、悪魔が引いたぞ。」

「いや、殺す価値もなかったんだろ。」

「違う、きつとあとで報復を・・・。」

客たちが騒ぎ始め、自称メイジ殺しを除き全員の張りつめていた空気が解ける。

「お前さん、あれだけやっとして良く殺されなかったなあ。」

何でそんなことを言われたかわからないかのような口ぶりで自称メイジ殺しの男は言った。

「ああ！？あのガキが何だって？。」

「知らないのか？白髪紅目の悪魔の話。」

「あの小せえのがそうだったのかい？冗談言つな。あんなのが悪魔だったら俺様はさしずめ魔王じゃねえか！」

「いやね、こつちも最初はそう思ったんだけどあれを見せられちゃあねえ。」

ナツメと少しばかり付き合いがあるせいか店主は恐怖ではなく関心

があるというような口ぶりで言った。

「あれ？」

「ああ、2年ほど前に奴はここに現れたんだがその時は町のごろつき、中には

メイジもいてな、あんなのが悪魔なら俺が倒して名をあげるぞと我先にと飛びかかって

行ったんだが奴さん魔法も使わずに素手全員のしちまっただよ。のしたつて言ってもそいつらはただじゃ済まなかった。

ごろつき共は骨折が当たり前、メイジの中には殺されて血祭りあげられた奴も

いたんだよ。いやあ、確かあの時はもつと小さかったな。

両手が血に染まってゆらゆら立っている姿はまさに悪魔だったね。

アレは見た目に騙されちゃいかん。」

ひとしきり話すと満足だったのか腕を組みうんうん唸り始めた。

「へー、あのガキがねえ。」

この男、信じていないようだ。口元はわずかに吊り上り外を見ていた。

店の外で待っていると、一人の男が近付いてきた。ごろつきにしては少し理性的な印象を受けるこの男はこのスラムの元締めに当たる人間の右腕と言われている人だった。

「ノーマンか。」

この人僕が、最初この街に来た時にごろつきをけしかけてきた張本人であった。第一印象が差異あくつだったので自然と対応もぞんざいなものになる。

「伝言です。すぐにこの街から出て行くように。」

「理由は？」

「宗教庁の討伐軍の編成が終了し、この国への派兵が決定されました。」

既に国境を越えこちらに進軍中とのことだ。」

「……ふう。」

ちよつと待つてほしい。外交は何やってるんだ。これじゃロマリア軍がこの国に侵攻することになるんじゃない……。」

「政治的な問題はほとんど起こりませんでした。なにせ討伐軍のメイジはほとんど」

この国のメイジから出ているのですから。」

・・・あー確かに志願制だったしね。

「討伐軍の総数は6000、内メイジが400強。300以上がガリア貴族や王軍からの志願です。何せ悪魔の討伐ですから、貴族が名を上げるにはうってつけでしょうね。」

前回の失敗を踏まえて、だろうか。

今度は本当に過剰戦力とも言えるような数を投入してきた。ノーマンは微笑みながら、だからさっさと出て行け、と。

「くっ、他人事だからって軽く言うね。」

「実際そうですが。しかしあなたがもたもたしているとそうでなくあります。」

あなたとつながりのある人も困るんじゃないんですか？

例えば、フランチが率いる傭兵団とか、下町の人間とか、それとナバル家のお嬢様
だとか。」

良く調べてありますね。夏休みの自由研究とかだったら先生、花丸あげちゃいそうです。

「出て行け。この買い物が終わったらすぐに。」
そう言つと、

「伝言はお伝えしました。くれぐれも理性的なご判断をお願いします。」

・・・嫌な言い回し。

ノーマンは去って行った。

店のドアが開きさっきの自称メイジ殺しの男が出てきた。

僕はさっきの会計を済ませようと再度店に入ろうとすると不意に肩をつかまれた。

「おい、待てよ。」

メイジ殺しの男は見下したような口調で言い放つ。

ニヤニヤした顔がどこかムカつく。

「あー、何かご用でしょうか?」

この手のタイプは持ち上げといてどこかですきを作り逃げるにかぎると

腰の低い態度で応対する。

「てめえ、あの『悪魔』だそうじゃねえか。ちよつと面かせよ。」

絡んできたことは確定だった。

・・・こっちは急いでるってのに。

店の奥では、騒ぎを起こさないでくれとばかりに祈っている店主が見える。

「いやあ、僕、ちょっと急いでるんで遠慮・・・」

「ああ！？さっさと来いっつってんだよ！」

「嫌ですよ。どうせ僕を殺したあとで悪魔を倒したく何とか言っ
ちやほやされたいとかそんな所でしよう。」

男のニヤニヤした顔がわかってるじゃねえかとばかりに表情を変え
る。

逃げられたら、と思ったのかそれとも面倒になったのか男はその場
で剣を
抜き、

「わかってんなら話は早い。死ね。」

そういつて再び剣を構えて突進して来る。

メイジ殺しを自称するだけあって男の太刀筋はまっすぐ、速いもの
だった。

人間の範疇で見れば。

上段から降り下ろされた剣を体を少し横にずらして避け、固めた握
り拳を

脳天からげんこつのように振りおろした。

ゴソツというような鈍い音の後、男は悶絶し頭を押さえつづくまっ

た。

「うおおおおお、頭があああ。」

「ここで騒ぎ起こしたら店に迷惑でしょ。空気読めよ。」

男は悶絶したままである。その間に誰かが人を呼びに行ったのか、ノーマンが部下を引き連れてやってきた。

「出て行けと言った矢先に騒ぎですか。本当に愉快な人ですね。」

皮肉ってるつもりか。ノーマンの部下たちが男を連れてその場から撤収していく。どうなるんだろうね、あいつ。

「流血沙汰にならなかった所を評価してほしい。」

「何を言ってるんです？あなたはもうすでにこの街では出入り禁止になっっているんですよ。あなたに何もしないのは誰も手を出せる人間がいないからであって……。」

長くなりそう。

「いや、ほんとすいません。ここの会計済ませたらすぐ出て行きま
す。」

店の中に入ると、男が倒れる瞬間が見えたのか、あーやっちゃまった、
というような顔をした店主と客の顔があった。

山小屋に戻ったのは夕方だった。

どういうわけか小屋の近くまで火竜の群れが近付いていた。

・・・見送りじゃあるまいし。

昼間、ノーマン提供の情報について考えてみる。

討伐軍の編成が完了した。

おそらくこれは人づてに聞いたのだろう。どういう情報源かは知らないが。

・・・えーと、国境からここまでの距離が約700リーグ。

軍の規模から察するにその速度は日に30として到着まで3週間。

この情報伝達を竜便かメイジの使い魔でやるとして・・・

活版印刷が発達していない以上新聞などの庶民向けの情報源はほとんど

口伝えなのだ。王宮の兵士を買収すれば話は別だが。

そついった事情がある以上、上層部が知った情報が下の方に来るまで結構時間がかかる。

・・・もう案外近くまで来てたりして。

そう思いながら買ってきたパンを水で流しこむ。

・・・旅の準備はできた。後は逃げるだけ。

明日の早朝ここを出発する予定であるので横になろうとしたら、

・・・何やら外が騒がしい。

火竜の鳴き声だろうか、それも一匹や二匹ではなく数十頭分の。

外を見ると小さな光が何百何千と一面に広がっていた。

・・・あーあ、来ちゃったよ。

というか普通リュティスのスラムの方行くだろ。

確かに、火竜火山の中腹の山小屋にいると元締めには・・・

ハルケギニアでブリミル教に睨まれて生きている人間はいないだろう。

情報を渡さないと危ないのはあっちも一緒なのだ。

火竜の鳴き声がする、っと思っただら次の瞬間竜の群れは討伐軍に襲いかかった。

・・・なるほど。食事のためにここにいたのか。

火竜たちはここに人間が来るのがわかっていたようだ。
百近くの巨体が空中から襲いかかる。
地上の人間たちにも竜騎士の味方はいるものの数もサイズも違いました。

「撤退！撤退！」

・・・お、引き下がろうとしてる。このすきに。

黒いローブをかぶり、小屋の外に出る。

竜が暴れまわっているせいか、予想以上に風が強く頭にかぶっていたフード

がすぐに取れてしまった。すでに外は薄暗いとはいえ魔法や松明で視界ははっきりしている。

それで僕の白い頭が目立たないはずもなく、

「悪魔がいたぞ！撤退中止！！撤退中止！！」

まるで竜のことなどお構いなしかの如く白いローブの聖堂騎士が叫ぶ。

しかし、前線は竜に食い散らかされた死体やプレスによる焼死体が増えて行きますます混乱していく。

しかし、この軍の指揮権は聖堂騎士パフティンの方にあつた。

信仰のために死を恐れないそのはた迷惑な彼らの行動理念は、悪魔を倒すことだけに向けられた。

「始祖の名のもとに悪魔に死を！！」

その号令とともに後方のメイジは魔法を、弓隊は大量の矢を放ち

前線の兵たちはナツメに向かって殺到する。

そしてその特攻してくる兵を横から流しそうめんを食べるかのように竜たちが空中からブレスを吐き、また前足で器用に人間をさらっていく。

・・・うわあ。

まさにカオス。

そう思いながら前方に大気の壁を形成しつつ上空に飛びあがる。

飛んでくる炎弾の熱を完全に遮断できなかったのか火の粉が顔にあたった。

「あちつ。」

上空から全体を見渡すと後方の隊列に乱れは見られなかった。

・・・これだけ人が固まっていれば。

周囲の精霊を大量に集めて行く。

とりあえず最初にでかいのをぶつ放す。

そして残存兵始末しながら逃げる、という方針で行く事にする。

竜の食事のおかげか風の精霊を召喚する時間がたつぷりとれたので上空には、これまでにないほどの巨大な竜巻が渦巻いていた。

「ふおおおお。F5いったかもしんねえ。」

F5。Fスケール。竜巻の規模を表す。F0～F6段階がある内の6番目。

その強さ風速100マイルを超えは強固なつくりの建造物も吹き飛ばし、普通の家ならあとかたもなくなる。自然界においても起こることは稀である。

少し大げさすぎるかもしれないがこの規模をたたきつけければ討伐軍も壊滅的な被害を受けるだろう。

これは自分も危険と考えていると来ていたローブも風に引き込まれてい行ってしまった。

すぐに地面に着地し全力で距離をとる。

もう矢とか魔法とか気にしてられない。

背中に氷のとげが刺さってしまったがああ竜巻に巻き込まれるよりかはましである。

竜巻と距離をとっている最中は制御が手の内にあっただがそのうちその規模と強さに制御が離れてしまう。

・・・せめて方向だけは・・・！

討伐軍の方に向かって竜巻が降下していくように仕向ける。

竜巻は食事中の竜も巻き込み轟音とともに木々を薙ぎ払いながら進み始めた。

・・・こいつはすげえや。

自分でやっつといて何だがもう苦笑いするしかないほどの規模である。甲冑を着た兵士、馬、竜騎士の乗っていた竜、食事中の竜、とりあえず

手当たり次第に全部飲みこんでいく。

地面から根こそぎ引き抜かれた樹木も巻き込んで通った後には本当に土しか残ってなかった。

巻き込まれなかった少数は（と言っても千近く残っているが）分断され

散り散りとなり撤退を始めていた。

中には数人の聖堂騎士もいる。

・・・さつさと離れよう。

そう思っただけで走り始めた。

アレほどの規模の竜巻を起こしたのだ。調子に乗っていたせいもあり精気はもうすっからかん。今を狙われたら、中々辛いものがある。

・・・興奮してて気づかなかった。

背中に刺さった氷の矢を抜き取る。

・・・痛っ。

良く見ると他にも矢がかすったり、

魔法によるやけどなど結構軽い傷が多くみられる。

・・・今は我慢、我慢。

とりあえず離れるまではと足を動かす。

さっきの竜巻に荷物は全部飲まれてしまい手ぶらの状態である。そして人里に下りれば指名手配中。

「本当、どうしようか。」

討伐軍を退けることはできたがそう何度も来られては
こちらの身が持たない。

とりあえずそつちの方は宗教庁次第なのだ。

そろそろ諦めてほつといてくれないだろうか。

前回は今回の被害も向こうにとつてかなりの損害をもたらしたはず
である。

向こうが理性的な判断を下すなら、

次あたりは交渉に使いを遣つてきて良いところだ。

・・・上の人が利害で動く人でありますように。

利害で動く欲の強い人間がトップでそいつらが勘違いしているから
追われているのだが、そんなことナツメは知るわけがない。

・・・辛い。

この世界に来て初めて弱音を吐いた気がする。

今まで、楽しいことの方を考えて気をそらしてきたがこつても
迫害されると流石に堪えるものがある。

どこか、僕のことを誰も知らないようなところへ行きたい。

そもそもどんな困難にも立ち向かう、というのは僕の性格じゃない、
と。

どこかに適当な落とし所を見つければ人は壊れてしまう。

否定的なことばかり考えているといつの間にか夜は更け辺りは黒い
闇に

包まれ、さらに気分を落ち込ませた。

強力な味方（後書き）

竜巻の規模に関するものはWikipediaの藤田スケールの項から。

この出来事により主人公の肩書ランクアップ。
次回から旅開始。

打算で動く

負ける筈がない。

男の顔には自信が満ち溢れていた。

今回の遠征には一体の悪魔に対しメイジ四百を含む六千もの兵力が
終結したのだ。これではどう転ぼうとも負けようがない。

この男、ガリアの貴族の家の生まれではあるが領地も小さく、加えて三男

でありこの悪魔討伐で名をあげることに賭けていた。

ここで武功を修めれば褒章はともかく出世は間違いないのだ。
加えて相手はただ一人。

確かに情報や噂では、その戦闘力は凄まじいと語られているが

・・・いくらなんでも千人皆殺しはありえまい。

情報がいろいろ脚色されてそんな噂になったのだろう、と踏んでい
る。

実際、この手の脚色はよくあることだ。

スクウエアメイジをも倒すメイジ殺しだとか言われていても

ふたを開けてみればラインにも勝てない剣士だったり、オーク鬼が
数十体出現との噂を聞きつけやっつくれば十体にも満たなかった。

今回もその手のものだろう。

なぜここまで膨大な兵力を集める必要があったのか。

・・・上も相当踊らされているに違いない。

故に負ける筈がないと。

悪魔と対峙するまではそう思っていた。

・・・なんだ、なんだよこれ！？こんなものありえない。

悪魔が潜むと言われている小屋の周りには数十体の赤く巨大な生物、火竜。

それも一番小さいもので王軍に飼われている竜よりも一回りは大きい。

群れであろうそれは討伐軍が十分近づいて来るまで姿を見せなかった。

畏だったのだ。

火竜は次々と兵に襲い掛かり高温のブレスを吐き、食いちぎって行く。

「撤退ー！撤退ー！」

伝令と思われる騎士が大声で命令を伝えて行く。どうやらガリア軍の士官は引き際をわきまえているようだ。

しかし、これより数秒後小屋から特徴的な白髪頭の者が一人出てきた。

「悪魔がいたぞ！撤退中止！！撤退中止！！」

ロマリアの聖堂騎士である。そして後方ではガリア軍の司令官と聖堂騎士が

言い争っていた。

「何を言っている。ここで引かなければ壊滅するぞ。あんな数の竜相手にできる筈がない。」

ガリアの司令官は激昂した。

「そつちこそ何を言っている！悪魔を前に撤退なぞありえん。それとも貴様悪魔に味方する気か！？こちらにはいつでも裁判にかける準備ができていますぞ。」

そうしている内に、穏やかだった風が急に激しいものになり、すさまじい音が上空から聞こえてきた。

薄暗くてよく見えないが、つぼのような形をしたそれは討伐軍の上空を

覆い尽くしていく。

目を良く凝らしてみるとそのつぼの末端に白頭の『奴』がいた。

思わず、

「上だー！上からの攻撃に備えろー！！」

と叫んでいた。

そのつぼは竜巻だった。それも今まで見たこともないような規模の。

それは轟音とともに地面に降りていき、地面を抉り兵を飲み込みながら

こちらに進んできた。

覚えているのはそこまでである。

次に目が覚めると、そこは更地になっていた。

地面は茶色い土の部分をさらけ出し所々根こそぎ飛ばされた木々が散らばり

中にはその下敷きになった者もいた。

生き残った前線の兵が火竜に追い回され食われていく。

後方のメイジたちもただで済んだものはほとんどいなかった。

・・・俺は地獄を見ているのか？

自分が助かったことを自覚すると急に寒気と震えが止まらなくなつた。

・・・自分もここを離れなければ。

司令官や聖堂騎士たちは既に撤退を始めていた。

自分もそれに遅れまいと走っていく。

撤退を始めたものたちの顔にはすでに戦意というものがかけらも残されていないかった。

知り合いの士官の一人に話しかける。

「よう、お互い良く生き残れたな。」

恐怖を押しつけようと軽い口調で言った。

すると士官は暗くなった空を見上げ

「アレは一体何だったんだ。あの数の竜を操り、そして自分は高みの見物かと思えばあの強風。悪魔どころの騒ぎじゃない。」

恐怖と言うより触れてはいけないものに触れてしまったことを反省するように言った。

「ああ、あれは悪魔なんかじゃない。竜を配下にしあれほどの魔法を操る存在。」

一拍置いて深呼吸し深く息をはく。

「魔王だ。」

その言葉にはどこか敬意が込められているように聞こえた。

一ヶ月後

名も無き傭兵団のアジトにて

一つの長いテーブルを団員が全員で囲みその端には団長のフランツが腕を組み目をつむっている。ここ3年で老けたのか貫禄が付いたのか口元にはひげを生やしていた。おもむろに口を開くと

「とりあえず、今ここに集まってもらったのはみんな分かっているだろうと

思うが、ナツメのことだ。」

話が始まるとそれまで緩んでいた団員の顔に緊張感が走る。

中にはその緊張感についていけない者も数名いた。

この3年で入れ替えもあり若干団員数も増えている。

例えばマールは宿屋の息子とできてしまつて傭兵稼業から退いてい
るし、

他の団員にしても貴族に召し抱えられたものが数名。

それにより若干戦力の低下は招いていたもの新入りの中にはメイジ
もあり

傭兵団としての力は健在だった。

「新入りは分からないかもしれないが黙って聞いていてくれ。

まず、奴の情報から整理していきたい。気づいたこと、くだらない
噂でも構わない

途中で疑問に思つたら遠慮なく発言してくれ。」

すると新入りの一人が

「すみません。そのナツメって今話題の異端者の……………」

「そうだ。奴は4年前から1年間この傭兵団にいた。」

フランスの言葉に新入りがざわつく。

「奴がこの団に籍を置いていた以上あながち他人ごとでもない。今
のところ

被害はないが。」

この王都の下町においては、先入観から『ナツメ＝悪魔』という認
識が

ほとんど広まらず結果的に情報操作をする必要がなかった。しかし、これまでそうだったからと言ってこれからは分からない。

「そういうわけだから情報整理を始める。」

そうして、情報は上がっていく。

必ず皆殺しにする

ロマリアの宗教庁を狙っている

巨大な竜巻を起こし、天候や雪崩まで操る

姿を見せず気が付いたら殺されている

最近是新教徒が行方をかぎまわっている

料金は踏み倒さず必ず払っていく

むしろ払いは良い。

小さい

腰が低い

かと思つたら次の瞬間血の雨を降らす

人への対応が丁寧

「それに加えて火竜山脈への侵攻。これはほとんど壊滅に追い込まれた討伐軍が

王都に敗走してきたことからこれは周知のことと思つ。」

その際に出てくるのが

火竜の大軍を従え、巨大な竜巻を起こし戦いにもならなかった、

というものだった。

「前半はともかく後半が正しいことは分かるツス」

その発言でシリアスな空気が台無しになった。

緊張した雰囲気を保つのに飽きてきたのか他の団員も笑いながら話し始める。

「前半もわからんぞ。あいつ結構えげつないからな。」

「甘党なのに。甘党の悪魔って。」

「殺し合いの直後に和んでたからね。奴が大物なのは間違いない。」

「いや、大物なんじゃなくてただのバカだと・・・」

騒がしくなった所をフランツはさえぎった。

「いろいろ言いたいことはあるかもしれないが、これは悪魔と呼ばれる

アイツの情報について話し合うだけではない。

アイツとつながりのある人間から教会連中の目を遠ざける対策のた
めだ。」

「えー。金にもなりそうにないのにどうしてそんなこと・・・」

新入りがこねだした。

「教会の連中がナツメとの繋がりに気づいてしまえば異端審問の手が
下町に及ぶだろうが。傭兵団は取りつぶし、最悪俺達はこの街に住
めなくなる。」

全く、アイツも厄介なものを残しやがって。」

ここにはいない元団員に皮肉めいた口調で言う。

ここまで本当に大きな事件も起こらずに来ているのは幸運だった、
というより

悪魔本人に注意が向いていたからそんなことが起こらずに済んでいたのだ。

教会の関心が力のない弱者に向けられればどうなるか、容易に想像
がつく。

『異端審問』という名の虐殺、及びそれを利用して悪魔をおびき出
す。

国のトップまで絡んでいるのだ。

自分たちの命や利権が絡めばどんな手段でも使ってくるだろう。

「別にアイツの心配はする必要はない。情報から考えればいくら脚
色されている

とはいえ大軍を退けるなんて真似、スクウェアメイジでも無理だ。

ましてほとんど

壊滅させているんだ。運が重なったとしても相当力をつけているは
ずだ。」

これだけ被害が出ているのだ。責任問題やら派閥関係からの

宗教庁しゅうきょうの入れ替えも大きなものになるだろうし、それに伴い悪魔討伐
も自粛じしゆくする可能性が高い。自然とナツメが身を隠す時間も取れる筈
だ、

と。

「それにもし、あいつが表に出られるようになって帰る場所がなか
ったら

困るだろ。」

フランチはおどけたように言った。

高い所から見下ろす風景は、それが絶景と呼ばれるものでなくとも何か心に訴えかけるものがある。

浮遊大陸 アルビオン

大陸の端から見下ろす風景には、雲が広がりその隙間から緑の山々が所々覗いている。

・・・すごい。食われそうだ。

その壮大な景色に自分が飲みこまれそうなほどの、人間など自然から見ればちっぽけな

微生物にすぎない、そう感じさせるような景色だった。

このアルビオン、月に数回ハルケギニアの上空を通過している。

討伐軍を退けた数日後、山間を彷徨っているとき浮遊しているこの大陸が雲の間から

覗いているのには驚いた。

空は濃い青色で雲はほとんどないほどの快晴で、いくらかの強い風

が心地いい。

下の草地に寝そべってみた。

・・・こんなのにんびりしたの久しぶりだ。

日航のまぶしさから、目を瞼の上から手で覆い目を閉じる。

数日前の殺伐とした雰囲気とはかけ離れたこの雰囲気を満喫していると、

「ぐへっ」

不意に腹にドスツと何かが乗っかる音がした。

「勢いよく頭乗せるなよ。マチ。」

「ごめんごめん。痛かった？」

緑色の頭が腹の上に乗っているが見える。

5〜6歳ぐらいといった所か、マチルダ・オブ・サウスゴータというこの少女、

3週間ほど前僕がこの付近で倒れているところを発見し、助けられた。

その時は既に傷の方はふさがっていたのだが精気かんの方の回復が芳かんばしくなく

この大陸まで上がってくるので精一杯、たどり着くと気絶してしまっただ。

「でっかいな。」

マチルダの質問には返さずに言った。

「何が？」

「空が。飲み込まれそうだ。」

「おお、本当だ。でもなんか気持ち悪い。」

確かに、じーっと空だけを眺めていると時々そのスケールに圧倒され妙な感覚に陥ることがある。

「あー、そういう感覚時々あるよね。」

しばらく沈黙が続く。相変わらず空は雲が流れ、周囲は風の音ばかりで時々

鳥の鳴き声ができる程度である。このまま惰眠をむさぼりたいと思っていると、

子供特有の落ち着きのなさ故なのかマチルダは起き上がり大陸の端落ちたら三千メートル落下コースへ歩いて行く。

「あんまり身を乗り出すなよ。」

そう言いながら彼女のあとを追って歩くと、急に強風が吹き、

「うわああわわっわ・・・」

落下コースの入り口でバランスを崩し、そのまま落下していく彼女の姿が見えた。

・・・ああ、やっぱり。

このくらいのトラブルではもう動じなくなっていた。
風と同調し自分も飛び降りて行くと既に30メートルほど落下していた。

そのまま落下しつつマチルダの下から風で押し上げるように操作し、
自分の方に引きよせそのまま抱きかかえるようにして飛んだ。

「アホ。」

マチルダは恐怖で言葉も出なかったようでそれどころじゃなく、目
じりには涙が
にじんでいた。
天気もいいし、ただ上に戻るだけでは味気ないと思い少し飛んでみ
ることにした。

眼下にはハルケギニアの山々と時々小さく村落が見える。
そのまま、しばらく飛び回っていると落ち着きを取り戻したのか、
うわあ、と

眼下の景色に目を輝かせていた。そして

「あ、ありがとう」

怒られるとでも思ったのだろうかお礼は若干ぎこちないものだった。

「ん。そろそろ帰ろっか。ずっと飛んでたら疲れるし。」

空の散歩はそこまでにして、家に戻ることにした。

アルビオン サウスゴータ地方

大陸の大体南？（アルビオンは空中に浮いているため方角が少しずつ変わるので横長の

大陸を縦に置いた時の上の方を北とする。）の軍港口サイズから街道を200リーグ

ほどの行った所にあるシティオブサウスゴータはこの地方の中心地でロサイズと

王都ロンディニウムをつなぐ交通の要所である。それだけあって人口も四万ほどと

この国では有数の大都市になる。

風石がこの国の主な資源であることから、街には所々に風石が詰められた箱が目に入ってくる。この大陸が浮いているのも風石が何らかの作用を及ぼし、浮いているのかもしれない。ちなみに大陸の下で風が押し上げているなんてことはなかった。

サウスゴータ太守の屋敷はその中心地の郊外に建っていた。

「あー、おなかすいた。ナツメ、早く行こ。」

考え事をしていたら足が止まってしまっていたのかマチルダが急がす。

「ごめんごめん、うん、おなかすいたね。」

屋敷に向かって再び歩き出した。

やはり、太守の娘ということもあるだろうが、屋敷の玄関扉を開けると数人の使用人が

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

と。何度聞いてもやっぱり慣れない。自分が言われているわけでもないのに慣れない。

僕がこの屋敷に連れてこられた当初はかなり怯えられてしまった。

一応ここは太守の屋敷。太守ともなると当然僕の情報が入るのも早いわけで

一月前の討伐軍の壊滅は既に知られていた。それでも僕をここに匿まっている理由は、

「あら、お帰りなさい。」

「シャジャル様、ただいまー！」

・・・元気があつていいね。

シャジャルと呼ばれた女性の特徴は

長い金髪に線の細い体良く整った顔のつくりに加え、『長くどがった耳』。

エルフである。このハルケギニアで嫌われ者の。とりあえずここで語るのは

長くなりそうなので後回しにする。

「ただ今戻りました。」

はあー、とため息をつく。それに気づいたのか、

「何？人を見るなり溜息ついちゃって。」

少し機嫌を損ねたようだ。

「いや、本当に僕がここに居てもいいものかと。」

シャジャルさんはサウスゴータ太守が仕えるモード大公の妾である。最近まだ一歳にも満たない小さな娘さん、ティファニアとここに移ってきた。

娘が生まれれば自^{おの}ずと隠しきれなるとの判断でこちらに移る事が決まったのだ。

エルフと悪魔が同時に同じ所に留まる。

これが公になってしまえばサウスゴータの家は取りつぶし、それを指示したモード大公もただでは済まないだろう。それにシャジャルさんやティファニアはともかくも

僕の顔は広く知れ渡っている。ある程度の国政に関わるような身分の人が見れば

一発だろう。わざわざリスクを上げる事になりかねないのでは？
加えて先日、討伐軍を一蹴したことにより悪名もランクアップしているはずである。

・・・取りつぶしどころか皆殺しとかがありそう・・・って全然笑えない。

確かに敵に追われ疲弊し困窮していたがそれでも生き延びることはできる。

ただし、心の方を擦り減らすことになるが。

「あなたもこの屋敷の人達も知らない訳じゃ無いでしょう。」

だから溜息なのだ。エルフ二人、正確には一人はハーフだがそれだけをかばうだけでも

この世界では大変なのに、更にそこに大量殺人、しかもこのハルケギニア最大とも言える勢力に喧嘩を売った犯人が加わる。

「正直、僕にそんな利用価値なんてないと思いますけどね。もしそのことすら

考えていないなら正気を疑います。」

そう言った後にふといい匂いがする。どうやら抱きしめられているようだ。

「利用価値だなんてそんな悲しいこと、言わないで。ここで過ごしてあなたが

悪魔なんかじゃないってことは屋敷のみんなは分かっていると思うわ。」

その言葉を聞いてますます頭が冷えていく。

・・・ここで感動やら心に染みるとか思わないあたり僕も相当ひにくれたな。

『悪魔とは思えない』この屋敷の人がそう認識するのは勝手だ。

「屋敷の中じゃなくて外のことを言ってるんです。大公はその辺ちやんと

根回ししてるんですか？」

モード大公は現在の王、ジエームズ一世の弟でもあるのだ。
多少の無理も利くはずである。

「それはちょっと・・・あまりそつというのが得意な人じゃないから。」

「はあー・・・。」

ますます深く溜息をつくことになった。

というわけで夕食後、太守と話し合いである。

「抑止力ですか。」

「そう、抑止力。聞けば一月前の討伐軍六千を火竜を従えて打ち破った

そつじゃないか。加えてかなりの規模の竜巻を起こしたとか。

竜巻でふもとの街道が使い物にならなくなったり、森がなくなったりと聞いているぞ。」

後半は聞かなかったことにしたい。

「いやそもそも火竜については話したでしょう。食事だって。」

「しかし、周りはそう思わない。竜を従える悪魔、一部では魔王と呼ばれ始めている。」

「ここまで来ればもうそう簡単に手を出せる存在ではないのだよ。君は。」

確かに、ナツメに討伐軍をけしかけてきたのは聖堂議会の保守派の連中である。

ここまで壊滅的な被害を出せば、責任問題で大規模な入れ替えそして中立派、改革派の勢力が力をつけて行くのは十分にあり得る。あの数の兵だ、被害額も半端なく大きい。これ以上の派兵は国を破滅させることになりかねない。」

「まあ、宗教庁はいいとしてこの国の内部はどうするんです？ 王党派と貴族派が分かれていますよね。まさか僕が乗り込んで殺れとでも？」

共和制を唱える貴族派は最近勢力を伸ばし始めている。まだ勢力が小さいうちにたたき潰せばいいのに、それをしないのかそれともできないのか、両者ともけん制ばかりしている。」

「私だけではそこまでは判断しかねる。とりあえずモード大公は君の所在を」

「知らないのだ。そこは会ってもらわないことには。」

「……ちゃんと上司には連絡取っとけよ。」

独断にもほどがある。

「数日前にそれについて打診しておいた。あつてほしい人物がいると。」

とりあえずうなづくことで肯定の意志を示しておく。

今回は戦いにはならなそうだが面倒くさそうな政治がらみの話になりそうだ。

・・・めんどくせえ。

宿代は高くつきそうだった。

打算で動く（後書き）

サハラへ行かせるタイミングがわからなくなってきた。

とりあえずヒロインどうしようか。いつそ無しの方向でいくか、それともフラグを立て続けて後で回収していくか。

唯一つだけ言えるのはハーレムだけはありえないことだけ。

悪魔は引きずり込む（前書き）

内政とか考えるの難しい。次回までにいい案が浮かぶだろうか。

悪魔は引きずり込む

「王あににばれた。」

モード大公は憔悴しきった顔で声を震わせていった。

「ばれたとは？」

太守は何事かと、あまり刺激しないように尋ねる。大公はしばらく黙った後

声を絞り出すように、

「シャ、シャジャルと・・・」

震える手で僕を指差す。

髭が生え、わずかにしわのあるその顔は普段、キリツとした状態では威厳ある大公様なのだろう。

しかし今は、親にエロ本を見つかっておろおろしている子供のようだった。

「カール、どうしよう。どうしたらいい？」

・・・うわあ、気持ち悪っ。

娘が見たら間違いなく、お父さん気持ち悪い、である。

カール
太守にすぎる姿はそれほど酷いものだった。それに対して

「ご心配なく。そのために強力な助っ人を引き入れました。ナツメ君。」

太守に促され、片膝をつき

「お初にお目にかかる。ナツメと申します。」

できるだけ丁寧にしたつもりだったが、その挨拶を見るなり大公は

「ちょっと、この髪、それにその目。ああ、もう本当に終わりだあああ。」

この手の人は傍から見ている分には面白いのだが自分が当事者であるとかかなり鬱陶しく感じる。なので

「黙れ。エロ大公。いやエロ王子。」

僕のその発言によようやく正気を取り戻したのか、いや腹を立てただけか顔には怒りが浮かんでいた。

「なんだと！アルビオンの大公をエロ呼ばわりとは何事か！！」

声を荒げた。さっきとの変わりようが凄い。

「お前なんてエロで十分だ。どうせシャジャルさんの時もあの胸に視線が

釘付けだったんだろ？」

そう。彼女は巨乳だったのだ。それも標準サイズよりかなり大きい。

「ああ、もしかして愛しているのは彼女自身ではなく彼女の胸だけとかか。

救いようがないね、ホント。」

さっさと冷静さを取り戻してくれないと話にもならない。

そう思っていると、大公はこぶしを振り上げ僕の頬を殴りつける。

体格は良いのだが魔法ばかりに頼っているせいか力が乗っておらず痛みはほとんど

なかった。息を荒げ、肩を上下させながら言った。

「それは違う。そんな体の一部でなく私は彼女の優しいその心に惹かれたのだ。

エルフも人間も関係ない、一方的に人間が恐れ、嫌っているだけだと気付かせてくれたのだ。」

そう言うと、落ち着きを取り戻し顔も穏やかなものに戻った。

「ふう。とりあえず冷静な大公に戻った所で話し合い、始めましようか。」

大公は発言の意図に気付いたのだろうかバツの悪そうな顔をしていた。

エルフの存在を認めさせる。悪魔の方はともかく。

後者はともかく前者の方はまだ何も問題を起こしていないのだ。この国の貴族、

特にアルビオンの議会の連中、そして軍部を取り込めればそれは可能だろう。

まあ、できればの話だが。

「率直に申し上げますと僕は政にはまるつきり素人ですから。

シヤジャルさんを助ける方法だって、彼女を死んだことにするか、連れて逃げるか

脅しをかけるか、思いつくのはそのぐらいです。」

議会は貴族、大商人、教会から選出された者たちが取り仕切る事になっっている。

それぞれが既得権益を持ち、政治にもたらす影響は大きい。

取り込もうにも交渉に使うカードと言えば

これに対し僕という人間の利用価値は、その暴力のみ。

力と恐怖で抑え込むことは、必ずどこかで不和が生じ、遅かれ早かれというよりこの場合はすぐにと言った方がいいかもしれないが、必ず崩壊する。

王を味方につけるとしても、アルビオンの王権は強いどころか議会のほうが強い。

封建制のごとく諸侯貴族が領地を支配し、王はそれをまとめているにすぎない。

王領も大公家領を加えてもアルビオン大陸全体から見て4割と言っ

た所か。

確かに作物の生産性のあるいい土地ばかりなのだが、それでもハルケギニアで

人間の敵とされているエルフを認めさせるにはまだ足りない。

悪魔を脅しに使うにしても宗教庁が敵対している限り、教会が味方につくことはない。

・・・新教徒を取り込むこともできるだろうけど担ぎあげられたら最悪だな。

ガリアではしつこくスラムを嗅ぎまわっていたのだ。何を考えているかは知らないが

絶対にお近づきにはなりたくないし、見つかったとしたらさっさと逃げる。

「だから、その『脅し』をかけるのだよ。」

太守は分かっているじゃないかと言わんばかりに応えた。

「この国の教会はロマリアとそこまでつながりが強いわけではないから

宗教庁が混乱している今、悪魔が現れたとしても上からの判断待ちとしてあまり

騒ぎ立てることはしないだろう。それにだ、君が脅しをかければ貴族はともかく

損得勘定にうるさい商人共はこちらにつくことになるだろう。」

教会〓中立、商人〓味方、貴族〓不明、話からするとそんな所。

「悪魔を王家が味方につけたってことでロマリアやその他の国から

異端だとか
叫ばれそうなんですけど。」

6000年もたっているから怪しいものだが対外的に王家は始祖の直系なのだ。

それがブリミル教の敵とされる悪魔と手を組めば一体どうなる事やら。

王家の格、どころか外交や貿易いرونなところで貶められるのではなからうか。

「脅した所でそんなものすぐダメになりますよ。力だけじゃ何も変わらない。」

「だが時間は稼げる。味方を作る時間が。」

彼らがそう言うのならそれでもいいのかもしれない。

悪魔への先入観がどう働くか、少なくともいい方には働かない。

折れてしまっいていいのだろうか。もう全快している僕一人なら逃げるのは簡単だから

問題ないのだが、どうもしこりを感じる。

今回脅しがうまくいったとしても王党派と貴族派の力関係は押され気味だったものが

逆の関係になる程度だと思っている。

・・・権力闘争メンドクせえ。

そろそろ、丸投げしたいと考えていたら部屋のドアが開き、

「旦那様。」

執事が 書状か何かだろうかと 持ってきた。すぐに大公は立ち上がり執事から
その羊皮紙を受け取る。

「ぐ……」

中身を見ると顔をゆがめ、ぎこちない動きでこちらを向き言った。

「王から出頭せよとのご命令だ。」

悪魔も一緒に、と付け加えて。

王都ロンドン、ニウムはシティサウスゴータから100リーグ余り北上した所にある。

馬車で二日かけて行くことになったはいいけれども、

「暇だ。」

走った方が速い。つい最近まで移動はもっぱら飛んだり走ったり高速で移動して

なるべく人目につかないように短時間で移動していたのだ。これに慣れてしまった

せいか、このスピードはじれったく感じる。

しかし、じれったく感じつつものろのろと進む馬車はその揺れ具合は眠気を催す。
外の警戒の方は騎士の方達にまかせておけばいいかとぼーっと外を見ていると

だんだん瞼が重くなってくる。

そうして、僕が瞼を閉じて昼寝を開始しようとする

「寝るなー！」

腹にはわずかな衝撃を感じ、頬を叩く音が聞こえる。僕はその犯人の頬をつかみ
少しばかりねじってみる。

「いひゃい、いひゃいよ。」

そう言いつつマチルダは楽しそうだ。横に座っている太守はカールさんその様子

を見て顔を歪めているが。

窓を覗くと後ろにはもう一台、大公が乗った馬車とそれを囲う様にして腰に杖を刺した

騎兵が走っている。

「飛んだらすぐなのに。」

マチルダが僕の膝の上で文句垂れている。

「ごめんね。今回は飛んじゃ駄目なんだよ。」

悪魔は人前では飛べない、でもマチルダは特別、そういうことにし

てある。

「わかってるよ。『特別』だもんね。」

眺めていた太守がカールさん口を開く。

「ほう、そんなに速いのか。私もぜひ一緒にさせてほしいものだな。」

「お望みとあらば風竜の倍速で飛ばしますよ。」

軽い口調で返すと、

「風竜より速いの！？私も私も！」

この間ので味をしめたのかさらに乗ってきた。

・・・あぶねえよ

「また今度ね。」

そのはしゃぐ姿が微笑ましくなり、マチルダの頭に手を置いて言った。

カールさん、僕はこんな小さい子に欲情するような変態じゃありませんよ。

彼の顔には若干の怒気が含まれていた。

「おお、ウィルよく来たな。」

王宮に着いて門をくぐり馬車から下りると、王自ら出迎えに来ていた。
大公と抱擁ウィリアムを交わす。

大公以外はその場で膝をつき首を垂れる。ちなみに僕の格好は黒いローブを
目深に被っているので当然怪しく見える。よって、

「貴様、何者だ！」

魔法衛士隊と思われるメイジたちがレイピア風の鉄杖をかまえ、
呪文詠唱ができる体制をとってきた。

「待ちなさい。彼はうちの客人だ。分け合って顔を見せるわけには
いかなのだ。」

このことは陛下も存じているはず。」

と大公は王に目くばせする。それを理解したのか、

「よい、下がれ。」

そして、マチルダと太守は王宮の待合室に残され僕と大公は王の自室まで案内された。

「して、その者が件の悪魔と？」

王がそう言うのを聞き僕はフードをとり、顔をさらす。王はそれに目を見開き

「なんと、まだ少年ではないか。」

「今年で16になるそうです。」

大公と王が話し始める。とりあえず僕は自己紹介だけしといて二人の話を

横から聞いていた。

「それで、どういっつもりなのだ。」

大公はそれに対し太守から入れ知恵されたことを話していく。抑止力、王党派の拡大
・・・など。

「現在、勢力は拮抗しておりますがこの状態がいつまで続くかはわかりませぬ。

ここは彼を利用してでも王党派の拡大をすべきではないかと。
・・・確かにこんなのは建前に過ぎませぬ。彼の影響力も一時的なものでしょう。

しかし共和制だ何だと言っている輩は所詮自分たちの都合のいい権力が欲しいだけの

者たちです。国のことを思うなら悪魔に魂をとまではいかずとも自
尊心ライト

ぐらいはくれてやってもいいのではないですか？」

重い沈黙が流れる。王は目を瞑り深く息を吸い込み吐き、

それから椅子に座りしばらく考え込み始めた。

ごくり、と大公が息をのむような表情をして別に熱くもない、むしろ涼しいくらいなのに汗が頬を伝っているのが見える。するとおもむろに王は口を開き、

「わかった。許可する。ただし対外的にはお前が悪魔の力を借りていることに

してもらうが。」

ほっとしたのか大公はその場で崩れてしまった。

「確かにお前の言う通り、今の貴族派に王党派は押されつつある。今のうちに目を積んでおかねば国家転覆の可能性も十分に考えられる。」

だがエルフの方はどうするのだ？彼に注意が向いた所で別にエルフを匿っていること

に対する非難は逃れられないと思うのだが。」

できれば黙ったままこの重い雰囲気から逃れたかったが大公の方に疲れが見えたので

ここで初めて会話に入った。

「それについてはご心配なく。私が『このエルフたちを殺した者は私が必ず殺しに行く』」

とでも言うっておけばいいでしょう。悪名が二つ三つ増えたところで

今更です。」

王はその発言に驚いたのか

「なんとも悪魔とは言い難い考え方だな。我が弟に素直に手を貸してくれただけのことと言いたい」

人種の違いはどうあれ困っている者をかばうその姿勢など。」

「ただ、借りがあるだけです。悪魔は必ず約束を守るものなので。」

対価はきっちり貰って行くが。

しかし、脅した所でその後の対策がうやむやになっている。

・・・この辺は王様とかが考えるだろ。

モード大公 ウィリアムは悪魔大公の称号を手に入れた。

悪魔は引きずり込む（後書き）

王家なんて滅んでも滅ばなくてもどっちでもよかったのに。

何となく主人公にアルビオンに行かせたら行き詰まりそうです。

主人公は核弾頭扱いでいこうかと。

さっさと片付けてサハラに行かせたい。

気分があまりのらなかったのかかなりの駄文になってしまった。

ペットの可愛さは偉大(前書き)

前回よりかはいい感じに書けたと思う。

ペットのかわいさは偉大

悪魔の存在が公になった。というより公にした。ウィリアム・モード大公が。

最初に悪魔の強烈な印象を植え付けておけば、後でエルフもいるよ、となつたとき

「何だエルフか。」

とまではいかなくても多少反発を柔らげることができる、らしい。アメリカ合衆国で例えるとわかりやすい。

悪魔Ⅱ核弾頭、大公Ⅱスイッチを握っている大統領、何か不都合があれば悪魔が飛んで行って屋敷を破壊します、といった具合である。

・・・うまくいくのかな。

とりあえずここ最近、討伐軍全滅の噂が街に浸透してきたせいか知名度の上昇率はすごい。街に行けば

「あの腐れ伯爵、悪魔が殺してくんないかね」

「それより教会つぶしてほしいよ。お布施をやたら要求してきて鬱陶しいったらない。」

「最近トロールが出てるらしいじゃない。やーねえ。悪魔が片付けてくれないかしら」

「もういつそ貴族皆殺しでいい。」

駄々をこねる子供に対して

「こら！わがまま言つと悪魔にやっちまうよ。」

また勇者イーヴァルディがシリーズになって新登場、勇者が魔王を討つ冒険譚が

教会から出版されるらしい。転んでもただでは起きないのも当然か
財政の立て直し

が大変なんだろうな。

まあ、当然魔王は悪者でその名前がナツメだったりするのだが。

庶民の認識は大体こんなもんだった。

一方、議会に所属するような大貴族はというと、

「モード大公は乱心した。」と貴族派

「始祖に背く大罪を犯した。」と教会

「いや、国と王家のために悪魔に魂まで売り払った。」と王党派

大意をまとめるところなる。

しかし、教会の連中は宗教庁ロクシアの意向もあるので現在様子見であり
実際脅威となるのは貴族派の議員。

また軍部はというと、

「実際にそれほどの力があるか疑わしい。どうせ噂に尾ヒレが付いて膨らんで

いったただけだろう」

と擁護や非難　云々（うんぬん）よりその戦力を測っている、という感じで

結果次第ではどちらかにつくという姿勢だった。

「思っていたよりも好感触ですね。」

「どこが!？」

モード大公は僕の言葉に突っ込みを入れる。現在サウスゴータの太守の屋敷で

情報整理中。さっきから大公の顔色が優れない。すると

「確かに、これならやりようによっては流れはこちらに傾いてくる。」

太守も納得、というようにうんうんとうなづいている。

「とりあえず、僕としては庶民の悪魔に対する敵対意識が薄いのが嬉しいですね。」

「加えて軍部だ。実力次第ではこちらにつくということになるではないか。」

アルビオン軍の主力となるのは王立の空軍、アルビオン竜騎士隊といった空の戦力

が主なもので王家の影響力は強い。確かにこの空軍、数の割に精強であるのだが

維持にコストがかなりかかる。船を動かすにしても常日頃から訓練を積み重ねば

ならないし、竜は飼うだけでお金がかかる。したがって数としての力はそこまで

期待できない。

しかし、この国の力を象徴する存在でもある彼らをこちらの味方につけること

ができれば、貴族たちへの牽制につながる。問題なのは

・・・どうやって実力を見ようとするのか。

確実に荒事である。しかも僕だけに降りかかる。どういった手に出てくるか警戒しておきたい所。

・・・今度王軍に探りを入れてみるか。

もう、毎度おなじみになってきたの風の盗み聞きである。そう考えていると大公の顔色が良くないのが見えた。

「大公殿下、どうしたのですか？どこか具合でも？」

太守が尋ねると、気を失った声で言った。

「実家に勘当された。もうお前はうちの親族じゃないって。」

「そう言えば、大公殿下って養子で王家に入ったんでしたね。」

「ご愁傷様つと。これからの動き次第ではどうとでもなるのだから気にしてもしょうがない。」

「大丈夫ですよ。ちゃんと功績を残せばご実家も（勘当を）取り消してくださるに違いありません。」

大公はその言葉に背中を丸めて小さくなり、うん、と小さくうなづいた。

気持ち悪い。

そして、少し気を取り直したのかすくつと立ち上がり

「商人にしてもどちらにつくか決めかねているようだな。とにかく今は軍部の出方を待つしかないのか。」

急にキリつとした真剣な面持ちで考え始めた。使い分けが凄。その変わり様に吹き出しそうになっていると

「あら、みんなで悪だくみ？私も混ぜてほしいわ。」
「ませろー！」

シヤジャルさんとマチルダががお茶やお菓子が乗ったカートを押している
メイドとともに入ってきた。

「ノックぐらいしなさい。心臓に悪い。」

大公はドアが開くなり、ビクツとそれはもう滑稽だった。

「休憩としましょうか。」

太守がカートに乗っているものを見るなり中断を促した。
僕はその言葉を聞き、

「軍部の方は僕が探ってみますよ。魔法を使えば一発ですし。」

「ほう、そんなことまでできるのか。つくづく万能だな。どういう魔法か

教えてもらいたいものだが・・・」

太守はそんなことを言ってきた。

「風限定ですけどね。限定と言っても偏在やフェイスチェンジはできないし

カッタートルネードもイメージがしづらくって・・・」

カッタートルネード

真空の層を挟んだ竜巻を発生させ、触れると切れるという風のスクウェアスぺル。

しかし、こちらの認識では『真空にしたら切れる』ということが全く理解できない以上、イメージできないので使用不可。

空気の密度を上げることで質量を持たせて刃の形に加工し切りつける、ならわかるが

陰圧（周囲より気圧が低いこと）にして回転させたら切れるのはおかしいと思った。

それに、小石や砂粒などを一緒に巻き上げ高速回転させれば同じ効果が得られるし。

ただし、その場合小石が全方位に飛んで行くのでこちらにも被害が出るのだが。

フェイスチェンジは水と風のスペルだし、偏在は当然イメージできず丸投げ。

「まあ、特化しているおかげだからか物量に関しては言うことないんですけどね。」

クッキーを一つかじる。バターの香りと砂糖の甘さが口に広がる。

「……うん、美味しい。やっぱりクッキーはシンプルなのが一番だな。」

「そうしていれば普通の年相応なのね。話している内容はともかく。」

「シャジャルさんはマチルダを膝に乗せ、微笑みながら言った。」

「……年相応ね。」

その言葉に少し考え込む。中の方は24歳。外側16歳。

この際年齢はどうでもいい。

この先、僕がこの世界で生きて行くとして『分相応』の幸せを手に入れること

はできるのだろうか。

多くは望まないがせめて毎日、昼寝付きぐらいの生活はしたい。

「……でも最近魔王だしな。」

悪魔討伐から4ヶ月がたち、新年も明け今はティールの月（三月）。だんだん暖かくなり始め、春に向かっていているというのに僕の気持は後ろ向き。

このご時世、娯楽が少ないので悪魔が魔王に昇格したという噂は瞬く間に

広がって行った。その噂が良いものか悪いものかは置いておくとして、とりあえず

注目を集めていることは間違いない。

・・・あー、目立つの嫌だなあ。

人に見られるのは好きじゃないし、人をじろじろ見る趣味もない。犬、猫なら何時間もなめまわすように眺めていても飽きないが。犬と猫。それに意識が及ぶとあることを思い出した。

・・・最近どころかここ数年ずっと、モフモフなでなでしてない。

いい加減禁断症状が出てもいい頃なのだが、近頃それどころじゃなかったから

たった今まで考えるまで気付かなかった。

今、ものすつごくモフモフかなでなでがしたい。

その衝動は、思春期真っ盛りの男子の性欲のごとく頭の中をぐるぐると回り始めた。

・・・うわああああ・・・ナニコレ。どうしたらいい!？

飼いならされた犬や猫はこの屋敷にはいない。犬猫を捜すなら街へ出なければならぬ。

しかし、変装アイテムもなく街へ出ようものなら、いくら庶民まで悪魔の噂まじつ

が浸透していようと現物が現ればパニックになるに違いない。

・・・いや、幸いここは権力者の家。頼めば猫ぐらいなら、・・・

全く、何を悩んでいるのだこいつは。

シャジャルや他の者たちはナツメが自分の境遇や未来のことについて悩んでいるもんだとばかりに思っ、その首を垂れて落ち込む様に深く同情をおぼえていた。

そして、シャジャルは自分を助けようと頑張ってくれているこの少年にやりきれない感情を抑え、彼の頭を胸に抱きよせた。ナツメの顔はその豊満な胸に埋められることになる。

「大丈夫よ。生きていればきっと良いことがあるわ。」

しかし、今のナツメは、モフモフなでなでしたい気持ち>性欲、だった。それどころではない。ナツメはシャジャルの抱擁を跳ねのけ部屋から飛び出した。

残された者たちは部屋の中で、気まずい沈黙の中取り残されていた。

「まさか、彼があれ程まで追い詰められていたとはな。」

太守が沈黙を破る。するとマチルダは

「ナツメ元気ないの?」

心配そうに父親に尋ねる。

それに対して、太守は答えられずただ彼女の頭に手を置くだけだった。

「無理もないわ。彼はこの間までずっと一人で戦ってきたんですもの。

どこかで無理が来てしまったんでしょう。そんな素振りは少しも見せなかったのは

彼なりの気遣いか、あるいは隙を見せないためか。

私たちはそんな彼に助けてもらおうとしているのにこっちから何もしてやれないなんて」

シヤジャルの頬には一筋の雫が伝う。

その涙は彼の境遇に同情してか、または自分の無力に対してかわからないが少なくとも

悲しさ故のもであることは、この部屋にいる他の人間にも見て取れる。

マチルダはそんな彼女に感化されたのか、涙をこらえていた。

「彼は悪魔などではない。悪魔に仕立て上げたのはこの世界だ。彼はただ力が強いだけ
の人間だった。周囲の思惑に翻弄され悪魔にならざるを得なかったのか。」

なんとも辛い話だ。ウィリアムは深刻な表情で言った。

これほど救いのない話があるものか、と。

今まで、あれほど平然と振る舞っていたことがおかしいのだ。

「このお屋敷に運ばれてきたときも、意識がもろろつとしている中で彼が言った言葉は

それに対するお礼でした。かすれたような声でありがとつと。」

そばにいたメイドもそれに対して黙っていることができなかったんだろう。

ここに連れてこられた時、衰弱していたナツメの様子を語りだした。太守は娘を抱き寄せながら言った。

「どちらにせよ、私たちは彼に感謝しなければならない。周りからなんと言われていようと。」

走る、走る走る。

風を切りながら森の中を。

もうどれほど走っただろうか、わからないが少なくとも屋敷から馬で数時間はかかる

山奥まで来ていた。

モフモフしたい衝動は抑えがたいが、かといって街には出れない。となると発散するには別のことに没頭して疲れきるまで続けられない。

そう思って外へ飛び出した。

アルビオン大陸の中央には地球のイギリスのペニン山脈ように山脈が南北に走っている。

山麓は農地、高地で草地になっている所は大体が貴族の領地になっ

ているの
で放牧などに利用される。

しかし、僕が今走っているのはそこからはずれた森の中。
だんだんと森が深くなっていると日の光も弱くなってくる。
しばらく走って疲れたら戻ろうと思っていただけだが、

・・・奥に何かがいる。

それも大小入れて何十という数が。
久しぶりの戦闘かと、風と同調しようかと思ったがやめて服の裾を
ちぎり、
拳に巻きつけていく。殴り合いの方が衝動発散に丁度いいと思った
のだ。

現場につくとそこでは戦闘がおこなわれていた。
人間とトロールの。トロール十体余りに対し人間は三十人程度。半
分弱はメイジで構成されているようだった。

非メイジの兵が弓や投石、単発式の銃でけん制しつつメイジが魔法
を放つ。

・・・押されてるな。

メイジの数はトロールより少し多い程度。そのメイジのクラスは分
からないが
とりあえず物量では確実にトロールが勝っている。

人間達は諸侯の討伐隊か何かだろう。
少しずつ下がりながら攻撃を加えて行くのだが徐々に距離を詰められていく。

・・・何でこんな所にこれほどの数が。

アルビオン大陸ではトロールはその多くが大陸の北部、ハイランド地方に住んでいる。

というかこの地方にたくさんトロールがいたら街なんて発展するのは難しいか。

と、そんなことを考えながらその巨体の群れに突っ込んでいった。

・・・数が多すぎる。

討伐隊を自ら率^{みづか}いていた壮年の男ケイニス伯爵は己の運の悪さを心の中で呪った。

ここはサウスゴータに隣接するアール領。太守が王党派ということもあり無用の争いを避けるためかこのアール家は『一応』王党派ということになっている。

今回の討伐は、自領の放牧地に離されている家畜がトロールに襲われる被害が後を

絶たないため、こうして討伐隊を出すことになった。

相手がトロールということもあり、準備も入念にしてきたつもりだった。

しかし、予測していた数とはあまりにかけ離れていた。5体前後と思われた

その数の約三倍、15体もいたのだ。既に4体は焼き殺すなどしてすでに

片づけてはいるが。

・・・撤退しようにもこの数が集落になだれ込めば被害は・・・

既に助けを呼ぶための伝令は出した。本来なら領主たる自分もここで下がるべき

なのだが、今は高位メイジの威力がある魔法を、一発でも多く打ち込まなければならない。加えて伯爵はこの討伐隊唯一の水と風のスクウェア。

隊の士気にもかかわるので抜けることができなかった。

・・・援軍が来るのが先か、それとも私の精神力が尽きるのが先か・

時間稼ぎのため、エアカッターなどのラインスペルで精神力の消耗を抑えつつ

援軍の到着が間に合うことを祈った。

ふと、トロールの内の一体が崩れ落ちるのが見えた。

そう思うとその後ろにいた者も次々と体制を崩していく。

それと同時に肉が潰れるような音も。

そうして、壁となっていたトロールもが倒れるとそこには白髪で紅目の
モード大公が引き入れたという悪魔が立っていた。

両手はトロールの血の赤だろうか、液体が滴り落ちている。

そこで倒れていたトロールが再び立ち上がろうとするが、

ゴツツツツツ！！

その音とともにトロールの太い首はあらぬ方向へ曲がり再び崩れ落ちた。

殴っただけだった。殴っただけで我々が苦戦していた化け物を倒してしまった。

その恐るべき戦闘力もさることながら、とても印象に残っていたのは彼が嬉々としながら拳をトロールにたたきこんでいることだった。

トロールを素手で倒すことは数回あったがこの数を相手にするのは初めてだった。

久しぶりの大規模な肉弾戦にもかかわらず、高揚していたんだろう、

緊張は
感じなかった。

・・・まずは手前の奴！

横から走って勢いをつけた蹴りでトロールの膝を潰す。

その巨体の注意が討伐隊に向いていたせいか、反応は遅かった。

続いてその隣にいた奴のひざに力を込めた拳を。

トロールは持っている棍棒を振り回し、応戦してくる。

風の精霊と同調して全体の位置を把握しながら動く。

近づいて膝を破壊する。たったそれだけのシンプルな作業。

それにもかかわらずこんなにも心躍るのはさっきの衝動がこの作業に向いてしまったせいなのか。

・・・あー、体動かすって素敵。

また一体と潰していく。

トロールの振るう棍棒をギリギリでよけるときのあの感覚もまた良い。

そうこうしていく内に最後の一体が倒れた。

とりあえず一通り終了、後はとどめを刺していくだけだったと思っていると

討伐隊の連中がこちらを凝視していた。

・・・じろじろはやめてほしい。

心の中で文句を言っていると一体のトロールが起き上がってきた。まだ起きちゃだめですよと言わんばかりに拳をたたきこむと今度はぴくりとも動かなくなった。

「飽きた。」

息は少し切れている。とりあえずとどめと転がっているトロールの頭を潰していくことにした。

高揚していた心が切れてしまったのだろうか、やはり生き物の頭、それも哺乳動物と思われるものの頭を潰していくのはやはり気持ち悪い。

衝動は発散できたものの、気持はあまり晴れなかった。

・・・やっぱり、偽物じゃ駄目だ。

本当に、（犬や猫を）なでなでモフモフしないと駄目だ。

落ち着きを取り戻し、作業に没頭していると討伐隊を率いていたと思われる

周りよりも少しだけ身なりの良いメイジの男が話しかけてきた。

「助太刀、感謝する。私はこのアール領の領主ケイニス・アールという。」

そちらのお名前をお聞かせ願えないだろうか。」

そう言うのと同時に最後の頭を潰し終わった。

・・・なるほど、そういえば話に出てきてたな。確か伯爵？

ぐしゃっと踏みつぶして血まみれになったまま僕はそれに応えた。

「初めまして。ご存知かと思いますが、私がモード大公に力をお貸ししている

悪魔、ナツメです。」

両手両足、そして服まで血で真っ赤に染まった姿はさぞかし魔王にふさわしい

ものだったのだろう。

後ろにいた隊員は言葉を失い顔に恐怖を浮かべ、目の前にいた伯爵の頬には

最後に潰したトロールのものであろう血が付き、その頬はひきつっていた。

ペットのかわいさは偉大（後書き）

犬と猫が絡むと作者自身も暴走してしまいそうになります。
後、血が付いたままほっとくのは危険。感染症のもと。

悪魔が勢力をのばすその1(前書き)

悪魔が勢力をのばすその1

グッチオ・カサモラータは机の上にある書類やらペン、インクなどを乱暴に払いのけた。

紙は床に散らばり、インクが広がって床を汚していく。

グッチオはそんなこと気にも止めずワインのコルクを抜き一気にあおった。

口元からワインの赤い液がこぼれていく。

「クソッ！」

彼は旧保守派を代表する枢機卿であり、悪魔討伐軍の編成を推進した一人だった。

先日の遠征の失敗を受け、その責任を取らされる人物の一人でもある。

・・・下賤な悪魔ごときになぜ・・・

こんな目に合わせられなければならないのか。

グッチオは3年前の悪魔出現時の討伐隊結成にも関わっていた事もあり今回の討伐軍

壊滅による損害負担は保守派の中でもトップクラス、加えて有耶無耶にしておいた

3年前の損害まで払わされることになり、無一文どころかその借金は既に1万エキューを超えている。

それに加えて責任問題による聖堂議会内部の入れ替えで議員の座を失い

枢機卿から並の神官まで降格させられることになった。

屈辱と喪失による恐怖

彼が今感じているのはこの二つだった。まあ、これまで税金の横領や裏金作りに勤しみ、散々贅沢な暮らしをしてきたのだ。因果応報と言ってしまうはそこでおしまいだが

階級による差別意識が強い彼がそんなことで納得するはずもない。

・・・どうにかして、保守派の勢力を・・・

そう思いながらワインの瓶をもう一度あおった。

すると背後に誰かいることに気づく。もう夜遅くで暗くランプの光だけを頼りに

後ろを向いてその気配の正体を探ろうとすると、急に胸に痛みを感じた。

視線を胸の方にやると銀色の金属光沢が鈍く輝いているのがわかる。その周りは血がにじみ出し、意識がもうろうとしてきた。

「な、なんだと・・・」

その言葉とともにグッチオはこと切れて倒れた。

現在のロマリア宗教庁は、内部の掃除でこたごたしていた。

悪魔に対して、2度の敗北。それがもたらした被害はとても大きく、3年前からあまり順風満帆とはいえない財政は更に逼迫ひっぴやくしている。その影響は何も財政ばかりではない。

責任問題により上層部の入れ替えが激しくなった聖堂議会では派閥の勢力が逆転し、これを機に、と改革派は勢いづいて保守派の掃討に乗り出した。

また、この情報が市井にまで広がると改革派が保守派かという議論が激しく

飛び交うようになりロマリア連合国全体の注目を集めることとなる。

ここで気になるのが悪魔の扱いであるが

改革派の連中も含め、悪魔を擁護をするわけはなく、むしろ宗教庁の権威を揺るがす

天敵という認識はより強いものとなっていた。

ただ、悪魔が引き起こした惨状を利用するだけ。

しかし今は悪魔云々よりも財政の立て直しと保守派の掃討が第一。

それに何度もちよっかい出してまた宗教庁こうちうが標的にされてしまったら今度こそ

ただでは済まないどころか大聖堂が地図から消えるなんてことにもなりかねない、

とそんな感じでしたら悪魔に関しては一時保留ということになっている。

また、一般信徒や庶民は大軍を退けた悪魔はもう悪魔という認識ではなく、既に

『魔王』という呼称が浸透していた。

魔王の働きにより、一時は戦時のように税が上がったもののこれによつて宗教庁ないぶ

の改革が起こり国が良い方向へ進み自分たちの暮らしも良くなるかもしれない

という期待からか、大つぴらには言えなくとも魔王を肯定する意見もわずかではあるが

あった。

「始祖に逆らうなど・・・いつか必ず悪魔には天罰が下るでしょう。」

それでも、失墜するのは教皇や宗教庁の権威だけであり始祖ブリミルの名は健在なまま。

そしてやはり、恐れる者が一番多いのが現状であった。

魔王の存在はロマリアの神官どころか一般庶民まで不安に陥れ、その討伐の成功を

祈ることが定着してしまうほどで、食事前の祈りに

「魔王に神罰を下し、このハルケギニアをお救い下さい。」

という祈りの言葉まで、追加されてしまうほどだった。

まあ、これは3年前から保守派が根回しした結果なのだが、この根回しが

ゆっくりとではあるが着々とハルケギニアからナツメの居場所を奪っていった。

「いやー、大公も人が悪い。どのような手を使って彼を引き入れたのです？」

がははつと大きな笑い声とともにエールのジョッキを一気にあおっているのは

先日トロールの群れと戦っていたケイニス・アール伯爵である。酒で気が大きくなっていたのか、王族に対してこの態度である。

確かにアール領はアルビオンの中では生産性の高い土地が多く、その経済力から

伯爵であるにもかかわらず発言力はそれなりで中の上といった所か。

「どのような手と言われてもね、カールの娘が偶然拾ってきたのでね。成り行き上、といった所か。」

大公は大公で、悪魔の力を借りているのだ。元々王党派だったとはとはいえ

離れていかないとも限らない。内心冷や冷やしていたのだが、一応その繋がりが強化？

できたことに安心しその少し無礼な態度も起こる気にはなれなかった。

アール伯爵の方はというと、ただ貴族派の唱える共和制に疑問を抱いていたのと

それらが気に入らない、という感情から一応王党派についていたのだがナツメと直接対峙することでその態度を改めることになった。

王党派の筆頭貴族でさえ悪魔大公の側につくことを表明するのに二の足を踏んでいる中

真つ先にそれをアピールすることで諸侯貴族たちよりも、栄光側か、破滅側か

どちらかに一歩リードしていることは間違いない。

力に対する恐怖と今後王党派に味方したとして自分に生じるであろう利益、その二つを

以って王への忠誠をより強固なものにした。

太守はその様子を横で見ながらマイペースで飲みつつうまくいったカールさんと言わんばかりに

微笑んでいる。

僕はその様子をあきれ顔で眺めていた。

力で抑え込むことには、やはりどうにも不安が残るのだ。

武力による恐怖政治は必ず破綻する。

これは歴史が証明している。鞭だけ入れ続けていても反発を生むだけである。

どこかに甘しい飴を仕込まないと。

これについてすぐ考えつくことと言えば、

貴族派の中で財産のある貴族を何個か取りつぶしにして、みんなに分けてもらう。

その領地が王領になったりすれば尚なお良い。

まあ、この国の経済に影響しないようなところを選ばなければなら
ないがその点は
勝手にやってくれるだろう。

もう一つは無料が格安で幻獣退治（僕が）。

ここから旅に出る時に必要な資金集めである。権力闘争がこれから
激しくなるので

ばら撒き、裏金など大公側ではいろいろ入用になってくるだろう。
当然、僕に支払う報酬も惜しくなってくる。

・・・その辺は出世払いでいいか。

王党派が勝ってしまった後はどうとでもなるのだ。ここは欲を出さ
ないように

しておけば方々の印象も良くなるし。というかそこまで金は必要に
ならないだろうし。

「ほらほら、ナツメ殿も見ているだけでなくささ、グイツと！」

ケイニスが絡んでくる。酔うと面倒な性格になるようだ。

「いや、お酒弱いんで。それに好きじゃないし。」

元の体でもそうだったが、ワイン数杯で視線がおぼつかなくなる。

第一アルコールに匂い事態好きになれない。

顔をひきつらせ僕は断るのだが、

「何〜！この程度の酒にやられていては魔王など務まりませんよ！！
さっきから一杯も手をつけてないでしょう。」

・・・面倒くさい。この人本当に面倒くさい。

ケイニスは一瞬、魔法があるのだから、というのではないようだ。よく冷やしてくる。」

一応、魔法があるのでぬるい、ということはないようだ。よく冷やされたジョッキが頬に当たる。あまりにしつこいので僕はジョッキを受け取り、しばらくその液体から出てくる炭酸ガスの粒を眺めていた。

・・・嫌な思い出ししか出てこない。

傭兵団では数回、飲まされて吐いた記憶しかない。他にも食事の際にワインを数杯飲んで気持ち悪くなったこと多数。そして今、このケイニス、体育会系のノリで酒をすすめ、もとい強制してくる。

しかし、ジョッキの中を眺めていると出てくる泡が炭酸入りのジュースのように見えたのだろうか、

・・・もしかしたら、味の感じ方も少しずつ変わって来たかも。

傭兵団にいたところに比べて、飲む回数は減って、というかほとんど機会はなかった

ことから酒の味を忘れていたせいもあるのだろう。僕はエールのジョッキを

一気に傾けた。

口の中に液体が流れ込んでくる。

気持ち悪いあの味を感じた時はもう遅く、結局ジョッキは空になった。

「うん。不味い！もう無理！」

ドンッとテーブルにジョッキを置いて言った。

「お〜いい飲みっぷりだ！よしもう一杯」

ケイニスは再びジョッキを手に取る。

「もう無理です。こんな不味いものよく飲めますね。」

その不快感からか、皮肉った口調になる。

しかし、相変わらず拒否は許さんと言わんばかりに

「不味いだと！？何を申すか。さっきの飲みっぷりを見ればわかりますよ。」

笑顔で更に進めてきた。そうした攻防が数分続くとアルコールが脳に回って

きたのだろう、体バランスがとりづらくなって視界が左右に揺れ出した。

・・・気持ち悪い。

「うるさい。」

あまり大きな声ではなく、抑揚もなかったが少なくとも楽しく飲む雰囲気を出すような言葉ではなかった。

急にナツメの雰囲気が変わったことに驚いたのか、三者は固まる。

「どいつもこいつもこっちの都合なんてお構いなしに絡んできやがって。」

大体何だあれば。異端審問とか言ってただ暴力振るってるだけじゃないか……」

そこまで言うと、ナツメの目がうるんできて、グスッと鼻を鳴らした。

「ホント、面倒。怒るのすら面倒になってくる。」

そのままテーブルに突っ伏してさめざめと泣き始める。

ナツメは絡み酒以上に面倒な、泣き上戸だった。

次の日はみんななんだか優しかった。

話を戻すと、一番に王党派で大公側につくことを表明したアール伯爵の影響のせいか

この3ヶ月余りの期間で王党派の貴族、商人の多くは大公の支持に回り王党派の

団結も時間の問題かと思われる。

しかし、どこにでもごねる、というか慎重に慎重を重ねる者はいるものである。

「悪魔の力を実際に見せてほしい。」

その貴族がそう言つと、それぞれに反応を見せる。

「確かにそのとおりですな。力のほどを把握しておけばこちらも動きやすいというもの」

「この目で確かめなければ、納得できない。」

「そもそも六千を薙ぎ払う竜巻など起こせるはずもない。」

というわけで、初めての魔王のお披露目ということになり、現在王都ロンドンイニウム

から北東に数十リーグの所に位置するニューカッスル城にいる。

いろいろ、お偉いさん方がたくさん集まり談笑しているのを城の窓から見ていた。

この城は南部のロサイスに軍港ができる前、重要な軍事拠点で会った場所

大陸から突き出た半島の先、川沿いに発展してきた繁華街から外れた位置にそびえ立っている。

もつとも、重要度が下がってはいるが変わって貿易の拠点として栄え、

現在も造船と帆船の運営によって物資の行き来が活発である。

また、諸侯貴族が多く集まるということで警備は厳重なものになっていた。

真剣な顔をした兵士たちが遠くからでも伝わってくる。

表向きは王党派の少し変わった趣向のパーティーということになっており

中庭には豪華な料理が乗ったテーブルが並んでいる。

貴族たちは二日ほどここで休んだのち、半島の先で魔王のお披露目ということになっていた。

「貴族派で生贄に良さそうな人はいましたか？」

このことは先日いわゆるの酒の席で話しておいた。所謂、飴と鞭の考え方である。

貴族派にとってはずっと鞭だけだが。

「うむ、ハイランドに近い領地でいくつかいい家かな。」

わかっているぞと言わんばかりに太守は答えた。一方大公は

「しかし、本当にそこまでする必要が……」

乗り気ではないようだが、理解はしているはずである。やはり本質は善の方が勝っているようで心が痛むようである。

「する必要はあるんです。恨みは買うことになりませんが内部分裂よりはるかにはるかにましでしょう。」

背に腹は代えられない。これらの根回しもシヤジャルさんやティフアニアを出した時

の緩衝材にするためのものなのだからインパクトも大きい方がいい。

このお披露目には貴族派の連中は来ていない。密偵は放っているかもしれないが

それは放っておけばいい。どうせ、信じていたとしても欲の深い連中なら

それを内外の貴族を蹴落とす材料ぐらいにしかしないはずだ。仮に団結したとするなら、まとまる前に闇討ちすればいいのである。報告を受けてこちらに流れてくるのもいいが王党派の奴らに与える餌の確保も重要なのだ。何かと理由をつけて潰す。

・・・やってることは宗教庁と同じか。

ため息が出てくる。貴族派の連中は欲にまみれたものが多い。

しかし、その部下は？その家族は？子供たちは？

これを見るとどうにも気が滅入ってくる。多分殺さなければその

憎しみは僕に
向けられるんだろうな、と。

自ら敵を増やし続けている自分の行動に矛盾を感じつつ、3日目の
お披露目場所の
下見に行くことにした。

絶壁から下を見ると雲の隙間から海が見える。

高さは2500〜3000メートルといった所か、一定周期で海上を
最低2000メートル

程で低空飛行する時期がある。それが三日後。海からの風は湿気を
よく含み、気温の
上昇も伴ってか若干、不快に感じる。

深く息を吸い込み、集中力を高めるために体をリラックスさせてい
く。

.....

風と自分が同化するかのような錯覚に身を任せ周囲の精霊に呼び掛
けていく。

・・・調子がいい。

更に範囲を広げていくと、道を歩く人々や馬の気配や鳥、山ネズミなどの小動物の気配まで感じ取られた。そんな中、林の中に人型の気配が六つ、近づいて来た。

それぞれ、あまり音をたてないようにそれでいて速足だった。

・・・明らかにこっちに敵意があるよ・・・。

とりあえず風の刃を作る準備をして、周囲に張り巡らせておく。そして立ち上がり、その六人が林から出てくるのを待った。

六人の気配は林の出口で立ち止まり互いに身振り手振りで合図し合っている。

その数秒後、六人のうちの四人が杖らしきものを取り出し呪文詠唱を始めた。

四つの呪文は火と思われるものが2つ、残りの2つは風の精霊が動かされているので

風の呪文だとはっきりわかる。

火の魔法は放っておいて、二つの風魔法に干渉し精霊の制御を奪う。

そして、林の方へ振り向くと炎弾が二つ向かってくる来るので横に飛んでよけた。

着弾した場所は軽く爆発を起こし土を巻き上げ地面を黒く焦がした。

先制攻撃が失敗したとわかると、攻撃に加わらなかった二人は身を

(翻ひるがえ)して
走りだす。

・・・報告か？

その可能性に気付き、周囲に展開しておいた風の刃をその二人に殺
到させる。

林に向かつて歩き出すと黒いローブに身を包んだ4人が僕のいく方
向をふさいだ。

「何か用ですか？」

その返答は炎弾だった。待機させておいた風で相殺させ、目の前の
一人を残し残りの
三人は風の刃で切り刻んでいく。そして身をかがめ一気に飛び出し
目の前のメイジを
抑え込んだ。

「誰に頼まれた？」

杖を取り上げ、へし折る。フードがめくれてメイジの素顔が顕あつちにな
る。

・・・性別、女 年齢20前後 といった所か。顔には・・・見覚
えなし。

そこから得られる情報を機械的に処理していく。
女は話すつもりがないようでは黙ったままだった。

「話してくれば酌量の余地もあるんだけど・・・」

「誰が悪魔の許しなど。」

「誰が許すなんて言った？ただ他の人殺しちゃったからあなたから聞き出す

しかないだけです。まあ、話してくれないなら専門の方に任せるんですけどね。」

しかし尋問、もとい拷問を専門とする人間はその裏方の忌み嫌われる職業の性質上

少なく王家に仕えるとある一族がそれを担っている。

歴史と伝統あるこの一族の拷問技術は実際目にすることはなかったが書面で

見ただけでも身震いするものだった。まあ、要するに

「専門の方の拷問ってほんときつ〜いらしいですよ。見たことはないけど。」

ここで吐いた方が楽になれると思うんだけどなあ。」

それでも話す気がないようで、

「早く殺せ。」

そうやってきた。そういうわけにもいかない。彼らの首謀者は今回の飴として

生贄になってもらうのだ。とりあえず彼女が身につけていた数本のナイフを捨て

城に連れていくことにした。

「どづいつつもりだ。」

「とりあえず、ウィリアム大公に報告してどうするか決めてもらおう。」

ちなみに現在彼女の姿は両足と腰の後ろ辺りで手首を縛られ、僕の肩に担がれている。

道行く人の視線が集まるがそんなこと気にせず走る。

ニューカッスル城の前につくと、当然警備兵にとめられる。

「ちよつとした暗殺者です。大公に報告するので身柄を預かってもらえませんか。」

「ちよつとしたって・・・わかりました。地下牢に入れておきますので御用の際にはなんなりと。」

・・・ああ、このやり取り。イイ。

ちゃんと味方であるとかわかっていればいきなり剣を突き付けたり、なんてことにはならないのだ。そんなことを考えつつ、

「それじゃ大人しくしててね。しゃべっちゃえば悪いようにはされないと思うよ。」

・・・多分だけど。」

何か叫んでいたけど気にしない。さっさと大公に報告を済ませよう。

「何！？暗殺者だと！」

大公はそれに驚愕し太守も厳しい顔をしている。

確かに前々からこの事態は予測していたことだが実際起きるとなるとやはり

落ち着きを保つたまま、というのは難しい。

「犯人のうちの一人は捕えて地下牢に入ってます。とりあえず現場で吐いて

くれなかったので・・・」

「そうになると警備の強化とお披露目につかせる兵の数が・・・」

太守が何やらぶつぶつ言い始める。僕は大公に

「よかったですね。」

と親指をぐつと立てて言った。

「どこが！？というか何でそんなやり遂げました、みたいな顔してんの！！」

「表だって王家に反逆したことがばれれば、その家は取りつぶし、財産も」

取り上げられて王領も増える、いいことづくめじゃないですか。」

大公は聞いちゃいなかった。そのままぶつぶつと何か言い始めたので放っておいて

「カールさん、首謀者が出てくるまでは……」

「わかっている。この街を封鎖しておくよう手配する。」

そう言っただけで部屋を出て行った。

「殿下、あなたは三日後のお披露目で話すスピーチでも考えて下さい。」

僕がそう言っただけで、大公は既に落ち着きを取り戻し

「ああ、それについてなのだがあんな場所で一体何をするつもりなのだ?」

「被害が少なく、それでいてよく見える場所ということですよ。内容は……」

打ち合わせは夜遅くまで続いた。

悪魔が勢力をのばすその1（後書き）

お披露目と言ってもできることは限られていますので多分ご想像の通りかと。

後、原作読みなおして気づいたんですが、

トゥールの戦いというのがあってそのときのガリア・トリスティン連合軍が

サハラ西部でエルフ軍と衝突し、人間側が勝利する

という話をモンモランシーが言う場面があるのですがその時の連合軍は七千。

対してエルフは五百だったそうです。

主人公は一对六千で勝利。

やりすぎた感が否めない。

悪魔が勢力をのばすその2

快晴。

アンスールの月（7月）

高度二千メートルを浮遊しているアルビオンの、少なくともこのニューカッスル地方に

おいては雲はほとんどなく、空は東京の薄い水色の空とは比べ物にならないほど

濃い蒼を呈していた。

。「この国の中枢を担う貴族をはじめ、商人、神官の方々（かたがた）

本日は御集り頂き感謝する。我々の始祖がこのアルビオンの地で国を興されて

既に六千年が経過している事は周知のことと思う。

その六千年の間この国は何度か窮地に見舞われることもあったが我々は何度もそれらを解決して今に至っている。

我々が団結することによってだ。」

壇上にはウィリアム大公が演説を、その後方では椅子が並びアルビオン王の

ジェームズ一世を始め、ニューカッスル公爵、古く伝統があり王家に対する

忠誠の厚いノーフォーク公、最近貿易で経済力を増してきたポートランド公と

十数人が並び、演説中、僕は大公の後ろでSPのようにして立っていた。

・・・めっちゃ見られてる。

風と同調して会場の様子は手に取るようにわかる。不審者はいないのだが

・・・一番見られてるのは大公なんだけど、それでも・・・

ちら、ちらつと視線がこちらを向く。拡声のマジックアイテムを使っているせいか

大公の声はよく響いていた。

「そして今、我々が直面している問題は王権の失墜である。貴族派は共和制、

選挙に基づく平等な政治をと声高に叫んでいるがその実態は何だ！
欲にまみれた人間ばかりでこの国のことを本当に考えている者がどれほどいるのか。

そして現在王党派は貴族派に押されつつある。しかしここで屈してしまえばこの国は
その欲にまみれた一部の者に食い物にされ、その力を衰えさせるばかりだ。」

大公は時折見せるへたれな性格を全く感じさせないほど威厳に満ちていた。

「貴族が求めている先にあるものは変化による発展ではなく、変化による滅びだ。

もう一度言う。我々は団結によって危機を乗り越えてきた。

そして今、もう一度それをする必要がある。

この度集まってもらったのはこの団結のためなのだ。

今直面している試練は我々の団結なくして乗り切ることができない。

「
先ほどまで僕に向けられていた視線はほぼ全て大公に向けられ、
聞いている者たちが皆、真剣な表情で演説に聞き入っている。」

「そしてこの度我々に力を貸してくれる者を紹介しよう。」
すると大公は一步前に入るように目くばせし、

「今、ハルケギニア中で話題になっている悪魔、ナツメだ。
彼は現在追われている身でありながら私の考えに共感し、力を貸し
てくれることと
なった。」

そこでいったん区切り、深く息をした。

「確かに、始祖の直系に関わる私が始祖に敵対する悪魔の力を借り
て王の力を
取り戻そうとするのは疑問に思うことだろう。悪魔の力などなぜ？
と。」

悪魔の力は確かに神聖なものではない。しかしその力が強力なこと
もまた事実だ。

神聖でないからと言って使わずに滅びるといふのなら
私は使ってその汚名を受けることもいとわない！
さあ、今こそアルビオンの誇りと団結を取り戻し、
共に戦おうじゃないか！！」

とりあえず前置きが終わる。前置きと言っても会場は熱気に包まれ
歓声と拍手が巻き起こっていた。
大公はそれを制し、

「さて、前置きはこれぐらいにしておいて今日御集り頂いた最大の目的は彼の力を皆に見せておくことだ。」

行け、という手の動作とともに、風を纏い飛びあがりそのまま大陸の外へ出た。

「後ろをご覧あれ。これから見せるのはあのロマリアの討伐軍を全滅に

追いやった力です。」

晴れているせいか、海の表面は太陽によって暖められあまり強くはないが上昇気流を感じる。

上空の冷たい空気で竜巻を作り、海面にぶつける。すると海面付近の暖められた空気は急激に冷やされ、水分が凝結し軽くなることで上昇気流を生み出す。竜巻のまわりを上昇している空気はその高速回転に巻き込まれ更にその竜巻を太く強化していく。

・・・うわ、すごい効率いい。

まだ大して精気は注ぎ込んでいないのに竜巻の高さは三百マイルを超えていた。

更に上層の空気を海面付近に送り続け、竜巻はさらに巨大化していく。
しかし、付近の海面が冷やされ切ってしまったためだろうか、しばらくするとそれもなくなってしまった。

・・・これでも十分すぎるんだろうけど・・・

最後の仕上げ、というかできるだけ派手ということで、岸に戻るための精気だけを
残してあるだけ注ぎ込んでいく。

縦千メートル、横幅三百メートルの巨大竜巻ができ上がった。
環境のせいもあってかかつてないほどの出来栄であった。

・・・ついに自然の限界をこえた。

最後に注ぎ込んだ精気が効いたのか内部から高速回転している空気の摩擦で雷が発生し、
その放電現象がよく見え、雷が鳴る時のあの轟音まで時々聞こえる。
こんなのが直撃すれば都市は滅ぶな。

「ナツメ、もうよい。」

大公の声が聞こえる。とりあえず竜巻の進路を設定しアルビオンから遠ざけ、自分は大陸に着地する。観客の視線が集まり、疲れも相まってか非常にうっとしく感じた。

壇上に戻ると、

「あれ、消さなくて大丈夫なのか？」

と小声で聞いてきた。

「無理。消せない。」

あんなもの消そうにも精気はもうすっからかん。環境に依存したせいもあり、たとえ満タンの状態でもせいぜいサイズを半分にする程度だろう。作ったら作りっぱなし。その事実には大公は呆然としてしまいそうになるが

「御覧の通り、彼の力はとても強力だ。

しかし、彼は手を出さなければ自らむやみやたらに力を振るうことはないだろう。

そのことは王と私が保証する。

王党派の者たちよ、今一度自分たちがすべきことを再考してほしい。本日の集会はこれにて終了とする。」

なんとか正気を保ったまま、最後のはちよつと強引な気もするが悪魔のお披露目は無事終了した。

ちなみに数時間後ゲルマニア沿岸部をこの竜巻が直撃し、海岸線の形が変わった。

「ふうつ、一時はどうなる事かと思ったが無事終わることができたな。
しかし、あれ程の竜巻など一生に一度見れるかどうかという代物だったな。」

部屋に戻ると大公は伸びをしながら僕に言った。

「ええ、あれほどのものができるとは僕も予想外でした。」

・・・この能力、環境依存度が結構高いからなあ。

「自分でもまだ把握し切れてない部分もありますし。」

水の中にもぐっていたら使えないし、山火事で周囲の温度が高すぎると

感覚がバカになるし。

「それより、昨日の暗殺者なんですけど・・・」

脅しの意味も含めて縄につないだまま警備兵をつけあのデモンストレーションを

見させていたのだ。告白しているといいのだが。

「それなんだが、いつの間にかケイニスの奴があ的女性を口説いてしまっ・・・」

いつの間にそばにいたのか太守カールさんが答えた。

は？今なんと？

大公も当然驚き固まる。

「どうやら首謀者はマンチエスター公爵らしい。」

・・・ここにきて大貴族か。

貴族派の代表格の一人である。

マンチエスター領は大陸の北西の川沿いに発展した商業の街を中心に郊外では大麦の栽培も盛んでバランスのとれたいい領である。

蓄えられた財産にくわえ、王国内でも経済活動が活発な地域に入る。

「いい餌が手に入りましたね。」

「全くだ。」

太守と僕はうなずき合う。大公はげっそりしているが。

取りつぶしと言ってもトップが少し変わるだけで、

庶民にはほとんど影響はないだろうし

経済的にも豊かな地域が王領に組み込まれ財政は潤沢、

他の貴族たちにはマンチエスター公が屋敷に蓄えていた財産でも与えておけばいい。

「で、ケイニスさんはその後どうしたんですか？」

「嫁にすると行って、すまないけど一度領に帰るんだと。奴もいつまでも独身」

というわけにはいかないからな。」

・・・行動が早い人だな。というか独身だったんだあの。

どついう経緯だったか知らないがとりあえず今はこの巡り合わせに感謝しよう。

・・・それにしても疲れた。

肉体的にはないのだが何となく気だるい感じがする。

時刻はまだお昼を過ぎたばかりで
外では例によつて豪勢な昼食がテーブルに並んでいた。

「ところで、マンチエスター公つてこのパーティには来てないんですよね。」

「ああ、奴は貴族派の代表格だからな。そう単純に敵地に来るなんてことは
ないだろう。」

大公は今後について考えているのだろうとあごに手を当てながら言った。

ということは今回のお披露目のことも直接見たわけではないのだから早期にたたけば
なめてかかってくれらるだろう。

「とすると、とるべき手は先手必勝、すぐにも領地を取り上げられる準備を
するべきかと。」

「むづづ、演説で疲れているのだが……仕方あるまい。」

大公は太守の言葉に渋々従い、部屋に戻って行った。

……おなかすいた。

それに加えて精気はすっからかん。パーティの席に加わるわけにも
いかないの
で
近くを歩いていたメイドさん頼もつとした。

「あのー……」

そのまま通り過ぎてやり過ぎす気だっただろう。関わりたくない
オーラが彼女から
発せられていた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、何か粗相がありました
か？というか
殺すのだけはお許しください。故郷の村の家族に仕送りしなきゃ
いけないんです。」

恐怖を顔に浮かべ終いには泣き出してしまった。遠目で見ていた他
のメイドや
警備兵は、

「ああ目をつけられてしまって。かわいそうに」

「大公はああおっしやっていたがやはり……」

仕方ないので自分で厨房に行くことにした。

パーティーから三ヶ月も過ぎると、王党派全体ののまつまりはほぼ完全なものとなった。

大公の屋敷を訪問していく貴族たちの顔には僕に対する恐怖感や警戒は

あまり感じられず、大公の演説や考え方に共感していたり、しきりに褒めちぎっていたりとその態度は好意的なものだった。

大公曰く

「あの力が味方の内にあるのだ。それ故の安心感もあるのだろう。」

それからマンチエスター領はというと、結果から言うところ取りつぶしになった。

暗殺者の彼女の証言があるにもかかわらず公爵はそれを否認し、貴族派の他の連中がかばいだてする。

太守と共に出向いた時にはまともに取り合ってくれなかった。

あの鼻で笑うような表情のひげ面がこちらをイライラさせる。

実力行使。

この国にきつちりと定まった法律何てものはない。

それぞれの領内ではその領主の裁量でことが決められるので法律というものが必要とされていなかった。

そういうわけで、国家反逆の罪のこともあり多少の実力行使は大目に見てくれる。

そして、そのことをマンチエスター公にちらつかせてみたのだが、

「やれるものならやってみる。」

屋敷周辺に竜巻を発生させ更地にし、直接殴りこんで取り押さえることとなった。

まあその後の公爵自身の顛末は、反逆者として『処理』され手はず通り、マンチエスター領は王領に組み込まれ財産は王党派で仲良く分配された。

当然この動きには王党派以外の他の貴族たちも反発する。

反発した家のまわりを竜巻に襲わせ、更地にする、という作業が続き、その噂が広がっていくと次第にそれらは影を潜めていった。

・・・もう少しごねてくれればよかったのに。

とりつぶした家の数、公爵家：1、伯爵家：8。

この三カ月は移動続きで中々楽しかった。

そして現在、ハイランド地方のとある領に向かって馬車を走らせている。

そこは取りつぶした伯爵領の内の一つなのだがそのさらに北部はトロールの生息地となっている。

トロール

僕の認識ではバトルジャンキー？のような位置づけである。こいつらには戦いを避ける

なんてことはなっから頭がない。遭遇したら必ず追いかけてくる。

別に腹が減っているわけでもない時も追いかけてくる。

この元伯爵領、現王領はその脅威にさらされ領民のほとんどが避難中で残っている者は

屋敷の使用人たちと警備のものくらいだった。

「討伐ですか。」

「うむ、相手もさることながら数も数だからな。今すぐとついうわけではない。」

伯爵代理の王軍の士官ウォルムは椅子に座ったまま答えた。

「調査の方は？」

「これを。」

傍にいた執事風の初老の男が一枚の紙を渡してきた。

それは、ここハイランド地方の高地の地図で所々バツ印がつけてあった。

「印の部分がトロールのすみかの可能性がある場所だ。

その多くが洞窟となっている。」

「可能性？」

確定情報じゃないのか。それに敵の数もわからない。

「そう、なんせ相手はトロールだ。調査だとしても下手に兵を送り

込めば

犠牲がでることもある。そして今は引き継ぎや領民の避難であまり人員を割く

余裕もない。現在数人の兵をあて調査中だ。」

要は時間がかかるということ。

「でしたら、こちらの方で調査も受けましょう。」

「何？しかし君は実際戦うのだから体力は温存しておいた方がいいのではないのか。」

「調査が終わるの待ってたらいつになるかわかりませんよ。」

それに、こういうことは自分でやらないと。」

人任せは不安だ。この世界の軍にリーダーなどの近代兵器が存在するわけもなく

人の目で見てもそれを報告することになる。

大きな誤差もあるかもしれない。取りこぼしがあるかもしれない。

「そういうのを捜すの、得意なんです。」

そういうと、彼は了承し僕は部屋を出た。

部屋に残された二人は張りつめた（といってもそちらだけで勝手に張りつめていた

ただだが、) 空気から解放されたため息をついた。
しばらく沈黙が続き、おもむろに執事風の男が尋ねた。

「どうでしたかな。彼の印象は。」

「いや、どうというか何というか見たままだよ。」

ウォルムの額には汗の粒が出ていた。

「いざ話してみると普通、という印象しか受けなかったが討伐の話
になったとたん

あれだ。味方とわかっていても油断せず自ら全てを行うと言う。

それに先日あの魔法、加えて調査に自信があるということは隠密
性にも優れる

と言うことじゃないか。魔王と呼ばれるだけある。」

「まだ何か隠し玉があってもおかしくありませんね。」

執事風の男は冗談混じりに言った。

いいえむしろ見敵必殺(サーチ&デストロイ)しかできません。

「おいおい、よしてくれ。あれだけでもいっぱいっばいなのよ。」

その冗談に乗り、互いに苦笑いする。

「彼、裏切らないよね?」

「さあ、それは大公次第でしょう。私たちが考えることではないか
と。」

まだ、悪魔に対する不安は大きいようだった。

時間がたつと年もとる。ティファニアが一歳になり歩き始めた。まわりは、その成長を喜び身内でささやかに祝った。

それから大公の訪問頻度が最近増えている。

というより自分の屋敷にいる時間の方が少ないんじゃないのか、というほどに。

いくら仕事関係で来ることが多いとはいえここ三か月は多すぎる。どうにも不安である。

「正妻はどうした。正妻は。」

真の敵は暗殺者じゃなくて大公の正妻でした、なんてシナリオはやめてほしい。

凶器は暗殺者のナイフじゃなくて、正妻の包丁。動機は痴情のもつれ。

「悪魔大公って称号の影響が彼女にまで及んで、その、気まずいのだ。」

帰ってくるとなんだか余所余所しいし、かと思ったら急に優しくなるし。」

夫との距離を測りかねているようである。

悪魔を匿ったことでそれにとりつかれてしまったと思っていた所、先日の演説で違つとわかつたためである。

まあ、そんなことナツメにわかるはずもなく、

「浮気？」

「なにいいいいい！」

予想以上の反応である。

「最近ティファニアにはかりかまっているからそういうことになるんですよ。」

シヤジャルさんも仕事続きで文句言ってたし。」

・・・男が甲斐性見せるって大変だな。

大公は表向きは正妻一人、裏に妾^{シヤジャル}二人だけでこれなのだ。

大貴族の中にはたくさん女性の性を困って、しかも不満がどこからもでない、

という男も存在する。

ギヤルゲーにありがちな設定ではあるが全員から不満がでないとか尊敬に値する。

「殿下、こちらの書類なんですが・・・」

「って、こんな時に仕事お！？」

太守はいいタイミングで部屋に入ってきて言った。

・・・これは良い板挟み状態。

結局話し合ったら誤解も解けた。大公はゲツソリしていたが。

回想はこのぐらいにしておいて、目下の問題はトロールである。普段穴倉を住処にしている分、竜巻で一気にお掃除、というのはいきそつにもない。

・・・一々中に入つての『処理』か

積極的にトロールを殺すことに対しためらいはない。

コボルトやゴブリンだと、たまに言葉を理解し話までできる者がいる。

火竜山脈ではさびしくなるとその集落へ酒や食糧を手土産によく行った。

人間と少し考え方が異なるぐらいで別に凶暴とか狡猾とかそんなことはなく

むしろ他者を受け入れるだけの度量も持ち合わせた賢い種族、という印象だった。

というか、ゴブリンの方はもうゴブリンホビットというか小人だった。

酒盛りと祭り事が好きで、自分たちに危機が迫ると信じられないような力を発揮する。

サラマンダーの群れを迎撃した時、それを目の当たりにした。

一方トロールは他種族に対し、強いものには手を出さず、弱い者いじめが好き

という印象だった。お前ドラゴンにも喧嘩売れよ！

そうしているうちに地図の場所についた。

・・・中には、数体いるだけか。

洞窟の内部はかなり広く、その規模に対して頭数が少なすぎる。

・・・残りはお出かけ中？

狩りか、それとも住処を移したのか。

周辺を探ってみると付近に十数体が群がっている。

・・・とりあえず今日はこれを狩って終わりにしよう。

現場に向かって飛んだ。

上空から見ると森の中にいるようで木が邪魔でよく見えないがその隙間からは犬のような二足歩行の動物が見えた。

トロールはそれらを大雑把にはあるが円形に囲みじりじりと距離を詰めている。

・・・^{コボルト}餌と捕食者か。

トロールに向かって数発風の刃をたたきこみ、円形の中心に着地する。

攻撃の当たったトロールは死んでいるもの、腕や体に傷を負って呻うめいている

もの突然の乱入者に威嚇するもの、とやはり逃げる様子は見られなかった。

・・・だから嫌いなんだ。

最初の数発は威嚇のつもりではなかったのだ。恐がって逃げてくれ

ばそれだけ楽に
事を治められるし、無駄に殺さずに済む。

コボルトの方はコボルトの方で解らない言葉で何か言っていた。

何度もトロールとは対峙してきたものの、やっぱり大きく感じる。
見上げるといつも作業とばかりに斬り飛ばしてきた区別のつかない
顔が見える。

なんだおまえ。いてまうぞ。

そう言っているように見えた。

戦い（棒立ちの状態で風の刃をトロールに殺到させたただけなのだが）
数秒で終わった。

最近、精霊の召喚速度も上がってきた気がする。

「くえ r ちゆいお p @ あ s d f g h h k l」

「共通語をお願いします。」

コボルトやゴブリンはエルフと同じ言語を扱い、
その他に共通語として人間の言葉も使う。

彼ら曰く似通っている部分が多いらしいのだが発音されると
何を言われているかさっぱりである。

「危ない所を助けて頂きありがとうございます。」

「いえ、こちらでも仕事ですので。それにしてもどうしてこんな場所に？」

犬というよりはキツネに似た顔のコボルト、おそらくはリーダーか何かなのだろう、

が流暢な共通語で言った。

人里に被害を及ぼすコボルトとは違い来ている服も人間に近いものがあり整えられた印象が知的なものを感じさせた。

「住んでいた所を人間に追われて・・・こちらに流れてきた所でも・・・」

トロールに襲われていた。渡る世間は鬼しかない。

人間と骨格は違えど、その悲しみに満ちた表情から出る雰囲気は人間と何ら変わらない。

その後ろを見ると、小さな子どもたちもいた。

・・・超かわいい。

じゅるり、と脳内で涎をすする。コボルトは幼少時はほとんどイヌ科の動物と変わりが無い。四本足で歩き成長していくと二本足でも歩けるようになる。

四本で走ることもできるが。

要するに小さいのは手足の肉球が小さいの以外は犬と見分けがつかない。

・・・これは保護するしかない！

「もしよければここを治める人間の屋敷に一時身を寄せてはどうでしょう。」

その人間でしたら僕の『お願い』も聞いてくれると思いますし。」
お願いと言っても命令に近いけどな。

「しかし、人間には・・・。」

やはりトラウマになっている者もいるようで僕の言葉でざわつきだす。

「僕はここ一帯のトロールなどの害獣を一掃するつもりです。終わったら

ここに住めばいいじゃないですか。人間たちも認めてくれますよ。というか認めさせます。」

そして子供たちでモフモフする！

「おお、まさしく大いなる意志の導きじゃ。」

コボルトの老人であろうか少し痩せた彼？から発せられた一言は彼らの

表情を笑顔？に変えた。全くわかりづらい。

「やはり人間にとっての悪魔シャイターンは我らの大いなる意志の化身であった。」

他種族であっても知っている者は知っているようである。
そう続けると一斉に跪き

「我らをお導き下さい。」

ナツメはコボルト達から化身アバターの称号を授かった。

悪魔が勢力をのばすその2（後書き）

今更だけど、主人公の使う能力でメインに空気を圧縮して使っているのですが

空気を圧縮すると熱エネルギーも一緒に圧縮され、物が斬れるほど圧縮すれば

かなりの熱が発生するはず、

という考えが浮かびました。

でも、本当に今更だし、ハルケギニアの物理法則の不思議と言うことで片づけておくことにします。

後、大公の演説は映画インディペンデンスデイ（1996年 米）の大統領演説を見ながら書いた。

コボルト、ゴブリン設定ねつ造。

大いなる意志（コボルト、ゴブリン側）と大いなる意思（エルフ側）、
いろいろ考えるの面倒でちょっと違うだけに見てみた。後で見ると
わかりづらい。

悪魔が勢力をのばすその3

ハイランド地方はその名の通り、高地である。

そもそもアルピオン大陸全体が高地であるのだが、地表から離れているはずなのに
どういうわけか空気が薄い、ということがなく人々の肺活量も普通である。

しかし、この大陸でも高地に上ると気圧がさがり息が苦しくなると
いう現象が起こる。

この大陸それ自体に何らかの加護があるのか、それともこの大陸を
浮かせている
と考えられている風石の効果故なのか、まあそんなことはどうでも
いい。

「あゝ、ぎもぢわりいゝ。」

討伐のお供、もとい報告係に連れてきた兵士の高山病である。と言
つても三人いる内の

一人だけで他は若干だるそうでありながら、それなりに元気だった。
具合が悪そうなのは伯爵代理のウォルムで登山経験がなく、
部下に肩を貸してもらっていた。

このような少人数でトロールのすみかに向かっているというのに三
人の雰囲気は
軽いもので

「あの酒場にいた娘なんだけどさ・・・」

任務中ですよ。

この高地は風石の鉱脈があるのだが、トロールの生息地ということ
で長い間手が
出せずにいる。まだ手つかずの鉱脈。掘り放題。王党派の重要な
財源になり得る。

・・・掘り尽くしたら大陸が落ちるなんてことにならないかね。

現在、テンションは割と高めである。トロールが掃討された後、こ
こはコボルトの
集落になる予定なのだ。当然風石の採掘権は王家に帰属する以上コ
ボルト達は人間と
関わることになるだろう。王家という後ろ盾があれば人間も手を出
してくることもない。
そのことを彼らに伝えたら、コボルトの他の部族にも呼び掛けてみ
るとのこと。
すでに二百以上のコボルトがここハイランド地方に集まってきてい
る。

・・・思っている以上に大所帯になりそうだ。

また、このコボルト達はは土系統の先住魔法に優れたものが多く、
風石採掘も

彼らに手伝ってもらうことになりそう。長い時間をかけ双方が歩み
寄れば人間と

コボルトが同じ街に住む、なんて光景も見られるようになるかもし
れない。

先日コボルトの子供たちの頭をなでなでして充電しておいたので以前から溜まっていた
宗教庁に対する嫌な感情もすっかり大人しくなり、以前にも増して前向きになれた
気がする。ちなみに僕が子供の頭を撫でると

「大いなる意志の祝福だ。」

とか言っつて、うちの子もお願いしますといった感じで神格化されているようだった。

しかし、困った事に『大いなる意志』といってもエルフたちが信仰している

『大いなる意思』 〃 『精霊』とは違い『精霊』の上位にそれらを統べる存在がいると
考えられ、それがコボルト達にとっての『大いなる意志』ということになってる。

・・・エルフが聞いたらどんな反応するだろう。

「来ます！」

その言葉とともにウォルム達を下がらせる。

トロールの巣穴になっている洞窟は、崖の横に開いた高さ七、八メートルはあるのか

という大穴だった。入口には数体のトロールがこちらに気づき声を上げる。

仲間を呼んでいるようだ。見慣れた巨体が次々と穴から出てきた。

風の刃の連射し出てきたところを叩いていくが、今度ばかりは数が多く積み重なる

死体の山が邪魔で、次第に攻撃が当たりにくくなっていく。

・・・無駄にでかいから。

そうしていると群れのうちの数体が飛び出してきた棍棒を振り上げてくる。

とっさに後ろへ飛び、目の前の一体にの首を飛ばす。

それに続けと、大きいものから小さいものまでこちらに殺到してきた。

・・・百近くいるな。

死体の数はもうすでに二十を超えている。にもかかわらず洞窟から出てくる勢いは強くなるばかり。

上空に飛びあがり、洞窟内に意識をやると入口には列ができています。

・・・百じゃきかないかも。

「撤退します！走ってください！」

先ほどから手汗握るような表情で戦闘に見入っていた報告係達は予想外のセリフに驚き

つつも走り出し、

「どうした？こちらが優勢ではないのか。」

走りながら士官の男が尋ねてきた。

「数が多すぎます。おそらくは百以上かと。」

その言葉に冷や汗を浮かべ、杖を取り出し、『ライトネス』を唱え体を軽くし

すさまじい速度で逃げだした。

「おお、速い。」

・・・高山病はどうした。

馬ぐらいの速度は出てるんじゃないだろうか。

数十分逃げ続け、兵達は既に汗びっしょりで息も荒い。

命の危機がひとまず去ったことから木にもたれかかり休んでいた。

「魔王でも逃げることもあるんですね。」

士官の部下二人のうち一人が息を切らせながらそう言った。

「そりゃ逃げますよ。というか逃げるのが専門みたいなものです。」

その軽口に先ほどの緊張感が吹き飛び三人で笑い始める。

「しかし、数が多いなら竜巻で吹き飛ばせばいいだろう。どうしてあそこで撤退なのだ？」

現場の洞窟は狭い崖に挟まれた所にあった。

「その竜巻を作るのにも使うのにも向かない地形なんですよ。あそこは。」

加えて死体の山が積み重なり通気性も悪い。

風の運用に制限がかかることを伝えると納得したようでした。

「なるほどいいことを聞いた。魔王の弱点か。」

士官は意地の悪い笑みを浮かべるが、その部下は

「それでも三十近く倒してましたよね。風のスクウェアでそんなことできる奴なんて

トリストインの『烈風』ぐらいのものですよ。」

斬って捨てる。

「とりあえず、今は体勢を立て直してから再度攻撃を仕掛けようと思います。」

「うむ、あれほど必死に走ったのは久しぶりだったな。早く戻って休みたい。」

屋敷に戻ることにした。

「火メイジの手配ですと？何でまた。」

執事の男はそう聞き返した。

「いや、ああいう奴らの死体はほっというて他の動物が片付けてくれるなら

いいんですけど、残ると疫病のもとになるんです。」

あれだけの肉塊だ。周辺の動物が集まっても腐る前に食べきれるか疑問である。

それにあれの倍以上の死体が今後増えてくる。汚物は消毒しなければならぬ。

「おお、そう言えばこの間もそのようなことを申しておりましたな。」

衛生概念、とまではいかなくても病気の予防はまず清潔にすること、と言っただけ。

最近、適当言ってるだけの時も

「魔王が言っんなら間違いない。」

というようなことを言い始める。慌てて訂正したけど。

・・・迂闊な発言ができない。

もし、2ch用語なんて出して浸透してしまったらファンタジーが台無しになってしまう。

「とりあえず何人か、十人ぐらいでお願いします。他はコボルト達に手伝って
もらいますので。」

空腹を感じていたのでそれだけ言って部屋を出た。

ナツメが退室した後、執事の男は腕を組み考える。

コボルトを従えた。それも力で抑え込むことなく。

・・・まさに魔物の王

竜や亜人を従えることができるという噂を彼は否定していたがそんなことはなかった。

現に従え、しかも崇められているのだ。彼は偶然だと言っていたがこつも重なる偶然
などあるものか。それにトロール掃討後の風石採掘には彼らも協力してもらおうと言う。

・・・人間と亜人の共存。

ブリミル教から見ればこの考え方は異端そのものである。加えて聖

地奪還には非常に
否定的。本人いわく、金がかかるからと。そしてその後、聖地奪
還よりまず内側に
目を向けるべきだとも

確かに前領主は酷い人間だったし、さらし首？といったか、にされ
るのも当然と

言われるような行いも数多く犯している。この国の貴族は腐敗し始
めている、いや
実際腐敗している。

・・・故に国内の団結か。

大公の演説が思い出される。魔王のお披露目の後もその力で聖地奪
還をと接触してきた
貴族派の人間がいたが、その者はその場で首をはねられた。魔王に
よって。

「国家を衰退させる危険思想です。」

ブリミル教との完全な対立。この世界でタブーとも言える『教義の
否定』を平然と行い
聖地奪還によって生じる犠牲について長々と語ったらしい。

・・・理解できていても口に出すことは・・・

異端とみなされる元だ。そんなことをする人間は恐らく彼と
とんでもない馬鹿ぐらいだろう。

「さて、書類をまとめねば。」

先ほどの火メイジの手配も含めて、椅子に座り作業に取り掛かった。

厨房ではナツメとウォルム達が食事をとっていた。

「くっそおお、花がない！」

「全くですね！メイドぐらい残しておいてくれてもいいのに。」

ウォルムの発言に部下がそうだと言わんばかりに反応する。
現在屋敷には男しかない。コボルトのメスを入れれば別だが。

「それにしてもナツメは上機嫌だな。お前はあれか飯さえあればいいと言うのか！？
この不能者め！」

ウォルムはやりきれない衝動の矛先を僕に向けた。

「失礼な。確かにおいしいご飯の力は偉大ですけど、不能者ははいでしょ。」

「いいや、仕事の合間もずっと犬っころなでて和んでるし、かと思ったら訓練だ。」

俺たちの話にすら反応しない。これを枯れていると言わずなんとい
う。」

ウォルムの言葉は力強かった。さっきまで休みたい、疲れたと言っていたのに。

「そういえば、俺達が女の好みについて話してるときもずっと離れてぶつぶつ何か

言っていましたね。モフモフがどうか。」

「まさか、男色!？」

部下たちは便乗し僕を弄^{いじ}ってきた。

「いやいやいやいや、僕にも女の子の好みぐらいありますよ。というか

ウォルムたちががつつき過ぎだけでしょう。」

男色、という言葉に少々過剰反応してしまった。

ウォルム・バークル二十五歳独身、黙っていればそれなりなのだがその性格で大分損をしているように見える。

「俺がお前ぐらいの時はもっと凄かったぞ。それこそ毎晩・・・」

「いや、言わなくていいから。」

どうせ下ネタだろう。食事の席で話すことじゃない。

「それより、どうなんだ。そっちの好みの方は。」

ニヤニヤとしたうざったい顔が三つ。
ため息が出る。

「別に、普通ですよ。外見にそこまでこだわりはないし年齢もあまり気にして

ませんし。あ、でも小さすぎるとかはアウトですけど。まあ、絶対条件としては

一緒にいて疲れない娘、てことぐらいかなあ。」

「えらくあいまいだな。」

ウォルムは期待外れ、と言うような口調で言った。

「もっと具体的に！」

それでも部下たちは諦めない。もっと別の部分に情熱を向ける。

ウォルムのニヤニヤした顔が冷めることでその話題は打ち切られた。

トロールの巣穴には複数の出入り口がある。

それらは通気口の役割を果たし、これにより洞窟内部で酸素消費量の大きいあの巨体の

活動に支障がでない。風邪の探査を洞窟内部には知らせ調べると、何層にも分かれたこの巨大な穴はトロールたちの共同^{コミュニティー}体を

作り上げていた。

・・・一応文明らしきものはあるみたいね。

洞窟内部にはひとときわ体の大きい、おそらく八マイル程度かと思われる、個体がいたがそれがトロールたちのリーダーなのだろう。

力が一番強いものが一番偉い。非常にわかりやすい社会構造をしている。

推測ではあるがこの通りのものだと思う。弱いものに強く出て強いものにこびへつらう
その性質がそう判断させた。

まあ、こんなことはどうでもいい。

作戦はいたって単純、出入り口をコボルト達が一斉に埋める。埋めると呼吸が苦しくな
って出入り口に穴を掘りに来るはずである。そして出てきたところを叩く。穴掘りで疲労しているはずであるので並のメイジでも
攻撃力のある火メイジであれば苦戦しないはずである。何度も素手で撲殺してきて
いるのでトロールの体力は大体把握済みだし。

問題はこのメイジたちがコボルトとちゃんと連携してくれるかどうかである。

一ヶ月後、手配しておいた火メイジが十数人到着した。

王軍から数名、残りは傭兵、そして子供が一人。

ん？子供！？

背の高い男たちの横にちよこんといる小さいのは確かに紅い髪の男の子だった。

「えーっと君いくつ？」

自分の目を疑い年齢を尋ねた。幼いのは外見だけかもしれない。

「ジェイソン・デューイ、11歳。火のラインです。よろしく願います。魔王様。」

はい、名前とメイジのランクまできちんと答えてくれて親切ですね。

「魔王がいるってわかってよく来る気になったね。」

僕は今きつと苦笑いしているに違いない。

「俺、見ました。魔王様が起こした竜巻！」

・・・ああ、あの時のやつか。

どうやらこの子、ニューカッスルでの演説の時、街からあの竜巻を

見ていたようだ。見た。
ヒーローを見る子供のキラキラした目で僕を見てくる。
純粋な視線が痛い。

「デューイって確か伯爵だったよね。よく御両親がお許しになったね。」

王党派である。パーティの名簿にそんな名前があったな。

「かあさまは反対したけど、とうさまは魔王様から学んでこいだって。」

この年ですごい行動力だな。一応、トロールの討伐なんだけど。

「えーっと、これで全部ですか？」

「ああ、とりあえず中で詳しい説明を。」

ウォルムはそう言って、メイジたちを誘導し始め執務室へ向かった。

「と言うわけで皆さんにはコボルトと協力してトロールの討伐にあたってもらいます。」

作戦の説明中。亜人と協力だと？と言うような声も聞こえるが無視して進める。

「コボルトと言っても言葉は通じますし、よく討伐依頼がくるコボルトとは全く別物とを考えてください。彼らは外見こそ人間とは違いますが理性にしたがう賢い種族ですよ。」

ざわつくのは傭兵で、王軍の士官メイジは仕事と割り切っているのと以前顔を見たことがある者もいてやりやすかった。

そんな中、一人が手を上げ、

「そもそもお前が魔王だっていう証拠はどこにある。俺は自分より弱え奴の命令なんざ

きく気はねえ。お前が魔王だってんなら俺と決闘して証拠を見せる！」

そんなことを言ってきた。王軍の士官メイジは小声で、愚かな、と言いジエイソンはますます目を輝かせる。

「確かにそれならこちらも納得できる。」

コボルトとの連携に不安が有るのだろう。傭兵たちのざわつきは一つにまとまる。

「ちなみに俺が勝った場合は報酬は倍にしる。魔王なら俺なんかにはずねえもんなあ。負けたら大人しく命令にも従ってやるぜ。

おおっと言い忘れていたがこいつは正当な報酬だぜ。魔王の名を騙

って

悪い事してましたっていう口止め料込みのな。」

・・・あれ？ちゃんと王家の紋章で依頼出したはずなのに。

王家をつつき呼ばわりしているのかそれとも本当に馬鹿なのか。

「とりあえず、あなたが負けた場合はただ働きです。もちろん”あなただけ”」

ため息をつきながら応えると

「ああ、かまわねえぜ。」

討伐終了後の打ち上げ、こいつ雇った金を当てよう。

「ぶへッ」

傭兵の背後から風の塊をぶつけこちら側に吹き飛ばし、杖を取り上げ『試合』終了。

こっちは杖もアクションも無し。ただ立っていただけである。

「魔王様すげー。今どうやったの？俺でもできる？」

ジエイソン、あんまり期待しすぎると後で幻滅した時の反動が大きいよ。

「とりあえず、あなたのただ働きは決定したわけですが、まあ討伐終了後の

会食にはぜひご参加ください。」

落ち込んだ傭兵は仲間から慰められていた。

ジェイソンはコボルト達とはすぐに打ち解けていた
加えて同じ存在を、見方は違うかもしれないが、敬っているのだ。
双方の壁はないに等しい。

「すると、あなたも大いなる意志の祝福に？」

「ん？そう言えば頭は撫でられた。」

コボルトの老人にジェイソンは撫でられた仕草をしながら応える。
おお、人の子にも等しく祝福をお与えになるとは。流石は大いなる
意志、懐の深い。

・・・神ではなくネ申だな。

当事者から見るとむずがゆいことこの上ない。
きっとブリミルもあの世から見ていたとしたらこんな気持ちなんだ
ろう。

今でこそ偉大だ、神聖だ、と騒がれているが、当時のブリミルはた
だの魔法に

優れている以外はただのおっさん、と言っようなことであれば尚のこと。

「どっしてこうなった。」

とか言ってそっだ。

傭兵たちとも、仲良くとはいかないが作戦の事務的な会話は成立しているように

作戦行動には支障はなさそっだった。

悪魔が勢力をのばすその3（後書き）

トロール語が存在するぐらいだから、それなりにトロールの社会と
いうものもあると思って。

そろそろ初期の設定とか忘れて矛盾することとか書いてしまいそう。

悪魔が勢力をのばすその4

オグル（オーガ）

トロールとひとくくりにしてたから気付かなかったが違う種族らしい。

トロールよりもやや痩せ形で筋肉質、そして鋭い牙を持ちパワーとスピードも

トロールに勝るのだが、その性質は真逆。そこまで凶暴性はない、むしろ好んで

殺戮するようなトロールとは違い生き物を殺すのも狩りのときだけ、小鳥などの小動物がなつくような温厚な性格をしている。

アルビオンでは人間に住処を追われハイランド地方にトロールと一緒に

押し込められたそう。

「ごれいじょう、おでたちのずみがをうばわんでくれ。」

ただたどしい共通語でそのオグルの男は言った。その巨体に似合わない弱弱しい

態度で言う姿には同情を禁じ得なかった。

トロール掃討の作戦行動の確認と言うことで雇ったメイジとコボルトたちを連れだって

森を歩いていると数人のオグルに遭遇した。メイジたちが身構えるのに対し、コボルト

はそれを制して話し合いに持ち込んだ。

彼らはトロールの洞窟に近いこの森に住んでいるとのこと。

こんな近くでよく種族抗争が起きないのかと言ったら、トロールが攻めて

来ることはないと言う。

トロールはオグルが爆発した時の恐ろしさを知っているのだ。だから迂闊に手を出さずに境界を作り、住み分けをしている。

・・・これは利用できる。

言うておくが今回の作戦にではなく、王党派の派閥抗争やその後の抑止力として。

オグルは性格こそ争いには向かないが姿かたちはどう見てもトロールよりも強そうだ。

黙って立っていれば、いるだけでその存在は威圧感を放ち周囲を誤解させる。

味方についたとなればその効果も期待できるだろう。

「大丈夫。僕はあなた達の住処を奪ったりはしない。」

僕はメイジたちを無視して勝手に話を進めた。

「今ここにいるのはトロールたちを一掃するためなんです。」

「それは、どろーるをころすのが？」

オグルは不安そうに尋ねる。争ってはいないもののオグルはトロールから

嫌われているはずである。それについての心配か、もしくは殺すことに忌避を

感じるのか。

「そういうことになります。」

その答えに巨体は縮こまり、うなだれた。

「ごめんなさい。嫌なこと言うようだけど、トロールとの共存は無理なんだ。

人間は人間でトロールを怖がってるし、トロールはその姿を見て楽しんでる。

襲うのをやめると言った所で話を通じる相手でもない。」

でも、

「あなた達オグルはトロールとは違うようだ。人間側がやり方を変えれば

共存はできる筈です。確かに人間もよく争っているけど、それを好まない者たちの方が
多い。」

そう続けると、オグル達は警戒を解きその場に座り込んだ。

「僕は人間たちの王に進言します。オグルと人間は共存できると。」

トロールたちの表情に安堵の色が浮かぶ。

「しゅっぢょうにいつでみる。」

酋長。この者たちのリーダーだろうか。

ひとまず、オグルとの対話はここで終了、作戦の確認に戻った。

「見事な手腕ですな。ナツメ殿」

王軍のメイジの一人がそんなことを言ってきた。

「別に、ただ思ってることを言っただけです。それに彼らが味方に
つけばこの先

（王党派が）有利になるのは間違いないでしょう？」

「そうはおっしゃるが、オグルを味方につけられる人間などそうは
ありません。

コボルトにしてもそうです。」

他の者たちも感心しているようである。

「そうだよ。戦うのかと思っただけであっばらちゃんなんて
初めて見た。」

ジェイソンはまだ興奮気味だった。

「^{アバター}化身よ。気に病むことはありません。我らもオグルと友好を結ぶ
こと

ができればそれはコボルト全体にとっても利益となりましょう。」

コボルトの長老はそうフォローしてきた。

・・・なんだか照れ臭い。

考えてみるとくっさいセリフを吐いたものだ。軽く赤面ものである。周囲、荒くれの傭兵たちの視線までもが暖かなものになっている。とりあえず最終確認が終わるまでその雰囲気気まずいものを感じられた。

トロールの巢穴の出入り口は全部で五つ、半径1・5リーグの範囲に存在し大きさもそれぞれ異なる。他にも小さい穴はいくつかみられるがそれらはトロールが通れるほど大きいものでなく、完全に通気口の役目をはたしている。ということが、能力による探査で判明している。

メイジとコボルトをそれぞれの出入り口に、また戦闘に向かないコボルトは通気口に配置し、それを風と同調することで把握する。

時間は夕方、夕日が沈み月が出始める中各々が自分の配置についていく。

トロールは人間と同じでこぼろ昼行性である。暗い洞窟の中で過ごしていることもあって夜目が利く、という違いはあるものの朝起きて昼間は狩をして暗くなると帰って寝る。

今回この作戦に選んだ時間帯もトロールができるだけ疲れている時間帯を狙ったこと
間帯を狙ったこと
だった。当然懸念されるのが巢に帰るトロールと鉢合わせになる可能性だが、
ここで役に立つのがおなじみの風の精霊による反則的な探查能力。
作戦部隊を待機させ、トロールたちが巢に入ること、周辺に障害となる生物がない
ことを確認する。

かゆい所に手が届くとはこのことである。

二十ほどに分かれた作戦部隊がそれぞれの配置につくことを確認する。

こちらの合図があるまで動かないという指示のためそれぞれじっと待機している。

・・・そろそろ、やるか。

部隊の配置場所に、刺しておいた杭を風の刃で傷をつける、という合図の後、把握
していた二十ヶ所から変化を感じる。

土の先住魔法

これによって、入口は大量の土砂によって埋もれ、外気と完全に遮断された。

後は、奴らが掘り進むのを待つて迎撃するのみ。

・・・とりあえず各所の見回りに行くか。

そうして移動を開始した。

最後に回ったのは一番大きな入り口があった場所だった。

他の穴もすっかりとふさがっていることも確認できたし、傭兵メイジたちも

大量のトロールを相手にするのは初めてなのか、コボルトの先住魔法の強力さ故
だろうか、意外と張り切っていた。

「魔王様、俺、頑張っちゃうよ。見ててね。」

・・・ほんと元気いいな、この子。

ジェイソンが配置されたところは王軍のメイジとコボルトの長老がいた。

僕はジェイソンの頭に手を置き、

「ずいぶんとしっかり埋まりましたね。」

と言う。他の出入り口は複数のコボルトで対応しているはずなのにそれと比べても

ここ一帯の崖の崩落はかなりのものだった。

埋まった洞窟の前には木がくべられている。今から十時間後これに火がつけられる
予定だ。

「まだまだ、若いもんには負けてられんよ。それにこれはコボルトにとつても

大きな一歩じゃ。」

ちよつと張り切りすぎだったか、と付け加える。

「トロールのリーダーと思われる個体はかなりの巨体です。万が一、危険だと

判断したらすぐに逃げてください。」

死んだら立て直しもできなくなる。

「できるだけ各所のフォローに回るつもりですが、なんせ場所が場所ですし。」

「わかっております。この老いばれとて一族の行く末がみたい、命も惜しい。」

長老は穏やかだ。その雰囲気伝わっているのだろうか、他の者たちにも

緊張は見られない。

「ジェイソン、ちゃんとヘンリさんの言うこと聞くんだよ?」

うん、とそれに対し返事をする。ヘンリさん(王軍メイジ)にお願いいたしますと頼むと

「はっ!このヘンリ・ボードウッド命に代えても・・・」

さっき逃げると言ったのに。

穴をふさいでから日付もかわり、既に十数時間がたつ。太陽は高く昇りもつすぐ昼時である。作戦部隊にはしばらくつろいでいても大丈夫と書いておいたがそろそろ時間である。とりあえず各所の杭を切り落とし、戦闘準備の合図を送った。

トロールがいくらか人間より強い体をしていると言っても、穴を開通させるのに十数体で取り組んで七、八時間は穴の開通に必要なはずである。加えてあの巨体では酸素消費量も半端なくでかいはず。まあ、酸素欠乏症にはならなうだろうと考えるほど洞窟は大きかったのだが、予想以上に時間がかかっている。

・・・このまま窒息死、してくれたらいいのに。
いい加減掘り出さないと酸素欠乏症が進んで死ぬよ、とまっていると異変を感じる。

巢穴が開通されたのだ。

すぐに現場に向かって飛ぶ。眼下ではすでに戦闘が始まっていた。

動きの鈍いトロール達が火の魔法で焼かれていく。

・・・とりあえず今のところは大丈夫か。

軽い酸素欠乏症に見舞われトロールたちは外へ外へと出ていく。しかし開通したと思ったらそこは火の海、とまではいかなくても火のついた丸太が積み重ねられているのだ。熱いし息も苦しいはずである。そこから逃げる際に火メイジによって焼かれていく。

開通したら短期決戦。精神力が尽きたらすぐに撤退すること。そう伝えてあるので出し惜しみなく魔法を放っていた。

作戦はおおむね順調。最初の穴にトロールが集中する、とういうこともあったがフォローに回ることだけが人はいるものの死人は今のところではない。

トロールの進行が収まると再び、埋める。そして精神力の尽きたメイジは撤収させまだ開通していない個所の警戒に回ることにした。

一番大きな穴はまだ開く気配を見せない穴をふさいでから一日が経過している。

・・・穴の上部にいるものは生きているだろうが下層のものは

二酸化炭素は空気より重い。穴の内部で出されたそれは抜け穴がない限りそこに
とどまったままであり、その抜け穴もコボルト達によって抑えてあ
る。

トロールに蚊が持つような二酸化炭素の感知能力でもなければ移動
して窒息を

避けるなんてこともできない。

・・・このまま窒息死してほしい。

もうすでに百近くのトロールを倒しているが、まだ一番大きいあの
トロールも

出てきてないし、兵の疲労も心配になってくる。

流石に鍛えられているだけあって王軍のメイジや傭兵メイジは精神
力の尽きた者

以外は元気である。まあ、ジェイソンはまだ成長期前でもあるのと
張りつめた

空気にさらされていたためかさつきまで眠っていた。

「ようやく、件のデカブツがお出ましのようだぜ。」

ただ働きメイジ（笑）ジェイミーがそう言った。この男、他の穴で
も相当数のトロールを

焼いているにも関わらずまだ結構元気があるようである。

「報酬なしのくせに元気だな。おまえ。」

僕は最初に喧嘩を売ってきたこともあって少々乱暴な口調で皮肉を言った。

ジェイミーはにっと歯を出して笑いながら

「そりゃ、これだけの大仕事だ。成功すれば箔がつくってもんよ。」

そうすれば依頼も、と杖を構えながら言った。

入り口に積み上げられた土砂は崩れ、岩がどかさされるとハメイルを超す巨体と

それに続いて一回り小さいが相変わらず巨体が出てきた。

例によってふらふらどころか倒れるものまでいる。

リーダーと思われる巨大トロールは大きく息を吸い込もうとするが

・・・そんなことさせない。

いつもよりも集中し、空気を圧縮する。できるだけ重く鋭い一撃をと。

息を吸い終わり吐こうという時にその風の刃をトロールの首に向かって放つ。

風の刃はトロールの首を切断するには至らなかったが、それでも半分はいったようでした。

周囲に血の雨を降らせた。

・・・やっぱりここじゃ難しいか。

周囲の精霊が少ない。周りから呼び寄せるのもありなのだがそれだと精気を余計に

食うので緊急時に取っておく。

「魔王に続けー！」

ヘンリさんがそう叫ぶと他のメイジもルーンを紡ぎ魔法を放つ。
ジェイソンも張り切ってファイヤーボールを放っていく。

・・・すごい匂いだな。

決してステーキが焼けるようなジューシーな奴ではない。

もっと醜悪な、人が焼けるよりももっとひどい、趣味の悪い悪臭を放っていた。

ジェイソンも鼻をつまんでいる。

あたり一面が火の海になりトロールが焼かれていくのを見るのはあまりいい気分ではなかった。

その穴から出てくるトロールを殺しつくした所で作戦は終了、予定通りだった。

屋敷に帰還することにした。

戻る途中、ジェイミーが

「あれだけ働いたんだからさ、無償奉仕ただていうのは取り消しにしてくんね？」

そう拜んできたので

「ならない。」

そう斬って捨てた。

屋敷に戻るとウォルムに報告、予定通りだったので打ち上げの料理はすでに手配済みであった。

・・・汗が気持ち悪い。

速く風呂風呂つと。

前にも言ったかもしれないが基本的に平民は蒸し風呂だけである。湯を張った風呂は貴族のもの、という認識が強い。

しかし、風呂場のドアを開けると

「おお、魔王様のご登場だ！」

裸の傭兵たちが騒ぎ始めた。

伯爵家を取りつぶしなっただことで僕は

「使用人の方たちにも開放したらどうか」

と提案したのだ。そして傭兵たちはここに滞在して一ヶ月になる。もうすでに湯をつた風呂にすっかり慣れたのか湯船の前で体を洗っている者もいる。

当初、ウォルムやヘンリさんを含む王軍メイジたちは反対だったが今では

「清潔にすることがこんなに気持ちいいとは
「いい湯だ」

と、馴染んでいる。貴族から傭兵になった者は除くが清潔感を保つ意識というのが芽生えたようだった。

体を洗って湯船につかる。

はあ。

と疲れが抜けていくようである。

「所で、会食って言ってたけどよ、何が出るんだ？」

他の者たちも腹が減っているようで、食いついてきた。

「ただいつもより豪華な料理と酒をたくさん飲み食いしただけですよ。」

おお、と歓声上がる。

「費用はほぼ全てジェイミーの報酬から賄われております。」

今回一人頭平均二百エキユー程支払っているはずである。結構豪勢になるに違いない。

ごちそうさまとジェイミーの肩をたたいた。それに続いて他の者たちも

「ごちそうさん」

とばしばしたたき始めた。

会食という名の酒盛りはすごかった。

コボルト提供の食材や、ジェイミーの報酬が化けた料理の量は結構なものだったのだが

なんせ食べる方の人数や頭数もかなり多い。作戦に参加したコボルト四十、人間二十。

コボルトと人間が酒を飲み騒ぐ。

異種族でも命を預け合ったのだ。とりあえず両者の間にあった壁はなくなった。

「ナツメえ、てめえも飲め。」

傭兵の一人がウィスキーの瓶を持って近づいてきた。

そしてジェイミーが僕をはがいじめにする。

・・・そんな強い酒、冗談じゃない。

こんな所で酒癖なまじやうせいがばれたら、コボルト達に示ししめがつかなくなる。

『大いなる意志の弱点は酒』なんて信仰心が離れいて行きかねない。

・・・せつかく協力取り付けたのに。

こんな所で！とジエイミーを背負い投げで酒瓶を持った傭兵にぶつ
けた。

「禁酒中です。」

そう言って逃げた。

悪魔が勢力をのばすその4（後書き）

原作でオグルがあまり触れられていないのはどうしてか？

きつと戦いに向かないのだろうと勝手に推測。アルビオン戦役にはマジックアイテムや魔法で操られていたということを妄想してこ
うなった。

レコン・キスタ、どうしようかね。ここまでやると組織を立ち上げ
るには

かなり強引なやり方でもしない限り無理そうだな。

悪魔が勢力をのばすそのゆくのはしおわった（前書き）

疲れ故なのか駄文になってきた。元々駄文だけど。

悪魔が勢力をのばすその5つのはしおわった

約百三十。

殺したトロールの数である。現在討伐から数日がたち巢穴を探索中である。一人で。

・・・臭い。

しかし、臭い、と言ってもこれは人間の尺度からすると臭い、というのであって

トロールがそう言っているわけではない。現に、トロールの排泄物が一か所にまとめられた部屋、というか穴があったが近づけなかった。

あれはきつと人体に有害なガスとか発生しているに違いない。

「これが最下層？」

そこには、小さいものから大きいものまで、要するに子供から大人までのトロールの死体が転がっていた。

・・・これがトロールの子供。

あの醜悪な成体からは考えもつかないほど無垢な顔をしている。ただしほとんどの子供の顔は苦しみにより歪んでいたが。

殺さなくとも、もしオグル達に育てられたなら温厚な性格に育ったのでは？

遺伝による凶暴性は多少残ろうとも。
そんな考えに至るが、すぐに払拭する。

・・・そんなにあちこち手を出しては自滅するだけだ。

コボルトは勝手についてきただけだし、オグルはただ言いくるめて
追い返しただけ。

このトロール達を討伐したのも、第一目的が王党派の財源確保、だ
からだ。

風と同調して周囲を眺めると、視界いっぱい風の力が収束してい
る様子がよくわかる。

・・・風石。それもこんなにたくさん。

風の力が閉じ込められているくせに全く干渉できない役立たず。メ
イジには扱えるが。

僕にとって役立たずなだけで、王党派にとって、ひいてはこの国の
貴重な財源となる

鉱物資源。

それを得るための犠牲がトロール達。殺す前はほとんど感じなかつ
た感情を子供の

トロールを見て感じる。そのことに矛盾を感じるが、

・・・ああ、なるほど。

すぐに理解した。無抵抗の存在を殺すことに忌避感を感じるのだ。

だから余計にこちらに挑んでくる者たちの命をあれほど容赦なく奪
えるのだ。

確かに数の多さにうんざりすることはあるが情けをかけたことなど
ほとんどない。

納得したら案外すつきりするものである。

さつきまで感じていた罪悪感は薄れ、足もとの風石を拾い上げズタ袋に入れていく。

・・・サンプル試供品これぐらいあればいいか。

これを大公と王のもとに送り、この近辺の開発に着手してもらおう。それと同時にコボルトと協力関係を結ばせ、オグル達に手を出させないようにする。

・・・これを機に国法でも定めてもらうか。

各領地ではその領主たちが好き勝手しているのだ。国法を定めた方がその暴虐も

防ぎやすいだろうし何より共通の法律があった方がいろいろ混乱しなくて済む。

・・・既得権益などの障害もあるだろうが、魔王のソレでねじ伏せて・・・

いや、駄目か。力で押さえつけるだけでは腐れ貴族と何ら変わりない。

・・・とりあえず他種族との交流の仕方から考えないと。

それにはまず、相手を知らなければならぬ。コボルトにしてもまだ付き合いは

一ヶ月半ほどだし、オグルについては図鑑で見た以外はの間少し

話した程度である。

・・・外交官なども呼び出して実際に話をさせる必要もあるし・・・
そこで、はつとする。

・・・何でまじめに働いてんだろ。

確かに追われるよりはましな生活だが、自分は人を使う側ではなく
末端の方でこつ、のんびりとした生活の方が性に合ってる。
全く、教会が『魔王』だ何だっって騒ぎ立てるから。

・・・派閥抗争が一段落したらハルケギニア、出るか。

この国に居ても心身ともに休まらない。
そう感じたギューフの月（11月）の月末だった。

それから数日後、大公宛てに風石と書状、ナツメの手紙、
北部の冷凍海産が届けられた。

「なんと、鉱脈に加え、亜人の協力まで取り付けたのですか。」
太守は予想以上の成果に驚き、喜ぶ。

「うむ、書状には外交官と執政官、それからお前の派遣を要請され

ておる。」

大公もシャジャル公開に一步近づけたと、その表情は明るい。これで兄上からの小言も少なくなるし、と。そしてナツメの手紙にも目を通し始める。

「む、なるほど。デューイ伯の倅が。」

「デューイ伯爵がどうなさったのです?」

ウィリアムはカールに手に持った手紙と報告書を差し出し、カールはそれを受け取る。

「ぶっ!」

噴き出した。

「百三十?しかもそれに対しコボルトと人間合わせて六十!なるほどこれはこれは。」

ウィリアムとは違う所に注目したようだ。

「いや、そうではなく十一歳の息子がだな・・・」

「トロールの大軍ですぞ!?あの物量にこの数で対応、いやしかし彼の魔法なら・・・」

双方とも人の話を聞かない。

「それで、シャジャルの事はいつ公開なさるのです?」

どこから入ってきたのか、そしていつからいたのか大公の正妻ジュリア・オブ・モード
ウィリアムが大公の背後に立っていた。

「ジュリア、いい加減気配を消して後ろをとるのはやめてくれないか。」

「だって、あなたが慌てる姿を見るの、とても楽しいんですもの。」

王族、風のスクウェア、特技は闇討ち。

ウィリアムがシャジャルの優しさのほれ込んだのはこの嫁がSだからなのか。

まあ、Sといっても別に叩いたり蹴ったりといった暴力はない。言葉で攻めてくる

ので気があまり強い方ではないウィリアムはよく妾シャジャルに泣きつく。

そこで、正妻ジュリアがデレることで仲直り。

しばらくするとまた言葉責め、の繰り返しである。

そのせいで夫との関係も良好なことから、ジュリアはシャジャルが嫌いなどころか

むしろ好意を持っていた。

「魔王殿の働きには感謝せねばなりませんね。」

「ジュリア、彼をその名で呼ぶのはやめなさい。外では散々悪者扱いなのだ。」

せめて身内からは・・・」

ウィリアムは軽く妻を窘めた。

「ごめんなさい。皆が騒ぐものだからつい。」

はっと口に手を当て自分の非を認めた。

そしてカールから書状の一枚を受け取り手に取って眺める。

「この調子なら、貴族派の掃討どころか真の意味でアルビオン統一、ということも

ありえますね。」

ジュリアは感心したように言う。

実際、この成果には王も喜びを隠せなかった。王領に風石の大鉞脈が加わるのだ。

それも建国以来手つかずのまま残っている地域の。

加えて亜人たちの交流のために王室の保証がほしいとまで。

知能の高いコボルト達の扱っ先住魔法、争いを好まぬとは言え強力な力を持つオグル鬼

どちらも魅力的なものを持っている。しかもそれがハイランドの一部と王家の保証提供するだけで得られるのだ。もちろんそのための対価は支払わねばならないが。

「では私はこれで。」

カールは派遣の準備のために退室した。

大公が引きとめようがそんなものは無視して。

部屋には、正妻と二人きり。それなのにウィリアムは甘い空気なんかみじんも感じちゃいなかった。

・・・くそ、この所テファにはかりかまっていたせいか！

ついこの間、拙つたない言葉で『とうさま』呼ばれたためか太守の屋敷への訪問回数

滞在日数ともに増えていた。

その日は正妻シユリアからは小言を延々と聞かされ、最後にはデレる、というお決まりのパターンで締めくくられ、翌日げっそりすることになる。ナツメが聞いたとしても決して同情なんかしないだろう。

モゲロ。

彼はそう言うだけである。

年末からハガルの月（2月）にかけてハイランド地方ではよく雪が降る。

その間、農地は休耕、農民も家にこもり冬を越す。

ついこの間ハイランド最大のトロールの巣穴を潰したことで領民も戻ってきた。

避難中の補償やら冬を越すための物資の手配やら結構な額が出て行ってしまったが

この先、風石採掘で働いてもらうための労働力である。

そのことを考えればこの出費も痛く無い。

・・・というか痛いのは僕じゃなくて大公だろ。

そう思っただけでもジャンジャカ金を使えないのは貧乏性故か。

どちらにしろ、冬眠中なのはトロールも一緒。というわけで残りの巢穴は

寝込みの状態をせつせと襲うことになりそうだ。コボルトを連れて。実際毛皮に包まれている彼らは人間よりも寒さに強い。防寒着を着こめば尚更。

どうせ冬の間の討伐は巢穴を埋めるだけで、春先に雪が解けるころには永眠に入ったトロールが出来上がる。

・・・早く終わればゆっくりできるな。

どうせ書類仕事は他の人間がするのだ。冬の間はオグルの住処に遊びに行ったり

コボルト達とじっくり話をするのもいいかもしれない。

「ナツメ、執政官がお見えになったぞ。」

考え事はウォルムが部屋のドアを開けることで打ち切られた。

・・・忘れてたよ。お偉いさんの案内メンドクセ。

まだ休暇には早かった。

降臨祭はオグルの集落でコボルト達と迎えることとなった。

政治家たちの集まりもあったのだがオグルと話し合い、などという理由を

つけて出向を拒否した。降臨祭は人間の祭事である。オグルやコボルトには関係ない。

面倒な祈りや、地球のクリスマスのごとく目障りなカップルを見なくても済む分

精神衛生上は良かった。

「ということは、この土地は不可侵と？」

他よりも少し小さい老オグルはそう尋ねた。

「ええ、風石の採掘権が条件になりますが。それともしよろしければコボルト達と

一緒にその採掘を手伝ってくれればと。」

「それは人間とともに働けということか？」

この老オグルが集落の酋長である。竪穴住居のような建物の中で巨体に囲まれながら僕は話をしている。

「人間は信用できない。」

協力には難色を示した。不可侵で棲み分けをするのは歓迎だが人間とは関わりたくないようだ。

「強要はしません。というかできないと思いますけど。その辺は基本的に

そちらの好きにして大丈夫ですよ。人間の王もそのお触れをこの大陸じゅうに出す予定ですし。」

それにオグル達はざわつき始める。

「それはおでだちをみとめるってごどが？」

「この大陸じゅうだと!？」

その声は戸惑いのものがほとんどだったが

「それは我らオグルが平和に暮らせるとっていいのか？」

酋長の見解に多くが喜びに変わる。

「ええ、そうなります。人間側からは手を出させません。」

言い終わると、とたんに辺りは轟音に包まれた。

オグル達が喜びの余り叫びだしたのだ。

・・・あ、頭が割れる。

その大音量のためか外でもコボルト達が耳を抑えたり、のたうちま

わっていた。

聴覚鋭いつて時として不便にもなるんだな。

ちなみに僕の方はON、OFF切り替えができるので現在普通の人間程度の五感しかない。

しばらくしてそれが収まる。

僕は痛む耳を抑えながら言った。

「とりあえず、近いうちに人間の代表者を連れてくるのでその時に一族の意向を

伝えてください。」

外では地響きをたてオグル達が踊り、コボルト達はまだ耳を押さえうずくまったり

中には気絶している者もいた。

もう完全に、と言っていいほど僕の仕事は終わりに近づいている。

王党派の財源は確保され、貴族派の屋敷つぶしはとりあえず反発がもう起きて

いないからその必要もない。あるとすればオグルとコボルト、そして人間の間での

法律を定めるための会合に出席、ちよつと意見を言ったり、少し勝手が過ぎる人間側

を少し脅したりする程度である。

はや王党派では
有名なセリフになっている。

・・・ああ、こんなの僕の性格じゃない。

そもそもこんな話し合い自体出たくない。脅す度にストレスがたま
る。

一応王党派にいいこととその恩恵を受けている者たちである。
表向きは不満を隠しその言葉に従っているが本心は分かったものじ
やない。

何度か暗殺者が送られてきてはいる中、内部犯もいたのだ。

「む、すまない。いささか乱暴な物言いになっていたようだ。」

この人は本当に反省しているようだが、割と嫌な顔をするものであ
る。

・・・何度か顔を合わせるうちに変わるだろ。

法の最終決議だけあってか中々決まらない。これだけで会議は四
五回は

引つ張りそうである。実際議論を交わし合うことで理解が進んでい
るのは確かだった。

今話しているのはコボルトやオグルを雇い入れるときの待遇の基準
についてなどの
細かい部分である。

ここで法の一部を紹介しておく

アルビオン王国では人間へいみんと他種族は基本的に平等である。

人間が他種族と対峙した際、その種族側が敵対しない限り襲つてはいけない。

また双方に不和がある場合は一方的な暴力行為がない限りはその領の領主、その種族のリーダーと話し合いで解決すること。

一方的な暴力行為には正当防衛が認められる、など。

人間に有利な点が多いかもしれないが、コボルトやオグルからすれば短期間に

すさまじい進歩である。すぐに満足しそつになるのを説得して思いとどまらせるのは大変だった。

・・・人間て欲張り。

そう思いしらされる会議である。だから同じく人間である僕も耳が痛くなるし、

実際に胃も痛い。

この法の成立には特に魔法研究所アカデミーの方の反発はすごかった。

暗殺者に毒を盛らせようとして失敗すると、人質とろうとコボルトを誘拐するし。

ま、確かに研究対象の確保が難しくなれば縮小は確実なので焦っていたのだらう。

中には魔王を研究対象にしようとする連中までいた。

これに対しては王はシエームス

「逆らったら潰しても構わない。」

とごく丁寧に許可証まで発行してくれた。予算食いつぶすからなああ

そこ。

もっと生活に根差したもので、産業に関わる魔法の研究したらいいのにやってる

ことと言えば希少動物を解剖して調べたりくそ高い魔法薬の開発したりと

金になるものはほとんどなく、金ばかり食いつぶす。

中には変わり者もいて『土地の栄養と作物の生育』というテーマの土メイジが

一人いただけであった。

とりあえず、この研究は絶賛しておいて、他のものには散々な駄目出しをして

所長には生贄になってもらった。

「とりあえず、金になる研究。それがうまくいけば金にならないのも認める。」

ということ所長の首を前に納得させた。

・・・街を歩くって素晴らしい。

道行く人々はじろじろとこちらを眺めているが有名人なので仕方ない。

アルビオンに来てからの二年近く、ずっと行けなかったので久しぶりの街は

とても新鮮だった。

見られてはいるもののその視線は恐怖によるものではなく、ただ有名人を
見ているか、若干の憧憬が混じった目で見られているかという印象だった。

そう言えば書店に立ち寄ったとき、店頭には協会発行の勇者イーヴアルデイシリーズの新刊が置いてあった。今度は、前回の続きで勇者が倒しきれなかった魔王が魔物の軍勢を率いて人間世界に侵攻を開始する、というものだった。たくさん売れているせいか、値段は三十スウと『メイドの午後（エロ小説）』の五十スウに比べて随分安い。

たくさん売れているとは庶民にも浸透していると言うこと。

話の内容と実際のそれは結構違うものなのだが一応モデルとなった人物である。

繁華街を歩いていると後ろに人だかりができて衛兵が駆け付ける、なんて事態になった。

また、有名になるとその悪名を利用して悪事を働く者も出てくる。最近魔王を名乗りトリスティンで暴れている盗賊団がいるらしく、国交が正常な

アルビオンには確認の連絡が来たことは記憶に新しい。

放っておけば魔王の悪名どころかそれを利用しているアルビオン王国のイメージまで
ということも魔王が派遣されることが決定した。

・・・利用している時点でイメージの方は最悪だと思っただけ。

各国の反応としては、ロマリア：超ありえない、ガリア：ノーコメント、

トリスティン：ありえない、ゲルマニア：うらやましい

というものだった。ゲルマニアは別に国の総意というわけではなく皇帝がそう言っただけ

で、本当のところはどうなのかわからない。非公式な手紙の内容だったので宗教庁

には知られないのをいいことに、くそ坊主共を滅ぼして寄付金の必要がないように

してくれだとか巫人を引き入れる方法を伝授してほしいだの好き勝手書かれていた。

・・・面倒なことになった。

まあ、いろいろ理由をつけて要求は突き返すのだが。

トリスティン出発を明日に控え、不安が募る。何せ魔王に対する評価が『ありえない』

場所に、お供つきとはいえ行かなくてはならないのだ。いらん連中に睨まれたり

軍隊と衝突など、ロマリアの二の舞にならないといいけど。

時刻は夕方、そろそろ日の入りの時間で人もまばらになってきた。

「ナツメ、また具合悪いの？トリスティン、行きたくないの？」

手を引いて歩いているマチルダが心配そうに尋ねてくる。

この年の子の成長は早くずいぶん身長ものびてきた。

「そうだね。僕、トリスティンでは嫌われ者だからね。できるだけ早く終わらせて帰るよ。」

一応貴族の娘であるマチルダは侍従も連れずに街に来ている。

魔王と一緒にいれば安心ということだろうが、屋敷を出る時にも何も言われないし。

「というか将来悪魔つきだとか言われないか心配だ。一応この間のジエイソンなんか友達になったが、それでもサウスゴータ太守の娘に子供を近づけたがる人物は少ない。」

「・・・まあ、確かに心配は心配だけでも」

「そこまで手が届かないし、フォローする気にもならない。当人たちだけで頑張ってもらおうでしょう。」

「心配してくれてありがとう。」

マチルダの頭を撫でる。この年頃の子どもはかわいいものだがそのうち

歳を重ねるごとに「お父様なんて」とか言いそうである。

その可能性に考えが至るとカールさんの方に同情を禁じ得なかった。

「・・・あの人も恐妻家だしなあ。」

マチルダも母親似であるからきつと同じようになるに違いない。そしてカールさんは

二人から執拗に攻め立てられるんだ。哀れな。

夕暮れの太陽はともきれいだっただのと同時にどこか退廃的なものを感じさせた。

悪魔が勢力をのばすその5つのはしおわった〜(後書き)

トリステイン派遣は書いてる最中に急に決まった。

あんまり考えなしに書いてるのでこの後どうしようか。

次回、殺伐。

余計な話ばかり挟んでしまうからどうも進み方が遅い。

やっつけ仕事の閑話

四年ぶりぐらいか……。

トリステイン王都トリスタニアの上空から王宮を見下ろす。

久しぶりの訪問に『依然と何ら変わりなく』その国は僕を迎えてくれるような気がした。

繁華街の方を見ると露店が立ち並び人が狭い道路に溢れているのが見える。

半面貴族街は通行の制限があるのか馬車が何台か見えるだけ。

そういえばアニエスはどうしているだろうか。

ちゃんとご飯食べているだろうか、あの日のことを引きずっていないだろうか、

そもそも生きているだろうか。

……見には行けないだろうか。

ダンゲルテールの虐殺は本来秘密裏に行われるはずだったのだが悪魔の出現により

その事情は変わる。本当の目的は新教徒の一掃、表向きは悪魔討伐ということが

一般の認識になっている。つまり、

また悪者扱いか……。

胃が痛くなる。

繁華街は歩けないだろうし、

王宮に出向くにしてもきつと僕に向けられる視線はいいものではないだろう。

お供にケイニス・アール伯爵についてきてもらっているが、そんなもの緩衝材にもならない。

せいぜい、しつかり手綱を握っています、という見解を生む程度。

上空から小さい町並みを見るのにも飽きて、僕はラ・ロシエールに向かつて飛んだ。

「どうだった？ 久しぶりのトリスタニアは。」

ラ・ロシエールの入り口でケイニスさんは護衛の騎士とともに近づいてきてそう言った。

「街がどうだったかよりも、先のこと考えたら気が重くって。あの街に行つて

また後ろ指刺されるかと思うと……」

その様子に騎士たちは

「ぶっ」

と吹き出し始める。

「酷いなあ。僕だって好きでこんなところ来たかありませんよ。」

全て偽物まおうが悪いのです、と続ける。

「全く、魔王とは思えぬ腰の低さだな。そんなことだと王宮に行つたらなめられるぞ」

ケイニスさんは苦笑しながら、忠告してきた。

「別になめられたからって死ぬわけじゃないでしょ。むしろ存分に舐めてもらって

重要度が下がってくれば言うことありませんけど」

不良気取って突っ張ってるわけではないのだ。むしろ偽物に称号を譲ってもいい。

そうして教会連中の勢力が巻き返した時、そいつは異端として処理され魔王は死亡、晴れて僕は自由の身に。

そんなくだらないやり取りをしながら馬車に乗り込み、王宮を目指した。

貴族につき従っている悪い魔法使い。

今この一行を傍から見ればそんな構図になるだろう。軍服のような衣装に身を包み、

びしつと決まっている伯爵とその後ろから茶色のローブを目深にかぶった怪しいに奴

更にその後ろには護衛の軽鎧に身を包んだ騎士。

王宮の廊下を案内されているときはすれ違う人々に犯罪者に向けられるような視線を浴びせられた。まあ、実際そうなんだけども。

「アルビオンの特使がお見えになりました。」

執政官が大きな扉をノックしてそう言うと、ドアは開かれ奥には王と思われる人物と

若い、修道服に身を包んだ男が立っていた。

「特使よ、よく来てくれた。私がこのトリステインの王、ヘンリー一世だ」

アール伯爵が跪くのに倣い、僕も合わせる。

「は、この度はお招きいただき光栄でございます。陛下」

ケイニスさんは丁寧に挨拶する。そして王はその後ろにいる僕に視線を遣り

「して、その方が件の魔王と？どれ、フードをとり顔を見せてはくれまいか」

王がそう言うので僕は立ち上がり、フードをとる。

王と横にいた修道士が息をのむ音が聞こえる。

「お初にお目にかかります。私がナツメ、？一応？魔王と呼ばれております」

少々芝居がかかった風に言ってみた。その様子に対応しかねているのか王はしばらく

黙ったままだった。気まずい。

「あの〜、どうかなさったんですか？」

その気の抜けた対応に毒を抜かれたのかとてもいがいそうな顔をする。すると

「陛下、彼は魔王と呼ばれておりますが魔法以外はただの少年と変わりありません。

そのように恐れる必要はありませんよ」

ケイニスさんがフォローしてきた。すると先ほどまで黙っていた修道士の青年がようやく口を開き

「そうは言っても、その容貌、まさしく宗教庁ほんじょうが異端に指定した悪魔ではないか。そう簡単に警戒が解けるものでは……」

「これ、マザリーニ。彼らは戦争をしに来たわけではないのだ。そう要らぬ対立を生む言葉は慎め」

王はマザリーニという若い修道士を諫めた。

修道士？ 枢機卿ってことか？

国の中枢に入ることができるといふことはそれなりに高い地位にいろことを意味する。

さっきからその突き刺さるような視線がずっと向けられていた。

うっ、胃に穴開きそう。

さっきから伯爵と王が何やら話しているが聞こえない。
その嫌な視線は退室するまでずっと続いた。

「長旅ご苦労、立場故あまり大したもてなしはできぬが攻めて体を休めて行ってくれ。」

退室時はまるで息苦しい水の中から這い出る時のように爽快だった。

のだが、

「魔王が来てらっしゃるんですって!？」

大きな音とともにドアが開け放たれると
そこには豪華な白いドレスに身を包んだ女性が立っていた。

「マ、マリアンヌ。なぜ？」

王妃だった。

「あなた、どうして教えて下さらないんですか。魔王が訪問するなんて一大事が執政官の話を盗み聞きさせなければわからないなんて、何か私わたくしに後ろめたい事でも？」

王は深く溜息をつく。おまえが騒ぎたてるからだ、と暗に言っているようなものだった。

「こちらの方がその魔王？ 風使いなんですってね。カリンとどっ

ちが強いのかしら？」

「マリアンヌ、余計なことを言っでござらんでくれ。これは政治機密なのだ」

魔王を騙る人物を快く思わない魔王が『勝手に』偽物を退治する、
そういう

シナリオである。

マリアンヌ王女は、えー？と言うような顔をして

「だって、ずっと王宮にこもりきりなのですよ？ 少々の刺激がなければ息が詰まって
しまいますわ」

お前は子供か！

そう心の中で思っているど、

「とにかく、お前は部屋に戻っていなさい。」

王はマザリーニに目くばせした。

「ささ、マリアンヌ様。こちらへ。」

王女は不満そうに退室していった。

「お見苦しいものを見せてしまったな。」

その後の気まずい沈黙を破ったのは王だった。

「ノーコメントで」

他人の家の事情なんて聞きたくない。わがままな王妃で王様も苦勞しているようだ。

「ちょっと優しくすぎたせいかな、あのように増徴してしまったな」

王は遠い眼をしていた。聞いてないのに。

この国で暴れている偽物は山賊一味の頭領ということらしい。なんでも各領地を転々としては魔王を騙り略奪を繰り返しているとか。

偽物ってわかってんなら自分とこで処理してほしい。

引き受けてしまったのはアルビオンのお偉いさん。外交上仕方がないとはいえ

人任せ過ぎやしないだろうか。それに、何度か聞く『烈風のカリン』とか言う奴、

そんなに強いならお前がその山賊潰せよ、とも思った。

山賊なんてどうせ碌でもない連中なんだから……。

魔王という称号を喜んで使うなんて気が狂っているとしか思えない。そしてこれ以上悪事を重ねられたらまたハルケギニアでの僕の居場所が減る。

今後のことも考えて、必ず捕まえ、見せしめにするかそうでなくとも引き渡して

二度とそんな気が起きないように刑に処してもらいたい。

数日が経過し情報が入ってきた。

先日、魔王を名乗る輩がヴァリエール領というこの国の国境沿いの地方に現れたらしい。

全く馬鹿なのだろうか。ヴァリエールはこの国有数の貴族で公爵、お抱えの軍でも使えば難なく潰せるだろう。

「ヴァリエール公爵は軍を出すことはないそうだ。魔王のお手並み拝見といった所か」

ケイニスさんは他人ごとように言った。公爵もケチだな、とも。何にせよ情報が入ったのだ。

「それじゃ、ちょっと行つてきます。」

早く終わらせてこの国を脱出したい、と王宮で割り当てられた部屋の窓に
手と足をかける。

「ちょっと待て。ヴァリエール公爵と、」

キコエナリー。

僕は窓から飛び降り、そのまま王都から東部へ向けて飛んだ。

草原と放牧されている牛、そして時折見える麦畑、まだ緑色のそれはまだ刈り入れ
にはまだ早そうだ。

こんなにのどかな風景なのに国の中枢はどろどろ。

笑えてくる。こんなに高くから眺める景色の大きさからすればこの国の貴族が

重要視しているプライドや格式なんか本当に小さなものなのに。まあ、高い所から見下ろす景色はとても気持ちのいいものだが。

（身分が）高い所から見る景色はどうなんだろうね。

少なくとも魔王の立場から見える景色はいいものじゃない。

えーと、出現場所は確か山の麓ふもとの……。

なんでも村人皆殺しらしい。えげつない。

よく無抵抗の相手をそこまで痛ぶることができるものだ。嫌悪感しか湧かない。

どうしてくれようか。

別に正義感はない。

心中に黒くドロドロした物が渦巻く。

目には目を齒に齒を。

ハムラビ法典にのっている有名な言葉が思い出される。

最低な連中であれば心が痛むこともないし、むしろ口元が吊り上げるような

相手かも知れない。というか現に今吊り上っている。

そう思っていると森の中にぽつんと開けた場所を見つける。
三十名ほどだろうか野営をしているのが見える。
剣や斧が目につくし服装がばらばらなことから犯人どうかはわから
ないが
まっとうな職についている輩には見えない。

襲撃決定。

なるべく周辺に被害を出さないように。

事前にそう言われていたので付近の森の中に着地する。

まずは様子見とばかりに風の同調し、探査を走らせていく。

休んでる最中なのか？

動いている人間は数名のみ。他は寝ているのだろうか。

案外楽に終わりそうだなっとなつと風の刃を作り出そうとすると広場に乱
入してくるもの
がいた。

小さい……。子供？

子供だった。十歳ほどだろうかアッシュブロンドのような長い髪の
少年が手に持った

短杖を抑えられている。マントはつけていない。

面倒だな。

下手に手を出せなくなってしまった。

はがいじめにされて少年が連れていかれるのが見える。

しばらく様子見か。

そうため息をついた。

日が沈みあたりが暗くなってくる。盗賊？達はたき火をつけ始めた。少年は縄で縛られ、転がっている。そろそろ油断し始めるころ合いか風の刃を生み出すために精霊を集め始める。

見張り一人が背を見せたところで

……行け。

そうしてその軽鎧ごと体がずれるのが見えた。

林から飛び出し転がっている少年を抱え上空へ飛ぶ。賊はそれに気づいたのか

「敵襲ー！」

と叫び、寝ていた者たちも徐々に起き始めた。

さて頭はどれかな。

そう考えていると抱えていた少年の目が開いた。状況がつかめなく呆然としているが
自分が飛んでもない高さに浮いていることに気づいて

「ああ、なるほど」

飛んでるのか、と。まだ寝ぼけてるのか？
案の定、

「て、うわああ！」

暴れ出した。拳骨をその頭に落とす。
鈍い音がすると少年はおとなしくなる。

「大丈夫。賊じゃないから」

え？と顔をこちらに向ける。

「とりあえず、終わるまではじっとしててね」

その言葉とともに、賊達に風の刃を殺到させる。もう聞き慣れてしまった

悲鳴のBGMは子供には少々刺激が強すぎたのだろう。少年は大人しくなる所か
びくりとすら動かなかった。

頭と思われる一人を残し広場に下りる。

先ほどの攻撃であたりには解体した死体が転がって血の匂いが鼻についた。

残された一人は林の中に逃げ込んでいった。

少年を下ろし、待ってて、と一言行って後を追いかける。

確かに相手は風メイジだな。

時折飛んでくるエアカッターに干渉し消していく。

少し開けた場所に出るとそこで加速、間合いを一気に詰め、足を払い地面に
押さえつけた。

「ざまあないね。『魔王様』」

暗い中、月を隠していた雲が晴れ若干周辺は明るくなった。
賊の顔ははっきりと見えた。

灰色。

しかも青目。よくこんなので騙る気になったなと思っていると

「ほ、本物!？」

上ずった声は嫌悪感を増幅させた。

「そう言っつてことは、この国を騒がせている偽物さんはあんたで
いいんだな。」

「どうして。お、お前も貴族には散々……」

殴る。

「言い訳を聞く気はない。王宮にお前をつきだしてそれで終わりだ。」

無感動、無感情。本当に何も感じなかった。その事務的な対応に

「突き出すつたってお前も王宮にばれたらまずいんじゃないのか？」

下卑た笑いを浮かべて言ってきた。すると僕の口元は自然と吊り上り

「その王様に直接頼まれたんだよ」

気絶させた賊を担ぎ、さっきの少年の所へ戻ると、縮こまって待っていた。

「君、名前は？」

柔らかな口調で尋ねたつもりだったが、少年の方はびくつと震え

「ジャン、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド」

聞き取りにくい、小さな声だった。

「そうか。家は？ もう遅いし送って行こう」

その言葉に僅かな躊躇を見せるのだが、少し間をおいて黙ってうなずく。

ジャンはあっち、と指をさした。

「そんじゃ失礼」

再びその少年、ジャンを抱え飛んだ。片側には賊の頭。

抱えられたことに驚いたのか少し取り乱すがある程度飛ぶとやはりこの高い所から

見る景色が気に入ったのかそれに見入っていた。山のシルエットの間には二つの月が

そして眼下には黒い森と草原それだけでもう充分幻想的な雰囲気を感じさせた。

「いいもんだろ。この景色」

「はい。正直、言葉になりません」

少年は遠くの月を見ながら言った。

「ようやくまともに会話したね」

その軽口にジャンの態度も柔和なものに変わる。

「そういえば、名前」

・・・気づいてなかったのか。

また驚くのだろうかと

「ナツメ」

「えと、それって魔王の？」

ん、とうなづくが驚いた様子はなかった。

「驚かないんだな」

「はあ、噂は聞いていましたし。さっきのアレも……。あんなことできるんだからおかしくないかなって」

肝の据わった奴。

お前はその大量殺人犯に抱えられているんだぞ。

「ん？屋敷ってあれか？」

眼下には貴族の住む大きな（といってもサウスゴータの屋敷よりはずっと小さい）屋敷が見えた。

「あ、そうです」

そこでジャンを下ろし、今度はトリスタニアに向けて飛んだ。途中賊の頭が起きてしまいびっくりして落としてしまったが、まあ生きてたので良しとしよう。

すごかった……。

銀髪の少年は心からそう思った。

あの景色、魔法も。

あんなに風の刃をうまく扱える人を見たことがない。

それにあの飛行魔法、二人も抱えてるのに並のフライよりもずっと速かった。

さすがにあの血みどろな光景はちよつと気持ち悪かったけど。

話してみると噂よりもずっと怖くないし、こっちにも気を使ってたようだし。

白髪紅目の彼が血だまりの中心に立つさまはまさに鬼だったが飛んでいる最中は打って変わって鳥のように自由な印象を受けた。

あんな風になりたい……。

鬼のようにではなくて、鳥のような自由さを手に。

十一歳の少年にはその自由な姿がとてもまぶしく見え、

魔王として彼が追われていることなどに微塵も考えが及ばなかった。

やっつけ仕事の閑話（後書き）

早く主人公、サハラに行かせたい。
そのために書いてる。

ヴァリエールとワールド、書きやすさにワールドを選んだ。

伏線回収が本当に大変になりそうです。

やっつけ仕事の旅立ち(前書き)

少々強引に進めます。

やっつけ仕事の旅立ち

獄門

江戸時代の死刑方法。斬首刑の後、はねた首を台に乗せ三日間見せしめする。

別名、さらし首。

偽魔王騒動の犯人の刑罰にこれを進言した。

何せ国全体を騒がせ、アルビオンにまで影響を及ぼしたのだ。

民衆の前でさらしものにする事で魔王を騙ることがいかに愚かであるかを悟らせる、

そう言う名目という事にしといた。

実際は、刑罰の方法、決めていいよとのことなのでその場で思いつたことを

言ったただけだったのだが、結構えげつないので当然王には引かれた。

偽魔王騒動はすぐに片付き、アルビオンに帰ろうとするのだが

馬車に乗るぎりぎりの所でヴァリエール公爵に捕まりそうになったと言つのもいきなり問答無用で魔法を放ってきたのだ。

鉄仮面をつけた護衛と思われる女性が。

幸い魔法は風だったので制御を奪いそのまま馬車で逃げたのだが。

逃げる際、やはり魔法が発動しないことに首をかしげながら杖を振っている。

声を張り上げ詠唱した魔法語はむなしく響いた。

アルビオンに戻ってからは殺伐とした出来事はあまりなかった。

せいぜい、残ったトロールの討伐や、時々現れる風竜の相手ぐらいで貴族の方は大人しかった。

やることと言えば例の如く他種族の仲介であるのだが、

すでに正式に法が施行されてだいぶ経つ。

オグル達は相変わらず不干渉なのだが、最近のコボルト達は団体行動ではあるが

街の中を歩き始めた。意外と愛嬌のある顔をしていることもあり住民の抵抗も

無く（魔王の時はすごかったのに）割と馴染んできている。

・・・そろそろ潮時。

アルビオン脱出の頃合いか。

王党派と貴族派の争いはもう完全に王党派の勝利だった。

取りつぶしと取り込みの結果全領地の内六割が王領となり、取り潰しにより発生した

金品の分配などで諸侯貴族の懐もかなり暖かい。

一番の懸念事項であるエルフ公開は、一部の町（コボルト達が歩いている）では

緩衝材どころか、

「なんだ、エルフか。」

そつでない地域でも、

「魔王よりはましだろ」

と、嬉しい？結果となった。

そしてアルビオンに来て丁度三年がたった時

「もう出てっつていいよね？」

夕食の席で、そう言った。メイドは持っていた水差しを落とし、執事は眼鏡がずれ、マチルダの口からは豆が皿に落ちた。

「何を急に。」

太守はついでに行けてないようで口元をテーブルクロスでぬぐっていた。

「いやあね、そろそろ僕が来て三年になるじゃないですか。何だか一か所に留まるのつて性分じゃないんですよね。」

嘘である。出て行くための口実にすぎないそれに加え、

「最近宗教庁も盛り返してきてるそうじゃないですか。」

そつなのだ。内部の入れ替えも一段落し、

逼迫していた財政もなんとか立て直してきたようである。
現在、宗教庁監修の勇者イーヴァルディシリーズ魔王編に加え
ロマリアでは魔王の災厄を退けると言うお守りやアクセサリーが人
気らしい。

お布施よりも実入りがいらしく最近ではむしろこっち方面の商品を
考えることに忙しい、というのが財政の現状。

それを見越してのことか最近、宗教庁からの風あたりが強い。

「悪魔の力を手放せばこの件は不問とする」

と王室に書状まで届いている。この件にはコボルト達は猛反発した。

「我らの化身^{アバター}追い出すなど、そんな罰当たりなことを！」

慕ってくれて嬉しい。人間からそこまで慕われたこともないと言っ
のに。

とりあえず丸めこむことにした。以下コボルトの集落で

「お前たちを虐げる者はもうこの大陸にはいない。いたとしてもお
前たちは強い。」

そして、オグルという頼もしい仲間がいるではないか。

人間がお前たちに不安を与えと言っのなら私から人間の王によく
言っておこう。

そうだな、

再び私がこの地を訪れていた時に、コボルトが滅んでいたら戦争を
仕掛ける

なんてのはどうだろう。」

最後の方は軽口で言った。

「私がこの大陸を出ると言うのはね、お前たちのように住処を追われてしまった

弱者を救いたいからなのだよ。どうか判って欲しい。」

よくこんな出まかせが次々と。

そう諭すように言うとコボルト達の目には涙がちらほらと。犬っころが涙を流す、なんてシユールな光景を眺めていると

「化身アバターの考えはもつともです。我々が浅はかでした。

そうですね。我々と同じ境遇のものが下界にもいるのでしたらそれを救うのもまた大いなる意志。」

コボルト達の表情は晴れやかだった。

「そうだ。お前たちは強い。私の助けなどなくてももう自分達で未来を切り開くことができるのだ。」

そう言ったら、コボルト達は歓声、というか吠えはじめた。

また神木で作られた立派な杖を送られ、もみくちやにされた。

そうそう、このコボルト達に種族全体の象徴として旗を作らせたところ

白の長方形の中に赤い丸がひとつ、と言う構図になった。

オグルはオグルで一部の人間には好感を抱いているようで少しずつではあるが
交流を始めている。
力仕事で感謝されるのは気分がいいんだと。
その姿は図体がでかいだけで人間とほとんど変わりがなかった。

そして旅立つ日。

最後までごねるマチルダや最近語彙が増えてきたティファニア、シヤジャルさん
屋敷の皆に見送られ王都に来ているのだが

・・・ナニコレ？

ロンディニウムでは国を挙げてパレードが行われていた。
先日までサウスゴータにいて、王に挨拶にと出向いたのだが城壁から馬車
中に入ると盛大に迎えられた。

管楽器や打楽器の音が響き民衆が沸き立っている。

・・・凄く恥ずかしい。

とつか国を挙げてこんな事してたらロマリアが文句言ってくるだろつ。

と挨拶ついでに王に言ってみたら、

「この祭典は魔王の見送りではない。アルビオンが真に統一された事を祝うものだ。」

とのこと。

どうやら宗教庁の方からくる苦言のせいで僕が出て行かなければならないと

そのことを気にして急遽この日をその祝日に定めたらしい。まあ、別にそんなことどうでもいい。

「陛下、もし私がこの地を再び訪れる事があつたとしてです。

そのときもしエルフが殺されて居なくなっていたり他種族を一方的に虐げるような

結果になっていた場合、何をするか判りませんので。」

その事を、お心に留めて置いて下さいます様に、と。

完全に無礼千万なのだが、

「お主には感謝しても感謝しきれぬ。お主がいなければ

朕は弟を手にかけてなければならなかつただろう。

お主がいなければ王権は失墜し欲の深い人間がこの国を食い物にしていたであろう。

今、安心してこの玉座に座っていられるのもお主のおかげである。」

・・・うおお、すごい絶賛。

「そんなことはございません。この国の民が一丸となり事に取り組んだだけのこと。

それにこれから先の保証はしかねますので」

まあ、あんまり絶賛されるのも恥ずかしいのでつい謙遜してしまっ

「何か褒美をと思っていたのだが本当に何も要らぬのか？」

旅の邪魔です。もう現金、旅の道具はそろってます。

「そのお言葉だけで胸がいっぱいです。陛下。」

「そうか。この三年本当にご苦労だった。」

そして退室し門から外に出ようとすると

ワアアアアアアアア

とすごい人数に出迎えられた。兵士の一人が

「手を振ってあげてください。」

あなたはこの国ではもはや魔王と言う名の英雄なのですから。」

・・・どうしてこうなった。

もう面倒くさくなっていたのでその場から飛んで逃げることにした。

風を纏い始めると周囲に埃が舞い民衆の目がくらむ。

埃がおさまると

「上だ！」

誰かが言って一斉に視線が向く。

僕は仕方なしとばかりに手を振りそのまま飛び去った。

大陸から飛びだすと視界には久しぶりに下界の山々が入る。
新しい旅立ちに、オラ、ワクワクしてきたぞ。
とばかりに回転やら旋回を繰り返す。

・・・ようやく解放されたぜー。ひゃっほう。

本当に面倒だった。ちょっと泊まっただけの所にエルフがいるんだ
もんな。

それから派閥抗争、ネ申とあがめられたり人間との仲介したり。

そんなしがらみもこれでおさらばである。

気持ちが軽くなっていたせいかな時速四百リーグを超えるスピードで
東方へ向かった。

・・・畜生。

二日後、そんな気持ちはすぐに失せてしまった。
思えばアルビオンが異常だったのだ。魔王を現在受け入れてくれる
国なんて

このハルケギニアには存在しない。

ロマリアの手出しこそないが基本的に嫌われている。

久しぶりにとガリア王都リュティスに出向くと町民は恐れ、衛兵が飛んできて

知り合いには会えないし、近くの町で宿をとろうとすると

「お代は結構ですから殺さないで。」

と泣かれる。無理やり代金は支払って泊まることになるのだが他の客が怖がるし

酒場にいけば客は全部いなくなるし。

その反応にいたたまれなくなり、二日で四千リーグ近く移動し現在のサハラとの

境界、アーハンブラ城につき、普段飲まないワインを飲んでいた。

畜生。

涙が出てくる。

「何か辛いことでもあったのかい」

城の兵士だった。すすり泣く魔王が余程不気味だったのだろう。

上ずった声でそう言い、ちよんちよんと肩をつつく。

「くそ坊主が、くそ坊主のせいで僕は……」

涙腺が決壊し次から次へと出て来るしょっぱい液体。

もう一度ワインを飲みほし

「あんのくそぼつずどもがaaaaaa!」

感情の防波堤も決壊した。

ひいいつと背後で怯える声がある。

「あ、どうぞおがまいなく。」

チーンとハンカチで鼻をかみ、つまみのチーズに手をのばす。

・・・あーうまい。

人里で過ごしていたせいか精神的に脆くなってきている。

数の暴力は怖い。またあからさまに恐怖の対象になっていることも辛い。

ブリミル教の影響はすごいものがある。

ガリアがノーコメントだったのってこういう事だったのか。

・・・やはり僕の癒しは人外しかないのか。

打ちひしがれる。

ここアーハンブラ城に来たのもサハラに住むエルフに会ってみるか、それが駄目なら未開の地にも行くこうかと思っていた所である。

幸い数は少ないもののエルフの集落を行き来している行商人もいる。ついていけば道に迷うこともないだろう。

問題なのは

「あのくすいませーん。」

「マ、魔王!？」

一緒に行くのが可能かと言つことである。

「いや、襲つたりはないので。ネフテスへの行商の方ですよね。」

ネフテス

エルフが住む国の名称。国家体制などは不明。

「ああ、そうだが」

対応の仕方から話すことが可能だとわかると、気丈な雰囲気になる。

「もしよろしければ、僕も一緒にさせてもらえませんか？ 行きのみ道だけ。」

行商の男は目を見開き、言った。

「ほう、コボルトとオグルの次はエルフですか。興味深い。」

「いや、違いますから。行商なら今のハルケギニアが僕にとってどんな場所なのかわかるでしょう。」

先日もアルビオンに宗教庁から通達が来るし。」

僕が遠い目になると、

「冗談ですよ。いやあ、魔王と言っても話せるもんですね。」

いいでしょう。砂漠は危険だが魔王と一緒に来るならば心強い。」

と笑いながら言った。

・・・よかった。

他の商人には怖がられるか錯乱されるかで交渉にすらならなかった
ので

これを断られたら一人で飛ぶしか方法はなくなる。

初めての砂漠に対する不安から行商人の案内は心強かった。

「では、護衛のメイジの方と打ち合わせがありますのでついてきて
ください。」

・・・この人はいいとして護衛メイジとはうまくやれるだろうか？

さっきまで前向きだった心はすぐに逆転した。

やっつけ仕事の旅立ち（後書き）

ようやくサハラ突入。

ここからねつ造が増えますのでご注意ください。

命のオアシス心のオアシス（前書き）

エルフの設定考えながら書くことになるので
投稿スピードは落ちるかもしれませんが。

後、感想ついでに悪い点なんかも書き込んでもらえるを書いている
こちらも

どついう物が読みやすく面白いか参考になるので
手間ですが、そうしていただけたらと幸いです。

命のオアシス心のオアシス

見渡す限り不毛な大地が続く。

そこには十頭弱のラクダがまとまりながら進んでいた。

荷物を積んでいるもの、茶色いロープをかぶった人間を乗せているもの。

・・・暑い。

まあ暑いと言っても日本の夏のようにじめじめした空気ではなくカラッと乾燥した空気であることが幸いし、さほど不快感はない。しかし、気温はやたらと高い。

太陽はカンカンと照りつけ地面を熱くし岩肌ではステーキが焼けそうである。

アーハンブラ城付近が砂漠だったのに対しこちらは岩石砂漠。

大きな岩がごろごろしているせいか日陰が多くこまめに休憩できるのが

ありがたかった。

まあ、人間が過ごしやすいと言うことは当然他の生き物もいるわけで

「ナツメ君、出ましたよ。」

ワームの群れが現れた。淡い乳白色の三〜十メートル程度のこの巨大ミミズは

普段砂の中に隠れて獲物、砂漠にすむトカゲや虫が通り過ぎる所を群れで襲う。

まあ、群れつてそこから推察できるかもしれないがトカゲや虫も通常サイズではないし、数も多い。サソリの群れなんかは見ててサブいぼがたった。

ラクダから降りコボルトからもらった杖を構える。

この杖の材料となったコボルト達の神木はとても貴重なもので乾かすと

恐ろしく硬くなる。

仙人が持つような上の方が丸く膨らんだ形状のそれを振りかぶりワームにたたきつける。

するとその皮膚が破け、気持ち悪い紫色の血液が飛び出す。

動きはあまり速くないのだが数がやたらと多い。

「っほ！」

また一匹潰す。すると外れにいた一匹がラクダを襲いかかるうとしていた。

砂埃を巻き上げながら風の刃を放ち、切断。

命の危機にもかかわらずラクダは平然としていた。

数分後にはその死体の山ができ上がった。

よく動いたのと気温が高いせいか体から出て行く水分も多い。

するとおなじみのルーンが聞こえる。

「お疲れ。」

とその男が言うと僕は頭から水をかぶった。

コンデンセーション

水の初歩、砂漠で必須となる魔法。

「あー気持ちいい。」

喉が潤され、温度が上がっている皮膚は水の気化熱で冷やされていく。

「これで、今日の晩もサンドフォームの肉だな。」

雇われのメイジの一人がそう言った。

昆虫食？のような気分ではあるのだがフォームの肉は思いのほかうまかった。

・・・アナゴみたい

塩焼きだけでなくテリヤキにしても良さそうである。醤油ないけど。

砂漠の夜は冷える。昼夜の温度差はそれこそ夏から冬になったかのように。

しかし、雲ひとつない空に浮かぶ星を寝ころびながら眺めるのは何度やっても飽きなかった。

・・・すげえ。

きつと東京の濁った空なんかじゃこんなに綺麗に映らないんだろうな。

いやそもそも東京都心の空なんて狭くて見れたもんじゃないか。

「なあ、ナツメ今日もまた頼むよ。」

道中、毎晩の定番となりつつある『魔王の軌跡』の語りである。

もう明日にはネフテスに着くと言うことで今夜のパート9が最後になる。

もう宗教庁の汚職から国のトップの腐敗まで知られたらまずいこともたくさん話した。

機密情報故にその刺激は日常から逸脱したもので彼らのつぼに入っただようである

「じゃあ、今日は共通語を話す亜人の話なんてどうです？」

「亜人？それじゃエルフと変わりないんじゃないのか？」

「いや、僕はエルフの社会がどんなものかわかりませんが、たぶん違つと思えますよ。例えばオグルの本質が・・・」

夜遅くまで話は続いた。

次の日の夕方、ネフテス近くのオアシスに到着した。

「おおー。」

久しぶりのオアシスが目につき、嬉しくなる。今夜は久しぶりに体を洗えそうだ。

オアシスの泉のほとりに、小屋が立ち並び今夜はここを使わせてもらおうらしい。

ようやく疲れをいやせることに喜んでいると、数個の気配が近づいてくるのが感じられた。

「空？」

そう言つて上空を見ると、大きな風竜が数頭上に人を乗せ近づいてきた。

「敵じゃありませんよ？」

行商の男がそう言つのでうなづく。

・・・緊張するな。シャジャルさんとテファ以外のエルフか。

その風竜は泉の小屋近くに水しぶきを上げながら着地した。

蛮人の行商が到着したとの報告があった。

いつものように終わるまで監視をしるということ、フェアリスで戦士の称号を持つ私と

数人で事にあたることになった。

「それで、最近蛮人の世界ではその悪魔シャイターンが暴れまわっているらしい。」

「ほお それは物騒なことだ。」

部下が何やら話しをしている。

「任務中だ。私語は慎め。」

そう注意する。

しかし、部下の言葉に思考が別の方向へ行く。

・・・悪魔シャイターンか。

何でも白髪紅目で見ればすぐわかるような容貌をしているらしい。竜の大軍を従え、強力な魔法で暴虐を尽くしているとも。

・・・しかし奇妙なこともある。

その悪魔シャイターンは蛮人のあがめる神を侮辱どころか破壊しようとする企んでもいると聞いた。

悪魔シャイターンブリミル、それが蛮人のあがめる神の名。その名はエルフにとって特別な意味を持つ。

その名を叫ぶ蛮人たちから、六千年の間この地を守り続け、
シャイターン
悪魔の門を開けさせないために何度も衝突してきた。

しかし今回話に出てくる悪魔はいつも毛色が違うようである。
シャイターン
なんでもブリミルを崇める組織から悪魔として認定されたい。

・・・悪魔のとしての『悪魔』か

あえて『悪魔』を共通語にする。

・・・聖者アヌビスの再来であればな。

そんなことを思ってしまう。

実際彼も何度か悪魔の門を目指す人間と交戦し退けている。
シャイターン
正直、鬱陶しい。

負け続きなのによくまあ、あれだけ無駄なことができるものだ。

もしもその蛮人にとっての『悪魔』がこちらにつけば・・・

「・・・シャル様、ビダーシャル様！」

その声にハッとする。

「どうなさったんです？さっきからずっと黙ってたまま。」

「すまない。いつの間にか考え事をしていたようだ。」

・・・らしくないな。

平時の自分ならこんなことはない。しかし、どうにも引つかかるのだ。

その『悪魔』が。

喉元に何か引つ掛かる様なものを感じつつも仕事に戻ることにした。

のだが、

泉の前で佇むその姿を見て凍りついた。

・・・白髪紅目

その一際目立つ容貌はおそらくエルフの中にも同じような特徴を持つものはいない、

と言えるほど特徴的で、こちらを覗くその紅く透き通った目は自分たちを全て見透かしているような、そんな印象を与える。

・・・わからない。

人間に対しては初めて感じた感覚だった。

・・・蛮人に対してこれほどまで・・・

恐怖を抱くとは。

それは未知のものから感じる類たぐいのもの。

そしてそのことを部下達は少なからず察知したのか身構える。

「貴様、どういっつもりでこの地にやってきた。」

「どいっつもりって、その、諸事情により人間の土地に住めなくなりまして。

新天地を求めて、といった所でしょうか。」

強い口調に対して帰ってきた返事は正直、拍子抜けもいいところだった。

そのへりくだった態度は擬態なのかもしれないが後ろの部下は気が抜けてしまったようだ

「あれ、違うのか?」

「さあ?」

エルフ語でそう言った。

すると、顔見知りである蛮人の行商が話に入ってきた。

「ちょっと待ってくれませんか。彼は私たちの行商について来ただけなのです。

その様子ですともうお判りかもしれませんが彼が今、人間の世界で悪魔と呼ばれている者です。」

流暢なエルフ語でそう言うと、後ろの部下たちに戦慄が走り再び戦闘態勢に入った。

しかし、行商はさらに続ける。

「彼は、人の都合に巻き込まれ今人間世界で生きて行くのが非常に困難なのです。

ビダール殿、もしあなた達エルフに慈悲というものがあるのなら彼をここにおいてはもらえないでしょうか。」

この行商、ここに来るまでの道中ナツメの自虐ネタをずっと聞いていて

同情を禁じ得なくなり、直接掛け合うと進んで交渉を引き受けられたのだ。

「彼はあなた達が対立している最大の勢力、宗教庁の敵でもあり、奴らは彼を恐れるあまりその住処すみかを奪うような真似を。

彼は非常に理性的な人間です。悪魔などと呼ばれてはいますが人間の国で地人コホルトや巨人族オケルと人間達の対立を取り除いたのも彼です。こちらに置いておいて不利益になるような事はしないでしよう。」

・・・私一人では判断しかねる。

「理解はした。一度、上に報告しよう。今日はゆっくりと休むがいい。」

二人の部下をその場に残し私はネフテスの中心地であるアディールへ竜を飛ばした。

・・・何言ってるんだらう。

エルフ語はさっぱりわからない。

ただ行商のおじさんが一生懸命何かを訴えかけているのは分かった。しばらくすると話が終わったのか部下の人を残し、

その長い金髪が印象的なエルフの男性は竜にまたがり飛び去って行った。

「おい。」

少々乱暴な口調で話しかけてきたのは金髪を刈上げた少し目つきの鋭いエルフだった。

「お前が、悪魔だって言うのは本当か？」

久し振り聞くそのフレーズに少し目を見開く。

「はい、宗教庁が指定した悪魔があなたの言う悪魔なら。」

どんな反応をするのだらう。

「おお、この蛮人が我らの敵、シャイターンに敵対しているという者か。」

薄い金色の長髪をしたもう一方のエルフは珍しいものを見るかのよう

じろじろと僕を眺め出した。

・・・蛮人か

確かに言えてる。特に貴族連中に対して。それを考えると、少し吹き出してしまった。

「おいおい、どうした？ 私たちがそんなにおかしいか？」

「いえ、違っんです。蛮人と言う呼び方が妙にしっくり来ちゃって。」

僕は先ほど思っていたことを彼らに話す。

「ふむ、変わっているな。お前は。」

「変わってる？」

「ああ、普通そんな呼び方をされれば人間は憤らないにしても不快に感じるだろうよ。」

・・・まあ、そうだね。

「怒ったら、それこそ蛮人って認められた事になるじゃないですか。事実ですけど。」

短髪の方がフェイ、長髪の方がワスイム、と名乗った。

「ナツメっぺいいいます。」

「変な名前だな。」

・・・ほっとけ。

しかし、彼らが僕対してとつた態度とは裏腹に行商の一向に対してとつた態度は

少々刺々しいものだった。何かこう見下しているような。

まあ、呼び方自体が蛮族なので見下すもの当然かと勝手に納得した。

・・・どうせ実害なんてないんだし。

ひとまず、ここが安息の地かどうかは別として命の危険はなさそう
だ。

行商で売られるものは基本的にハルケギニア文化の産物で書物、陶
器、服飾など。

食物の類はほとんどなく、あるとしても干物程度である。
貴族のお屋敷でお世話になっていたことが多かったので、
特に珍しいと感じるものはなかった。

・・・あ、イーヴァルディシリーズ四巻出てたんだ。

サブタイトル：新たな仲間。

表紙には主人公と聖堂騎士パラディン協力している姿が描かれていた。おそらく、前の巻で魔王が倒せなかったんだろう。よく引っ張るな。

「あ、これ頂戴。」

それを眺めてる横から手が伸び、
イーヴァルディシリーズ最新刊は売られることとなった。

・・・読んだ人が（魔王に対して）誤解しませんように。

心の中で祈った。

「あー！あなた、この本の！」

その冒険譚を購入した人物は少女だった。金髪の長い髪に少々切れ長の青い目。

幾分高めの鼻に、シミひとつない白い肌。

本を開いて、しきりに挿絵を指差す姿が可愛らしかった。

「魔王そっくり！」

・・・本人です。

「そう？よく言われるんだよね。」

「やっぱり。ねえ、あなたも蛮族の国から来たの？」

下から覗き込むように、好奇心にワクワクするような表情で尋ねてくる。

「そうだよ。ホント蛮族の国って住みにくくてさ。どこか移住しようと思ってるんだけどいいとこない？」

その返答が意外で、つぼに入ったのか彼女は声をあげて笑いだした。

「ちよつ、何？からかっているの？それとも本気？だとしたら相当変わったわね。」

「そうそう、変わり者だからあぶりだされちゃってさ。」

冗談ととったのだろう。彼女はそのまま笑い続けた。

全くこっちは笑い事じゃないっていうのに。

彼女の質問から察するに、エルフでもここまで特徴的な容姿のものは少ないか、いないかどうか。

銀髪は昨日見てはいるのだが、白となるとやはり老人の色なのだろう。

行商来ていた中に色素の抜けた髪とややしわが入ったエルフの女性が目に付く。

「ルクシャナ。」

声の方を振り向くと昨日のエルフの隊長格の彼がそこにいた。

「あ、叔父様。こんにちは。」

親戚か何かだろうか。ルクシャナと呼ばれた少女はそのエルフが現れると

満面の笑みを浮かべ駆け寄って行った。

・・・伯父さんというか歳の離れた兄妹みたいだな。

エルフは長命種族である。寿命は人の倍程度でその成長速度や老化スピード

も人間の半分である。

二人を眺めてみると、人間でいう二十歳前後と十歳ぐらい。つまり、

・・・あの小さい子が僕より年上の可能性もあると。

ハルケギニアに来た時から数えて現在十九。まだ身長は伸び続けていてほぼ百七十。

「蛮人よ、カウンシル評議会から出頭するように、とのことだ。」

考えに夢中になっていて気付かなかったが二人はじつとこつちを見つめていた。

「うそつき。」

ルクシャナは機嫌が悪そうに頬を膨らませながら、そう言い放ち走り去って行った。

「貴様、あの子に何をした。」

若干時の含んだ声と鋭い目で圧迫してくる。

「別に。魔王に似てるって言うからただ相槌うってただけです。それよりも早いんですね。昨日今日のオチことなのに。」

・・・カウンスル？英語？

評議会という意味ならばお偉いさんの集まりなのだろう。しかし、ここに着いたのは昨日。報告はその後でこんなに早く決まるとは・・・

「議員の方々は、かねてから貴様に興味を示しておられている。貴様は有名人だからな。」

疑問は解消されるのだが

彼の口元が吊り上るのが見えた。皮肉のつもりか。

「そういうわけだ。ついて来い。」

オアシスから三十分ほど飛ぶと青い海が視界に入ってくる。

・・・おお、これは。

きれいな同心円状の埋め立て地の上には建造物が立ち並び円と円の間には水路、そこを船が行き交う。

そんな都市がいくつも海に浮かんでいる。

中には一際背の高い建物もある。

これだけみればただの人工都市なのだがよく目を凝らすと一つ一つの都市には

空気の層で結界だろうか、膜が貼られているのがわかった。

そして船だけでなく上空を飛び交う竜。

SFとファンタジーを融合させたような光景だった。

そう、見とれていると後ろから竜に乗ったエルフが追い付いてくる。その風竜の息は荒く、疲労がたまっていることがわかる。

「なんだその速さは！」

ネフテスの風竜はハルケギニアのそれよりも大きく速い。多分時速二百五十リーグは出てるんじゃないだろうか。

出発するとき、自分で飛ぶからいいと風竜搭乗を拒否すると

「どうなっても知らんぞ。」

と。

「すみません。つい癖で。」

スピードに乗るといついつい調子に乗ってしまう。

最近は全力で飛ぶと若干ではあるが摩擦熱の影響まで出始めていた。

「すごいだろう。我らの国は。」

僕の態度に気づいたのか彼は誇らしげにそう言った。

「ええ、エルフっていうからもっと違うものを考えてました。」

森の中に住み動物と心を通わせる、

そんな自然と共存しているようなイメージが強かったのだ。

正直、超科学力なんかよりもそっちの方が好きなので、
目の前の光景には感動を覚えつつも、少し落胆する。

「ほう、後で聞いてみたいものだな。」

銀髪のエルフ男はそう言いながらひときわ高い建物のある海上都市を指差し言った。

「あれが、アディールこの国の中心地だ。」

「そういえば、名前。」

「ビダーシャルだ。そちらは知っている。ナツメというのだろう。」

評議会のある建物、カスパの屋上に着陸する際初めて名前を聞いた。

・・・何かやるせない。

こういう場合、自分から名乗るものであると思っていたので、

無礼な態度になっていないだろうかと少し不安になった。

着陸すると、同じ衣装を着たエルフが数人、こちらを睨んでいた。おそらくはエルフの軍人か何かだろう。機能性を重視した様な服から推察する。

・・・警戒されてるな。

蛮人と見下してニヤニヤする様な様子は微塵みじんもなく、また表情も固まったままであるのに目だけはギラギラと目の前の人間を捕捉していた。

「ついて来い」

ビダーシャルさんは僕の横を通り過ぎながらそう言う。この雰囲気から逃れられるのだ、ありがたい。

「はい」

その後を追って歩き出した。

命のオアシス心のオアシス（後書き）

19巻読んだ。

砂漠越えるのって結構大変なことだと思う。

風石による大陸蜂起（ネタばれになるかもしれないけど、wikiにも書いてあるし）の止め方を現在考え中です。

ご都合主義な種族を出すかも知れない。

とりあえず、ヒロイン作ろうかと思えます。

数人まで絞り込んだのですが、

途中でめんどくさくなって暴挙に出ることがあります。

ご了承ください。

やっぱり、エルフは森の中じゃないと

建物の内部は幾何学紋様の装飾が施され、余計なものがなく、そのシンプルながら

統一された美を感じる。

対称的な建造物が多いことから人間よりも数学や物理といった学問が進んでいそうな

印象を受ける。

そうであれば、こちらとしても久しぶりにそっちの方面に首を突っ込みたいものだ。

ハルケギニアの貴族邸宅のように物が各所に置かれているようなこともなく

すっきりした空間は好感が持てた。

そして執務室に案内され、ビダーシャルさんはドアの前で止まった。

「評議会は、貴様を警戒している。

先ほどの戦士は騎士フアーリスの称号を持つ中でも選りすぐりの手練達だ。問題を起こすような真似は慎むように。」

そう釘を刺され、ドアをノックする。

「ビダーシャルです。件の蛮人をお連れしました。」

するとドアが開かれる。

・・・どういうことだ？

部屋の中では奇妙な現象が起こっていた。奥の机の前には白髪の老人が座り

その両脇には護衛と思われるエルフが立っている。

奇妙な現象というのはこの部屋の中にいる風の精霊が彼らを中心に取り巻いている

というものだった。

おそらく、見えているのは僕だけだろう。

それが意味するものは彼らも、精霊を直接扱えるということ。

とりあえず警戒しておこうとドアが閉まる前に外の精霊をできるだけ引きよせておく。

「よく来なさつたな。人間の子よ。」

流暢な共通語で老人のエルフは言った。僕はそれに対し軽く会釈する。

「どれ、もう少し近くに寄って顔を見せてはくれまいか。」

・・・こいつ、射程圏内に入れるつもりだ。

どうするべきか。

彼らの理性を信じ踏み込むか、風の精霊だけでもこちらに引き入れておくか。

一步を踏み出すことに躊躇ちゆうじゆしたことが伝わったのだろう。

老人は穏やかな口調で言った。

「警戒しておるのだろうか？心配しなさんな。この者たちはそちらが

手を出さぬ限り

なにもせんよ。私が保証しよう。」

詰まっていた息が吐き出される。

「すみません。癖みたいなものなんです。これ。」

警戒していたことを弁解した。

「無理もない。ずっと追われていたのだろう。私は君の来訪を歓迎しよう。」

『私は』という所に引っかかる。

全体に伝わっていないことにより彼らの総意がわからない以上、それは仕方がない。

しかし、老人からは僕を見定めるような視線は感じるものの敵意というものはない。

・・・両脇の人達は違うみたいだけど。

もう射殺さんばかりの視線だった。

「初めまして。私の名はナツメ。あなたの名前をお聞かせ願えますか」

その様子に満足したのだろう、老人の顔はほころび、

「ヤイーシュだ。ここカスパでは評議会の議員を務めておる。カウンシル

今日は議会を代表してお前さんにいろいろ質問させてもらうがいいかね？」

その言葉にうなずく。

「では、そちらに掛けなさい。」

その老議員が示す所には

小さな机の上に水差しとコップ、そして座布団のようなものが乗った木の椅子がある。

彼がそう言つと両脇のエルフが椅子を引き座れと眼で言ってくる。

戦闘態勢に入り辛くするためだろうか。

・・・まあ、いいか。折角話を聞いてくれるんだし。

彼らの理性的な対応をぶち壊して追い出されるようなことになればそれこそ目も当てられない。

椅子に腰かけると、護衛のエルフから

「あなたにはたくさん話してもらつことになるでしょう。のども渇くでしょうし

どうぞお飲み下さい。」

とガラスのコップに水が注がれる。

「あ、どうも。」

何だか自分だけ飲むのも気が引けるがせっかくの好意だし受け取つておこつと

口をつけ半分ほど飲んだ。

そうして一息つくくと老議員はおもむろに切り出す。

「で、まずは出身から」

「……いきなり厳しいのがキター」。

「あの、それについてなんですけどものすごくお答えし辛いんですが。」

どこまで話すかその短い間に考える。

「七年ほど前、人間の国ガリアとロマリアの国境付近の森に気が付くと居たんです。」

「ふむ、それ以前は？」

「ごめんなさい。以前のことは断片的にしか覚えてなくて……」
もっともらしく、ちょっとした知識などを交えそれらについて話す。

「記憶障害か……」

横に立っているビダーシャルさんはそう言った。

「……嘘を言ってるとは考えないのか？」

「まあ、それについてはよい。」

一番聞きたいのは君が人間から悪魔と呼ばれるようになった経緯についてだ。」

ヤイーシュ議員は先を促した。^{うなが}

「えーっと、まずはトリステインの北方の……」

異端に指定された時のこと、軍を差し向けられた時のこと、アルビオンでの派閥抗争
そして亜人とエルフのこと。

「なんと、空飛ぶ大陸にはエルフがいると!?!」

護衛のエルフは驚きの余り大きな声で言う。

「はい。いろいろ根回しして人間たちには認めさせましたから、今頃幸せに暮らしてると思いますよ。可愛らしいエルフのお子さんもいますし。」

シヤジャルさんとティファニアのことも交えて話す。
というかこの先ハーフェルフ増えそうだな。

「よりによって蛮人などと。エルフの恥さらしが。」

護衛のエルフは顔を歪めていた。その偏見には少しイラッとくる。

……人間にだっていろいろいるんだぞ。

他の国はどうか知らないが、少なくともアルビオンの王族は多くが民のことを考え

そのために権力をふるっていた。その忠臣もそれに倣えと皆一生懸命で。

魔王の力は最初の意識統一に必要なだけだった。あれほど短時間で決着をつけたり、他種族との橋渡しをしなくとも王党派はそのまま貴族派に勝利していただろう。

僕の顔に少しばかりの怒気が含まれていることに気づいたのだろうか

「これ、蛮人などと言うものではない。何事も一概に決めつけてしまっっては

大事なことを見逃してしまう。」

ヤイーシュ議員がそれをたしな宥めた。

歳をとっているだけあって、人の機敏を読むのも上手い。

「最後の質問だ。君は戦っていて楽しかったかね？」

シンプルで難しい質問だった。

・・・九割楽しくねえよ。

残りの一割は極度の興奮状態で快感に感じたときのこと。

「難しい質問ですね。ある意味そうで、ある意味ではそうじゃない。」

ヤイーシュ以外のエルフは理解できないように首をかしげた。

と言うか今ので理解しているのか？この老議員は。

「楽しいかそうじゃないかは置いておいて、僕の姿勢は基本、逃げなんです。」

その発言はますます、若いエルフを混乱させる。
ヤイーシュは黙ったまま続きを、と。

「確かに避けられない戦いというのもありますけど、
他人から見て戦わずに済む場面でも僕は暴力に頼りました。
そうする以外に自分が助かる方法が思いつかなくて。」

・・・あんまりオツムの方はよろしくないし。

「僕一人が死ねば多くの命が失われずに済んだでしょうね。
でも、それはできませんでした。
僕が臆病だから。」

死を選ぶほどの勇氣など持ち合わせてはいない。
生存欲は人一倍強いと思う。

執務室は沈黙に包まれた。

「それに、可笑しいかもしれないけど僕にとってコボルトもオグル
も人間も

皆同じなんです。いや、もしかしたら彼らの方が好きかもしれない。

┌

彼らは僕が行くといつも暖かく迎え入れてくれる。

コボルト達は僕が助けたせいもあるがそれでも嬉しいし、
オグルは現在唯一、僕のこの容姿を見ても態度を崩さない。

「人間は怖い。といつても一部の欲深い人たちですが、そして親しい人たちがそいつらに蹂躪されるのはもつと怖い。」

世の中には言葉を話せても、どうしても話の通じない人間はいる。僕はその人たちの説得をあきらめる。

だから『殺し』に逃げた、と続ける。

しばらく重い沈黙が続いた。

・・・辛気臭くなっちゃったかな。

護衛のエルフ、老議員、を見ると三人とも眉間にしわが寄っている。隣にいるビダーシャルさんの顔は見えない。

沈黙を破ったのは老議員だった。

「質問の仕方が悪かったの。」

今の話からすると君は我々と敵対する意志はないとみて良いのかね。

「あ、はい。」

僕は頷きながら応えた。

「そうか。わかった。本日はご苦労だったな。もう下がって良い。」

そう言って一息ついて退室を促される。

僕は、礼儀上正しいのかもわからないお辞儀をして執務室を出た。

執務室を出てすぐ、廊下にて。

「お前はしばらくの間、私の家で監視することになった。」

執務室に入る前の刺々しさは、あまり感じなかった。

まあ、監視と言うことから『お前を見定めるぞ』ということなのだろう。しかし対応が柔らかくなったことは素直に嬉しかった。

「はい。よろしく願います。」

お腹から出る大きめの声はいつもよりも軽いものだった。

「所で、さつきからしているその頭を下げる動作は一体何なのだ。蛮人の文化か？」

「どうやらお辞儀は間違いのようだ。」

少女の機嫌は悪かった。

ベッドの上で枕を抱きながらゴロゴロしていたので長い金髪は少々乱れている。

着崩れた服からは細い足が投げ出され、上着も若干はだけている。それは彼女の容姿も相まってか幼いながらも女性特有の色気を感じさせる。

おそらく、その手の趣味でなくともこれを見れば大体の男はルパンダイブしたくなるだろう。理性によって抑えられるかは別として。

・・・どうして分かってくれないのかしら。

彼女の叔父は、行商が来ることは前から知っていたはずだ。

当日はその行商に叔父たちが監視に着くから相反に預かって人間世界の本や調度品を買おうと思っていたのだ。

そして、当日来てみるとその叔父には帰れと言われる。

・・・酷いじゃない。

そしてもう一つ理由があった。

あの行商に来ていた一行の中に『魔王』がいたのだ。

イーヴァルデイの勇者は以前から知っていたが

ここ最近シリーズ化して続巻も出て、結構楽しみにしていた。最新刊が売られているのを見つけた時は心が躍った。

その本の前に少年が一人、彼女よりも結構高めの、でも叔父よりは低い背丈の

少年が立っていたが、気にせず横からその本に手をのばす。

誰かに似ている。

そう思いつつその本を持ってきた物と交換しパラパラとページをめくる。

すると、とある挿絵のページで手が止まって気付いた。

興奮していたのだろう。

「あー！あなた、この本の！」

彼女はそのページに描かれている人物を指差し

「魔王そっくり！」

相手に対し失礼かどうかも全く考えずにそう言っていた。すると彼は軽く溜息をついて

「そう？よく言われるんだよね。」

と返してきた。

「やっぱり。ねえ、あなたも蛮族の国から来たの？」

下からその顔を覗き込むと、白髪紅目、その顔には少し傷もあるが表情そのものは

穏やかなもので作中の魔王とはかけ離れていた。

エルフから見てもそれなりに整った容姿をしているし、少し幼さを感じさせる顔からは

見た目の年齢にそぐわない『疲れ』が見て取れた。

「そうだよ。ホント蛮族の国って住みにくくてさ。どこか移住しようと思ってるんだけどいいとこない？」

いろいろと諦めています、と言うような溜息をつきながらそう言った。

・・・おかしかったな。

蛮人のくせして蛮人の国から出たいなんて。

つまり彼は同族から離れ、一人になりたいということになる。

今でこそ寂しい考え方だと思いが彼の話し方は面白くてそんなことには考えが及ばなかった。

「ちよつ、何？からかってるの？それとも本気？だとしたら相当変わったるわね。」

「そうそう、変わり者だからあぶりだされちゃってさ。」

おどけた口調で続ける。

きつと彼はからかっていたのだろう。

その後、叔父が来て彼がその魔王だと知り、わずかに顔が赤くなる。

・・・酷いじゃない。

そして、イーヴァルデイの勇者の三巻、『魔王の軍勢』を手にする。タイトルには例の白髪紅目の魔王が描かれている。しかし、

「似てない。」

全然似てない。描かれている魔王の顔は凶悪なものだし牙も生えて、
なによりいかつい。

さっき見た本物は牙なんて生えてなかったし、本当に本人かどうか
疑うほど

優しそうな顔をしていた。

・・・それはおいといて。

からかわれた。それも蛮人に。

彼女の場合、将来学者を目指しているだけあつてか
物事に対する認識は客観的な面が勝^{まさ}つて人間を観察対象とみている
分、

他のエルフが人間を蛮人と見下しているよりもまだましたが、
それでも蛮人に見下されたのである。

普通なら激怒するか酷く落ち込むかのいずれかだが
彼女の場合は可愛いもので済んでいた。

・・・あれ？

エルフ特有の長い耳がぴくりと動く。外で音がする。

・・・竜？誰か帰って来たのかな。

起き上がり窓から外を見るとそこには叔父の風竜がいた。

・・・伯父様！

部屋から飛び出して彼の帰りを迎えようとする。

しかし、そこでもう一つ風竜に比べるとずいぶん小さい、見覚えのある人間が

空から下りてきた。昼間の『奴』だ。

『奴』が作り出しているであろう風は着地と同時に弱くなる。

・・・私たちと同じ魔法？

いや違う。とすぐその結論に至る。

エルフの扱う魔法はその土地の精霊と契約することで力を行使できる。

カSPAに行ったはずのこの二人は百リーグあまりの距離を移動しているはずである。

つまり

・・・精霊契約による魔法行使ではない。

元々の学者気質が影響したのか、その考えに到達すると先ほどの憤りなど

どこかに行ってしまった、その意識は目の前の少年に向けられた。

・・・興味深いわ。

魔法が。そして目の前の魔王と呼ばれている少年がしてきたであろう経験が。

研究対象を見つけた少女の目は怪しく光っていた。

「全く、半分しか飲まないとは。次からはもっと大きいカップを使おう。」

最もあの人間の少年には必要ないかもしれないが。

水差しには自白を強要する魔法薬が入っていたのだ。

味もほとんど水と変わらないが作るのも大変な奴が。

噂どおりの力を持つならばたとえ優秀な騎士フェアリスが抑えたとしても

ただでは済まないだろう。

半分しか飲まなかった魔法薬は確かに効き目は薄かったがそれでも彼の本音を

引き出すことには成功したように思える。

執務室でヤイーシュは独り言を言う。

「全く、護衛も大げさすぎじゃ。要らぬ警戒心を招くだけだと言っに。」

実際その通りだった。

彼は、護衛の射程圏を見抜いていたのだろう。ある程度近づくとそこで進むのを止めた。

・・・人間で、しかもあの年齢であそこまで

きつと休む間もなく戦い続きだったのだろう。よく心を病まなかつたものだ。

その点は素直に感心する。

・・・全く人間は。

蛮人、蛮族と呼ばないのは見下すことから生じる侮りは命取りだと知っているから。

ヤイーシュも若い頃はエルフの戦士として戦ったものだが人間は時として信じられない力を発揮する。たとえそれが悪魔シャイターンの力でなくとも。

彼の本質には優しさがある。今日の会話だけでもそれは確実に言える。

自身を臆病と称していたがそれはエルフにも言えることだ。誰だって、自分の家族、同胞は大切。

「さて、報告か。」

魔法により録音されたこの会話は後日、評議会で聞くことになる。おそらく、彼を受け入れることに反発する者は少ないだろう。現在、人間の関心は悪魔シャイターンの門よりも彼に向いている。

酷なことかもしれないが有事の際はそれを利用するかもしれない。

まだ会ったばかりだというのに彼はそれを引き受ける、

あの録音した会話をもう一度聞くとそう思ってしまう。

「種族は違えど、心は同胞か。」

・・・どれほど歳をとろうと慣れることはない。

エルフは誇り高い種族だ。

そして事が起こっても外部の手を借りず、必ず自分たちで解決しようとするだろう。

しかし、その力に及ばない事態になれば？

彼がエルフたちと長く過ごせば情も湧くだろう。

そして助けを求めずとも自分から進んで差し出すかもしれない。

・・・やめよう。今はこのような事を考えるような必要もない。

老人は彼らが戻ったであろう方角を眺め、ため息をついた。

やっぱり、エルフは森の中じゃないと（後書き）

中二臭い。

でも止まらない！

主人公、どうやってエルフ受け入れさせるかが問題。
現在考え中。

次話、超ねつ造。

後エルフの名前ってアラブっぽいのでいつか聞いたそれっぽいっけ
けてみた。

ヒト科動物エルフ、それともエルフ科動物ヒト？（前書き）

誰か感想しるせうをください。

原作の続きが気になって気になってねっ造しようにも踏ん切りがつかみません。

ヒト科動物エルフ、それともエルフ科動物ヒト？

「十九？そうは見えないわね。もっと下かと思ってたわ」

「いや、エルフの寿命って人間の倍ぐらいなんでしょ？そうしたら僕って大体

エルフで言う所の三十八歳になるんじゃないの？」

ルクシヤナは訝し気な目でナツメを見る。そしておもむろにビダーシャルの方を指差し

「三十八」

「ええ！？ということは肉体的には僕とビダーシャルさんは同年代と言う事に・・・」

ビダーシャルはこちらを睨む。

「ルクシヤナ、あまりその蛮人とは話すな。物腰こそ柔らかいが蛮族の間では

魔王と呼ばれているそうじゃないか。君にもしものことがあったら姉上に私が殺される」

「そうは見えないでしょ。『人間』の年齢に換算してもどう見ても伯父様の方が年上よ」

こいつ聞いちゃいない。

「そうね、私が見たところでは大体十四、五つてところかしら。」

身長百七十の十四歳、まあいい訳ではないが結構大きめである。

「それに、七年前以降のことほとんど覚えてないんでしょう。今あなたと言ってる

年齢が本当かどうかも怪しい所ね。もしかしたら七歳かもしれないじゃない。」

そう言う仕様です。

・・・何だか納得いかない。

そう思って、

「所でルクシャナって、今何歳？」

「二十二よ」

そう聞いた瞬間吹き出してしまった。

「あによ。人に年齢聞いておいて笑いだすなんて失礼しちゃうわね。」

「いや、ごめん。人間換算しないで考えてた。」

見た目十一の二十二歳。合法なんかである。

まあ、ここでは三十三が成人年齢らしいのであてはまることはない。しばらくして僕の笑いが収まると

「それよりもさっきの魔法のことなんだけど・・・」

そう話題を変えてきた。

「ほう、それは私も聞いておきたい。」

ビダーシャルさんも割って入ってきた。監視と言っていたし上に報告するのだろうか？

・・・まあ、いいか、すごいのって物量だけだし。

「その前に先住魔法、と言うかエルフの扱う魔法について教えてほしいんですけど。」

その方が比較してわかりやすく説明できるかと。」

え、とルクシャナは不満そうだったがビダーシャルさんは

「よからう、確かに理にかなっている。」

まあ、こちらのお話をお前が理解できればの話だな。」

ニヤニヤと見下した口調でこちらを見る。さっきの態度とはえらい違いだった。

・・・モゲロ

エルフ美形多すぎ。出会う人々皆に胸中でそれをつぶやいていたらキリがない。

そう思っただけで封印するつもりだったがここへきて復活した。

「そも、人間が使う魔法との最大の違いは・・・。」

こうして魔法講義は始まるのだが

・・・時折混じるエルフ語でさっぱりわからん。

ビダーシャルさんが数分しゃべった後に、

「ごめんなさい。さっぱり解りません。」

僕がそう折れると彼は勝ち誇ったような顔をし、

「ふん、やはり蛮族ごときにエルフの使う魔法を理解できるはずがない。」

・・・うっわ、嫌な言い方。

「いや、よく考えたら僕、エルフ語知らないんですよ。ビダーシャルさん時々エルフ語が混じるじゃないですか。」

・・・ほんとハイヤーとかアクバルとか意味不明。コボルト達に習っておけばよかった。

とりあえず要望を述べる。改善が無理ならこっちの説明から、と思っ
ていたら

「だったら私がするわ。蛮人の魔法書も読んだことあるし多分解るように説明できると思うの。」

ね？っとルクシヤナはビダーシャルに言った。

年上故のプライドもあるのだろう、少しうるたえた後

「ああ、頼む。」

引き下がった。その様子にルクシヤナは満足そうにして

それじゃ、始めるね、とわかりやすい？講義を始めた。

「とりあえず、杖の有る無しは置いて一番のところは理に沿っているか

それを歪めているかってことね。人間は魔法語と精神力で魔法を使うけど

エルフは土地の精霊と契約をすることで魔法を使うの。」

確かに、講義は分かりやすかった。要約すると

精霊と契約することによりその魔法は

『大いなる意思』という世の理従って現象を起こすので効率が段違いらしい。

また魔法によって契約する精霊の量も違つと。

おそらく効率と言うのは人間で言う精神力の効率のことを言っているのだろう。

そして発動の際には魔法語を使わず、口語、つまり意志を伝えられるのなら

何でもいいようだ。

・・・それはすごい

つまり、いろんな言語をマスターしてから、呪文にごちゃ混ぜにし

たら

魔法が発動するまで何が来るのかわからない。

「大体わかりました。とりあえず、見せてくれませんか。簡単な奴。」

僕がそう言うとルクシヤナは

「ちょっと待ってて。」

そう言うとルクシヤナは外へ出てった。

・・・元気だなあ。

すでに夕暮れ時で外は赤く染まっている。

彼らの自宅は首都アディールから二百リーグほどの砂漠の中のオアシスにある。

オアシスはほぼ円形の泉を中心に置き、周りには地球で言う亜熱帯性の植物によく似た

木や草が生えている。そしてそのすぐ外には砂地が広がる不毛の大地。

自宅である屋敷はそこまで大きくはなくその泉のほとりにポツンと

一軒、

倉庫のような小屋を隣接させて立っていた。

砂漠のど真ん中にあると言つのにそこまで熱さを感じず、むしろ物凄く快適だ。

一歩外に出ると火傷しそうなほどの熱さに見舞われるが。

そういえばずっと見てきて疑問に思っていたのだが、エルフは大体の者が肌の白い人たちである。

時々浅黒い肌のももいるがそのエルフたちが集団で行動していたことから

それは部族固有のものと判断できる。

まあ、そんな事はどうでもいいのだが、疑問に感じているのは『紫外線』について。

その手の知識がある人は突っ込みたくて仕方なかっただろうが、僕は現在白髪紅目。

いつの間にか混ざっていた黒髪もなくなり、肌も結構白くほぼ完全に色素が抜けた状態である。

紫外線から皮膚を守ってくれるメラニン色素が全くと言っていいほど無い状態で

太陽がさんと照りつける砂漠に出れば、速攻で火傷、皮膚ガン、こんにちはである。

しかしそんなことはなかったどころか日焼けすらしなかった。

行商の人達は黒く日焼けしていたと言うのに。

当初は、『紫外線仕事しろ』とか考えていたりしていたのだが

・・・もつどうでもいい。

風の精霊様のご加護と言うことで片づけることにした。

そして、ビダーシャルさんとルクシヤナ。

砂漠に住んでいるにも関わらず、その肌にはほとんど日焼けやシミの後がなく

ルクシャナにいたってはシミどころか日焼けの形跡もなく
見事なまでの乳白色の肌色だった。

・・・ここまで来ると何か病的に気持ち悪い。

綺麗はきれいなんだけど。

まあ、エルフの肌の色についての疑問はすぐに解消されることとな
った。

なんとオアシス全体を覆うエアコンが付いているのだ。しかも日光
遮断機能付きの。

水精霊の泣と呼ばれるその装置はエルフの中で広く普及しているら
しく

エルフの魔法技術の高さに感心してしまった。

昼間はいちばん深いところでも底が見えるほど透明度が高く、遠く
から見れば

鮮やかな蒼色がきれいなこの泉は、夕焼けの紅で染まり、その外に
は砂丘が広がる。

夕暮れの砂漠とオアシスは幻想的なものを喚起していた。

僕がそれに見とれていると、

「おい、貴様何か邪なことを考えているんじゃないだろうな。
もし、ルクシャナに何かあれば・・・」

「何バカ言ってるんですか？」

見た目十一に手を出したら、罪悪感と背徳感で一杯になってもう生きていけんよ。

さっきから僕を睨んでいるのはそう言う理由か。

「叔父様〜。かあさま帰って来たよー。」

外でそんな声が聞こえる。

すると、ビダーシャルさんはびくりとまるで何かに脅えるような態度になった。

「どうかしたんですか？」

その変わりように思わず声をかけると、

「ナツメ、今から来る人には決して逆らってはいけない。というか逆らわないでほしい

逆らえば君も私も……。」

ルクシャナのお母さんはそんなに怖い人なのだろうか。

家に入ってきた女性はビダーシャルさんとルクシャナによく似た人だった。

娘同様、金の長髪に青い目やはり極めつけは、

「若！若杉！！」

声にまで出して言ってしまった。人間換算二十代半ばいってないん

じゃないかという

その母親は僕を見た途端固まり

「—————!」

・・・いや、だからわからないんだって。

しかし、敵意を持っていることだけははっきりとわかった。美人だっただけに怒った顔の威力は凄まじかった。

「枝よ、矢となり敵を貫け。」

おそらくはこれが呪文スベルなのだろう。共通語によるそれが紡がれると同時に

外から木の枝が数本、矢のように飛んでくる。

座っていた椅子をはじき、目の前にあるテーブルを蹴り上げることのでその矢を防ぐ。

そして、テーブルの横から飛び出し、ルクシャナの母の足を払いながら彼女の肩を掴み口を手で塞ふさいだ。

受身の一步手前のような体制の状態で、僕は彼女に告げた。

「こちらに敵対の意志はありません。攻撃を・・・」

そう言いかけたところで周囲の温度が上がるのを感じ、そのまま彼女を抱え込み

窓のガラスを破って外へ出た。

それと同時に、家の中から爆音とともに炎が噴きでた。

・・・術者はどこだ。

避け損ねた腕が焼け焦げ、嫌な匂いを放っている。

熱さと痛みが同時に襲い集中力が鈍ってくるが、周囲にいる風の精霊と同調し犯人を捜す。

しかし、家の中に二つの反応が固まっている以外には何も感じなかった。

「どういうことだ？」

「それはこっちが聞きたいわね。」

僕の驚愕の声とともにルクシヤナ母が口を開いた。

「どうして蛮人がうちに居て、

しかも、うちの娘と仲良くしているとは一体どういうことかしら？」

・・・さっきよりも怒ってらっしゃる!？」

完全に笑ってない。眉間にしわが寄り僕を睨みつけ、刺々しい口調でそう言った。

「どういうことって、僕にも全然・・・」

・・・そう言えばこの人どうして攻撃してきたんだ？

「姉上」

ビダーシャルさんは煤けながら、気絶したルクシヤナを抱え歩いてきた。
結構な爆発だったにもかかわらず無事だったようだ。

「何なんですか！？あの爆発は！私が反射でかばったから良かったものの
間に合わなかったら大変なことになるところですよ！」

「・・・ルクシヤナも爆発に巻き込まれたのか。というかさっきの爆発もこの人？」

痛む腕を眺める。焼け焦げ、炭化した皮は所々剥がれおちピンク色の肉が見え隠れする。

「ちゃんと砂火サンドフレイムしか使っていません。爆発したのはその蛮人が風で炎を巻き上げるから・・・」

サンドフレイム
砂火：砂粒上の炎を大量発生させ敵を焼く魔法。

その形状故に制御の腕次第では周囲への被害はほとんどない。

しかしその形状故ナツメが扱う風で巻き上げられた炎は周囲の酸素と結び付き
過剰燃焼を起こし爆発した。

・・・攻撃してきたのはそっち・・・って当たり前か。

歴史的に見て、もし人間とエルフの戦争の原因が人間側にあるとすれば

良い印象などあるはずもない。

エルフにとつて人間とは極端に言うところゴキブリなのだ。

そしてその蛮人ゴキブリと見下している相手が

堂々と自宅に上がりこんでいたとしたらどうか。

・・・確実に潰すね。

僕は彼女にとつてゴキブリなのだ。そしてさっきの魔法は丸めた新聞紙。

そしてそれはわずかに僕の腕をかすめ負傷させた。

「ナツメ、お前は家の中を片付けておいてくれ。私は姉上を説得するから。」

ビダーシャルさんは僕を殺そうとしてくるルクシャナ母を止めながらそう言った。

・・・せめて応急手当ぐらい、て無理か。

二人のエルフ語の口論は全くわからなかった。

きつと俗語スラングなんかも混じってるんだらう

そしてその横にはルクシャナが転がっている。

仕方ないのでそれを放置、家の中に戻ることにした。

・・・包帯残ってたっけ？

色々取り揃えてから旅には出たのだが、あまり数を買った覚えがない。

「ちょっと、うちに蛮人を入れるなんて許しませんよ！」

「こちらにも事情があるのです！とりあえず私の話を……」

……異文化交流は難しい。

幸い家の方は、ガラスが派手に飛び散ったり壁が少し焦げている程度で

そこまで被害はなかった。

目の前の光景にビダーシャルの全身を戦慄が襲った。

……なんと疾い^{はや}。

テーブルが宙に浮いたかと思えば次の瞬間、既に彼はルクシャナの母であるムニイラを取り押さえていた。

……目で追えなかったと！？

実際自分はエルフの中でも動体視力には自信があつた。
咄嗟のことで混乱していたとはいえ、エルフの騎士たる自分^{フアーリス}が蛮族に遅れをとるなど。

そして問題はその『場所』だった。
エルフはその本拠地となる家の精霊と契約している。
危害を加えようとすれば魔法を発動させ敵を一瞬で片づけることができる。

しかし、彼はその一瞬を見切りその術中から脱した。

私はすぐそばにいたルクシヤナを抱え、
衝撃が来るであろう方面に反射を張る。

・・・これが蛮人にとっての『悪魔』か。

ルクシヤナの母、ムニイラは魔法だけで言えばビダーシャルよりも
数段上の使い手。

その戦術や発動速度もかなりのもので突然のことで油断していたと
はいえ
枝矢の魔法はきちんと当ててきた。彼が避けなければだが。

彼女ですらあなのだ。きっと蛮人には魔法が唱える間などないだ
ろう。

自分は奴に勝てるだろうか。自分が得意とするこの反射は同族の中
でも
上位に位置していると自負している。

・・・身体強化と反射を併用して・・・

駄目だ。これでは動きにはついて行けるが決定打に欠ける。
おそらく負けはないが勝ちもない。

「どうして蛮人がうちに居て、

しかも、うちの娘と仲良くしているとは一体どういふことかしら？」

姉の声が聞こえる。どうやら彼は姉に詰め寄られているようだ。

彼の態度は先ほどとは打って変わって、

その剣幕に顔を引きつらせ弱々しいものになっていた。

・・・そろそろ助けてやるか。

腕に姪を抱え外に出ながら、姉の怒りを鎮め誤解を解く方法を考える。

・・・全く、煩わしいことを。

思えば、ナツメが大人しくしていればこんなことにはならなかったのだ。

その体には穴が開くことになるが。

よく見ると彼は腕に火傷を負っている。

・・・ふん、せいぜい痛みを苦しめ。治療は後だ。

蛮人め。そう胸中でつぶやき今にも暴走しそうな姉を止めにかかった。

「謝りませんかね。」

怒りが静まった？目の前の彼女の最初の言葉はそれだった。横では目が覚めたルクシャナが僕腕に治療の魔法をかけている。

・・・まあ、いいか。

仕方ないことだし、と。

なんせまだネフテスに来てから二日も経っていないのだ。ここに僕がいることは現在この家の人達とネフテス政府の上層部だけ。

ルクシャナの母、ムニイラさんが知らないのも無理はない。加えて、エルフたちは人間が野蛮で争いを好む生物であると教育される。

「いえ、こちらこそ、ごめんなさい。急な訪問で混乱させてしまつて。」

仕方のないことなのだ。宗教庁ロムニアのように脅威とみなして襲ってくるよりは遙かにましである。

謝罪が意外だったのか、うっ、と、戸惑いを見せる。

「かあさま、ナフィルも反省してるんだから許してあげて。大事なサンプルなのよ。これ以上傷つけたらもったいないわ。」

魔法行使しながらそう言った。器用だね。

「ルクシャナ、ナフィルじゃなくてナツメだよ。」

訂正を入れると

「蛮人のつける名前は覚えにくいわ。」

ちょっといい感じの名前だとも思ってしまった。改名なんかしないけれども。

「全くすぐに標本サンプルだの研究だのあの人に本当にそっくり。」

その様子に呆れたようにムニィラさんは言った。

「うん！」

似ていると言われて嬉しかったのか返事には喜びが浮き出ていた。

・・・ほめられてねえぞ。

あの人、お父さんのことだろうか。

そっくりと言う事は彼女の父もまた学者の可能性が高いという事になる。

標本サンプル扱いはいただけないが嫌われるよりははずっと良い。

「姉上、さっき話した通り彼はうちで預かることになった。」

「どうして牢に入れておかないのかしら？逃げたりしたら大変なんでしょう。」

動物扱い。結構傷つく。

「カウンセル評議会からの命令です。それに彼は普通の蛮人とは違うのです。」

「確かにさっきのはすごかったわね。」

と彼女は僕につかまれた肩をめぐってみる。
強く握りすぎたためか青く内出血を起こしていた。

・・・あーあ、やっちゃった。

「そう言う意味ではなく彼は既に蛮族ではなくエルフ側の存在です。
何せ悪魔の門を開こうとする勢力の敵なのですから。」

あなたも話ぐらい聞いているでしょう。彼は同族から悪魔と罵られ
このネフテスに
逃げてきただけなのです。」

ビダーシャルの言葉には熱がこもっている。ありがたいのだが何と
なくむずがゆい。

その言葉にムニイラは驚きの声を上げ言った。

「まあ、蛮族の仲間じゃなかったの？てつきり・・・」

「そうです。それにうちに置くのも評議会の判断が付くまでです。」

そこで納得したようで、彼女は僕の方へ向き直る。
その表情には明らかな同情の色が浮かんでいた。

「さつきは急に攻撃してごめんなさい。短い間かもしれないけどよ
ろしく。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

ほっと一息つくくと、治療が終わったのかルクシャナは包帯を巻き始
めていた。

「すごいね。もうほとんど痛みがない。」
すると

「すごいと言うかおかしいわ。私そんなに治療魔法は得意じゃないのにこんなに

早く治るなんて。あの魔法といい、あなた本当に人間？」

まるで新しいおもちゃを与えられた子供のようにキラキラした目で尋ねてきた。

「それはこっちが知りたいよ。」

答えようもなく質問を却下した。

久しぶりに整えられたベッドにうつぶせで倒れこむ。

清潔なシーツに柔らかいマットが全身を包み込んで気持ちがいい。

そして一段落ついた事態について考えてみる。

一応この家族には受け入れられたようだがムニイラさんのとった態度を考えると

エルフの中に溶け込むのは相当大変そうだ。

・・・お偉いさん次第か。

評議会の決定次第で僕の扱いはどうとでもなる。追い出される、殺される、牢に入れられる。

一ヶ月ほど前まで仮初ではあるが平和に近いものを満喫していたのだ。

さらなる平穩を求めたのは間違いだったのかと思いつつ窓から外を眺めると

相変わらず空には青と赤の月が輝いていた。

ヒト科動物エルフ、それともエルフ科動物ヒト？（後書き）

ねつ造箇所

ルクシャナの性格は父親似

ビダーシャルとルクシャナの年齢

エルフ語がアラビア語に近いものと言う設定

オリジナル先住魔法、砂火

ビダーシャルが叔父ということ、ルクシャナ母の呼称が『姉上』。ルクシャナ母は原作の描写からしてうるさい人？と言うことがアリエーによって語られているので自由奔放なルクシャナは父親似の性格と言う事に。

ビダーシャルの年齢は挿絵とか見て何となく。

そろそろ行き詰まりそうです。

もう原作前に勝手に完結させてしまつか。それとも引っ張るか。

泣き上戸じゃなくても泣きたいときは泣く（前書き）

もうゼロの使い魔じゃない。

というかゼロの使い魔でやる必要があったのだろうか。

別に召喚される始まり方なんてどうでもいいのだから、もっと世界観が

しっかりしている指輪物語とかでもよかった気がする。

トルキンはすげえ。

泣き上戸じゃなくても泣きたいときは泣く

精霊魔術と先住魔法（彼らは精霊の力と呼ぶ）

前者は精霊に対し、イメージを送り自身の精気を精霊に与えることで発動する。

ただし、ナツメ以外に例がないのでこれは風の精霊のみに言える。

後者はその場の精霊と契約することにより、口語の呪文を唱え精神力を支払い

魔法を発動させる。

風限定ではあるがナツメの視点から先住魔法を見た場合、

契約が、”しばらく従ってください”と事前に言うことで魔法発動の呪文と精神力で説得し、”わかった。動きますよ”と言う事になる。

やはり事前契約と言う物が効いているようで系統魔法の風よりも圧倒的に効率が良かった。

そして、これは秘かな発見であったのだが、契約した風の精霊に精気を食わせるとそのまま引き寄せることができた。

所謂、契約違反という奴である。

確かに契約した精霊たちは一瞬、戸惑うように動きが固まるのだが意志の薄い彼らにとって精気の誘惑は抗あらががたく、すぐに味方につけることができた。

風の精霊「お主も悪よのう」「ナツメ「精霊様ほどではありませんよ」

山吹色のお菓子を送っている気分だった。

まあ、これは他人の家の近くでやってみた事なので軽く騒ぎになっていると思う。

また、精霊契約だが、どうやら契約時に火土水風区別なく一度に行っている。

そうすることで、扱える系統の優劣を少なくしているようだ。最も個人の得意不得意もあるのだが。

先日お流れになった魔法講義の続き

屋敷の庭となっている泉のほとりでは三人が座り込み一人の手の中を覗いている。

一人は長身痩身銀髪のエルフもう一人は小さく華奢な細身の金髪のエルフが

人間が差し出した手の上のものを眺めている。

手の平に木の葉を数枚のせ、精霊に小さな竜巻をイメージを送る。すると僅かに精気が抜けた感触の後、木の葉がくるくると上に巻き上げられる。

「すごいわ。大発見よ！」

ルクシャナは興奮して机をたたく。

「おお、なるほど、これは初めて見るな。」

ビダーシャルも驚きを隠せず、感嘆の声を洩らした。

「これを契約なし、精神力なし。上位精霊でも有り得ない事だわ。ねえ、これって一体どういう仕組みなの？」

・・・騒ぎそう・・・。さっき見せたのでアレだからなあ。

「その、見えるんだよ。小さい光の粒、多分風の精霊。」

そのはしゃぎっぷりに少々疲れを感じる。

学者はこういう未知のものをみると一概に興奮するものだろうか。そうだとしても少しは隠す努力をしたらどうだ。

そう一人胸中でつぶやくと

・・・

沈黙が流れ、二人とも首をかしげていた。

「それはないんじゃないの？感じることはあっても見えるなんてことではないはずよ。」

それを感じるのだって契約してからののに。

いや、あなたは契約自体してないんだったわね。

ねえ、という事は他の精霊も見えたりするんじゃないの？」

「いや、全然。風の精霊以外は見えないし干渉もできないよ。」

干渉するとしたら、魔法の発動に要した精神力に触れるしかない。

「なるほど、あれほど早く飛べたのも属性を完全に特化させた結果か。」

ビダーシャルさんは納得したようにつぶやく。

「僕もそう考えてます。本当はサイレントとか使えたら便利なんですけどね。」

できることといえば、風を起こす、空気を圧縮する、同調して周囲を探る、ぐらいの物

・・・まあ、もう十分なだけだね。

風は不定形故にその能力だけでも応用範囲は広く、イメージ次第でどうとでもなるのだ。

万能を求めたところで使いこなせるわけがない。

幸いにも生存のためにはこれ以上はないほど優秀な能力であるので不満は微塵もなかった。

「ふーん。所で叔父様この事って報告するの？」

「ああ、ナツメに関することは逐一報告せよとの命令だ。

何せエルフの世界で暮らす人間など初めてのことだからな。上も慎重になるだろう。」

するとルクシヤナは悪戯っぽい笑みを僕に向けて言った。

「騒ぎになるわよ。」

立ち上がり腰に手を当てながら顔を近づけて、ニツ、と笑うのが可愛かった。

「おそらく数日中に出頭命令も出るだろうな。おそらくは大丈夫だと思うのだが。」

多分……」

「そこはかとなく不安を感じる」

そう言うところクシヤナは笑いながら座っている僕の背後から胸のあたりに手をまわし

「大丈夫よ。エルフはとても理性的なんだから。蛮族みたいに狭量じゃないわ。」

不安というよりは恐怖だった。昨日のことからも感づいてはいたが一人一人の

戦闘能力が人間の比ではないのだ。もし、万が一、排除される対象となった時は

逃げられるかわからない。むしろ逃げ伸びる可能性の方が低いと思う。

そんなことを察してくれたのか彼女はその恐怖をなだめるように優しく言った。

……そうだ。ここの人たちは一部の腐った人間とは違う。

少し前向きになれば、自分でもそう言い聞かせた。

数多の視線が一人の人間に向けられている。

その視線の全てがエルフのもので、それには否定的なものも肯定的なものも感じられず

唯、観察している、というような類のものが多かった。

その部屋には、真中が開いた楕円形の机が中心にありそれぞれの席に各部族の代表が、

一番奥にエルフたちを代表する統領が座っている。

そしてその机の周りは傍聴席だろうか、すり鉢状の段差になった所に一般市民が座り
こちらを終始眺めていた。

「そう固くならずとも良い」

一人、優しく、それでいて低く威厳のある声でそう言う者がいた。

顔を上げ前を見るとエルフの統領であるテュリユークが堂々とした態度で座っている。

「は、はい。」

緊張のあまり声が上がってしまうと、傍聴席からはクスクスと笑う音が聞こえる。

「何、今日の出頭は顔見せのようなものだ。別に君の扱いがどうというわけではない。」

統領の隣に腰をかけているヤイーシユは言った。

・・・は？顔見せ？

「失礼ながら先日出頭時の会話は魔法で録音させてもらった。ここにいる者たちは既にそれを聞いておる。」

老議員は微笑んでいた。

あれを聞かせたのか。

・・・え、あの恥ずかしいセリフをこの人たちはみんな知ってるって言うの？

よく見ると傍聴席にはルクシャナもいた。両横に座っているのは友達だろうか？

・・・もう火口があったら飛び込みたい。

後ろでは付き添いで来ているビダーシャルさんが笑いをこらえて口を押さえている。

恥ずかしさと気まずさで顔が熱くなるのを感じるが統領の一言です

ぐに引き戻された。

「『人間』の子ナツメよ。我らエルフはそなたを歓迎しよう。」

そう言うと傍聴席では一斉に拍手と歓声が巻き起こった。

・・・どういうことだよ。

統領は立ち上がり両手を揚げ、観衆を制し

「迫害を受けつつもこれまで逃げ伸びてきたことは驚嘆に値するが、それ以上に私はそなたの精神、その在り方に感嘆を覚えざるを得ない。」

すると、机の上にある本を一冊手に取り、さっきよりも大きな声で話し始めた。

「皆の者、これは人間世界の物語だ。

登場人物の一人に彼をモデルとした人物が描かれている。

その名は魔王。

シャイターン一族はこの書物を大量に俗世に流すことで、彼の人物を風刺しその居場所を

奪い続けていた。」

イーヴァルディシリーズが役に立つたらしい。

観衆の多くがその話を聞きながら、時々僕の方を見ている。

「しかし、彼のとつた行動はどうか！

確かにシャイターン一族と対立することで数多くの命を奪っている。

報告ではその数は既に数千に上る。

だが私は彼を信じてみようと思う。

彼は人間世界の空に浮かぶ大陸で地人コホルトと巨人オケルを人間たちに認めさせしかも今では既に共生に近づいているそうじゃないか。

それに加え人間たちに、これ以上にならないほど手を貸し続け、空飛ぶ国を立て直した。

彼は人間に嫌われ続けているのにそれでも人を救おうとしているのだ！」

・・・エルフの事は触れないんだ。後で事情聞いとこ。

「忌み嫌われ続け、それでも手を差し伸べ続けるその姿勢に私は感動した。」

誇張された表現にむずがゆいような違和感と鳥肌が立つ。

「しかし、その後に人間が取った行動は一体どういうことか！

国の窮地を救った彼をそのまま追い出したのだ！何という不義理。」

「ちよつと待つて下さい！」

人間をぼろくそ、

というかアルビオンの人達の印象が悪くなるのは僕にとっても良くない。

人心操作があつたにしろ、一応は味方の部類に入るのだ。

それに人間すべてが悪いものではなくむしろそれをむさぼる一部の強欲な者達が

エルフたちに悪い印象を与えているのだと思う。

「アルビオン、空飛ぶ大陸の人達は悪くありません。」

確かに逃げるようにして出てきましたけど、理由があるんです。シャイターンの一族は僕を消そうとあらゆる手で根回しをしています。」

書物による人心誘導、宗教の権威による絶対悪への認定、暗殺（これが一番多かった）

「僕が国を出たのは最近その勢力が巻き返してきて、そこにいれば僕だけでなく

その人達にまで奴らの手が伸びる可能性があるからです。追い出されたのではなく、勝手に出てきただけです。」

上層部の入れ替えがあったとしても悪魔、魔王がブリミル教の敵であることには変わりない。

話しを折られた統領はちょっと不機嫌そうになりながらも

「すまない、訂正しよう。」

素直に謝罪をしてきた。そして演説に戻る。

「見たまえ！このように彼は自分の命がかかっている状況にもかかわらず

このように他人の心配をする様なお人好しだ。ならば我々の脅威になるはずもあるまい。」

そう豪快に笑い始めた。

・・・そういえばこの状況ってこっちはむこうに命握られてるんだよね。

全然考えが回らなかった。あんまり褒めちぎるもんだからこっちも恥ずかしいのだ。

後ろではそれが面白いのか、僕が戸惑いの余りオタオタしているのがおかしいのか
ビダーシャルさんが笑いをこらえていた。

多くの視線が好意的なものを感じる。席に座っている議員も表情を崩している者もいる。

中にはその表情を崩さず、こちらを注視している者もいるが

「人間の子、ナツメよ。私は、エルフはそなたの来訪を心から歓迎しよう。」

その言葉に込められた慈しみや優しさを感^{いづく}じることができると、統領の言葉には「力」というか「魅力」のようなものがある。

溜まっていたものが出て行くのを感じると同時に、目頭が熱くなり水滴一筋が頬を伝うのがわかる。

・・・ちくしょう。元々涙腺緩いからなあ。

熱くなった目の奥から出てくる涙は止まらなくなった。鼻水まで出てくる。

「ありがどうございませぬ。」

そう言うだけで精いっぱいだった。

すると、広い部屋に響かせるほどの拍手がおこる。

鼻水をすすり顔を上げる。

相変わらず目は泣く前も泣いた後も紅いままだったが涙をぬぐうと視界もはつきりしてくる。

観衆の中には僕につられて泣いてしまった者、泣くなーと笑いながら声をかけている者、

考え込むように目を閉じ腕を組んでいる者など。

僕は統領に向き直り

「これからよろしくお願いします。」

力強く言うつと再び拍手が巻き起こった。

それから、新しい仲間の歓迎ということで宴が執り行われた。

広い広間は畳のような質感の物が一面にしかれ、低い縦長のテーブルの上には酒や料理

そして座布団としか言いようのないものが各々の席に置かれていた。

ただし、周囲を仕切る者は障子やふすまではなく木の壁あった。

日本のお座敷とは少し違うその作りは東方文化がここに流れてきた

ものらしく
統領の趣味でもあるらしい。

まあ、お座敷の造りに似てはいるのだがテーブル乗った料理がそれを感じさせなかった。

日本料理のように素材の味を楽しむような味つけの薄いものは少なく、砂漠らしく

香辛料の聞いた肉や豆の料理が湯気を立てているのが目につく。

良く見ると料理の入っている容器の下には赤く透明な石がしかれていた。

「ビダーシャルさん、料理の下に敷いてある石って・・・」

「ああ、あれは火石という火の力を封じ結晶化させたものだ。暖をとる他にこうして

料理を冷めないようにしたり、調理の際に使用したりする。」

上座に統領、そのすぐ横に僕が座り僕の監視役という事になるのだろうか

ビダーシャルさんがその横、そしてほかの席には各部族の代表者たち。

それぞれが談笑をしながら酒を飲み交わしている。

・・・こういう所は人間と変わらないな。

最初、エルフの話聞いた時の僕は

森の中で動植物と調和しながら生き、しなやかに疲れを知らないその体は

足音も立てずに走り、その鋭い感覚は周囲の気配を察知したり夜目

が効いたりと。
傷つけられる限り滅びることない体を持ち、ほぼ永遠に近い命という寿命なんてものが存在しない種族だ、と思っていた。

実際ふたを開けてみると、寿命は人間の倍程度だし、成人は三十三歳。

確かに人間よりも体の動きは鋭いかもしれないが足音は聞こえずし夜は暗視ゴーグルのマジックアイテムを使用しないと見えないしまた人間よりは強い免疫力を持ちながら病気もする。

極めつけは

「そう言えばルクシヤナは？統領が演説の時持っていた本で彼女の持物でしょう？」

統領の判断の決定打となった資料でもあるのだ。その提供者なのだから出席していてもいいはずなのだが

「あの子はまだ二十二だぞ。飲酒は三十になってからだろう？」

どうやら、水資源や水魔法が民間で発達しているエルフの間では生水が危ないと言う認識はあるものの自分たちで浄化できるからお酒で水分補給という考えがないらしい。

これは嬉しかった。ハルケギニアに居た時はやむを得ずワインを飲むこともあったが

ここでは水分補給のためにいちいち酔って泣き出しそうになることもない。

そう言うわけでルクシャナは先に帰ったらしい。

それはそうとして『お酒は三十路みそじになつてから。これには親近感を覚えざるを得なかった。』

・・・羊肉？

串焼きのそれを取りかじりつく。

口の中いっぱい広がる香辛料の香りがたまらない。

流石はエルフ食品保存の技術もハルケギニアよりも数段上のようで
ドライフルーツの
他に生野菜のサラダもある。

「さあ、ナツメお前も飲んだらどうだ。」

統領が酒の瓶を持って言った。

「おお、統領自ら注いでくださると！」

やはりこちらでも偉い人から注がれるとかしこまるのは同じなようで

「ありがとうございます。」

そう言つて陶器の杯を差し出した。

注がれていく酒の色は透明で日本酒に似た匂いをしていた。
酒は苦手なはずなのに、その香りに懐かしさを感じ思わず顔がほころぶ。

一口飲むとアルコールの匂いとその酒独特の味が口に広がる。

・・・飲みやすい。

「果実酒？」

「うむ、最近東方から流れてきた一品でな。他の者たちにも評判なのだ。」

その果物香りのせいか僕の嫌いなアルコールの匂いはそれほど感じない。

「へえ、東方ですか。まだまだ知らないことばかりだなあ。」

思えばハルケギニアだけで完結閉まっている方がおかしい。聖地があると言われているせいか東方ばかりに目が行ってしまうのはどうもつまらない。

アルビオンの北は？ガリアよりも西側は？ロマリアの南方の海は？というかアフリカどうした？

「そうとも、エルフですらこの世界には未知のものが多い。蛮族のように

狭い世界に閉じこもっているのは発展は望めまい。」

ちびちびと飲んでいたにもかかわらずお酒に弱いのは相変わらずか、酔ってきたようで

頭がぼうつとしてきたようだ。例によって理由もなく目の奥が熱くなってくる。

「おお、『悪魔』どの涙もろいな。シャイターンとは大違いだ。」

他の議員だろうか、警戒心というものを完全に失ってしまっても鈍く

誰が言ったのかはわからなかった。

・・・やっぱり酒は嫌いだ。

・・・悪魔じゃない。魔法が凄い以外は唯の人だわ。

ルクシヤナは竜に乗りながらさっきのことを思い出す。

「泣いてたわね。」

それも、観衆が見ている中で。

恥ずかしさも忘れてしまうほど嬉しい事だったのだろう。

彼の本質が暴力でないことぐらいはここ数日話していて分かっていたつもりだが

「全然違うじゃない。」

彼は動物が好きなようで、オアシスにいる鳥を観察したり、移動用の竜の頭を

撫で続けていた。

確かに、時々おどおどしたり妙に入ったりするのだが、

その他を見れば、飄々（ひょうひょう）と掴み所がなく、こちらの

質問についても

聞かれたくないであろうことはのりくらりと躲し、時にはからかってくる。

私の部屋にある書物を見た時などそれは顕著だった。

書物の頁をめくると彼は夢中になってそれを読み始めたのだ。

私にもわからない記号の羅列で書かれたそれは彼にとって、とても面白いものらしく

私が声をかけるまでずっと読み続けていた。

そして、それがわかるなら中身は何なのか教えて欲しいと。しかし

「はっ、わかんないの？これが？」

と鼻で笑い、バカにしたような態度でそう言ってきた。

「いや、エルフ語の事は謝るから。」

共通語でも事足りるのだがここに留まる以上、ということでもエルフ語を教えること

になったのだがあまりに初歩的なこと、エルフの使っている文字の覚えが良くなる

少しからつかってみただが、

「ほう、わからないと申すか。それは結構なことだ。」

そう言うのと、ぱたんと本を閉じ窓から外へ飛び出して行ってしまった。

・・・意地悪。

思い出してそんなことを思う。自分は学者を目指している。まだ何を研究するかは決めていないが。だから、わからないことを放置するのはとても気持ち悪く感じる。彼もそれを理解しているようで、

「そのまま、悶々としているがいい！」

と窓の外から言い放ち泉の側へ走って行った。

・・・馬鹿みたい。

彼が泣いているのを見たとき思わず自分もつられて泣きそうになっ
てしまった。

飄々と掴み所がないという事はまわりと一線引いていることの隠れ
蓑。

竜ばかりとじゃれ合っているのはこれまで人間達に嫌われ続けてき
た反動。

(いいえ。元々の趣味です。)

コホルト 地人、オケル 巨人、人間が彼にとって同列であるのもおかしな事だった。
蛮人にとつての普通は怖れるか憎むか見下すかのいずれかに入る。
彼はその全ての手を取り、つなげて種族の輪を作り出してしまった。

そして、

「人間とは愚かな種族だ。なぜ先に滅びがまっているというのに。
これでは繁栄などありえぬ。どうしてこうも愚かな者が多いのだ。」

とある蛮族の長(貴族のこと)が自分の民(領民)から過剰に税を

取り立てているらしい。
叔父様がそう嘆いていると

「そりゃ仕方ないことだよ。人間はエルフと違って長く生きられないから、

永い視点でものを見る事ができないんだよ。

だから、そう言う視点を持つ人たちの中には成功した人が多いし。目先の利益ばかり追求する人が多いのは種族の性質上当たり前のことです。」

その通りだ、と思う。エルフはその長命故、長期的に物を考えることができるので

他種族ともキチンと折り合いをつけ共生している。しかし、その場合大体がエルフ側が

しつこく説得し、向こう側が散々こねた末のことだ。

いつも、交渉が終わると

「全く、 族は」

「仕方ありませんよ。未成熟な種族を導くのも世界を管理する我らの使命なのですから」

と締め括られる。

この話からすると彼は長期的に物を見ることができののだろうか？
付き合いも短いのでまだわからない。

しかし、彼が優しく、そして傷ついていたことはわかる。それも一方的に。

・・・何してんだろ。私。

この数日、彼を研究対象として観察してきた。
それこそ動物の生態記録をとるかのよう
に、食事の取り方からトイ
シの排泄まで。

そのことに気づき頬が熱くなるのを感じる。

・・・ホント私何やってんの!?

彼はもうすでに自分の中では研究対象ケンゲウではなく『人』なのだ。

人の行動の行動をいちいち観察する。

それはエルフの戦士が監視任務に就いた時などはよくあることらしいが

彼は監視対象ではなく、友人のようなものだ。

彼女の行動はある意味ストーキング行為とも言える。

・・・やめよ

観察もこれについて考えるのも。

既に空は暗い。

加えて砂漠の夜は寂しい。森のように木の葉がこすれる音や虫の鳴
く声すら聞こえない

不毛な暗闇に包まれた世界。

「あー、おなかすいた。」

・・・飲酒が三十からとかホント不便ね。

おかげでご馳走食べ損なっちゃったわ、と。

空気が澄んでいる上空のせいか視界に浮かぶ二つの月はいつもより大きく見える。

今日はなぜか二つの月がいつもよりも寄り添って見えた。

泣き上戸じゃなくても泣きたいときは泣く（後書き）

こうなってしまったのは作者のせいではない！
作業用BGMのせいです。

疲れていたせいか「忍空」のエンディングテーマを聞いていたらホロリと来てしまった。
もし暇だったりしたらようつべやニコニコで聞いてみてください。
お勧めです。

エルフの考え方がクリーンすぎる(前書き)

今回、設定ばかりで詰まらないかもしれない。

エルフの考え方がクリーンすぎる

シャイターン
悪魔

ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ

エルフたちにとってこの二つの単語は同義語である。
後者は長いのでただブリミルと言えば通じるが。

ブリミルが悪魔シャイターンと呼ばれる所以ゆえん

現在、ルクシャナ宅でシャイターンについての書物を辞書片手に読んでいる最中である。

それは遡さかのぼること六千年、人間の言う聖地にあるシャイターンの門に悪魔が現れた時に半分のエルフが死滅したらしい。

・・・死滅？どんな風に？

焼死、溺死、肉体の損傷による死なのか、文字通り体ごと消滅させられたのか。

そして、聖者アヌビスがブリミルを倒すことで争いは終結した。

古代エジプトと何か関係でもあるのかね。

・・・それに・・・

伝承により、ブリミルが使っていたとされる魔法は四系統とは異なること、

使い魔が四体いることなどから、悪魔の力が虚無の系統であること

は明らかだった。

そして悪魔の力の使い手は死ぬとその力を子孫の誰かに移すことができるらしい。

これじゃあ倒しても倒しても終わりが無い。

また、四つの四、各担い手にそれぞれの四がそろった時、真の悪魔が目覚めるとされる。

・・・真の悪魔＝ブリミルじゃないのか？

魔法が発動して何か起きるのだろう。その魔法そのものが悪魔なのか。

ハルケギニアには始祖とその使い魔の描写をした書物が多い。

ガンダールヴ、武器を自在に操る。

「ガンダルヴァ？ガンダルフ？」何か似ているものでもあるのだろうか。

ヴィンダールヴ、獣を仲間にできる。魔物使いみたいなものか。

ミヨズニトニルン、魔道具を扱える使い魔。魔道具と武器の境界は何かあるのか？

残り一体は記すことすら憚られると書いていなかった。書いたらその名前を書いたら魔法が発動して著者は死ぬのかあるいは教会に消されるのだろうか。

明らかに後者が有力だが、今重要なのは

・・・四つの『四』？これが悪魔ってことは・・・

「使い魔と担い手で八、秘宝で・・・八」

・・・なるほど四つの四、十六

これは、ブリミル教の経典にも乗っていること

ロマリアに始祖の円鏡、炎のルビー

ガリアに始祖の香炉、土のルビー

トリステインに始祖の祈祷書、水のルビー

アルビオンに始祖のオルゴール、風のルビー

しかし、そろった時に『四つの四』がそろった時に効果が表れるなら一カ所に

集めておけば手間が省けていいものを。

「って、駄目か。」

敵対勢力であるエルフに奪われたり壊されたりすれば・・・

「壊せばいいじゃん。」

魔法とは発動するまでは案外繊細なものである。

秘宝のうち一つでも欠ければ、魔法は発動しないか効果が弱まるかのいずれかで

前者の方が例は多い。

代えの効かない秘宝の方を狙えばいいのに
六千年も経っているのにそんな簡単なことも気が付かなかったのだ
らうか？

よく読んでみると、最後にこの十六が揃いそうになったのが二千年
ほど前、

人間との最後の戦争は約八百年前。
ギリギリのところまで担い手を倒し、人間は逃げて行ったらしい。

止めることができたのなら秘宝を奪えばいいものを。

まあ、当時は当方で事情があるだろうし、もしかしたら追走できる
ほど

戦力が残っていなかったとか。

まあ、現在において各秘宝は各王家に置いてあるのだ。

人間よりも数が少なく、侵攻に向かないエルフの精霊魔法（先住魔
法）では

潜入して破壊、などとうまくいくはずもなく、こうして今まで来て
いるのだろう。

「ふう。」

考察も一段落し一息つくるとルクシャナとビダーシャルさん、ムニイ
ラさんまで
がこちらをじっと見ていた。

「どつだった？」

ルクシャナが尋ねる。体をテーブルに乗り出し長い金髪が端にかか
る。

「どづつて、面白いよ?」

確かに覚えかけの言葉で読むのは大変だが、対立して交流の少ない異種族間で

共通の者を片方は神と崇め、片方は悪魔と蔑んでいるのだ。

面白くないわけがない。

加えて彼女は学者の卵、きつと解釈の違いのことを言っているんだろつ。

「そついうことじゃないわ。ルクシャナは考え方の違いが聞きたいんでしょつ?」

ムニイラさんの言葉にルクシャナはぶんぶん首を縦に振る。

「えー。言っても怒りません?」

きつと僕は嫌そうな顔をしているだろつ。

・・・ビダーシャルさんとか怒りそつだもんなあ。

「叔父様、出てつて。」

「ビダーシャル、出て行きなさい。」

どうやら思考がシンクロしたらしい。というかムニイラさんも学者肌なのか。

二人が冷たく言い放つとそれに対し、ため息をつきながら彼は言った。

「別に文句はありませんよ。私も解釈の違いには興味がありますからそれにこの先、蛮族と関わることになる可能性もあるんです。敵対するかもしれないのに相手を知らないのは危険なことでしょう？」

・・・ああ、やっぱりそんな考え方が。

「まあ、敵対しないに越したことはありませんけど。えと、それじゃあ・・・」

始める事にして、まずは・・・思っていたら

「さつきから駄目か、とか壊せ、とか言ってたのは何？」

ルクシャナは早くしろとばかりにせっついてくる。

どうやらそれを言わないと先に進ませる気はないようだ。

「大したことじゃない。ただどうして各王家に始祖、こっちではシヤイターンか。」

四の四をそろえなきゃいけないのにわざわざ、シヤイターンの宝が各王家で

保管してるのはどういふ事かと思ってね。」

「で？」

三人同時だった。

「盗まれたり壊されたりすれば、四の四は永久にそろわない。

だからリスクを分散させている。それにこれって無理なんでしょう？」

僕はビダーシャルさんの方を見て言った。

「ああ、精霊魔法は侵攻に向かない。仮にそうした場合、エルフ一人当たりの戦力は蛮族と大した差はなくなる。優位な点と言えば体術、魔道具、後は経験といった所か。」

人間に魔法専門と体術（ここでは武器の扱いから徒手空拳までを考える）専門がいて両方修得した者が少ないのに対し、エルフは基本的に両方必修である。

「戦力がえらい小さくなりましたね。僕は半減ぐらいに考えてたんですけど。」

「臆病なくらいで丁度いいのだ。ここから考えれば数が多い方が勝つのは自明だろう。」

「何せ蛮族は数だけはいからな。」

エルフはその長命故繁殖スピードも非常に遅い。加えて個体の生命力が人間よりもずっと上なのであまり数が増えない。

「やっぱり。確かにエルフの魔法は蛮族の魔法探知にかかりませんし、精神力消費も少ないんですけど流石に長時間、しかも移動するたびにその精霊と契約して『変化』なんてやってたらすぐに精神力枯渇ですからね。」

潜入もせいぜい貴族宅程度までが限界であろう。

「まあ、こんなこと言っても無駄なんで次行きましょう。次。」

その後、ブリミル教の教義と大いなる意思の教えの比較、聖地の解釈の仕方

上層部の腐敗とその入れ替えについて話すといつの間にか夜が明けていた。

全くこいつら全員知識狂かと思うぐらい、終始元気で意見を飛ばし合った。

最後までルクシャナが残ったのには感心どころかうんざりした。

ルクシャナの家に来て既に数ヶ月が経つ。

砂漠気候よろしくオアシスの外は相変わらず暑いままである。

ビダーシャルさんは僕の監視役という事で家にいることが多く、良く机に向かっている。

何でも、どこかの評議会議員に目をつけられ、数年後立候補させられるらしい。

本人いわく

「拒否権がなかった」

らしい。

ルクシャナはずっといるかと思えば、アディールにある学校に通っているらしく

この前までの数日間、この家にいたのは長期休暇の終盤だったのと。

首都アディールからこのオアシスまでは約二百リーグ強。

風竜で通うとしても毎日となればそれは大きな負担となる。

普通ならば寮に入り、そこから通うのだがムニイラさんが

「彼に送ってもらえばいいじゃない。速いんですよ？」

居候なので強く言えないのだが。実際、手を抜いても四十分もかからない。

しかし、

「寮っていつでも無料なんでしょう。いいじゃないですか入寮。」

エルフには通貨という概念がない。

必要な物資を揃えるにはどうしたらよいか、という事になると

オアシスに住むエルフは自分たちで生産、そして各部族間で物々交換という形を

とっている。また、街に住むエルフだが、それは政府に職業とともに登録し、

必要に応じて支給されるとのこと。

こんな形をとって不便ではないかと思うが、

大体においてエルフは種族全体のことを考えて行動する。

やはりこれも種族の性質故なのか、

人間が通貨という明確な価値基準を持たなければ不安になるのに対し

エルフは種族の繁栄という曖昧な基準で事足りる。

例えばある地域で綿花が不作だったとして
いつもよりも倍の量の麦と交換しなければその集落は飢えてしま
うとする。

一方その隣の地域は麦が豊作だったとする。
この場合、人間なら借金にしたり、見捨てるのが普通であるのだが、
エルフは倍の量の麦と交換するのが普通なのである。

エルフ全体が『情けは人のためならず』という言葉の教訓を理解し
実行しているのである。

これなら、人間が同族で殺し合う事にエルフが疑問を抱くことに納
得がいく。

そして、人間を蛮族、自分たちを高貴な一族と呼ぶのも。
つまり、

「タダからってそれに頼ったらそれこそ他のエルフの努力が無駄に
なるわ。」

あなたもネフテスで暮らす以上人間の価値基準は捨てないにしても
表に出すのは
やめなさい。」

これが常識となる。

……、これが常識の壁か。それにしても……

この子を毎日送迎するのか、とルクシャナを眺める。

切りそろえられた長くきれいな金髪、少し吊り上ったエルフ特有の

切れ長の青い瞳。

顔のパーツそれぞれが一級品であるのにその配置まできれいに整っている。

・・・まあ、控えめに見てもかなりの美少女だね。

手足は細くしなやかで長いし、エルフが人間の成長スピードの半分だとすると

成長期はこれからの筈。

徐々に女らしい体になって行く時期である。

つまり、

・・・こいつと毎日合計一時間はくっつかなきゃいけないと。

まだ見た目が十一歳であるのが救いである。

背中に乗っけるか抱えなければ一緒に飛ばせない自分の未熟さが憎い。

役得、役得、と凶太くなれない自分が恨めしい。

・・・うん、明日から（体から）離れた所の風の制御を重点的に練習だ。

体から離れた風の制御は余計に精気を食うし、今のところ

自分と同じくらいの重さの物を精密に動かすとして三十分で集中力が切れる。

ルクシヤナを飛ばしながら自分も一緒に飛ぶとなるとこの持続時間を最低でも倍

そして何か物体と一緒に飛ぶ訓練もしなければならぬ。

・・・絶対に習得する！

とてもやる気が出てきた。

「ナツメ、あなた今私のこといやらしい目で見てたでしょ？」

ニヤニヤと悪戯っぽい笑みを浮かべ顔を近づけてくる。

「なんだと！？蛮族ごときにうちの娘はやらんぞー！」

ムニイラさんは口調も態度も声の大きさも普段と違った。

その迫力はすごいいつもより体が一回り大きく見える。

「安心して。今のところないから。」

僕は素っ気無く答えたつもりだったが、ルクシャナは更に増長し

「今のところお〜？じゃあ今後はあるんだ。」

過剰反応、または自意識過剰か。まあ、こんだけ可愛ければ増長しても許せる。

しかし、

「そのうち、性的に興奮したりして襲っちゃおう？」

そして、おかあさまー、蛮族に襲われる〜と。

それに対し、大丈夫よ、ルクシャナ。あなたは私が守るわ。

親子共々ノリノリでからかってきた。

そして横目でニヤニヤしながらこちらを見ている。

ピクツ、と血管が浮いた気がする。

「んなことあるかあ！」

貴様襲うぐらいだったら猫とモフモフしていたほうがまだましじゃ
！！」

性的に興奮したぐらいで襲うくらいであれば死を選ぶというような
勢いで言った。

先ほどの一言が僕の心に火をつけた。そして一息つき

「いいだろう。その言葉、僕への挑戦と受け取る。」

そして人差し指をピツと立て

「一ヶ月だ。一ヶ月で触れずに貴様に触れずに送迎できるようにす
る。」

そう宣言した。

二人とも何を言っているか理解できないようで固まっていた。

硬直時間が解けると、ルクシヤナは

「猫とモフモフ？何それ？」

何のことかはわからないようだ。それも当然か。これは同じ趣味を
持つものにしてか
理解できぬ境地。

「何を言っておる。モフモフとはモフモフに決まっておる。」

それで理解できぬようであれば、お主には素養はない！」

そうして数ヶ月が経ち、ルクシヤナが学校が休みの現在。

宣言通り、一ヶ月未満で風の制御を習得し『触れずに送迎』が実現した。

え？ルクシヤナが学校にいる間何してるかって？

カスパのエルフの戦士の監視のもとに労働（タダです。ただし昼食付き）、

そうでない時はもちろん監視付きで図書館に入り浸っております。

学校、今更タルくて行く気にもならないし、僕はエルフが蛮族とみなしている種族だ。

一応目立つ容姿で、しかも政府に認められている存在であり、街には賞金首のごとく

その姿を魔法で映したポスターが貼ってある。襲わないで下さいと。しかし、先入観というものは中々ぬぐえず奇異な目で見られ続けた。

コオオオオオオ

深く長く息を吐き、そしてまた大きく吸う。そして

「ふっ！」

息を吐くと同時にあばらの下まで引いた拳をまっすぐ前方に打ち出す。

拳と岩が接触し破砕音とともに岩が砕け崩れた。

「おお、ええええええええええ！？」

・・・うるさい。

ルクシャナは感嘆と驚嘆の声を同時にあげた。

・・・まあ、確かにおかしいよね。

「今の何？というか何したの？」

「殴った。」

殴った方の拳をぐっぱぐっぱと開いたり閉じたりしながら答える。

「え？人間の魔法じゃなくて？どう考えてもおかしいでしょ！」

僕は、うん、とうなずきながら

「確におかしいよ。これは。拳が全然壊れてない。」

「いや、おかしいのはあなたの腕力の方。」

確かにそれもおかしいのだが、

「まあ、いいから聞いてよ。人間の骨つてさ、多分エルフも一緒だ
と思うけど

そこまで硬い物質じゃないんだよ。それを覆う皮や筋肉でカバーし
たとしても

バンテージ
布巻いただけの拳でこんな硬い岩に思いっきり打ちつけたら、
普通は拳の方がグチャグチャに砕ける筈なんだ。」

オグルのように腕自体が丸太のように太く握り拳も人の頭十個分ぐ
らいの

大きさがあれば打ち負けることも関節を痛めることもないだろう。

これは何か別のもので補完しているとしか考えられない。

「そう言われると確かにそうね。あなたの故郷の人達って・・・
そうか覚えてないんだっけ。ああ、もう！どうして覚えてないのよ
！」

・・・怒るなよ。

そう言うやり取りをしていると上空から一匹の風竜が降りてきた。
上には人が乗っているようでこちらに近づいてきた。

・・・おおい、近いよ。このままだとぶつかるだろ。

しかし向こうはぶつける気満々なのかそのままスピードを上げて滑
空してきた。

巨体が通り過ぎるのを横に飛んでよける。ルクシヤナも同じ方向に飛んでいたようで

風竜が起こしたその風圧に負けこちら側に倒れこんできた。

・・・乱暴な。

風竜の乗り手に対し心の中で文句を言い彼女を抱きとめる。

風竜は少し旋回するところらに向かって降りてきた。

・・・ずいぶんつまみ乗り手だな、あんなに細かい動きを竜にさせるなんて。

僕も一応竜に、懐かれている。

でも乗せてくれない。何だか自分で飛べども言っているように僕が乗っかると

じっと大人しくなって動かなくなる。

・・・うらやましくなんてない！

叫びそうになるがぐっとこらえた。

風竜の乗り手は、僕より少し幼いくらい（見た目）の少年のエルフだった。

その少年は終始僕を睨みつけ、風竜から飛び降りると、

「おい、その蛮族。ルクシヤナから離れる！」

怒鳴るように、僕を指差し言った。

・・・何だか面倒くさい性格してそう。

エルフの考え方がクリーンすぎる（後書き）

前半のテーマはなぜエルフが虚無の担い手ばかりを狙い始祖の秘宝を狙わないのかと考えた結果です。

後半のエルフの価値基準ですが何も良い例が考えつかず勝手に妄想しました。

ラブコメって難しい。

駄文め。

エルフとほのぼの（前書き）

疲れて言うのは良くない。

疲れもピークを過ぎると逆に眠れなくなって三日徹夜なんてこともよくある。

さっきまでネタが浮かばなかった。

これがスランプというやつかと思っただけならそんなことはなく、ただ疲れて

倦怠感がひどかっただけだった。

エルフとほのぼの

「もう一度言っぞ。蛮人、その子から離れる。」

風竜から下りたエルフの少年は険しい表情でナツメを睨みつけこちらに歩いてきた。

「誰？」

ナツメは一人つぶやいた。

「おかえりなさい。アリュー」

ルクシャナはそう言うとナツメの手から離れ、アリューと呼ばれたエルフの少年の方へ駆け寄った。

「研修はどうだった？」

「ああ、うまくいったし結構楽しかったよ。」

「南方のはどうだったの？何か面白いものはあった？」

「ああ、肌の黒い蛮人の少数民族とか、虫が鬱陶しくて蒸し暑い森とか。」

それより、その蛮人は・・・」

アリューは楽しそうな一人だけ雰囲気を一変させ、再度ナツメを睨みつける。

「彼？ああ、紹介するわ。彼はナツメ、蛮族の世界から逃げてきたんですって。」

「彼！？おいおい、君は蛮人をエルフと同じように扱ってるのかい？」

ルクシャナのなんでもないというような返答に彼はバカにしたような態度をとる。

「そうよ」

そしてその即答に固まった。

・・・とりあえず、偏見を持つてゐることはわかる。

その一連のやり取りを見てナツメは、面倒な、と呟いた。

「蛮人だぞ。君は正気じゃない！」

「私が正気じゃなかったら、容認してる評議会のおじいちゃんはみんな気違いね。」

彼、蛮族の世界で『魔王』って呼ばれてるのよ。

でも蛮族と争いさかいを起こしたくないからこつちに來たって。

その様子だと……まだ聞いてないみたいね。」

「評議会が認めたって言うのかい？ それこそ冗談じゃないよ」

「アディールの街を歩いてごらんさい。彼についての貼り紙が街の至る所にあるわ。」

ナツメが特大のため息をつき、今のうちに引っ込んでこつと屋内へ向かおうとすると

「おい、待て」

面倒くさい声はその耳に届いた。

「はい。何か？」

「お前一体どういうつもりだ。蛮人のくせにエルフの家に住みつくなど……」

「どういうつもりって、僕、一応監視されてるんですけど。」

それにこれは上の決定で、三年はここにいなきゃダメだって」

三年間の監視の後、その間の報告から今後の身の振り方、つまりエルフと共に暮らしていけるかが判断される。

「三年!?!」

その単語に反応したアリイーは頭をふらふらさせ、

「三年も。三年も同じ屋根の下で……」

何やらぶつぶつ呟き始めた。

問題起こしたくねえ。

これまでの間、評議会に認められてはいるものの、
一部人間に対する偏見の強い者たちが

「悪魔を殺せ！」

と叫んで飛びかかってくるのがあった。人間シャイターンの悪魔である。
当然僕はこの場から逃げ出してことなきを得たのだが、

この子も同じようなことしないよね？

親しい友人を横から取られたぐらいであってほしい。
いやいや、まず仲良くなることから考えよう。

「ねえ、大丈夫？ アリイーとか言ったよね」

「蛮人が僕の名前を呼ぶな！そして触るな近づくな！」

肩に手をかけようとしたら、拒絶された。

僕にどうしろと。

「何でそんなに嫌うんだ？こっちは別に何もしてないのに。」

「何で嫌うかだと！白々しい。お前達がシャイターンの門を攻めて
くる度に

僕達エルフはたくさん死んでいるんだぞ。」

エルフがいくら強くても物量で押せばそれも限界が来る。

加えてたいていの遠征にはブリミル教の狂信者達が付いてくるのだ。
無駄死にと分かっていて飛び込んでくる人間ほど性質が悪く、そし
て恐ろしい。

「お前たちっ……。攻めてきたのはブリミル教徒でしょう。僕もブリミル教に追われている身なんだ。これって共通の敵って奴にならないの？」

何だか悲しくなり声の調子も下がってくる。

「ふん！ そんなうまいことを。取り入って善からぬ事でも考えているんだろう」

……訂正、仲良くなるの無理。

こちら側から一方的に歩み寄っただけでは分かり合えるはずもない。向こうからも近づいてもらわないと、そんなことじゃいつまでたっても解決しない。

「わかったよ。もういい」

明確な拒絶にとりあえず今は諦めることにした。時間が経てば彼の頭も冷えるだろうと。

そう思っていたら、

バチンッ

という乾いた音がした。

ん？

良く見るとルクシャナが手を振り抜いた方向に、アリーの顔が向

いていた。
どうやら頬をぶっ叩いたらしい。アリイーはそのまま力が抜けたようにへたり込む。

「アリイー。今日のあなた少しおかしいわ。一体どうしたの？」

アリイーの目が死んでいた。

「いつも言ってたじゃない。自分たちはこの世界を管理する高貴な一族だって。

だから未成熟な種族を導くのも義務だって。

彼はここに迷いこんで来たようなものなのよ？

それを聞きもしないで蛮族と同じように見るなんて、今のあなた本当に変よ」

何があつたの？

そう続けると、彼はうつむき、

「今日は帰るよ。頭が冷えたらまた来る」

そう言つて、泉の上に浮かんで水を飲んでいる風竜の方へ歩いて行った。

・・・何だつたんだ？

風竜は水飛沫を上げながら飛び去って行った。

「どうしたんだろ。ホント。」

ルクシャナが呟いた。

「さあ？友達の家に遊びに来たら知らない人がいてびっくりしたとか？」

「違うと思うわ。彼、幼なじみなの。今までそんな人見知りした所見たことない。」

飛び去る風竜に乗るアリーの背中が煤けて見えた。

「所で研修って？」

「アリーは騎士ファリスを目指してるの。それで、先輩の戦士の任務について行って補佐やら雑用やらをさせられて実戦の空気とやらを味わって来るんだって。」

「ふーん、職業体験みたいなものか。」

ネフテスの教育機関では、たいていのエルフが十二歳から二十六歳まで教育を受ける。

その後、職を決めたりそのまま残って研究職に就いたりとする。

精霊の扱いと戦士としての教練が必修であり、その他に語学、歴史学（宗教色が強い）

数学、初歩の医学、民族学（他種族との付き合い方など）があり途中で各専門に分かれ、職についていく。

また、各分野とも精霊魔法を併用したものが多いため厳密な専門分

野としての

魔法という科目はない。ついでに言うとネフテスにはブリミル教のような

聖職者が存在しない。

アリーはその最終学年ということで研修、そして一人前の戦士となるらしい。

するとそこで気付いてしまった。

・・・自分、将来どうしよう。

無計画である。職業が国も部下もない魔王だなんて虚し過ぎる。そのことで悶々としていたのだが、

「大丈夫よ。アリーもきつと分かってくれるわ。」

例によって勘違いと。

教室は白タイルが敷き詰められ木で作られた長い机と椅子が並べられ、

どういう原理か不明の魔法で文字を映し出す大型のスクリーンが設置されている。

まだ朝も早くその教室には誰もいなかった。

・・・また早く来すぎた。

遅刻なんかよりはずっと良いのだが、あの魔王を風竜代りに利用してから極端なのだ。

頭の髪は今朝整えてきたはずなのに既に乱れぼさぼさになっている。

・・・もう少し丁寧に送ってほしいわね。

何せ、風竜の倍速で飛ばしてくる。一応魔法で風圧を和らげてくれているらしいのだがそれでもこの有様だ。

少女はブチブチ小言を言いながら自分の席について髪を直し始めた。まだ、日が昇っていようが昇ってしまいがこの首都アディールの内
部は風石と水石

の効果で常に快適に過ごせるようになっていた。

それでも日があまり高くない今の時刻は真昼間よりも涼しく感じられる。

窓際の席から外を眺めてみる。

首都の朝ということもあって風竜がひっきりなしに行ったり来たりと忙しい。

今日の彼は隣接する海上の工業都市に行くらしい。何をしに行くかは知らないが

・・・まあ、監視もあるんだし変な事はできないわね。

そう一人考えながらぼんやりと外を眺めていると

「おっはようー！」

背中をたたく音と一緒に元気な朝の挨拶が聞こえた。

「ラナ、それ痛いからやめてよ。」

ごめんごめんと言うこの少女もご多聞に漏れずエルフである。ルクシャナよりも少し背が低くすんだ金髪短く切りそろえているのが特徴的だった。

「今日の魔王便は速いんだね。」

同じ時刻にいつも出ているにもかかわらず彼の調子によってその飛行速度は異なる。

まあ、風竜よりは速いのだが。

「そうなのよ。おかげで髪がボサボサ。」

「そう文句を言いつつも毎日利用してらっしゃる。流石飼い主。」

現在、ルクシャナは学内で割と、というかなんかかなり有名人である。魔王の飼い主、命令一つで魔王を操る、実はルクシャナが魔王、など

「別に飼ってるわけじゃないわ。評議会の命令で叔父様が連れてきただけで」

「たまたま空を飛ぶのが速いから利用させてもらってるだけよ。」

「おお、利用と来ましたか。え〜となんだっけ。これって蛮族の文学で……」

「悪女？」

「そうそれ！」

ルクシャナが答えると同時に、ラナは人差し指をビシツという擬音が似合うような動きで彼女に向けた。

「で、今日その彼はどちらに？」

「隣の工業地区へ行ったわ。ホントこっちが不気味なぐらいきつきしてたから

何かやらかさないか心配で。」

冗談めいた口調でそう言う。

「ほほう。心配とな。」

ラナはその冗談に口元が片方吊り上りニヤニヤと当事者が見たらイラッとくるような笑みを浮かべる。

「変な勘繰りはしないでよ。後で面倒なんだから。」

いつもと立場が逆。普段ならばルクシャナが周りを振り回すはずであるのに。

「何だか今日のルクシャナ変よ。何かあったの？」

ラナのその言葉に態度は一変し、

「そうなのよ。聞いてよ、アリーーったら研修から帰ってくるなりね……」

始業時間まで一方的に愚痴を言い続けた。

そこは工業都市というか職人街だった。

建物の煙突からは煙が出てはいるが、日本の臨界工業地域のように巨大な煙突から
もくもくと大量の煙が出ているわけではなく、せいぜい銭湯の煙突より一回り

大きい程度で大気をガンガン汚してます、という印象は受けなかった。

建物のそこかしこから金属音が聞こえる。

職人が金属を加工するために叩いている音。

生産されているのは主に日用品、それから魔道具、少数ではあるが剣や槍などの武器。

「ほおー。」

赤煉瓦づくりの工房が多く、いかにもな雰囲気を出している。

いつものように注目されているが、人間の街のように敵意や畏怖はない。

そして

……これがなければ言うことないのに。

『襲わないで下さい』自分の肖像の上にエルフ語でデカデカと書かれたそれは
せつかくの観光気分をぶち壊しにするには十分だった。

・・・さつさと仕事行こう。

船からの積み荷下ろし。例の如く肉体労働である。精霊魔術も併用し数十人でやる作業を一人で行う。上層部に精霊魔術のことが報告されてからは
こういう使い方が日常茶飯事となっていた。

・・・人間もこういう使い方すればいいのに。

ハルケギニアでは魔法があまり生活に根差していない、魔法で畑を耕したり、
作物を改良したり、農具を作ったり、物を運んだり、といった事をするメイジは少ない。

基本戦闘、アルビオンの魔法研究所も戦闘に関係ある研究ばかりでこれじゃあ発展は望めない。魔法偏重主義以前の問題である。

加えて僕の場合は使ったら即異端決定だったのでリュティスに居た時は使いたくて

ストレスがたまるしアルビオンに居た時は王族の客人扱いでそういうことさせてくれないし。

「ふー、いい汗かいた。」

魔法使っても、後ろ指さされないって素晴らしい。

エルフの人達も別に僕が呪文なしで魔法使ってることに突っ込まないし、

使って貢献すればするほど褒められるし。

・・・感謝>賃金

お金で買えない価値がここにはあった。

別に賃金なしという事実から逃避しているわけではない！

その日の仕事も片付き、ルクシャナを迎えに行こうとすると、

「まだ、そんな時間じゃないか。」

まだ正午を少し過ぎた頃だろうか、

しかし相変わらず気温が一定であることに違和感を感じる

・・・もう少し見て回ろうか。

そう思い、少し街を歩くことにした。

ネフテスは猫が多い。そして犬が少ない。

それには大いなる意志の教えにそれが関係している

猫は『汚れ無き生き物』とされている。

そのおかげで野良ネコは街の一部ではにあふれ返り、
そこかしこでもちらほら視界に入ってくる。

しかし、エルフは猫を愛玩動物でなく、その神聖さ故に保護をして
いるだけ、

という考えの者が多い。なので

「うわあ、あの子すっげえ可愛い。」

僕が感嘆のこもった声でそう言うと、監視の任についているエルフの戦士は

「ん？どこだ？誰もいないぞ。」

「違う違うもつと下、下。」

「は？猫？」

「そう、あの見事なまでに真っ黒な毛、しかも毛並みまでいいと来てる。」

じゅるり

と変な目で見られてしまうのである。実際街で猫とじゃれている所を目撃され
蛮人は汚れを被^はつてもらっている、と勘違いしたり
ルクシヤナに至っては、なんだただの変態か、と。

「ここは天国か。」

楽しいと時間が過ぎるのは早い。

「でね、彼っいたら私より猫の方が可愛いって真顔で言うのよ？」

「あつはははは、その人絶対どこかおかしいって。」

既に時刻は夕刻前、ルクシヤナはラナと寮の前で他愛のない話をしている。

工業地区とは違い白い石造りの建物に赤い日の光が当たり周囲をオレンジ色に染め上げている。

「あ、ルクシヤナ、来たよ。」

ラナがそう言うのと、空から人が一人降ってきた。着地の直前突風が巻き起こりその勢いを殺す。

「あれ？待った？」

かなり高い所から下りてきたにもかかわらずなんでもないようにそう言う白髪の少年の髪も夕陽のせいで赤く染まっている。

「ううん、話してたらあつという間。ね。」

ルクシヤナは隣に居たラナに同意を求めるが

「え、結構長かったよ。」

「そこは、ハイ、でしょう？」

とルクシヤナは雰囲気を読んでもくれない友人の頬をグリグリとつねった。

「いひゃいよ、とラナが言うとき手を離し、

「それじゃ、帰りましょうか。」

と、ナツメ肩に手をかけた。

「ん。じゃあ飛ばすから手、離して」

彼がそう言うのに対しルクシヤナは

「今日はお嬢様扱い希望。」

と。要は抱っこしろということである。

それにラナは、おおやるね〜とはやし立ててきた。

するとナツメは露骨に嫌だという表情を浮かべた。

「めんどい」

ナツメはいつもの通りそう返した。するとルクシヤナは予想通りと
言わんばかりの
笑みを浮かべ、

「ほら、言ったとおり。変なやつでしょ。」

ラナに向かって言った。

「ホントだ〜。魔王というか唯の甲斐性なしだね」

ルクシヤナは自分の予想が的中し、その友人は友人で楽しそうにその話に乗ってくる。

ナツメはその様子に僅かに顔を赤面させ、同時に気が抜けた様子だった。

……はあ。

胸中でため息をつき、二人のやり取りを眺める。

今日は猫をいっぱい撫でてきたので、怒りなんてものはちっとも感じなかった。

唯、少し疲れを感じ、早く帰って休みたいとは思っていたが。

「じゃあ、お願い」

話が終わったらしくルクシャナは、また肩に手をかけてきた。

「結局、抱っこしろと？」

「そう言う気分なのよ。それにこーんな美少女、役得でしょ。」

「自分で言うなよ。」

やっぱりため息が出る。そして抱きかかえると女の子特有の柔らかさと

いい匂いがした。

これだから嫌なんだよ。

抑えの利かない生理現象に嫌悪する。

自分の心拍数が上がるのを感じる。元々、日本に居た時から女の子に縁がなかった、
というか必要以上の接触は積極的に避ける性格をしているのでいつまでたっても
慣れてくれない。

とりあえず飛んでしまえば気にならないと、風を起こしへ上空へ飛んだ。

何だかいつもと違う様子が違う。いつもなら周囲の景色を楽しみながら帰るのに
今日は時々、僕の顔を見てくる。

「どづいう風の吹きまわし?」

予想外の質問だったのか、え?つと一瞬言葉に詰まる。

「あのね、昨日アリイがうちに来てあなたにいろいろ酷いこと言っただじゃない。

それで、昨日の今日だし元気ないかなーって。」

そんなことか。

「別に何ともないよ。」

今日は猫とじゃれてきたし、ストレスなんてものはもうない。

「本当?」

「ん、大丈夫。心配ご苦勞。」

「本当に？落ち込んでない？」

「そこまで心配するほど繊細じゃありませんよ。」

「ああ、落ち込んでないから。もうそれはおしまい。」

「今日はお嬢様扱い希望。」

そう言っただけルクシャナは自分よりも背の高いナツメの肩に手をかけ抱っこしやすいように体を近づけた。

それに対しラナがはやし立てるが、その当人ナツメは

「めんどい」

と行って切り捨てた。どういうわけかこいつは人の女の子よりも猫が好きだと言いつ張る。

全く退廃的な、と思いつながらも彼の返答が予想通りだったことに少し嬉しくなりルクシャナはラナの方へ向き直り

「ほら、言ったとおり。変なやつでしょ。」

「ホントだ。魔王というか唯の甲斐性なしだね。」

甲斐性なし？ 頼りになるところは今のところこの送り迎えだけだし力も強いけど性格がアレだし、実際のところそうなのかもしれない。

そしてそんなルクシャナ達のやり取りを彼はあきれ顔で眺め始める。本当に嫌そうな顔をしている。

これ以上悪化しないうちに、とルクシャナは再び彼の肩を掴み

「じゃあ、お願い」

と言った。ナツメはそれに諦めたかのように、

「結局、抱っこしろと?」

そう言ってきた。別にいいじゃない、と思う。離れた所の風の操作は大変なのだから。

「そう言う気分なのよ。それにこーんな美少女、役得でしょ。」

「自分で言うなよ。」

おなじみになりつつあるこのやり取りで締めると彼はため息をついた。

そんなに嫌がらなくてもいいじゃない……。

抱き上げてもらうとしっかりと鍛えられているのか私一人が乗った所で

びくともしなかった。

帰る途中風で流れる髪を抑えながら彼の方を見る。

意識は魔法に集中しているはずなのに、その顔は穏やかで周りの景色を楽しむ余裕さえあるようだ。

少なくとも沈んではいないと。

昨日のやり取りが思い出される。

彼の泣きそうになった顔を見たらつい手が出てしまったのだ。

魔王と呼ばれるこの少年は案外涙もろく、大体において弱腰である。

泣き虫魔王、面白いかも。

そう思いながら彼の顔を再び眺めてみる。するとそれに気づいたように

「どつという風の吹きまわし？」

さっきのことだろうか。きっといつもと違う事をしたもんだからそれに違いないと

一瞬で考えをまとめる。

「あのね、昨日アリーがうちに来てあなたにいろいろ酷いこと言っただじゃない。

それで、昨日の今日だし元気ないかなーって。」

「別に何ともないよ。」

「本当？」

「ん、大丈夫。心配ご苦労」

なんでもないように見せておいて実は影で落ち込むとかやりそうなのだ、こいつは。

「本当に？ 落ちこんでない？」

しつこいその質問に彼は少し笑い、

「ああ、落ち込んでないから。もうそれはおしまい」

そう言ってさらに速度を上げた。

夕焼けで元々の青が一面赤く染まった海は夜の冷え込みの始まりの
せいもあってか
とてもあったかい色に見えた。

エルフとほのぼの（後書き）

なんだこれ？なんて気持ち悪い妄想。

ネフテスの猫はイスラム文化に基づいたもの。

近代兵器の持ち込みは禁止となっています。(前書き)

やりすぎた。

近代兵器の持ち込みは禁止となっています。

「どうして駄目なの?!」

ダンツとテーブルを叩き、ルクシャナは言った。

テーブルの上には、文学作品、歴史書、物理化学の本、中には料理の本までが積み重ねられている。

これらは英語、日本語、後は良く見たことがない文字で書かれていたものもあり

その国籍はバラバラであった。

召喚されし書物

何が原因か知らないが、こちらに来てしまった地球の書物。

未知の言語書体で書かれているそれは誰にも解読できず、そのまま
ハルタギニア
人間世界から

流れてきたものが多い。もっとも文字の対応さえ知ってしまえば言語学者であれば

解読可能なレベルであるが。

「いろいろ考えてみたんだよ。教えてた所でそれが何につながるか。それを想像したらさ、やっぱり駄目だ」

ビダーシャルさんは傍目でそれを眺め、ムニイラさんはテーブルの横の椅子に座り

このやり取りをじっと見ていた。

「理由を教えて。理由が無いなら納得できないわ」

こうして、口論になっているのも僕がこの家に置いてあった地球の数学の本を
読んでいたことが原因であった。あの時ははぐらかして逃げたのだ
がルクシャナは
それを覚えていたようで今になって蒸し返してきたのだ。

ルクシャナが詰め寄ってくるのに僕は言葉に詰まる。そして少し考
え、

「これに書かれていることが『大いなる意思』を殺してしまう事に
繋がるから
少なくとも僕はそう考えてる」

大いなる意思 精霊の力の源となるもの

そのセリフにルクシャナは思考を停止させ、傍聴していた二人の雰
囲気も変わる。

「どういうことが詳しく説明してくれないか？」

ビダーシャルさんは言った。僕はそれにうなずき、

「ここにある書物は大体が、文学作品や歴史書ですが、
問題はこっちの方、自然科学という学問に分類されるこれらの本で
す」

そう言って積み上げられた本からそれらを抜き取り彼らの前に置く。
ビダーシャルさんはそれを手に取り、パラパラとめくって

「何だこれは？妙な記号ばかり並んで何が何だかわからないぞ。

これが大いなる意思を殺す事につながるというのか？」

「それは、地球と呼ばれる、この世界とは異なる世界からやってきた物です」

「異世界？」

ルクシヤナは反芻するように言う。

「この際、異世界が存在するかしないかは置いておいて下さい。とりあえず簡潔に言ってしまうえばそれに書いてあることの応用で一部を除いたエルフたちの技術が再現できます」

「すごいじゃない」

「でもそれにはいろいろデメリットがあるんだよ。使ったびに水や空気を汚したり、誤って事故でも起こせばその周辺の土地は人は立ち入れなくなった、作物が育てられなくなったりするような物もある」

それに三人は息をのむ。

「まあ、ここにあるだけの知識ではどうにもなりませんけど、科学書が世の中に

出回れば、それから派生する知識が不足を補っていくでしょうね」

読む人がいればそこから新たに気付くこともありその知識体系はどんどん広がってゆく。

「ナツメ、あなた、記憶がないってウソでしょ」

ルクシヤナがこちらを睨みながら言った。

・・・まあ、知られてた方が説得はしやすいか

「ごめんなさい。本当は覚えてる。僕がその世界から来たこと、その世界にいる家族、

そこで見たこと学んだこと、忘れたことも多いけどかなり覚えてる」

ビダーシャルさんは少し驚いているようだった。

「とりあえず今は僕の話聞いてほしい。嘘をついてた罰ならあとで受けるから」

そして話を続ける。

「僕のいた世界は言葉を話すのは基本的に人間種族しかない世界です。

一般に歴史は、約二千年前から始まっています。それ以前にもいろいろあるんですけど、

まあそれは置いて、重要なのはその人間がここ百年で急激に増え現在七十億近くまで増加したということです」

「七十億!？」

ルクシヤナは身を乗り出して叫んだ。

ハルケギニアの総人口（人間族のみ）：約四千万、ネフテス所属の

エルフ：約千万

魔法という力のおかげで

一人一人の生産力が高いエルフは人口一億以上の国に相当するとみていい。

「その要因の一つとなるのがその本たちです。」

僕は科学書を指差し言った。

「待て、それだけ聞いていると負の面もあるが

種族の繁栄にはとても良いもののように聞こえるが？」

「向こうの世界には大いなる意思を始め、精霊は存在しません。

加えて人間は魔力を持っていないでしょうね。『だから』そこまで増えることができた。

それに努力して学べばある意味、誰でも使える技術です。

そんな都合のいい物放っておくわけがないでしょう？」

その結果この百年で人間は目まぐるしい発展を遂げている

「でもその代償は大きかった。進みすぎた技術が今度は地球を食いつぶし始めたんです。」

地球の自浄作用を越えて『力』を使い続けた結果、今のままでは人間は滅ぶ。

「ここにある本はそう言った力の一端にすぎません。

でも一度翻訳され出回ってしまえば手がつけられなくなる。」

エルフはその多くが穏やかな感情を持っている反面、知識欲は人一倍ある。
加えて長命。研究を始めれば一代で到達する領域も人間とは比べ物にならないだろう。
そして

「いくらエルフが他種族を尊重し、共存をはからうとしてもその他種族は
違つかもしれない。技術の有用性、そこから生まれてくる強力な兵器。

例えば狂ったブリミル教徒がそんなものを手に入れたとしたら？」
戦争しか起こらない。

「加えて、これ」

僕は歴史書の中から日本の近代史に関する本を取り、ページをめくる。

お、あつたあつた、とそれを彼らに見せた。

「雲？何このキノコみたいな。」

「爆弾だよ。それも凄まじい威力と毒性を備えた。一発で十万人以上の人間が殺せる。」

爆心地では一瞬で蒸発、離れていても焼死。更に離れたところでもその毒性の影響を受ける」

写真は広島か長崎、どちらであろうか詳しくは見ていない。

そして、戦争でこれが使われ現在はさらに威力のあるものが存在す

ると説明する。

「こんなものが何千発も世界に散らばってるなんて、ちょっと想像し辛いわね」

ムニイラさんは今の話の内容が重くて疲れてしまったのかぐったりしていた。

「確かに、精霊の力を行使する我々エルフにはこれは必要ないかもしれないな。

しかし、これほどの力、火石が・・・」

何か考え込み始めた。

「まあ、精霊石も結構危険ですよ。僕は風石しか解りませんが実際火石とか

この爆弾に匹敵する力が内包されてたりしてるんじゃないですか？」

「その通りね。あれだけ持続して火を付けていられますもの。一度に開放すれば大参事になることはすぐ考えつくことよ」

ルクシヤナは理解していたようだ。というか火石はやっぱり凄いらしい。

・・・ファンタジー核爆弾か

「大体わかった。確かにこの技術が発達すれば人々の心は『大いなる意思』から離れ

力に溺れて行くだろうな。しかし、歴史書や文学書はなぜ・・・」

ビダーシャルさんはその脅威を理解してくれたようだが
科学書以外の数冊を手に取り眺めている。

「元の出典がわかったら翻訳する人が出てくるでしょう。
どうしても翻訳するということなら翻訳語、原本を燃やすなりして破棄
しないと」

ルクシヤナはそれを聞くと、「うっ、もったいない」と

「まあ、これらの話から分かると思いますけど、地球の文明は大部
分が

このネフテスよりも進んでいるといえます。

建物はカスパの倍近い高さの物もありますし、乗り物だって竜に乗
るよりずっと速い。

でも、エルフたちを中心とした共生、共存とは程遠い。

過剰に切り開かれた森は動物の住処を奪い、圧迫され、絶滅に追い
込まれる。

これって大いなる意思を殺すことになりませんか？」

また各国の技術競争により、追い立てられるように発展していくそ
れは新たなものを

生み出していく。最近でこそ環境への配慮というものが叫ばれてい
るが

それは人類全体が影響を感じ始めているから。

まあ、そもそも使わないという選択肢がない。

また一番懸念していることは

「人間は世界中至る所で争っています」

「蛮人てどこに行っても同じなの？ だとしたら悲しいものね」

ムニイラさんは遠くを見るような眼で言った。

「まあ、これもこつちと似たような面があるんですけど、それは割愛」

富の一極集中、これが最大の要因だろう。

まあ、先進国に生まれた僕も人のこと言えた立場じゃないが。

「僕はこの世界に来るまで、こんなに感動した事なんてなかった。確かに生きにくい、という側面はありますけど目に映る景色はそれ以上の価値がある」

視界を圧迫する高層ビル、息が詰まりそうになる都会の空気。そんなものこの世界のどこにもない。

「僕は、この世界が好きです。確かに向こうの世界には家族がいる筈ですけど。

こんな綺麗な世界を汚すような物をこちらに持ち込むことはしたくない」

やや内容が重かったためか沈黙が続いた。

「わかった。聞かない」

ルクシャナはそう言って部屋に引っ込んでいった。

「ふう、ようやく諦めた」

僕は深く溜息をつく。

「しかし驚きだな。蛮族と侮っていた者たちがここまでの文明を有するとは」

ビダーシャルさんは歴史書の写真を見ながら言う。

「それは、魔法がなかったからですよ。それにブリミル教の教義次第では

人間の魔法だってもっと違う発展の仕方を見せていたかもしれませんよ。

今だって貴族連中の考え方が少し変わるだけでかなりの発展が望めるでしょうし」

潜在している可能性は未知数。しかし『それ』は確かに存在する。

「ふむ、侮れんな」

ビダーシャルさんも何か考えることがあるようで部屋を出て行った。

「それじゃ僕はこれ片づけてきます。」

とテーブルに散らかった本を重ねて持っていくようにすると、

「待つて」

ムニイラさんは僕の手を掴み引きとめた。

「あなたの話は分かったわ。まだ信じられない部分も多いけど」

そして、一拍置いて

「あの子もただ、単純な興味からああ言ってるんじゃないの。

あの人、ああ、ルクシャナの父親のことね。

彼もまた学者だったの。でも数年前から行方知れずで……」

家に母親しかいなくて妙だとは思っていたけど人の家庭事情なので突っ込まずにいた。

「ルクシャナの知識狂もそのお父さんが原因なんですか？」

「ええ。知識狂って……。そんなに酷いかしら？」

……結構重症だと思う

「父親の背中を追う内にいつの間にかああなってたのよ。

ハキムが居なくなつてからは殊更じつよりね。

慕っていただけあつてしばらくは酷かつたわ。それにあの子と話の合うエルフは少ないし。

ナツメ、どうかあの子のことは嫌わないでいて。」

……母は強し、か

自分の大切な人が居なくなってしまうたにもかかわらず、自分の子供を気にかける。

とてもじゃないが僕にはできそうにない。

「好き嫌いって、なるうとしてなれるものじゃないでしょ。

ルクシヤナはいい子だと思いますよ。ちよつと自重した方がいいところもありますけど。

大体、僕、人のこと悪く言うのってあんまり好きじゃないんですよ。悪く言ったらそればかりが先行してその人の良い所が見えなくなるから。

アリーのことだって、話せば分かってくれると思います」

悪口は嫌い。ただし、一方的に蹂躪してくる者は例外。面倒だと思っうのは勘弁してほしい。

「そう。いい言葉ね。悪口は人の良い所を隠してしまうか。人間にこんなこと言われるなんてね。」

ムニイラさんはそう反芻した後、一言、ありがとつと言って本の片づけを始めた。

先日は実に無様な姿をさらしてしまった。

彼女のそばに蛮人が一人居ただけで冷静さを失い、その蛮人を罵っ

た。

後で首都に戻ってみると確かに彼女の話は本当である。蛮人は同族と対立し

こちらに流れてきたことがわかった。

確かにその境遇には同情してしまうが、それがその為人ひととなつを示しているわけではない。

もしかしたら、蛮族の世界でとんでもない悪事を働いて対立はその結果かもしれない。

とりあえずはルクシヤナに謝ろうと彼女の家まで来たのはいいが、

「どうして駄目なの?!」

という彼女の怒鳴るような声が聞こえ窓に駆け寄ってみる。

するとその窓を背にして蛮人が彼女と向かい合って座っていた。良く見ると彼女の母君と伯父君もいる。

彼女は蛮人に対して怒鳴っているようで、そちらの方を見ながら身を乗り出していた。

・・・蛮人め。いい気味だ。そのまま嫌われる。

そう思っていると、蛮人が何やら語り出した。

大いなる意思を殺す？それに異世界？

・・・一体何の話をしているんだ？

「七十億!？」

彼女の驚く声がまた聞こえた。何の数字だろうか。

しばらくすると話が終わり彼女とその伯父君が席をたった。

とりあえず彼女の所に行こうと扉に手をかけると少し開けたところで声が聞こえた。

「……ればつかりが先行して、その人の良い所が見えなくなるから。

アリーのことだって、話せば分かってくれと思います。」

それが耳に着いた。

……未来永劫蛮人のことなど……

わかるわけがない。そう思っていた所で、

「そう。いい言葉ね。悪口は人の良い所を隠してしまうか。人間にこんなこと言われるなんてね。」

ムニイラ様の言葉が聞こえた。

『悪口は人の良い所を隠す』

耳にへばりついて離れなくなったその言葉は先日のことを思い出させた。

……くそ、余計な事を。

蛮人の言葉に心を動かされたことが屈辱的だった。

……今日は帰ろう。こんな状態じゃまともに彼女と話せない。

そう踵を返して乗ってきた風竜のところまで歩こうとすると

「考察は終わったのか？」

彼女の伯父君が嫌な笑みを浮かべながらそこに立っていた。

「ビ、ビダーシャル様」

「とりあえず、今聞いていた事は全て忘れることだ。
これは評議会に報告することなのでな。」

・・・評議会！？一体何を話していたというんだ？

内容はほとんど分らなかった。唯、数個の単語が聞きとれただけ。

「大いなる意思を殺す、とは一体何なのです？それに異世界とは？」

「そういう脅威が潜在的に存在しているという話だ。
いいか、このことは他言無用だ。」

シャイターンどころでは済まない話かもしれない。」

最後のそれは自分の価値観を崩しかねない一言だった。

ベッドに体を投げ出しつつぶせになると纏まっていた髪はばらけて広がった。

・・・重い

さっきの話の内容も、今の自分の気持ちも。

彼がただその知識を一人占めしたいだけの了見の狭い人だと思ってしまったことも。

本当に彼の言った通りになるかどうかは別としても、少なくとも彼はそう考えたのだろう。

技術がもたらす共生の破綻

それは駄目だろう。

歴史書の中には戦争の様相を描いたものもあると言っていた。

そして彼自身は戦争は経験していないという。書物と親類から聞いたらしい。

人が増えた分その規模も凄惨さも酷いようだ。

彼が言うには科学技術とか言うのは、歴史や文化、思想を研究するのは違うらしい。

どちらも世界に影響は与えるが前者は直接的、後者はそれを見る『人』を仲介することで間接的に影響を及ぼす。

それにあそこにあつた本だけで、蛮人の魔法『錬金』では彼が言っていた『爆弾』の火薬に当たる物質が作れる可能性があるという。

何でも、その火薬自体にすさまじい毒性があるとか。

考えを改めなくてはならない。

少なくとも召喚されし書物については。

「あー、重いのよ!」

枕を叩きつけると若干埃が舞う。

・・・一応いろいろ考えてるのね。

彼は一見何を考えているかわからない。そう思って聞いてみると

「何を考えているかわからないんじゃない。何も考えてないから読みようがないだけだ。」

と言っていた。多分はぐらかされたのだろう。そして、

・・・あんなこと言われたら余計に知りたくなるじゃない。

技術の事は諦めるが、それによって紡がれている人間の歴史や文化、これならば

多分了承してくれるだろう。別に世の中に出さなくてもいい。ただ自分が知りたいだけ。

・・・よし。

せめて、文学作品だけでもと、彼の所に交渉しに戻ることにした。

近代兵器の持ち込みは禁止となっています。(後書き)

アリイーとルクシャナ父のことを絡ませるつもりでやったのについて
の間にか

SEKKYOUになった。

でも地球から攻めてくるなんて展開はありませんので。

ファンタジーに近代兵器は不要。

指輪物語にAK小銃なんかでたら本当、萎える。

よく考えたら、コルベール全否定してた。

魔王が動き出す

「手が痛え」

天井を仰ぐと水面が陽光を反射し、そこに網目状のゆらゆら動く模様を描いている。

・・・綺麗なもんだ

別に珍しいものでも何でもない、地球でも水のある所に行けばよく見かける現象である。

不思議な事にこんな見慣れたことでも、注意深く観察しようとするとき時間を忘れるほど見入ってしまう事がある。

まあ、穴があくほど見ていると別に何の収穫もない唯の不毛な作業なのだが。

外は日が高くなりはじめ、外に見える泉は青く透き通り
水底の砂利までが時折光って見える。

・・・あ、魚

天井の網目模様の中を魚が一匹横切った。

すると、次の瞬間視界が遮られ暗闇に包まれる。

「手を動かせ、手を」

高い声と共に顔面に重量を感じ、それをどけようと両手をのばす。

「初めてまだ少しも経ってないのよ？昨日の勢いはどうしたの？」
顔の上に乗っていたのは数冊の本。
それをどけると金髪の妖精の顔が逆さになって見えた。

「待ってくれ。ここ三ヶ月ずっとこればっかなんだけど。たまには違うものが読みたい。」

召喚されし書物の翻訳作業。

ルクシャナが連日連夜わめくもので、とうとう折れる事になった。
自然科学の本以外、翻訳したものは外に出さない、原書の破棄という条件のもと
数冊を共通語のガリア語に訳す事を約束させられた。

「こんなに素晴らしいものを創り出せるのにどうして人間で争うのかしら？」

妖精あくまはそんな僕の主張を無視してさっき訳し終わったページの部分が書いてある
紙をとりそんな事を言う。特にここ数日はどんどん急かすものだからペンダコが出来始め
利き腕である右手は度々インクで汚れる。

「シャイターン
悪魔」

小声でそつと言う。聞こえているようでその長い耳はピクリとわずかに動いた。

「ねえ、ここの『シンデレ』って言う言葉はどんな意味なの？固有

名詞でしょ？

これ。」

そんな罵り言葉すらスルーして質問をしてくる。

現在翻訳させられているのはライトノベル。なんでも挿絵が気に入らしたらしい。

翻訳を始めたのが一週間前にもかかわらずもうすでに二冊弱、文字数にして四十万強。

文法や使われている言葉ががさほど難しくないことから翻訳スピードは速くなる。

しかし、連日酷使されていたせいか手首から先は時々痙攣けいれんを起こし、筋がつりそうになっっていた。

「手が限界。休ませて。」

「強くて残忍で、それでいてこんなに可愛いなんて。」

二冊目の最後の部分。話のクライマックスということもあって彼女は完全に

のめり込んでしまったようだ。

学者だ何だと言ってもこういう娯楽が少ない以上、地球のそれが与える衝撃は大きく

何度も読み返していた。

「二冊目が終わったら休んでいいわよ。」

嘆願はむなしく切り捨てられる。こら！アリー笑ってないでなんか言っ

「さっさと書け。」

奴も一冊目の紙束を読んでいた。

「お疲れ様」

文字ばかり見ていると目が疲れて目を閉じ手で瞼を抑えていると目の前に

食器を置く音が聞こえた。

「ああ、ありがとう」

目を開けると、目の前にはカップ注がれたコーヒーがあった。

淹れる直前に豆を挽かないと出ない、ほっとさせる香りが良い。

それを飲みながら一息ついていると、

・・・餌付け!?

そんな事が頭の中をよぎった。しかし^{ルクシヤナ}コーヒーを淹れてくれた当人にその様子はない。翻訳し終わった紙に真剣に目を通して、

そして、

「ああ、続きが気になる。」

そう言って身もだえし始めた。僕はその様子に、さっきの復讐とばかりに

「でも、それ二巻までしかないよね」

「コーヒーの香りを楽しみながらそう言ってやった。

「続きは！？ナツメ知らないの？」

「いや、僕もそれ初めて読んだし」

「ああもう！何でエルフは召喚魔法使わないのかしら！？いや、いっつそ私が習得して

……」

何やらぶつぶつ言い始めた。

・・・ランダム召喚でどうするんだよ

サモンサーヴァントは召喚する対象を選ぶことはできない。一般的には。

「諦める。」

そう言ってコーヒーを飲み干した。頭を抱えますます身もだえするルクシャナ。

テーブルに突っ伏して唸っている姿が少し可愛かった。

そうしたやり取りを続けていると、アリーが奥の部屋から出てきた。

「ナツメ、どうやら僕は君の事誤解していたようだ。」

初対面の時からここ最近までずっと目の敵にし
何度も罵詈雑言を飛ばし、目の敵にしてきたにもかかわらず
今はどこか言い辛そうにこちらを見ている。

何だこいつ？この前とはまるで態度が、と思っていると

「だからこれも。」

そうやって持ってきたのは三冊の本だった。

一番上の表紙には武器を持ったエルフのイラスト。

地球で言う所のファンタジー小説、エルフを主人公にした冒険譚。
しかし僕が注目したのはそこではなくその量。^{ボリューム}

「ハードカバーのやつはちよつと……。」

一冊がライトノベル三冊分の厚さがあるうかというほどの分厚い奴
である。

「あ、それ次頼もうと思ってたの。」

……いきなりハードル高えよ。

幸い日本語であるのだが、原作者か翻訳者の特徴なのだろうか結構
硬い文章で

書かれているそれは僕の顔を引きつらせた。

分からない単語もいくつか目につくがなぜか日本語の辞書が召喚さ
れているので

それを言い訳にすることもできない。

……しかも三部作で完結してやがる。

「長えよ」

「大丈夫！今度は急かしたりしないから。ゆっくりでいいから。」
とてもいい笑顔で言ってきた。

「シャイターン悪魔め」

・・・少しやり過ぎたかな。

ナツメがこの家に来て一年と少し。
割と一緒にいる時間が多かったせいもあり、彼の性質も大体把握してきた。

動物が好き。中でも一番猫が。もしかしたら人間やエルフよりも。
食い意地が張っている。美味しい物を食べないと頑張れないらしい。
匂いのきついチーズを喜んで食べるあたりその味覚は怪しいが。

体を動かすのが好き。中でも一番は走ることに。なんでもアドレナリンが凄く良いらしい。
アドレナリンでなんだろう？今度聞いてみよう。

日常の何でもない事に感動するくせして思考が退廃的。
凶暴な野生動物が少なければ森の中に引きこもるつもりらしい。

シャイターン
「悪魔め」

最近は聞き飽きたこのセリフは何回目だろうか、そう言いつつも翻訳作業は続けるようだ。

「もう今日は良いわよ。好きにしていいいわ。」

この人間はどうも居候だと強く出れないらしく、いつもどおり素直に従う。

「今日といわず、しばらくペンは握りたくない」

今回は結構堪えたらしく利き手をプラプラさせて言う。

そして軽く伸びをしながら首と肩を回す。

雪のように白い髪と水晶の透き通るような赤い眼はこの世のものではない

何か恐ろしい物を彷彿とさせるのに口を開けばどこか気が抜けているのだ。

そしてたまにどこにも無いような（きつと異世界の知識なのだろう）知識を持ち出し

混乱させる。まあ、面白いからいいのだけど。

「そう言って結局翌日にはやってるわよ」

そう私が言うと彼は、ばつが悪い様子で眉間にしわをよせる。

しかし、こういうときの後は必ずと言っていいほどため息をついて

「確かにそうかもね」

認める事が多い。凶星を突かれると大体はこうなる。

「何笑ってるの？」

あきれ顔でこっちを見ていた。どうやら私は笑っていたらしい。

「ソナタハヤサシイ」

ニホン語というらしい。最初に彼が訳した本に似たようなセリフがあった。

そう言つと、アリーは首をかしげ、ナツメは面食らつたような顔する。

「学習早いな」

「すごいでしょ」

ナツメの言葉に私が得意げにならずく。すると、彼は腕を組んで少し考えると、

「うーん。じっくりこないね。優しいわけじゃないよ。」

予想を否定された。

「人間てのはさ基本、自分勝手な生き物なんだよ。僕だって周りがどうか言うより

自分のために動いてる。」

「でも、いろいろ助けたりしてんじゃない。」

コホルト
オグル
地人、巨人、

そして迫害されているにもかかわらず人間。

「それは好意を向けてほしいからだよ。」

人に優しくなれるのは自分がそうされたら嬉しいからだし。というか、それ以前に大量殺人犯なんですけど。」

「でもそれは敵だからでしょう？あなたからすれば害悪じゃない。」

「本当に優しい奴は、その悪まで救おうとするんだよ。」

尤もそんな奴今まで見たことないけど。」

何を言ってるだろうか、そんな事していたら・・・

「そんな事していたら命がいくつ有っても足りないじゃない。」

そう言うと彼は笑いながらとても意外な、それこそエルフが聞いたら全員耳を疑う

ようなことを言った。

「所がね、ブリミルの教えの理想がそうなんだよ。」

まあ、それが載ってるのはかなり昔の教典で今は『聖地奪還』ばかり強調されてるけど」

「なっ！」

アリエーが反論しそうになるが彼は続けて

「エルフが敵だって書いてなければ完璧だったのにね」

そう付け加えた。

「ふん、やはり蛮族は蛮族だな。しかもシャイターンの連中は性質たちが悪い。」

ああ、勘違いしないでくれ。野蛮でない奴もいる事は理解したつもりだ。」

召喚されし書物の影響なのか？あんまりこの世界を侵食したくないので少し不安である。

「言つとくけど翻訳の事は外で・・・」

「分かつてるぞ。」

以下ナツメの回想

先日の『科学技術がもたらす弊害』についてはビダーシャルさんがいつの間にか報告していた。

記憶喪失が嘘だとばれたことに戦々恐々したものだが、あまりお咎めはなく少し注意されただけだった。

代わりに評議会の面々の前で数時間にわたり、いろいろとしゃべり続ける羽目になった。

しゃべる前に自白剤を飲まされ、完全に抵抗力を奪われた時はもう死を覚悟、はしなかつたけどこんなことならもっとモフモフしとくんだったと後悔した。

まあ、結局題目通りの事しか聞かれなかったからいいのだが。

「して、ナツメよ。その技術、中には有用な物もあるうになぜそこまで

こちらに持ち込むのを反対するのだ？」

テュリユーク統領は終了後の質問にそう聞いてきた。

「魔法でやれ」

気分が乗っていたせいかつい出てしまった。慌てて訂正すると笑って許してくれたが。

以上。

「いや、冷静な時は良いんだけどさ、アリイーも取り乱すと結構酷いじゃない」

彼は苦笑しながら言った。どうやら自分も人のこと言えないらしい。

「でも、そんな事言ったら全ての人が偽善者になっちゃうじゃない。」「

「そうそう、大体みんな偽善者。エルフも人間も。」

歴史上そんな人が地球にいたらしいけど直接見たわけじゃないし。」「

でも、

「とりあえず『そういう理想』を持つのは大切な事、だと誰かが言っていた。」

「あなたの言葉じゃないの!？」

「ついでに言つと『理想をもって夢を追いかける』、らしい。」

「どこまでも人任せだな。」

アリイーはエルフが偽善者と言われたというのに唯呆れているだけ。

「あーもう。さっきまでせっかく深くていい話だと思つてたのに
一気に薄っぺらくなって損した気分だわ。ナツメ、やっぱり明日からまた書きなさい。」

そう言つと

「まあ、気が向いたらね。」

気乗りはせずともやるのだろう。そして彼にとってはこれが偽善らしい。

「ねえ、ナツメ。あなたの故郷の人もみんなあなたみたいな考え方をしてる人は多いの?」

「それやったら国が減ぶ」

興味以前に言葉の意味がわからなかった。

聖地

この言葉を聞くと必ず思い出されるのがエルサレムと十字軍。
地球の歴史通りなぞるとしたら、対立するイスラム教徒は
唯一神アラーを「大いなる意思」^{ムスリム} 回教徒を「エルフ」と置き換える
事になる。
加えて、こつちの世界の地理は細部に違いはあれど地球によく似て
いる。

そう置き換えると大体の人が思いつくのは、聖地^{シャイターン}悪魔の門は
地球におけるエルサレムの位置に聖地があるのでは、と思いつくのは
当然のこと。

僕は不完全と思われる地図を睨みながらそう考えていた。

「ナツメ、どうしたの？」

こういう作業をしていると決まって話しかけてくる。

「^{もとのせかい}地球の地図との比較。」

「で？」

「不明な点が多い。」

ユーラシア大陸の北部あたる部分はいまいち要領を得ない描き方をされているし、オーストラリア周辺、南北アメリカ大陸、ここまで来ると当たり前かもしれないが南極大陸も無い。

「どのくらい?」

「地球基準で、この地図が倍以上の大きさになる。」

「本当!?!すごいじゃない!」

彼女中では驚きよりも感激の方が強いようで目を輝かせている。

「こんなに広いのにまだ続きがあるなんて!素敵じゃない。」

地図が無い部分を見ながらうつとりしている。

・・・対立の弊害

ハルケギニア
人間世界とネフテスの対立。

シャイターンの門を守るといふ使命があるためにエルフはこの地から移り住む、または探検する、ということを考えない。

知識欲、好奇心といったものが強いにもかかわらず。

「ところでき、聖地ってこの辺?」

そう言って、地図を指差すと彼女の顔色が変わった。

そして、

「ナツメ、そのこと他の人の前で言ったら駄目よ。牢屋に入れられるか最悪心神喪失薬を飲まされたりするわ。」

どうやら正解らしく、彼女は少しか細い声になった。

殺さないあたりエルフと人間の違いだろうか。

まあ、精神的な死と肉体の死に大差はないが。

「ん、覚えとく。」

「もう！他人事みたいに！」

「『門』って一体どういうことなんだ？それに真の悪魔も気になる。」

「だから行ったら駄目だって！」

声を荒げて言う。

「別に行くわけじゃあない。考えてるんだよ。もしまだ何か解らない事があったら」

それがエルフにとって致命的な事だったりしたら？」

どうも引っかかる。佐々木さんちのゼロ戦の例もあるし。

「何かあるの？」

「地球の近代兵器の前身がハルケギニアにあった。」

「はあああああ!?!」

・・・うるさい。

「駄目じゃない!そういう事は早めに言ってくれないと。」

「いろいろあり過ぎてこっちも混乱してるんだよ。それにとりあえずはその兵器じゃ

エルフの脅威にはなりえない。」

ゼロ戦の航続距離じゃ直線距離で三千リーグ以上もある

タルブ・ネフテス間を飛んでくるのは不可能。それに燃料はほとんど残っていないらしい。

「他に何か来ていたりしないかね?」

同時代の最悪の兵器とも言えるアレとか。いや、今も最悪の兵器には変わらないけど。

「その兵器が活躍したのってこの前言った爆弾が使われた戦争なんよ。」

「だから調査した方がいいと?全く本当にお前は嫌な事ばかり言うのだな。」

ビダーシャルさんがいつの間にか話に入ってきた。

「聖地の場所まですでに把握済みとはな。もう何も言えん。」

「言ったでしょう。地球と似てるって。」

そうして地図を広げたテーブルの空いた席に座る。

「確かに悪魔の門の近くでは妙なものが多く発見されている。槍やら大砲のような物まで。」

「武器以外は何か無いんですか？本とか日用品の類とか。」

「さあな。見ても使い道がわからない物ばかりでな、確かに殺傷を目的としたような形状の物は多かったが。」

なるほどっということと僕が紙を取り出してペンにインクをつけ、とあるマークを描いていく。

中心に円、その周りに扇型の中心部分を取り去った物を三つ等間隔で。

「何？それ。」

ルクシヤナは不思議そうにのぞきこんでくる。

予備知識なしでわかればそれは超能力者としか言いようがないけど。

「この間話した爆弾を強くした奴に付いてるであろう印。これが見つかったらどうしようかね？」

とりあえず人間側に渡ったら嫌だなあ。ネフテスに照準合わせて発射する技術は

無いにせよその脅威度は下がるものの、

悪魔の門、もしくはその近くに在るかもしれないのだ。で使われた

りしたらネフテスも
ただでは済まんだろうし。

・・・ん？悪魔の門で使う？

「これだ。」

人間側の憎しみを買う事になるが、
少なくとも悪魔の門の脅威（あるかどうか分からないけど）は取り
除くやり方。

・・・すごく単純で簡単な事だ。

各王家の宝物庫に忍び込み、秘宝を盗むなんてことしなくていい、
実に単純明快な方法。

聖地^{シャイターン}＝悪魔の門が無くなればいいのだ。

・・・何も破壊対象は秘宝じゃなくてもいいわけだ。

四つの四が揃っても聖地が無ければその魔法？は発動しないはずだ。
やはり一つの視点に縛られるのは良くない。
大事な物を見逃すことになる。
すっきりした所でルクシャナとビダーシャルさんの方を見る。

既にこの前の爆弾についてのことと頭がいつぱいなのだろうか、二
人は真剣に
放射性物質を表すマークを見ていた。

魔王が動き出す（後書き）

最後の展開は書いてる最中に、核兵器が発動したらどうなるかな
と想着たら

思いついた。とりあえずこの路線でいこう。魔王だし。

破壊するにもまず許可を

エルフと人間。

両者についてエルフ側から少し考えてみることにする。

とりあえず分かり易い比較基準ということで仏教の用語、五欲より食欲、色欲、財欲、名誉欲、睡眠欲で考えてみる事にする。

食欲

エルフは総じて線が細く、太い者がいたとしてもそのほとんどが筋肉質であり

時々、歳老いたエルフに運動不足による太り気味の者がみられる以外肥満体型は見られない。

人間は上流階級に見られる事、平民でも良く肥えた者がいる事から必要量を越えて栄養を摂取していることが窺^{うかが}え、これは人間の方が強いと言える。

性欲または性欲。

寿命が人間の倍であることから繁殖スピードも半分、では性欲も半分、という事は無いようで個体差が大きいらしい。ただし、人間のように一人の男性が複数の女性

を囲う

という事は珍しい。別に禁止されているわけではない。

人間、もう言うまでも無く性欲は人間に軍配。

財欲

貴族、神官による平民の搾取が一般的な事から人間の方が強いことがわかる。

また装飾品に関してもエルフはシンプルなデザインが多い一方で人間側は装飾過多

。

名誉欲

極端に言えばエルフの視点から見ると人間はサルである。

争いさえなければ自分たちの庇護下に置くべき対象なのである。

そして自分たちエルフは大いなる意思の眷族として、それを代行している高貴な一

族。

この常識がエルフの目を曇らせ、人間を侮らせている。

というわけで、名誉欲はエルフの方が強い。

睡眠欲

生物学的なものになるので省略。

「ですから、見つけ次第周辺の警備を強化するか、処理方法は地中

深く埋める、
私に言える対処方法はこれぐらいです。」

核兵器がこちらの世界にきている可能性を報告している。
評議会の議員の面々が僕を囲う形で席に座り重苦しい雰囲気の中その話には耳を傾け

ていた。

「爆弾は普通に火をつけたとしても爆発はしません。
とある特殊な手順を踏まないと起動はしない筈なんです、あいに
く私はその方面

の

知識はないものでして……」

ここまで言うとテュリユーク統領は片手で僕を制して言った。

「ふむ。理解した。対策はとろう。」

そしてため息をつきながらこう言った。

「毎度毎度、小出しにするその情報はなんとかならないのかね？
会議がある度にこれでは身が持たん。」

疲れているようで肩が下がり、背中も少し丸まっている。

「申し訳ありません。頭の出来があまりよろしくない上、ずいぶん
昔の知識ですの

で。

何かきつかけがあると思いだすのですが……」

「あまり深く考えずとも好い。こちらとてお主の話は聞に値するのだ。」

他の議員の方々もうなづいていた。

「ところで、」

僕は話題を転換するために少し大きな声で切り出す。

「これはシャイターンの門と四つの四がそろった時に現れる『真の悪魔』について考えたことなのですが。」

そう司会の議員に目をやると

「よろしい。発言を許す。」

では、と始めて

「この六千年人間世界で聖戦が発動する度、この土地は危険にさらされています。」

議員の方々はその原因についてどう考えているのです?」

「そんな事は決まり切っていることだ。蛮族がシャイターンの門を聖地と崇めているからに決まっているだろう。」

議員の一人がお決まりのセリフを言う。

「その通りですね。そして悪魔きよむの力は担い手を討つてもハルケギニアの他の人間に乗り移り消える事はない。

そして『真の悪魔』復活のために必要とされる各王家の秘宝は嚴重に保管され

奪取、及び破壊は難しい。」

「もう何度も議論されてきたことだろう。どこに穴があるというのだ。」

「本当に考えつかないんですか？海上都市こんなすこいもの作る技術があるのに。」

「

僕は真下を指差しながら言った
すると、テュリユーク統領は

「貴様、何をたくらんでいる？」

そう睨みつけてきた。流石は長命なエルフたちを束ねているだけあってその迫力か

ら

圧迫感を感じる。それに気圧されそうになるのだが、

「いいえ。これは企みではなく提案です。」

言いながら統領を見るのだが、相変わらず表情は険しいままだった。

「続けよ。」

深く息を吸い吐くことで、これから言う言葉に対し覚悟を決める。

「聖地、及びシャイターンの門、そしてその周辺の土地の破壊。」

長い沈黙が流れた。しわが寄った顔の多くが僕を睨みつけ、また目を瞑っている。

すると議員の一人が言った。

「やはり、蛮人は蛮人であったか。期待外れだ。」

それを皮切りに次々と、

「そもそも、シャイターンの門とはいえ元は大いなる意思に与えられた我々の土地

だぞ。

それを破壊などとそれこそ悪魔シャイターンの思想ではないか。」

「破壊などすれば蛮族の憎しみはエルフに向く。それこそ争いの火種。」

「今からでも遅くはない。やはりこ奴の心を奪って……」

「そもそもこれまでの話も疑わしい。」

やはりエルフの思考からでは『破壊』という行為には結び付きにくいらしい。

この辺までの反発は予想していたことだ。しかし、実際見ると気分が悪い。

「待て。まだ続きがあるようだ。」

統領はざわついた議員を制した。

「ブリミル教の権威の源は、ブリミルが残した魔法、それから聖地です。」

その片方を消してしまえばその権威は失墜し力も弱まることでしょう。

尤も聖地を破壊したとなればエルフに向けられる憎悪はすごいことになると思います

すが。

「既に対立しているのだから、今までと変わりはないと?」

統領は信じられないような眼でこっちを見る。

「変わる所か悪化するでしょうね。でもこの場合第三者がやったとしたら?」

自然現象のせいにする。何度も竜巻を起こして土地を削りその地形を変える。

「そして、もしそれを実行した犯人が分からなければ?」

現在ブリミル教の教義は『始祖を崇める』という事と『聖地奪還』
二つが共通しているだけです。片方が消えればどついう事になるか
分かるでしょう

?

行き場の失った信仰による内部分裂。

『聖地奪還』が『魔王を討て』に代わりそうだがそれは今更の事。

「災害により聖地が失われたとすれば、それは世界がブリミルを否定し、大いなる

意思

を肯定されたことと同義ではないのですか？」

大いなる意思>>>越えられない壁>>>ブリミル
という構図を作るのにも丁度いい。

「しかし、そんな災害に見せかけた魔法など……」

そういうと統領は気付いたのか僕の方を見る。

「まさか……」

「まあ、そう言うことです。」

風の精霊の力を借りることで聖地周辺の広範囲を削り取る。

「あくまでこれは提案です。決断も急ぐものではありません。ただ少し時間がかかるといふ事だけは心に留めておいて下さい。」

ブリミル教の力を落とすことは僕の安全に直結している。

今回の事がうまく行けば人間がサハラの方へ出ていく理由は商売以外無くなる。

エルフ側も人間に対しそんなに警戒心をむき出しにすることも無い。しかし、

・・・さて、ああは言ってみたものの・・・

どうやら聖地周辺はロマリアの密偵が数年に一度放たれているようでエルフたちとの交戦も一度や二度では済まない。

それに『場違いな工芸品』もいくつか持っていていかれているようでそれを扱える者がでないかも不安の一つとなっていた。

密偵に姿を見られてはまた僕に宗教庁の牙が向くのでタイミングを見計らって一気に作業する必要がある。

それには、

・・・現地を見ないことにはやりようがないしなあ。

監視が付いているので勝手に飛んでいくことができない。

そもそもエルフと敵対したくない以上は上の許可無しに立ち入る気にもならないの

だが

「ナツメ」

高い声と共に近づいてくる足音が二つ。

「終わったの？」

金の長髪からのぞかせる青く綺麗な二つの目が下から僕の顔を覗き込んだ。

「うん。とりあえずは検討してくれるみたい」

「随分寛大な処置だな。普通なら心神喪失薬を飲まされた後に牢に入れておくものを。」

を。

ビダーシャルさんは言った。

「どうなんでしょうね。先祖代々守ってきた土地ですからいくら悪魔を生み出すか

ら

と言ってもそう簡単に割り切れるものではないんでしょうか？」

「少なくとも私は賛成できそうなものだが。二度と『大災厄』が起こらないのなら

我々一族も危険にさらされなくて済む。」

ビダーシャルさんはそう言うつと廊下を歩いて行った。

・・・まあ、これにも落とし穴があるんだけどな。

シャイターの『門』というのだからきつとそれは何か扉が付いているのだろう。

その門が魔法で開かれる門ゲートならば風で完膚なきまでに破壊しても問題はな

い。
しかしそれが物理的な、要するに地面の下に『真の悪魔』が眠って
いたりすれば
僕の提案は完全な没案となる。

「ナツメ、しわが寄ってるわ。」

ルクシャナは僕の額にその細い人差し指を当て、指の腹を押し付ける。

・・・なんかむずがゆい

シリアスが崩されたこともあるが、顔が近かった。

可愛いのだ。一応は。翻訳を強要するような悪魔ではあるが。
窓から入ってきた光は無造作に切られた、といってもしつとりとまとまりのある金

色の

髪を淡く輝かせ、その間からはスツと尖った耳が顔を出している。
白い、しかし病的な物は感じさせないような健康的な肌で頬はほんのり赤く染まつ

ている。

・・・どうかしてる

可愛いと思った。それも人型の女の子に。

見た目なんて人を構成する一つの要素にすぎないとずっと冷めた目

で見ているのに

。

・・・だいたい好みの子じゃないだろ

もっとう素朴な感じの女の子が好みなのだ。

そこから比較すると彼女は妖精と言っていいほど人間離れした容姿だった。

実際、エルフなんだけれども。

僕はため息をつきながら、ルクシヤナから離れた。

「ホント、何でこんなにヤキモキしなきゃいけないんだろうね。

そろそろ諦めたくなるよ。」

「何を諦めるの？」

「我慢すること」

人間、エルフ双方に被害が出ないようにするには聖戦が起こらないことが一番だ。

一方、一番簡単な方法は宗教庁の完全な破壊。

でも後者をとってしまうのはあまりに寂しい。

それにその手段を取ることができないからエルフたちと一緒にいる事が出来るのだ

。

・・・いい考えだと思っただけどなあ

聖地の破壊。これによってブリミル教徒の目がハルケギニア内部に向けられれば

もうちよつとましな世界ができる気がする。

ロマリアの下町の疲れた顔が元気になる気がする。

アルビオンは、・・・しばらく大丈夫か。

トリステインは・・・無理そうだなあ。偽物討伐の時もちよつと無理働

た

ぐらいで殺傷力のある魔法ぶつけてきたし。

ガリアは内部ごたごたで危なそう。ゲルマニアは知らん。

「ほら、また寄ってる」

ルクシャナが再度僕の眉間に指を押し付けてきた。だから近いって。

悪魔の門を破壊する。

大いなる意思により賜った大地を破壊することで人間がこの地を指す理由を

取り除く、とナツメは言った。

シャイターンは悪魔の門が無くなれば勢力が弱くなるらしい。

人間の言う聖地が破壊されることで各国で責任の押し付け合いが起
こるかもしれない

いとも。

やはり、まだまだ人間の事は分からない。

会議室から出てきた彼の顔を見ると酷く疲れた印象を受ける。

眉間にはしわが寄り、苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

私が話しかけると

「うん。とりあえずは検討してくれるみたい」

そう笑いかけてくれる。

叔父様は心神喪失薬とか牢だとか嫌な事言うが、そんな事にも苦笑するだけで

「どうなんでしょうね。先祖代々守ってきた土地ですからいくら悪魔を生み出すか

ら

と言ってもそう簡単に割り切れるものではないんでしょうか?」

エルフ理解しようとする姿勢が良く見てとれる。

双方から歩み寄らなければ分かり合う事は出来ない、と当たり前のことだが

言葉にして聞いた事は彼からが初めてだった。

実際街でも彼に対する理解は深まってきているように思う。

「ナツメ、しわが寄ってるわ。」

私はずっとその顔が辛そうな表情をしているのに耐えられなかった。綺麗な赤い瞳はその眉間に寄ったしわで怖ろしい物を感じさせる。

その眉間に人差し指を当てるとナツメは目を見開き黙ったまま私の方を見た。
いつもより近いせいかエルフの切れ長の瞳とは違って丸い形の紅い瞳が良く見えてと

れる。

・・・熱い

顔が熱くなり鼓動の間隔が小さくなっていくのを感じた。

・・・何、これ。

そう思っていると目を細めながら何かに疲れたようなため息をつき

「ホント、何でこんなにヤキモキしなきゃいけないんだろうね。

そろそろ諦めたくなるよ。」

「何を諦めるの?」

「我慢すること」

・・・我慢?性欲?

しかし、悶々とした様子は無く別のことを考えているようだった。

・・・この点、アリイーは扱いやすいのに。

この手の話にすぐに赤くなる幼なじみのことを思い出す。

しかし、こいつは反応が薄い。この年頃の男というのはこいつに

よく反応するはずなのに。

そしてまたさっきの酷い顔に戻る。

・・・もう一回

「ほら、また寄ってる」

今度はもう少し近くで

・・・

やっぱり顔が熱くなる。耳の方まで。

「やめい」

ナツメはそう私から離れる。

すると今度は何だか胸のあたりに締め付けられるような妙なものを
感じた。

原因不明のそれは不快なものではなく、逆にもっと感じたいと思わ
せるもので

私は竜の発着場に着くまで彼をいじり回した。

破壊するにもまず許可を（後書き）

難しいだろうがしばらくは読んでて胸キュンするヒロインを目指したい。

萌ってなんでしょうね。

恋模様で心を動かされるとしたら「ゼロの使い魔」よりも国語の教科書に載ってる

「赤い実はじけた」の方がぐっと来る気がします。

魔王の冒険(前書き)

そろそろ大詰め(話の節目的な)に入ろうと思う。

魔王の冒険

言葉が出ない光景とはこういうことを言うのか。

陸地が浮いている。それも一つや二つではなく何十何百と。

一つ一つはアルビオン大陸と比べるられないくらい小さい。

大岩と呼べるサイズからガリアの王都はすっぽり収まるくらいのものであり、

それらが麓の地面すれすれのものから雲を突き抜けるほどの高さまで。

それらの間を鳥や竜が飛び交い、大型の獣のものとと思われる咆哮が聞こえる。

言葉を発しようとも、「すごい」「ありえん」「ナニコレ」「頑張つてこの程度。

すでに疲労で体は限界に来て頭には軽いダルさを感じ、帰るにはここから十数時間分の飛行距離があるというのに引き返すなんてことは完全に頭から消えていた。

不完全な世界地図。地球とは似て異なる。

ネフテス周辺部分がパレスチナだと見立てても黒海やカスピ海にあたる内海、湖はない。

代わりにそこには広大な陸地、そこを流れる河沿いには人間の集落がいくつか分布している。

そしてそのさらに北険しい山脈が続いているらしい。

らしい、というのもそこからの表記が曖昧でその山脈もどこまで続いているか分かっていない。
分かっていない。そのままにしてあるのは別に聖地が関係しているわけではなく、むしろ何度か探査にエルフが送り込まれたことがあるという。それでもそこから先が分からないというには理由があった。

精霊がない。

その山脈を囲うように覆う森から山にかけての中間あたりから全く、そう言うわけでそこから先は精霊魔法は言うまでも無く、自身の魔力で運用する魔法（メイジで言う所のコモンマジック）以外は使う事ができない。と言ってこれは僕の勝手な考察で単に風の精霊がないからこんなもんじゃないか？という程度である。

人の手が入らないことに加え、魔法を使える種族が立ち入れないものだから
完全な弱肉強食の領域となっている。

・・・生きてるのかね？

調査と監視を兼ねた二人のエルフは森の入口付近で大型のトロールのような亜人が出現、戦闘によりはぐれてしまった。

・・・言い訳、どうしよう

現在、ここに調査に来ることができるとも地図の空白がどうこう、エルフの知的財産が〜というような事を情熱やら好奇心を交えて評議会に

熱く語ってようやく勝ち取った結果である。

向こうもかなり渋っていたのだが、とりあえず自分たちが住んでいる大陸のことである。

一応把握はしておきたいらしく、少数の監視付きで許可という事になった。

そうしてネフテスから北へ四千キロメートル、途中エルフの集落で竜を乗り継いでやって来たのだが、

・・・不安

攻撃力とはかく風による知覚能力の拡張ができない。

周囲の情報は完全に自分の五感に、とりわけ視覚と聴覚に頼らなければならず

いつもと違う感覚にわずかながら恐怖を感じる。

それでも好奇心が駆りたて、引き返すという選択を取れない。

北方で本来ならこの時期、少し肌寒くてもおかしくないのに薄らと汗をかき、

緊張のためか呼吸までが荒い。

奥へと進むにつれ木と木の間隔は次第に狭くなり、見通しは悪くなる。

まるで森が自分に対して悪意でも持っているかのように周囲の環境は悪くなり

誘い込んでいるように感じるのだが、どういわけか恐怖はあっても不快感はなかった。

そのことに気付くと、どういう訳かとてもおかしくなり、薄笑いを浮かべる。

・・・人からの（悪意）は敏感なのに・・・

向けてくる対象が違うだけでここまで感じ方が違う。

悪意の種類に違いはあれど向けられた後の結果は大差ないだろう。

自分とさほど差がない存在である人から向けられる悪意。

自分よりもはるかに大きな存在である自然から向けられる悪意。

前者はやりようによっては退ける事が出来るが

後者は力を持たなければ抗うだけ無駄である。

嫌な感じがするのはこの差？などと考えていると、不意に木の幹に着いた手から

おかしな反応が返ってくる。

反射的に手を放して距離をとると更に妙な感じがした。

・・・あつたかい。それにこいつ・・・

僅かではあるが動いていた。まるで『動物』のように。

まるで他の木とは違い、木の幹には『柔らかさ』あり木の葉は緑色ではなく赤銅色。

・・・明らかにアレな奴っすね

ソレと同じタイプの木がどんどん増えていく、いや、元々擬態していたのだろう。

獲物がその領域に入ってきたら、本来の姿で襲いかかりその肉を食らう。

・・・ずいぶんと健康的な食べ方で。

周囲には動物の骨らしき物は無い。きっと全部腹に収めて消化してしまつのだらう。

そんな事を考えながら、既に体は『動く木』から逃げ出していた。

通るたびに次々と変質、及び擬態を解いていく木。

その根が足と手の役割をしているようで、タコやイカ程ではないにしろ柔軟に

そして気持ち悪くうごめいて移動している。

口はどうやら木の幹が縦に割れると現れるようで、唾液？と奥まで生えそろうた牙が

グロテスクさを強調していた。

小さい物は素早く動き、大きなものはその根っこを振り回しその重量で襲いかかる。

「
「！」

言葉にならない。

実際声は出していないのだが心の叫びが表に出たように脈は早くなり、汗が噴き出る。

かなりの速度で走り息が苦しいはずなのに、アレの恐怖感がそれを感ぜさせない。

手に持った杖で小さい木を殴り飛ばしながら進む。

足元はうごめき、時々行く手を阻むように大枝が落ちてきた。どうやら奴ら本気で食べに来たらしい。

それを感じると、逆に頭は冷えてきた。

・・・クールに、冷静にだ

注意して足を付かなければ根っこに足を取られ、聞き耳を立てなければ

頭上からの落ちてくる枝の音は聞こえない。・

「気持ち悪!」

そうすると少し余裕が出てきたのか、奴らに対する感想が漏れた。

思えばよくもこんな気味の悪い森に自ら入り、しかも引き返す考えが浮かばなかったものだ。

有っても無いような道は段々と上りになりこちらの体力もきつくなってくる。

足は言うまでも無く、腕をしっかりと振り前に進んでいく動作が辛い。すると早く森が途切れてほしい、という声が届いたかのように前方に光が見えた。

脈を打っているかのようなその動く木達は急にその場で止まり引き返して言った。

・・・日の光が苦手？

確かに幹は太く根っこは長いものだったが背丈はあまりない。まあ、無いといっても

十マイル弱と大柄な者が見られたのだが。

暗い森が途切れるとそこからは少し下りになり、しばらく歩くと急な山腹の麓までたどり着いた。

山脈とそれにかかる雲はまるで巨大な壁の様に空を覆い尽くし、まるでここから出さんと言っているような迫力がある。そして後方には雑食と思われる動く木。ある種監獄のようなものである。

・・・ん？

マイナスな感想を抱いていると今度は嬉しい発見があった。周囲にわずかながら青い光の粒が舞っている。

おお、という感嘆の言葉と共にそれらが視界に入る。

風の精霊だった。どうやらいるかいないかの境界はこの森のようだ。数は少ないものの、知覚能力の補助には十分すぎるほどであり敵となる野生動物の心配もこれで解消されそうである。

「~~~~~疲れた」

近くの岩に座り込むとそんな声が漏れた。

時刻はまだ正午過ぎかと思われるのだが、もうその日は動く気になれず

ここで野営することにした。

パチパチと木が焼けてはじける音が聞こえる。
それと同時に火の粉が宙を舞いある程度の高さまで行くとその光も消えた。

たき火の火を眺めているといろいろな事を思い出す。

嫌な事から楽しいことまで淡々と、それぞれ感傷に浸るのだがどれについても

あまり感情は上下しない。先日の、と言っても既に数か月前のことだが

聖地破壊についての事が思い起こされた。

数十年前から既に『門』の活動が活発化している事。

それが指し示す物が虚無あくまの復活である事。

そして、実は評議会の面々は人間にとっての聖地の存在を肯定しているという事。

「共存か」

言葉では見下していてもそこに憎しみがあるわけではなかった。

場合によっては人間側と交渉し聖地に近づかないように、との考えらしい。

「良く分らんね」

空を仰ぐと雲の間から星が見える。 天気が崩れなければいいが。

「聞き入れないと思うけどなあ」

始祖の権威は魔法の権威に繋がり、聖地は始祖の権威を強くしてい

る。

ロマリアの上層部が入れ替えになった所で、教義が変わるはずも無く、

『始祖を敬う』『聖地奪還』はそのまま、むしろ後者は魔王の出現以来

強まっている印象さえ受ける。

確かに二度にわたる討伐は失敗し、アルビオンでは好き勝手され教会の影響力は

落ちている。その落ちた権威を再び盛り返すには手っ取り早いのが『聖地奪還』。

聖地にたどり着くには、どこを通ろうとも必ずエルフの集落にぶつか^{オアシス}る。

そして負ければ略奪。人間にとってはエルフなど恐怖、驚異の対象でしかない。

虐殺、辱め、そして燃えるオアシス。

そしてそれは聖地を占領した後も続く。

・・・冗談じゃない

いくらエルフが強かろうとも、防衛線に適した魔法を使おうとも物量に限界がある。

エルフの精神力が尽きれば形成はすぐに逆転する。体術に優れているとしてもそれが

役に立つのは数が拮抗している時。

そうしてエルフが負けてしまった後の凄惨な光景を思い浮かべる。

・・・嫌だな

多くは蛮人蛮人と言うが別に実害があるわけではない。

むしろそれさえ除けば居心地はとても良い。

戦争となれば、エルフの戦士は真っ先に戦う事になるだろう。

あの硬ッ苦しい言葉遣いのエルフの青年や僕に対しては刺々しい態度をとりながら

地球の本を楽しそうに読むエルフの少年。

それにエルフは総じて優秀な戦士であると言われている。

実際そうであるし、一般市民が戦う事もあるだろう。

でも、負けてしまったら？

片方からすれば宗教戦争だ。人間にとつての悪魔は皆殺し、

いや女性はあの容姿だ、殺す前に犯されるかもしれない。

人間側の兵士は神の名のもとに精神を狂わせ異教徒を殺すことに抵抗どころか

素晴らしいことだと積極的に言うだろう。

街を楽しそうに歩くエルフの母子、道路の補修に土の精霊と契約しているエルフの青年

それらが火の海に包まれそこには人間の兵士とエルフの死体が山積みとなる。

男達は苦悶の表情を浮かべ、女達はうつろな目をし、どちらもそのまま息絶えている。

まあ、これは最悪の事態でありそこまで深く考える必要はなかったのだが

暗い中、一人焚き火の前に座り込んでいるせいか、酷く後ろ向きな事しか浮かばなかった。

吐き気を催すほどの強烈かつ酷いイメージ。

これが、彼らの身に起きるとしたら？

口うるさいが娘思いの母親、監視とはいえ面倒見の良い青年、
そしていつも好奇心いっぱい笑顔で絶やすことのないあの少女。
彼らがの身にこんな事が起きるのでは、という考えが頭によぎった
所で

僕はその場につずくまった。

「それは駄目だろう」

聖戦が発動されれば人間世界でも犠牲になるのは税金を納める平民。
そして聖地が回復した所でその恩恵が受けられるのも一部の特権階
級のみ。

信仰の拠り所がどうか言う者もいるがそんなもの

今日を生きるのに精一杯の一般信徒にどれほど関係があるというの
だ。

「ホント、それじゃ駄目だ」

急につすら笑いを浮かべる。

否決されたらやっちまおうかな、と破滅的な方向へ思考が向く。

何だか自分の今後なんてどうでも良くなってきてしまった。

一応陸は続き、人は住んでいるのだ。

そして風の精霊は味方に付いていてくれる。

・・・あゝ、もういいか

別の場所に流れるのもありなのでは？精霊がない場所があるくら
いだ

凶暴な動物が少ない地域ぐらい探せば・・・

咄嗟に身を起こし横へ飛ぶ。

するとさっきまでいた場所に黒く大きな物体が刺さっていた。たき火の残骸が飛び散り、頬に当たり小さく火傷を作る。木の根だった。

あゝなるほど、とうなずき荷物の安否を確認する。

考えていなかった。昼間の『動く木』達である。

日の光に弱いとなれば夜中に攻めれば良い。

こんな簡単な事に考えが至らなかったことに顔をひっぱたく。

「あーもう馬鹿！」

杖とスタ袋を拾い上げ、山頂へ向かって走り出した。

そして冒頭。

夜明けまで逃げきり山頂に着いたと同時に、見た光景がそれであった。

見渡す限り、その大質量が雲の中に浮かんでいる様は圧巻。それに加えて

「なんて数・・・」

精霊の量が凄まじい。

見えているのは風だけだがもしかしたら他の属性の者もいるのかもしれない。

そして浮いている土や岩の塊の下部には風の力が集まっている箇所が見られる。

・・・風石

一番近くの浮いている岩を見る限りはそう断定できる。

そして東からは朝日が昇り、その橙のような赤が現実味のなさを更に強調していた。

それはファンタジー、それもこの世界に来て一番そう感じる光景だった。

山頂から少し降りたところで少し仮眠をとるとそのまま移動を開始することにした。

数十時間ぶりの飛行は、その風景のせいもあり気持ちがいい。

眼下の浮いている島々を眺めるといろいろと特徴が見て取れる。

あまり大きな植物が育っていない、大体の表面が草地になっており木の丈はせいぜい

数メートル。

生物は鳥、竜は見られるのだが地面で生活する動物は見られない。

それにその飛んでいる者達。鳥はともかく、大きな青い竜が大人し

く飛んでいるのだ。

こっちに気付いているであろうに見向きもしない。

試しに並行して飛んでみせるとその大きな眼で一瞥した後、
じゃれ合うように回転しながら旋回してきた。

・・・歓迎？

少なくとも敵意は無い。しばらくするとその竜は飛び去ってしまった。

そうして数時間飛び続けると目を疑うような光景が飛び込んできた。

「おかしいだろ」

その一帯は霧が晴れ、森があり、その中心から一筋の、といってもかなりの太さの光柱が地面から伸びていた。

光柱はある程度の高さから拡散して木の枝が広がるように
周囲に光をのばしている。

・・・もう何が何だか

なんでもあり過ぎて混乱してきた。

光柱のそばに着陸しようとして付近に生えている一本の木に目をつける。
枝の一本に足をかけ、下を見るとまた、

「底が見えん」

下はほとんど暗闇で所々光が差しではいるのだがそれが地表に届いているかも分からない。

・・・何ちゆう高さ。

一本一本が神木と言っていいレベルの巨大な木。

ここだけ生態系おかしいんじゃないの？と思いつながら光柱の方を眺める。

木の枝の間から覗かせるそれはなぜか

この一帯の異様さを全部説明してくれそうな気がした。

・・・魔法がある世界なんだしいいか。

仕方ないので巨木の間を低速で飛び移りながら目的地を目指した。

ナツメが雑食植物の森を抜けた頃、つまり昼時。

ネフテスにあるエルフの学校では講義の合間の昼食休憩時。

校舎の外にあるベンチでエルフの少女が二人昼食をとっていた。

ケバブのような野菜や肉をたっぷり挟んだパンにコーヒー、それらをベンチのわきに置いて二人は座っていた。

ベンチに座っている二人は実に対照的な雰囲気放っていた。

片方の短髪少女は美味しそうにパンを頬張るのに対し、

もう一方、長い金髪の少女は眉間に皺を寄せがつつと

味なんかお構いなしのように口に詰め込んでいる。

短髪の少女、ラナは相方の少女に軽い口調で言った。

「どうかしたの？今朝からずっとその調子だけど」

眉間に皺が寄った少女、ルクシャナはそのままの顔でぼつりと言った。

「置いてけぼり」

その一言ですぐに悟る。なるほど送迎係クンがないからかと。

「分かってて言ってるでしょ」

それに対し、ルクシャナはラナの方を少し睨みながら言う。

送迎の者がいないので現在ラナの部屋に泊まっているのだから。

それにわりと付き合いも長いことから、ラナはこの研究第一少女の事を

ある程度理解しているつもりであった。

「変わったね」

「何が？」

「あなたのことよ。」

ラナは腕を組みうんうん唸っている。

「どじがどじいう風に？」

「いや、変わったんじゃないわね。追加されたという方が正しいかも」

ルクシャナの質問にラナは要領を得ない返答をする。

「それじゃ分からないわ。ちゃんと、」

説明して、と言いかけるとラナはニヤニヤとした表情で言った。

「ルクシャナの興味の中に恋という項目が追加されました。いや、喜ばしいことです。」

このまま行けば研究が恋人になっていたでしょうに「

その返答にルクシャナは眉をひそめる。

「恋。特定の異性に対して抱く大切に思う気持ち、それに準ずる行動」

分からないわ、と。それに対してラナは首を振りながら言った。

「違う違う。ルクシャナ、それは違うわ」

「ラナ、今のあなたの態度、とてもイライラするわ」

ルクシャナは大げさな身振りに素直な感想を述べた。

「そう言うのは理屈じゃナイヨ！心で感じるんだヨ！」

うっとおしい。そう思ったのだが言われてみて考え込み始めた。

理屈では説明できない感情、それに加えて勝手に一人（監視は付いているが）
探検あそびに行った。それも自分を置いて。

「ずるい」

一人だけ楽しい思いをするなんて。
きつと帰ってくると満足そうな顔をして語るんだろう。
何が美味しかった、何が凄かった、何に追い回された、と。
話は聞きたいと思うが、蹴りでも入れてやりたい気分になる。

「あー、少し別の方向にいつちやってるみたいね」

戻ってこーい、と肩をゆする。するとそれに気付いたルクシャナは
「あ、ごめん。それで理屈じゃないって？」

そう言つと、再びラナはふっふーんと得意気になりながら言った。

「その人を見る度にドキドキしたり、胸が締め付けられたり、
まともに顔が見れなかったり、そのことがやるせなかったりとね」

え〜と後は、と続けようとするが、既にルクシャナの耳には入って
いなかった。

ドキドキは、する。観察してたらいつの間にかそうになっていた。
胸が締め付けられる感覚、該当。
特にたまに言う何かを暗示する言葉と辛そうな顔、真剣な顔、嬉し
そうに笑う顔。

まともに見れない、これは違うか。むしろもっと見たい。

そう思つて彼の姿を思い出す。

「あ、後はもつと一緒に居たいとか」

ラナはそう追加した。

一緒に居たい。一緒にいて楽しいし、話は結構合うし、何よりわがまま言つてもあまり怒らないし、たまにおかしな事を言うが。

「で、相手は誰なのかね？ん〜？」

いやらしい笑みを浮かべながらラナは言った。

「言える訳ないじゃない」

それに対するルクシャナの返答はあまりいい物ではないようである。消え入りそうな声で言った。

言える訳がない。相手が人間だなんて。

いくら彼がエルフの中に溶け込んできているとはいえ、彼は人間。

その先入観は簡単に拭える物ではない。

それに、それを言つてしまえば私の風評を気にして、いや、それもあるだろうが

自分の風当たりが強くなるのを避けるために家を出るだろう。

・・・嫌

その事に考えが及ぶと心の中では気恥ずかしさより、恐怖が遙かに大きくなっていく。

喉はカラカラに乾き、目の奥がチリチリとしてきて熱い物が奥から

こみあげてくる。

「て、うお、ルクシャナ、どうしちゃったの？」

ラナは急に驚きルクシャナの顔を覗き込み目元を布でぬぐった。

「え？」

自身が泣いていることに気付いていなかったのか彼女は呆けたような返事をする。

そんな様子を通行人がしげしげと眺めている。

「お、よしよし。今日は部屋に戻ったら私に思う存分話すがいい」

ラナはルクシャナの頭を抱きよせ背中を叩きながら言った。

通行人はどうした、何かあったのか、と眺めている。

そこまでされてようやく自分が置かれている立場に気付いたルクシャナは

顔どころか耳まで真っ赤にして小さくなった。

ラナが下宿している寮の一室。部屋のドアを開ける白い石壁と正面に大きめの窓。

調度品はシンプルな机と本棚、それとベッドがあるだけの簡素な部屋だった。

「ええ？あのまお」

ルクシャナはそう叫びそうになったラナの口を押さえて

「黙れ」

そう冷えた声で言った。声は冷えていたがもう既に頬は赤く染まり若干息も荒い。

そして椅子に座り向かいのベッドに腰かけているラナの方をばつが悪そうに見ている。

「お願いだから黙ってて」

二回目のそれは辛そうな声だった。

「確かに難しいかもね。寿命は違うし、偏見はあるし」

ラナはあごに手を当てて考えるそぶりを見せる。そして

「所でさ、その、彼の方はどうなのよ？やっぱり話はそこからでしょ」

「分からないわ。でも言っても多分曖昧にしか返してこないだろうし。」

「というか猫好きだし」

俯きながらルクシヤナは答えた。

「最後のが意味不明なんだけど、まあ、その場合は応えてくれるまで待つか、
そのまま押し倒して反応を見るかね」

とりあえず後者は無い。

「応えてくれるまで待つって、その間にどこかに行ってしまったら？」

後半の部分をスルーして応える。

「あなたがそこまで悩むなんて相当ね。とりあえず後者はお勧め。一発で分かるし」

うん、むしろそれがいいと一人で納得している。

その態度にため息が出てくる。

最後のは頂けないが、自分を元気づけようという気持ちはよく伝わって来た。

「ラナ、ありがとう。とりあえず話したらすっきりしたわ」

「あ、ああうんうん。それはよかったよ。いやあ、泣きだした時はどうしようかと」

ラナはそう笑いながら言った。そして

「それはそうとして、一体彼のどこが良かったの〜？その所詳しく！」

やはりこの手の話の定番なのか、拒否は許さないと言わんばかりに臨時のルームメイトに詰め寄った。

その質問にルクシヤナは顔を赤くし、

「えと、最初は・・・」

とまじまじと恥じらいながらも語り出した。

魔王の冒険（後書き）

なんだこれ。こんなことを妄想している作者は変態です。
このあと超御都合展開。

1)都合主義存在(前書き)

前半部分読み返した。

訳がわからなかった。

しかし前半部分の手直しよりも勢いのあるうちに早く区切りの付くところまで書かなければ。
そろそろ妄想も尽きてきています。

一 都合主義存在

光柱の根元は泉だった。

水辺から中心部にかけて濃淡を付けるようにその青い光は強くなってゆっくりと上空に昇って行く。

その水辺を囲んで二、三百メートルはあろうかという巨木、その根本には

濃い緑の苔こけが生えている。

人の手が入っていないどころか動物の足跡さえ見当たらず、生き物がないと言えは

羽虫がちらほらと視界の隅を飛んでいる程度。

虫の活動音以外は、風と水がゆっくりと流れる音以外は何も聞こえない。

喉に渴きを感じ、泉の中に両手をいれ水をすくい口に含んでみる。

透明で澄みきった水はとても冷たく、のどを潤すと同時に体の熱も冷ましていく。

美味しい、と呟きながらも一度その水をすくおうとすると妙な現象が起こった。

息を吸い込むとその青い『光』の一部が口に吸い込まれた。

それと同時に体内の精気が少しずつ増えていくのが感覚的に解る。

ん？とつい声が漏れた。

そしてその現象を確かめるように二度、三度と光を吸い込むことを

繰り返した。
結果は同じ。

「こいつは一体……」

と呟くと、頭の中に不思議な声が響いた。

《そいつはマナ、わしらの食い物さ》

その声には声色という物が無かった。全く意志が感じられない。

《こつちを向いておくれ。動けんのでな。顔を見せてみい。》

振り向いたが誰もいない。

続いて、風で知覚能力を拡張してみるが何も引つかからなかった。

「どうなってる」

《目の前、目の前、お主の目の前良く見てみい》

目の前？ と前方を見ると木以外は無い。

しかしよく目を凝らしてみると

「何だ、木に顔があるだけか」

巨木の幹には顔があった。一本に一つ。

その不気味な顔が動くたびに背筋に嫌な汗が流れる。

そこから生じる恐怖をごまかすように僕はそう言った。

《いや、良かった。攻撃されたらわしらあんたのこと嫌いになっ

とつた。》

木の口の一つが動くと同時に頭の中に声が響いた。

顔が映っている箇所は木によってまちまちで高い物もあれば低い物もいる。

木の皮が動くたびに緑色の苔がぼろぼろと落ちていくのが見て取れた。

《ヒトがここに来るなぞいつ以来か。もう久しく会っておらんかったからの。

そうそう、お前さんのような形をしておった》

木の顔は嬉しそうに笑う。そのたびに木くずがぼろぼろと落ちていく。

それは他の木にも連鎖的に伝わり、まるで雨のように木くずを降らしてきた。

「怖えよ」

大勢の顔に取り囲まれ、それらが笑うと同時にゴミが降ってくるのと変わりない。

降ってくる大枝を避けながら言った。

木の顔は笑い終わると何事もなかったかのように言った。

《あなたは何をしにこの森に来なすった？

周囲は空飛ぶ陸地と険しい岩肌に囲まれておるこの森に。》

「何って暇つぶしです」

エルフのための調査だ何だと言っても本音の所はこうなる。

《ほっほ。竜ですらわしらを恐れて近づかん森に暇つぶしだと？
面白いヒトじゃ。》

再び笑いだした。遙か上から太い木の枝が轟音を立てて落ちてくる。

・・・不便な種族

笑うたびに髪の毛が落ちてくるようなものである。

「それより、この話の仕方、どうにかならないんですか？頭に響くから気持ち悪くって」

《ふーむふむ。それはできんのう。わしらはそれ以外に意思を伝える術を持たぬ。

お前さんの場合はわしらの意思があんたの言語中枢で変換されて届いておる。

不快感はその過程で起こるものじゃろう》

急に難しい話になった。というかファンタジーに似つかわしくない言葉が出てきたが。

「要はあなたの『意思』が僕の中で『言葉』になって伝わってくる、ですか？」

《そう、それ。全くヒトは不便でいかん。

こんなことせんと互いの気持ちも分からんのだから》

言葉遣いも先入観がそうさせているのだろうか。

分かりにくいので聞き返すと嘆くような声が返ってきた。

《さて、あんたは暇つぶしと言ったの。
わしらも暇じゃ、ここは一つ話をしようじゃないか。外のことも気
になるでの》

木の顔は表情を動かさず言った。

《全く、長い間眠っていたら本当に『木』に戻ってしまつところだ
った。

不思議なものじゃ。あんたが通った森は目を覚まし活気づいておる》

「『木』に戻るつて、今も木じゃないですか」

《違う違う。木ではない『木』じゃ》

・・・いや、わからんよ

「意思が強いか、弱いか、という事ですか？」

《そう、それ。昔はなんか名前が付けられとつたが何だったかの。
少し待っておれ》

そう言つと黙り込んでしまった。

竜が恐れる種族らしい彼らは大層長生きらしい。

そのことは木の幹の太さ、その丈からよくわかる。

泉の方を振り返り、覗き込んでみる。

水は透き通り、きめの細かい土がよく見える。

その土の上を青い光が通っている。

どうやら青い光の発生源は泉の中心部にあるようだ。

木の顔が言うにはこれは『マナ』というらしいが
どうも自分の言葉の中で一番近い物がこれという事らしく実際の名前は不明。

・・・もうマナでいいか

精霊たちの食べ物というのは良いとして、そうしたら僕から発せられる『精気』と

呼んでいるものは一体何なのだろうか。

『マナ』を取り込んだら回復するようだしどこかで変換でも起きているのだろうか。

木の顔はしばらく話し込んでいそうだ。

僕は上に来ていたロープと鉄板が仕込まれたブーツを脱ぎ、泉の中へ入ってみた。

中心部に近づくとつれて不思議な感覚に陥ってくる。

何かが自分の中に侵入してくる。しかし不快な物ではなくむしろ満たされていくような。

《何をしておる？》

さっきの音が頭の中に響いた。

振り返るが木の顔は動かない。

「どちら様ですか？」

《何を言っておる。さっきも話しておっただろうに》わしら『じゃ

よ

そう言われてもう一度木の顔の方を見た。やはり変化は無い。

《ふーむふむ、なるほど。お前さん、わしらの眷族だったんか》

聞き捨てならないことをさらりと言った。

相変わらずどこにいるかわからず唯頭の中に声が響く。

《混乱しておるようだの。わしらは今あなたの中に侵入して思考を
読んどののだ》

その言葉を聞くと同時に、泉から岸へ飛ぶ。

《ほっほ、もう粗方読んでしまったよ。あなたがここに来るまでた
どってきた道のりから

最近、異種族の娘にヤラシイ眼を向けとる事までの》

……こいつ……

実はかなりムカつく野郎？だった。

顔が見えないというのにニヤニヤした表情が頭の中に浮かぶ。

「眷族って一体どういう事ですか？人間ではないと？」

《精霊と交感できる者がヒトであるものか。あなたはわしらの一部
といってもいい者じゃ

それは今のであந்தも理解できたはずだが？》

人間であることは完全に否定された。

確かに体に侵入してきた物は心地いいものであったが別に人間でない事とどう関係するのか。

「全く解らないんですけど」

《むう、容れ物は眷族であろうとも中の人が駄目だったか》

「中の人ってなんですか！？というか嫌な変換だな！」

《あなたの容れ物はわしらの眷族、
あなたという中身は適当にどっかから引っ張ってきた部品じゃ。
肉体は魂という部品無しではすぐに動かすことはできません。

成長させる過程も面倒なんで手っ取り早く引き寄せる事ができたのがあなたという訳じゃ》

・・・いい加減だな

「その話からすると僕は意図して作られたみたいじゃないですか。一体何のために」

《ふむ、わしらが見込んだだけあってあなたも大雑把じゃのう。

左様、あなたはわしらが意図して作った。作ってその中に放り込んだ。

わしらの害になる物を駆除するために。

なあに、あなたの言葉でいう雑菌消毒みたいなものじゃ。心配いらん》

「雑菌消毒ですか。その雑菌てまさかあなたの言う『ヒト』じゃないいでしょうね」

それだったら本当に最悪。真面目に魔王をやらなければならなくなる。

《心配いらん。消してほしいのはこの世を構成するより小さい粒を操る力。

あんたたちヒトの言う『虚無』というものじゃ。

あれはいかん！ あれはわしらを殺す。

少し前にあれが現れたときもわしは危うく体の一部を失う所じゃった》

よかった。人類滅ぼせとか言われたらどうしようかと思ってたけど・

「ちょ、虚無って消えるんですか？」

《消える消える。虚無の血族みーんな消せば、消える》

「やっぱり皆殺しじゃねえか！」

《冗談だ。消えずともわしらの脅威にならないようにしてくれればそれで良い》

そう言うと泉の中央から青い光の集まりが出て、目の前に飛んできた。

《虚無はマナを消してしまっ。マナが消えてしまえばわしらは飢えるしかない。

わしらたくさん死ぬ》

いつも見慣れた風の精霊の塊だった。

「大いなる意思？」

《そうそれ！昔はそう呼ばれとった。

確かにわしらはあんたの言う大いなる意思かもしれん。

しかし、あんたの考えからするとわしらは神ではない。

そういう力を持つ『生き物』にすぎん》

えらく謙虚な存在である。

「眷族だつてんなら、普通は命令に逆らえない物じゃないんですか？
良いじゃないですか。唯『やれ』、と命令すれば」

《この前それしたら、虚無が攻めてきた。大勢で。勝ったけど。

ここが山に囲まれて入れないようにしたのもそのためじゃ》

「つてすげえ！ここ作つたの？」

驚きだ。あの景色は意図して作られたものだったなんて、と
思っている。

《ヒトはしばらく時間をおけばわしらのことなど覚えておらんでの。

そのときは虚無が住む地下に風石いっぱい仕込んでやった。

大地がひっくり返って虚無はたくさん死んだ。

マナの循環の手助けにもなるし、虚無も消えるし一粒で二度美味し
いという奴じゃ》

訂正、こいつすげえ、えげつない、というか地上の生物を微生物程
度にしか考えてねえ。

・・・まあ、仕方ない

精霊だし。

《虚無はあなたのように異世界からやってきた異物じゃ。
わしらの世界には不要な物じゃ》

始祖ブリミルよ、今あなたにとても親近感を感じます。

あなたも私と同じように厄介な奴に目をつけられていたんですね。

・・・まあ、同情しないけど

「異世界って？それにこの前とか言ってますけどどれくらい前の事
言ってるんですか？」

《ふーむ、詳しくは記憶しておらなんだ。あなたの時間で言う一万
年といった所かの》

ちよつと前〃一万年前、流石大いなる意思。感覚のずれ方も酷い。
ため息が出た。一万年も前から続いている闘争である。

「それをこの百年程度で決着付けろと？
それこそ皆殺しでもしない限りすぐ復活しますよ」

この存在にとってはきつと瞬きする程度の時間だろう。

《それなんじゃが虚無を扱つヒトの種族、人間といったかの。
少し前からそれが住む大地に風石仕込んだいたんどの。

虚無はこれを止めに動くはずじゃ。あんたは奴らが出てきた所を狙

えば良い。》

さらりとんでもないことを言いやがった。

こいつはハルケギニアに近いうちに大地がひっくり返るほどの風石の鉦脈を作っているらしい。

逃げようのない範囲攻撃で皆殺しにするかあぶり出すか。

「でも、殺したら力は別の個体に移りますよ」

《……ふーむ》

大いなる意思にも知らない事があるようだ。

《おかしいのう。前はそんな事無かった筈……》

ブリミルの代になって、力が乗り移るよう改良されたとすれば納得がいく。

どうやら、始祖ブリミルは確かに偉大な魔法使いであったようだ。

こんな、一万年を昨日の事みたいに話す奴を相手に戦っているわけだし。

……何かもう他でやってほしい

それでも、それはそれ、これはこれ。

とりあえず、話すのが面倒になってきたので泉の中に入ることにした。

《む、どうした？》

「なにやら、肝心な情報がそっちに行っていないようなんで読み取り

「お願いします」

そう言うとゼリー状の物体が体内に侵入してきた。

・・・うええ、きもちわる

《ふーむふむ、秘宝がなければ蘇らんと。聖地の破壊は置いといてもこれはこれは》

「読み終わったんなら、もう止めてくださいよ。いいかげん気持ち悪い」

さつきから体の中をうねうねと、結構酷い感触である。

《ふーむふむ、成長したエルフの娘とあふんあふんじゃと。お前さんも大概、》

「お願いですからそれは心の中に留めておいてー!」

水に顔をつけて土下座した。

結局、最終的に始祖の秘宝と聖地の破壊を検討する、という事になった。

完遂すれば風石はもう増やさないらしい。

森の入口では監視役のエルフを一週間も待たせっぱなしであったので、

いろいろ怒られました。

とりあえず、大いなる意思の『ような』者が居たと言ったら不敬だとか余計に怒られた。

「くっそ、あいつ精霊のくせしてヒトの性欲理解してんのか」

評議会に報告し、いつものオアシスに帰ろうとカスパ内の昇降装置に乗る。

「屋上」

そう告げると昇降装置は動きだし上へ昇って行った。

一応、大いなる意思、のようなものとして報告しておいた。評議会の面々の反応は様々で、

信じられないと言うものから是非、再調査をという声まであった。

また、大いなる意思からの二つの命令は、秘宝の破壊だけを伝える事にした。

どうせこのタイミングで聖地破壊なんか言ったりしたら僕の陰謀説が浮かびあがる。

そう考えていると屋上に着いた。

「はあく帰って水浴びしてえ」

薄汚れた服の袖やズボンのすそを眺めて言った。

アディールに着くなりすぐに報告である。

汚れたまま綺麗な会議室に入るのは少々気が引けた。

風を巻き起こし飛ばうとすると、見慣れた風竜が一頭こちらに近づいてくるのが見えた。
風竜が翼をはためかせるたびに強風が起こり薄汚れたロープは巻きあがる。

「ナツメ！」

甲高い声が聞こえるとともに、少女が一人風竜から飛び降りてきた。

「報告はもう終わったの？」

嬉しそうに駆け寄ってきた。

「うん。ルクシャナー人？別にすぐ終わるから家で待ってればいいのに。」

今日って学校は休みなんじゃないの？」

「迎えがあつたって好いじゃないの。それとも不要だった」

「いんや、疲れてるし。自力で飛ぶのは遠慮したいけど、」

そう言つて風竜の方を見て言った。

「こいつ、僕が背中に乗つたら飛んでくれないじゃん」

乗つかると急に大人しくなり、鞭でせつつくような真似をしないと飛んでくれない。

唯でさえ疲れているのにそんな不快になる事はしたくなかった。

「あ」

頭から抜けていたらしい。うっかり、というよつな顔をした後、舌を出して笑った。

「人間の動作だな」

「そうそう、恥ずかしさをごまかすんだって」

「恥ずかしいの？」

「全然」

「無意味！」

恥ずかしさじゃなければただの興味からなのか。

「で、帰るんでしょ？さつさと乗ったら？」

そう、風竜の方を指差し言った。するとルクシャナは俯きながら歯切れを悪くした。

「え〜と、そ、そう！久しぶりに速いのでぶっ飛ばしたいのよ」

「疲れてるって言ったじゃない。飛ぶとなると抱えなきゃいけないし、

それにあまり速くは飛べないよ」

「それでも竜よりは速いでしょ」

「まあ、そうだけどさ。でも汚れてるし汗臭いし」

言いながらロープをバタバタさせると埃が舞った。

「い、いいわよ、そんなの気にならないわ。むしろ・・・」

小さな声で何か言った気がした。

いつもなら不快感に感じるはずのわがままも何となく嬉しく感じる。しかし、

・・・うーん、どうしようかね

人間でいうと思春期に当たりそうな年齢。

「ナツメ、臭い」とか言われたらダメージは結構大きい。

・・・厳しい

そう思っていると

「じゃあ、行きましょ。あの子なら後から付いてくるわ」

風竜の方を指差し、僕の肩に手を回してくる。

彼女の長い髪が鼻につくといいい匂いがした。

別に理性の壁がとかさういうのは無く、唯、帰ってきたという事を感じさせる。

ほっと溜息をつく

「何よ、そんなに私を運ぶのそんなに嫌？」

かなりの至近距離でそう聞かれ、不意に心臓が跳ね上がった。

「いやいやいやいや、そんな事無いですよ？はい」

声が裏返ってしまった。その反応にルクシヤナは目を丸くして、

「そんな反応初めて見た。」

「あれ？ そうだっけ」

「ええ、いつつも腰が低いと見せかけて結構余裕あったりしてるじゃない。

叔父様と模擬試合の時だっけとずっと飄々としてるし、読めなかった
て言ってたわ」

何？ その過大評価。唯、力を抜いて立ってただけなのに。

「うーん、自覚した事無いなあ。あ、飛ぶよ」

彼女がうなづくとしっかりと抱え屋上から飛び降り風に乗った。

錯覚かもしれないが、いつもよりしっかり腕が回され
胸元の近くに彼女の顔があるのが見えた。
首筋に息が当たるのがわかる度に酷い動悸たびがする。

「ねえ、ルクシヤナ。そんなに強くつかまなくても落っこちたりし
ないよ」

「へ？」

きよとんとするルクシャナ。がっしりと腕を回していることに気付いていない様子だった。

「そんなに強かった？」

「まあ、首に後が付くかと思った」

実際軽く締まってたし。そして彼女の力は緩む。

「ねえ、ナツメ。もしも、もしもよ。あくまでもしも、エルフと人間が戦争になったらどっちに付くの？」

妙な事を聞いてきた。

「いや、まず戦争を止める事を考えようよ」

「だからもしもだって言ってるでしょう。どっち？」

「・・・ごめん。よく判らないや。」

とりあえずどっちかに付くってというのは最終手段だし」

あの大いなる意思とかいう大きすぎる存在のせいもあり、身の振り方をどうするべきか考えている最中だった。

大いなる意思の眷族ですからエルフ側、と単純にはいかない。心は人間のままだし。

「その最終手段を聞いておきたいのよ」

「うーん、エルフ、なのかなあ？」

曖昧ではあるが勢力図的に見るとエルフ、という事になる。大陸ごとひっくり返す存在には勝てん。

「ホントに？」

ルクシヤナは不安そうに上目づかいで言った。

「やっぱり微妙」

どっちかについたとすればいろいろと自分の中の物が否定することに繋がる。

一応、庶民と一部の貴族はいい人なのだ。

「というか分かってるでしょ？　こんな質問答えようのないことだ
って」

「う、それはそうなんだけど・・・そう！学術的興味よ。
敵対関係のある二つの勢力に板挟みになったときの人間の心理はど
う動くか！」

「どっち取ってもうまみより苦みが大きいんですが、どうしるって？」
とりあえず、秘宝破壊が発動すれば僕は完全にエルフ側になる。
ハルケギニアの人間たちが始祖に対する見方を変えない限りは。

・・・ああ、胃が痛くなってくる

可愛い女の子と体が密着しているという

とてもドキドキなシチュエーションだとつづのには心は真っ暗。

ルクシャナが再び胸元に顔を押し付けていることにも気付かなかつた。

1)都合主義存在(後書き)

こいつの登場により伏線とか全部ぶち壊し。
何だか面倒になってきた。もう主人公のまわりだけ幸せであればいいよ。

破壊開始（前書き）

目標は20巻でる前に完結

破壊開始

ふかふかのベッド。

その枕やマット、毛布は天日干しされている。

それは人から、いや、人だけでなく犬や猫からも活動する意欲を奪う効果を持つ。

枕に顔を埋める。

ふつくらしとした感触と枕が吸収した太陽の暖かみにあてられてしまえば、

もう既に術中に収まってしまいそこから逃れる事は非常に困難になるだろう。

犬や猫ならその場で丸まり、人であれば倒れ込んだまま動けなくなる。

もしも疲労がたまっていたら絶対動けない。

体のたるさも相まって徐々に、ではなく暴力的な程に抵抗力を奪い去り

対象の臉を無理矢理くつつける。

駄目だ！ この後洗濯物取り込まなければ・・・

意識はあつたとしても手足はピクリとも動かない。

ここから脱するには相当の精神力が必要となる。

こなくそおおお！

このぐらいの気迫でようやく体の一部がびくつと動く程度。

起き上がるには更に一仕事しなければならぬ。

大抵はそこで負けてしまい、犠牲者が一人、また一人と出来上がっ

ていく。

ご多聞に漏れず、僕もその犠牲者の一人となった。

天気の良い、というかいつも天気がいい砂漠でベッドのマットや枕を取り込む作業をしているとそのお日様の匂い（実際は人の汗や脂が紫外線で分解されたものらしい）が北方調査で疲れている僕の眠気を増幅する。

全員分のベッドを整え終わると、僕は自分のスペースにダイブした。

薄れゆく意識の中、今回の報告に対する評議会の反応を思い返してみる。

調査隊を結成し、再調査。

評議会の決定は当然のもので、この調査によっては秘宝の破壊を本格的に話し合う事になるといふ。

ただし、再調査は二年後。

魔法を使えない領域の調査、及び踏破には相当の訓練が必要となり戦士達の錬度を見直すんだとか。

他人事みたいに言っていたら、体力の基準を作るとかで僕が駆り出されることになった。

自分の事に関係しているとはいえ、面倒だ。

ちなみに『大いなる意思』の聖地破壊要請については黙っていたらいつの間にか可決されていた。

近いうちに調査として聖地に赴くことが許され、破壊方法の検討をせよ、とのこと。

もう後戻りなんてできないのだから、このまま突っ切るだけである。

でもロマリアの密偵達が動いているので慎重に………
zzz

何だかお腹のあたりがもぞもぞする。

拾ってきた猫が乗っかっているのかと思ったがどうやら違う。

腹部が外気にさらされてスースー、いや、なんか今生暖かい空気が
地肌を……。

へそから胸の下あたりにかけて感じるその感触は次第に無視できる
程のものではなくなっていた。

むずがゆい感触は胸骨のあたりまで上昇してきて優しく撫でまわし
てきた。

そのせいで意識がはつきりしてくる。

目を開き眼球を動かし、原因となっているものを見ようとすると、

……は？

視界には金色の髪と尖った耳。

頭を起こしてみると少女が若干息を荒くし、手を腹部に伝わせてい
るのが見える。

寝ぼけていたせいか、目の前の状況が把握できなかった。

僕の頭が動いた事に気付き少女の動きが止まる。

「何しとるん？」

はっきりしない意識のままそう尋ねた。

「がが、学術的興味よ」

上ずった声でそう言った。訳わからん。

深く息を吸い込み、ゆっくりと吐いていく。

意識がはっきりとしてきて、ようやく現状を把握した。

「どうやって今のを客観的に見るの？」

頬が少し赤くなり、息が荒い事から明らかに私見が混じっていることが窺える。

「それは、比較して・・・」

「何と？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・せ、洗濯板。こご、凹凸の具合とか」

・・・・・・・・・・・・・・・・

その沈黙に少女はますます顔を紅潮させる。

ルクシヤナ。

学者を目指しているエルフの少女。

最近、エルフ人間亜人を含む『人』の研究を専門にすると決めた。

後先考えず、その場の勢いで行動する性格が今回の事の原因なのか。

・・・うわ、すっげえ可愛い

この家に来て二年以上経つが、こんな表情を僕に見せたのは今が初めてである。

ああ、これはやばい。

やばいと言うか、うわあ、だ。

うわあ、うわあ、うわあ、うわあ。

美少女が間近で顔を赤く染めているというこの状況がうわあ。

アレ？この子もしかして物凄く可愛いんじゃないの？

いや、確かに普段も可愛いのだがそれは彼女の容姿が優れているからであって

純粹にその仕草や雰囲気が、という事はあまりない。

むしろ我儘な部分にマイナスされ、時々、「う〜ん」と言わせる程度。

「ほう、それでその結果から何が得られた？」

そんな意地悪駄目だ。彼女、困ってますます赤くなってるじゃないか、という背徳感。

いや、むしろ背徳を感じるべきなのは彼女の方。

「せ、性的興奮」

答えやがった。それもかなり恥ずかしい筈なのに。

僕から目を逸らしながら言った。もう既に耳まで真っ赤。

こっちがその手の話に免疫ないから、そう言えば引き下がると思っていたのだから。

待つんだ！ 棗めいざわ！

駄目だ！ もう口を開くんじゃない！

この感覚は、思春期真っ盛りの少女が唯男の体に興味を示しているという特殊すぎる

シチュエーションが創り出した瞞まやかしなんだ！
このまま突っ走れば嫌われてしまっただけだぞ！

と心中では思っているものの、

「はっ、どこ見て興奮すんだよ」

「いやあ、ナツメの寝顔見てたらなんかムラムラして来ちゃってっ
い
い」

.....

あれ？ 普通だ。というかもう顔赤くないし。

くそっ、こちらの意図を読まれた、というかこいつ開き直りやがっ
た。

というかさっきまでのは何だ。演技だともいうのか？

「普通、逆でしょ」

男が女の寝込みをさっきみたいに。

「やったら私、全力で八つ裂きにする」

「叫ぶんじゃないか!?」

さっきまで感じていたドキドキを返してほしい。

「ムニイラさんに見られたらどうするんだよ」

彼女の母ムニイラさんは行儀とか作法に結構厳しい。

「大丈夫よ。こういう事には優しいもの、お母様」

「僕がただじゃ済まねえって言うてんだよ！」

部屋に立てかけてある剣や槍を始め、食事用のナイフまでが武器となり襲ってくる。

「ほとんど避けてるじゃない」

「怪我をしたという事実は無視なのか」

傷の治りが早い分、それだけないがしろにされてるのはいつもの事。

僕はたくし上げられたシャツを戻してベッドから立とうとする。
ほとんどベッドの上に乗っているルクシャナはそのシャツの裾を掴んだ。

「ねえ、人間じゃなかったってホント？」

どこから聞いたのか、評議会にしかまだ言っていない。

「ん、どうやらそうみたい」

精霊と交感、要するに意思の疎通を言葉を介さずに行うことができる者は

大いなる意思（仮）曰く、人間にはいないらしい。

「それで、どうだったの？」

僕はベッドの端に腰かけた。

「向こうが僕の命握ってる状態」

この体の成長は魂に依存するらしいが、寿命は別。向こうの裁量次第で今すぐにも活動停止させることもできるし、気の遠くなるほどの時間を生きることがもできる。

「参っちゃうよ。これで完全に逆らえない。

まあ、元々やるつもりだったからいいんだけど」

言ってからベッドに仰向けになり彼女の方を向く。

「上手く行くよね？」

声から不安を感じ取れる。

「行かないと困る。あの野郎ご丁寧に人間世界の地下に風石仕込みやがった。」

「風石？ 仕込んでどうするの？」

「大地を飛ばすんだと。早めに風石増やすの止めてもらわないと虚無が気付いて
聖地にやってくるらしい」

真の虚無、真の悪魔が復活しなかったとしても風石が原因で大地がひっくり返る事は
確定的である。

土地がひっくり返ればその人間は残りの土地を奪い合うか、

新天地を求めて海を渡ろうとするか、あるいは砂漠を目指す。間接的にはあるがエルフも命を握られている事になるのだ。

「その条件が『門』の破壊？」

「第一条件は、ね」

秘宝の破壊はそこから時間かかるという事で、聖地破壊が完了した時点で一時的に

風石が増やすのは止めてくれるらしい。

というか一番甚^{はなは}だしいのは僕の行動や思考が

大いなる意思に筒抜けになってしまったということである。

記憶を読み取らせた時に深い所で繋がってしまったらしい。しかも一方的に。

その結果、能力が向上したとか力が増したという事は無く、唯、向こうに筒抜けになった。

「二個目が秘宝の破壊？」

「お前どこから聞いてくるんだよ!？」

「という事は、人間世界に行くのよね」

スルーしやがった。極秘なのに。

「そうなる」

「私も行きたい」

何をおっしゃいますか、このお嬢様は。

魔王とエルフが一緒に人間世界へ。

当然、変装できる魔道具を作ってもらうがリスクは大きい。

精霊魔法は系統魔法の探査魔法ディテクトマジックには引っかけられないが敵しかいない所に行くのだ。

「駄目」

切って捨てた、と思ったら拳が飛んできた。

僕はそれを避ける。

「駄目に決まってるでしょ。単独の方がやり易いんだから仕方ないじゃない」

それに許可が下りるとは到底思えない。

「でもでも、人間世界行くんでしょ？こんな機会滅多にないじゃない」

「やだ。連れてかない。僕の生き死にかかっているのにそんな不確定要素連れてかない」

頭湧いてるのか？ この娘は。

さっきまであんなに可愛いと思っていたのに今はめっちゃくちゃウザい。

・・・とりあえず厳しいお母さまに報告しよう

「というかさ北方の再調査、行くんでしょ？ 訓練しなくていいの？」

護衛の戦士が十程度と学者が数人、そしてその学者も自分の荷物を背負いながら
数十キロメートルの距離を走らなければならない。
もちろん己の肉体のみで。
しかもこれ、結構速く走れないと精霊がない森の『動く木』に追いつかれてしまう。

「う、何とかならないの？ ナツメ、大いなる意思の眷族なんですよ？」

「ならない。『動く木』は全自動で大いなる意思は操作してないって。
まあ二年、実質一年半ぐらい？はあるんだし鍛えればなんとかなるって」

頭の基準は多分満たしているんだろう。評議会の選抜で落とされるかもしれないが。
エルフは体の構造上全般的に結構走るの速かったりする。
陸上選手もつらやむ体つきである。

「今日のはもう終わったわよ」

不貞腐れていた。

そう、お疲れと言って僕は部屋を出ようとすのだが、急に片足が後ろに引かれて前のめりに倒れ込んだ。

咄嗟に両手を地面について地面とキスするのを防ぐ。

「て、何すんのー！」

ルクシャナがズボンの裾を引っ張ったのだった。

「話を逸らすな。卑怯者」

蔑むような眼で見降ろしていた。

「私の楽しみを奪おうとはいい度胸じゃない」

「お前の楽しみと僕の命は等価じゃない」

「まるで私が行ったら失敗するみたいな言い方じゃないの。心外だわ」

「こないだ水竜に食われかけただろうが！」

それもかなりの大型の。寄り道をしようと言いだし海岸で水竜に遭遇。

逃げればいいのにこいつはあろうことか水竜のスケッチを始めやがった。

「あの時はすごかったわね。あんなに大きいの初めて見たわ。

成竜でもあんなに大きくならないのに。それにあなた、やっつけちゃったじゃない」

たまたまだった。

たまたま大口開けた所に空気を極限まで圧縮して液体になった物体を放り込んだら

内側から破裂した。

僕はため息をつきながら言う。

「偶然が重なって助かっただけでしょ。あの水竜がたまたまバカだったから助かったようなものだよ？」

「かつこよかったよ？」

そう言っつて寝転んでる僕にしな垂れた。

「そういう手はアリイーにやれ」

アリイーならこの一言だけですぐ折れる。

これに？頼もしい？とか？素敵？とかついたらもう。

「ぶー、いいじゃない。減るもんじゃないんだし」

「一個しかない物が減るんだよっ！」

命が。

「せめて自分の身ぐらい守れるようになってからそういう事、言いかけてやめる。」

この子、力をつけたらついたらただ危ない所に突っ込んでいきそうだし、というか引き下がるという事を少しは考えてほしい。

「戦術的撤退も時には必要だろう？」

人の手に余る生き物が多いこの世界においては特に。

ルクシャナ、君の心配をしている人だつてたくさんいるんだよ」

「私、そういう現実逃避って好きじゃないの。というか考えないわ。」

私は何があってもあなたに付いて行く。それだけよ」

「今の所だけとつたら物凄く感動するセリフなのになぜだか苛立つばかりなんですが」

「好きよ。愛してるわ。結婚しましょう」

・・・嘘くせえ

特大のため息をついた。もう今日は相手するのめんどい。へいへい、と生返事をして部屋を出た。

聖地を破壊するためのステップその一、現地調査。

「セーフ」

悪魔の門は物理的な『門』ではなく魔法的な門^{ゲート}だった。千メートル弱の上空から眺めた聖地は、あまりパツとしない場所だった。

海岸から約五十キロメートルの岩石砂漠の中にポツンと岩でできた円形の遺跡があるだけ。

周囲に石の柱が立てられ、その円形に沿って五芒星と魔法語で紋様が描かれている。

まあ、しかしこれだけであるはずがなくその遺跡を中心とした半径二キロメートル程の

巨大な円に沿ってまた五芒星が描かれていた。

それも魔力そのものが消えないインクであるかのように、地面に深く定着して描かれていた。

当然、これはエルフの目に映るはずも無く、

彼らは今まで遺跡とその周辺付近だけを守ってきている。

僕は調査隊へ報告に下りて行こうとしたのだが円形の外縁部に数人分の気配を見つけた。

確かめようとその気配の上空へ移動する。

・・・ローブ

全員かぶり物をしてるからどんな奴らか分からなかったが足運びからおそらく人間だろうと思う。

・・・逃がして泳がせるか、捕まえて・・・

後者が有効だろうか。

どうせロマリアの密偵以外はなさそうだし薬を飲ませれば向こうの内情も分かる。

生きたまま捕縛は僕にはできそうにない。

うっかり自殺でもされたらせつかくの情報源が駄目になってしまう。

・・・知らせるか

調査隊の方へ戻る事にした。

その結果、密偵は六人いた内の四人が殺され、残りの二人を捕縛。

取り調べという名目で強力な自白剤を飲ませ情報を引き出すと何とも嫌な事がわかった。

ロマリアは何らかの方法でこちらが聖地を破壊される事を察知したらしい。

末端の人間、唯の狂信者らしく、薬を飲んでも聖地破壊を察知した方法は分からなかった。

しかし、察知されようとされまいと破壊は実行しないと僕の命は割と危ない。

大いなる意思（仮）の意向で今は生きているが職務放棄（いや、この場合は向こうの願いを突っぱねるだけか）をしてしまえば

上位者権限発動、眷族の肉体活動停止なんてこともあり得る。

というわけで、初撃から張り切って巨大竜巻を作り海岸から聖地向けてリリースした。

結果、遺跡はほぼ全壊、魔法陣となっている五芒星は健在。

一撃で方が付くとは思っていなかったなのでその辺は気長にやることにする。

それでも駄目な時は自力で魔法陣の魔力を引っぺがす努力をしなければならぬが。

「良かったのか？立ち会わなくて」

カスパの地下牢前で取り調べが終わるのを待っているとビダーシャルさんが言った。

僕は頷き

「僕がここにいる事、ばれてませんでした？」

とりあえず一番重要になりそうな事を聞いた。

「ああ、なるほど。いや、少なくとも奴らは知らない様子だった」

もし僕と一緒に取り調べなんかしたら、密偵も暴れ出して取り調べも大変になるだろう。

そろそろ忘れてほしいものだ。

「こちらの動きを察知したのって一体何なんでしょうね？」

裏切りの可能性は限りなくゼロに近い。というかありえない。人間は悪魔なのだから。

「連中が使う魔法、いやそれでは距離があり過ぎるか」

サハラとの境界アーハンブラ城からでも千キロメートル近い距離がある。

・・・遠くを見る魔法か

嫌な事が思い浮かぶ。アイツじゃないのか？ と。

ロマリアで特殊な力を使えて、秘宝も二つ持っている人間と言えばアイツしかいない。

・・・ヴィットーリオ

異世界を覗く位だ、別に距離なんか在って無いようなものだろう。話したのは数時間、しかしアイツが言った最後の言葉が妙に印象に残る。

・・・信仰で人間世界を変える

ハルケキニア

それがおかしな方向に進んでしまったのだろうか？

いや、むしろおかしな方に進んでいるのは僕の方なのかもしれない。自分の命ほしさに強い者に逆らえず唯、言われた事をこなしているのだから。

自分の意志で進む者と他者の意志で動く者。

いや、良く考えると大いなる意思も自分の命ほしさに動いてるじゃないか。

「何か気付いたことでもあるのか？」

僕の様子に気付いたのか彼はいつもの事のように言った。

「いえ、特には」

担い手の一人はヴィットーリオなのだろう。

敵対勢力の中枢になるであろう少年。

それでもそれをエルフ達に伝える気にはならなかった。

「あー、めんどい」

「急にどうした？」

「だって一万年続く喧嘩のとばっちりですよ？迷惑極まりない」

もうどつちが先に手を出したとか関係ない。

虚無と精霊、虚無が発展すれば精霊の命は無い。虚無は精霊の存在に気付かない。

気付いていても気にも留めない。

そして究極的に言えば虚無が増えると精霊も減り系統魔法も使い辛くなる。

・・・あれ？　もしかして馬鹿なの？

始祖の扱った伝説の系統、実は他の四系統を圧迫していました。

世界を滅ぼす悪魔、納得。

「喧嘩とな。これほど大きな事態になっているというのに妙な事を言う」

ビダーシャルさんは含み笑いで言った。

「大いなる意思からすれば人の戦争も些事でしょうよ」

地上に住む人の事なんか気にも留めない。

唯、全部が滅びなければいい。

個人個人はどうでもいい。

大体、人間とオークを区別できるかも怪しい。

「とりあえず、虚無は邪魔」

僕が生きていく上でこれは絶対避ける事の出来ない事柄。

虚無⇨精霊の脅威⇨大いなる意志の脅威。

虚無を消さないと僕が大いなる意思に消される。

加えて消そうとすると人間がこっちに押し寄せてくる。

ヴィットーリオ、信仰とはやはり愛だよ、愛。

信仰という愛で人間世界を早く変えろ！

聖地なんかそつちのけになるくらい変えろ！

どうやらこのとき変な行動をとっていたらしく、

「どうやらお前は疲れているようだ。今日は早く帰って休みなさい」

ビダーシャルさんは僕の肩に手を置いて言った。

「そうします」

それじゃあ、と地下牢を後にする。

・・・あれ？ 帰って休めるの？

帰るとあの知識狂娘が絡んでくる。

絡み過ぎると彼女の母親から制裁が下る。

・・・出て行きたい

監視が外れたら別の所に移ろうかと考え始める。

そのふらふらと歩く様から、身にまとう雰囲気は煤けているようだった、と後日言われた。

破壊開始（後書き）

ggaggdになった。そろそろ時間飛ばしという技を使おうと思う。聖地の概要、とりあえず妄想にすぎません。本気になさらないように。

五芒星があるのは、ブリミルと四人の使い魔で五になるからという安直な考えから。

この泥棒猫が！（前書き）

恥ずかしい話です。読み返して投稿するか迷って二日経ちました。

この泥棒猫が！

十七回。

聖地を攻撃した回数である。

既に柔らかい地表付近の地層は完全に抉り取られ、海岸はU字型に海水が入り込み湾に変形している。

聖地は割と標高が高い丘の上にあつたのだが、丘はすっかり低くなり上にあつた遺跡は跡形も無くなつていた。

崖はきれいに削られ、更地にとなり以前の入り組んだ険しい岩石砂漠の様相は全く残つていない。

普通なら何万年とかかる地形の形成を僅か数ヶ月で。風や水が土を押し流す作業を数万分の一程度の時間で。

それが及ぼす影響はどれほどのものか。

砂漠にすむ生物は少ない。

少ないが地球の砂漠よりは多いと思う。

大型のもので砂漠サンドワーム蚯蚓に砂漠サンドスコウレオン蠍、

小型のものですつごいもじゃもじゃの砂漠鼠や昆虫など。

それらの住処を一瞬と言つていい時間で奪つた。

言葉が通じる種族だとしたらどれほどの憎悪と呪詛を向けられるだろうか。

あまり考えたくはないのだが、何故か生き物の命を奪つたびに自分の物ではない罪悪感に悩まされ続けている。

大いなる意思と繋がつてしまつて以来、敵意の感じられない生き物

を殺すとこの感覚が付き纏うようになっていた。

その証拠にロマリリアの密偵は殺しても心が痛むことはない。

精霊の感情なのだろうか。

面倒くさい。

所詮、中の人は一人である。

他人、他物の感情を逐一受け止めるほどの度量なんてものはない。

自分一人分の感情ですら持て余すこともあるのだ。

意思が薄いとはいえ、それが大量に集まればそれは結構なものになる。

それが自分の中に流れ込んでくる。

僕を縛り付けるためだろうか、大いなる意思もえげつない処置をするものだ。

他人事のように言っているが当事者にとってはたまったものではない。

他人事にしないと心が壊れる、とまではいかずとも能力を使用する度に愚痴を聞かされるようなものである。

そんな訳でここ数ヶ月で僕の精神は地味に擦り減っていた。

また、例の五芒星の魔法陣だが数回の攻撃でその一部が破損、そのまま魔力が霧散した。

どうやら中心の遺跡が魔力供給機能の役割を果たしていたらしい。

細かい事は分らないがエルフの学者の見解では大気中の『何か』を変換して魔法陣のエネルギーとしていたようである。

・・・いい部屋だ

真っ白な石の壁に南北に吹き抜けているベランダと窓には清涼感を覚える。

運び込まれたベッドと荷物が詰め込まれた木箱が一つだけ。

十二畳ほどのその部屋は、持ち物の少なさが余計に広く感じさせた。

ベランダから出て外を眺める遠くには海と砂漠、眼下には大通り。

当然、排気ガスなどとは無縁、しかも一年中精霊石の空調が効いているので深呼吸しても気持ちの良い空気だけが肺を満たす。

首都アディール、カスパの近くに割り当てられた部屋は一人の人間にはかなりの待遇だ。

聖地の破壊完了の数日後三年が経ち監視期間は終わり、居候状態ウキウキから脱した。

一人の時間を増やすために。

安全で安心して安堵のため息を遠慮なくつけるパーソナルスペースを手に入れたのだ。

「それなのに何でこいつがここに居る」

ベランダの手すりに手を付きながら僕は精神的疲れからため息をついた。

ベッドの上には無防備に手足を投げ出してごろごろしながら本を読む少女。

長く綺麗な髪が少し皺の入ったシーツの上に広がり独特な色気を感じさせる。

「ん、学校が近いから」

何でもないように答える少女。

「そういう事言ってるんじゃないの。何で！こつ毎日毎日つ、僕のベツドを占領してるかって聞いているんだよっ」

少々息を荒げてしまった。精神的に擦り減っている事からいささか狭量になっている。

「あなたと私の仲じゃない。家族みたいなものでしょう」

「僕の世界には『親しき仲にも礼儀あり』という言葉があったな」
そう言いかけるとその少女、ルクシヤナは不機嫌そうに言った。

「つまりは私を追い出して新しい女を連れ込む訳ね。ああ、嫌だわ男っていやらしい」

「とりあえずその不倫ドロドロな小説をこの部屋に持ち込むのはやめてほしい」

タイトルは普通の『風の恋』。

その爽やかなネーミングからは考えられない様な酷い内容、キツイ人間関係。

言うまでも無くトリスティンの作家が書いたものである。

「ええ、もしあなたが不倫するならそれは人の形をとってはいないでしょうね」

「そもそも僕に正妻がいる設定どこから出てくるんだ」

「猫が正妻」

そう言っつて、部屋に居ついている灰色猫ムサシ（性別ノオス）を抱き上げた。

「同性愛!?!」

そうでなくとも獣姦趣味はない。
そう言っつとはっとした顔をして

「あなたの場合、男色どころか生殖機能も怪しいわね」

顎に手をあてる仕草をして真面目に考え込み始めた。

人間にもなれずエルフにもなれない。
どちらにも属さない中途半端な存在。
心は人間、体は精霊の創作物。

一個体で完結してしまっている生物とはどんな気持ちだろうか。
大いなる意思はある意味それに近い。
しかし、考える事が出来るだけであってこつこつという事に対して思う所は無いだろう。

最初から、生まれた時から一人であるのだから。

では、後からそうなってしまうたら。

後天的にそういう存在になってしまったとすればそいつはどうなるか。

そいつが気の遠くなる時間を生きる事が出来るとして、どれほどの時間『人の心』は持つだろうか。

元『人』が人を見下す。

どうせそいつも人に関わらずに生きる事などできないだろうに。

まあ、僕の場合そこまで長生きする前に気が狂ってしまっただろうが。

「人を不能者扱いするな。性欲ぐらい人並にある」

「威張って言う事じゃないわ。はっ、まさかあなた・・・」

そう言っただけ胸を手で覆い、頬を赤く染め、潤んだ目でこちらを見た。若干恥ずかしそうな声を出すこともお忘れなく。

演技であることは一目瞭然だが、その仕草はいちいち手が込んでいる

「君、その他の男の前でやったら間違いなく襲われるよ」

僕は呆れ顔でそう言った。

可愛い。

見た目だけは。

エルフの中でも綺麗どころに入るだろう。

本性を知らない若いエルフの理性の八割方は打ち抜くその仕草は僕のセリフと共に終わる。

「うん、知ってる。ナツメだと安心ね」

嬉しそうに笑いながら言った。からかおうとしている事が見てとれる。

深いため息の後僕は言った。

「第一、色っぽい仕草が合っていない。将来に期待、と言わざるを得

ない」

彼女の下から上まで舐め回すように眺めてみる。
スタイルは申し分ない。

一部を除き。」

「む、胸で女の価値は決まらない！」

自身の控え目な『それ』を手で覆いながら言った。

「それは持たざる者の逃げ道にすぎない」

「く、これだから男は」

ルクシャナは大きさにたじろいだ。

僕はベランダから部屋の中に戻り、壁際に座り込んだ。

「ナツメ？」

「ねえ、ルクシャナ。今僕は疲れてるんだ……。休みたいんだよ。
ずっとは無理でもしばらく痛いからは離れたい」

自分でも分からない内に唐突に言葉が出てきた。

「君と話していると楽しいけどそれは精神が正常な時であって今は違
う」

「ナツメ、あなた何を」

「そろそろどっかに寄りかからないと折れちゃいそうだよ」

……。
僅かな沈黙が流れ、ルクシヤナ口を開いた。

「何かあったの？」

「いや、特に辛いことも悲しいことも無かったけど僕は元気ないです」

某宅急便を生業とする魔女っ子風に言った。

「まあ、有ったとしても人に話すと余計に落ち込むから言わないけど」

その辺はお察し下さい、と。

「全然分からなかった」

「ごめんなさい、と細い声で彼女は言った。どこか怯えたように。

「いや、こっちこそ。僕ってさ、あんまり自分の事話さないから分かり辛いでしょ？」

「でも、話してくれないと分からないじゃない」

「知りたい場合は聞いて。自分から話そうとは絶対思わないから。ああ、でも今は駄目」

お疲れでささくれ立っている心を時間以外で癒してくれそうなのは……犬猫ぐらいか。

もしくは労わってくれる人でも可。

「正直今の自分の狭量さには驚いてる。今ならコーヒーに砂糖入れられただけで激怒しそうだ。あ、ミルクはOK。」

「結局いつもと変わりないわね」

ルクシャナは呆れ顔で言った。

「失敬な。とりあえず毎日来るのは不可」

「えー、ここから（学校に）通おうと思ってたのに」

引越す気かよ。すでに本棚には結構な数の本（ルクシャナの物）が納まっている。

「寮に入れ。寮に」

彼女の実家、オアシスからは距離の関係上、竜での通学には向かない。

高速の送迎係が居なくなったので寮から通わざるを得なくなる。

「効率的じゃないわ」

「男の、それも人間の部屋から通うなんてどんな噂が立つか分かるでしょうに」

もう既に首都アディール、工業地区の一部では蛮人扱いはされなくなっている。

『聖地』 Ⅱ 『悪魔の門』 破壊はあくまで自然災害が引き起こした事

として民衆には知らされている。

真相を知るものは上層部と一部関係者のみ。

これに対するの反応はその多くが大いなる意思が悪魔を打ち滅ぼしたのだ、というもの。

よって、脅威がなくなつた分人間に対する蔑視感情も若干だが和らぎつつあるように思う。

「人間じゃなくて大いなる意思の眷族なんでしょう。エルフから見たら聖者にも劣らない肩書かたがきよ？」

「知ってる人はほとんどいないだろうが。というかそれ外で触れまわるなよ」

面倒な事が起こるに決まっている。

大いなる意思を騙る不届きものめが！ とか。

聖者よ、と仰々しく扱われたとしてもそれはそれで気持ち悪い。

「はっ、噂つてもしかしてそういう事？」

ルクシャナは急に赤くなつた。気付く順序が逆だ。

「肉体関係とか」

相変わらずストレートな物言いをする子である。

恥ずかしい事を自覚しているのならやめればいいのに。

「もう少し遠まわしに言つたらどう？」

恋仲とか、と僕が言つと

「恋仲!？」

赤から、耳の先まで真っ赤にレベルが上がる。

茹蛸状態になりながらその言葉をぶつぶつと反芻していた。

恋仲、恋仲、恋仲、と。

肉体関係の方が恥ずかしくないらしい。体だけの関係とかただれてるな。

「も、もし、そうなったら責任とってもらわないといけないわね」

「肉体関係が先の恋愛とか不純すぎてついていけない」

そんな事になればあなたの敵しいお母さまが鬼に変身しますよ。

「失礼ね。私だってそんな関係嫌よ」

茹蛸状態から冷めてきたのかばつが悪そうに言った。

そうしておもむろにベッドから降りて僕の隣に壁に背を持たれて座る。

「もうそんな噂今更よ。というかもう過去の事よ。」

ナツメ、あなた私に考えろとか言う前に自分も頭動かしたらどう？

私、あなたに二年強も送り迎えしてもらっているのよ？

そんな噂、初期の段階で出てしまったに決まってるじゃない。」

あー、確かにあり得る。

あの時、学生さんの視線がおかしかったのもそのためか。

仕事が首都の外ばかりで気付かなかった。

そんな事を考えていると彼女の頭が傾き僕の肩に乗った。

「ねえ、辛い時は頼っていいのよ？　もう家族みたいなものでしょう？」

今のあなた、見てるととても不安になってくるのよ。どこかに行きたきり帰ってこないような。」

その言葉に顔を合わせ辛くなり、そらすと手が伸びてきて強引に引き寄せられる。

振り向かされたその場所には既にルクシヤナの顔が文字通り目と鼻の先にあった。

そのままその事にドキドキする間も与えられず、口に柔らかい感触が伝わってくる。

キス、接吻。

愛情表現の一つ。

……は？

呆けてしまって払い除けることも忘れてしまった。

どれほどそうしていただろうか、数秒か数分か、しばらくすると唇は離された。

……。

目の前の少女は耳まで紅く上気し、息が少し乱れている。

そして自分、体も熱いし何より心臓が激しく動いて指先までその振動が伝わる。

お互いの血行がものすごく良くなっているであろうことがよく分かった。

「……す」

ルクシヤナが何か言いかけた瞬間、大きな音と共にドアが開かれた。なだれ込むようにしてエルフの女の子が数人、笑いながら今の事を取り繕っていた。

そして僕の隣では肩を震わせている者が一人。すっと立ち上がり、入口から逃げ出そうとしている者達を引つ掴み部屋の外に出て行った。

あんなに近くに来ていたのに気付かなかった……。

一応、人の気配を探るのは癖になっている筈。

風と同調すると廊下から彼女たちの話が聞こえてきた。

どうやら学校の友人らしく、ルクシヤナは詰め寄られていた。

「はあ」

リンクを切断してベッドに寝転んでさっきの事を頭の中で反芻してみる。

……何を言おうとしてたかなんて……。

前後の文脈から一つしかないだろう。

それに彼女の最近の行動からもそれは明らかだった。

オアシスでは同室に入り浸る事がよくあるし、以前は入浴後素っ裸で屋内をうろろしていたのに急に恥じらい出すし。

出て行くと言った時不機嫌になり、終いには嘘泣きまでするし。

そのおかげで彼女の母君、伯父君、幼なじみから物理的な総攻撃受ける事になるし。

最後のは置いておくとして、彼女が何を伝えようとしていたかは明白だった。

告白、それも愛の。

「うっわ、情けねえ」

女の子の方から言わせてしまつとは。

いや、そもそもあの子は直情的に物を言うから別にいいのか？

いやいや、それでも情けないへたれであることには変わらない。

そして自分を好いているであろうあのエルフの少女の事を考えてみる。

一緒に居る事が多いから自然と話す回数も多い。これからは分からないが。

彼女とのやり取りは楽しい。なんか向こうに主導権握られることが多い気がするけど。

やたらうるさい人間といる時に感じる不快さは感じない。

むしろ満たされていると感じる。

それに彼女を見ていると、どうも何かしてあげたくなる。

居ないから分からないが多分、弟か妹に向ける庇護の気持ちとは違うのだろう。

それに対する見返りが欲しいと思わないのも好意の表れかもしれない。

見てるとドキドキするとかは今更ありえない。

現在、賢者モードのような精神状態であることを差し置いても。

だって見た目十三、四の子供だし。

まあ、無防備になっっている状態は除いたとして。

ゴロゴロしながら考えていると、ルクシヤナは部屋に戻ってきた。

友人たちは追いついたようで、外からはさっきの声が聞こえてくる。

さつきよりも顔が紅潮している。
入ってくるとそのまま無言でベッドに腰かけた。

「聞いてた？」

「何を？」

聞かれたらまずいほど過激な事を話していたのか？ 聞いておけばよかった。

僕が聞いていない事が分かるとそのままベッドに横になる。

丁度、顔と顔が逆さに向かい合ってる状態。

「ナツメ、私ね」

「待って」

ルクシャナの唇に人差し指を当ててそれを制して言った。

「こういつのつて男の方から言うもんでしょ」

その言葉に心底驚いたように、そしてその目から涙が溢れシーツを濡らすのが見えた。

「へ？ それって……………」

そして起き上がり、ルクシャナの肩から背中から手を回し抱きしめる。

「好きだよ。ああ、これ家族愛とかじゃなくて男女仲の方だからね」

そう言うと彼女の方からも強く抱きしめられる。

ずずつと肩越しに音が聞こえた。

「鼻水？」

「うるさい。だまれ」

ルクシャナは鼻声で答えた。しゃっくりまでしている。

おーよしよし、と背中をさすってやると徐々に落ち着いてきたようで、抱きしめ力も弱待ってきた。

「ナツメがいけないんだから」

「そうだね、こういう場合往々にしていつの間にか男が悪い事になってることが多いよね」

するとルクシャナは肩に手をかけ、密着した体を離して睨んできた。

「思わせぶりな態度が多い」

「どんな？」

「顔赤くして目を逸らすし、私以外の女の子には何か冷たい。この間だって……」

そう言えば学生らしきエルフの女の子に話しかけられたが適当言っ
て逃げた事があった

「前者は仕方ないとして、後者は苦手なんです。その、女の子が」

そう言うとおむっとした顔でルクシャナは僕の頬をつねってきた。

「それは何か？ 私は女扱いされていないと」

あまり握力がないせいかな微笑ましいものである。

「ひがうひがう」

彼女に手を放させて、ふうっと一息つく。

「一応人見知りする性質なんで。人付き合いは苦手であります！」

必要性を感じない限りはできるだけその人に触れたくない。面倒だし。

そう言うところクシヤナは声を上げて笑い出した。

「あっはっはっは！ ばかみたい。何でこんな事でやきもきしてたんだろ」

「誤解が解けて何より。所でさ、さっきの子たち本当に帰ったの？」

ベランダの方にいくつか気配が。さっきよりも多い。

風と同調してみると………あれ？ 何か数が多すぎではなからうか？

三階の部屋のベランダには八つ、部屋のドアの向こうに十数人、そして建物の外には人だかりができていた。嫌な汗が流れてくる。

とりあえず、ベランダの方へ歩いて行くとさっきのエルフ女子学生が居た。

「あ、こんにちは」

見覚えのある子が挨拶をしてきた。

「え〜と君は、」

「ラナです。ルクシャナの心の友です」

「あ、どうも。ナツメです」

つい頭を下げてしまった。眼下には数百人が群がりこちらを見上げている。

「ねえ、これはどういう事態なの？」

「いや〜話すと長くなるんですが、とりあえず端的に言つと野次馬です」

「……野次馬？ 一体何の？」

この子たちがここに張り付いているからか？ すると、

「あなたとルクシャナの行く末を見守っているのですよ」

とてもいい笑顔で言った。他の子たちもうんうんとうなずいている。

……え？ それじゃあ

「もしかしてさっきの聞いてた？」

「ええ、『拡声』ではつちり聞こえています。あ、ちなみに録音して
ますんで聞いてみます?」

なんてこった。大衆の前で愛の告白とか軽く死ねるくらい恥ずかし
い。

「くそつ、気配を感じなかったないなんて」

なんて失態、と呟くと

「な〜に言ってるんですか。エルフは総じて戦士なのですよ? 気
配を消すくらい容易い」

それにしてもこの数、いくらなんでも風とリンクせずとも分かる筈
「全く、あなた達を見てるところこっちまでこっぴどくかしくなりますね
あの思い込んだら一直線のルクシヤナをあそこまでやきもきさせた
ことは驚嘆に値しますが、いい加減イライラしてきた所です。そこ
で告白するっていうもんだからこっぴどくやっつて気をまわして多くの人達
に事前通告を」

ラナが途中まで言いかけると、風が巻き起こり学生たちを下に振り
落とす。

皆、器用なもので壁や下の階の手すりを利用して綺麗に着地してい
た。

おお、感心していると後ろからルクシヤナが出てきた。
さっきの風は彼女が起こしたものだっただ。

するとどこからか拍手が聞こえてくる。パチパチ、と。

それは瞬く間に拡大しいつの間にか下の通りどころか隣や向かいのベランダからも。

気が付くともうなんかある種の祭りと化していた。

「ルクシャナ、君は一体ラナに何と言ったんだ？」

「き、今日告白するって。それだけ……」

「内密には言ってないのな」

「あ」

後のことをあまり考えない性格が災いしたようだ。

まあ、ここまでの事をする友人に内緒と言った所で効果はなさそうだが。

しかし、こんなに大々的に知られて大丈夫なのかね？

もう開き直るしかない、と後の事を考え始める。

下町のエルフがここまで好意的なのは嬉しいことだ。

評議会の方も何度も顔を合わせているしおそらく大丈夫だろう。

問題は人間とエルフが交わる事でその血が汚れる、という考えを持つ者達。

まだ、エルフたちの一般認識では魔王の種族は人間である。

穢^{けが}れ、不浄、忌、エルフにとって人間が象徴するもの。

人間の血が入ることは悪魔の血が入る事に近い、と忌み嫌う者もいるくらいだ。

存在は許せてもその先の共存は認められない。

魔王は認められても人間は認められない。

時間が解決してくれるまで待つか、それとも虚無を消し去る事を完遂する事でイメージを改善していくか。

ため息が出る……。

考え事の最中だったのだが不意に唇に感じる柔らかい感触と共に現実に引き戻された。

目の前には目を瞑つむったルクシャナの顔。

耳には拍手の音に加えて歓声や黄色い声。

そしてしばらくすると唇を離れた。

ノリが良すぎる。

もうこっちは羞恥で一杯一杯だというのにルクシャナは窓の下に居る人たちに手を振っている。

もう軽く豪華な結婚式気分なのか。

「ほら、ナツメ。折角お祝いしてくれてるんだから」

そう言っ僕にも一緒になって手を振れと言ってきた。

さっきまで小さくなっていたのに、何だこの身代わりの早さは、と感心通り越して呆れ返る。

眉間に手を当てため息をつくばかりだった。

無許可で大きな騒ぎを起こせば警察組織は必ず動く。

首都、アディールでもそれは例外なく当然、騒ぎの通報を受けたエルフの戦士がやって来る。

一時間もすると通りに集まっていた下町のエルフは散っていき、当然僕は戦士方から説教、そして始末書を書かされる羽目になった。なんて書けばいいんだ。

色恋沙汰が騒ぎの原因だなんて恥ずかし過ぎる。

頭を抱えながらカスパの取調室で始末書を書くのを騒ぎを聞きつけた議員のおばあちゃんが微笑ましく横から見ていたのはちょっとイラッと来た。

一応、騒ぎの原因となったラナとルクシャナ、その他学生は謹慎処分、僕は肉体労働系の仕事の割り当てが増やされた。

それからアリーが僕と口聞いてくれなくなりました。

まあ、原因なんて一目瞭然なただけでも。

こればかりは仕方ない。

ルクシャナが好きなのは初期からバレバレだったがさっさと好きと言ってしまったから横から人間なんかに搔つ攫われるのだ。

これを教訓に次は頑張っしてほしい。日本に居た時、振られた経験がある以上他人事とは思えなかった。

話を移すと、ルクシャナが大いなる意思（仮）の住まう森の調査隊の一員にねじ込まれた。

体力基準ギリギリだったらしい。

謹慎明けから出発までの間、北方の森にある訓練施設でしごかれるらしい。

一週間に一度はこっちに出向かなければならないが、何はともあれ仕事外の時間は

……これで一人、ゆっくりできる

一人と数匹で疲れを癒せることとなった。

この泥棒猫が！（後書き）

主人公、三角関係のもつれも特に無く横から搔っ攫う。

次回、大いなる意思とご対面。

活動休止（執筆活動ではない）（前書き）

原作前の最終回です。

少し長いかも。

あと、今回は半分ぐらい砂糖でできてます。

関係ありませんが縦書きって読み易いですね。

活動休止（執筆活動ではない）

大いなる意思（仮）の存在する領域は巨大要塞とも言える森と山脈によって守られている。

周囲をぐるりと険しい山脈の囲まれ、その外側には森。

これだけでも十分に自然の壁となり、越えるのは一苦勞で？ほとんど？人を寄せ付ける事は無いだろう。

しかしこの自然要塞、ほとんどどこか？絶対？中に人を入れない。このことについて少し語ろうと思う。

まずは森について。

『無色の森』

精霊がない森はエルフによってそう名付けられた。

自身の魔力運用以外で魔法が使えないことに由来する。

この森の深部に生えている木は迷い込んだ生物を食らう。

上空から通り過ぎようものならその領域の外側、山脈側から吹く強風によって押し返される。

低空飛行すれば、『動く木』の枝が伸びてきて引きずり込まれる。

『動く木』は日光を弱点とするので伸びてきた枝は朽ちてしまうのだが、向こうは捨て石とばかりに枝の弾丸を飛ばしてくる。

まるでこちらの動きを手取るかのように枝を飛ばしてくるのだ。

その弾幕は風で結界を作っておかないと防ぐのが厳しいほど。

よって風の精霊に直接干渉しながら強風を相殺しなければこの領域を飛んで越える事は不可能。

今のところ自分の足で走りぬけるのが一番効率がいい。

この森を抜けると山脈のふもとに出る。

森の外には少数ではあるが精霊が存在する。

しかし精霊は少なく、系統魔法程の威力を出すことも難しい。加えて山脈に生息するのはトカゲや蛇、それも毒をもつてたりやら大きかったりする。

また、森の近くに居ると夜は『動く木』が襲ってくる。

ここでも悠長に休んでいるとサクツとやられてしまう。

そこにあるだけで越える事が困難な壁に加えて、野生動物という兵士が見張っているのだ。

常人程度では超える事は不可能。

ちなみに森を焼き払おうとした人間の一部族は森と山脈の動物に食われて全滅したらしい。

そしてこのやりすぎとも言える空間は、大いなる意思（仮）が作った物。

本人？談。

人を寄せ付けないこの自然要塞は、虚無の魔法を使う一族を近づけない為だったらしい。

異世界からやってきたその一族に害意が有ったわけではない。

唯、自分たちに扱える魔法を使っただけ。

それが及ぼす弊害に気付かずに。

自分たちが殺される原因になるとも知らずに。

虚無の魔法とは精霊にとって生きるのに必要な『マナ』を消してし

まう悪法。

それを恐れた大いなる意思が虚無の一族の住む土地に風石を仕込み大地をひっくり返したのが一万年ほど前。

聞いた事ばかりで確証はないがおそらく本当のことなのだろう。存外に素直なのだ。

この星の中で一番強大で巨大な存在は。

そいつにこんな大がかりなもの作らせるなんて虚無はとんでもない力なのだろう。

恐いもの見たさが少しばかり湧きあがってくる。

駄目だと分かっているもそう感じてしまうのが人という者。

まあ、そこで踏みとどまるかは本人次第だが。

「半分過ぎましたー。がんばってー」

無色の森を移動中。

コボルトの超硬い杖で『動く切り株』のような奴を殴り飛ばしながら呼びかける。

その声に対し戦士達は短い返事で応える。

それぞれ、剣や弓で武装し『動く木』達を牽制しながら走っていた。彼らに守られるように走っている学者達は無言。

結構長い時間走っているせいだろう。

気温はそれほど高くないがかなりの量の汗で服が濡れている事が分かる。

「ルクシャナ、平気？」

彼女の頭上から襲いかかる小型『動く木』を蹴り飛ばしながら言った。

規則正しい呼吸を乱さないためか頷く事うなずで応えた。

聖地（仮）調査隊

もし大いなる意思（仮）が大いなる意思（真）であればそこはエルフにとつて聖地となる。

まあ、魔王が（仮）の眷族である事は一部隊員を除き知らされていない。

大いなる意思を騙る不屈き者め！ という事態を避けるため。

十人の戦士、四人の学者、一人の案内人で構成される隊は実力のみで選出されたためその思想までは統一されていない。

そして人間蔑視感情を持つエルフの方が隊には多かった。

・・・というかこの子、よく選ばれたな

選考に論文や筆記試験があったのだがきちんと通過している。

流石知識狂さすがと言っただらぶたれた。

約五時間、走り続けると森の境界に着いた。

ここから少し歩いた所に滝があり、予定ではそこに簡易キャンプを設営。

「一晩過ごすことになっている。
付近は『無色の森』とは違い薄暗いが、禍々しさはそれほど感じない。」

GYA O O O !

周囲は林で囲まれ、時々大型動物の鳴き声とか聞こえたりするが決して禍々しくない！

そう一人頭の中で呟きながらテントを張っていると普段からよく聞く声が聞こえた。

「あれだけ動いておきながら大したものだな。」

独特の堅苦しい口調でビダーシャルさんは言った。

彼は調査隊の隊長であり、学者枠の一人でもあった。何というエリート。

手には深底の鍋を持っている。

「まあ、取り柄と言えばこれくらいですし」

すると、ビダーシャルさんは鍋を横に置きテントの杭を打ち始めた。

「不思議なものだな。お前がこちらに来た時は一体どうなるかと思っていたがいつの間にか親族になるうとは」

「婚姻はまだですよ。というかあれほど攻撃してきたのに・・・僕にはそっちの方が不思議です」

あの告白騒動が彼とルクシヤナ母の耳に入った時はそれはもう凄ま

じかった。

炎や木の枝、洪水、土の槍。

それらが一斉に飛んで来たのだ。

屋敷は半壊、しばらくはルクシヤナ宅には行けなかった程。

「何、姉上にとってお前は可愛い一人娘をさらっていく悪い奴なんだ。それぐらい甘んじて受け入れろ」

あなたも攻撃参加しましたよね。

それにしても・・・

・・・子を思う親の気持ちか・・・

地球の家族はどうしているのだろうか。

僕の死体はきちんと上がって無駄に悲しみ続けるなんてことになっていなければいいけど。

いや、悲しむことが無駄なわけではなくその気持ちに折り合いをつけていてほしい。

「どうした？」

杭にテントの紐を結ぶ手が動いていなかった。

「何か気がかりな事があるなら早めに相談してくれ」

その言葉にはつと我に返る。余計な気を使わってしまったようだ。

「いえ、これは自分の事ですので」

自分の中で処理する、と。するとビダーシャルさんはため息をついた。

「ならば尚更だ。お前に何かあつてはあの子が悲しむだろう」

「どうしても駄目な時にはお願いします。どうせ終わってしまったことなんで。

ただ整理が付かないだけです。それに話すんでしたらルクシヤナに言いますよ」

「そうか、あの子もお前には気を許しているからな」

僕が言うと、フツと微笑を浮かべ杭を打つ作業を続けた。

一々気障つたらしい仕草のはずなのだが、気品があり不快さどころかその動作が絵になるような人である。

とりあえず、家族になる人なのでモゲロとは思わなかった。

「信用して下さいよ、何よりです」

「慎み深いと議員の方々からも評判だぞ。お前は」

それは慎み深いのは違うかと。

普段の行動からしてその感想はおそらくカスパの発着場で竜とばかり戯れているからだろう。

性格故なのか性癖なのか、

例えば、綺麗な女性が可愛い犬を連れて散歩しているとほぼ確実に犬の方に目が行く。

ああ、全然自重してませんよ。

むしろ理性の方は弱い方です。

そんなやり取りをしていると理性を崩す声が聞こえた。

「ナツメ〜、水浴びするからついてきて〜」

そしてニヤニヤするビダーシャルさんとその他隊員。一部は蔑むような眼をしている。

無関心な者は見向きもしない。

・・・他の人に頼んでよ

エルフの戦士、学者の中には女性もいるのだ。

態々（わざわざ）僕に頼むあたり嫌がらせに近いものを感じる。

「婚姻前だ、くれぐれも軽率な行動は控えるように」

ビダーシャルさんは微笑ましいものを見るように言い、その心使いがかえって羞恥心を刺激する。

僕はその場に居たたまれず逃げるように滝の方へ行った。

「他の人に頼んでよ！ おかげで酷い目にあった」

沢の大きな岩を背にしてその反対側では、エルフの少女が一人水浴びをしている。

普段ならば、ザー、という水が流れる音が彼女が体を洗う音をかき消してくれる。

しかし、風の精霊とリンクしている今、知覚能力が格段に向上しているのでその動きは手に取るように分かる。

キャンプの周囲を警戒するために仕方ないと自分に言い聞かせてい

た。

「いいじゃないの。恋人なんだし」

ルクシャナは何でもないように言った。

「もう少し恥じらいを持って下さい」

「お母様みたいな事言わないでよ。せつかくこんな遠くまで来てるのに」

文句を垂れる。

反抗期なのか、親離れしたい年頃なのか最近こんな事をよく言うようになった。

「それは明らかに君のお母さんが正しいだろ」

ルクシャナがオープンにしすぎなのだ。

将来が心配になってくる。

「ナツメまでお母様の味方するの？ 子供扱いして。最近そんな説教ばかり。もう二十七なのに……」

「まだ成人前でしょ。それに親にとっては子供はいつまでたっても子供って言うぐらいだしずっと言い続けると思うけどなあ」

エルフの成人三十三歳。

……あれ？

今、重大な事実気付いた。

僕今何歳だっけ？ この世界に来て十一年。

誕生日について突っ込まれなかったのですと放置されていた事だ。

・・・中の人、三十三

いつの間にか三十路越えていた。

そしてに某巨大掲示板で使われる称号、魔法使いを手に入れてしまった。

しかも実際に魔法と呼べる術を行使しているのだ。

・・・これで名実ともに『魔法使い』か

なんとという敗北感

恋人はいるのだが、まだ体が未発達なので手を出す気にはなれない。加えて自分もまだ幼い感じが抜けきらない。

精神が体に引っ張られているのか未だに子供っぽい気がするし。

それに対して、ぐおおおと頭を抱えていると

「何してるの？」

ルクシャナが岩から顔を出した。

濡れた長い金髪が色気を醸し出している。

一系まとわぬ姿であることが風の精霊を通して伝わってきた。

「服を着ろ。服を」

その言葉に彼女は、はっと胸のあたりを覆う。

「見た？」

「見ているのではない。感じているのだ」

あ、このセリフもつと違う所で使いたい。

「けだもの
獣」

ルクシャナは軽い軽蔑を含んだ声でそう言った。

「はいはい、男はみーんな獣ですね〜」

「そんな事言つて、襲わなくせに」

呟くようなセリフだったがよく聞こえた。

育つまで待っているのですよ、と心の中で呟く。

吐く息が白い、程ではないが少し肌寒いぐらいの空気が気持ちいい。
既に午後、日が傾き始めた頃。

山の方を眺める。

険しい岩肌や雪が積もっている様子が見えるが、獰猛なモンスター
がいるとはとても思えないほど綺麗な景色だった。

感嘆の息が漏れる。

「ねえ、心配？」

ルクシャナは唐突に聞いてきた。

「何が？」

「先のこと」

大いなる意思（仮）が認められ大いなる意思（真）となった後のこと。

聖地の門は既に機能を失っている今、次にする事は始祖の残した秘宝の破壊。

「ん、一応半分は算段付いてる」

アルビオンは楽勝。拒否されても宝物庫の場所はきちんと把握している。

ロマリアはヴィットリーオが持っているだろう。
トリステイン、ガリアは時間かかりそう。

「違う。そのことじゃなくてあなたの体の事よ。言ってたじゃない、大いなる意思が自分の寿命を決定できるって」

大いなる意思の眷族。しかも制作から奴が関わっている。

安全装置のつもりだろうが、この体の支配権は向こうにあるようなものだ。

しかし、曲がりなりにも向こうは神に近い存在。

個々人の事などどうでもいい、大雑把な性質だから頼めば寿命ぐらいどうにでもなると思う。

そう言う訳で、それほど心配してはいなかったのだが、

「もし事が済んであなたが死ぬようなことがあったら私、神様だろうと許せそうにないわ」

若干の怒気を含んだ言葉に、胸が締め付けられる。

こんなに心配されている事が今までにあっただろうか。

あつたとしても言葉にしたのは彼女が最初である。

「何かエルフラしからぬ発言だよ？」

地上に住む者であれば受け入れなければならない。

大いなる意思の思し召しであるとして。

常ならばそういうものであるのだが。

「だって！ 造っておいて要らなくなったら殺すなんておかしいじゃない！」

大いなる意思は世界の調和、生命を尊重する存在じゃないの？」

ルクシヤナは声を荒げて言った。

「前者はちゃんと考えてるけど、後者はどうだろうね。」

向こうは神様みたいなものだけど、一つ一つの命に気を配れるほど万能な存在じゃないよ。

それに存在が莫迦まがみたいに大きいけど、思考は子供じみてるし」

喜哀楽。大いなる意思には怒が欠落しているような印象を受けた。

虚無を恐れ、虚無にやられたから大地をひっくり返すことでやり返す。

普通に生き物しているのだ。

「きっと他に対等な奴がないから、助けが必要無いぐらい超越し過ぎているから長い時間生きてても変われないんだらうよ」

人が与えてもらう存在ではあっても、その逆、人から大いなる意思に与えることができるものはせいぜい信仰という名の気持ちぐらいの物。

少なくとも人型の種族に、大いなる意思と対等になれる者はいない。究極的、超絶的存在。

信仰の対象にはなっても庇護の対象にはならない。庇護が必要だとしても気付くことができない。

「虚無に本当に害があるかなんて知らないけど、あれだけの存在が怖れてるんだ。普通じゃない」

きつと虚無による被害は大きなものだったのだろう。

今でこそ伝説となっているが、その系統の担い手がたくさんいた時代では体の一部を失う所だったと言っていた。

星全体、到る所に存在する精霊を人間の五体、『四肢+頭部』で表現したとする。

その一部消えてしまうとは世界にどれほどの影響を及ぼすのか想像し難い。^{がた}

「あんまり、大いなる意思を責めたらいかんよ。それこそ機嫌を損ねたら僕の体が活動停止なんて事になりかねないし」

「他人事みたいに言わないで！」

岩越しに両腕を抱いているのがわかる。

「私は、怖い」

何がとは言わない。それが余計に彼女が恐れている事を感じさせる。

「体、冷やすよ。そろそろあがつたら？」

「茶化さないで」

ルクシヤナは真剣な声で言うと、水から上がりそのまま僕の真正面に仁王立ちした。
とりあえずタオルをかぶせる。

「逆に考えてみてよ。僕がこっちに来れたのは大いなる意思が連れて来たからでしょ？」

立ちくらみがして、海に落ちて気を失って……。
しかし考えてみるとどうもおかしい。

日本に居たころも健康極まりない体だったのだ。
別に炎天下ではなかったのだ。

立ちくらみするような弱い体質ではないしそんな要因も無いのに、
？そう？なった。

作為的なものを感じる。
もう気にしていないけど。

「そうじゃなければこんなに感動する事なんてなかっただろうし」
ルクシヤナの頭を拭きながら続けて言う。

「ルクシヤナにも会えなかった」

ほら、こう考えるといいことばかり。

「恥ずかしい事言っな」

服を着ながら恥ずかしそうに言う彼女からは憤みなんてものを微塵も感じなかった。

ルクシヤの頬は夕焼けの赤で染まり、本当は違うのに照れているよ

うな印象を受ける。
微笑ましくなりつい抱きしめたくなった。

「あゝもう、可愛いなあもう」

「何か手付きが猫を触る時みたい・・・って私は猫か？ 恋人をペ
ット扱い？」

髪を撫でる手をつねられた。 実際猫みたいである。

「いや、ごめんごめん。心配してくれてありがとう、大丈夫だから。
大いなる意思って結構大らかなんだぜ。寿命ぐらいどうにかなるっ
て」

そう言って、きゅっと抱きしめると小さく、大人しくなった。

「そんな風に空元気で言われても説得力無いわ」

「良く分かったね」

お前はエスパーか？

「しょっちゅう見てればそのぐらいのこと、分かるわよ」

プチストーカー！？ いや、別に実害ある訳では無いしいいか。
照れ臭いことこの上ないが。

「死んだら駄目よ」

・・・駄目

嫌とかそういう感情論ではなく、そうしろという命令に近い。何だか可笑しくなってしまう、クックと小さく笑ってしまった。

「今の笑う要素あった？」

ルクシャナは首をかしげながら言った。

「人間もエルフも根っこの所は大差無いなって」

他者に向けられる愛。

まあ愛と言ってもいろいろあるが、ここは肉体的愛^{エロス}、男女間の愛だけだ。

それに、エルフだって嫉妬する。

全体の傾向は小さいが男女間のそれは人間とほとんど変わらない。

「大丈夫。死ぬなんてこと微塵も考えちゃいないよ。もっと生きてい。

まだこの世界を見足りない。それに皆がいるから頑張れる。」

「皆っ。」

上目づかいで彼女が見上げる形になる。その仕草に少しドキッとした。

「はいはい、皆とルクシャナがいてくれるから頑張れます」

「ん、よろしい」

満足そうにそう言うと彼女は体を離れた。

「あーお腹空いた」

伸びをしながら笑顔で言う。

夕焼けを背にした彼女はとても綺麗でしばらく見惚れてしまった。

「ナツメ？」

普通にしているも綺麗な髪が夕陽の光で淡く輝き、手の届かない幻想的なものを思い起こさせる。

気が付くと彼女の手をとっていた。

「どうかした？」

「あ、ああ、ごめん」

・・・何だ？ 今の

物凄く大きな喪失感が体中を巡り、言いようのない恐怖を感じた。

目の前で首を傾げる少女が居なくなることを想像しただけで途轍もない悲しさが胸を締め付けた。

心臓がドキドキして、呼吸が早くなり嫌な汗が出てくる。

今にも死んでしまいそうな気分だった。

・・・依存してるのか

不意に頭に手が乗せられ、優しく撫でられた。

泣いた子供をあやすかのように。

次第に平常心を取り戻すと、恥ずかしくなってきた。

「あ、顔赤い。これってナデポって言うのよね」

悪戯っぽく笑う仕草にますます顔が紅潮していくのがわかった。

「キャンプ、戻ろうか」

無言で黙っている僕の手を引いてルクシヤナは歩き出した。

ちなみにこの後、時間がかかり過ぎていたから「事後か!？」と言われた。

案外呆気なく、一度もモンスターと遭遇することも無いまま山越えは終了した。

エルフの面々も領域の内側の景色は圧巻だったらしく、感嘆の声を漏らしていた。

霧の海の上に浮かぶ何百もの陸地、感じ取れる精霊の量。

ここからは風石の魔道具を使って飛んで行くことになる。

エルフ達は各々の指輪や腕輪につけられた風石を発動させると浮遊していく。

どうやらエルフ連中は歓迎されていないようで巨大な怪鳥が襲い掛かってきた。

エルフの戦士は瞬時に精霊と契約し、呪文を唱える。

すると次の瞬間、埋まっている岩や、風の刃、空気中の水分が集まり氷の槍を形作り怪鳥に殺到した。

・・・ご愁傷様

よく考えると、この人達、エルフの戦士の中でもトップクラスの戦闘力の持ち主ばかり。

人間のメイジ二丁三百人ぐらいたったらどうにでもなりそうだと、崩れ落ちて行く怪鳥を見ながら思った。

エルフは上空だと精霊と契約し辛いとのことで低空飛行で斜面を下りて行った。

大いなる意思（仮）の居る泉は変わりなく淡い光を湛^たえていた。

《おお、もう来たか》

突然頭の中に響く声。

それに困惑して戸惑うエルフ達。

僕はというと二回目の訪問にもかかわらず既にこの感覚に慣れきっていた。

前回のように木の幹が顔になっていてという事はなく泉の中央に人の頭ほどの光の玉が浮かんでいた。

《それにしても早かったのう。わしらもっと待つかと思った》

それにしてもエルフたちの中ではこの言葉はどう変換されているのだろうか。

《ヒトがいっぱい、こんなに近い》

この存在は自分の意思をテレパシーのような能力で伝えている。そしてその意思は相手の言語中枢、つまり相手の語彙と印象に応じて変換される。

つまり極端な事を言えば、人によっては赤ちゃん言葉だったり、よぼよぼのおじいちゃん言葉のように聞こえたりするのだ。

《ふーむふむ、虚無の聖地は壊したか。いや、ご苦労ご苦労。約束通り、風石仕込むのはもう止めるかの》

ようやく一息つける、と安心する。

「どうやらこの、頭の中に直接意思を伝える、という事が効いたらしく、とりあえず、あなたがどういふ存在であるか彼らに説明願えますか？」

僕は大いなる意思に頼んでみた。

《あんたが説明すれば済むことだろう。わしらがすることではない》
返答は予想していた通りのものだった。

全く以て僕の説明だけじゃ済まない。

説得力が違うのだ。
代弁者が語るより本人が語る方が真実味が増すのは当然のことである。

こちらの意図は分かっている筈であるのにそれをしない。

「そうした方がエルフの協力を得られ易いんですから、さっさとやっちゃって下さい」

その様子を見守るエルフ達。
自分たちの信奉する神を前に萎縮してしまっているのだろう。
ルクシヤナは珍しいことに、大人しい。

《ふーむふむ。分かった》

人のように自尊心のようなものを持っていないだけあって素直である。

すると泉の中央の光る球は分裂してそれぞれのエルフの前に飛んで行った。

それに驚いたのかたじろぐ隊員たち。

「害はありませんので安心して下さい」

敵意がない事を伝えると、平常を取り戻して大いなる意思の『意思』に集中し始めた。

《さて、あなたにも言っとく事がある》

抑揚のない声が頭の中に響く。

「まだ何かあるんですか？」

《むづづ、非常に言いにくいのだが風石がの、ちょっと仕込み過ぎてそろそろひっくり返りそうなんじゃ、その、地面が》

ああ、秘宝破壊でさえ難しく面倒極まりないのによりによって風石を仕込み過ぎたと？

《おおつ、あなたの嘆きが伝わってくる。やめてくれい。わしら反省しておる》

どうやらこいつも負の感情は苦手らしい。

「で、いつ頃ひっくり返るんですか？」

《もう既に一部では浮き始めておる》

嗚呼、神よ！

《だから、やめてわしらも苦しいから》

・・・僕だつて嫌だよ

「何か手だては無いんですか？」

《風石を掘り出すか分解できれば良いのだがの、それにはヒトの使う魔法の力が・・・》

・・・無理だな。というかアンタはできないのかよ

風石の鉱脈は地下千メートル前後の深さから発達している。

魔法があるのだ。

地下千メートルより深く掘る採掘技術、恐らくあるにはあるのだろう。しかし、？それ？が使われていることは聞かない。

風石の採掘が国家事業になっているであろうアルビオン以外は。

また穴掘りなんて下賤な作業などに始祖から賜った尊い魔法を使うなど、なのだろうか。

それに人間がやらないとして、エルフが出向こうにもそんな事受け入れる筈がない。

《生憎とわしらは創り出すだけでそれを使う事はできん。あんたの見解からするとわしらの考えたことは駄目。どうしようかね？》

大いなる意思是悪びれる様子もなく心を読み、言った。

害意がない分、余計に性質たぶが悪い。

ある意味この状況は人間とエルフ両方を人質に取られた事と同義だ。大陸が蜂起して人間が新天地へとサハラへ出て行こうとすればエルフと衝突するだろう。

秘宝破壊どころではなくなる。

・・・風石か

精霊石は、エルフも高位の使い手であれば作ることができる。

対象の精霊から力を引き出し強力な結界によって封じ込める。

この結界は精霊からの干渉を受け付けず、魔力を伴った方法で干渉出来る。

・・・干渉できないんだよなあ

僕の場合、交感能力と精霊を通して『力』に干渉している。

結界を破ることができないのだ。

策が浮かばず大きなため息をついていると

《いやいや、おまえさん。何を勘違いしておるのだ。あんたは精霊石を分解できるよ》

………来た！ これでかつる！

精霊石を使えば精気の節約ができて高出力の風が起こせる。

……もはや無敵

しかし、

《分解はできてモ力は使えんよ》

「ぬか喜びかよ畜生！」

分解はできてモ内包された力は使えないらしい。

僕は全力で地団太を踏んだ。足もとの岩が砕けて飛び散る。

「で、どうやると分解できるんですか？」

《泉の中に入って来てみい。言葉にするより分かり易い》

「また変な機能付かないでしょうね？」

精霊の愚痴聞きなんて機能、本当に邪魔でしかない。

《もう付けんよ。多分》

そして、泉の中に入って行くと何かが体内に侵入してくる感覚に襲われる。

うげえ、という気持ち悪い感触に加えて新たな能力を理解する。

《そのままいつものように風を使うように》

それで風石が分解できるらしい。

《どれ、試しに一つやってみい》

僕は泉の中に手を突っ込み小さめの風石を手にとった。

流星は大いなる意思の住まう泉。

泉の砂利は全て精霊石で水底は独特の輝きを放っている。

手のひらに乗った風石は指で小突くと光を放ち浮かび上がった。

それに対して同調しようと解放するイメージで念じてみる。

するとそのキラキラと輝く透明な結晶は音も立てずにはじけ、そよ風が吹いた。

《そう、それ。それがあんたの能力》

「でも今度は精霊に干渉できないんですけど」

風石がはじけた後その風を制御しようとするすると精霊が動いてくれなかった。

《あつるえく？ どうなんじゃろ？ わしらにもわからん》

そうしている内に大いなる意思（分身体）による説明が終わり、エルフたちがこちらを見ている事に気付いた。

僕が振り向くとルクシヤナとビダーシャルさんを除いた全員が膝をついてひれ伏している。

今、僕はきつとおかしな表情で固まっているだろう。

ルクシヤナはルクシヤナでおたおたしてどうするべきか、と困惑し

ていた。

「ラスール使徒よ」

大いなる意思よ、お前は彼らに何を吹きこんだ。僕は水辺に上がるとひれ伏した人達に言った。

「あんたら馬鹿か」

使徒とか聖者とかそれは『容れ物』がそうであって中身は唯の人間である。

《小さき者たちよ、この者に協力して世界に調和を取り戻すのだ》

アンタさつきと全然違うじゃねえか！ 僕の時とはぼけた振りしやがって。

というか変換はどうした？ お前が伝えられるのは意思だけじゃなかったのか？

「使徒様、我々が働いたこれまでのご無礼、心からお詫び申し上げます」

僕を蛮人と罵っていた学者エルフがそう言った。

「いや、中身は人間ですからね？ 使徒なのは体そとがわだけですからね？」

「いえ、その魂も大いなる意思によって選別された者、そしてあるうことが人間とエルフだけでなく地上の生命全てに対して慈しみを抱いてらっしゃる。まさに聖人」

大いなる意思よ、本当にお前は何を吹き込んだ。

《別に嘘はいつとらん。言葉が通じれば争う事は愚かである、無^{アガ}条件^ベ愛を注げ、憎まれても理解されなくとも助け続けよ。わしらはあんたの言葉を代弁しただけにすぎん》

「後ろの二つは僕の考えじゃなくて唯の知識だ」

殆ど記憶の奥底に埋まってしまつて、今聞いて思い出したのに。

人の中からそんなものを引っ張り出すとは。

とりあえず、ため息しか出ない。

これで下手な事言えなくなつてしまつた。

「立つて下さい」

僕はひれ伏したエルフにそう促す。

「とりあえず使徒^{ラズール}つて呼ぶの禁止。後、聖人も。今まで通り接して下さい」

急に態度を変えられると気持ち悪い。

「大体、こんな奴ちよつと力があるだけで思考は全然神様じゃありませんよ？ 全知全能であるわけでもない。

そんな奴の部下なんですから別にかしこまる必要もありません。唯、これからの出来事に協力してほしいだけなんですから」

浮かんでる光の玉を指差しながら言った。

《酷い言い様》

どうやら僕にしか聞こえていないようでエルフたちに反応は無かった。

「僕は唯の人。それ未満はあってもそれ以上はありません」

そう言いきるとひれ伏していない少女、ルクシャナは声を上げて笑いだした。

「あつははははは！ 本当、ナツメつて可笑しいわ。？大いなる意思？の眷族だっていうのに謙虚通り越して卑屈過ぎよ！」

腹を抱えて倒れた。

今の、そんなにツボだったのか。

「ほら、彼女ぐらいで丁度いいんですよ」

ルクシャナを指差して言うと、次第にその堅苦しい態度も崩れて行った。

「それでも今までの態度は謝罪せねばなるまい。我々は本当の意味で仲間となったのだから」

学者エルフは立ち上がるとそう言った。

僕を快く思っていないかった人達もいくらか態度が柔らかいものになっていた。

「まあそれはさておき、ちょっと問題が発生してまして……」

「

事務的な口調で話題を変える。

「ハルケギニアの風石が既に飽和状態になっているようです。大いなる意思が加減間違えたみたいで」

「なんだと!? 大いなる意思が間違いを?」

戦士の一人が言った。
突っ込むところが違うだろう。

「ハルケギニアがこの地域みたいな状態に陥るってことですよ。それも一斉に」

たくさんの陸地が浮上する。

またそれは一つの塊として浮上するわけではなく、まるで畑を耕すかのように小さく分割されて浮くのだ。
その戦士は首をかしげて言った。

「問題ないのでは?」

「ハルケギニアが駄目になったらサハラに来るでしょうが! そしたら戦争ですよ? ああ、考えたくも無い」

おそらく疲弊した人間たちではエルフの相手にはならないだろう。
だがその場合エルフによる一方的な虐殺となる。

エルフは人間を蛮人と罵ってはいるものの殺すとするとやはりいい気持ちはしない。

「人間もこの世界の『力』を循環させている種族、エルフよりその規模は小さいですが。」

大いなる意思の脅威となっているのはエルフが悪魔の力と呼んでいる魔法、虚無です。

人間ではありません」

その発言に一同はざわめき始める。

「人間にも役割があったとは……」

「やはり敵は悪魔シャイターンの担い手」

すると、ビダーシャルさんはおもむろに切り出してきた。

「それで、解決策は？」

ルクシャナもお手上げとばかりにため息交じりで言った。

「地面が持ち上がるってときに人間が穴掘りに勤いそしむとは思えないわ。それに、エルフがやろうにも受け入れないでしょう？」

「僕も風は扱えても地中の風石に関しては門外漢なのでさっぱりです」

すると泉の方から光の球がふわふわと飛んできた。

《小さき者たちよ》

急に頭の中に声が響くものだから全員の視線が一斉に集まる。

《お前たちを脅かすような災厄の原因を作ってしまったって済まない。この件に関しては我らと我らの眷族によって何とかしよう》

おお、と感に堪えないといった風に喜びの声や、神よ、といった崇める声が聞こえた。

ちよつと待つてほしい。我らと我らの眷族？ 私の事わたくしでしょうか？
頭を抱えそうになっていると僕の前まへにルクシャナが出て行った。

「大いなる意思よ、お待ち下さい！」

私は気が付くとナツメと大いなる意思の間に割って入っていた。

「ルクシャナ！ 何を、」

叔父が叫ぶのも気にせず、目の前の光を睨みつける。

エルフでありながら同族から異端と後ろ指差されるかもしれない、
という事などどうでも良かった。

それでも神に逆らっているという事は事実。
足がガタガタと震えているのがわかる。

《小さき者よ、申してみよ》

「あなたは眷族を、彼をどうするおつもりなのですか？」

恐らく私の顔は今にも泣きそうなほど歪んでいるだろう。
声もどこがおかしく裏返ってしまった。

《何、少しの間、こ奴と同調して風石を分解するだけだ。案ずるな
お前からこれを取り上げたりはせん》

その言葉に張りつめていた物が解け、ほっと胸をなでおろした。それに対して一行の表情も和らぐ。なーんだそれだけか、と。

・・・よかった

しかし、ナツメの表情は強張ったままだった。

「少しの間って、具体的にどのくらいですか？ 何年ですか？」

耳を疑った。？少しの間？と言ったのに、彼の質問は「何年束縛されるのか」。

「ナツメ、何を、言ってるの？」

彼が私の質問に答える前に大いなる意思は言った。

《お前たちの尺度で言って十年程度だろうか》

.....

私にとっては神に逆らう事よりも怖ろしい事。

運命は彼をどれほど切り刻めば気が済むのか。今までもう充分傷ついたではないか。

彼は確かにこれまでにたくさんの命を奪ってきたがそれ以上に多くを救おうと働いてきたではないか。

それでもまだ扱き使い続けるというのか。

・・・嫌

胸がバクバクと音が聞こえるほど強く鳴り、体が震えている。目の奥から熱いものがこみ上げて来てあふれ出た。

「あなたは悪魔よ。少なくとも私にとっては」

神に対してありえない言葉を吐いていた。

後ろで調査隊の面々が騒ぎだしたのなんて気にならなかった。

「神様のくせに！ 自分のしたことぐらい自分で片付けなさいよっ。

私たちを巻き込まないで！」

感情にまかせて声を張り上げた。

「自分より遥かに弱い者にすぎるなんて、生き物として恥ずかしくないの!？」

息が荒い。胸が苦しい。体の中で黒く渦巻く物が止まらない。

そして、再び思いつく限りの呪詛を吐こうとする。

ふと、後ろから優しく暖かい感触が伝わってきた。

「はいはい、悪口禁止」

ナツメが私の後ろから手を回してきたのだった。

気の抜けたような声が耳元で囁かれると共にギュッと抱きすくめられたのが分かるのだが、彼の息遣いや体温が今はかえって余計に胸を締め付ける。

行き場のなくなつた感情は僅かに残された理性という壁を突き破り一斉に出て行ってしまう。

声を上げて泣いた。

一度決壊してしまった感情という名の湖は中に溜まっている水を全て流しきるまで止まらない。

声が出なくなるほど泣いた後でも涙は止まることなく流れ続けた。

胸の前で回された腕の締め付けが強くなる。

同じ気持ちなのだろうか、ナツメの息遣いからもその辛さが感じ取れた。

動けないほど強く抱きしめられてどれほど経っただろうか、声が出なくなつた所で彼は私と向き直つた。

「ひっでえ顔」

クスツと笑いながらハンカチで私の涙を拭う。

言いたい事があるのに出てくるのは嗚咽のみで言葉にならない。

もつと一緒に居たい。

恋人になつてから訓練ばかりでまだデートもしていない。

していたとしても絶対物足りない。

彼が与えてくれる全てが欲しい。

私が与えられる全てを受け取つて欲しい。

「ほら、別に今生の別れってわけじゃないんだから泣かないの。エルフなんだから十年ぐらいどうってことないでしょ？」

・・・そんな事無い！

ナツメは大いなる意思に従うつもりなのか。

ようやく声が出るようになった私は

「あれだけ辛い目に遭って、また一人ぼっちなんて悲しいだけじゃない」

「一人じゃない。一人なんかで生きていける筈がない」

彼の背中に手を回し抱きしめる。

するとポンポンと彼が私の背中をたたく感触が伝わってきた。まるで泣いている子供をあやすかのように優しく。

「臭い事言うようだけどさ、僕はルクシヤナを守りたい。好きだから。それに戦争になったら少ないけど君が戦う可能性も出てくる」

胸がいつぱいになる言葉だった。

「普段はそんな甘い言葉、言わないのに」

「偶に言うからこそ、言葉に重みが出る」

「そんなうんちく要らないから傍で守りなさい」

「時には離れた方が分かることもあるよ?」

いつものやり取りになってきた。

「大いなる意思があなたみたいなのもう一人作ればいいじゃない」

「アイツができるのは器を造るところまで。成熟した魂までは作れない。」

それに成長まで待つてたら手遅れになりかねない」

「異世界から引っ張ってくるのは？」

酷い事を言っているのは分かるがそれでも口に出てしまつ。

「無関係な奴を巻き込むほど腐りたくない」

どう転んでも選択肢は一つなのか、彼は唯優しく私の髪を撫でるだけだった。

どうやら今回は私が折れるまで終わらないようだ。いつもは彼が折れるのに。

「あなたはそれでいいの？」

するとため息をつきながら言った。

「良いわけない。唯一番被害が少ないのがこれだから。僕にも皆にも」

「被害が少ないって十年も犠牲にして？」

「その十年でどれほどの命が助かる。その十年を普通に生きたとしてどれほどの命を見殺しにすることになる。見殺しにしたらその後の人生ずっと悩み続けるじゃないか。それこそ最大の不幸だ」

「え？」

私の好意が独りよがりな物だと気付かされてしまった。

唯私が彼と一緒に居ただけで、私は彼のことをちつとも考えていなかった。

ナツメ自身が人に優しくいくせに、それを偽善と切り捨てる理由が分かった気がする。

人によって、善の感じ方など違う事など言つまでも無く知っているはずなのに今ここで思い知らされた。

「ごめんなさい………。私、勝手過ぎたね。あなたの事良く考えてなかった」

反省したつもりだったのに彼からの返答は意外なものだった。

「今更何を言つてんの。僕も人の事言えたもんじゃないけど、いつもそんな感じじゃないの」

こんな時までふざけなくてもいいじゃない……。
ナツメは笑いながらも真剣な声で言った。

「愛してほしい。いつもの通り、君のやり方で。それが噛み合わないのなら気付いた時に話し合えばいい」

本当にドキツとする一言。

しかしその後の言葉がそれを台無しにした。

「大体、君のわがママが嫌なら好きになんてならんよ。それともあれか？ 見た目で選んだだとも思った？ 生憎あいにくと僕の好みの女の子は黒髪で素朴な感じのする大人しめの子だから。間違つても君みたいな頭より体が先に動くタイプじゃない！」

それを一息で言い終わると、私の頭に手を置く。

「もうこれだけ言えば分かるでしょ？ この気持ちは理屈じゃない。正直こんな面倒な感情抱くとは思わなかったよ」

顔をが赤いのかそっぽを向いた。

一瞬でも疑ってしまった自分が嫌になると同時に目の前の男の子がとても愛おしく感じられた。

私はその恥ずかしがり屋の頬に両手を添え、無理矢理こっちを向かせる。

見慣れた白髪と宝石のような紅い眼、加えて今は羞恥で頬は赤く染まっている。

「本当、可笑しい。あなたって本当可笑しな人ね。エルフでもそんな恥ずかしい事言う人、ほとんどいないわよ」

グイツと彼の顔を自分の顔に引き寄せ、まだ数えるほどしかしていないキスをする。

もう周りの人たちが見ている事なんて今更だった。

そして唇を離すと切なさがこみ上げてくる。

相変わらず呆気にとられている彼の顔を自分の心に刻みつけながら私は言った。

「今はこれで満足しておくわ。このへたれめ」

そう言っただけで彼から離れる。

いつもの突っ込みは返ってこない。

「ああ、行ってきます。帰って来て浮気してたらシヨックかも」

「行ってらっしゃい。あら、知らなかったの？ 私って結構一途な

のよ？」

そう言い合うとナツメはゆっくりと泉に足を踏み入れて行った。泉の中央に近づくとつれて深くなっているようでナツメの腰辺りまで水につかった所で水面が淡く光り出した。すると、彼の体が泉から持ちあがる。意識がないのかまるで操り人形のように首を垂れていた。

そして泉の上空から強風がなだれ込み彼を周囲から中心に渦巻いていく。触れれば切れてしまいそうなほどのその風は彼を傷つけることも、下の泉を波立たせることもしなかった。唯、彼を中心に収束していく。

風石が形成されているのだ。

私はその過程から目を離すことができなかった。大切な者が封じ込められる様は残酷なほど美しく、酷く神秘的だった。言葉にならない感情が押し寄せてくる。憎いのか、悲しいのか、涙は出なかったが少なくとも良い物ではない。

しばらくすると泉の数メートル上にエルフが何人がかりでも作れそうにないほど巨大な風石が出来上がる。

その透明な石は光を湛えながら静かに浮いていた。

活動休止（執筆活動ではない）（後書き）

とりあえず一段落。

作者にとっては砂糖三キロ分ぐらいの甘さ。

これで一気に原作時期まで飛ばします。

この後どうしましょうかね。

誰かに召喚させるか。

させるとして誰にするか。

ルイズなどの原作キャラか一発限りのオリキャラにするか。

サイトの扱いをどうするか。

召喚されなかった場合

普通に秘宝破壊、はありきたりか。

いつそのまま平行世界、正史にぶっ飛ばすとか。

まあ、そんな事したら主人公絶望して本当に魔王になりそう。

さて、キングクリムゾンするか。

今更な本編（原作時期）（前書き）

ささくれ立った心に、マザー・テレサの言葉。
じんわりと染みてくる。

才人が名乗っていない事に違和感、修正。 9月21日

今更な本編（原作時期）

才人は目の前の『物』に心奪われていた。

半透明の石がふわふわと揺れ動きながら浮いている。

それは淡い緑色を基調とした様々な色の光を放っていた。

大きさは十メートル、校舎三階程だろうか。

上下は鋭角、やや尖った細長い形状をしたその表面はカットされ磨かれたかのように不自然な光沢を持っている。

石は陽光を透過、反射して草原にキラキラと模様を作っていた。

空は都会の薄く濁った色とは比べ物にならないほど濃く、そして蒼い。

その蒼いキャンパスの上には真つ白な雲が流れている。

そして豊かな生命を強くイメージさせる緑色。

草原と空と雲。

それだけで強く心に響く物がある。

その中に優しく光を放つ水晶石が一つ。

優しく頬を撫でる風と気持ちの良い暖かさを感じさせる太陽が、そのコントラストを更に強調していた。

「……………すげえ」

その神秘的な光景に無意識の中、声が漏れる。

自分の中の感動という名の杭を地面に打ち付けられ、座り込んだまま動くことができずにいた。

酷く非現実的な光景である。

それでも視界から取り込まれる情報はどこまでもリアルなものだった。

さっきまで東京の街を歩いていたのに。

重厚なコンクリート作りの街を歩いていたというのに。

ノートパソコンを修理して電車に乗り、駅から家に帰る途中だったというのに。

目の前に現れた光る鏡を通ったと思ったならいきなりファンタジーだった。

光る鏡が出て来た時は驚いたが、こっちはインパクトが違った。

鏡をくぐる時に感じた激しい後悔など頭の隅に行ってしまう程に。

彼の好奇心は完全に目の前の水晶に向かい、今日の晩御飯の事やパソコンを修理してようやくできるようになったインターネットの事など毛ほども考えちゃいなかった。

ただ、目の前の不思議な石が自分の心を鷲掴みして離さない。

「すげえ……」

一体目の前の『物』は何なのか。

再び眩きながら立ち上がり、その物体を調べようとすると、かろくトリップしていた意識が正気に戻された。

「ちょっと、どきなさいよ」

幼さの感じる高い声が耳に留まる。

は？ と後ろを振り向くとそこには背の低い女の子。

「どいてくれないかしら？ 全く、どこから紛れ込んだのよ・・・」

その高圧的な態度、声色に一瞬ムツとする。

こつちが聞きてえよ、と思いつながら少女を観察するのだが彼女の容姿を確認するや否や、少し見惚れてしまった。

可愛い。

透き通るような白い肌、丸く大きな目と高めの鼻。

そして桃色のかかったブロンド。

ん？ 桃色？

いや、目の前の巨大水晶に比べたら些細なことか。

可愛い外人の女の子だ。

「待ちなさい！ ミス・ヴァリエール」

そんな事が頭の中に浮かんでいる中、今度は男の声がした。

ん？

黒いローブと大きな木の杖、頭が寂しい。

声の主である男の恰好は魔法使つぽいものを強く連想させた。

良く見ると男の後ろでは、今呼ばれた少女と同じような格好をした
少年少女がいるではないか。

制服の上にマント、そしてその手には棒のようなもの。

冗談だろうと思ったのだが、どうも場の空気がおかしいし横には巨大な物体が浮いている。

？浮いている？のだ。
その物体を吊っているワイヤーなんか見当たらないし、下には台も無い。

「『サモン・サーヴァント』はパートナーにふさわしい『生物』を呼びだす魔法だ。君が契約しようとしているのは無機物じゃないか。おそらく、呼び出されたのは彼だろう」

魔法！？

黒いローブの男は確かに『魔法』と言った。

新手の宗教だろうか。

怖くなってきたがとりあえず様子を見ないことには自分の置かれた状況が掴めない。

しばらく様子を見る事にした。

「それはおかしいと思います、ミスタ・コルベール。現れた物が属性を決定するならこの巨大な風石、『風』が私の属性となるのはないでしょうか？」

少女は少しムキになって反論した。

「それに？この風石の中？にいるモノは明らかに生物です！」

少女が風石と呼ばれた巨大な石を指差した。

え、中？

才人は良く目を凝らしてその風石を覗き込んだ。

「うわっ！」

なんだなんだ、一体これは何なんだ？

その中にはえらく髪の毛の長いヒトが入っていたのだ。

首と前髪が垂れていて顔は分からなかったが確かにヒトだった。手と足が二本ずつ、そして頭が付いている。

「貞」

その髪が黒いかどうかは分からなかったが、自分に与えられた印象はほとんど恐怖、好奇心ちよっぴりだった。

「しかし、中の？それ？が生きているとは到底思えない。風石とは先住の力を封じ込めた結晶体だ。確かにその中に生物が閉じ込められる例もある。だが発見された物は全て化石、つまり死んでいるのだよ。これでは『コントラクト・サーヴァント』が成功するはずもない。さ、彼と契約を」

才人が一人で驚いているのを尻目に少女と男はやり取りを続行する。

「もう一度召喚させて下さい！」

少女は懸命に懇願するのだが、

「それは認められない。春の使い魔召喚は神聖なものだ。君が納得いかなかったとしても、彼を使い魔にするしかない」

バツサリと切り捨てられる。

すると今まで黙っていた少年少女が一齐に噓はし立て出した。

「ゼロには平民がお似合いよー！」

それを皮切りに

「全く、びっくりしたぜ。ゼロが凄い物呼びだしたと勘違いしちゃった」

「ルイズ、石なんてどうやって呼び出せるの？ 教えてくれない？」

「でも売ればひと財産だぜ。中に亜人が閉じ込められた風石なんて聞いたことも無い」

「売れなきゃ置き場所に困るだけだけどな！」

次々と騒ぎだした。

それらは総じて嘲笑だった。

明らかに悪意を感じ取れる言葉に少女は肩を震わせる。

なんかムカつく奴らだ。

よってたかって一人の女の子をいじめるなんて。

才人は周囲の連中に嫌悪感を感じていたが、それと同時に自分の置かれた立場が危ない物であることに感じてしまった。

使い魔ってあれだよな。魔法使いの下僕的な動物、魔法使いの下僕的な動物、魔法使いの下僕的な動物。

昔見たアニメにそんな設定があった筈、と周囲を見回す。

見ようとするまで気付かなかったが、少年少女 生徒たちだろう

の傍にはドラゴンを始めでかいトカゲ、モグラ、一つ目のなんか分からない動物など。

遠くには写真や映画でしか見たことがないような石造りの建物。
そして草原と空と雲。

さっきまで感動していたはずの光景は、一瞬にして恐怖を映し出す
ものになる。

どこだよここ。どこの国だよ？

全く知らない、見覚えのない場所に見慣れない容姿の人間たち。
しかもみんな魔法使いっぽい格好。
そして巨大な石が浮いている。

ファンタジーはフィクションの中だけで充分だろ？

「……………人を使い魔にした例はないが、春の使い魔召喚の儀
はルールはあらゆるものに優先する。彼には君の使い魔になっても
らわなくてはならない」

「……………はい。」

ルイズと呼ばれた少女は不自然な沈黙の後、うなずきながら返事を
した。

口元が僅かに吊り上っているのが見える。

「わかりました。彼と契約します」

そう言って顔を上げた。

そして才人の前に歩いて行き、立ち止まる。

「なあ、使い魔って、」

そう言いかけるのを制してルイズは言った。

「かがんでじっとして。いいと言うまで動かないで」

その命令口調に再びムツとした。

何だお前、さつきから上から目線で。

可愛いけど。

そして、ルイズは小さな杖を振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この？物？に祝福を与え、私の使い魔となせ」

澄んだ声ではっきりとその呪文を唱えると、

素早く横の風石に杖を接触させ、石に接吻をした。

？ガリツ？

そんな擬音が似合うような間の抜けた光景だった。

あれ？ 何してるんだろこの子。

美少女が無機物とキスをする。

事情を知るものでなければ、唯の無機物フェチかと勘違いするだろう。

現に才人もその一人だった。

ああ、そうかこの子は水晶萌えなんだ。

ガラスの光沢とかで興奮する人種なんだな、と。

「ミス・ヴァリエール！　なんてことを・・・」

「うるさい！　ただの平民が使い魔なんて嫌じゃあ！」

頭が寂しい男、コルベールの説得虚しくルイズは『コントラクト・サーヴァント』を無機物相手に行ってしまった。

沈黙が流れる。

何が起こるか期待の眼差しを向ける者、どうせ何も起こらないだろうとニヤニヤと嫌な笑みを向ける者、そして何も起こらないでくれと祈るコルベール。

「石なんかと契約できるわけないだろ！」

どうせ、ゼロなんだから。と続くはずだったセリフはそこで遮られる。

風石の光り方が強くなり始めたのだ。

それに伴い石には徐々に罅が入り始め、強風が上空に噴き出す。

「危ない！　下がらなさい！」

コルベールの言葉と共に避難するサイトとルイズ。

「・・・すげえ」

何度目だろうか、才人は同じ言い回ししか出てこなかった。両手で前を覆い、その隙間から風石の方を見る。

台風を何千何万分の一にしたような強風が爆発を起こしたかのよう
に上空に向かって昇って行く。

巻き上げられる砂ぼこりで目も開けているのも難しい。

いつの間にかルイズが才人の後ろで服の裾を掴んで小さくなって
いたがそれすら気にする余裕も無い。

立っていたら飛ばされると、小さくなっているルイズに覆いかぶさ
るようにしゃがむ。

すごいのは分かったからさっさと止んでくれ。

どれほどの時間がたっただろうか。

きつと数分も経っていないのだから、小石が飛んできたりして背
中が痛い。

「まったく、お次は何だ？」

周りを見ると同じような体制をした少年少女。

でっかいトカゲなんかひっくり返ったり、僕の使い魔どこ言った
ー、とか叫んでいる。

あんな強風の後だ、髪はぼさぼさ、埃を吸い込んでしまいせき込
んでいる者もいた。

「ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「いや、公爵家の令嬢だぞ？ そんな事できる訳無い無い」

そんなやり取りを横目に才人は風の発生源に視線を移す。

人が一人倒れていた。

白く長い髪の毛。

これまた変わった服装をして、傍には仙人が持つような貫禄のある木の杖。

「離して」

才人が倒れた人の方を観察していると、覆いかぶさっていた少女、ルイズは言った。

「ああ、悪い」

一応かばったのに……。

何の労いも無い事に若干の不満を感じる。

しかし、彼の性格なのだろうか、関心はやはり倒れている人物に向けられる。

才人はルイズと共に立ち上がるとその倒れている人物の方へ歩き出した。

「ミス・ヴァリエール！ 待ちなさい！」

それをコルベールは呼びとめる。それに対してルイズはさも鬱陶しそうに応えた。

「ミスタ、『コントラクト・サーヴァント』は失敗しました。もう一度試してみます」

スタスタと歩いて行ってしまふ。

「見なさい！ 彼はメイジだ。その証拠にあんなに立派な杖を持つ

ている」

何やら必死である。才人はこの人何か知ってるのか？ と勘繰った。

「ですから交渉です。もしかしたら流れの平民メイジかもしれないじゃないですか」

そしてメイジとかなんだろうかと、思っている

「あ、動いた」

白髪の人物がうつ伏せの状態、その腕を動かして立ち上がるうともがいているのが見えた。

その様子はまるで生まれたての子鹿。

腕がプルプルと震えすぐに崩れそうになるが近くにあった杖を手に必死で立ち上がるうとする。

その足もやっぱり震えて崩れた。

膝を崩して呼吸を整えている様子が分かる。

老人なのだろうか。

コルベールが走りだしたのを見て、才人はその後を追った。

白髪の男はまるで幽鬼のような外見をしながら、それでいてしつかりと立っていた。

恐怖はあまり感じられないが、掴みどころないその雰囲気にはルイズは流されそうになる。

「わ、私はルイズ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。あなたのお名前をお聞かせ願えませんか？」

ルイズは数回の深呼吸の後、長つたらしい自身の名前を詰まる事無く一息で言った。

「ラ・ヴァリエール……ヴァリエールだと!？」

その白髪の長い人の声は容貌からは想像もつかないほど若々しいものだった。

「すまない、混乱しているようだ。ここは一体……」

目は髪で隠れて確認できない。ルイズは男の驚きように満足したのか澄まし顔で応える。

「ここはトリステイン魔法学院ですわ。ミスタ」

僅かな沈黙。そして、

「すまん、もう一度」

「トリステイン魔法学院」

すると白髪の男は膝について盛大なため息をついた。

そして、立ち上がりもう一度大きなため息をつく杖を手に取った。それに対してルイズは若干体を強張らせる。

「あの、あなたはメイジ……ですよね？」

ルイズは恐る恐るといったふうに男に訪ねた。

「・・・魔法を使う者、という意味ではそうであるうな」

周りの生徒たちがざわめき出す。

ルイズはその返答に小さくガッツポーズをした。
相変わらず男の顔は見えない。

「・・・・・・・・貴族ですか？」

「いや、その類の者とは全く縁の無い生活をしてきたよ」

大きくガッツポーズをした。使い魔にしても問題なし。

これで汚名返上、ゼロじゃなくなると。

しかし、そこに横槍を入れてくる者がいた。

「ミス・ヴァリエール、彼との契約は少し待って欲しい。貴族ではないと言っではいるがメイジだ、学院長に報告してそれから、」

「使い魔召喚の儀はルールはあらゆるルールに優先されるのではなかったのですか？ 神聖な儀式の筈です。さあ、契約を」

コルベールが言うのを遮るように、ルイズが反論する。

すると、白髪の男も会話に入ってきた。

「いや、こちらとしてもまず上の者に挨拶をしたい」

「アンタ、平民でしょう。平民が貴族に意見するなんて許されると」

「ああ！ そうですねそれは案内しましょう！ ええ、すぐにで

も！」

コルベールはルイズの発言を許さんとばかりに割って入り、男の背中を押して行った。

「ミス・ヴァリエール、話が付き次第呼びだすのでもう、次の授業に行きなさい。」

「ええ？ でもそれじゃこの進級試験は・・・」

この学院では使い魔召喚が二年次の進級試験となっている。

「大丈夫です。そんなものどうとでもなります。考えて御覧なさい。あれほど凄い現象を起こす物をあなたは召喚したのです。君はゼロなんかじゃありませんよ」

？ゼロではない？それは学院で自分が『ゼロ』と呼ばれ始めてから初めて聞いた肯定の言葉だった。

じいんとこみ上げてくるものがある。

ルイズは魔法が使えない。

使えないというか呪文を唱えようとするとそれらは全て爆発という結果になる。

魔法成功率ゼロ、ゼロのルイズ。

同学年の間ではその名が浸透し、クラスメイトはそれを格好の材料と、彼女を貶める。

それによって元々プライドが高い彼女の態度は周りに対してどんどん頑なになっていった。

そんな胸の痞えが少しとれた気がしたのだ。

「だからね、その彼と契約を」

「それは嫌です」

それはそれ、これはこれ。

コルベールはとりあえずこの場で収める事は諦めたのか、

「さあ、皆教室に戻りなさい。次の授業に遅れないように」

生徒たちに促した。

すると多くの生徒達は一斉に宙に浮き、口々に笑いながら飛び去って行く。

「高位のメイジだったらルイズが契約できるわけないよ」

「どうせドットかそこらだろ！」

負け惜しみか、鬱陶しいと、ルイズはクラスメイトの言葉を一々耳に入れる事を放棄した。

「さあ、我々も参りましょうか」

コルベールに促されると、白髪の男は歩き出した。

遅れまいとルイズと才人は後に続く。

「なあなあ、あれってどうやって飛んでるんだ？ それにさっきからメイジとか契約とか何の事言ってるんだ？」

いつもなら平民のくせに、と答える所ではあるが今のルイズは機嫌が良かった。

なんか大きな風石を召喚したと思ったらメイジ（自称だけど）が中

から出てきたのだ。

メイジでなくともあれほどの超常現象、滅多にお目にかかれない。その様子をクラスメイト達にまざまざと見せつける事ができた。たったこれだけの事でこんなにも気持ち晴れやかになるなんて、と。

「飛んでるのは『フライ』という魔法、メイジは魔法が扱える者、契約は使い魔の契約。というかアンタ、メイジを知らないなんてどこの田舎者よ」

「魔法！？ 魔法ってあれか？ 男が三十過ぎるまで純潔を守りとおすと使えるようになるという神秘の力、魔法のことか！？」

才人には白髪の男がピクリと反応したように見えた。

「はあ？ 何それ、初めて聞いたわよそんなの」

「ごめん。迷信です」

ルイズが食い入るように聞いてきて、才人はばつが悪そうに答えた。

「もう、紛らわしい事言わないで！ 期待しちゃったじゃないの！」

「悪かったつてば。そんなに怒るなよ。えと、ルイズだっけ？」

「呼び捨てにしないで」

「殴ってくれ」

何を言い出すのかこの男は、というような呆れ顔でルイズは才人を

見る。

「これは悪夢だ。夢だ。さっきは小石が当たって痛かったけど、夢から覚めるにはシヨックが足りなかったんだ。夢から覚めてネットサーフィンするんだ」

「アンタ何言ってるの？」

「さあ、一思いにやってくれ」

仕方なしとルイズが拳を握り締めて、才人がお願いします、と言った所で、

「やめい」

白髪の男が才人の頭を小突いた。その表情は前髪に隠れて見えない。

「気絶して起きた所で現実に引き戻されるだけだ。幻想が現実だという事に」

「こんな光景が現実だなんてそれこそ悪い夢だ。というか夢の住人のくせに説教しないでくれ」

あくまで現実とは認めないらしい。

その様子に白髪の男はため息をつき、

「ならば夢オチと言う事で、遙か上空から落ちてこい」

杖を振り上げると才人は凄まじいスピードで上昇していった。

才人が再び目を覚ましたのはどこか威厳を感じる部屋だった。

扉の付いた高そうな本棚。

ピカピカに磨かれ所々彫刻の入った高そうな机と椅子。

自分が寝かされていたのは柔らかく、これまた高そうなソファであった。

そこにはパイプをふかしている真っ白なひげが立派な老人、頭の寂しい中年男が座り、その前には前髪で顔が見えない白髪の男が立っている。

才人は、はつきりしない意識の中眺めていた。

「あれ？ どこかでお会いしましたっけ？」

「いや、二十年前の……」

なんか話し込んでいた。

魔王、不干渉、アルビオン……。魔王ってRPGに出てくるあれか？

ブリミルがどうとか訳の分からない言葉ばかりが耳に入る。

つつか記憶が曖昧だ。可愛い女の子、でっかい水晶、それからすごい飛ばされて

「俺死んだー！」

急に起き上がった。

落ちる時の浮遊感が思い出され下半身の一部が縮こまる。

「おお、起きたか。気分はどうかね？」

声を発したのは老人だった。

異常な事が連続したためか混乱してしまいしばらく呆けてしまった。

「えと、大丈夫です……」

才人はとりあえずと言った風に頭を下げながら言った。

「ほっほっほ。とりあえずはお互い自己紹介と行こうかの」

魔法使い然としたその老人は柔らかな笑みを浮かべながら言った。

「私はオールド・オスマン、このトリステイン魔法学院の学院長をやっております」

「ジャン・コルベール、学院教師です」

オスマンが名乗るとコルベールは事務的な口調で答えた。

「才人、平賀才人です」

「ヒラガサイト？ 変わった名前だね」

コルベールが興味有り気な仕草を見せ言った。

「あの、後ろの人は」

後ろで白髪と杖がオスマンと被っている男が黙っているのが気にな

り、才人は恐る恐る尋ねてみた。

「すまんの。彼は訳あって名乗る訳にはいかんのじゃ」

オスマンはあまり申し訳なさそうな雰囲気を出さずそう言った。

訳ってなんだろ？ 大人の事情か。

とりあえずその質問は取り下げの事にする。

「あの、ここは一体どこなんですか？ ああ、国の名前とかじゃなくって」

「どんな世界か、かの」

オスマンは断定的な口調で言った。

「生憎、わしはお前さんのいた世界の事は知らん」

ずるつと行きそうなセリフに才人は固まった。

「知ることは、この魔法が存在する所とは別の世界が在る、^あという事実だけじゃ」

「ちょっと待って下さい。何が何だかさっぱりだ」

才人は一方的な物言いに待ったをかける。

「おぬしは、ミス・ヴァリエールの『サモン・サーヴァント』、召喚魔法でこの世界、ハルケギニアに呼び出されたのじゃ」

後ろで立っている白髪男がこつちを見た気がした。

オスマンがそこまで言うとな度はコルベールがこの世界の事について話し始めた。
貴族と平民がいる事を始め、魔法がある事、人間以外に様々な種族がいること。

それらは才人の好奇心を十二分に刺激する。
まあそれだけならば唯驚くだけなのだが、

「帰る方法がないって、一体どういう事ですか！」

「召喚は一方通行、送還の魔法は存在しないのだよ。あつたとしても私はそんな話聞いた事がない」

「………そんな」

才人は自分の置かれた立場をほぼ認識すると、酷い喪失感と孤独を感じた。

見知らぬ土地でただ一人。

加えて帰ろうにも、自分を阻む物は距離ではなく世界間の壁という曖昧な物。

「そんなに落ち込みなさんな。呼びだした側の責任もある。わしらもできる限り力になろう」

オスマンは俯く才人に向かって言った。

「はあ………」

力のない声でサイトは応える。

「さて、お前さんの扱いなんじゃが、使い魔をやってみんかの？」

「・・・おい」

オスマンの言葉に後ろの白髪男が言った。
どこか怒ったような声だった。

「もちろんその対価に衣食住の保証、それから元の世界に帰る方法を探すことを約束しよう」

その上でどうかね？、とオスマンは才人に尋ねた。

「そんなの従うしかないじゃないですか」

頂垂れて答える。

この世界に才人の知り合いなど居るはずもない。
そして日本のように人権なんてものが保証されているわけでもない。
唯の人間でしかない才人は平民と同じ扱い。必然的にオスマンの言葉に従わざるを得なくなる。

「も、もちろん、わしがそれらを保証しよう」

どうして二回言ったんだらう？

「とりあえず今日は使用人の空き部屋を使えるようにしておこう」
何やら切羽詰まった様子でオスマンはまくし立てた。

白髪の男は相変わらず、その顔を見せずにその後ろで佇んでいた。

才人が案内された部屋はベッドと机と椅子があるだけの簡素なものだった。

既に外は暗く、扉の向い側に着いた窓から月明かりが射している。

「あー、どうすっかなー」

才人はとりあえずベッドの上に倒れ込んだ。

鏡をくぐったらいきなり異世界。

魔法があり、貴族が支配する世界。

自分が使い魔として呼び出された事、その使い魔という役割がどうも怪しい事。

才人は鏡をくぐる前の自分が浅はかだった事を呪った。

「そっいえばあの白い奴」

あの白髪の男は一体何者なのだろうか。

思えば何故あいつは使い魔とやらにならないのか。

魔法で空高く飛ばされたこともあり、沸々と怒りがこみ上げてきた。ほぼ一方的に使い魔の役割を押しつけられたようなものだ。

「ああ！ くそっ、はめられた！」

才人は頭を抱えて唸った。

さっきの話を反芻する。貴族と平民。

あの白い奴は貴族なのだろうか？

それ故に平民とみなされた自分が使い魔にさせられるのか。

「あの子、可愛かったな」

白髪の男に対する怒りと同時に、昼間の事が思い出された。才人を呼びだしたであろうあの桃色髪の女の子。

自分の好みにどストライク。

テレビや雑誌でもあれほど可愛い女の子は終ぞ見たことがなかった。

あんな子とお近づきになれるなら使い魔も案外捨てたもんじゃない。それに加えて優しければ尚良し。

その考えに至ると白髪男への怒りも薄らいでいくのを感じた。なんだ、あの人そんな悪い人じゃないな。

心持が前向きになった所で才人はベッドから飛び起き窓に向かって行った。

窓から異世界の夜空を眺める。

「やる気出てきたぜ！ 異世界さんよお！」

二つの月が寄り添うのを見ながら才人は叫んだ。

今更な本編（原作時期）（後書き）

才人が出てきた時点でブラウザバックしてしまった人もいるかもしれない。

アンチルイズ派の方々、作者はルイズ好きな方なのでアンチは書けません。

他パターンも書いたのですが、後の展開が難しくなるので投げました。

ティファニアが留学生で召喚、ロマリアでヴィットーリオが（ry。

今更な本編（笑いの無い裏）（前書き）

話に起伏がなくて、面白くない説明回になったかもしれない。

今更な本編（笑いの無い裏）

目が覚めたらハルケギニアに居た。
エルフの聖地、大いなる意思が居る『泉』でなくハルケギニアに。

「わ、私はルイズ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・
ヴァリエール。
あなたのお名前をお聞かせ願えません事？」

「ラ・ヴァリエール……ヴァリエールだと！？」

記憶の奥底からその単語を引っ張り出すと、少女の言葉に驚き、声
を上げてしまった。

訳が分からない、自分は大いなる意思の下で眠りに付かされたはず
だった。

泉の中で封印されるような形をとって、最後に見たのは深い森の景
色だった筈だ。

それなのに起きてみるとそよ風が吹くただっ広い草原。
久しく感じる激しい違和感。

体を動かそうにも間接が固まり中々動いてくれない。
自分はどれほど長い間眠っていたのだろうか。

こんなに間接が固まって動けないのだ、きつとかなりの年月…ああ、
確か十年だったか。

起きたばかりなのに思考がやけにクリアだ。

これは大いなる意思と同調していたせいなのか。

そして不意に浮かんだのは、エルフの少女が別れ際に見せた顔。吐き気のような感覚で息が詰まる。

落ち込んでいる場合ではないと現状を把握するための質問を投げかけた。

「すまない、混乱しているようだ。ここは一体……」

「ここはトリステイン魔法学院ですわ。ミスタ」

返ってきた答えは可も無く不可も無く、と言った所だろうか。とりあえず軍の真つただ中とかではない事にほつとする。

いや、違う違う。何故こうも？普通に会話が成立？している？とりあえず、少女の反応を見るために意味のない質問をする。

「すまん、もう一度」

「トリステイン魔法学院」

普通に会話は成り立っている。少女に怯えた様子は無い。

地面に落ちた杖を拾うと少女は覗き込むような形で顔を見上げてきた。

ああ、なるほど前髪が邪魔で……ってなんでこんなに長くなってる！？

心無しか目線も少し高く感じる。背が高くなっているのか。

別の体に入ってしまったような感覚を再び感じる。

「あの、あなたはメイジ……ですよね？」

「……魔法を使う者、という意味ではそうであるうな」

「……貴族ですか？」

「い、いや、その類の者とは全く縁の無い生活をしてきたよ」

「一応魔王なので重々しい口調を試してみるのだがしっくりこない。

無意味な会話の応酬をしていると横から会話に入ってくる者がいた。

「ミス・ヴァリエール、彼との契約は少し待って欲しい。

貴族ではないと言ってはいるがメイジだ、学院長に報告してそれから、」

「使い魔召喚の儀はルールはあらゆるルールに優先されるのではなかったのですか？」

神聖な儀式の筈です。さあ、契約を」

入って来たのは中年の頭が禿げあがった男だった。

学院と言う事だし引率の教員なのだろう。

どうやら僕は使い魔として召喚されたらしい。

「いや、こちらとしてもまず上の者に挨拶をしたい」

隷属されるのは御免だし、使い魔なんてやっている暇などない。

のだが、久しぶりに動かす体は節々が痛み、逃げるにも不安が残る。ここは一つ交渉の場に付いてもらい、何とか譲歩させるのが吉か。

十年たったら？あの子？と感動の再会が……。

あれ？　ここに召喚されたという事は？　向こう？　では封印された魔王は居なくなつたという事で、それを見た？　あの子？　は途轍もなく心配する。

いや、僕の自意識過剰でなければ半狂乱に……。

冷や汗のようなものが脳内で流れた。

「アンタ、平民でしょう。平民が貴族に意見するなんて許されると」

「ああ！　そうですかそれでは案内しましょう！　ええ、すぐにでも！」

何か言っているようだが耳に入らない。

突っ立っていると、中年の教師に背中を押されて足を動かした。

そうして憔悴しきっている所でその教師はある人物を指差し言った。

「だからね、そのの彼と契約を」

黒髪黒眼、青いパーカーにジーンズ。日本人によくある特徴のない顔立ち。

とうとう頭までイカレたか。

「それは嫌です」

ルイズは黒髪の少年と契約する事を拒否した。

まあ普通、嫌だよな。使い魔にするのもされるのも。

生きて行くのに不自由する野生動物でもない限りは。

「さあ、皆教室に戻りなさい。次の授業に遅れないように」

教師は生徒たち急がせるように言った。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ」

「どうせそのメイジも金で雇ったんだろ！」

「高位のメイジだったらルイズが契約できるわけないよ」

「どうせドットかそこらだろ！」

罵詈雑言。

このルイズという子はいじめられっ子なのだろうか？

だとすればこいつらの親は相当な権力者が、真正の馬鹿か。

トリステインでラ・ヴァリエールを敵に回すなんて正気とは思えない。

しかし当人を見た所、それほど気にした様子も見られなかった。

「さあ、我々も参りましょうか」

教師に促され四人固まって歩き出した。

「なあなあ、あれってどうやって飛んでるんだ？

それにさっきからメイジとか契約とか何の事言ってるんだ？」

少年はお決まりの反応を見せてくれる。

もし人がいない場所であれば懇切丁寧に教えるのだが。

「飛んでるのは『フライ』という魔法、メイジは魔法が扱える者、契約は使い魔の契約。」

「というかアンタ、メイジを知らないなんてどこの田舎者よ」

弾んだ声で少女が答えた。先ほどの悪口は本当に気にしていないようだ。

「魔法!? 魔法つてあれか? 男が三十過ぎるまで純潔を守り通すと使えるようになるという神秘の力、魔法のことか!?!」

はっ! どうせ僕は童貞ですよ!

この世に存在して約四十年、一度も……。

童貞の魔王、童帝。あ、これちょっとカツコイイかもしれない。

「はあ? 何それ、初めて聞いたわよそんなの」

「ごめん。迷信です」

「もう、紛らわしい事言わないで! 期待しちゃったじゃないの!」

「悪かったつてば。そんなに怒るなよ。えと、ルイズだっけ?」

「呼び捨てにしないで」

「殴ってくれ」

この少年はMなのか……。

「これは悪夢だ。夢だ。さっきは小石が当たって痛かったけど、夢から覚めるにはショックが足りなかったんだ。夢から覚めてネットサーフィンするんだ」

ああ、自分の見た物が信じられないのか。

そう言えばハードディスクの中身、どうしたんだっけ。

まあ、兄さんが処理してくれている事を願うしかない。

「アンタ何言ってるの?」

「さあ、一思いにやってくれ」

少年は目をつぶて立ち止まる。

覚悟を決めて拳を握り締めていた。

「やめい」

さっさとこの場から立ち去りたい。人目の付かない所へ行きたい。

そう思いながら僕は少年の頭を小突きながら言った。

痛っ、と少年が言いながら後ずさる。

「気絶して起きた所で現実に引き戻されるだけだ。幻想が現実だという事に」

割と語気を強めて言った。

「こんな光景が現実だなんてそれこそ悪い夢だ。というか夢の住人のくせに説教しないでくれ」

ここで認めなくても後で更に混乱するだけだろう。覚悟を決めるのは早い方がいい。

それがこの世界に生きる覚悟でも帰る方法を探す覚悟でも。

とりあえず冷静になってもらった方が話もしやすいしここは一つ、

「ならば夢オチと言う事で、遙か上空から落ちてこい」

頭を冷やしてもらおう。

彼を下から風で押し上げ、上空へ飛ばした。

魔法学院の中に入るのは初めてだった。

こんな場所、平民ならばメイドを始めとする使用人以外ほとんど縁がないだろう。

石造りの壁は魔法できれいに整えられ、まるで一流の職人が作ったようだ。

造りもしっかりしているしやはり魔法学校と言う事だろう。

若いメイジがたくさん集まり、その勢力を持って余しているのだ。

例えるなら生徒一人一人が拳銃を携帯しているような場所である。

校舎が頑丈でなければならぬのは当たり前か。

すれ違いざまに視線がこちらに吸い寄せられているのが風の精霊を介して伝えられる。

確かに現在の姿は幽霊みたいなものだろう。

地面に付きそうなほどの長い白髪が鬱陶しい。

僕は気絶した少年を担いで、塔の扉の前に立つ。

「ミス・ヴァリエール、彼らの事は私から学園長に言っておくから、君は次の授業に行きなさい」

中年教師がおもむろに言った。

「え、でも……。それは私の使い魔です！ 主人である私も同行します！」

ルイズは強く出た。

魔王の主人、魔王を？それ？扱い。さしずめこの子は魔神あたりか。

彼女の発言に対してふざけたことを考えていると中年教師が口を開く。

「ミス・ヴァリエール。人間を物扱いとは貴族にあるまじき行いですよ。貴族たる者、互いに尊重する心を忘れては」

「でも彼は平民です！」

その様子に教師はため息をつきながら窘める様に言った。

「いいかね、ミス。平民だからと言って頭ごなしに従わせようとすればほとんどの場合は必ず反発される。相手の事をきちんと理解し、同意した上で契約しなければ。それ故の尊重だ」

貴族が持つ身分に加え、魔法という力によりその反発は一層抑圧される。

それ以前に人を尊重できなければ社会から爪弾きにされるだろうが。

「う……、分かりました」

ルイズという少女は渋々と了承する。

「交渉を君を抜きにして我々が行うのも、きちんと彼らを理解するためなのです。」

ミス・ヴァリエール、君は伝統ある公爵家の御令嬢だ。

ヴァリエールと言えばこの国での影響力はとても大きい。

君が同席しては彼らが尻込みして本当の事を言えないかもしれないだろう？」

人は恐怖という苦痛に理性が屈服させられ思ってもない事を言っ

しまつ事がある。

中年教師がそう諭すと、ルイズは何かに気付いたかのようにはつとして言った。

「……そうだわ。ミスタ・コルベール、ごめんなさい。私が間違っていました」

「いえいえ、こちらも物分かりが早くて助かります」

コルベールと呼ばれた男はにっこりと笑いながら言った。

じゃあ、私はこれで。そう言ってルイズはそこで踵を返して行ってしまった。

「上手く丸め込んだな」

今まで黙りこくつたまま付いて来たので少々驚いたようだ。

「え、ええ。彼女は優秀なのですが少々融通が利かない所があるというか。ああ、いい子なんですよ？」

「気にしていない。彼女の駄々ぐらいよくあることだ」

暴力の伴った悪意に比べれば可愛い物だ。

あの子が持っている偏見なんて歳をとれば軟化する類の物だろうし。

「それにしても、高いな。学院長はここを毎日上り下りしているのか？」

学院はロマリアにある宗教庁を模して造つてある。

五角形の各頂点に塔、そしてその中心にそれらよりも高い塔が一本。

その一番高い塔に学院長室はある

「まさか。大体は魔法で上がっていますよ。
たまに歩いているのを見かけますがあの方も結構な御歳ですし」

建物の内部に入ると、らせん階段が長く上に伸びているのが目に入る。

「ささ、行きましようか」

大人しくコルベールの後に付いて行くことにした。
階段を上がりながら僕は言外に少年を指し言った。

「どうやら私が何者が気付いているらしいな。
あなた達は、私が供に呼びだされなければ彼を使い魔にしていたのか？」

「ええ、そうでしょうな」

その当然、と言った風な口調に虚しくなった。

「交渉も無く、一方的にか」

「仕方ない。始祖が定めた神聖な儀式なのですから」

「神聖。もうそんな言葉、聞き飽きた。この世で一番汚い言葉だ」

神の名の下もとに。

この世界に来てから何百と聞いた罵り言葉。

神の名の下に死ね。

神の名の下に悪魔に死を。
神の名の下に清い世界を。

そんな言葉を吐き散らしながら魔法を放ち、剣を向けてくる兵士や暗殺者達。

「ああ、別にあなたを責めている訳じゃあない」

コルベールは抑揚のない声で答えた。

「いえ、このような世の中。疑問を抱くのは少なくない。今、世の中は変わろうとしています」

「少なくない？」

「まあ、そんな事はどうだっていい。この少年の意思を問わずに従わせるのだけはやめてほしいね」

「まだ十代なのだろう。」

「訳も分からずこちらに飛ばされてきた確認済みの被害者二号。」

「いなくなつて悲しむのは本人だけじゃない。」

「家族、親戚、友人、人は思つている以上に他人に影響を与えているもの。」

「いなくなつて初めて、その大切さに気付くなんてよくある話だ。」

「う、善処しよう」

「コルベールはうるたえた。そんなに難しい願いなのだろうか？
そうこうしているうちに終点に辿り着いた。」

「ふむ……、ん？ んんんんん？」

コルベールが先に入って数分、入室を許可され、学院長室に入った時の最初の反応がこれだった。

髭の長い老人は机に身を乗り出して唸った。

そして再び椅子に腰を下ろし、額に手を当てる。

「ミスタ・コルベール、冗談ではない事は良く分かった。どういう事が説明してくれんかの？」

疲れたような声で言った。

真っ白な鬚と髪がそれを強調している。

「まあ、お察しの通りかと。彼が進級試験の『サモン・サーヴァント』で呼び出されてしまったのです」

僕は担いだ少年を近くのソファに下ろした。

久しぶりに動いたせいかまだ体に違和感を感じる。

血の巡りが良くない。

首や肩を回したら前髪がバラけて僅かの間だが視界がはつきりする。

ぶぼっ！

老人の吸っているパイプから盛大に灰が飛びだした。

僕は煙がこちらに来るのを防ぐように風で灰と煙をまとめ上げる。窓を開けるとそれらは制御下を離れ外へ散って行った。

「その紅い瞳、間違いなく『魔王』。ああ、頭が痛い」

老人は机に肘をついて頭を抱え込んだ。

「ふう、申し遅れたの。わしがこの学院の学院長を務めておる、オールド・オスマンという者じゃ」

「ああ、そうでした。学院教師のジャン・コルベールです」

忘れていましたという風に中年教師は名乗った。

召喚時は混乱していたし無理もないか。

「ああ、どうもご丁寧に。ナツメと申します。不本意ながら『魔王』と呼ばれています」

口調を切り替える。

ごく普通に挨拶したのだが、二人は呆気にとられたように目を見開いた。

「あの、どうかしたんですか？」

「あ、ああ、話に聞く印象とは違っていたんです」

老人はうろたえた後、ごほん咳払いをした。

「単刀直入に聞こう。魔王よ、お主はわしらに害意を持っているか？」

抑揚のない声で鋭さも何もない、唯の質問、そんな印象を受ける。見極めようとしているのか。

魔王と呼ばれた存在がどのようなものか。

だから『魔王』は不本意なんだってば！

「ありませんよ。あなた達がこちらを拘束しない限りは」

使い魔にはなりませんよ、と言外で言う。

「では、宗教庁に対しては？」

「ありません。放っておいてくれるなら」

嘘だ。

「学院長、質問するより彼から直接その考えを聞いた方がいいのでは？」

コルベールは学院長に言った。

「いや、でも魔？王？じゃぞ？」

「唯の凶悪犯罪者です」

……酷い。事実だけど。

先ほどの真剣な雰囲気はどこかに行ってしまった。

「そう言うわけだ。ナツメ君、話してくれないかね？」

コルベールが促してきた。

「あ、はい。人間だろうと亜人だろうと、相手が殺意の混じった攻撃をしてこない、または殺意を向けてこない限りは、決して交戦し

ません」

学院長は気の抜けたような表情をしていた。そしてこちらを指差して言う。

「ミスタ、これって本当に魔王？」

「ええ、そうでしょうね。背丈はかなり違いますが、手配書の似顔絵とはほとんど一致しています」

「彼を呼びだしたのは？」

「ヴァリエールの三女です」

「ああ、あの爆発娘か。人間？二人？とは全く面白いものを呼びだしたものじゃ」

ほっほっほと笑っていた。こちらは脅威の対象から外されているのだろうか？

「あの、こちらからも質問にいいでしょうか？ 何分人間世界は久しぶりでして……」

「ああ、そうじゃったの。いいじゃろう。わしが答えられる限りであれば何でも答よう」

先ほどの警戒心に似た物はすっかり無くなり気の良い老人に変わった。

「じゃあ、まずロマリアから。魔王に対する姿勢と後、宗教庁内部

の変化があれば、お願いします」

「ふむ、ロマリアか……。ああ！　しまった忘れとった」

オスマン老の雰囲気当真剣な物に切り替わった。今度はかなり重苦しい。

「ナツメ君、君はこちらに呼び出されてしまってどうするつもりかね？」

「何って、帰るつもりですけど。何かまずい事があるんですか？」

一時帰還、その後秘宝破壊。

「いやあね、近い未来、非常にまずい事がね、起こるんじゃないよ」

そして彼は席を立つとソファの方へ歩いて行き座った。

「八年ほど前だったか、ガリアとゲルマニアの国境沿い、ガリア側で魔王討伐運動が起こった。ロマリア保守派とアルビオンの貴族派を中心に。そしてそれは瞬く間に広がってしまった。現在はガリア国境沿いのアツテムト領を中心に陣取っておる」

嫌なこと聞いた。

人間世界に強制召喚、いつの間にか巨大な敵が目の前に居た。しかもそいつは敵意むき出し。

本当に嫌なこと、しかし聞かないと更に嫌な事になる事を聞いた。

「数年前からは組織の体裁を成してきておっつての、名は『ディアフロ魔王・討伐』キスタ！」

語呂悪！

「規模はかなりの物じゃ。それこそアルビオンの貴族派残党を始め、ハルケギニア中から人間が集まっておる。トリステイン、ガリアの中堅貴族。ゲルマニアの権威が欲しい大貴族。軍の規模も十万を超えておる。奴らは他にも『聖地奪還』を叫んだり最近ではこのトリステインを落とそうという動きも出ておる」

……………ふう。

「すみません。すぐ帰ります」

戦争確實、死屍累々の惨状が出来上がるだろう。

「待たんか。この惨状を引き起こした原因が自分にもあるのに放って行くのかの？ 確かに始まりはロマリア宗教庁だったかもしれない。しかしお主が民衆に恐怖を与えたことも事実。現にこうして多くの人間が集まっておるのが証拠じゃ」

民衆に与えた恐怖は教会が煽った結果だろう。

僕は何もしていない。

また、何もしなかった結果とも言える。

「それでもお主はさっさと逃げるのかの？ それは力を持つ者として、ちと無責任過ぎやせんか？」

オスマン老は問いかけてきた。

妙に迫力があつた。

それ故に余計に強く思う。

「はい、逃げます」

逃げたいとはつきり言った。

それはもうすぐにも、と。

最後の言葉でこの老人が何の見返りも無しに動くように仕向けているのがよく分かった。

「ちょ、ミスタ！ 彼、君の話と全然違うじゃない！」

オスマン老はバナナの皮でずっこけたかのようにうろたえた。

その言葉にコルベールはノーコメント、首を横に振る。

彼は僕の事に詳しいのだろうか？

「大体義理も報酬も無いのに動きませんよ。それに大戦力に対して、一人の人間に何求めてるんですか、あなた達は。私がここに居ても、攻め込まれるだけでしょう？」

旗印どころか討伐対象なのだ。一人軍隊でもやれというのか。大体、能力的に本来は暗殺者向きだ。

「教皇を少しは見習ったらどうじゃ。お主とそう変わらん歳であるうに、多くの人々に対して、慈愛を向けておられる」

「私の愛は特定少数に向ける類の物です。教皇のような、度量の大きな方と同じように考えないで頂きたい」

「その教皇は魔王に対する姿勢は『基本的に不干涉』だと表明したぞい。その事で多くの誹謗中傷を受けておる」

教皇？

「教皇って代わったんですか？」

「うむ。五、六年程前じゃったかの。聖エイジス三十二世、本名は……、何だっけ？」

「ヴィットーリオ・セレヴァレです、オールド・オスマン」

コルベールが言った。

そして呆れ返ったように、教皇の名前ぐらい……と続けた。

……ヴィットーリオ・セレヴァレ。

頭の中で何度かその名前を反芻する。

そうか、アイツが。（忘れた人『悪魔が敵地で姿をさらした』参照）
全く、本音はどうあれ魔王にまで気を使うなんて……。

「そう、ですか……」

「ん？ お主は現教皇の事を知っておるかの？」

すると傍観していたコルベールが感慨深く言った。

「やはり君は……ちゃんとあの手紙を届けたようだね」

何故知っている？

「あれ？ どこかでお会いしましたっけ？」

「いや、二十年前のダングルテールの事件」

ああ、あれか。美人の母親とその息子のモゲロと言いたくなるエピソード。

「あれ？ 出て来ないじゃないですか」

登場人物に該当者無し。

それに対してコルベールは何か言おうとするのだが

「まあまあ、面識があつたとしても、今はその話ではないじゃろう。今度酒の席でも設けて話すがよい」

オスマン老は目を細めた。

「教皇は善い人じゃ。聞けばお主は、アルビオンも救つたらしいではないか。どれ、ここは一つトリステインも」

「それとこれとは話は別です。教皇の懐の深さに感じ入る所はありませんが。大体これはあなたの仕事じゃなくて、この国の王の仕事でしょう？」

「王は既にお亡くなりになられた。王妃は喪に服してらっしゃる。世継ぎが王女しかおられない今、国王の座は空席となっておりますのじや」

また面倒な事を。考えるのが面倒臭い。

思考の放棄はあまり褒められた事ではないが自分と本当に関係のない事。

「ディアプロ・コンキスタが攻めてくればこの学院にも被害が及ぶ。

考えてみい、罪のない人間が殺され辱められる様を。お前さんはそれを嫌というほど体験してきたはずじゃ」

「だから余計に嫌なんですよ」

確かにこの老人の言う通りだ。

しかし勝手に呼びつけておいて二言目には働けというその物言いに理不尽さを感じる。

魔王は神の類じゃない。唯の人だ。

アレほど大量の悪意と暴力を浴びせつけてよく言えるものだ。

別にこの人が当事者ではないのだが、何故かそう考えてしまった。

「私を動かしたければ……そうですね、この国にある始祖の秘宝、水のルビーと始祖の祈り書。その二つで手を打ちましょう」

「なんと！ 国宝の中で一番重要とされる二つではないか！」

「それ以外じゃ動きません」

通ったら通ったで困る事になるがプライドの塊が多数派のような国だ。

昔と変わらずその国風であればそんな報酬、渡せる筈がない。

「のう、そこの彼の待遇改善を求めたそうじゃの」

「割に合わない。というかこのぐらいは当然でしょう？ 勝手に連れてきたんだから。他の人間がどうかしてるんだ。韻竜の子供とか呼びだしておいて、よく反発されてませんね。下手したら群れ単位で取り返しに来ますよ」

「韻竜ですと！？ そんな！ 確か、竜を呼び出したのは一人だけ……彼女が……」

コルベールがやけに食いついて来た。

「これこれ、今はそんな事を話しておる場合ではなかるう」

このまま丸めこまれるのはしゃくだが口は向こうの方が達者らしい。とりあえずここは話題転換させてこちらの考えをまとめよう

「とりあえず、戦争で人死が増えるのも困り物ですが、まず目先のことを処理しましょう」

黒髪の少年を指差して言った。

薄目が開いている。

呼吸音も不規則なリズム、起きているのだろう。急に眼が見開き、

「おれしんだ！？」

飛び起きた。

「おお、起きたか。気分はどうかね？」

オスマン老はあたかも気さくなおじいさんと言った風に少年に話しかける。

さつきとは程遠い雰囲気だった。オンオフの切り替えが凄い。僕はソファの後ろに移動する。

「えと、大丈夫です……」

少年はボーっとしている。
まだ意識がはつきりしていないのだろう。
反射的なのか頭を下げた。

「ほっほっほ。とりあえずはお互い自己紹介と行こうかの」

オスマン老は柔和な笑みを浮かべて少年に言った。

「私はオールド・オスマン、このトリスティン魔法学院の学院長をやっております」

「ジャン・コルベール、学院教師です」

「才人、平賀才人です」

確定。日本人。少し変わった名前、いや人の事言えないか。

「あの〜、後ろの人は」

「すまんの〜。彼は訳あって名乗る訳にはいかんのじゃ」

才人という少年は聞き分け良く、頷いた。

「あの、ここは一体どこなんですか？ ああ、国の名前とかじゃなくって」

「どんな世界か、かの」

オスマン老はどうやら異世界の存在を知っているらしい。

才人少年はその言葉に驚き息をのんだ。

「生憎、わしはお前さんのいた世界の事は知らん。知ることは、この魔法が存在する所とは、別の世界が在る、あという事実だけじゃ」

「ちょっと待って下さい。何が何だかさっぱりだ」

「お主は、ミス・ヴァリエールの『サモン・サーヴァント』、召喚魔法でこの世界、ハルケギニアに呼び出されたのじゃ」

御老体、もう少し少年の話に耳を傾けたらどうか。年長者でしょうか？
ちらっと少年の方を見ると目が合った気がした。

そしてオスマンがコルベールに促すとこの世界についての説明を始めた。

何回も聞いた言葉が右から入って左に抜ける。

「それから残念な事だが、君を元いた世界に帰す方法がない、という事だ」

「帰る方法がないって、一体どういう事ですか！」

才人が声を荒げる事で話に意識が集中する。

それに対してコルベールは無慈悲な事実を述べた。

「召喚は一方通行、送還の魔法は存在しないのだよ。あったとしても、私はそんな話聞いた事がない」

「……そんな」

まあ、一応あるにはある。

彼を元の世界に帰す方法。

虚無の魔法。

あくまで可能性だが。

そしてその可能性を自分は潰そうとしている。

自己保身、自分の幸せのために。

僕が最大の幸福を受け取ると彼は最大の不幸を受け取る。

でも、彼より不幸な人なんてこの世界にも地球にもたくさんいるじゃないか。

ほんの少しでもそう思ってしまった自分が嫌になる。

嫌な奴。

目の前の落ち込んで頂垂れた少年を見ていたら僅かに心が痛んだ。

「そんなに落ち込みなさんな。呼びだした側の責任もある。わしらもできる限り力になるう」

オスマンは打ちのめされた様子の才人に向かって言った。

「はぁ・・・」

「さて、お前さんの扱いなんじゃが、使い魔をやってみんかの？」

どん底に落とした上から更に熱湯をかけるような言葉。

「おい」

久しぶりに怒りがこみ上げてきて、つい語気が強くなってしまった。

怒り。大方嫌な自分に対しての。
どうせこのような事が当たり前の社会。変えるのは自分ではなく政治家の仕事。

自分は小市民、怒りはするけど行動は起こさない。
だからオスマン老に対して言ったのは唯の八当たりだった。

「もちろんその対価に衣食住の保証、それから元の世界に帰る方法を探すことを約束しよう。その上でどうかね？」

「そんなの、従うしかないじゃないですか」

才人が俯いたまま答える。これじゃあ、唯の隷属になってしまう。

「……誰が保証する？」

僕は小声でオスマン老に言った。

気分はロマリアの密偵を相手にしている時に似ていた。

「も、もちろん、わしがそれらを保証しよう」

オスマン老は慌てて付け加えた。

「とりあえず今日は使用人の空き部屋を使えるようにしておこう。
ミスタ・コルベール、彼に案内とこれを」

オスマン老はサラサラと羊皮紙に何かを書くと渡す。
才人はコルベールと共に退室して行った。

来客用の部屋に案内された。

別に使用人の部屋でもいいのに。

いや、使用人と克ち合って下手に騒ぎが起きたら更にまずい。

倒れ込んだベッドはとても柔らかかった。

もう少し硬い方が好みなのだが。

オスマン老によると魔王の認識は次第に薄れているらしい。

上層部を除いて。

平民に至っては唯のお伽話だという者が出てくるほど。

この学院の使用人達はあまり悪感情を抱いていないようだった。

学院長にはくれぐれも生徒たちと争いを起こさないでくれと釘を刺された。

生徒たちには、「魔王なんて〜」という言い回しを多用する者がいる程度の認識。

魔王の扱いが軽くなってきているのだ。大歓迎である。実害なければ。

早く世代交代してほしい。

そして、魔王なんて取るに足らんよ。放つところぞ。

となつてほしい。

そしてディアブロ・コンキスタ。

魔王討伐を意味する安直な組織名。

第一目標 魔王討伐

第二目標 (もう無いけど) 聖地奪還とそれに伴うハルケギニアの統一。

語呂が悪い名前。

でも勢力、数は凄いらしい。

ロマリア保守派とアルビオンの貴族派残党が筆頭。

その下にトリスティン、ガリア、ゲルマニアの貴族、傭兵。

？ロマリア保守派？はヴィットーリオ達改革派に押されつつある保守派。

以前、魔王が動いた事によりその勢力が弱体化したこともあり改革派に追い出された模様。

？アルビオンの貴族派残党？明らかに王党派との抗争で暴れ回った結果である。

「なあんだ。身から出た錆さびじゃん。」

しかし、この死亡フラグをへし折るには自分だけでは無理だ。この国の人間をうまく利用して、いや利用されても構わない。

最終的に生き残ればいい。

被害は二の次。自分がそんなにうまく立ち回れるとは思えない。

それにオスマン老の話からすると、どうやらこの国と僕は利害は一致している。

ディアブロ・コンキスタ（ああ、言い辛い）は遅かれ早かれ対峙しなければならぬ。

報酬に始祖の秘宝を受け取れなければ絶対動かないけど。

こちらに来てしまった以上、暴力を伴った悪意は必ず向けられる。加えて、この弱った体。

推測の域を出ないが十年間寝たまま成長してしまっただけ。
現在ブリミル歴6242年フェオの月、もう少し正確に言つと、

「九年……六カ月……強」

大体十年。

素の状態で人間を遙かに凌駕する力があるがそれでもオグルと力比べができた全盛期とは比べられない。
筋肉の付いていない上半身。

しっかりと地面に足は付いているものの四足歩行動物と比べたら走る速度は劣るであろう。

「もやしっ子め」

背が伸びたのは素直に嬉しい。

あの桃色の女の子の態度が酷かったのも、ここの文化のせいだから仕方ない。

呼び出したのも偶然だ。

いや、偶然でも呼び出すのは止めてほしい。

呼び出した側にも害が及ぶのだから。

やっぱりため息が出る。

人一倍溜息を吐くのに、これは一際大きい。

「幸せのお預け食らった気分だよ」

寝ていたとはいえ意識がある時間もあったのだ。

気が狂いそうな程静かな時間だった。

入ってくる情報と言えば真っ暗やみの中、風石が分解される様子が伝わってくるだけ。

意識があつた時間は全部ひっくりかえしても一ヶ月無かつたかもしれない。

それでもきつい時間だった。

存外に苦痛を与えるものなのだ。唯、何もできず過ぎる時間という物は。

それに十年だ。彼女は十年も待っているのだ。

十年、普通に生活して待っているのだ。

急に居なくなつたとすればどういつ反応を示すか、想像に難くない。

「ルクシャナ……」

彼女は絶対に行動を起こす。

周りがなんと言おうと。

それが嬉しくあり反面、酷く恐ろしい事に思えた。

今更な本編（笑いの無い裏）（後書き）

ここからの細かな動かし方、今のところ不明。
とりあえず、次はエルフ回にする予定。

エルフより憎しみをこめて

魔王消失から一週間が過ぎた頃、首都アディールにあるナツメの部屋にて。

「諜報活動だつて!? 正気を疑うよ!」

アリイーは信じられない、というような眼でルクシヤナを見た。

彼が驚きの声を上げるのも尻目に彼女は落ち着いた様子で鞆に荷物を詰めていた。

「正気つて、今更こんなこと、動揺する事じゃないでしょう。それに行くのはアルビオン、公にエルフが認められている国よ」

衣類や手帳、ナイフなどを嵩張らないように詰め込んでいく。

既にその部屋は蹂躪され彼女の生活空間と化していた。

派手な装飾の絨毯に実用を完全に無視した金ぴかの傘、使い方を間違ったとんがり帽子の中には芋や玉葱が詰められている。

唯一面影が残っていると云えば猫がいる事ぐらいだろうか。

まあ、その猫もアリイーの怒声に怯えて外へ逃げてしまっているが。

「いいや、正気を疑ってるんじゃない。今の君は、気が狂っているとしか思えない」

アリイーは首を横に振りながら苦々しげに答えた。

ハルケギニアではエルフへの偏見が根強い。

恐ろしい戦闘力を持った化け物。

人間の敵。

他種族に？比較的？寛容であるアルビオンでも未だ畏怖する者は少ない。

「かなり癩だが、アイツはエルフの間じゃ聖者扱い、君はその妻つて事になつてる。

その重要人物が直接出向くつて事が、どういう事になるか分かつているだろう？」

封印から十年弱、ネフテスでの魔王に対する一般認識は一変していった。

救世主、神の代弁者、アヌビスの再来。

ナツメを悪魔と罵つた者の中に自害する者が出るほどに。

そして砂漠サハラの北方に存在する聖地の開放。

『動く森』 『死の山脈』 は聖地への行く手を阻む試練となり挑戦者が続出した。

侵入してくる動物を栄養として取り込もうとする『動く森』。

獰猛な大型動物が襲いかかる『死の山脈』。

前者は完全に魔法が使えず、後者も火起こしの魔法程度しか発動できない。

血気盛んな若者は聖地の泉に居る『大いなる意思』を一目見ようと訓練に熱が入る。

そして中には老骨に鞭打つて参加する者も。

それから、魔王が中に納まった巨大風石は、一種の聖像となり訪れた者達が祈りを捧げて行く。

ナツメ本人に神性やカリスマ性が有るかどうかは別として、これらの風潮は瞬く間に広がって行った。

「良いじゃない。とてもロマンチックな美談になるわ」

ルクシャナは鼻で笑って答えた。

「真面目に答える。今や君は、政治的にも重要な立場にあるんだぞ！もし君に何かあれば、戦争は避けられない。ああ、評議会は一体何を考えてるんだ」

封印された魔王に寄り添う聖女、そんな風に呼ぶ者もいる。

いつの間にか魔王は大いなる意思の権威を象徴する人物に早変わり。そしてその重要人物が消息を絶った。

大いなる意思の叫びと共に。

幸いだっただのは、見ていた者が礼拝中のエルフ市民でなく常駐の管理者だった事ぐらいである。

これにより聖地はすぐに封鎖、一般のエルフの入場を禁止した。

表向きは、『動く森』が疲弊し試験としての体を成すために回復期間を置かなければならない。

裏では聖者が消失した事による混乱、暴動を避けるため、という理由で。

そして急遽、諜報部隊を編成送り込まれることとなった。

「政治的立場？ 戦争？ それがどうしたと言っの？ どうなるかぐらい簡単に予想が付くわ」

彼女は抑揚なく答えた。

感情は声に出てはいなかったが纏う雰囲気は怒りに満ち、今にも燃え上がりそうである。

「ナツメが封印されてからいろいろ考えたわ。彼が起きた時の反応はどんなだか、どうやって迎えようか、祝おうか、起きた後は何をしようか」

ルクシャナはナツメが封印された後、人間世界の情報収集と研究に一層力を入れるようになっていた。

ハルケギニアにおける勢力関係から平民の生活様式まで。

役に立ちそうにない物もまるで気を紛らわすかのように研究に打ち込んだ。

「でも、全部無駄になった気分だわ」

俯きながら言った。

ふと視線をずらすと彼女は立ち上がりナツメの、今はルクシャナの物同然になっている机に向かって歩いて行く。

机の上には、赤く半透明な石が一つ。竜血の結晶らしいそれは少ない彼の持ち物の一つだった。

ルクシャナは石を手にとると愛おしそうに握り締めた。

「いい加減我慢の限界なの。あと少しの所で横から搔っ攫って行くなんて……」

徐々に体を震わせ纏う空気が解放されていく。

「シャイターン悪魔が調子に乗ってるんじゃないわよおおー！」

ルクシャナは建物を揺らすような声を張り上げ、机を叩いた。

犯人は虚無の担い手。

大いなる意思の話によれば、ナツメとの間に割り込まれ、無理矢理引き剥がされたとの事。

そのショックで大いなる意思は力の一部を欠損、ナツメとのリンクも途切れ、回復に努めなければならぬと言った。リンクが途切れてしまえば居場所も分からない。

「何？ この狙い澄ましたようなタイミング。

障害は恋愛のスパイスって言うけど、程度ってものがあるでしょう！？ 大いなる意思は全然役に立たないし、その上『ディアブロンキスタ魔王討伐』！？ 味付けが濃すぎるわ！」

『ディアブロンキスタ』。

規模が規模だけにエルフの方にもその存在だけは伝わっていた。組織の目的は魔王討伐、聖地（もう無い）奪還。

これに対してエルフは凄まじい反発を見せ、一部強硬派は打って出ようとする者がいる始末。

そしてそれは魔王の嫁、ルクシャナの説得により一時的に鎮まる事となった。

「後少しだったのに！ 考えられる？ 目の前に居るのに眠ったように、何の反応も見せない恋人を見る事がどれほど辛い。でも見えていないと、もっと不安になるの」

傍で見ているも苦痛、見ていなくても苦痛。

まるでガラスケースに入れられた様で、触れる事が出来ないから体温も心臓の鼓動も感じられない。

その壁を壊そうとハンマーを何度打ちつけようと魔法を打ち込もうとも傷一つ付かなかった。

ルクシャナは怒鳴り散らしたかと思うと急に萎んで小さくなり、

「……………いい加減、限界なのよ……………」

細く弱々しい、消え入りそうな声で呟いた。
体は震え、目は充血し、涙が頬を伝っている。

「でも君はハルケギニアに行ったとして、人間を殺せるのかい？
唯調査に行くのとは訳が違うんだ。本当に気に入らないが、アイツ
はどんな犠牲を払ってでも取り戻さなければならぬ重要な人物だ。
必ず血が流れる」

ルクシャナは人間を知り過ぎた。

蛮人としてでなく人として見ている節がある。

エルフとの境界など無いかのように。

「アイツも、君が？殺す事？を嫌がるんじゃないか？ 奴自身、無
関係な人間を殺すのを嫌がっている節があるし」

ナツメの事を引き合いに出す事でルクシャナを止めようとしたのだ
ろうか。

ルクシャナはアリーを睨み返して言った。

「そんなの男の独り善がりよ。

ただ綺麗なままでいてほしいからって、男が女に押し付けてるだけ
じゃない」

暗に必要とあらば？殺す？と言っているようなものだ。

「もし君に何かあったら、奴はどう思うだろうな。ゴミ屑みたいに、
人間を殺す自動人形にでもなるんじゃないか？」

「殺戮なんて馬鹿な事に走るような人じゃないわ。下手人が首謀者
に復讐するかもしれないけど、そんな後戻りできないような選択、

すぐ気付くわよ」

ルクシャナは自信たっぷりと言った。

涙が流れた跡が見え、その鼻声には説得力はない。だがその目には弱々しさは無い。

「アリィー。私を引き止めようとしたって無駄よ。

あなたを殺してでも、私はナツメを迎えに行くつもりよ」

妙にすつきりした顔。

ルクシャナは他の存在など全く気にしていなかった。

するとアリィーは鼻で笑いながら言った。

「はっ、殺すだって？ 君が僕を？ 冗談も程々にしてくれ」

「別に肉体の機能を停止させる事だなんて誰も言ってないわ。私が言ってるのは社会的な抹殺よ」

怒り狂っていたせいだろうか、ルクシャナの服や髪は乱れている。

胸元からは若干の成長を見せる双丘、そして泣き顔。

泣いた事で目は充血し、鼻声。

部屋の中は彼女が荷物を準備していたせいで散らかっている。

「はっ！ まさか」

「ここで叫んだらどうなるかなんて分かり切ったことよね。

どう見ても性的行為を強要されたか弱い女性という事になるわ」

ルクシャナは焦るアリィーをニヤニヤと眺めた。

「そんな事、信じる奴がいるわけ……」

「信仰心とは時に人を盲目的にするわね。ブリミル教徒や最近のエルフがいい例だわ。聖人の妻と唯の騎士^{フェアリス}。皆はどちらを信じるかしらね？」

神に近いとされている人物と一介の戦士。

「き、汚いぞ！ そんな卑怯な真似、ムニイラ様に伝われば」

ルクシャナは汚い物を見るような眼で淡々と言った。

「黙れ既婚者。浮気者として処理される」

アリーイーは既に妻帯者となっていた。

「全く、いつの間にか恋人ができたと思えば結婚だあ？ こっちは限りなく灰色な研究生生活だったのに。男が惚気話なんてするな！ 耳が腐る！」

「なっ、唯の嫉妬じゃないか！ それにいつの話だよ。僕は君を心配してきたのに」

「妬んで何が悪い！ ラナもラナでアリーイーがアリーイーがうるさいのよ……」

「彼女は関係ないだろう！」

ラナ。

アリーの嫁。

ルクシャナの元クラスメイトで友人。
ナツメとルクシャナの関係を世間に暴露した人。

「新婚直後は許すわ。もう三年経つんだからいい加減落ち着きなさいよ。彼が物凄く優しい？ 大切にしてくれる？ 最近騎士フェアリスになつて一層かっこよくなった？ はつきり言つて笑えないのよ。アリー、あなたの言葉も今の私には毒でしかないわ。幸せな人から見たら不幸に映るんでしょう？ 余計なお世話よ」

鞆に荷物を乱暴に押し込みながら、
ルクシャナの開き直った言い様にアリーは押され、赤くなりながら黙ってしまふ。

「幸せを感じなくても、不幸じゃない。まだ打つ手があるもの。絶望するには早すぎる」

そう言うとルクシャナは鞆に荷物を詰め終わった。
呪文を呟くとそれは浮き上がり、彼女が移動すると共に付いて行く。
部屋のドアの前に立つと言った。

「心配してくれた事には素直に嬉しいわ。ありがとう」

ルクシャナがドアを閉める音が聞こえるとアリーは再び平静を取り戻し、小さく独り言を言った。

「彼女を選ばなくて正解だったかもしれない」

凄まじいまでの行動力、余り後の事を考えない性格。

バカならそれまでなのだが、よく動く頭と知識があるから余計に性質が悪い。

そしてここ十年は、アデールと北方の聖地の行ったり来たりを繰り返している。

『動く森』『死の山脈』の常連と化したルクシヤナは、並の戦士を上回る体力と体術を身に付けていた。

アリイーは別にナツメの事など心配しちやいなかった。

あの魔法、体力的にも反則だし、今回もどうせ茶番、すぐ帰ってくるだろうと。

それより彼女に振り回される方が、被害が大きいじゃなかるうか？

一瞬、魔王ナツメに対して憐みを感じたのだが。

「精々苦しむといいよ」

アリイーは本当にナツメが嫌いだった。

建物から出たルクシヤナは涙を拭いて、評議会本部に向かって歩き出した。

通りでは多くの視線が彼女に集まる。

聖女。

実際それとは程遠い者なのだが、信仰という色眼鏡を通してみる彼女の姿は、エルフにとってはとても徳が高い者に映るのだろう。

恭まじろしく礼をする者。

憧れの視線を向ける者。

供物でも奉げているつもりなのか色々物をくれる人達。

中には子供の名前を付けてくれたとか、畑の作物が育ちませんどうしたらいいでしょうだとか。

専門外もいい所だ。

ルクシヤナはため息をついた。何事も程々がいいと。ちやほやされるのとは度が違うのだ。

大いなる意思に近いと言うだけでこの扱い。何もしてないのに。あの巨大な存在が実際に自分の事を他のエルフと区別できているか怪しいにもかかわらずこの敬い様。

学者として論文発表するにも匿名でないと絶賛されるだけで正当な評価すら得られない。

実力が認められた訳でもなし、何か凄い事をした訳でもないのに偉大な者として扱われるのは気持ち悪いことこの上なかった。

特別親しい者以外は、彼女を畏怖し、神聖な者として距離を取る。

学校ではルクシヤナの親友と呼べる者、外ではナツメの為人をよくひととなり知る者を除いて多くがその反応を示した。

ルクシヤナはそれに対していろいろ主張して特別扱いを拒否するのだが余り効果があったとは思えない。

だからだろうか、決して態度が変わる事がない母と叔父に一層甘えるようになり、ひとしおナツメを求めるようになっていた。

「邪魔な肩書ね」

いくら能天気で馬鹿正直に受け取らない性格をしているとはいえ、こつも過剰に持ち上げられるのは精神的に疲れる。

まあ種族として理性的なエルフであるので流石に部屋まで押しかけて来ることは無いのが唯一の救いか。

「随分と早いな。準備はもう終わったのか？ 聖女殿」

カスパの入り口では、諜報部隊を率いる筈のビダーシャルが待っていた。

「もう！ 叔父様までいじわるしないで！ その呼ばれ方嫌いなもの知ってるでしょう」

ルクシャナは頬を膨らませいかにも怒っています、というようなポーズをとる。

「いやいや、すまない。崇めるのも度が過ぎると滑稽なものでついな」

ビダーシャルはからかいながら彼女の頭を撫でた。

「ねえ、それで出発はいつになるの？ 行動日程は？ 新しい情報は入って来た？」

二人は魔法昇降機に乗り、ルクシャナは目的の階を告げる。

「そう急くな。出発は明朝、行動日程と情報に関しては、後で評議会から説明がある」

動き出す昇降機の上で会話は続く。

「うわ、あの堅苦しいおじいちゃん達に、また囲まれるの？」

ルクシャナは顔を歪めた。

一応評議会の議員は色眼鏡で彼女を見ない数少ないエルフなのだが、

どうも馴染まないのだ。

聖者の妻に恥じぬよう慎みを持って、行動を自重しなさい、下品な言葉と蛮人の真似を控えなさい表向きだけでいいから、と。彼女自身猫被りは得意ではないのでその手の話はいつも無駄に終わる。

「お前の？それ？も彼の影響か」

ビダーシャルは呆れ顔でルクシャナを見た。

「違うわ。これは元々」

「招集がかかる回数は、これからもっと増えるだろうな」

「本当に勘弁して。研究に支障をきたすわ」

ルクシャナが肩を落として答えるのを見てビダーシャルは笑みを浮かべた。

「その様子なら大丈夫だな」

「え？」

「冷静に事を捉えている。もっと酷い有様になると思っていたのだがな」

「さつさと彼を連れて帰る。怒るのはそれからよ。まあ、さつき爆発したから当面は大丈夫！」

ルクシャナは笑いながら答えた。

笑えるわけがない、でも笑っていないと不安と恐怖に押し潰されそうになる。

風石に閉じ込められたまま連れ去られたのだ。

もし人目に付く場所で身動きが取れないとなるとそれは致命的だ。

「そうか」

ビダーシャルは短く相槌を打ちながら彼女の頭に手を置いた。バレバレだった。

「お前は感情を隠すのが本当に下手だな」

「正直者と言って欲しいわ」

「だから交渉に関しては、一切期待していない。ついでに言つと戦いも」

「私が付いて行く意味無いの!？」

「立場上、付いて来るだけで士気が上がるからな」

「くっ、所詮唯のお飾りに過ぎないと言つのか!」

実際その通りだった。

体力、戦闘技術、精霊魔法の行使、たとえそれらが優秀であったとしても本職との間には壁は必ず存在する。

それは覚悟、戦いに対する姿勢、敵を情け容赦なく処理できるか、そして戦場における経験。

しかも諜報部隊は騎士フェーリスの称号を持つエリートばかりで構成されている。

ルクシャナが勝っているとすれば人間に対する知識程度の物。

「だから、任務中は大人しくしていなさい。少なくとも彼を確保するまでは」

「善処します」

「上官命令だ」

「聖女権限発動。命令を撤回しなさい」

そんな権限、存在しない。

「とりあえず、少しは元気が出たようだな」

ビダーシャルは、ほっと吐息をつく。

ルクシャナは叔父の気遣いに感謝すると同時に釈然としないものを感じた。

あれ？ 私、結局お荷物扱い？

そして昇降機は停止し目的の階に着いた。

「ああ、それから隊員の言う事も、よく訊くように。変に聖女面して召使いにするなよ？」

「はい」

ルクシャナは軽い返事をした。

「本当に分かっているのか？ お前は」

「分かっていますよー。ちゃんと叔父様の言う事聞かないと、ナツメに会えないんでしょう？」

ルクシャナは不意に言葉にできないような、どこにぶつけていいかも分からない憎悪を感じた。

「そんなの死んでもお断りよ」

それでもそれは表に出ず、声は明るい物だった。

召喚されて三日目。

長すぎる髪をざっくばらんに切り落とし、ローブを目深かに被ることにした。

備え付けの鏡で目元が分からないかを確認する。

豪華な装飾の付いた鏡は、不気味な幽霊を映し出した。

「よし」

「よし、じゃないのね！ 全く、あのおチビ。偉大な古代の着族たる、わたしを召喚しておいて、扱いがおざなりなのね！」

部屋を占領されていた。

骨付き肉に齧りついている、長い蒼髪が特徴的な少女に。

彼女はベッドの上でやさぐれながら自分の主人に対する文句を言っていた。

「イルククウ。お前、もう和解したんじゃないの？」

召喚した初日に転がり込んできたと思んで愚痴をかまし、ベッドを占領した。

裸で。今は簡素な平民の服を着ているが。

「シルフィがちょっと下手に出たと思ったら、急に冷たくなっちゃって、お姉さまったら酷い」

きゅいきゅい、うるさい。

「いや、もらった名前使ってるじゃない。しかもお姉さまって」

要はかまってくれないから拗ねているのか。

彼女は骨に着いた肉を全て食べ終わると今度はその骨をバリバリと食べ始めた。

竜が『変化』の精霊魔法で化けているとの事だが、一体どういう原理なのか。

身に纏っている魔力は見えても、全く理解できない。

「はっ！ しまったのね。わたしとした事が、こんな初歩的な罠にひっかかるなんて」

「罠もくそもねえよ」

「とにかく！ シルフィのご主人はもっところ、シロちゃんみたいな、凄い力を持った人が良かったのね」

シロ。好きなように呼べと言ったらこうなった。

「いやいや、君は恵まれてると思うよ。見てごらん。あの黒髪黒眼の少年、あんなに罵倒されて。昨日はあんなに頑張ってたのに」

窓の外では才人がルイズに蹴られ、怒鳴られていた。

昨日は、ルイズ嬢が怒鳴って才人少年がそれに幻滅して適当にオスマン老に言いくるめられた後、両者とも不満を残したまま契約が成された。

そしてその日の午後、金髪二股ナルシスト少年のプライドを粉微塵に砕くイベントがあった。

「あ、鞭」

痛そう。

まあ食事と寝る部屋がきちんと用意されている分、良い……と言え
るのだろうか？

「うわあ、流石に竜の状態でも、あのムチは嫌なのね」

「でしょう？ 高望みしすぎだよ。君のご主人、あのぐらいの年齢
じゃ、かなりのもんだろう？ 優しいかどうかは、これからの付き
合いで分かるとしても、アレより酷いのは中々居ないよ」

僕は窓の外の二人を指差しながら言った。

「も、尤もなのね」

ふと、部屋の外、廊下の風がざわついた。

「あ、来たみたい。シルフィ」

「タイミングが悪いのね。お姉さまもシロちゃんみたいに、空気読むべきなのね」

無理だろう。

「拗ねてないでさっさと行け。面倒だ」

「お姉さまに続いてシロちゃんまで冷たい。きゅいきゅい！」

だから、きゅいきゅいはうるさい！

人間ではないから警戒心を解いていたのに。こいつが二百歳だなんて信じられない。

惰性で生きているところなると言うのだろうか。
イラッと来た所でドアが開いた。

「……お、お姉さま」

シルフィードは酷く狼狽したかと思うと僕の後ろに隠れた。

見た目が二十歳、中の人四十一歳の童貞男の後ろに隠れる自称二百歳の少女、そして男の目の前には十二〜三ぐらいだろうか、自称二百歳よりずっと小さい蒼髪の眼鏡っ子が大きな杖を片手に立っていた。

事情を知らない者が見れば、年若い青年が思春期の姉妹に挟まれて
いるように見えるだろう。

ただし、修羅場ではない。

「ほら、諦めて早く投降したら？ 今なら謝れば許してくれるかもよっ。」

すると、反応したのは後ろに隠れたシルフィードではなく部屋に入
つて来た少女だった。

顔には感情の変化が見て取れないが、杖を構え、しっかりと立ち臨
戦状態に入っている。

「シルフィード、君のご主人、相当にお怒りのようだね。これはも
う謝るだけじゃ済まないかも」

そう言うとシルフィードは頭を抱え、ひいいい、と縮こまった。

数秒ほど睨みつけられ膠着した後、蒼髪の小さい方が目を見開いた。
驚いているのだろうが、表情が良く分からない。

「……あなたはもしかして」

嫌な子。ここに来て気付きやがった。

「悪魔？」

「お姉さま！ 大いなる意思の眷族にそんな酷い悪口、いくらお姉
さまでも許せないのね！」

後ろから威勢良く大きい方の蒼髪少女が言った。

きゅいきゅい、ややこしくなるからお前は黙れ。

蒼髪の小さい方はぶつぶつと何か言い始めた。

「どうして魔王が……」

「今ここでそれをばらしたら、どうなるか分かるよね？」

ディアブロ・コンキスタが攻めてくるのが早まる。

僕はできるだけ優しく語りかけたつもりだったが、小さい方の少女は後ろに飛び退いた。物凄く警戒してらっしゃる。

「いや、君を殺すとかじゃないから！」

学院長と既に約束したし。契約ではないが。

「シロちゃんはそんな野蛮な事しないのね。というかお姉さま、不敬なのね。大いなる意思に楯付いてるのと一緒よ！ きゅいきゅい！」

「きゅいきゅいは黙ってる！」

後半は余計だ。

「どういう事？ 魔王はあなた達の神？」

小さい蒼髪少女は一人シリアスに考えていた。

「そうでもあるしそうでもないのね」

「口を開かないで……お願いだからホント……」

僕の言葉を無視してシルフィードはぺらぺらと喋り出した。君、本当は『大いなる意思』信じてないだろ。

「いい加減黙れ」

僕は彼女の口を押さえた。もがもが言ってるが気にせず続ける。

「大いなる意思に直接、天罰を下してもらおう事になるよ?。」

そんな器用な真似、できないだろうけど。

そう脅すとシルフィードは大人しくなった。顔が青いが気にしない。大きい方が黙ると今度は小さい方がしゃべり出した。

「あなたの力を」

「嫌だ断る面倒くさい他を当たれ」

彼女が言う前に牽制した。

「魔王じゃなくて勇者を当たれよ。こっちは一々かまってる暇ないんだ」

「勇者は当てにならない。あのシリーズで勇者が勇者してるのは最初の一卷だけ。続巻はロマリアの手先」

蒼髪の小さい方は淡々とした口調で言った。

イーヴァルディの勇者シリーズ、そう言えば何巻まで出てるんだろ
う。

「明日にはこの国出るし、第一、悪魔に頼ったらこの世界じゃ生きていけないだろう?。」

オスマン老から必要な情報は聞けるだけ聞いた。

王宮に魔王の存在を知らせるらしいのから、

あとはこの国を出てアルビオンで泣きついてくるのを待てばいい。

「教皇は魔王に対して、基本的に不干涉だと言っている。手を出さなければ異端審問は無い筈」

「手を出す気満々なんだけど。それに不干涉なのは魔王だけで、それに関わった人間は異端になると思う」

彼女は目を丸くした。眼鏡越しでもそれは良く分かった。

「本当に悪魔？」

「今更何を言ってるのか」

すると彼女は何を思ったのか、僕の前で膝き、首を垂れた。纏う雰囲気が一変した。

先ほどからの表情の無い小生意気な感じはどこことなく上品な気高い趣に変わる。

「お願いします！ 私が支払う事が出来る対価なら何でも差し上げます。体だろうと命だろうと何でも。だから」

そして顔を上げて言った。感情の見える表情で。

「お願いします。助けて……」

たぎるような思いのこもった、必死さが伝わってくる願い。

一生の一度の願いでもするかのような。相当溜まっていたのだろう。彼女の涙腺は崩壊し声を上げて泣き出してしまった。

「あー、シロちゃんがお姉さま泣かしたー。酷いのね！ きゅいき

ゆい」

「お前は正真正銘、掛け値なし、まぎれもない本物の空気読めない奴だよ！」

とりあえず僕は聞かれたらまずいと思いでアを閉めた。

幸い、外には誰もいない。風とリンクしても人の気配は感じられない。

「まずは落ち着いて。そうじゃないと話ができないから。ああこれ使っていいよ」

僕はなだめながらをハンカチを彼女に渡した。

涙と鼻水をチーンとかむ姿はどこか小動物を連想させる。

「はい、落ち着いて深呼吸」

頭を優しく撫でながら言った。

それに従い、蒼髪の小さい方はゆっくりと息を吸い、吐く。

三度ほど繰り返すと、目は充血してるもののすっかり平静を取り戻していた。

溜息をついた。何でこんな父親じみたことしなければならぬのか。全く、こっちは自分の事で精一杯だったのに。

「先に言っておくと、こっちは君の事情は知らないし聞く気も無い。今の状況がまずいのは分かるだろう？」

ディアブロ・コンキスタを潰さない事にはを赤の他人を助けるなんて事、絶対有り得ない。

蒼髪の少女はコクンと頷いた。

「だからね、先に敵対勢力潰してからじゃないと、人助けなんてする気起きないの。しばらく待って」

「それは願いを聞き入れてくれるととっていいの？」

「やっぱりどうしようか……」

本当に悩み所だ。ディアブロ・コンキスタが簡単に潰れてくれるとは思えないし、潰した後は始祖の秘宝の破壊を進めなければならぬ。

四王家に繋がりが有るような人間であればそれは喜んで恩を売っておくべきなのだがこの少女はトリステインの王家とは関係なさそう

だ。
「そう言えば君、名前は？」

「タバサ」

「家名無しか。偽名じゃどうしようもない」

「何で分かった!？」

息をのむような声。

「ねえ、そんな馬鹿に見えるの？ そんなに頭が可愛そうな人に見えるの？ 本気で言ってくなくても助ける気失せるわ！」

さっきの嘘泣きなんじゃねえか？ こいつ。

「冗談。シャルロット・エレーヌ・オルレアン」

オルレアン、オルレアン……。

「あれ？ トリステインにオルレアンなんてあったけ？」

「無い。ガリアの元公爵領。今は取り潰されて、無い」

「へえー、タバサっていいとこのお嬢様だったのか」

心中に感じる動揺を紛らわすかのように軽口調で言った。

オルレアン公って事は王族……宮廷内の権力闘争しか浮かばない。

「所で願いつて何？ ああ、死んだ人間を蘇らせるとかは絶対無理だから」

「心を狂わされた母を元に戻してほしい。それからガリア王ジョゼフに復讐したい」

生存への道が開けた気がした。目の前の問題はとても大きいけれど、しかし復讐とは何とも重たい物が来たな。

それにこの子、淡々とその事を言う当たり結構壊れてきてるのか？

「前者は専門外だから無理。伝手はあるけど。後者は報酬次第で」

心を狂わされる、魔道具か薬なのだろうか？

するとタバサは身を乗り出して言った。

「報酬は何を渡せばいい？ 何をすればいい？」

「だから興奮しなさんな。話が進まんでしょ」

僕はタバサの額を小突いて言った。

「僕は今、四王家にあるとされている、始祖の秘宝が欲しい。と言
うかそれ以外の報酬じゃ、動かない」

「?そんな物?でいいの?」

タバサは気が抜けたように尋ねた。

「?そんな物?つてねえ。まあ、必要なだよ。深くは考えないで
ほしい」

?僕の?死活問題につながる重要アイテムである。

「契約は……成立?」

恐る恐る? でいいのだろうか。感情の分からない表情でタバサは
こちらを見た。

「悪魔と契約ね。ようこそ異端の道へ」

僕が手を差し出すと彼女は握り返して言った。

「契約成立」

笑っていた。

不気味な笑いではなく可愛らしいものだった。

だが、それが逆に場の空気を不気味な物にしていた。

まだ午後を少し過ぎたぐらいで明るいのには、僕の着ている服のせいもあってか雰囲気は薄暗い。

「それとね、タバサ。さっきの泣き落としは卑怯な手だ」

「悪魔に卑怯とか、言われたくない」

彼女の第一印象は結構強したたかな女の子、というものだった。

エルフより憎しみをこめて（後書き）

真面目な話が書き辛い。

久しぶりの空の国（前書き）

読み返したらなんか気持ち悪かった。

久しぶりの空の国

鮮やかに澄み渡り、見る者を飲み込んでいきそうな蒼。

真上が深い蒼、遠くなるほど徐々に、白に近い水色へと濃淡が付いている。

その蒼の上には、油絵の具を筆で押し付けたように掠れた雲が少し。その上を時折、巡回の竜が通る。

視界の両側には城下町の建物の屋根が入り、道行く人々の喧噪が耳に付く。

騒々しいとは言っても物々しい雰囲気はまるで無く、笑い声や祭りでもないのに打楽器を叩いたり笛の吹く音すら聞こえてくる。

「あゝ平和だ」

ロンディニウム城、城門の前に立っている衛兵二人の内一人が呟いた。

実際、視界に入る限りの城下町の様子は平和そのものだった。

唯、他国の人間が見たら卒倒するかもしれないが。

鞆を肩にかけた翼人は配達か何かだろう。上手く空中に留まって紙の束を確認している。

武骨な獣人の男ライカンが一人で大きな酒樽を担いで建物の中に入って行く。入れ違いで出て行った土人コホルトはどこかの店の店員なのか前掛けをしていた。

「この光景も慣れるとなあ」

もう一方の衛兵も緩んだ様子で言った。

城門をくぐる平民は仕立て屋や菓子屋、それから最近では亜人の工芸品職人までも出入りするようになっていた。

「へえ、先輩に慣れていない時期有ったんですか」

「そりやお前は二年前ぐらいに王都に来たから分からんかもしれな
いがな、それ以前、十数年前は人間しかいなかったんだぜ？ 俺も
ここに来た時は自分の目を疑ったもんだ」

「まあ、確かに」

二人は視線を城下町の方へ移す。

相変わらず人間の方が多いのだが、その中に犬頭、狼頭の人も居ても突っ込まない。

笑顔で翼人から手紙を受け取る人間もいる。

「魔王ってどんな人なんでしょうね」

「さあ？ 魔王って言われるぐらいだ、とりあえず怖いんじゃないかね？」

「六万を一人で皆殺しにできるなんて……確かに居るだけで怖いか
もしれませんね」

「バカ、お前そりやデマだ。実際は六千だったらしいぞ。いろいろ
やり過ぎたもんだから尾ヒレが付いたんだよ。悪い噂の大半は教会
が流した噂って話もある。こないだ話に上がったロングフォード
の不作、実際は肥料の錬金が失敗しただけらしい」

「魔王の呪いのあれですか」

ブリミル教保守派の考えに賛同する司祭から広がったデマだった。邪気を祓う、と言う名目で金を巻き取るうとした、とのこと。

「まあ、司祭が捕まった後の事は知らないがな。それより俺は魔王は正義側だとつくづく思うのだが？」

「正義？ この国には割と良い話が残ってますけど、暴虐の限りを尽くした様な話ばかりじゃないですか」

後輩は先輩に疑問を投げかける。

「違うーう！ 違う違う！ 俺はそんな事を言ってるんじゃない！」

「……………？」

後輩は分からず首をかしげた。

「ティファニア様だよ」

「ああっ、なるほど！ それには同意」

種族融和政策のさきがけとなった国。

アルビオンの王家はエルフの血が入るといふハルケギニアでは異例の事態が起こっていた。

魔王がこの国を出る直前に『エルフを始め他種族に対する弾圧』を戒める発言した事もあり、今やアルビオンでエルフは恐れる対象から外れようとしていた。

弊害として他国、とりわけトリステインから白い目で見られる事となったが。

「輝くばかりの長い髪、水の精霊石のように透き通った瞳、太陽の光を知らない白く綺麗な肌、正に妖精だ！　そして極めつけは女性の象徴ともいえる二つのアレだ！　正直耳が尖ってる事なんて瑣末な事に過ぎない」

後輩は呆れたように先輩を見た。

「あの方が通り過ぎるのを間近で見た時は身震いがしたね。同時に疑問も湧いた。何故、体はあんなに細いのに、そびえ立つ双丘はあれほどまでにポリウムがあるのか」

「アレって……」

興奮した先輩に後輩は引き気味だった。

「どうした？　お前、あの巨大な二つのアレに反応しないというのか？　それは男としてどこか欠けているかもしれないぞ」

「いえ、ティファニア様の胸が素晴らしい点は俺も納得です」

「バツカ！　胸とか直接的な表現するなよ。紳士として恥ずかしいだろうが！」

「この話をしてる時点で紳士からは程遠いでしょうよ。まあ、紳士は置いといて母君のシャジャル様も綺麗ですよね」

先輩衛士は冷静さを取り戻し後輩衛士の意見に対して論じた。

「そうだな。シャジャル様はティファニア様には無い、大人の色気

がある。二つのアレはティファニア様程ではないが。それにとても大きな娘がいるとは思えないほど若々しい点も」

「凄いですよね。一体何歳なんだろう？」

「永遠の二十五歳であってほしい」

勤務中の無駄話は弾んでいくのだが不意に先輩衛士はため息をついて言った。

「それにしてもウイリアム大公は気の毒だな。娘の晴れ姿も見れずに病気で亡くなるなんて。婚約者すらまだ居ないんだろう？」

「先輩にも愛国心と言う物があつたんですね」

「悪魔大公の病死か……これこそ呪いじゃなかるうか」

魔王が去った後、獣人やら翼人、追加のコボルトが魔王の噂を聞きつけて流入してきた。

これにより元々在ったコミュニティは一気に膨れ上がる。

使われていない土地は山ほどあるがその土地を治める領主との折衝、他種族との取り決めなど改定の問題が追いつかないほど出てきた。

亜人が増える事により、人間とのパワーバランスが拮抗し始めた事もまた問題の一つに上がり、議会を悩ませる種となる。

事実、獣人の中でも狼頭をした者達ライカンスロープには好戦的な者も多い。

その荒くれ者の集団が流入してきて、一時期アルビオン国内を騒がせたりもした。

「魔王つて戻ってくるんでしょうか？」

「さあ？　これだけ悪者扱いされてんだ、ハルケギニアに戻ってくるならロマリアでも滅ぼそうとするんじゃないかねえの？」

衛兵二人は街の人混みを眺めながら引き続き警備に当たることにするのだが、

「おい、あれ何だ？」

急に人混みが割れ、先ほどの賑わいが影を潜めてしまった。

両脇に寄った人々の真ん中を歩いてくる人物が一人。

髪は驚くほど白い。

貫禄のある杖を片手に、灰色のローブに身を包んでいた。

男は城門の前に立つと衛兵が声を発する前に言った。

「王に取り次いで欲しい。悪魔が面会を求めていると」

表情は前髪で隠れて見えない。

「何か書状はあるのか？　無ければ身分を証明するものでもいい」

すると男はしばらく考えた後、前髪を真ん中に分けた。

「これでは身分証明にならないだろうか？　一応珍しい容姿らしいのでね」

紅い眼。ハルケギニアでは月目よりも不吉な物とされる真っ赤な瞳。アルビオン以外では忌み嫌う物。

悪魔の目。

それを見た警備の衛士隊は固まってしまった。

「ま、まさか、本物で？」

「足りないというのならこの杖を持って行ってくれ。王が古参の側近に見せれば分かる筈だ」

そう、杖を渡してきた。

メイジの力と権威を象徴する杖を。

まるで杖などなくてもどうと言う事は無いと言っているようなもの。しかし男に動揺した様子は微塵も無く、不思議な迫力さえある。

「先輩！ 自分、取り次いできます！」

後輩衛士は杖を取ると、逃げるようにして城内に走って行った。実際逃げたのかもしれない。後ろで衛士たちがざわついている。

「こちらには久しぶりに来たものでね。どう変わっているかどうしても気になってしまって、なるほど随分と発展したようじゃないか」

魔王と思われる男は懐かしむように城下町を眺めていた。害意などは感じられない。

衛士は思い切って尋ねてみた。

「今回はどういった用件で？」

「ああ、ガリアの方でディアブロ・コンキスタなる組織が立ち上がってるそうじゃないか。その処理」

ディアブロンキスタ
魔王討伐。

文字通り、魔王を倒し聖地を奪還、ハルケギニアを統一を掲げる組織。

その規模からハルケギニア中に知れ渡っている。

「処理、とはまた軽く言いますね」

「そう言わないとやってられないだろう？ 正直こっちはうんざりだ」

魔王？は苦笑しながら言った。

「全く、本当にやってられない。二十年前の新教徒狩りはいつの間にか悪魔討伐に挿げ変わってるし、教会監修のイーヴァルデイの勇者で民衆への刷り込みはバッチリと来たもんだ。おまけにやって無い事まで……」

「はははは。確かに笑っていないとやってられない」

衛士は魔王の愚痴に人間臭さを感じ親近感を覚えた。

「しかしディアブロンキスタと言う事はこの国も戦争になるんですかね？」

「まあ、この国に求めるのは失敗した時の備えだ。今の所は空の上まで問題を持ち込むつもりは無い」

地上で片を付けると言う事なのか、魔王は淡々としている。

「亜人の連中は激怒してますよ。特にコボルトは。アバターの敵を、

大いなる意志の敵を打ち砕けてね」

「それは嬉しいね。利用するには気が引けるが」

魔王はため息をついて言った。

「魔王もため息をつくのですね」

「ため息ばかりだよ。本当に。幸せを手に入れたと思ったたらこれだ。ため息しか出てこない」

そうして二回目のため息をついた頃に、

「入場許可が下りました。お入りください」

取次の衛士が戻ってきた。

「ああ、ではな」

魔王は衛士から杖を受け取ると城門をくぐった。そして悪魔に似つかわしくない台詞を言った。

「詰まらない愚痴に付き合ってくれてありがとう」

その様子に戻ってきた後輩衛士は驚き、

「先輩！ 何があったんですか？ ありがとうって何ですか!?!」

興奮して詰め寄った。

「は？ ああ、普通に話してただけだけど」

「普通に？ 魔王と普通に会話したんですか？ と言っか会話が成り立っただんですか！？ すっげええ！」

その後輩同様、衛士隊の面々も駆け寄ってきていろいろ言う。隊長は苦々しげだ。

背中を叩かれたり、何を話したんだとか、度胸あるな、だとか。彼の頭の中は自分の魔王に対する印象が違い過ぎていた事ばかりが反芻して、それらの言葉は耳に入らなかった。

「先輩、どうしたんですか？」

「いや何、悪魔も幸せを求めるのだったね」

召喚されて四日目。

アルビオンに到着、魔法学院には置手紙を残し半ば無断で出てきた。

ロンディニウム城、城内の様子は昔と余り変わっていないかった。

石造りの城は老朽化が遅いので、壁自体が新しくなっていたり増築されていたりと言う事は無い。

僅かに変化があるとすれば調度品ぐらいだろうか。

シンプルな壺、風景画のほつが肖像がより多かったり、訳が分からないオブジェがあったり。

そして一際目に付いたのは壁の装飾は昔、博物館で見たエジプト美

術のような絵。

バリーと名乗った老人に連れられながら、つい足を止めてしまった。

「これは？」

「ああ、それですか。それはコボルトが描いた物ですよ。左側の白い頭の人物があなたでそれに向かって跪いているのがコボルトです。タイトルは『示聖』」

コボルトの魔王神聖視は取り返しのつかない所まで来ていた。

僕は頭を抱えそうになる。

「私も昔、遠目ですがナツメ殿を見ておりました。年若いにもかかわらず多くの人々に救いの手を差し伸べなさって」

「その前に大量の命を奪ってますけどね。それに、あの時はこちらが先に助けてもらったのだから、別に気にする事じゃありませんよ」

「話に聞いていた通りですな。賞賛を否定しなされるのもお変わり無いようで。謙遜も過ぎると卑屈になりますよ。ああ、これは老人の忠告とでもとっておいて下さい」

バリーは嬉しそうに言った。

「面倒なんですよ。私はそんなに度量の大きな者ではありません。できる事も限られるし、神のように崇められても困る」

「神を騙り、人を踏み台にするディアブロ・コンキスタよりは遙かにましでしょう。それに実際この国は救われています」

それは違う。救われたのは魔王ではなく王党派の人間が働いたから。それに亜人の協力があつたから。

「こう言つと貴方は『きつかけを作つたにすぎない』とおっしゃるのでしょうか」

「良く分かりますね」

「王宮で長年、人を見続けていますので。ある程度は分かっているつもりです。ああ、着きました」

執務室の扉の前には衛兵が立っていた。

魔法衛士隊の隊員なのだろうか城門の兵よりも制服が綺麗なものだった。僕は杖を預ける。

バリーは衛兵に言った。

「ナツメ殿が参つたとお伝えください」

そして隊員はドアを開け執務室の中へと消える。再度出てくると、入室の許可を狼狽して言った。

衛兵に礼を言い、執務室に入ると複数の視線が集まる。

一人は軍人、軍服に身を包んでいる。恐らく将校かなんかだろう。

そしてもう一方は真っ白な頭に王冠。

二つの視線に共通する物は驚嘆。

「おお。おお、おお、おおお！ 何と懐かしい！」

アルビオン国王ジェームズ一世は大げさに両手を広げて言った。僕は跪く。

「お久しぶりです。陛下」

「お主は本当に突然現れるな。幻覚でも見ているようだ」

過ぎた年月のせいか王は記憶にある力強い姿とはかけ離れ、老いを感ぜさせるほど体は小さく感じる。

しかし、発せられる声ははっきりとしていた。

「悪い事と良い事が同時に起こるばかりだ！ 悲しむべきか喜んでいいのか……」

「どうかなさったので？」

「ああ、去年の暮れ突然ウィリアムが逝ってしまった」

モード大公は亡くなっ たらしい。まあ、年齢的に有り得ない訳ではないのだが。

「かと思えばウェールズの戴冠式の日取りが決まって……朕も一息つけると言っ所なのだ」

王の雰囲気は沈んだかと思えば急に浮上した。

「それはおめでとっございます
なるほど。」

ウェールズ王子がどのように育っているかは知らないが後継ぎ問題が終わって何よりだ。

「ナツメよ、お主がこの国に来た事は吉報ととって良いのか？」

「どうなんでしょうね。この国にとって良い事か悪い事かなどこれからの対応でいくらでも変わる、としか言い様がありません」

その曖昧な返答に王は吐息をつく。どこか疲れを感じさせる。

「やはり例の勢力か……。お主はこの事態をどう見ておるのだ？」

「まだ情報が少なすぎてはつきりとした事は言えませんね」

指導者の名前をつい昨日聞いたばかり。

ロマリア保守派ミケレ・ディーオ。

神の天使と言う意味を持つ。

名前負けしてそうだ。

他にも聞き覚えのある名前がいくらかあったのだが、重要と思えないので省略。

拠点となっているガリアのアテムト地方は国境のラグドリアン湖から三百キロメートル程しか離れていない。

そしてトリステインは国力が落ちてきているとの事。

よってディアブロ・コンキスタが現在トリステインを照準を合わせているのはほぼ確定的。

「唯、魔王と亜人に比較的寛容なこの国は攻撃対象に成り易い。トリステインが飲まれた次はここが標的になるかと」

公に亜人を受け入れている国。

他の三国が許容していなければ彼らがアルビオンを目指すのは自然な事だった。

荒地地の多くが耕され畑地が急増し、郊外の建物も増えている。王都だけ見ても市街地は拡張され、以前より活気に溢れていた。

本来ならこれは喜ぶべき事なのだが、如何せん変化が急すぎた。

「……ふむ、概ねそんな所だろうな。亜人流入問題さえなければトリスティンの次はゲルマニアになるだろうが。将来この国に影響が出るのは間違いない」

なまじ魔王が居た時期の条約が在る分、無碍むげにもできず流入して来る亜人は増える一方。

急に増えればそれだけ食料の不足分は他国から買わなければならなくなる。

故に王家の財源から金が出て行く。

「国庫からは持ち出されるばかりだ。黒字になるにはまだ時間がかかるだろう。亜人達の協力もあって抑止力となっているが今のままではな。トリスティンを落とすまでに時間がかかればまた違うのだが」

軍拡張のための予算は取れないらしい。

「となると最悪の場合は、亜人かれらの意志に頼ることになるでしょうね
自分たちの身は自分たちで守れ、という事。

「ああ、やはりお前の帰還は喜ばしい事だ。

魔王が一声かければ、亜人達は死をも恐れない戦士となるだろう」

王はさっきの衛兵と同じ事を言った。

「？帰還？ではなく？一時滞在？です。それに私は彼らが戦う理由にはなりたくない。どうせなら偽りの神ではなく自分たちの生活を守るために戦ってほしい」

「どちらにせよ戦う事にはなる。理由はどうあれ、お主の声が必要なのも確かだ」

騙しているみたいで気分が悪くなる。一人や二人に嘘をつくのとは規模が違うのだ。

「さて、重い話はこの程度にして、今夜はささやかに晩餐会でも開くか。この国を出た後の話を聞きかせておくれ」

王の口調は真剣な物から優しい物に変わる。

「いいえ、開くのはパーティーではなく会議です。近い内にトリステインから使いの者が来るでしょうから」

僕が否定すると王は呆れ顔で言った。

「一体何をしておるのだ、お主は」

「いや何、攻められる国ですし、利用して敵の戦力を削いでおこつたか」

当然のことのように言い放つと、空気と化していた将校が口を開いた。

「流石魔王、手が早いすな。陛下、軍関係者に通達を出しておき

ましよう。今夜は無理としても明後日には準備が整わせます」

「どうやら、僕は焦っていたらしい。」

自分の生き死にかかっているからこそ冷静にならなければならぬのこ。

「失礼、どうやら少し冷静さを欠いていたようです」

「よいよい、何せ魔王討伐などという大仰な名前なのだ。主が焦るディアブロンキスタのも無理はない」

王は笑いながら言った。

「お気遣い、痛み入ります」

「バリー、晩餐会にティファニア達は呼び出せるか？」

すると侍従の老人はしばらく考えるそぶりを見せて言った。

「まだ午前中ですし、今から竜便を使えば間に合うかと」

そこまで手間がかかるなら態々今日、呼び出さなくてもいい気がするのだが。

「別に急いで訳ではないので今日でなくてもいいんじゃないでしょうか？ なんだったら自分から会いに行きますし」

「いやいや、ウェールズもティファニアもお前に会いたがっていたぞ。何せあの魔王だからな」

良く考えたら王子とはほとんど面識が無い。

ティファニアもこの国を出る時は一歳ぐらいだったか物心すらついていなかった筈。

まあ、サウスゴータ太守やシャジャルさんぐらいだったら分かるが。「はあ」と気のない返事をする。

「では、旅の話は楽しみにしておくとして仕事を片付けてしまおう。バリー、彼の案内を」

一時的にお開きとなった。

とりあえず、体を動かして過ごすとしよう。

召喚されてから力の衰えが著しい。精霊との交感能力に関してはその限りではないが。

どうやら能力の使用制限は大いなる意思と同調しているかしていないかに因るらしい。

大いなる意思と同調している時は、風石の分解ができるが精霊に干渉できない。

同調を解いた今では、分解ができず干渉ができる。

要は以前と何ら変わりが無い。

体力が落ちてしまった以外は。

「とりあえず走るか」

戦場で走れない者は生き残れない。

走れたからと言って生き残れる訳ではないがその逆は無い。と誰かが言っていた気がする。

何にせよ気が滅入る。

完全復活にはしこたま鍛えて丸一年は確実にかかる。

でも敵は待つてくれない。

今逃げた所で、秘宝を手に入れるチャンスがまた巡って来るとは限らない。

まだ把握している訳ではないがこの国の戦力だけでは心許無い。

もっと強力な味方がいる。

「エルフはどうなんだろ？」

城の中庭で体をほぐしながら一人呟く。

どうにかして連絡を取るべきなのだがそれはもう少し先になりそう
だ。

トリスティンが始祖の秘宝を大人しく渡すのなら残って戦う事にな
るだろう。

そうでない場合はディアブロ・コンキスタにちよっかいを出し、ト
リスティンを長持ちさせ限界になった所をアルビオンが叩く、と言
う事を考えている。

「前者の場合は、僕にしわ寄せが来るんだよな……」

前者の場合、暗殺者的な仕事になる。

能力が明らかにそれ向きなので余り心配はしていないのだが、敵の
物量は凄いらしい。

オスマン老の最新情報によれば、空軍まで所持してメイジは一万近
くいるらしい。

そして集まった総数が十四万。

維持費も馬鹿にならないだろう、当然

「略奪か」

アツテムト周辺の領は酷い事になっているらしい。
あの地方に知り合いがいなくて良かった。
まあ、トリスティンはガリア方面に近いタルブ村が被害に遭いそう
だけど、手が届かないからどうしようもないし。

「よし、放つところ」

走り出した。

「全然ささやかじゃねえよ」

晩餐会は立食パーティーになりそれはそれは豪勢なものだった。
集まったのは急遽聞きつけた百人近い臣下の面々。
王都ロンドンディニウム付近の領地に早馬を走らせて呼びつけたらしい。
何と迷惑な。

「どうした、ナツメ？ 顔色が優れないようだがどうかしたのか？」

ジエームズ王は隣で笑いながら言った。
鍛錬が終わった後、ざつくばらんな髪を切られ、上等な生地のコ
ブを着せられた。
偉大な魔法使いが着てそうな奴を。

「いえ、少々、体を追い込み過ぎただけです。食事と睡眠をとれば、
すぐ元に戻りますよ」

「そうか。疲れているのなら、無理はさせられんな」

ここが王城という事もあり王軍関係者が多い。

続いて王都に近い領地の貴族。

それからコボルトと翼人の代表者が数人。

こんなパーティは十数年ぶりである。いや、体感時間からすると数年か。

王の傍から離れてぼんやりと着飾った貴族たちが歓談しているのを眺める。

豪華な料理がテーブルに盛られて、急ごしらえとはいえ綺麗な花が飾られている。

ここは自分の居場所じゃない、と強く感じる光景だった。

違和感を感じながら突っ立っているだけで亜人の代表者からは仰々しく扱われ、人間の貴族は思ってもいないような美辞麗句を並べててくる。

適当に相槌を打ったり、簡単な返答をしてかわしていく。

しばらくそうしていると急に人垣が割れだした。

「ナツメ君」

聞き覚えのある声に振り返ると白いドレスを着た金髪のエルフがいた。

一瞬有り得ないものを幻視した。

「ルクシヤナ？」

と思ったら全然違った。主に胸の辺りが。

「ああ、お久しぶりです。シヤジャルさん」

「一瞬別の人と間違えたわね。忘れられてたかと思っただわ」

彼女は苦笑を浮かべた。

「今朝着いたんですって？ 急で驚いたわ」

「ええ、まあ」

当たり障りのない返事に対して彼女は嬉しそうに言った。

「また会えて嬉しい」

まあ、確かに久しぶりに会えて嬉しいのだが、思い違いをしてしまったことにはづが悪くなる。

「うーん、それにしても……」

シヤジャルさんは僕の顔をしげしげと眺めて言った。

「随分と男前になっちゃって、ウェールズ王子といい勝負ね」

モード大公が、旦那が死んでまだ半年も経っていないのにその表情には笑み。

わざとそう振る舞っているのかそれとも本心からなのか僕には読め

ない。

というか跡継ぎはどうなっているのか。確か大公の本来の職種は財務監督官、王家の財宝を管理する立場にある筈。

悪魔大公なんて言われていた時はそっちのけだったが。

「どう見たらそう映るんですか。明らかにあっちの方がいい男ですよ。」

過剰に褒めちぎるのに対し僕はため息交じりに返した。

「でもおかしいわね。あなた人間でしょう？ もう三十は軽く過ぎてる筈なのに王子と同じぐらいにしか見えないわ。」

「まあ、こっちにもいろいろあるんですよ。それより、マチルダやティファニアはどうしてます？」

聞かないで置いてほしいので話題を変える。

「そうそう、ティファニアったらね、あなたの事よく訊いてくるのよ。」

「へえ、妙な事刷り込んでないでしょうね？」

「ええ、魔王じゃなくて、私達を救ってくれたかっこいい王子様って吹き込んでおいたわ。」

「いや、脚色しなくていいから、事実だけ伝えろよ。」

「あの子、完全に勘違いしていると思うわよ。」

突っ込む気力も無かった。

どうやらかつこよさ倍増ぐらいに語られているらしく、血みどろの部分などはカット、綺麗な部分ばかりを大げさに伝えたらしい。扱き下ろされるよりは褒められる方が嬉しいが。

「それからね、あの子ったら……」

すると急に彼女の後ろで声がした。

「変な事言わないでお母様！」

幼い感じのする声、母と言ったあたりティファニアなのだろう。その子の方を見たら圧倒されてしまった。

「ねーよ」

つい言葉が出てしまう。

長くまつすぐのびた金髪の間から覗いているほっそりとした顔の輪郭。

その上には各パーツが黄金比で配置され、かなりの美貌を放っていた。

顔は母親似のようなのだがどうも性格は違つらしく、さっきからオドオドとこちらと自分の母を見ながら困惑しているようだった。

だがしかし、残念だった。実に残念だった。

大きすぎるのだ。

胸が。

暴力的なまでに。

圧迫感すら覚えた。

その大きさが彼女の美しさを完全に打ち消してしまっているようだった。

纏う雰囲気は控え目なのに胸は全く自重していないのだ。

「あら、テファ。こちらがナツメ君よ」

「お母様、どこまで話したの？」

ティファニアは若干睨みを聞かせてシャジャルさんを見る。

「どこまでって、まだどれほど話してませんよ。そんなに目くじら立てる程の事じゃないでしょう？」

「だって、魔王様にまで変に思われたりしたら…」

もう変に思っています。彼女は自分の大きすぎるそれを抑えて弱々しく言った。

どこか気詰まりした彼女の様子に僕はややこしくなりそんな物を感じ離れようとす。

「じゃあ、僕はこの辺で」

そう踵を返すとローブの裾をシャジャルさんに掴まれた。マナーとか完全に無視だ。これでいいのか王家よ。

周りの貴族は見ているだけで注意しようとはしない。

「ちょっと待った。さっきルクシヤナって言ってたけど、エルフの名前よね。それも女の子の」

どこか剣呑とした風に言った。
ティファニアは何の事だか分からないようで首をかしげている。
僕はため息をついて答えた。

「ええ、そうですね。一瞬シャジャルさんと間違えてしまつて。また何でそんな事を？」

「ナツメ君、あなたネフテスに」

「住んでましたよ。五年位かな」

シャジャルさんは少し取り乱した風だった。

ネフテスという単語が知られていないせいかわりの人たちには理解できないらしく、聞き流しているようだった。

「この場で話せる事じゃないでしょう？ とりあえずしばらくはこちに滞在予定なんでまたの機会にして下さい」

「あ、ええ、ご免なさい」

そう言うと掴んだ手を放す。

「シャジャルさんて向こうの出なんですね。すっかり忘れてました」

「私がここに居る事は」

「一部の人は知ってますけど、然程気にしてませんよ。一般市民は知る所じゃありませんし」

老評議会と一部のエルフ関係者。別に彼女の親族がどこの誰かなん

かも知らない。

恐らくは人間と交わりを持ってしまった事に対してどこか思う所があるのだろう。

「ティファニアの事も？」

「ええ、まあ」

エルフは基本的に人間に対して敵意に近い物を抱いている。

人間の血が混じる事は穢れであるとみなしている程に。

彼女が不安に感じるのも無理はなかった。

「良いじゃないですか。大公がお亡くなりになったのは、気の毒としか言いようがありませんけど、少なくともそれまでは幸せだったんでしょう？ 良いじゃないですか。どう思われてたって。こんな所まで追ってきませんよ」

実害が無いのだから。

ディアブロ・コンキスタミたく脅威がある訳では無いのだから。

憎まれてもその憎しみが届く事は、ほとんど無いと言っていいかもしれない。

「本当、御免なさい。どうかしてたわ」

「本当どうかしてますよ。こっちなんて、敵がどれほどいるかも分からないって言うのに贅沢過ぎです」

そういえばこの国は始祖の秘宝を、素直に渡してくれるだろうか。

正直に話した上で、証拠としてエルフの聖地に連れていく必要があるかもしれない。

というか、途中の『動く森』で食べられずに突破できる人間がこの国に居るだろうか疑問だ。
そう思索にふけっていると平常を取り戻したシャジャルさんから横やりが入る。

「ナツメ君、さっき言ってたルクシャナって娘、あなたの恋人ね」
この場においては特に意味を持たないどうでもいい事だった。

「そうだけど……良く分かりましたね」

「他の女性と見間違えるほどなんですもの。そんなに強く思っている人と言え、恋人かそれくらい大事な人ってことでしょうか？」

しかし、僕にとってはどうでもいい事であっても周りはそうでないらしく、

「魔王に恋人だと!？」
「と言う事はその女性は一体何と」
「家の娘も……」
「化身アバターの奥方とな!」

不穏なセリフすら聞こえてきた。

「あら、残念。うちのテファも、貰い手が無ければ、ナツメ君に引き受けてもらおうと思ってたのに。これじゃあ二番さんね」

「もうお母さん! 勝手な事言わないで!」

軽い口調のシャジャルさんにティファニアは顔を赤らめて叫ぶ。

その様子には気品もへったくれも無かった。

僕は呆れて言った。

「ウエールズがいるだろうが。それに、一度に複数困えるほどの甲斐性は無い」

当人の王子は王の隣で苦笑いしながら眺めていた。

面倒な事になり始めた。いや、迷惑な事か。

周りの貴族もざわつき段々と収拾がつかないように騒ぎが大きくなる。

やっつけられないとばかりに王宮の客室にこっさり戻ることにした。

トリステインがまずい事になった

「秘宝の引き渡しだと！ そんな事が受け入れられる訳がない！」

「悪魔に屈するなど、果ては始祖に背く行為ですぞ！」

「大体一人のメイジに何ができると言うのだ」

円卓を囲んで宮廷貴族たちが座っている。

ルイズが魔王を召喚して五日目、トリスタニアにある王宮の会議室は荒れていた。

表だつて喚き散らす者、眉間にしわを寄せて黙る者、嘆く者、詳しい説明を求める者。

公爵家の三女が召喚した事は伏せられているのだが、魔王が出現した学院には疑いの目まで向けられていた。

そんな物々しい雰囲気の中、会議室の扉が開き衛兵が入室する。

一人の貴族に耳打ちすると外へ出て行き、それと入れ違いでが入つて来た兵士が言った。

「伝令。ディアプロ・コンキスタがトリステインに向けて進軍を開始した模様です」

一部の貴族は激しく喚き散らした。そしてそれをなだめる者。

「もう駄目だ」「この国もお終いだ」「教会が腐敗しているからこんな事に」。

それらが混じり、会議室は意味を成さない騒音で満たされる。

「ええい！ 静まりなさい！ それでもこの国を担う人間ですか」

マザリーニ枢機卿は声を張り上げた。

鶏の骨が一つづつさいだの、権力の亡者が、だの冷静になれない者が口々に言った。

「今は身内で争っている場合ではないでしょう。国が滅ぶかの瀬戸際ですぞ！」

骨ばってこけた顔が歪む。

「だからと言ってアルビオンと同盟など、彼の国の属国になるのを受け入れると言うのですか？」

アルビオンとトリステインの軍事同盟、条件の一つに王女アンリエッタが嫁ぐ事が含まれる。

現在のトリステインの王位は空席。

その王位に就く筈の王女は他国に嫁いでしまうので王座が空席の状態は更に続く。

「姫殿下はどうかしてらっしゃる！ 悪魔の国に嫁ぐ事を素直に受け入れすぎだ！」

確定事項ではないのだが、事態が急を有するだけに反対票しかなかったのが少数だが徐々に賛同する者が出てきた。

「だがこの事態を打破するには彼の国の協力が必要不可欠なのは事実」

「貴様！ 売国奴か」

それでも反対票の数は圧倒的、この場に居ない宮廷貴族も同様の意見であろう。

軍事同盟とは名ばかりで、アルビオンがトリステインの政治に口を

出す素振りが見え見えだったのだ。

港町の共同経営、海沿いの地方の開発、果ては亜人の受け入れまでアルビオンは？提案？した。

「始祖を裏切った国と同盟など……この国の伝統を潰す気が！」

「亜人と交流する野蛮人共め」

その流れに乗るように貴族の一人が呟くように言った。

「悪魔はディアブロ・コンキスタと繋がっているのではないのか？」

嫌疑や疑惑はますます膨らんでいく。

「そうか……悪魔はディアブロ・コンキスタを利用してこの世界を支配を目論んでいるに違いない！」

「アルビオンはその足がかりと言っわけか」

「ミケーレとか言う組織の首領、奴も背信者か」

「自分を討伐対象にする事で隠れ蓑とするとは……やはり悪魔は恐ろしい」

「だが、それが真実ならば他国が援軍を出すのは道理でしょう」

魔王は世界征服を目論んでいる事になった。

ディアブロ・コンキスタ
魔王・討伐は名ばかり、その手下であるらしい。

「やはり援軍はゲルマニアから」

「成り金の野蛮人の国か。この際仕方ない。悪魔の手の内で踊るよりはましか」

「同盟を取りつけるまでどうにか持ちこたえるしかない」

マザリーニ枢機卿は宮廷貴族の言い様に胸中でため息をついた。

確かにブリミル教の敵となった悪魔の手を借りるのは抵抗どころか拒絶したい物がある

悪魔が宗教庁の腐敗から生まれた物であるとしてもブリミル教の敵であることには変わりない。

マザリーニは先々王が健在だった時代に一度、彼の人物を見ている。凶悪な顔つきに似合わぬあの礼儀正しさは、その残虐性を隠すためのベールだったのだろう。

「全く、始祖の血を受け継ぐ者として恥ずかしくないのか」

「あんな醜い連中とよくもああ付き合える物だ」

コボルト謹製の杖を使っているくせに良く言う。マザリーニは冷めた目で見た。

貴族は悪魔と言う色眼鏡を通してアルビオンを見ているから気付いていない。

アルビオンは完全に悪魔の手を離れ、亜人も王政府に従っているのだ。

そして悪魔の行動原理が実はほとんど利害によって決まっている事を彼らは知らない。

支配や権力から離れた存在である事を知らない。

外交で出張った時に聞く話はそんな物ばかりだった。

まあ、今これを言った所で信じる者はいないだろうが。

「よし！ ゲルマニアに同盟の打診を。諸侯には派兵の要請だ」

マザリーニ枢機卿は同盟反対の流れを止めるべく反論した。

「待ちなさい。アルビオンは始祖の血族なのですぞ。それを差し置いてゲルマニアの力を借りると言うのか！」

「その血を受け継ぐ者が裏切ったのだ。ディアブロ・コンキスタとの関係性も怪しい。マザリーニ枢機卿、もし彼の国と同盟を結んでこの国が滅ぶような事になればあなたはどう責任を取るおつもりか？」

アルビオンとの同盟反対どころかディアブロ・コンキスタ魔王の配下説の流れになっていた。

「それはこちらのセリフです。ド・ポワチエ大將殿、あなたこそゲルマニアから同盟を撥ね付けられたらどうするおつもりで？ ガリアにでも頼るのですか？」

マザリーニの問いにド・ポワチエ大將は自信満々、嫌みたっぷりに言った。

「ほう、ゲルマニアが拒否する根拠がどこにあるのですか？ お聞かせ願いたい」

「ゲルマニア皇帝は悪魔を否定も肯定もしていないからです。それに非公式の場ではありますが悪魔の功績を称えるような事も」

実際アルビオンと一番国交が活発な国はゲルマニアだった。格式や伝統にとらわれない国風が当時から、ゲルマニア諸侯の反発はほとんど無かった。

「付き合っただけの利益のある者と唯、見下すだけの者。正直今のトリステインは豊かとは言いがたい。ゲルマニアはどちらを取るでしょうね」

「貴様、悪魔の差し金か！ そうして悪魔に秘宝を引き渡すことこそ国家の面子を潰す大罪ですよ」

「誰が悪魔の力を借りると言いました。私はアルビオンとの同盟の話をしているのです」

「それが悪魔に秘宝を渡す事に繋がっていると云うのだ！」

アルビオンで魔王の影響力が強い事は事実。

だが王政府との政治的な繋がりは無い。

魔王は立場上、アルビオンの政治に口出しできないのだ。

だがそれを信じる者は、この部屋にほとんど居ない。

同盟反対の勢いも緩む気配がない。

「なりません」

急に扉が開かれると会議室を包んでいた喧騒は止み、代わりに凜とした声だけが会議室に響く。

「私は、アルビオンとの同盟を破棄する事には反対です。ゲルマニアとの同盟は、先王の血族を蔑ろにしてまで結ぶほど、価値有る物ではありません」

「アンリエッタ姫殿下、強引に割り込みとははしたない。それに同盟反対の流れはこの国の総意と言ってもいいのですぞ？」

「多数の意見が必ずしも正しいとは限りませんわ」

「では姫殿下、あなたはこの同盟が正しいとおっしゃいますか」

「少なくともこの？国？の利益にはなりません。この国の民の利益には」

アンリエッタは薄笑いを浮かべて言った。

「確かにアルビオンの風潮がこの国に入ってきたら、あなた達貴族は都合が悪いですものねえ」

もし、先住魔法に長けた亜人が台頭してきたらこの国の貴族が軽んじられるのは避けられない。

先住魔法が理に従って居るのに対し、系統魔法は理を歪めて魔法を発動している。

前者は精神力の効率がいいのに対し、後者は効率を犠牲にする代わりに汎用性が高い。

例として錬金が挙げられる。

「メイジの仕事がとられてしまったら、今までのように大きな顔できませんものね」

精神力の効率が段違いなので、当然こなす仕事量も多くなる。

こなす仕事量が多くなれば亜人の地位も向上、労働力として重宝される。

これによって両者に摩擦が生じるのだが、アルビオンでは亜人の使い手とメイジの関係調整が法により行われ始めていた。

また、アルビオンの魔法研究所は研究に亜人も参加させ、系統魔法の新しい使い方を模索している。

「アカデミーなどその最たる例ですわ。異端だ何だと言っている内に、こんなに目に見えた差が出ているんですもの。知ってまして？ アルビオンではここ数年で、麦の収穫量が倍近くになっているですよ。アカデミーの研究成果によって」

それでも食糧供給は追いつかないが。
ちなみにトリステインの魔法研究アカデミー所は実用的な魔法研究と言うよりは魔法の効果そのものを探るものが多い。
神の残した魔法がどのようなものを理解する事でより神に近づこうとする。

実学より神学の面が強いのだ。

「それが神の教えに背くことなのです！」

ド・ポワチエは大げさに机を叩いた。

「では教えに背いて、彼らが得た物は何ですか？」

「殿下ともあるうお方が浅ましい。そのような欲は、表に出すものではありませんよ」

「質問に答えなさい、將軍。今は政治の話をしているのであって、礼儀作法の話をしているのではないのです」

「ではこの国が、魔王の支配下に入るのを良しとするのですか？
ロマリアと対立する事になります」

ド・ポワチエの言葉と共に宮廷貴族達は再び騒ぎだす。

そうなればハルケギニアでは生きていく音はできないと言っても過言ではないのだ。

アルビオンほど精強な軍隊を持たないトリステインではロマリアの意向が大きく影響する。

聖戦の標的にでもされたら瞬く間に陥落する。

その事に思考が及ぶと宮廷貴族たちは、王女にひたすら再考を、と情けない声を出し始める。

アンリエッタはその様子を見て爆発して言った。

「それでもあなた達はこの国を代表する貴族ですか！ 悪魔ぐらい利用してやると言うぐらいの気概を見せなさい！」

再度場内は静まり返り、アンリエッタの声だけが響く。

「魔王が何ですか！ 伝統が何ですか！ あなた達は自分たちの特権が心配なだけでしょう！ 贅沢な暮しが壊されるのが怖いだけでしょう！」

荒げた気を沈めてアンリエッタは続けた。

「あなた達貴族はこの国をどうしたいのですか？ 互いの足ばかり引っ張って。幕僚は反対するばかりで、宮廷貴族は好き放題。学院の学生の方がまだましです。この国の力が落ちるのも当然ですわ」

事実、ディアブロ・コンキスタを初期の段階で叩こうという動きがあったのだが、諸侯が戦費の出し渋りその案は凍結されている。ド・ポワチエは「小娘が」と聞こえないほど小さな声で呟いた。この国を憂いているのはお前だけではないのだと言わんばかりに反論した。

「王権は神が与えたもつた物です。神に逆らうと言う事は即ち王権を否定する事。姫殿下のしようとしている事は、この王国を否定する事に繋がるのですぞ」

「誰が神に逆らうなどと言いました。私は『魔王を利用してやれ』と言ったのです」

「利用とな！　してどのようにして利用すると言つのです？　魔王は始祖の秘宝以外では動かないと明言しているのですぞ」

アンリエッタは訝しげな顔をした。

「あなたはバカですか。そんな物、複製品でも掴ませておけばいいでしょう」

そんな事も考えつかなかったのですか？　と心底呆れたような表情で將軍を見た。

「大体、始祖のルビーは各王家とも形が類似していますが、始祖の祈祷書に関しては別です。そして重要な祭典以外では表に出る事は有りません。他国の王族でも真贋を見分ける事は難しいでしょう。そんな物の見分けが悪魔に付くと思っっているのですか？」

「で、ですが、万が一見分けられてしまったら……」

「ド・ポワチエ殿、あなたは唯、手柄が欲しいだけではなくて？　魔王が解決してしまうのが気に食わないのでは？　ちがって？」

ド・ポワチエ大将は答えに詰まった。実際の所、中々元帥に昇進できなくてもどかしく感じていたのだ。

それを高々十七の小娘に言い当てられ面目を潰された。

ポワチエは酷くプライドを傷つけられ、顔を真っ赤にして怒鳴った。

「何を言いますか！　あなたこそ魔王の力を使おうなど、恥を知れ！」

明らかに言い負かされたのはポワチエの方。

アンリエッタは澄ました顔でその怒りに震える様子を見ていたのだが

「この逆賊を捕らえよ！ 始祖に仇為す悪魔の手先だ！」

その言葉に衛士は戸惑う。始祖に逆らうか王家に従うか。

「どうした！ 悪魔の力を手に入れようと企む異端者だぞ！ この異端者は国を陥れようとしている！」

その怒声に負けた衛士は「申し訳ありません」と言った後にアンリエッタを取り押さえようとする。

「姫殿下には大人しくして頂く」

「ド・ポワチエ殿！ これは国家反逆罪に値しますよ！」

マザリーニの叫びをド・ポワチエは無視して衛士に命令する。

宮廷貴族達は魔王の力を使うこと自体に異論はないのだが、先ほどの話からディアプロ・コンキスタを裏で操っているのは魔王、という事が

「王権を与えたのは始祖ブリミルです。そしてアンリエッタ姫殿下、あなたはその始祖に対して反旗を翻しているのです。心苦しいのですが、戦争が終わるまで、マリアンヌ様と共に大人しくして頂きませ

ポワチエは再び優位に立つと鬚を弄りながら言った。
アンリエッタはド・ポワチエ蔑んだ目を向けた。

「ポワチエ將軍、あなたの目論見は必ず失敗します」

召喚されて一週間（八日目）。

トリステインから大使が到着した。到着したのだが……、

「ああ、遅かったね。会いたかったよ！ アンリエッタ」

「ウエルズ様ウエルズ様！ この暖かみ、この匂い。本当にウエルズ様」

ウエルズ王子とアンリエッタ姫が熱い抱擁を交わしていた。

王の玉座の前なのに大胆な。マリアンヌ王妃はその様子を微笑ましそうに眺めている。

「外交問題とかどうなるんだろうね」

「いいえ、逆賊として捕えられる所でしたので」

マザリーニと名乗った老人が僕の言葉に反応した。

「ウエルズ様、わたくし、ウエルズ様の言う通りにしましたわ」

「ありがとう、嬉しいよアンリエッタ。これで僕たちが結ばれるシナリオに一步近づいたね！」

ウエルズ、お前は一体何を吹き込んだのだ。

トリステインの大使は意外と大所帯だった。

アンリエッタ王女とマリアンヌ王妃、マザリー二枢機卿。

護衛に魔法衛士隊のマンティコア隊とグリフォン隊が五十数名。

加えて乗って来たマンティコアとグリフォンによって規模が余計に大きく感じた。

王都の謁見の後、僕はマザリー二枢機卿とウエールズ王子を交えて意見交換をする事になった。

「どうしてグリフォン隊の隊長は不在なんですか？」

「グリフォン隊隊長は現在、ディアブロ・コンキスタの諜報任務に出しております。中々の使い手ですよ。ワルド隊長は」

ヒポグリフ隊は隊長が悪魔に拒否反応に近い嫌悪感を抱いているらしく、手が回らなかつたらしい。

まあ、それでもこの大所帯でよく国を脱出できた物だ。きっと事前の根回しが周到だったのだろう。

「それにしてもこれは予想外でしたね」

「ほう、と言いますと？」

「まさか王族に反旗を翻すなんて考えてませんでしたよ。精々トリステインが、私の要求を撥ね付けるくらいだと思っていたのでね」

僕はウエールズの方をじと眼で見る。

侵攻により荒廃したトリステインを共同統治という名の占領統治で再建。

アルビオン内部の反発は少ないだろうし、両王家の繋がりは一層強くなり他国も余り大きなことを言えなくなる。

ウェールズが考えている事は要約するとこんな所だろう。
犠牲になるトリステイン貴族（の文句）は余り考えたくない。

「まあいいじゃないか。結果的にアルビオンが優勢になったのだから」

「確かにそうなんだがどうも釈然としない」

ゲルマニアとの同盟は確実に拒否されるだろう。メリットがまるで無いのだ。

滅びかけの小国と強大すぎる敵。

トリステインが用意できる兵の数はせいぜい二万強と言った所か、
財政が逼迫している事もあり、これでも多く見積もったとマザリー
二枢機卿は言った。

対するディアブ・ロコンキスタは十五万。

トリステインに素晴らしい軍師がいたとしてもこれは頭を抱えるしかない。

いくら始祖の血が欲しいゲルマニアでもこの戦力差では手が出ない。

「姫様追い出した將軍は、死刑になるんじゃないだろうか？」

「そうでなくとも、身分剥奪ぐらいはあるでしょうな」

マザリー二枢機卿が頷きながら応える。

国の総力を挙げてでも撃退が難しい敵。

にもかかわらず団結に必要な、象徴となる人物を追い出してしまったのだ。

これではディアブ・ロコンキスタに目立ったダメージは期待できそうにない。

「止める人はいなかったんですか？」

「生憎と事態が急だったものでして……招集にはまだ二三日かかる予定でした。ですが一部の者が強行して……」

「となると迎えが来るのはまだ先か」

ディアブロ・コンキスタは二十日弱でラグドリアン湖に到着する予定との事。

既に進軍開始から四日が経過している。そろそろこちらにも動く必要が出てきた。

「後は演出だな」

ウェールズは爽やかだった。その様子に僕もニヤリとして言った。

「ああ、トリステインの危機に、両王家の王子王女が颯爽と駆け付ける、なんて事ができるなんて思いもなかった。こいつあ都合がいい」

その様子にマザリーニは呆れかえる。

「お二方、戦場となるトリステインの国土の事も考えて下さい。被害次第では戦後の復興費用もバカになりませんよ」

「分かっているさ。なんたって彼女の国なのだからな。こちらとしても損害は抑えたい所だ」

アルビオンからの支出を抑えたい、の間違いじゃなかるうか。

いや、先ほどの仲睦まじい姿から本気でトリステインの事考えてい

るのは分かる。

しかし王政府に間接的な内政干渉。アンリエッタ姫にいろいろ吹き込んで。

どうもウェールズがアンリエッタ姫を操っている悪い男に見えてしまっ。

人間不信じゃなからうか自分。

「所でナツメ、君は始祖の秘宝なんて集めて一体どうするんだい？」

ウェールズは思いついたように言った。

「ああそれね。壊すんだよ」

「それはまたどうして？」

「存在するだけで生命の危機」

ウェールズとマザリーニはその返答の意味が分からないようで先を促した。

「上司が命を握っている状態なんだよ。で、解放してくれる条件が秘宝の破壊」

「なんと！ 魔王の背後に黒幕が居たと言っのか！？」

マザリーニは心底驚いたように、そして同時に怒りも顕わにした。自分達が信じる神を否定する存在だ、嫌悪感を抱くのが普通だろう。

「枢機卿、私の上司は別に、始祖ブリミルを否定しているのではありませんよ。むしろその教えを肯定なさっている」

と言うよりどうでもいいと思っているだろうが。
枢機卿は表情を崩さずに黙る。ウェールズはその雰囲気を押され気味だった。

「秘宝の破壊？」

「二人とも知ってるかもしれませんが、始祖の秘宝は虚無の復活に必要なマジックアイテムなんですよ。で、私の上司はその復活を恐れて私を送り込んだと言う訳です」

「虚無の復活を？ ナツメ殿、もしやその上司はエルフではなからうな」

マザリーニ枢機卿は顔を歪めて言った。

ハルケギニアの人間にとっては当然の反応であるにもかかわらず、彼の態度に苛立ちを覚える。

「違いますよ。それどころか一般的な生物の形すらとっていません」

エルフと親交があるのは黙っている事にする。

枢機卿は納得がいかないらしく唸っていた。

「お望みとあれば面会もできますよ。結構話の通じる奴ですし」

会いに行くまでがやたら大変だが。とりあえずマザリーニ枢機卿は無理だろう。

ウェールズはまだ若いから訓練次第では行けるかもしれない。

「まあそれはさておき、君の上司とやらが虚無を恐れている理由は

どういったものなんだい？ いくら王家の恩人でも、それを聞かない事には秘宝を渡すなんて事はできない」

「……かなり突拍子の無い事なんだけど。途中で突っ込むなよ？」

系統魔法を司る精霊、その精霊が生きるのに必要な物質『マナ』、虚無系統の魔法にはその『マナ』を直接消費する物、消し去る物が存在する事。

案の定、『マナ』の部分で突っ込まれた。

「アカデミーからはそんな話聞いた事がない」

とマザリーニ枢機卿。

「当然です。かなりの濃度がないと視認できない物質ですから。ほとんど空気と変わりがありません。人間もこれを無意識の内に取り込んで自身の精神力、もとい魔力を回復させているんです」

感情の高ぶりなどによって変換される『マナ』の量は上下するらしい。

「にわかには信じ難い話だな」

「信じられないならアカデミーに研究でもさせたらどうです？ 別に虚無はともかく『マナ』云々くらいなら異端にもならないでしょうっ？」

「しかしその話が本当だとしたら、意見が分かれる所だろうな」

精霊を取るか、始祖の残した伝説の系統虚無を取るか。

亜人はほぼ前者、人間の多数は後者を取るだろう。後者は熱心なブリミル教信者に限るが。

「そう言えば、最近大陸が浮かんだって話はありませんか？」

「ああ、ドレスデン地方と十年ほど前にウインドポナの近くで大規模な隆起があった。地下の風石が飽和状態だったとの事だ」

両方ともゲルマニアか。

「それ、うちの上司の仕業です」

「何だと？」

「虚無が邪魔だからハルケギニアごとひっくり返して殲滅しようとした、との事です」

秘宝破壊を完遂すれば大陸蜂起は起こさない、という事を付けくわえた。

ウェールズとマザリーニ枢機卿は重苦しく黙り込んだ。

「今は理解も納得もできないでしょうが、ゆっくり考えて下さい」

良い返事がもらえる事をいいのだが。拒否されたら奪いに行かなくてはならない。面倒だ。

「ナツメ、その話は他の誰かにも？」

「いいや、言ってない。この事実を知る人間はできる限り少なくしたい」

大いなる意思を倒せ！　なんて言う馬鹿が出てきたらどうだろうか。倒したら魔法が消える。本末転倒。倒そうとしなくても隷属させようとする連中が出てくる可能性もある。

エルフと戦争する事になるのだ。

「そうだろうな。万が一ディアブロ・コンキスタの知る所となれば結果は火を見るより明らかだ」

ウェールズは頷いて言った。

「マザリーニ枢機卿、トリステインでは始祖の秘宝はきちんと管理されていますか？」

「あ、ああ、今は信用できる知人に預けて……まさか奪いに行く気ではなからうな」

僕の問いに思考が引き戻され枢機卿はまごついた。その顔には怪訝な表情が浮かぶ。

「まさか。その内そちらから持って来たくありませんよ」

最近嘘ばかり付いている気がした。

同日、トリステイン魔法学院。

ルイズは自室のベッドの中で蹲ひづっていた。

先日オスマンに自分が呼びだした白髪の男が魔王であると知らされたためだった。

「なあ、ルイズ。 元気出せよ」

才人は部屋に入るなり溜息をついて毛布越しにルイズの背中を撫でた。

「昨日の朝から何も食べてないじゃないか。 体壊すぞ」

備え付けの丸いテーブルの上には冷めたスープや水分が抜けて固くなり始めているパンが籠に入っている。

「……るさいわね。 ほつといてよ」

心配する才人をよそにルイズはベッドから動こうとしない。

普段の才人ならここでむっとして悪態をついてしまう所のだが、ルイズの声が弱々しく消え入りそうだったので余計に心配になった。

「なあ、魔王呼びだしたのってそんなにまずい事なのか？」

魔王を呼びだしたって？ すげえじゃん。 ゲームなら初めから最強じゃねえか。

別に見た感じの悪感情は無かったし、自分の待遇が悪い物にならないように釘を刺されたと学院長が言っていた。

異世界人である才人にはルイズが落ち込む原因がいまいち良く分かっていなかった。

「……そう言えば、 あんた異世界から来たって言うってたわね」

おう、と才人は応え、ベッドの端に腰かけた。

「魔王はね、始祖ブリミルの敵なのよ」

「こつちの神様の敵だとどうしてルイズが落ち込まなきゃいけないんだ？」

「あんたそんな事も分からないの？ 神の敵って事は異端なのよ。神の敵を呼びだしてしまった者は異端者の疑いがかけられる。ここまで言えば分かるでしょ？」

才人は考え込むポーズを取り、それから答えに辿り着くと青くなっ

た。
「まさか……異端審問……か？」

世界史の教科書で見たことがあった。魔女裁判の挿絵が思い出される。

「まあそんな所ね。正確には違うけど。だから外では魔王だとか悪魔がどうか口にしたらダメ。私どころかあんたまで巻き込むことになるわ。何せ魔王を呼びだしてしまっただんですもの。死罪は免れないわ」

「偶然呼びだしただけで……そんなの唯のこじ付けじゃねえか！」

才人は怒りの余り声を上げた。自分にかかる災厄よりも、この小さな女の子の身に起こるかもしれない理不尽に対して、言い表せないものを感じた。

「あんたも私なんかにつき合わなくていいわよ」

ルイズは横になるとますます小さくなった。

こいつは自棄になっている、と才人は思った。今離れてしまっただけの子は駄目になる。

「嫌だ」

ルイズは才人の言葉に驚いたのか毛布にくるまったまま振り向いた。

「確かにお前の性格は最悪だよ。高慢ちきだし犬呼ばわりするし鞭で殴るし」

付き合いが長い訳でもない、特別親しい仲間になった訳でもない。唯、放っておけなかっただけ。

「でも、女の子が一人で苦しんでるのに放って逃げるほど腐りたくもねえよ」

「異端狩りがどんな物か知らないからそんな事言えるのよ」

「そんなに酷い物なら尚更ほっとけねえ」

才人は真剣な目で見つめる。ルイズは胸が熱くなり、締め付けられる感覚に陥った。

あんなに反発していたのにどうして……。

出会ったばかりの使い魔が何故ここまで気にかけるか分からなかった。

「大体、学校の連中は嫌な奴ばっかだけだし、……その、家族とか

はどうなんだよ」

家族。

それを言われてルイズの気はますます沈んだ。

自分は魔王を呼び出してしまった異端者。

ばれてしまったら実家は取り潰し所か、処刑されてしまう。ブリミ

ル教は異端に寛容ではないのだ。

その事を思うとルイズは泣きだしてしまった。

「……家族になんか……言える訳………ないじゃない！」

しまった。聞いちゃまずかったか。才人は困惑して取り繕おうとする。

「い、ごめん！ 悪かった」

異端は身内にも及ぶことも才人は知らない。

『異端狩り』という単語は知っていても詳細に関する知識は無かった。

ルイズが家族からも疎まれていると才人は勘違いした。

「本当……ごめん」

この学校の生徒が魔王召喚の事実を知ったらどうなるか。きつと異端者として吊るし上げようとするだろう。

ルイズを見下したような態度ばかりとっている事から明らかだった。

孤独。学園長や教師は利害で動いているように見える。

ルイズを本気で心配している人間は居ないんじゃないのか。

才人は自分の考えの足りなさをもどかしく感じた。

「別にサイトのせいじゃないわ。……はあ。せめて、あんただけ出てくれば良かったのに」

後半は呟くように言ったので才人は聞き取れなかった。

「とにかく俺はお前の味方だ。だから……」

「ありがとう」

異端者ともなれば貴族平民を問わずほとんどが敵になる。

ルイズは才人の真剣な思いが嬉しかったのか僅かに笑みを浮かべた。

「少し楽になったわ」

ルイズはベッドから這い出た。シャツは皺くちや、髪はボサボサだったが表情はいくらかましになっていた。

そして伸びをしながら言った。

「安心したらお腹空いちゃった」

顔に疲れが浮かんでいるが、さっきの自殺でもしそうな雰囲気は無い。

「おう。じゃあ厨房行って何か貰ってくるよ」

才人はほっとため息をついた。

部屋を出ようとドアに手をかけようとする。同時にドアが勝手に開いた。

「あれ？ シエスタ？ どうしたんだ？」

ドアを開けたのはメイドのシエスタだった。
金髪ナルシスト二股バカメイジ、ギーシュと決闘した時に知り合っ
たのだ。

「サイトさん！？ ああ、えーと…そ、そうでした。手紙です。ミ
ス・ヴァリールのご実家から」

シエスタは顔を赤くして、しどろもどろになりながら言った。びっ
くりしたのか？

「ルイズの実家から？」

なんだろう？ 魔王を呼び出した事が伝わったのだろうか？ 才人
はシエスタに礼を言いながら考えた。

「ああ、ありがとう。それからさ、お願いがあるんだけど」

「は、はい！ なんででしょう!？」

妙に気合いが入っているように見えた。

なんだ？ 才人はシエスタの様子を変に思いながら要件を言った。

「厨房で何か貰ってきてくれないか？ ルイズの奴、昨日から何も
食べてなくてさ」

「……はあ。分かりました。マルトーさんに頼んでみます。……
…そうですね」

期待を裏切られたように斜め下を見ていた。

「じゃ、じゃあ、頼むよ」

才人はドアを閉めた。

「実家って何かしら？」

「召喚の事がばれたのか？」

「それは無いわ。本当の事を知ってるのは学園長とミスタ・コルベール、それからあんたと私だけよ」

ルイズは手紙の封を破りながら言った。

「じゃあ何なのか、才人は顎に手を当て考える仕草をとった。」

ルイズは手紙を覗き込んで固まった。

「なんて書いてあるんだ？」

才人は手紙を覗き込みながら聞いた。そこには二行の短い文が書いてあった。

「すぐ帰れ。理由は帰ってから。母より」

「はあ？ 何だよそれ」

「どどどどどどどうしよう！ どうしたらいいの！？ カカカか、母様が？」

ルイズは錯乱したように部屋の中を歩きだした。

「どっしたんだよ。そんなにまずい事が書いてあったのか？」

「書いてない」

「じゃあ、何で動揺してんだよ」

ルイズは声を荒くした。

「書いてないからよ！」

訳が分からない。書いてなかったら動揺するのだろうか。

「ああああ、悪い事ばかり浮かぶわ。召喚の事がばれたのかしら」

「さっきと言ってる事違うじゃねえか」

「だってそれ以外何があるって言うの!？」

「お母さんが帰ってこいって言うてるんだろ。そんなにまずい事なのか？」

「明らかに字が硬いわ……。ああ、書いている時の様子が目に浮かぶ」

なるほど、母は恐怖の対象なのか。

「母様は規律に厳しい方なの。それはもう破るのが死ぬほど嫌いなぐらい。そんな人が召喚の事を知ったら……」

ルイズは腕を抱いて青ざめた。

価値観のずれなのか才人にはルイズが恐れている事が分からなかった。

「大げさだろ。お母さんだったら庇ってくれるんじゃないのか？」

「分かんない」

「どうして？」

「それが分かんないのよ！」

ルイズは肩を震わせ、目じりには涙が溜まっていた。

宗教の価値観が母親の愛に勝つ、なんて事が才人の常識から出てくるはずも無く、頭には疑問符が浮かぶばかりだった。

先ほどのルイズの様子を見て、家族から嫌われてるのか？ などと聞けるはずも無い。

才人は震えて俯くルイズを抱きしめた。

「大丈夫だつて。ルイズの考えすぎだろ」

ぼんぼんと背中を叩くと震えは徐々に収まり、ルイズは才人のパーカーの掴んで顔を押し付けた。

「うん」

「帰ってちゃんと話せば分かってくれるさ」

「うん」

「まあ、万が一、本当に万が一だけどさ。その……嫌われちまって

も俺が付いててやるよ」

才人は頬を掻きながら照れ臭そうに言った。

トリスティンがまずい事になった(後書き)

トリスティンは結構被害を被る予定。

家族

魔王を召喚して十一日目。

才人達はラ・ヴァリエールの領地に来ていた。

「なあ、屋敷に着くのっていつ頃になるんだ？」

領地に入って二時間ほど経って待つのがじれったくなつたのか才人は馬車の窓から向かい側に座つたルイズの方を見る。

「後半日近くかかるわ」

半日！？ と才人は身を乗り出した。

「うちの領地、結構広いのよ」

ルイズは、結構どころじゃねえよ！ と驚く才人が可笑しくなつてほほ笑んだ。

「あー、いくら綺麗な景色でもこう続くとな」

「あんたの世界じゃこんな風景は珍しいの？」

魔王召喚によつて家族にどれほどの被害があるのかそれを思うと泣き出しそうになる。

目の前の才人は味方でいてくれると言つた事は素直に嬉しく思う。

プライドが邪魔して声に出して言う事はできないが。

もし、才人にまで異端狩りの手が伸びてしまったら？ そう思うと背筋に冷たい物が走る。

ルイズはそんな気を紛らわすために聞いた。

「ん？ ああ、そうだよ。でっかくって角ばった建物ばかりでさ、こんなに何も無い場所は全くって言っていていいほど無い」

「トリスタニアに行った時もそんな事言ってたわね」

「ああ。都会の夏なんか最悪だぜ。アスファルトの地面はやたら熱くなるし、緑が少ないから目に入る景色から暑苦しくってさ」

故郷の事を楽しそうに話す才人を見てルイズはばつが悪くなった。自分に味方が居なくて心細いように、才人も異世界で独り、知り合いいも居ない状態で不安な筈だ。

加えて今はディアブロ・コンキスタが進軍を開始したらしい。戦争になるのだ。

「ねえ、帰りたい？」

ルイズの口から自然とその言葉は出た。

「まあ、そりゃあな」

才人はルイズの方を見て、頬を掻きながら言った。でも、とつないで

「帰りたいけど今のお前を一人には出来ねえよ」

それにまだこつちの世界、見てみてえしな。と軽い口調で言った。才人が自分に気を使っているのかルイズには分からなかった。

「元気ねえな」

才人に言われてルイズははっとした。

「元気出せとか魔王の事考えるとか無責任な事は言えないけどよ、気が沈んだままじゃ良い考えも浮かばねえよ」

「よ、余計なお世話よ！ あんたに言われなくたってもう立ち直ってるわ」

「うわっ可愛くねえな。しおらしいと思ったら急にこれかよ」

公爵家の娘としてのプライドからか、素直になれなかった。

旅籠^{はたご}で休憩した時にお綺麗になられてだの、立派になられてだの村人達から褒め殺しになった事よりも、目の前の少年が発する一言の方が自分に力をくれる。

その事にルイズは戸惑いを感じていた。

だが、才人が平民という先入観が邪魔をする。

貴族でもない平民の言葉が自分の価値観を揺るがす、という事に抵抗を感じていた。

「あーあ、いい雰囲気だったのに。残念だったな相棒」

急に才人の横に置いてあった剣がカチャカチャと喋り出した。

「黙りなさい。駄剣」

デルフリンガー。ルイズが才人に買い与えた剣だ。

「娘っ子よ。お前さんももう少し素直にならんと愛想尽かされちまうぜ」

「うるさいわね。ゲルマニア式の溶鉱炉に落として打ち直すわよ」

「けっ！ 人間の作ったちやちな炎になんか溶かされるかい！」

「才人も何でこんな駄剣選んだのよ。もっと良い物にすれば良かったのに」

「何を言うか！ オレツちはあの店じゃ最高の業物だぜ！」

「はいはい、とルイズは相手にしない。」

「なあ、ルイズ。お前のお母さんってそんなに怖い人なのか？」

才人の質問にルイズは固まった。

「なななな、この使い魔は一体何を言ってるのかしら？ せっかく考えないようにしてたのに！」

「いや、これから会うんだから一緒だろ」

「精神的な余裕が減るのよ！」

馬車を引く御者は、ルイズの叫びを無視して淡々と馬を操っていた。

ラ・ヴァリエールの屋敷に着いたのは夕方だった。

春の日暮はまだ寒さが抜けず、才人は肌寒さを感じ腕を抱いた。

夕焼けにの赤で染まった屋敷がどこかルイズの気を沈ませたよう

才人の横でため息をついていた。

「でけえ」

才人は呟いた。高い城壁で囲まれた中に尖塔がいくつも見える。重厚な石造りの立派な城だった。

こんな家のお嬢様だったらあの性格も有り得るか、と才人はルイズの性格について少し納得した。

「おかえりなさいませ。ルイズ様」

フクロウが飛んできて優雅に一礼しつつ言った。おお、フクロウがしゃべった。

「お母様はどうしてるの？ ジェローム」

「奥様はエレオノール様と晚餐の席でお待ちになっております」

ルイズは気が沈んだように首を振った。

自身の気を揉ませている相手が待ち構えているようで不安なようだ。

城壁の周りには堀があり、その向こうには門。

馬車が止まると、門の両脇に立っていた石像が跳ね橋に取り付けられた太い鎖を下ろす。

身長二十メートルはありそうな石像は金属の摩擦音もあってか、余計に大きく見えた。

「おお、ギーシュのゴーレムとは迫力が違うな」

「あんな即席ゴーレムと比べないで。ちゃんと土石から作った自律

式の自動人形なんだから」

「土石？」

「土の精霊石よ。自動人形を作り出すときの動力源としては一番の高級品よ。まあ、希少な物だから余り出回って無いけど」

「へえ。じゃあ盗まれたら大変じゃねえか。こんな風にむき出しで大丈夫なのか？」

「精霊石は結構デリケートなの。一度使ったら取り外すのは難しいから。それにうちは公爵家よ？ 盗みに入るバカなんて滅多に居ないわ」

「滅多にって事は居るんだ」

石造の作業が終わると馬車は再び動き出し、城壁内部へ進んでいった。

才人はルイズの使い魔という事で晩餐会の同伴が許された。

まあ、ルイズ自身、許されなくても連れて行く気だったらしいのだが。

豪華な調度はやたらと目につき、才人は気後れを感じた。

ルイズは本当にお嬢様なんだ、住む世界が違うなという事を実感させられた。

屋敷に入るとたくさんの使用人に迎えられた。

その後で若い女の人の声がする。

「ルイズ！ わたしの小さいルイズ！ 大きくなって！」

正面にはルイズによく似た、と言っても雰囲気は正反対の女性が居た

「ちいねえさま！ 言ってる事が矛盾してますわ」

ルイズはその女性の胸に飛び込んだ。

「久しぶりね、ルイズ」

彼女はルイズを抱きしめながら言った。

穏やかな顔つきと、ルイズと同じ鶯色の瞳。その優しい雰囲気はルイズと正反対だった。

雰囲気どころか胸も正反対だった。虚乳では巨乳。その容姿は才人にとってストライクだった。

「この間会ったばかりですわ。お胸にはかり栄養がいつているんじゃないんですの？ はっ！ もしかしたらちいねえさまの病気が治らないのって」

「まあ、ルイズったら、少し見ないうちに愉快的な事を言うのね」

「ひいねえひやま、ひょうどうほひょうひょうがぎやふでふ（行動と表情が逆です）」

姉であるらしいその女性は、ニコニコ微笑みながらルイズのほっぺを引っ張っていた。

「カトレア。そろそろ離しておあげ」

ウェーブがかったブロンドの長い髪的女性がカトレアと呼ばれた女性の後ろに立っていた。

ああ今度は性格きつそうな人だな。胸もルイズ側だし。才人はため息をついた。

フォックスタイプの尖ったフレームの眼鏡が余計にその雰囲気強調しているようだった。

「エレオノール姉さま。ルイズったら酷いのよ」

カトレアはルイズを放すと嬉しそうにエレオノールの方を見た。

「ルイズ、お帰りなさい」

エレオノールはルイズを抱きしめて言った。なんだ、見た目と中身は一致している訳じゃないのか。

「エ、エレオノール姉さまが普通に笑ってらっしゃる。明日は火の玉でも降るのかしら」

「あなたが普段私をどう見てるかよく分かったわ。ちびルイズ！」

見た目通り、その背後には炎が浮かんでいるようだった。エレオノールもルイズの頬を掴まんで引っ張る。

「ひよれでこひよえりえによーりゆにええひやまでふ！」

ルイズの頬は姉に抓られるためにあるのか。才人はふざけつつも仲の良い姉妹を眺めていた。

ちよっと羨ましい。と思っているとカトレアが才人の方を見ていた。

「まあ、まあまあ」

とても面白い物を見たかのように指を組んで満面の笑みを浮かべる。何がそんなに「まあ」なのか、才人には分からなかった。

「ルイズ、彼、あなたの恋人ね」

カトレアは跳ねるような声で言った。

「違います。使い魔です」

対するルイズはどこまでも冷静な物だった。才人は少しショックを受ける。

「もう、照れないルイズなんてルイズじゃないわ」

カトレアは膨れた。才人はその様子に萌えを感じた。ルイズはカトレアをスルーして上の姉に聞く。

「エレオノール姉さま。此度の帰省の理由は何なのですか？」

「戦争よ」

エレオノールは簡潔に答えた。ルイズは目を丸くした。

「戦争ってまさかディアブロ・コンキスタですか!？」

「ええ、とうとう進軍を開始したらしいわ」

「進軍つて…どこに向かつて？」

「それは夕食の席で話すわ」

エレオノールは苦々しい表情をして言った。

ルイズママばねえ。才人はその圧迫するようなオーラに押されていた。

ダイニングルームには長いテーブルがありその上座にはルイズの母カリーヌが座っていた。

……使用人多すぎだろ。才人は独りごちながら使用人の数と食事を取る人数を比べてみる。

自分を除く四人に対して、二十人弱の使用人が並んでいた。

マジでお嬢様なんだな、ルイズつて。才人は住む世界の違いを見せられた気がした。

それと同時に、ドラマなんかでこういう奴にありがちな「物質的に満たされてても心が」的な事も考えた。

「私が欲しいのはあなたの心なの！ サイト！」という事とか妄想した。

おつとイカンイカン。顔に出る所だった。

才人はカリーヌの方に視線をずらしてみた。

息を呑んだ。超恐ええ！ ルイズの比じゃねえ。

表情は険しい。眉間に皺がより、口は固く閉じられて顎に力が入っているように見える。

機嫌が悪い。初対面の才人でもそれを肌で感じ取れた。

そんな雰囲気醸し出す母親を前にしてルイズはカチコチに固まっ

ていた。

エレオノールが簡単に挨拶をすますと、

「か、母様……」

才人にはルイズが無理に声を絞り出したように聞こえた。一般的なお母さんへの態度とは明らかにかけ離れている。

すると、カリー又は急に席を立った。

ひい！ とルイズが怯む。

カリー又はルイズの方へ歩いて行く。才人はルイズの怯え様が唯事には見えなかった。

さり気無く背中デルフリンガーを下し、いつでも抜けるようす。いや、無い。お母さんだから。あんなに優しそうなお姉さんがいるんだから、実の娘に手をかけるような人じゃない筈……。裏腹に鞘を握る力が強くなる。

「……ルイズ」

カリー又はルイズを前にして両手を延ばす。首でも締めるのか！？ 才人は踏み込もうとした。

「お帰りなさい。ルイズ」

カリー又はそのまま娘の背中に手を廻して抱きしめた。ふえ？ とルイズが間の抜けた声を出す。

才人は勢い余り、つんのめって倒れた。部屋に居る人間の視線が一斉に集まる。

「あ………すいません。ちょっと立ち眩くらみがしたもので」

才人は慌てて体勢を立て直す。何だよ！ 話と全然違っじゃねえか！ 才人はルイズを心の中で睨んだ。

「お母様？ どうしたのですか？ 今日は皆おかしいわ。エレオノール姉さまは凄い優しいし、ちいねさまは無駄にボケるし。吸血鬼が化けてるみたいだわ」

「普段の私がどう見られているか分かったわ。ちびルイズ、後で覚えておきなさい」

「私もまさかエレオノール姉さまがこんなに優しい対応するなんて思わなくて……ごめんなさいね、ルイズ」

才人の失敗もそうだが、ルイズの発言は感動ムードを台無しにした。

「カトレアまで！？ あなた達の中の私は怒るだけなのか！」

「いえ、むしろ夢見る乙女ですわ。お姉さまは理想像高すぎです。そんな風ですからバーガンディ伯爵は婚約に踏み切れないのですよ？」

「万年病弱引き籠もりに言われたくないわ！」

カリー又は上の娘二人の様子にやれやれとばかりにため息をついた。

「二人とも落ち着きなさい。ルイズも勘繰り過ぎです。家族であってもあの言い様は些か無礼ですよ」

「う、ごめんなさい。反省します」

才人は目を疑った。ルイズが、ルイズが素直に謝っただと……。強引に召喚されてから俺には一度も謝らない、あの高慢ちきな女が何故こうも素直に？　ギーシュに勝つても調子に乗るなとしか言われなかったのに。

才人はちよつと虚しくなった。家族の前では素直なんだな。まあ、家族と一週間前に知り合った俺とじゃ比べようがないけどさ。

「所でちびルイズ、進級試験の使い魔召喚で妙な噂を耳にしたのだけれど？」

エレオノールが空気を読まない発言をした。ルイズは身を強張らせた。おい！　どうするんだ！？　才人も混乱した。

「そついった話はまた今度になさい。この子呼び戻したのはそんな話をするためではありませんよ」

カリーヌの軌道修正に才人は胸を撫でおろした。カリーヌはルイズを解放する前に軽く抱きしめ、頬にキスをした。そして彼女に促され三姉妹はそれぞれの席に着く。

ルイズは席に着くと母の方を見してみる。少し険しい表情だが自分に対して機嫌が悪くないので安心した。

「ルイズ、この国は近いうちに戦場になります」

いきなり結論にルイズは身を乗り出した。

「っそそそっそれは、どどどおどついう事ですか!？」

動揺しすぎだ。隠し事してるってばれてしまいそうになる。才人はルイズの後ろでハラハラしているようだった。

「？ 先日お父様が王宮に出向かれたのは知っていますね」

「はい、ディアブロ・コンキスタガガリアのアツテムト地方に展開しているのでその対策であると聞きました」

「そう。でも本当の理由は魔王がトリステインに対して要求を出したからなの」

ルイズは顔から血の気が引いて行くのが分かった。才人も顔を盛大に歪ませた。

カリーヌはエレオノールに目くばせする。この先はお姉さまが説明するらしい。

「魔王は始祖の秘宝を要求したそうよ。対価にディアブロ・コンキスタを滅ぼすと言って」

「そんな！ 魔王のせいで始まった組織なのに！ どうしてトリステインが報酬を出さなければならぬのですか？」

「魔王のせいかどうかなんて事、実際は分からないわ。唯、潜在的にそう言った勢力は昔からいたのでしょうね。それが魔王という共通の敵に団結した、そういう事よ」

「勢力？」

ルイズは分からない知識なように首をかしげていた。とりあえず

後で聞いたところ、と才人はスルーした。

「聖地を奪還しようと言う輩よ」

ああ、と納得する。

「ロマリアの保守派、それに賛同する各国の貴族。アルビオンの貴族派が魔王によって追い出された事も大きいでしょうね。全く、どれも消耗される民草の事を考えない馬鹿ばかり」

「それで……この戦争に勝ち目は？」

「ほぼゼロよ。いくら戦いの素人でも一目瞭然だわ。何せ、トリステイン軍が二万強に対して奴らは十五万なのよ？」

「じゅじゅ、十五万!？」

ルイズは事を冷静に話す姉に向かって唾がかりそうな勢いで言った。

そして母親にたしなめられる。

「ゲルマニアかアルビオンに援軍を要請すると言って居たけれどどうでしょうね。前者は勝ち目のない戦に尻込み、後者は後者で乗り気だとしても亜人と共闘せざるを得ない」

アルビオンと手を組むことはある意味、禁忌を犯す事になる。

表向きは王家同士の血縁があり、親戚だから何の問題も無いように見えるのだがその実、魔王の持ち込んだ思想が蔓延している。

公式に亜人の神を認める、経済活動に亜人を参加させる、果ては王国直属の機関にまで出入りしているらしい。

始祖の教えに真つ向から喧嘩を売っている。
トリステインの一般貴族は自分たちの伝統を破壊するその考えを嫌
悪しアルビオンとの同盟を反対している。

「アルビオンですか……」

ルイズは複雑な気分になった。アルビオンでの王党派と貴族派の対
立は風化しかかっている。

この国の貴族の多くがその事実を押しつけ、唯、神の教えに反する、
と糾弾しているだけ。

「あの……、母様。お母様はアルビオンとの同盟についてどうお考
えですか？」

ルイズはこの中で魔王に一番詳しい母に尋ねた。

「昔、直接見たと言っていましたわよね？」

「ええ、そうね」

「魔王が味方につけばディアブロンキスタに勝てると思いますか
？」

ルイズは自分が意地悪な質問をしていると思った。

母は歴戦の戦士で二つ名を『烈風』、この国だけでなく、他国にも
その名が知れ渡るメイジだった。

当時は現役を退いていたとはいえ、その力が凄まじい物なのと言う
までもない。

現在の母が扱う風は反則と言ってもいいほど強いのだ。

その母が魔王の事となると急に口を閉ざす。何か良くない思い出があるらしく、上の姉や父に聞かないよう釘を刺されたのだ。

「そう……。勝てるかも知れませんか」

カリー又はワインを一口飲み、僅かに考えてから語り出した。

「十四年前ラ・ヴァリエールで魔王の偽者が出た時、奴は情報が入るとすぐに討伐に向かったそうよ。そしてその日の晩には討伐を完遂して偽者を連れ帰っている」

「一日で!?!」

「三十以上いた山賊は皆殺し、リーダーだけは無傷で捕えている。これがどれほど異常な事か」

カリー又は

「そして極めつけは私が直接魔王を見た時の事でした。頭に血が昇っていたのでしよう、制止の声も聞かずに魔法語を唱えていました」

魔法語? 魔法を放っていたではなく? ルイズは母の言い回しに違和感を感じた。

「ですが、唱えたルーンに準じた魔法は不発、何度か唱えたものの風は起こらなかった」

「母様が魔法を?」

信じられなかった。ルイズにとって母の魔法は絶対的な強さであり、

絶対勝てない一つであるのに、その母が魔法を失敗するなど有る筈がない、と。

「どういう理屈かは分かりませんがアレは一部の魔法を無効化します。あの時も魔法が成功した時に感じられる？実感？がまるで無かった」

「魔法を無効化ですって!？」

エレオノールが机を激しく叩いた。

「驚かせてしまったようね」

「驚くも何も、魔法無効化能力なんて初めて聞きましたわ。確かに味方に付ければ強力な力ではありますけど……でも一人のメイジが味方に着いた所で戦況が大きく変わるとは思えません」

戦争は一人でできる事ではない。魔王単体の力がどれほどのものか分からずとも一人でできる事は限られてくる。

「エレオノール、魔王に求められる役割は亜人達の英雄でも、戦況を覆す兵器でもありません。暗殺です」

「でも魔王は？王？と呼ばれるくらいなのです！ そのような汚れ仕事を易々と引き受けるのですか？」

「かの魔王と面と向かって話をした事がある者はマリアン様、マザリーニ枢機卿、そして今は亡きフィリップ三世。私がマリアン様から直接聞いた話ではとても礼儀正しい少年でとても悪魔とは思えなかった、との事です」

マリアン又は去り際の魔王を見ただけで知っているのは顔だけである。

「？少年？ですって！？」

ルイズは驚きのあまり声を上げた。だって呼び出したのは結構背が高い奴だった筈なのに。

「何ですか？ ルイズ、もしやあなた、魔王が歳を取らない化け物か何かだと勘違いしていませんか？ アレの元は平民。偶々教会に目を付けられたからこのような悪名を轟かせているだけの事。愚かな貴族はそれを信じようとしませんが」

そうだった。ダングルテルの事件はブリミル教の保守派によって新教徒虐殺から悪魔討伐に書き換えられているのだ。

当然、不老不死の化け物でもない限りは成長はする筈である。

そうしてカリーヌが長女と三女と言葉を交わしていると今まで黙っていた次女が口を開いた。

「ルイズ」

唐突に発した声は会話を中断させ、視線を奪う。

「な、何ですか？ ちいねえさま」

「ルイズ。あなた、何か大切な事を隠していないかしら？」

ルイズはキュッと胸が締め付けられる感覚に襲われた。

決してときめきとかそんな物ではなく、何か恐ろしい物を見たり聞いたりした時に感じる物。

「なななな何の事ですか、ベベべ別に私は」

「本当、ルイズって隠し事が下手ね」

カトレアはニコニコしながらルイズを見る。エレオノールはそれに続く。

「ちびルイズ！ まさか学院で何か問題でも起こしたんじゃないでしょうね！」

そうでもあるし、違うとも言える。魔王召喚の事実を知っているのは一部教師と才人だけの筈。

こんな時に無駄に鋭くならなくても……。ルイズはいつも自分に優しいカトレアを今回はかりは呪った。

「ルイズ。言つて御覧なさい。今日は怒らないから」

カリー又は淡々と言った。

今日はつて何？ 明日は怒るともとれるじゃない！ どうして？ 絶対？ 怒らないと言つてくれないのかしら。

どうするべきか。ルイズは思考速度を上げる。

正直に話す。無理。話した後の事を考えたくない。

嘘をつく。無理。そもそも嘘をつくと後味が物凄く悪くなる。きつと今以上に家族に引け目を感じる事になる。

事実を言い方を変えて伝える。採用。

「……実は使い魔の契約に失敗してしまいました」

はあ！？ 後ろで才人が呆けたが無視して続ける。

「召喚のゲートを通って来た使い魔は二体いたのです。ですがその内一体は逃げられてしまいました」

「嘘おつしやいちびルイズ！ ゲートをくぐれる使い魔は一体って決まってるのよ！ 死体が付いて来たならともかくに對同時召喚ですって？ 何千何万と使い魔召喚の記録を見てもそんな事例は？ 存在？しないのよ！」

ルイズはその事実を知っている。

「召喚した時は動いてませんでした。ですが、『コントラクト・サーヴァント』を実行したら動き出したのです」

召喚された時は風石の中に埋まっていた。そして契約をしたらそこから出てきて動き出した。

「そして動き出したそれは教師を操り逃げてしまったのです」

きつと魔王はミスタ・コルベールとオールド・オスマンを言いくわめていたに違いない。

「何ですって！ まさかギアス…いや……」

エレオノールはぶつぶつと何か呟き始めた。勝った！ ルイズは内心ハラハラしながらも勝利を確信した。

「で、ルイズ。結局あなたは何を召喚したの？」

ちいねえさまなんか大っ嫌い！ 言い逃れを許さないカトレアにどう対応するべきかルイズは言葉を選ぶ。

「し、白」

だが、切羽詰っているせいか良い言葉が浮かばない。

「白い、何かしら？」

くそ！ この女絶対楽しんでる。私がどれほど苦しんでも知らずに。

「白く長い毛に覆われた……」

ここまで言っただけで言葉に詰まる。ああしまった！ 最初から風石って言えば良かったじゃない。

メイジって言ったら足が付きそうだし、人間といっても何せ人間を呼び出す事自体、異例中の異例なのだ。言いくるめるのは難しい。

「白い毛？ 何の？」

「……………ちいねえさまのいぢわる……………」

ルイズは正直に話した後の事を想像し、酷く感情を揺さぶられた。

異端になるかもしれない。

国の法律に近い重さ、いやもしかしたら国の法律よりも重いかもしれ

れない。

魔王を呼び出した事に関して、この国が、教会がルイズを許す筈がない。

この国の世論が反魔王である事も相まってルイズの思考は悪い方へ悪い方へと流れて行く。

百歩譲つてこの国の全てに嫌われようと疎まれても良い。

だが家族にまで嫌われてしまったらどうだろうか。きっと生きていけない。

才人が味方で居ると言っても多分生きていけない。

自分を汚い物の様に見る家族を想像すると涙があふれてきた。

「わだじだつで、いっしょうげんめいっやってるのよ。それなのにそれなのに……………」

魔法は一向に応えてくれない。座学ではトップを取り、魔法に関する知識や理解は他のクラスメイトと一線を画しているだけに「魔法が使えない」という事実は一層際立つ。

唯一の望であった使い魔の召喚で呼び出したのは魔王（と平民）。

これは呪いなのか。運命なのだとしたら神はよほどルイズの事が嫌いなのだろう。

でもルイズは神に嫌われてもいいと思つた。召喚した者が魔王だと分かつたらより一層。

でも家族にだけは嫌われなくなかつた。

ルイズは席を立とうとする。

「ルイズ？ ごめんなさい。そんなに嫌な事だとは思わなかつたの」

カトレアは席を離れて、ルイズの方へ駆け寄る。

「カトレア！」

エレオノールが止めようとする。

カトレアは強引に部屋を出ようとするルイズの手を掴んで引き寄せた。

「本当に御免なさい……。ルイズ、私の小さなルイズ。お願いだから嫌いにならないで……」

ルイズは驚きの余り呆けた。いつも微笑んでいる姉が苦しそうに顔を歪めていた。体が弱くて苦しそう、という風には見えなかった。

「ちいねえさま、泣いていらっしやるの？」

「ごめんね、ルイズ。あなたの気持ちも分からずに酷い事言ってるめんね」

違う。家族を騙して精神の平穏を得ようとしているのは私の方だ。喉から出かかっているのにルイズは一言が言えない。その様子を見ていたカーリィ又は咳払いをして言った。

「言い方が悪かったようね。ルイズ、始祖に誓って怒らないから言っつて御覧なさい」

始祖に誓って。いいのだろうか。話して大丈夫だろうか。始祖の敵を呼び出したのに。

確かにカリー又は魔王に対して偏見を持っている訳でも、憎んでいる訳でもない。

唯、その戦闘力を危険視している節が先ほどの会話から読み取れる。

「……………正直に言っただけですか？」

「勘当しなければならぬような話なのですか？」

はい、とルイズは小さく返事をする。

「事によります。ルイズ、あなたが人として間違った事、道理に反する事をしてしまったのならそれもありません。ですがルイズ、あなたはそれを犯したのですか？」

「いいえ！ 誓って言えます。私は悪い事は何もしていません。唯、悪かったのは？ 運？ だけです」

アレばかりはどうしようもなかった。何せ事前に何が呼び出されるのか分からないのだから。

「ならば言っただけですか？」

カリー又は先を促す。ルイズは勢いを得たのだが、その前に考えていた事もあり若干気後れする。

「え…………と、さっきの使い魔の事なんですけど…………」

「ああもうじれたいわね！ さっさと言っただけじゃない！ ちびルイズ！」

エレオノールは怖気づいたようなルイズにしびれを切らす。カリー
又はそれを睨みつけて静める。

「白いのは魔王だったんです」

三者三様、使用人も含めて全員が固まった。もちろんルイズと才人
を除く。

「えーと、白いのは何ですって?」

「魔王です」

「見間違えじゃないのかしら?」

「学院長が本物だと言っていました」

「……………ふっ」

カリー又は軽く溜息をついた。ルイズは再度緊張する。

「あなたが人の道を外れていなくて安心しました。全く、何をもち
たいぶっているかと思えば」

「お母様、それはサラダでなく花瓶の花です」

「あらあら」

「ちいねえさま！ ナイフが！ ナイフを逆さに握っては駄目です
！」

「確かにこれは判断の難しい話ね。外に漏れればラ・ヴァリエールの取り潰しすらあり得るわ」

エレオノールは使用人達も正気を失っている中、冷静に分析する。ああむけに倒れた椅子に座って。

「魔王ごときに何ですか。情けない」

「そう言ってかなり動揺してますわ」

ルイズは心配になって来た。背後では才人がどうしていいか分からず慌てふためいている。

「ルイズ、故意ならまだしも事故で魔王を呼び出してしまったぐらいで私達家族があなたを捨てる訳ないでしょう？ そんな事したらお父様に放り出されてしまうわ」

カリーヌは正気に戻ったのか口から花びらを吐き出して言った。

「お母様！」

ルイズは席を立ち、母親の胸に飛び込む。

「あなたは私に似て強情ね。一人で抱えて……」

一人で立ち続けるのは苦しい。必ずどこかで誰かに寄りかからないと疲れてしまう。

ルイズはこの一年溜まりに溜まった物を母の胸でぶちまけた。

「……ぐず……ヒック」

鼻水や涙でドレスが汚れるのもお構いなしに泣きじゃくる。とりあえず感動シーンらしくなってきたので周りの使用人達も涙ぐんでいる。

カリー又はルイズを優しく撫でた。

「ずるいわお母様。ルイズを慰めるのは私の役目なのに」

「偶には譲りなさい」

「そうですね。お母様がルイズにそうしてる姿、久しぶりに見ましたわ」

「……あの人が甘やかすから……。私が厳しくしないで誰がそうするの」

カリー又は吐息をついて言った。カトレアはいつもの様に暖かな笑みを浮かべる。

「そう言えばお父様いつ帰ってくるんですの？」

「明日のお昼頃だそうよ。ルイズに帰って来たんですもの。きっと竜籠を潰してでも飛ばして帰ってくるわ」

「お父様が聞いたらどんな反応するでしょうね。楽しみだわ」

カトレアに釣られたようで各々がヴァリエール公爵の反応を想像する。

必死に笑いをこらえる者が徐々に現れる。

「ほら、ルイズ御覧なさい。皆お父様が慌てふためくの想像して笑ってるのよ？」

使用人を通して見るルイズと父がそういう風に見えるところ。娘を溺愛する父。

泣き止んだルイズはその様子を見て顔を綻ばせた。コクリと頷く。

ルイズは家族との間に掛け替えのない絆を感じた。

悪魔が出たぐらいで揺るがない強い絆。

胸が熱くなるとルイズは再び母の胸に顔を押し付けた。

才人が取り残されたようにそれを見ていた。

家族（後書き）

ルイズ実家長くなった。もしどれが誰のセリフか分からない場合は指摘してくれると嬉しいですよ。

悪魔行動開始

召喚されて二十四日目、三週間。

空の大陸にはエルフの一行が到着していた。

「しかし、空の大陸にこれほどの文明が発達しているとはな。やはり知識と実際では見える物も違う」

町外れの森、ビダーシャルが町並みの感想を述べているとルクシャナは茶々を入れた。

「私には自重しろと言っておいて自分だけずるいわ」

「仕方ないだろう。他の者では人間に対する先入観で不安が残るし、お前が行くのは他の隊員が納得しない」

魔王ナツメは大いなる意思の眷族にしてエルフ達の聖者。

そしてルクシャナは聖者の妻、聖女として認識されている。婚姻はまだであるがまあ、いろいろあって公にはそういう事になっている。

「それで、どうだったの？」

彼らは聖者奪還の足掛かりとしてアルビオン王国に来ていた。

「ああ、凄かったぞ。建物などの技術レベルはネフテスに遠く及ばないが、コボルトやライカンが人間達の街に馴染んでいるのは見物だ」

「そうじゃなくて！ 政府からの許可は！？ とうにか帰りが遅い

「思ってたらどこで油売ってたの!？」

ルクシャナはやっぱり楽しんでるんじゃないか、と諜報部隊の隊長である叔父を睨んだ。

「思いのほか歓迎されてな。もちろん良い意味でだ。まさか？耳？を出したまま太陽の下を歩けるとは思わなかったぞ」

ビダーシャルは耳をピクピク動かす。

「おお！ 蛮人の中にもエルフを理解する者が居るとは」

「やっど？変化？が解ける」

「しかし本当に人間が他種族と暮らしているとは」

隊員達は各々にかかっている？変化？の魔法効果を解除する。

修道士、商人、旅芸人などの恰好から皆同じようなエルフの民族衣装に、そして丸い耳から尖った耳に変わる。

「まだ解除していいとは言っていないぞ。任務中だと言つ事を忘れていないか？」

戒めるビダーシャル。敵地を抜けたせいか緩んでいる。

「良いじゃない。どうせもう杖を向けられるなんて事はないんですよ？ それより異種族混合の街が早く見たいわ」

ルクシャナは疲れている筈なのにかなり元気だった。ビダーシャルは疲れからなのか嘆息する。

「お前は……いや、ここまでよく我慢したな」

ルクシャナは道中町の近くを通っても、見たい等と駄々をこねずに唯黙々とついて来た。いつもなら有り得ない事。

「そろそろ限界」

「もう少し待ってくれ。とりあえずこれから世話になる屋敷に案内してくれるとの事だ」

「人間のお屋敷に泊まれるの!？」

思いがけない体験にルクシャナは心を躍らせる。この所ずっと野宿続きだったので喜びはひとしおだった

「ああ、ナツメが世話になったら嬉しい家らしい」

「ナツメ……………。彼の事はどうだったの？」

ルクシャナは噛み締めるように名前を言う。

「いや、そのな、非常に言い辛いのだが……………」

対するビダーシャルは非常に歯切れの悪い言い様だった。ルクシャナと隊員達の視線が集まる。

「二日前に出て行ったらしい」

「王都を？」

「いや、この国を」

入れ違い。隊員達はこの事実^に落胆の色を隠せない。何とタイミングの悪い。

「どうして!? 隠しているんじゃないの?」

ルクシャナは怒りと焦りで声を張り上げた。

「それは無いな。どうやらナツメは既にこの国と手を結んでディアブロ・コンキスタの間諜に向かっているらしい。悪魔の秘室シャイターンの引き渡しを条件にな」

悪魔（始祖）の秘室。

「流石ナツメ様。仕事が早い」

「大いなる意思もさぞお喜びだろう」

「ならば我々も手を貸さなければ」

「というか風石の封印はどうしたんだ?」

隊員達の声が弾む。ビダーシャルは冷静に命令を下す。

「まだそれを決めるのは早計だ。今は報告を待つ他ない。待機だ」

「待機つて、そんな悠長な事言つてられない。風石の封印が解けたと言つても彼は十年ぶりに動くのよ? 満足に体が動いてくれるとは思えないわ!」

ルクシャナの意見に賛同する者、多数。

「お前はナツメを信じていないのか？ あいつの事だ、勝ち目の無い戦いからは真っ先に逃げ出すだろう。その奴が逃げていない。これは奴に考えがあると言う事だろう？」

「それはそうだけど……」

寝ているのか貶しているのか分からない。ルクシャナは釈然としない物を感じた。

「これから行く屋敷では情報の交換を一通り行う予定だ。決めるのはそれが終わってからでも遅くないだろう？」

情報がなければ考えようがない。ルクシャナは渋々ながら頷いた。

シテイオブサウスゴータは魔王が暮らした街として非常に活気づいていた。

街の至る所でデビル、魔王などという看板。デビルベーカリー、魔王精肉店、悪魔の薬屋、酒場、悪魔の溜まり場。

名前の印象とは真逆、どれも普通の店である。亜人が働いている以外は。

魔王は他国とは違いかなりの人気を誇っていた。街の中央広場にはコボルトの杖を持った魔王の像が建てられ、近くでは名物に魔王焼きなどというクッキーが売られていた。

エルフー一行は郊外のサウスゴータの屋敷に案内された。

「おお、ゴテゴテしてる」

ルクシヤナは屋敷の一室に案内されると、内装を熱心に観察しながら言った。

感心してるのか貶めているのか分からない。

ひとしきり眺めてメモを取るとベッドに倒れ込んだ。

「ベッドは……凄いふかふか」

実家のベッドよりも良い物かもしれない。

「ナツメもこの屋敷に居たのよね」

もうすぐ会える。そう思うとなんだかむず痒くなりベッド中で悶え始めた。

枕を抱えながらゴロゴロする。

「ああ、じれったい！」

じっとしていられなくなり屋敷の中を探検する事にした。

飛び起きて豪華な彫刻が施されているドアを開けて廊下へ出た。

人間の作った物はごちゃごちゃして統一感や対称性が無い物が多く、自分の様な変わり者でもない限り嫌悪を感じるかも知れない。

「設計の見直しよりもまず固定化、ね」

良く見ると柱の太さが微妙に違う。本当に注意しなければ見分けられない程度だが。

バランス調整よりも魔法で強化する方が主流である事は前から知っていたが実際見ると抵抗があった。

廊下を歩いて庭に出る。

いくつか丸テーブルが置かれ、そこでは眼鏡をかけた少女椅子に腰かけ、本を読んでいた。
この家の少女なのだろうか、エルフでも見たことがない珍しい蒼い髪をしていた。

「こんにちは」

ルクシャナは適当に声をかけてみた。本から視線を移すと少女は目を丸くした。
驚いたのだろうか。

「テファ……じゃない」

上から下まで見て言った。なんか失礼な子。テファとは一体誰の事だろうか。

「あなたはこの国のエルフ？」

「いいえ。用があったから立ち寄っただけよ。あなたは？」

「実家が戦場になるから避難」

「戦場？ デイアブロ・コンキスタ？」

少女は頷いた。ルクシャナはさらに質問を続けようと名乗った。

「私はルクシャナっていうの。あなたは？」

「タバサ」

「タバサ？ えーと人間の貴族はもつと名前が長いと聞いていたけど……」

「複雑な事情」

タバサは本を閉じてルクシャナを見て言った。

「さっきもエルフを見た。こんなにたくさんのエルフを見たのは初めて。あなたの用事も魔王に関係する事？」

「ええ、そうよ。私の用事？も？という事はあなたも？」

タバサは頷いた。どういう事か。また人助けなのか？ ルクシャナは訝しげに少女を見た。

ナツメが無報酬で助けるとは思えない。複雑な事情と言っていた事からこの子は何か特別な立場にあるのかも知れない。

「魔王はエルフと繋がりが有る？」

「かなり深いわね」

タバサは考え込む仕草を取る。この子は何か知っているのだろうか？ それにナツメに用事とは何なのか。もし口説かれたとか言ったら殴る。ナツメの方を。

「魔王と契約した」

イラッ。

「へえ、契約。差支えなければ内容を教えてくれないかしら？」

いや、駄目だ駄目だ。十年も会っていないものだから精神的余裕が欠けている。

ルクシヤナは自分の中に黒い物が生まれるのを感じた。

「心神喪失薬の解毒剤と復讐、対価に始祖の秘宝」

端的すぎる。非常に分かり辛い。

「えっと、解毒薬を融通するのは良いとしても復讐って何の事？」

「ここから先は言えない。あなたが魔王と繋がりが深いと言う証拠がなければ信用できない」

タバサは再び本を開く。よく見ると読んでいる本はイーヴァルデイの勇者シリーズ。登場する魔王のモデルがナツメである本。

ルクシヤナは胸の内にしこりを感じた。両者の間に不穏な空気が流れる。タバサの方はどうかは分からないが少なくともルクシヤナにとっては不快な空気だった。

何？ この子。明らかに私の半分未満の年齢よね。いや、ナツメにそんな趣味は無い。大丈夫な筈。

だが、考えた時点で不安は更に広がる。

「タバサ〜。こっちでお茶にしませんか〜」

不意に気の抜けたような声がする。ルクシヤナは声の主の姿を確認すると言葉を失った。

「こんな所に居たんですか。捜しましたよ」

エルフだった。特徴的な長い耳。エルフによくある金髪とその髪質。着ている服は人間の服でエルフの民族衣装とは異なる。

だが、そんな物は些細な事だった。自分と決定的に違う物を目の前のエルフの少女は持っていた。

「テファ」

テファと呼ばれた少女は彼女が目にした事のないような二つの物を胸部に装着していた。タバサは席を立つ。

「あの〜こちらの方は？」

「魔王の知り合い」

『知り合い』？ そんな軽い仲ではない。

「エルフ……ですよね？」

恐る恐るといった風に尋ねた。

「ええ、そういうあなたはハーフ？ 瞳の形が少し違うようだけど。後胸の大きさも」

ルクシャナは自分の物と見比べて言った。

「母以外のエルフは初めて見ました！ あ、私ティファニアって言います。ティファニア・テューダー・オブ・モード」

ティファニアは興奮したように言った。

「そう……あなたが……。ナツメから良く聞いてるわ。胸が大きいこと以外は」

ルクシャナは自分の物を触り、そして見比べた。

「わあ、ナツメ様ともお知合いなんですね！ 私の事は呼び辛かったらテファって呼んで下さい」

「ルクシャナよ。所であなた、その胸は本物？ いくらなんでもこのサイズは……」

ルクシャナは片手を顎に当て、もう片方の手をティファニアの胸を掴むべく伸ばした。
のだが、先客が両手で鷲掴みした。

「大き過ぎると重い。疲れる。それに歳をとったら大変。垂れる」

タバサは淫猥な悲鳴を上げるティファニアをよそにその胸を捏ね繰り回した。
なるほど本物のようだ。ルクシャナは悶えるティファニアを見て納得した。

「た、つタバサ、ん……つくあ……やめっ……て」

顔を赤らめるティファニアの胸を問答無用、容赦なく揉み続けるタバサ。

恨みでもあるのだろうか。ルクシャナはそろそろやり過ぎかな、と止めようとする。

だがその前にティファニアの手がタバサの両腕を掴む。

「止めてって言うてるでしょ！」

ティファニアが叫ぶとようやくその手は離れた。
タバサはティファニアの双山を指差し淡々と言った。

「癖になる。男なら尚更」

「エルフも人間も変わらないのね。男ってヤラシイ」

落ち着いた様子で感想を述べる二人にティファニアは顔を赤くしてタバサに言った。

「もう胸ばっかり！ 大きいの気にしてるって言ったでしょ！」

「持たざる者の事をもっと理解すべき。同性でもその胸に憧れを持つ者は多い」

「そうね。あなたの悩みはとても贅沢な物だわ」

二人の視線は依然胸に向く。ティファニアは諦めたのか別の話題を振ろうとする。

「あれ？ ルクシャナ？ ルクシャナってナツメ様の話に出てきた？」

「えっ、何て言ったの！？ とうかナツメ様って、人間の間では魔王は一体どういう認識になってるの？」

ルクシャナは飛び付いた。ティファニアは腕を組み少し考えてから

言った。

「救世主？ 殺戮者？ 英雄？ 犯罪者？」

「何で疑問形になるのよ」

「ごめんなさい。他国では物凄く悪く言われているらしいから。私この国を出たことがないから、外国でのナツメ様の評判は間接的にしか知らないの。エルフが魔王と繋がりが有るなんて外国に知られますます悪者にされると思うわ」

なるほど。エルフが自由に動けるのはこの国だけ。この国の外は本当に敵ばかりが蔓延っているようだ。

「でも驚きました。ナツメ様にエルフのお友達がいたなんて」

「あなた、ナツメと話したんじゃないの？ それともエルフの話は出てこなかった？」

「話し込んでたのは母の方なの。私は席を外してたから詳しい事は知らないわ。それに私、当時は小さかったからナツメ様の事はよく覚えていないから話に入れなくて」

ん？ ルクシャナは違和感を感じた。見た感じティファニアは自分より少し年下、と言った感じだ。

それなのにナツメがアルビオンに居た時は小さかったらしい。

「ねえ、テファ。あなた今何歳？」

「十六歳ですけど……」

ティファニアはルクシャナが年齢を聞いた理由が分からないように首を傾げる。

「おかしいわ。人間とハーフになると寿命も半分になっちゃうのかしら？ いや、半分になった代償としてその胸？ 寿命と引き換えにそんな凄い胸？」

「胸は置いといて、寿命が半分てどういう事？」

寿命、という言葉が出てきてティファニアは真剣になる。

「エルフの寿命はおおよそで人間の倍程度なの。だから成長スピードも半分になる筈なんだけど」

「私がハーフで人間と同じ速度で成長しているってことですか？」

「ええ、でも最終的な寿命は不明だけど。少なくとも成長スピードは人間と同じよね。何せハーフエルフは資料ですら見た事無いから。母親から聞かなかったの？ まあ人間と同じかそれ以上だとは思うけど」

成長速度だけ人間、老化速度はエルフなんて都合のいい物なのだろうか。とにかく研究者としての血が騒ぐ。事が終わったら協力してもらおうか。ルクシャナの思考は別の方向に行きそうになる。

「ならいいです」

ティファニアは別に何ともないかのように言った。

「え？ どうして？」

「だって私は人間世界で生活してるんですもの。結婚するのも多分人間。寿命が違ったら母みたいに辛い別れをする事になるわ」

寿命による別れ。ナツメは一体この辺をどう考えているのか。ティファニアの話聞いて寿命不確定の恋人の事を考えてみた。

今のままでは確実にナツメが先に死ぬ。人間の寿命よりも短い。大いなる意思に命を握られた状態だから。

秘宝破壊を完遂したら解放される。ではその後はどうだろうか。彼はどれほどの長さで人生を望むのか。

「まあいいか」

考えるのは本人次第だし、今はナツメ本人を連れ戻す事の方が大事だ。

ルクシヤナは詰まらない事を考えるのを止める。

「……あの！」

ティファニアが振り絞るように言った。

「ん？ どうかした？」

「ルクシヤナがナツメ様の恋人って本当なんですか？」

本当にナツメを殴る必要があるかもしれない。ティファニアの態度はそんな事を思わせるような物だった。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「えと、お母様が是非婿にって言うものだから、その……もし恋人がいたら悪いなって」

頬染めて俯いた。ティファニアの返事は要領を得ない。だがそれは言外に少しは気があると言っているようなものだ。

「つまりあなたの意思じゃないのね？」

「いや、私の気持ちも多少は混じっているというか……その……」

全く、あいつは何をしているのだ。小さい子に大きい子。こんなに幅広く手を出しているなんて自分に浮気云々言えないじゃないか。ルクシヤナは呆れ返ると同時に、無性に言いたくなっただけではつきりする事にした。

「恋人と言うか既に旦那よ。公式に夫婦よ」

とりあえずこの胸は危険だ。敵だ。

ティファニア自身がいくら良い子だとしても、この胸は敵だ。

ナツメの好みが大きい方なのか小さい方なのか知らないが、自分は明らかに後者に属する。

好み以前にそこはかかない敗北感を覚えた。

この胸は排除する必要がある。

「夫婦!？」

タバサと一緒にあってティファニアは叫んだ。タバサは純粋な驚きからのようで本から視線を向けるだけ。

ティファニアはルクシャナに詰めよってきた。

「どういう事ですか？ 詳しく！」

鼻息の荒いティファニアにたじろぐ。ルクシャナはそれを押しつけながら言った。

「ちょっと、顔が近いわ。そんなに興奮しなくても」

「私にとっては一大事です！」

「どうして？」

興奮していたかと思うと今度はモジモジし出した。忙しい子。

「だって……ナツメ様以外に私をもらってくれる人が居そうになくて……このままだと姉さんみたいに仕事漬けの行き遅れになってしまいます！」

何を言い出すかと思えば。ルクシャナは本当に呆れてため息をついた。

「あなた、それ本気で言ってるの？ あなたのその胸で落とせない男がいるって言うのかしら？ 結婚したいって言う男なんて星の数ほどいると思うけど」

ティファニアはエルフから見てもかなり綺麗な部類に入る。加えて男好みの奥ゆかしい性格の様だ。

唯、ハーフであるという先入観が目を曇らせるかも知れないが。

「あなたがハーフエルフだなんて些細な事だわ。きつとティファニアの事を分かってくれる？人間？は居る筈よ」

ルクシャナは励ましを建前に、ナツメから目を逸らさせることを本音に適当な事を言った。

するとティファニアの目から活気が消え疲れた雰囲気醸し出す。

「確かに婚姻を申し出る殿方はいるんですけど……その……視線が皆……」

「胸に行くのね」

ルクシャナの相槌にティファニアは頷く。

「私の事ちゃんと見てくれてるのか分からないんです」

「人間の男って最低ね。性欲だけなの？」

一部のエルフ男も似たような反応をしそうだが。

「でもナツメ様はジロジロ見ないんです！ ウェールズ兄様も気が付くと見てるのに、ナツメ様だけは笑って頭を撫でたりするだけなんです！」

別に聞いてないわ、とルクシャナはその場面を想像して、しっくりこない物を感じた。

十年の月日が過ぎ、記憶が曖昧なのでどうもナツメの事が思い出し辛い。

「多分娘に対する愛情かなんかだと思っただけ……」

もしくは猫か犬に対するそれかもしれない。

「娘？ 私が、ですか？」

「おしめを替えた事があるような相手に欲情するとか本当、無いわ。もしそうならちょっとお仕置が必要ね」

「あんまり縛るのは良くないと思います」

「ナツメなら寧ろ、「そんなに僕の事を考えてくれてるなんて！」って喜びそうだけど」

「束縛趣味!？」

話は平行線のまま進まない。ティファニアはあまり積極的な性格ではないらしく、直接的な言い方を避けるので何が言いたいのかわかり辛い。

ルクシヤナはしびれを切らして追求した。

「結局の所、どうなの？ あなたナツメの何？」

直接的な言い方はティファニアには刺激が強すぎた。オロオロとしながら耳まで血が上り、純情そうなティファニアは混乱しきっているようだった。

「よ、良く分からないの。学校ではやっぱり皆私の胸ばかり見てくるし、女の子の友達とも話してもそういう気持ちを感じてきた事無いし。でもナツメ様を見た時、何だか胸のあたりがぼかぼかするの」

有罪かもしれない。とりあえずはルクシヤナの中ではナツメに説教する事は確定した。

あっちへふらふら、こっちへふらふらしようものなら、本気の制裁も辞さない。まあ、以前の性格そのままであればなさそうだが。

「ナツメ様って今まで見た男の人と違うタイプだから新鮮なだけかもしれないし。でもお母様は既成事実がとか言い出すし、ルクシヤナがいるなら悪いのに。でも止めようとするともヤモヤするし」

「黙れ乳悪魔」

「ええ!?!」

ルクシヤナが詰めたく言い放つとタバサはうんうんと頷いた。そしてルクシヤナは両手でティファニアの胸を揉みしだいた。

「ああ、悪魔どころの騒ぎじゃないわ乳魔神ね。この！羨ましいのよ！男が全てこれになびくと思ったら大間違いよ！」

「ひゃん！ あ！ やめっ！」

「それより今ナツメが何をしてるか知ってる？ もしくは知ってる人はどこ？」

「言うから……言うから手を放して!!」

ルクシヤナが手を放すとティファニアはその場に座り込んで息を切らせていた。

本を読んでいたタバサも興味があるようで、こちらを注視してくる。

「実家の状況も」

ティファニアは深呼吸をして息を整える。傍から見ると攻められているお姫様という構図になっている。使用人やこの家の貴族に見られたら大変な事になりそうだ。

「……………うう。二日前に出て言ったばかりなんですよ？ 分かる事は少ないと思いますけど……………」

「彼がどういう意図で動いているかが知りたいのよ。早めに把握して対策を立てないと」

エルフの中でも上位に位置する手練の戦士が十数名。彼らの協力を得ればかなりの働きが期待できる。

「敵の数が数だけに準備し過ぎて事はないわ。まだできる事は少ないと思うけど」

ルクシャナが視線を移すとティファニアとタバサにじっと見つめられていた。

「何？」

「エルフの方達も協力して下さるんですか！？ てっきり嫌われてるものと思ってたから」

「意外」

「嫌われてるわよ」

人間に偏見を持つような教育は依然行われている。エルフの間で人間は悪魔の子孫である事は変わらない。
ティファニアもハーフだという事がエルフ側に知れたら非難されるだろう。

「ええ！？ それじゃ何で」

「人間世界の後は砂漠を目指すでしょう？ 黙って見ていられる訳ないじゃない」

魔王討伐の後は聖地奪還になる。そして魔王が討たれた後、魔王を倒した正義の組織として勢力は更に拡大するだろう。

「エルフも無関係と言う訳じゃないわ」

魔王せいじやが討たればエルフも黙ってはいない。全面戦争は確實。

恐らくエルフ側の勝利で終わるだろうが、それによって犠牲も出るだろう。

犠牲は少ない方が良くに決まっている。

「それに、早く会って問いたださなきゃいけない事もできたし」

ルクシャナの目は怪しく輝き、それを見た二人の少女の背筋には冷たい物が走った。

同時刻、ガリアのとある森。余り光りの入らない薄暗い中ナツメは敵地へと移動している最中だった。

途中、オークや言葉の通じないコボルトに襲われる事もあったが今の所は順調に歩を進めている。

ディアブロ・コンキスタの進軍には思ったより時間がかかっているようでラグドリアン湖に到達するにはまだ二三日かかりそうである。

ナツメは敵に忍び込ませたトリスティンのスパイ、ワルド子爵と接触するべく地上に降りていた。

「!!!? ぶるツときた」

一体何だ? 何か恐ろしい物に目を付けられた気がする。いや、しかし精霊で探知できる範囲には……。

周囲を見回して確認するが脅威となる生物の姿は見当たらない。

「気のせいか」

胸を撫で下して先を急ぐ。

「それにしてもオルレアン領か」

あのタバサという子の実家。

ラグドリアン湖は自然国境の役割を果たし、トリスティン側は主にド・モンモランシ伯領、ガリア側はオルレアン公領という事になっている。

湖底には水精霊達の王国があり、城と街がつくられている。また湖自体がかなりの透明度を誇るらしいが、

「観光で来たかったよ……」

戦場になるという事でこの領の人達は避難、水精霊もただでは済まないだろう。

トリステイン軍は迅速な対応を見せており、湖畔には既に野営のテントが多数建設されていた。

今からディアブロ・コンキスタにちよっかいを出して行く。

「さて、行くか」

展開しておいた風により進軍の音が拾われ、行動開始の合図となる。上空には竜騎士が巡回、警戒態勢を取り、その下では綺麗に整列した兵がぞろぞろと歩いている。

統制は取れているのか？ パツと見ただけでは分からなかった。

唯、戦いが近い事は兵士たちも肌で感じ取っているのだろう。

軽口はあまり聞こえず、代わりにピリピリと張り詰めた空気が伝わってくる。

……分かり易くて助かる。

士官は馬に乗り、首を刎つて下さいとばかりに無防備だ。いや、空気が相手に油断も警戒も無いのだが、むき出しになったそれは的としての難易度は限りなく低い。

風精霊との交感能力は射程や精密さにおいて反則なものもある。

人間的な感情を廃棄し、これから行う虐殺行為を正当化する。あれは敵あれは敵アレは的アレは唯の的。

次の瞬間、士官の首元に風の刃出現しその首を刎ねた。立て続けに二人の士官の首も狩る。

首から噴水のように赤い液体が周囲に飛び散る。そばを歩く兵にとつては赤い雨が降ったように見えるだろう。

尤もその雨水は鉄の匂いと生暖かさで気持ち悪いことこの上ないだろうが。

急に自分たちの上司の首が無くなった事に困惑する一般兵。

「襲撃ー！ 襲撃ー！」 「警戒しろ！」 「敵を探せ！ 近くに居る筈だ」

恐らくは中隊長クラスと言った所だろうか。数百人の兵が動き始め、その行動の影響が後方に伝わっていくのが分かった。

「撤退撤退、つと」

自分の中に感じるどす黒い物から目を逸らそうとわざと声に出す。

僕は混乱する敵軍から離れる事にした。

何でもワルド子爵、フルネーム、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは昔僕と会った事があるらしい。

マザリーニ枢機卿は彼から僕の使った魔法の詳細を聞いたとの事。風の刃云々、まだ幼い少年であった彼を実家まで送り届けたらしい。良く覚えていない。何せやつつけ仕事のごとく適当にこなしたので印象が薄い。

だから、犯行の手口を分かり易くすれば何らかの反応が返ってくるだろうと三人の士官の首を刎ねる事にした。

歩いていたら突然首が落ちました。シユール過ぎて初見で手口を看破できる者は居ないだろう。

反応待ちと言う事でラグドリアン湖の方へ森の中を走った。

「確かにこりや凄い」

戦闘行為の直後であるというのに思わず見とれてしまった。空の青さが湖に映り、日の光がかなりの深さまで入り込んでいるのがよく見えた。

病的なまでに透明な水は微生物なんて居ないんじゃないかなと思うほどの物。

湖畔の鮮やかな緑が湖面の青と見事な対比を作り出す。

湖の上を飛んでいる鳥もその風景の穏やかさを演出していた。

「泳ぎてえ」

春の陽気とはいえ湖水はまだ冷たい。しかしそんな物が気にならなほど目の前の湖は魅力的だった。

こんな場所が戦場になるのか。湖は血に染まり、森は焼き払われる。既にこの付近に住む領民は避難し、対岸にはトリステイン王室、百合の紋章が描かれたテントが建てられている。

「アルビオンに居るのに」

現王家のマリアンヌ皇后とアンリエッタ姫はアルビオンに逃げてきたのに、軍のテントには王家の紋章。

加えて兵力の差は絶望的。国力も落ちてきているので満足な褒賞も与えられないとの事。

この状況でどうやって兵を奮い立たせるのか。そもそも傭兵は集まるのだろうか？

トリステインの王軍は王政府所属の貴族や将軍、士官たちが金で雇われた傭兵を指揮する、という形をとっている。

諸侯軍は領地の民を徴兵しているので半ば強制。だが王軍に雇われる傭兵はどうだろうか。ほぼ勝ち目の無い方についたとしても土壇場で裏切る者が続出、と言う事になりかねない。

軍艦を動かす空海軍。

これは日頃から厳しい訓練が必要なだけに、末端の水兵まで王政府が雇わねばならない。

一時的な雇用と言う訳でもなく、加えて完全な実力主義である空海軍では陸軍よりも忠誠心は高かった。

平民でも手柄をあげれば士官になれる。

その事實は兵の職業に対するプライドを育てる事になり、自ずと

そんな事を考えながら水に手を入れてみると、急に目の前の水面が盛り上がる。

「は？」

一瞬呆けてしまったが、手を通して体内に侵入してくる？何か？を感じ飛びのいた。

周囲に存在する風の精霊をかき集め警戒する。湖の中に何かいるのか？

盛り上がった水面は徐々に人の形になって行く。

「おいおい、冗談キツイよ」

水はエルフの女性を形になった。耳が尖って髪が長い。どこかで見たようなシルエットだ。

ガラスの彫刻が動いているような、何か気持ち悪い生き物を見てい

るようだった。

「同族よ。我が窮地によく来てくれた。お前の訪問を歓迎しよう」

同族。大いなる意思に関係する者なのだろうか？ 確かに目の前存在はどこかアイツに似ている節がある。一定の形が無い事とか。

「何を言っているのか分からないのですが」

「我に触れている時、お前の嘆きが伝わって来たぞ。この湖が戦場になる事を嘆くお前の心が」

「プライバシーの侵害だ！」

さっき泳いでみたいと思っていたが訂正だ。

「単なる者が攻め込んでくるのだろうか？ さっさと滅ぼして参れ」

「軽く言いますけどね、そんなに簡単な物じゃあないですよ。敵の数が本当、多くて」

「精霊使いの資質はそのための物だろうか？ 同族よ、お前の術は我に近い物がある」

「そもそもあなたは一体何なんです？ いきなり出てきて敵を討てだなんて言われて納得できる訳ないでしょう」

水の塊のエルフの顔の部分は笑顔を作るのだがどこか作り物めいていた。

「人間は我を水の精霊と呼ぶ。ラグドリ안의水精霊と」

どうやら僕が普段見ている風の精霊とは違い、その集合体の様な物なのかもしれない。

「じゃあ、水精霊さん。断る」

「何と！ 同族を見捨てるというのか!？」

頭に響くほどの凄まじい声量。対岸のトリステイン軍にまで届いているんじゃないだろうか。

「生憎と敵の数や自分の力、味方の戦力を考えるとどうやっても無傷で勝利、っていうのは無理なんですよ。必ずどこかで犠牲が出る」

「その犠牲に我がなれと言うのか!」

水精霊は怒っているようで水の形を崩し球体になる。そして湖面から水の手が数本伸びて来た。

風の刃をイメージし放つと切り裂かれて唯の水に戻る。どうやらむこうは攻める事には向かないらしい。続いて放たれる水弾は風で逸らされる。

何にせよ、水に触れると思いが読まれるのは厄介極まりない。

「誰があなたに犠牲になれと言いましたか？ 犠牲にするのは都合の悪い存在だけです。あなたのように代えの利かない者を犠牲にするなど、それこそバカのする事です」

湖面に浮いた水の球体が水弾を放つのが止む。

「ならばここに攻めてくる単なる者達はどつするのだ？」

同族とか言いつつも上から目線。表情や仕草などは見えないのにそう感じた。

「対岸の単なる者たちと協力したらいいでしょう？ 少なくとも利害が一致しているのだから悪いようにはしなないと思いますよ」

「我が戦っている間、お前は何をするというのだ？ まさか逃げるのではなかるうな」

「敵の戦力を削りますよ。進軍の速度が遅ければ味方の人間も余裕ができるでしょうし」

「協力と言っても我は何をすれば良いのだ？ 単なる者に扱き使われるなど我は我慢ならぬぞ」

プライド高え。大いなる意思是割と謙虚だったのにこいつはプライド高え。

いや、大いなる意思是謙虚じゃなくて感情が薄いだけだったか。始祖が降臨する前から存在するというし、トリステイン貴族のプライドが高い気質はこいつのせいじゃないだろうか？

「妥協しろよ精霊。大事な物を守るには犠牲が必要でしょう？ プライドが傷ついたらあなたは生きていけないのですか？」

「単なる者は信用してよいものか我は悩む」

うねうねといろいろな形を取るの感情表現なのだろうか。

「単なる者は我が住む濃き水の底から秘宝を盗み出したのだ。奴らは狡猾極まりない。私の抵抗をあっさり掻い潜り持ち去った」

また秘宝か。最近、始祖の秘宝の事ばかり考えているから余計に耳に障る。」

「何を盗まれたんです？」

「アンドバリの指輪。誰が作ったものか分からぬ。いつから存在するのかも覚えておらぬ。その指輪に宿る力は偽り。古い水の力」

「じゃあ要らないでしょう。そんなゴミ、持ってた所でああなたの利益になるとは思えない」

「だがその指輪は我が行使する水の力と同じ効果をもたらす。単なる者に悪意があれば惨事になるだろう」

かなりの危険物。つまり生き物を意のままに操る事が出来るという事だろうか？

さっきのように体内に侵入してくる水はその手の類の感触があった。

「誰が盗んだか分からないのですか？」

「私の住処にやって来たのは数個体。秘宝を持ち去って行った。風の力の使い手だった」

「僕じゃありませんからね」

「分かっておる。お前の水は奴らに流れているものとは明らかに違う。同族の物だ」

「個体の名前は？」

「不明だ。閣下、子爵と言っていたがこれは単なる者達が使う身分の名だろっ？」

手詰まりだ。そんな危険極まりないマジックアイテムを持ち去られてしまったのだ。

もしディアブロ・コンキスタの手に渡っていたとしたらまずい事になる。

「人間は指輪の効果を知っているのですか？」

「うむ。単なる者の認識では死者に偽りの生命を与える魔道具、という事になっている。我は何度かその力の本質を聞かれた事がある」

明らかに悪意ある人間の仕業。頭痛くなってきた。吐息が出る。

「……指輪に関してはこちらで調べてみます。とりあえずあなたは対岸の人間と交渉して下さい。恐らく向こうから協力せざるを得ない事になってますから」

「むっ、単なる者がそう素直に応じるのか」

「人間も切羽詰ってるんですよ」

形振り構ってたら待っているのは滅びだけ。

「分かった。お前がそこまで言うのなら単なる者に手を貸してみよう」

「ええ、そうして頂けると助かります。何せ僕も切羽詰ってまして」「
水精霊は一言「ではな」と言って水の中に消えた。

悪魔行動開始（後書き）

ルイズ逃げて！

「ルイズは！ ルイズは帰っておるか！」

ラ・ヴァリエール公爵は竜籠から降りるなり声を上げた。機嫌がかなり悪いようで表情は険しい。

屋敷の庭に下りた竜籠は使用人達によって片づけられる。そして執事は公爵に取りつき質問に答えていく。

「昨晚お戻りになりました。お嬢様はどうやらかなりお疲れの様子で、今は自室でお休みになられています」

「何だと!？」

公爵の纏う雰囲気は一層張りつめた物になる。公爵は立ち止まり執事を問いただした。

「一体何があつたというのだ？ まさか学院で嫌な事でも」

「私の口からはとても。その事については奥様が旦那様に話があるとおっしゃっていました」

執事の声も重い。公爵はその空気を感じ取り早足で屋敷の中に入っていく。

「昼食にルイズは呼べるか？」

張り付いてくる執事は言った。

「はい。旦那様がお戻りになったとお伝えすればお嬢様も元気が出るでしょう」

「それほど落ち込んでいるのか？」

「私の言葉より実際に見て頂くのが良いかと」

公爵は奥歯を噛み締め、悔しそうに顔を歪めた。初老である公爵は白髪の混じったブロードの頭に手を当てた。

「学院に行かせるべきではなかった」

歩く速度は変わらないのだが公爵の足取りが重く映っていただろう。使用人達も公爵の機嫌の悪さに身を固くした。

昼食はルイズの気分転換も兼ねて中庭にある池の近くで取ることになった。

池のほとりに使用人達が椅子やテーブルを設置し、料理の乗ったカートを押してくる。

白いテーブルクロスがかけられると公爵夫人を始め三姉妹は席に着いた。

春の陽気が暖かいのウルの月始め、ルイズが学院から実家に帰った次の日。

魔王召喚から十二日目。

抜けるような青空を眺めてルイズはため息をついた。

「どうかした？ まだ何か気になることでもあるの？」

隣に座ったカトレアはルイズの顔を覗き込むようにして言った。

「いえ、雲が流れるのを見ていただけですわ。もう大丈夫」

心配要らない、とルイズは笑った。カリー又はその様子を見て苦笑する。

「そうは言ってもねルイズ、心配要らないと言われて心配事が消えるような物ではないのですよ」

ルイズは言葉に詰まった。「しかし、」カリー又は思案顔で疑問を口にした。

「ルイズが魔王を呼び出した事には疑問が残りますね。ともに平民が召喚された事も前例が見当たりませんし」

「でも契約が成立しなくて本当良かったわ。ちびルイズ、あなた魔女になってたかもしれないわね」

エレオノールが面白い物を見るようにルイズの方を向いた。「姉さまの意地悪」とルイズはちよつと俯く。

「でもルイズがちよつと羨ましいわ」

カトレアはルイズを撫でながら笑った。

「なんで!?!」

「だって直に魔王を見たんでしょう? 私も一回でいいから見ても」

たいわ」

「駄目です」「駄目よ」「駄目に決まってるでしょう」

三人の息はしつかりと合っていた。カトレアは笑顔を崩さない。エレオノールはやれやれと眉間に指を当てて言った。

「外に出ないうちに少し世間知らずになってしまったようね」

カトレアは体が弱い。原因不明の病を患い、幼少の頃からラ・ヴァリエールの領地を出た事が無かった。

「いくらなんでも魔王だけは駄目です！ あんなのに近づいたらそれこそお体に触ります！」

ルイズもカトレアに詰め寄る。

「どうしてそんなに駄目なのかしら？ 別に悪い人じゃないんですよ？」

「どこをどうとればその結論に行きつくのか小一時間問い詰めたくなりまししたわ」

「だってルイズが魔王さん呼び出した事がばれたら魔女になってしまう所だったのよ？ 黙ってくれていたって事は、ちゃんと話せば分かってくれる人だと思うの」

確かにそうなのだが、それは向こうも同じ事だろうとルイズは思った。

「でもばれてしまえば学院の生徒、教員が全て敵に回るのですよ？」

「一人で六万の軍隊をやっつけちゃうんだから、それくらいどうって事ないと思うわ」

「ちいねえさま、それは六千です」

十数年前、悪魔から魔王になった事件。

宗教庁が主導で集められたこの軍隊は、火竜の群れを操る魔王の手によって壊滅、との事。

教会の誇張表現はここまで来ているのか。ルイズは呆れた。だが、

「……あ」

「ルイズ？」

学院の生徒、教師、その他のメイジ、衛兵を集めても六千の兵力には遠く及ばない筈だ。

たとえ全員が非メイジであっても勝つのは難しい。皆殺しも有り得ない状況ではなかった。

ルイズはその事に考えが及ぶと青くなった。

「カトレア、ルイズったら本当に楽しそうよ」

エレオノールは皮肉を言った。

「いえ、ちいねえさまの言う通りかもしれません。確かに魔王から理性的な印象を受けました」

「でしよう？ 一度でいいからお会いしてみたいわ」

「それは駄目です」

「もう！ 意地悪なルイズ」

カトリアは膨れた。それに可笑しくなったのか四人は声を上げて笑いだした。

「何やら楽しそうだな。父も混ぜてはくれないか？」

不意にする男性の声。四人がその方に視線を向ける。

「お父様！」

ルイズは声の主が誰であることを確認すると、その人物のもとに駆け寄った。

「おお、ルイズ。お帰り」

公爵は先ほどの機嫌の悪さも吹き飛んだかのように表情を崩した。そして公爵がかがむとルイズはその両頬にキスをした。

「会いとうございましたわ」

「そうかそうか。私もだよ、ルイズ」

公爵はルイズを抱きしめひとしきり撫でると、カリーヌの隣に座った。

「会議はどうでしたか？」

カリーヌの言葉に公爵は顔を歪めた。

「はあ、せつかく気が晴れたと思ったたらこれか。少し間を置いてくれんか？」

「ほう？ あなたの気分が悪いのはわたくしのせいですか」

「そんな事は言っておらん！」

公爵はカリーヌが怒るのを非常に恐れたように、必死で宥めた。

「宮廷の馬鹿どもめ……」

公爵は力なく毒づいた。

「何か悪い事があつたようですね」

三姉妹はそれぞれ緊張した様子で公爵を見た。

「ああ、我々諸侯が到着する前に会議を始めるしアルビオンとの同盟は勝手に破棄、ゲルマニアに鞍替えしおつた」

「ゲルマニア！？ 始祖の血が流れていないあの成り上がりの国ですか？」

エレオノールは我慢ならないとばかりに激昂した。アルビオンも神を裏切つた不逞の国として蔑まれているのだが、その事は頭の隅に追いやられている。

「これだけでも頭が痛いと言つのに……王軍の馬鹿將軍はとんでもない事をしでかしてくれた」

とんでもない事？ 周りの人間はゴクリと息を呑んだ。いつもほわほわしているカトレアさえも口をつぐんで表情が無い。

「事もあるうにアンリエッタ様とマリアンヌ様を追放しおつた。それも逆賊として」

「そんな！ 国家反逆じゃないですか！？」

ルイズは信じられないと叫んだ。公爵の声は徐々に大きくなる。かなりお怒りの様子でテーブルを叩いた。ティーカップがカチャカチャと揺れた。

「鳥の骨でも居なければ国が回らんというのに！ 全くあいつらは何を考えてるんだ！」

「それで例の勢力は一体どうなってるんですの？ 父様」

エレオノールは一番の懸念事項である戦争について聞いた。

「現在ラグドリアン湖に向けて進軍中との事だ。今回の招集は出兵の要請だった」

ガリアのアツテムトから進軍を開始して七日目。ラグドリアン湖に到達するのは後一週間強程度の時間しか残されていない。

「ではうちも軍団を編成なさるのですか？」

「今からでは間に合わん。それにわしは既に軍務を退いておる。代わって兵を率いる世継ぎも家にはおらぬ今、できる事は余りない。わしは数日したらアルビオンに行ってくる予定だ」

公爵は軍役を免除される代わりに多額の税を王室に支払っていた。

「アルビオンですか？ 同盟は破棄された筈じゃ」

「姫と王妃は枢機卿と共に空へ亡命したとの事だ。そもそも同盟の話自体は公式の物ではない。あくまで向こうが提案してきた事だ。まだ話し合いの余地はある」

「でも、反魔王派の貴族は多いと聞いていますが大丈夫なのですか？」

「そんな馬鹿は放っておけばよい。おまけに魔王がディアブロ・コンキスタに内通していると叫ぶ者が出る始末。現実が見えておらんのだ」

トリスティン王軍の兵力は現在のところ一万強。空海軍は迅速に動いているのだが傭兵で構成される王軍は集まりが余りいいとは言えなかった。

「悪魔でも魔王でも利用しなければこの国は滅びてしまう。今はそういう状況だ」

教会の流した先入観が貴族の目を曇らせ、まともな判断をさせない。アルビオンとの同盟は反対多数、賛成票は初期の頃から悪魔の関わった事件に詳しい少数派という事になってしまった。

「しかし同盟が成立、戦争に勝利したとしても我が国は……」

エレオノールは公爵に反論した。

「属国になろうが滅びよりは遙かにましな選択だ。それに汚い事をしているのは我々ではなくディアブロ・コンキスタの方だ。魔王などという偶像で世間を騒がせているのは奴らの方なのだ」

それまで黙っていたルイズは何か思いついたのか口を開いた。

「父様、私もアルビオンに連れて行って下さい！」

「ちょっとルイズ！ お父様は遊びに行くんじゃないのよ？」

エレオノールはきつい声で言った。

「分かってる。でも、国のために私にできる事が有ると思うの。お父様、私、サモン・サーヴァントで魔王を召喚しましたわ」

公爵は呆れたように首を振った。

「ルイズ、これは遊びじゃないのだ。魔王を呼び出しただと？ 冗談はよしてくれ」

「事実ですわ」

ルイズはスカートのポケットに手をつ突っ込むと折りたたまれた封筒を取り出し、公爵に渡す。

「オスマン学院長？ あの耄碌爺か」

公爵は手の込んだ悪戯だ、後でルイズを叱らなければ、と思ったのだが封筒の中身を見て驚愕した。

「……ルイズ、この事は」

「家の人間と学院の教員二人以外には知られていません」

オールド・オスマンはルイズに魔王召喚の事実を伝える際に、ラ・ヴァリエールに送る書状を書いて彼女に渡していた。

公爵は深く息を吐いた。

「元気が無かったというのはこのためか……全く、悪い事ばかりが立て続けに起こる」

ディアブロ・コンキスタの進軍開始、それによる宮廷貴族や軍部の暴走、危機を脱するために必要な同盟は破棄されそのしわ寄せが自分たちに及んでくる。

「アルビオンに行つてどうしようというのだ？ 魔王を呼び出したからと言つてお前が属性に目覚めた訳ではなからう」

「外交に重要なのは魔法ではないと思います。その証拠にアルビオンの姫は私と同じく魔法が使えないではありませんか」

ティファニアは魔法が使えない。その事実はアルビオンでは周知の事。

「でも彼女は立場が軽んじられる事も無く、表舞台に立つておりません。エルフなのに」

彼女はその美貌と純朴な性格故か国民から愛されまくっていた。それはもう熱狂的に。主に男から。

「？お友達？になればいろいろと良い事があると思つのですが？」

魔王を召喚してしまったのだ。ルイズの中では今更異端の国がどうか、という考えはすっかり鳴りを潜めていた。ルイズの黒い様子を見て公爵は嘆いた。

「お前も言うようになったな……良いだろう。同行を認める」

「お父様！」

エレオノールは叫ぶのだが、カリー又は黙ったまま頷き、カトレアはカトレアで「羨ましいわ」などとコロコロと笑っていた。

「出発は三日後だ。すぐにでも準備を始めなさい」

父の言葉にルイズは「はい！」と元気良く返事をした。

そういえば才人の扱いはどうなるのだろうか？ 自分を励ましてくれたのにこの所ぞんざいな扱いにしている。

ルイズは急に思い出すとばつが悪くなった。

召喚されて二十五日目。

ディアブロ・コンキスタはラグドリアン湖から百キロメートル離れた平原に陣を張っていた。

「酷いな」

平原近くの村は焼き払われ、略奪が完了したのか集落の後にはほとんど何も残っていないかった。

完全な廃村。あるのは焼死体や斬り殺された者の軀。生きている者は居ない。

既に避難しているのか、それともこの死体の分だけしか村人は居なかったのか。

「ああ気持ち悪」

吐き気がする。別に食事が喉を通らなくなるとかそんな事はもう無いのだが気持ち悪い。

明日になればどうせ忘れてしまう事なのだが、不快な光景が視界に入る現在どうしようもなく苛立つ。

憎しみやら悲しみではなく唯、生理的な嫌悪感。

生存欲旺盛な自分からすれば生き物の死体から連想される物が不快なのは当たり前なのだが。

「後、五日といった所かね」

ディアブロ・コンキスタがラグドリアン湖に到達するまでの時間。

このままちよっかいを出し続けて後、五日ぐらいは稼ぎたい。敵数自体の変動は微々たるもの。

トリステインの体制が整えば、時間稼ぎは終わる。それでも余程の事が無い限り勝てないだろう。

ゲルマニアからの援軍は望み薄との報告を受けほくそ笑んでいた。

燃え尽きて灰になった木の破片を踏み砕く音が精霊によって拾われ、

耳に届く。

「敵の斥候？」

数は一。余程自信があるのだろうか？

二三分もすると数百メートル前方に気障ったらしい格好のメイジが一人現れた。

「おお、あの帽子いかしてる」

聞こえていないだろうが皮肉ったつもりで言った。

羽つき帽子。

あんな物が本気で似合う人間が居るとは、と感心してしまった。

長いマントを纏った長髪長身の男がこっちに向かって歩いてくる。

三十メートル程の距離になり男は立ち止まった。

男の纏う雰囲気は明らかに戦闘者のそれ。敵意に近いものが男から感じられる。

唐突に杖が抜かれ男の口が動く。風の塊と風の刃が立て続けに飛んできた。

「話し合つ気まるで無し!？」

風の刃は避け、避けきれない風の塊は精霊の制御を奪い打ち消す。

次の攻撃が来る前に周囲に存在する風の精霊を掌握するべく、引き寄せていく。

開けた場所であるせいか精霊の数はかなりのもので、精気を多くに消費する。

「!?!」といった風な身振りをすると急に持っていた鉄杖を捨てて言った。

「投降する！　こちらに抵抗の意思はない！」

そう言うと帽子を取った。

「済まない。？本物？かどうか試させてもらったのだ」

何の本物が。

「なるほど、ほとんどお変わり無いようですね」

事前の説明では面識があると聞いていたがこんな男に見覚えはない。

「グリフォン隊隊長、ワルドです。お久しぶりですね、魔王ナツメ殿」

グリフォン隊。

トリステインの魔法衛士隊。

「初対面？」

何この人？　といった風な顔をしてみる。

「覚えていないのも当然でしょうね。十五年前の、それもほんの数時間会っただけなのですから」

「十五年前のトリステインって言ったら、偽物騒動？」

「ええ、その時に助けにいただきました」

「ああ！ あの時の。えーと名前は」

「ジャン、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド」

「そうそうそんな感じな名前だった」

御免なさい。本当は覚えていません。確かに子供を助けた記憶は有るけれど顔なんて覚えちゃいない。

「それにしても……」

驚いているようでワルド子爵は僕の方を眺めた。

「とても十五年もたったとは思えない。自分の目を疑ってしまった」

まあ、人間の体ではないので。ワルド子爵の顔には鬚が生えており年より老けて見えた。

とても二十半ばとは思えない。

「なるほど、ワルド子爵。あなたがディアブロ・コンキスタの間諜という事か。周囲に人の気配はないようだが一人で出てきて大丈夫なのか？」

「問題はありませんよ。表向きでは幹部ですから。既に必要と思われる情報は入手しております」

かなり頑張っていたようだ。だが運が無かった。上司に恵まれていない。

仕える筈の王家の人間は追放されている。

たとえ自分が情報を持ちかえったとしてもそれを有効活用するための兵力は集まらない。

「アルビオンとの同盟が成立すればトリステインの勝利は」

「気の毒なんだが、そのトリステインはお姫様を追い出したよ」

信じられない物を見たかのように目を大きく開いた。

「……………今何と？」

「今はマザリーニ枢機卿、マリアンヌ王妃と共にアルビオンに亡命中だ。唯でさえ切羽詰ってるのに君も大変だねえ」

ワルド子爵は打ちひしがれたように膝をついた。

「でもアルビオンはトリステインに手を貸す予定になってるから。そのまま為す術なく滅びという事は無いよ。実際枢機卿やアンリエッタ姫殿下は君を信頼しているようだし」

「しかし……………仕えるべき王家に杖を向けるなど……………」

「枢機卿の話だと魔王がディアブロ・コンキスタに通じてる事になってるらしい。それから姫様は神への反逆者、という事になってる」

数日後、トリステインから大使が来たとの事だが交渉には時間がかりそうである。

「な！？ そんな話、ある筈がない！」

「とりあえず場所を移そうか。ここだといろいろとまずい」

敵の勢力が近い事もあり、ワルド子爵が戻らない事に気付かれたら厄介だ。

「開戦まで、僅かだがまだ時間はある。どうにかして？奴ら？を弱らせる事だけ考えよう。大丈夫さ、きつとアルビオンの連中が上手くやってくれる」

ワルド子爵は裏切られたとばかりに力無く項垂れていた。

「いや、すまん。そこまで落ち込むとは思わなくて。今言すべき事じゃなかったな」

「いえ、実際トリスティン内部の世論ではアルビオンとの同盟に反対する声が多かったのである意味当然の結果でしょう」

かなり無理して言ってる様だった。子爵は立ち上がると歩き始めた。

「所でナツメ殿、あなたは聖地について何か知っていますか？」

何が聞きたいのか良く分からない。子爵は真剣な面持ちで言った。

「エルフの集落に居たのでしょうか？」

良く知っているな。どこから洩れたのだろうか？ この十年の間に何かあったのか。

「多分お前の求めている回答はできそうにない」

聖地はもう原形を留めていない。以前あつた魔法のゲートは完全に消え去り、残っているのは遺跡の残骸のみ。

「知りたいのなら自分で行け。何ならエルフに口利きしようか？」

「本当ですか！？ 是非！」

ワルド子爵は何かに駆り立てられたように詰めよってきた。唯事ではない雰囲気だ。すいません。もう何も残って無いけれど、それでもいいのなら思存分調べてくれ。

「ああ、約束しよう。戻ったら評議会に掛け合ってみるよ」

「ありがとう。何という事か！ はは！ ディアブロ・コンキスタなんか必要ないじゃないか！」

何を言ってるのか。ディアブロ・コンキスタは敵以外の何物でもないだろうに。

ワルド子爵は僕の背中をバンバンと馴れ馴れしく叩いた。こちらが騙しているようだが子爵はそれを疑いもせず、本心から仲間になっているように見えた。

サウス・ゴータ太守の屋敷は現在、政治的にかなり不安定な事態に陥っていた。

アルビオン、トリステイン、ガリア。各王家の人間が一つの屋敷に

押し込まれているだけでも異常なのに、ネフテスのエルフまで居る。

「心神喪失薬の症状ね」

ルクシャナは眠ったオルレアン公夫人を診て言った。タバサは首を傾げた。

「それが薬の名前？」

「ええ、こんな物どこから仕入れたのかしら。エルフの間でも使用に制限がかかっているのに」

心神喪失薬はネフテスでは各部族代表か、老評議会が製造と使用を管理している。

「分からない。でもジョゼフは油断できない男。恐らく正規のルートではないとしても抜け道を見つけられると思う」

「うーん、抜け道ねえ。評議会は無さそうだし、やっぱりどっかの部族かしら？」

ルクシャナは腕を組んで唸った。

「それで、解除薬は作れる？」

タバサが期待を込めた目で聞くのに対しルクシャナは自信満々に答えた。

「おう！ バッチリ！ ああでも材料が足りないから少し時間がかかるわ」

タバサは顔を綻ばせた。

「それにしてもえげつない事するわね。ジョーフィン？」

「ジョゼフ」

「そう！ ジョゼフ。全く人間の名前は覚えにくくて困るわ」

「複雑な薬の調合手順を覚える事の方が明らかに難しい。あなたのそれは矛盾している」

「性格なのよ。興味ない事は覚えが悪くって」

ルクシャナは手帳を取り出すとパラパラとめくりながら答えた。

「そう言えばタバサ、あなた火竜火山に住んでる伝説の竜って知ってる？」

二人は夫人が寝ている部屋から庭に出て座り込んだ。

「良く伝承に出てくる。全長百マイルに達するような火竜らしい。でも唯のお伽話。見たという話は聞いた事が無い」

ふーん、とルクシャナは胸にかけた紅い宝石のペンダントを弄りながら眺める。

「その石は？」

「その火竜の血の結晶、らしいわ」

「？ 偽物掴まされた？」

タバサは石に顔を近付ける。

「お金出して買ったんじゃないわ。それにこれ、私のじゃないし」

「……ナツメの？」

タバサはルクシャナに指摘されて魔王と呼ぶのを止めていた。ルクシャナは頷く。

「実際にその火竜に貰った物らしいの。逆らうのが馬鹿らしくなるほど大きいって。水竜とどっちが大きいかしらね」

「見てみたい」

「全部片付いた後にね。それに、まず本人が戻って来ないと」

ナツメは現在ディアブロ・コンキスタに対し時間稼ぎと戦力削りを目的とした破壊活動を行っている。

しばらくしたらエルフも地上に降りて戦う事になる。数人の諜報部隊員はネフテスへ報告に戻った。

「タバサ、あなた学校の方はどうなってるの？」

「今は戦時中という事で休校になる筈。トリステインは追い詰められているから学生も徴兵の対象」

王軍士官の数が足りず、それを学院の男子生徒で補う。数が揃えば

良いと言う物でもないが、逆に数が揃わなければ出来る物もできない。

「ふーん。人間も大変ねえ」

ルクシャナは他人事なので別段気にしてはいなかった。

「そう言えば、トリスティンから来た大使のあの子、えと」

タバサは僅かに反応を見せた。

「ルイズ、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール」

「そうそう、ルイズ。あの子、面白いのよ？ 人間が使い魔になる事があるのね。？ タバサ？」

ルクシャナはタバサの顔を覗き込んだ。

「どうかした？ 何か上の空だけど」

「ナ、何でもない。気のせい。それより彼女には私がここに居る事は内緒にしてほしい」

王家のいろいろ込み入った事情はあまり大っぴらにする事ではない。タバサが他人をなるべく巻き込みたくないという事もあり、ここに匿われている事は公には知られていない。ガリアにはばれている可能性は否めないが。

「うん。所で気になってたんだけど、それってイーヴァルディの勇者よね。それも一番最初の奴」

ルクシャナはタバサが抱えている本を見て言った。

タバサはコクリと頷く。一日二日程度ではあるが母親の件が解決に向かっている事もあり彼女は本来の快活さを垣間見せ始めていた。

「続巻は酷い物。よく読み込んでいくと教会の意図が良く分かる。明らかに悪魔に対する嫌悪感を刷りこもうとしている」

「そうそう。四巻当たりなんて明らかに違う人になってるわ。『世界は我の物だ』なんて彼、口が裂けても言わないわよ」

「いや、それよりも六巻のイーヴァルデイが言った『それでも僕は人間を信じる』が失笑物。次の巻で盗賊皆殺し」

「悪魔が猫を踏みつぶす描写も有り得ない。寧ろ猫崇めてるわ」
教会監修イーヴァルデイの勇者シリーズの批判で話は弾む。

「懐古主義じゃないけど初期のイーヴァルデイは良かったわね」

「あの勇者は良かった。憧れる物がある」

「憧れる？ 勇者に？ それとも捕まったルー？」

タバサは俯いて恥ずかしそうに口籠って言った。

「ル、ルーの方」

ルーとは作中で竜に捕らわれた女の子の事。

「ま、確かに女の子だし、そういうのに憧れる事もあるわね」

「ルクシヤナは？」

自分だけでは不公平だ、とタバサは言っているようだった。

「いやあ、その事で昔ナツメに聞いたのよ。こんな女の子はどうかってね。そうしたらなんて答えたと思う？」

「猫が人間より好きな特殊性癖の持ち主の好みなんて分かる訳がない」

タバサはルクシヤナの質問が惚気のように聞こえて若干鬱陶しく思えた。

「籠の中の鳥には興味無い」

「魔王の好みを聞いて何の得がある？」

ルクシヤナとタバサが下らないやり取りをしていると、そこにシルフィードが人型に？変化？して入り込んできた。

「きゅいきゅい、おねえさまも恋人の一人や二人作った方がいいのね」

「いきなり複数は難しい。それに私はキュルケのように沢山ではなく一人とが良い。後、唐突に入ってくるな」

「おねえさま！？ おねえさまがきちんと話してる！ るーるー」

「うるさい」

タバサはシルフィードを杖でどつき始めた。

「痛っ、痛いよね！ いつもより強いよね。おねえさまひどい！
そんなんじゃないつまでたつてもつがいは見つからないわ。マチルダ
みたいに行き遅れになっちゃうのね。きゅいきゅい」

「余計な御世話」

「このおチビ！ 調子に乗ってるといずれシロちゃんに鞍替えする
のね！」

ルクシャナは声を上げて笑い出した。

「あっははははは！ 可笑しいわ！ あなた達本当仲いいのね」

「ルクシャナは面白いエルフね。おまけに強いし。シルフィのマス
ターやってみない？ きゅいきゅい！」

「生憎とエルフは系統魔法使えないの」

「るーるー、シロちゃんと言いアンタと言い面白くないのね。ユ一
モアが理解できないのかしら」

シルフィードは拗ねた。

「ねえ、シルフィード。さっきから言ってるシロちゃんて一体何？
誰の事？」

ルクシヤナは気になって尋ねた。

「シロちゃんはシロちゃんよ。頭が真っ白。桃色娘が召喚して」

「黙る」

タバサはどこか焦っているかのようにシルフィードを杖で叩いた。

「桃色娘？ 頭が白？ それって……」

タバサはしまった！ と内心鳥肌が立った。魔王の召喚が無理矢理な物だった事は先日聞いて知っている。彼女が十年待ち続けている事も散々惚気られてうんざりした。

その彼女が召喚ゆっかいの下手人を知ったとしたら？ 召喚者がルイズだとばれてしまったら？

「召喚者は学院の生徒って事？」

まだルイズが犯人であるとはばれている様子はないようだ。ルクシヤナはルイズが学院の生徒であると言う事を知らない。

それを知ったらすぐにルイズが容疑者に格上げされるだろう。しかしそれも自分に聞けばすぐに分かる事。タバサは逃げ出したくなかった。

「ルクシヤナ、ナツメの召喚者を特定したらどうするの？」

「殴る」

即答だった。ルクシヤナは握り拳を作って言った。

「うん。殴るわ。だってそのぐらいしないと気が治まらないもの」

タバサはそれを聞くと「そう」と小さく言って部屋に戻ろうとした。だが、ルクシヤナに手を掴まれる。

「タバサ、誰が召喚したか知ってるでしょ？」

心臓が跳ね上がった。どうしよう、ルイズとは余り接点がないけどこのまま見殺しにするのは後味が悪い。

ルクシヤナは笑っていた。笑っていたのでその怒りは更に強調されていた。

「本当に殴るだけ？ 殺さない？」

「うん。殴るだけ。顔を」

言いながら打ち出された拳は風を切り裂く音を立てる。ルイズが受けたら死ぬかも知れない。

「痛そう」

「痛くするのよ」

「怪我するかも」

「私の心はズタズタにされたわ」

タバサはどうにかして説得を試みた。

「あなたが手を下すまでもないかもしれない。召喚者もきつと悩んだ筈。あなたはそれを忘れてる？」

「悩む？ 召喚しただけで？」

「ブリミル教は魔王に敵しい。神の権威を揺るがす存在だから。召喚したらその人間も異端視される可能性が大きい」

ディアブロ・コンキスタという災厄が現れてからはその風潮は更に強くなった。

社会的な不安が都合のいい生贄を求めているのだ。

「何を召喚するか分からないのに？ よくそんなこじ付けが成り立つわね」

「世の中そんな物」

自分よりも理不尽な目に遭わされている人間は数えきれないほどいるだろう。その点タバサはある程度見通しが付いただけ良い方である。

「異端狩りの罪なんて大体が曖昧。先住魔法がいい例」

主に精霊を感じ取れる種族、というか人間以外が使う魔法。

「便利なのに？」

「人間にとっては脅威。これも神の権威に関わるから異端」

「教会つて了見が狭いのね。でもブリミル教の教典にはそんな事載

って無かったと思うけど」

「貴族という支配階級の利権を守るため。神の意志とは関係ない。というかエルフなのにアレを読んだ？」

「ええ、人間の事を知るには手っ取り早かったから」

「エルフの間では異端にならない？」

「……確かに白い目で見られるわね。でも異端だ悪魔だって騒がれる事は無かったと思う」

まるでいかがわしい本を読んでいるかのようでドキドキした、とルクシャナ。

エルフの世界は面白そう。タバサはルイズの事なんて頭の隅に行っ
てしまった。

「あなたには感謝してる」

ルクシャナは突然のお礼の言葉にたじろいだ。

「何よ突然。どうしたの？」

「母の件」

勇者に助け出されるお姫様にはなれなかったけれど、代わりにたくさん友達ができた。

手を貸してくれる心強い友人が。

「ああ、それね。ナツメと約束したんでしょ。私が拒否したら彼が

困るもの」

「だとしてもこんなに気が晴れたのは久しぶり」

学院に居る友人とは、余り詮索し合う関係ではなかったので、こんな風に笑い合える事は無かった。

「そう、それは良かったわ」

今度キュルケを誘ってみよう。それを想像するとタバサはますます嬉しくなった。

まだそれが露骨に表情として出る訳ではないのだが、少なくとも人を寄せ付けないような空気はもう纏っていなかった。

「それはそうと、」

ルクシャナは話題を切り替えた。

「魔王の召喚者は誰？」

タバサは回り込まれた。どう言い逃れしよう。

ルイズ逃げて！（後書き）

ルイズとルクシャナ引き合わせて……。殴り合いじゃ勝負にならないから口論？

どちらにせよとつと話を進めたい。

ワルドは上司に恵まれないから活躍できないのだと思う。

あ、いま思いついたネタ。ワルドがルイズの使い魔。ガンダールヴで風のスクウエア。まあ、最初からデレデレなルイズに旨味が無いから需要も無さそう。

郷に入って郷に従わなければ痛い目見る事もある（前書き）

修正しようにもいい案が浮かばず、結局少し加筆しただけになりました。

郷に入って郷に従わなければ痛い目見る事もある

ラグドリアン湖、トリステイン側のとある街は戦争が始まるという事で軍人や傭兵で賑わっていた。

戦時の不安からか住民の顔色は優れない。対照的に傭兵たちは金が入る事で機嫌が良いのか酒を飲みながらバカ笑いしている者もいる。こいつら負けそうになったら逃げるんじゃないかなろうか？ そう思わざるを得なかった。

実際敵の数を知っている人間はある程度上の者に限られ、末端には同程度の兵力、としか知らされていない。

それに敵の進軍が遅い事もあってか、油断しているようにも見えた。ナツメがその光景を眺めているとワルド子爵は酒場の二階に部屋を取った事を伝える。

目深に被った灰色のローブとやたら立派なコボルトの杖が雰囲気を出し、見た目はさながら不気味で恐ろしいメイジだった。

個室に案内されると部屋にそな付けられた丸テーブルをはさんで今後の事を話合う事になる。

ワインの瓶を開け、つまみを口に放り込みながら一息ついた。

「！……ラ、ラグドリアン湖の精霊ですか？」

ワルド子爵はどこか焦ったようだった。

「ああ、精霊はアンドバリの指輪が盗まれたと言っていた。厄介な

効果を持ったマジックアイテムらしくてね、使われる前に回収したいんだが」

言葉に詰まる。顔にはしまった、というような文字が書いてあるようだ。

「何か知ってるみたいだね。話してくれ」

「しかし……………くっ」

「ジャン・ジャックが何かやってても聖地行きは取り消さないから
ワールド子爵は深く息をして気を落ち着けると口を開いた。

「リッシュモンが組織の幹部を手引きし奪ったのです。そうかあの指輪が……………」

リッシュモン。

二十年前、ダングルテールの虐殺を命じたトリスティンの高等法院長。

ここに来てその名前を聞くとは思わなかった。

「くそっ！ あのような力が虚無だと！？ 考えれば分かる事だと
言うのに！」

何故気付かなかった！ と机を叩いた。悔しそうに歯ぎしりをした。

「そんなに気に病みなさんな。常識はずれな力を見せられたらそう
思うのは仕方ないさ」

ワルド子爵はワインを一気に呷ると両手を握りしめ震わせた。

「……疑ってしまった。俺はあのようなまやかしに踊らされて見るべきものを見失っていた！」

何を疑ったのか。別に当人の事だし放っておけばいいか。ナツメは干しブドウを口に放り込んだ。

「悩むのは置いとけ。後にしろ。とりあえず今はできる事をしよう。まずは敵勢力の詳細だ」

ブドウを飲み込んでそう言っているとワルドは服の内側から羊皮紙を数枚取り出し広げた。びっしり書かれた文字と所々地図。

「げ、あいつらアルビオンの戦艦使ってるの？ どうやって手に入れたんだ」

「ゲルマニアの高官が持ち出した物です。他にも注文した兵器の横領や空賊行為によって得られた物、被害はここ二三年で一千万エキューは下りますまい」

アルビオンで商船の持ち主が嘆いていたのはこれか。それにしても一千万エキュー。周辺の国から奪った財。

「……確かにこれなら人が集まる」

二三年でこれなのだから絶対利益に目がくらんだ連中が群がってくる。十五万の軍勢が更に増えないか不安になって来た。というか地味にちよっかい出すのではなく攻撃しても減らないだろう。アルビオンが出せる戦費の十倍を軽く超えている。

「やり方を変えなければいけない」

もう少し直接的な効果が出る事をしなければ。

「と言いますと?」

「幹部を消す」

ある程度上の人間が一度に消えれば混乱は避けられないだろう。それを狙ってアルビオンとトリステインに攻め込ませる。ワルド子爵は苦い顔をした。

「それは難しいかと。一人や二人消えた所でどうにもならないと思います。ミケール・ディーオの首でもとれるのなら話は別ですが」

ミケール・ディーオ。

ディアブロ・コンキスタの指導者で宗教庁の保守派。

教皇選出でヴィットーリオに票数で大差をつけられた人。

「幹部の名簿は? ってこれか。それからその人物の特徴もできる限り正確に教えてほしい」

子爵は訝しげな表情を向けて言った。

「勝算があると言つのですか? 過大評価するつもりはありませんが敵の数は余りに多く、精強と言えずとも一定の錬度より下の者はおりません。いくらあなたでも無理があるのでは?」

「本来は対軍というより暗殺者向きなんだよ。世間が竜巻だの風刃だの騒いでるけど本当はこっちが本分」

実際は体力面に少し不安が残ったりする。敵の物量も考えると確実に短期決戦。敵陣に突っ込んでやれるだけやって離脱
ワルド子爵は納得いかないようで口ごもった。

「所で、アンドバリの指輪はどういった事に使ってるのか聞いたときたいんだけど」

偽りの命を与えるマジックアイテム。実際はそこから派生して生物を操る事が出来る。

ラグドリアン湖の水精霊と同質の力を持つこの指輪は持ち運びが可能な事もあってかなり厄介だ。

「幹部の一人にシェフィールドという女がおります。奴が死んだトリスティンの執政官に指輪を向けると」

「効果の事はいい。把握してる。問題はそれを誰にどついう風に使ったかだ」

先日、水精霊に体験させられた。「そうですね」と短く言つと子爵は羊皮紙の中の一枚を手に取り、見せる。

名前が箇条書きになっていた。子爵は指を指しながら説明をする。

「動かした死者は三名、いずれもトリスティンの人間です。内一人は執政官、政府内部に潜り込ませておりました。指輪で操っていた人間は把握しているだけでも十数名に上ります」

これから攻める国だけあってかトリスティンの人間ばかり。中には

伯爵家の人間まで混じっていた。

「おそらく政府内部には内通者がいるでしょう。教会の手引きがあったとはいえ反魔王派のアルビオンを非難する動きは異常です」

「国の危機にもかかわらず内部分裂、確かにそれは腐るのを通り越して土に帰ってるな」

それにしても内通者。

アンリエッタ姫がアルビオンに逃げて来たのは安全確保という意味では正解なのかもしれない。

「トリステインの貴族はお世辞にも忠誠心が高いとは言えませぬ。ですが自分たちに降りかかる危機にそれほど鈍感という訳でもないのです」

アンドバリの指輪は持つ人間次第では最悪の道具となる。敵が冷徹で頭がよく回れば回るほど、それは大きな被害をもたらす。

「シェフィールド、良く覚えとく」

話によると両目に刺青の入った髪の毛の長い女らしい。大体がミケールの傍に控えているらしいのですぐ分かるとの事。

「というかジャン・ジャック、さっきから堅苦しい。もっと砕けた話し方でいいよ。見た目の歳は余り変わらないどころかお前の方が老けてるじゃん。鬚、似合っていないよ？」

急な話題転換に呆気にとられたのか、子爵は動きが止まる。

「くつ、これは隊長が優男では隊員に示しがつかないからです！
あなたこそ三十過ぎている筈なのに童顔じゃありませんか」

「残念。種族が違うから一概にそうとは言えないんだよね」

ワルド子爵は「やはりそうでしたか」と鬚を触りながら言った。一
々その仕草が目に残る。

「人間ではないとすればエルフに近いと？」

「わからん。不確定だから人間じゃないという事ぐらいしかわかって
ないし、どれだけ生きられるかも知らない」

大いなる意思が作った精巧な人形、と言っているかもしれない。
風の精霊を直接操る能力を持ち、オグルにも負けない頑強な肉体。
寿命の決定権は大いなる意思にある。いわばいつでも引き抜けるコ
ンセントが繋がった状態。

虚無の復活を阻止すれば褒美は………あるのかなあ？

それに悪魔だ魔王だなんて言われて内心反発してたのに最近じゃ妙
に納得してきた

事実の詳細が違ったとしても人殺しの事実は人殺しとしてそのまま
伝わる。

教会が脚色していたとしてもそれが肯定される事はない。

「その割には落ち着いているように見えますね。死が恐ろしくない
のですか？」

「いや、滅茶苦茶怖い。生きるのが好きだから余計に」

恐くない訳がない。何も感じなくなる事の恐怖。今、自分が死ぬ要素が存在するから不必要な程に感じる。自ら選んだ結果、自業自得、浅ましいにも程がある。そう言われても仕方ないのだが。

ワルド子爵はナツメの態度を見るなりこめかみを押さえて笑いだした。

「ははははははは！ 唯の人間と変わらないじゃあないか！」

「お前はなんだと思っただ」

「いやあ、あのような強力な魔法を使うからてっきり精神力の方も凄い物だと」

力に精神が付いて来ないのは自覚している。それに力の行使に必要なのは精気、精神力、魔力とは別物である。

いい加減この反応も飽きてきた。行く先々で本性を曝け出すと大体がこの反応を返してくる。

「そういえばお前の実家、ラ・ヴァリエールの隣だったな」

「ええ、それが何か？」

「いや、別に。唯なんとなく聞いただけ」

召喚者、ルイズ・なんとかかんとか・ヴァリエール。

「ヴァリエールですか……」

子爵は思う所があるようで呟いた。

「ああ。その三女が人間の使い魔を呼び出してさ」

「人間!？」

驚くと同時に黙り込んでしまった。考え事があるようだ。

「何かおかしいのか？ 確かに人間が呼び出された例は聞いた事がないが使い魔という役割からしたらかなりいい物だと思っけど」

「その使い魔のルーンは？」

「いや、見てないし知らない」

子爵は唸り始めた。

「もしかしたら彼女は彼の勢力に対抗するのに有効な力を持っているかもしれませんが」

何を言い出すのか、この男は。

「いやお前、それはいかんだろう。あんな小さな女の子を戦争に使うつもりか？ 明らかに素人だったぞ」

「ウインダールヴ、ガンダールヴ、ミヨズニトニルン」

虚無の使い魔の名称。ワールドは淡々としていた。

「彼女は虚無の担い手である可能性があります」

なんて事か。唯のメイジだと思ってスルーしていた。虚無。確かに強力な力であると伝承はされている。詠唱がやたら長い代わりに威力は凄まじく、大軍をなぎ払う事も可能だと言われている。

「使うのか？　　というか彼女はそれを使いこなせるのか？」

召喚時の事が思い出される。嘲笑される小さな女の子の姿が浮かぶ。使いこなせているとは思えない。強大な力を持っている事が周知であればあのような反応は取られない筈。秘密にしているとすれば納得する所だが。

「開戦は近い。そんな不確定な力に頼る事はできない」

精霊の糧であるマナを大量に消費するらしい虚無の魔法は精霊魔法にとっても天敵だ。

亜人達の協力を得る以上、虚無の魔法は相性が悪い。加えて明らかに兵士向きではなかった。味方にしても足を引っ張るだけの可能性がある。

「ですが保険をかけておく、という意味では」

「保険だったらエルフの協力を得た方が確実だ」

「エルフが素直に協力するでしょうか」

「ハルケギニアが制圧されたら次に杖が向くのはネフテスだ。エルフも無関係ではない」

エルフの連中が人間のようには先送りにするとは考え難い。利権関係云々で牽制し合う事も無いだろう。

「ネフテス、それがエルフの国の名前ですか」

「正確には国じゃなくて民族共同体なんだけど」

子爵は納得いかないのか表情は硬い。

「心配するのも分かるがこっちも樂觀視してる訳じゃないんだ。エルフ側もできるだけ犠牲を小さくしようと考える筈だ。人間が考えている程エルフは冷酷な種族ではない」

「えらくエルフの肩ばかり持ちますね」

「ああ、どちら側かと聞かれたら自分に好意を持ってくれる方に決まってるだろう？」

「アルビオンのそれよりも、ですか？」

「あれは好意とは言わない。信仰に近い。勝手に神格化して崇めるだけだ」

聖人とかそんな分不相応な称号は重荷でしかない。俗物だから。

「権力がお嫌いなようで」

「分不相応なんだよ。権力者には向いていない」

精霊との交感能力も。確かにそれがあつたおかげで生き残れたのだ

がそれとこれとは別。

「全て片付いたら表側からは引っ込むさ。後は政治家に任せておけばいい」

「人がそれだけの力を持てば驕り高ぶる物ですが、なるほど。あなたはそう言った俗物とは違うんですね」

子爵はわずかに微笑んだ。

「いやいや、俗物過ぎるからこういふ風に考えるんだよ。重過ぎる責任は勘弁」

「力を持ったのがあなたで良かったのかもしれない。もし一介の貴族が手に入れていれば力に酔い痴れ、取り返しのつかない事になっていたでしょう」

まあ、確かに暴力として使おうとは思わない。大方、荷物運びとか帆船の追い風要員だとかが好ましい。

ワルド子爵も買い被り過ぎているように見えた。悪意の視線を向けられるよりはずっとましだが程度という物がある。

力というフィルター越しに見られている。力が無ければ唯の卑屈で非力な人間でしかないのに。

ルクシャナもそう言う目で自分を見ているのだろうか。

気持ち同様天気も曇り。夜の空は厚い雲に覆われ月が見える事は無かった。

その次の日。アルビオンの首都、ロンディニウムにある王宮の一室で乾いた音が響いた。

「ななな、ぶ、無礼者！」

ルイズは張られた側の頬を抑えた。

「無礼者はどちらかしら」

対するルクシャナは厚顔不遜、とうような態度でピンクブロンドの女の子を見下ろした。

部屋のドアを開け放ちルイズの姿を確認するなりいきなり彼女の頬を張ったのだ。

それを見ていたティファニアはどうしたらいいか分から無い様子でオロオロしている。

才人は才人でこええと呟くだけで何もできずにいた。

「大使にこんな真似して、唯で済むと思っっているの！？ 外交問題よ！」

出会い頭いきなり引っ叩かれたのだ。ルイズは自分に非があるとは思えず叫んだ。

「謝罪をするのはあなたの方よ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

ルクシャナは噛まずに一息で言った。覚えるのも一苦勞な筈の名前も憎しみ故かすんなり頭に入っていた。

「私が何したって言うの!？」

魔王の立場を知らないルイズは、当然ルクシャナの言葉の意味が分からない。

「使い魔召喚」

ルクシャナが言うとルイズはビクリと震えた。

「あなた、魔王を召喚したそうじゃない」

脅すように聞こえたのだろうか、ルイズはそれに屈しまいと反発する。

「それがどうしたって言うのよ! あなたには関係ないでしょ!」

「関係ないですって?」

ルクシャナは再びルイズの頬を張った。バチン、と今度は鈍めの音がする。

当たり所が悪かったのかルイズは痛そうに頬を抑えた。

「大いにあるわ」

ルクシャナは目に涙を溜めるルイズに冷たく言い放った。

「私の大切な人を連れ去って、良くもそんな事が言えたわね」

本当なら殺してる所よ、と呟く。実際魔王はエルフの間で聖者として扱われ政治的にも重要な立場にある。

「ハルケギニアのために犠牲になってたのに、これじゃあ彼も報われないわ」

「ハルケギニアのため？ どこにそんな証拠があるって言うのよ！」

「大陸蜂起。最近ゲルマニアで、陸地が宙に浮いた事は知ってる？」

ルイズは頷く。

「もしナツメがいなかったら、あれがハルケギニア中で起こる所だったのよ？」

そんな事信じられるわけがない。ルイズはルクシャナに殴られた事が理不尽に感じられ怒りを覚える。

「何を根拠にそんな事言ってるのよ！ そんな絵空事、誰が信じて言うの！」

「今、自分の立っている大陸が浮いてるじゃない」

その言葉にはっと気付く。

「ハルケギニアだけじゃないわ。砂漠サハラの北部にも同じような地域が存在してる。風石の鉱脈が存在する地域は、数千年〜数万年周期で浮き沈みを繰り返しているのよ」

大いなる意思はたにんの自供により明らかになっている。

「でもそれと魔王に、何の関係があるのよ」

「地下で飽和した風石を取り除いたのは彼よ」

大いなる意思と同化する事で風石を分解する事が可能となる。代償として体の自由を奪われる事になるがナツメは仕方ないと自らの時間を犠牲にした。

「でもあなたは、その最中で召喚した」

「風石に封じ込まれた状態で、どうやって取り除くって言うのよ。あんたバカにしてるの？」

「ハルケギニア中の風石を分解しなければいけないのよ？ 普通のやり方でできる訳ないでしょう。まとも掘り返したら、何年かかると思ってるの」

それに人間が住んでいない地域はどうするのか。住んでいなくてもその土地の恩恵は受けられなくなる。

だがルイズはそれに対し呆れたような口調で言った。

「あれだけ殺しておいて良く言うわ。それに、魔王の味方なんかするなんて、やっぱりエルフも野蛮人ね」

ルイズは亜人を唯の野蛮な種族として見ていた。エルフも最近までは同じように蔑視していた。

ティファニアに会ってその考えを改めようと思っていたのだが、ここに来てルクシャナの態度が受け入れられなかった。

そしてルクシャナはルイズの言い様に我慢が利かなくなった。

急に頭が熱くなる。

拳を握り込み、脇を締め右腕を打ち出した。体重の乗った拳はルイズの柔らかな頬にめり込み、脳を揺らし、そのまま体ごと倒した。

だらしなない悲鳴と共にルイズは床に転がる。「ルイズ！」と才人は駆け寄った。

「ルクシャナ！ やめて！」ティファニアが押さえようとするが撥ねつけられる。

「殺したですって？ 人間が先に仕掛けたくせに！ 自分たちがした事も彼のせいにして。野蛮なのは人間よ！」

ルイズは才人に起こされると彼の腕を振り切り杖を取り出した。

呪文を唱えようとするが、ルクシャナは蹴りを繰り返して短杖をはじいた。

「野蛮じゃない！ そんな風に暴力を振るうのが、野蛮以外の何物なのよ！」

ルイズは口の中が切れているのか唇の端から血が出ていた。

杖をはじかれルクシャナに掴みかかるうとするのだが、それもひらりとかわされる。

「サモン・サーヴァントが呼べる対象を選べない事は同情するわ。本当に仕方ない。でもあなたは納得できるの？ 神聖な儀式だからって、自分の大切な、大好きな人が連れていかれるのよ？」

ルクシャナは先ほどの一撃で冷えたのかルイズの攻撃を避けながら言った。

「その彼、あなたの使い魔でしょう？ 召喚しておいて彼の家族はどう思ってるでしょうね」

息も絶え絶えに様にならない攻撃をするルイズは、その言葉に動きを止めざるを得なかった。

才人も何かに気付いたようで「あ」と短く呟く。

「それともちゃんと許可を貰った？ 少なくとも私だったら許可なんか出さないわ。無理やり連れてかれてもしたら、一発や二発殴らないと気が済まないじゃない！」

「大切な人を奪ったっていうんなら魔王だって一緒じゃない！ 魔王が殺した人達にも家族はいる筈だわ」

「それは、その人間を彼にけしかけた奴に言いなさいよ！」

ナツメが殺した人間は、大なり小なり彼に対し実害の伴う悪意を向けた者たちばかり。

中には違う者もいるかも知れないが大半が教会によって偏見を植え付けられた者達。

ルイズは言い淀んだ。

「……何よ……あんな悪人……皆騙されてるわ」

「悪人だったらどうしてこの国の人達は、彼に対して肯定的なのかしら？ 騙されているのはあなたの方よ」

「それは亜人が肯定的なだけでしょ！」

あくまで認められないのかルイズは反論する。それを見ていたティ

ファニアは二人の間に入って、というか明らかにルクシャナの側に立って言った。

「ルイズさん。さつきから黙っていましたが、これ以上ナツメ様を悪く言うのなら帰って下さい。私の恩人を、アルビオンの恩人を悪く言う人とお友達にはなれないわ」

彼女もかなり怒っているようで声は低い物だった。

「ナツメ様がトリステインに対して不利益になるような事をしましたか？」

「偽物が何度も出てその度に被害が出てるじゃない」

「それは彼のせいではないわ。悪いのは彼の名を騙る者でしょう？」

「魔王が悪くない訳がないじゃない。そんな悪名があるから利用する人間が出るんだわ。存在悪よ」

生きているだけで悪。そんな事は理解している。自分がいるだけで周りが危険に晒される。

そんな事は何度も聞かされた。だから人間の手が及ばないエルフが住む地に逃げてきたというのに、それを再び呼び戻したのだ。

ルクシャナはもう一度殴ろうかと思った。いや、殺してしまおうかとも思った。こんな人間ばかりがハルケギニアに住んでいるのだとすれば手を貸す価値などない。そう思ってしまう程に人間に幻滅してしまいそうになる。

「ちゃんと話もせず、そんな風に言ってしまうのはとても悲しい事だと思いません。私には彼を貶めて自分の価値観を守っているだけ

のように見えます」

ルイズはもうティファニアが他国の姫という事を忘れて怒鳴った。まあそれ以前にルクシャナもエルフ側のお姫様みたいな物なのだが。

「アンタに何が分かるって言うのよ！ 異端狩りがどれほど恐ろしい物かも知らないで！ 召喚した時」

「知ってるわ」

ティファニアははっきりと明言した。

「あなたがナツメ様を召喚した時の気持ちは分からないけど、異端狩りの事は知ってるわ」

アルビオンでも異端狩りが起こった時期があった。

王政府の手が及ばない地域で翼人やコボルトが異端審問の名目で処刑される事件が数件。

それが切欠となり対立を生みそうになる。結果として王政府と各部族代表の対応により事無きを得た。

そして異端審問を強行した司教や信者である人間は追放されることとなる。

本来ならばその事に対して宗教庁から反応が有る筈なのだが、王政府が多額の寄付金を寄越す事によってそれを押さえた。

「それに、異端狩りの恐ろしさは、ナツメ様本人が一番よく知っている筈だわ」

数年間一人で教会の追手を退け、逃れ続けたベテラン異端者。笑えない。

「当時はルイズさんよりも小さかったのよ？」

中の人は結構年上だが。

「今だつてやられたからやり返してる訳じゃないわ。命を軽んじていないわ。強い力で押さえつけるだけの人達と一緒にしないで」

力で押さえつけているのはディアブロ・コンキスタの事。現在の宗教庁は既に腐敗から脱し変わりつつある。

ロマリア連合皇国の首都ロマリアでは、宗教として本来の姿を取り戻そうという運動が始まっている。

そのせいで国外の事まで手が回らず、『魔王に対して不干涉』というスタンスを取ることになった。

拒絶とも取れるようなティファニアの言葉を聞くとルイズは部屋を飛び出した。

「その人の事も知らずによくあそこまで嫌えるわね。いや、知らないからこそ嫌えるのかしら」

ルクシヤナはまだ腹の虫が治まらないのかルイズが出ていったドアを見ながら言った。

黙って聞いていた才人は何とも言えないように目が泳いでいた

「なあ、さっきの話からすると魔王ってというのは周りが騒いだけって事でいいの……いいんですか？」

才人はティファニア聞く。

「ええ。教会が自分たちに都合の良い悪魔にしたて上げたのです。今は教会も暗に認めています」

「じゃあ何で、ルイズはあんなに否定するんですか？」

才人はこの世界の常識に疎い。だからティファニアに聞いた方が早いと思っただのだ。

「使い魔さんが分からないのでしたら、私に分かるとは思えません。何せ会ったのが昨日今日です。それより、追いかけていいんですか？」

余り友好的な返事ではない。才人は美少女が怒った姿は恐いと思った。ルイズのように癪癢起こすのはまた違ったタイプで冷たく怒っているその姿に圧倒された。

「ティファニア、彼は召喚されて日が浅いのよ。ハルケギニアの常識は知らないんじゃないの？」

事の原因であるルクシャナは才人に助け船を出した。魔王の家族なのだろうか？ 才人はルクシャナに抱いた印象はめっちゃ恐い。

「そう言えばそうだったね」とティファニアは才人に自分の思う事を言う。

「ルイズさんは多分、魔王は忌むべき物として言い聞かされてきたんだと思うわ。トリステインはブリミル教の影響が強いから、その印象が強いんでしょうね」

「だったらさっきのは、多めに見てくれたっていいんじゃない。そっこの……」

「ルクシヤナよ」

才人が詰まるとルクシヤナが名乗る。

「ルクシヤナがいろいろやったんだから、ああなるのは普通じゃないんですか」

「彼女、大使なんでしょ？ 公務に私情は持ち込むべきじゃないわ」

ティファニアが言う前にルクシヤナが言った。お前が言うか、と才人はルクシヤナを見る。

「言うておくけど、私のは公務じゃなくて九割、私事よ。公務なのは叔父様の方」

残りの一割は仕事。ルクシヤナが諜報部隊に組み込まれているのは機密だった。

「だからって手を上げるのはダメでしょ！ もう！ これで事がこじれたら……あれ？ こじれない？」

ティファニアはとがめようとするのだが勢いを殺され、気の抜けた声を出す。

「私が何をしようが、最終的な決定権は王とウェールズあるんだし、アンリエッタ姫も、諸手を上げて賛成してるんだから？あまり？問題は無いわ。それに本当に外交やってるのは彼女のお父様でしょ？」

現在ヴァリエール公爵はマザリーニ枢機卿や王子、アンリエッタ姫

と会談中である。

「大事の前の小事じゃない。敵勢力を退ければ、こんな瑣末な事、気に留める人なんかいないわ。それにネフテスは人間世界と外交する気ないし」

「腹黒エルフ」才人は毒づいた。こいつ人間の事はどうでもいいらしい。

ほぼ完全に私事で大使のルイズの所に殴り込み。外交問題がどうかは分からない。だがそれを抜かして考えるとルイズの方が悪いなあ、と才人は思った。

誰だって大切な人から無理に引き離されたら悲しんだり怒ったりする。

ルクシャナの反応は至極当然のことだ。

召喚魔法がランダムな物でも起こるもんは怒る。

そう言えば何で俺は家族が恋しくならないんだろ？ まあいいか。

才人は思考を引き戻した。

「俺、ルイズの所に行つてきます」

「うん、頑張つて慰めてきて」

ルクシャナが軽く言うので才人は「お前がやったんだろ！」と胸中で突っ込みを入れた。

「ルイズさんもちゃんと話せば分かってくれると思うわ。お願いね」

ティファニア姫はいい子だなあ。才人はその胸に目が行く。ルクシ

ヤナはすぐに気がつきティファニアに言った。

「あ、ヤラシイ。テファ、こいつ今、あなたの胸を」

ひい！ とティファニアは胸を手で覆い隠す。隠れてない。

「見てません！ みてません！ ミテマセン！ 御免なさい！」

才人は必死になって否定した。

「謝るのは認めるのと同じよ？」

可愛いけどムカつく。才人の中でルクシャナの評価はかなり低い物になった。

ルイズは王宮に才人に割り当てられた使用人の部屋のベッドで蹲っていた。

父にこんな無様な姿は見せられない。

「硬い」

貴族用の客室に備え付けられるベッドよりも硬いのは当然。

「何よあのエルフ。勝手な事ばかり」

こっちだって魔王を召喚してしまった事で精神的に追い詰められたのだ。

自分の事ばかり言って……人の気も知らずに。

「痛」

不意に口の中が染みた。ああ、さっき殴られた時に切れたんだ。それを思い出すと段々と胸がムカムカしてきた。

「何よあの馬鹿エルフ！ 野蛮人のくせしてここ公爵家人間に向か
つて！」

ルイズ、トリステイン、ラ・ヴァリエール公爵家の三女。

ルクシャナ、エルフの聖女。（ルイズは知らない。アルビオンのエルフだと思っている）

言い付けた所でどうにもならない。同盟が無ければ国も無いのだ。自分が無礼な態度を取られたからといってあのエルフが謝るとは思えない。

ルイズはやり場の無い怒りを枕にぶつけた。

そうして枕に八つ当たりするのも疲れた頃に思い至る。

「……そう言えば一度も魔法使わなかった」

エルフの使う先住魔法は系統魔法よりも遙かに強力である。戦争しても勝ち目は薄い。それ故エルフは人間から恐れられていた。

そのエルフが一度も魔法を使わなかった。取るに足らない存在として見られていた？ 認められない。エルフなんか……。

再び怒りがこみ上げてきて枕に当たり始めると部屋のドアが開いた。

「あ、ルイズ。ここにいたのか」

才人はドアを閉めるとルイズに近づいてくる。

「何よ。慰めにでも来たわけ？」

「ルクシャナの話、聞いて来た」

ルクシャナ、あのエルフの名前か。

「確かに手を上げたのは向こうの方だけどさ、それを抜かしてもお前の方が悪いと思う。思ってもあれは言つべきじゃなかった」

「出て行って」

何よ、味方にいるって言ったくせに。ルイズは聞きたくなかった。

「十年待ったんだってさ」

才人が聞いた話なのだろう。

「ルクシャナってさ、ずっと苦しんだと思う。十年間ずっと引き離されて会えなかったって言ってた」

「だから何よ。私だって十年以上魔法が使えなくて苦しんでたわよ」

「ええ！ そうなのか！？」と驚く才人。

「まあ、そうだけどさ一応聞けよ。あいつさ、十年待ち続けてようやく会えるって所でお前が召喚しちゃった訳じゃん。それも魔王にとって敵しか居ない所に。すげえ心配になるのは当たり前だろ」

「殺しても死なないような奴、心配しても無駄でしょ」

元々強情な性格、加えて才人は唯の使い魔。彼から発せられる言葉はルイズにとつて軽い。

「お前何言つてんだよ！ お前だつて家族と離れ離れになつたら辛いつて思うだろ！？」

才人は感情が高ぶり、叫んだ。分かつてる。ルイズは頭では理解していた。だが本能に近いプライドが魔王を認める事を許さない。

「魔王なんて本当は居ないんだろ！ 周りの人間が自分たちに都合の良い敵に仕立て上げただけじゃねえか！ それにお前の国に味方するつて言つてんのに、何でそんな風に酷い事言えるんだよ！ お前が駄々捏ねてるだけだ」

真実と正論。それを平民、しかも使い魔に諭されルイズは余計に認める事が難しくなった。

「何か分かつちまつたよ」

「何がよ？」

「お前に友達が居ない理由。お前、身分とか体面ばつか気にして他人認めねえんだもん。ゼロだとかそんな物以前に、そんな奴とはお近づきになりたくないね」

良いのは顔の造りだけじゃねえか、と才人は言い切つた。核心を突かれてルイズは激昂した。

「余計なお世話よ！　というかアンタ首よ！」

「ああ！　こっちこそお前みたいな了見の狭いご主人なんかお断りだ」

「出て行って」

ここはアルビオンの王宮。使用人の部屋でルイズの部屋ではない。
「ここお前の部屋じゃねえだろ」と才人が言うも、

「でーてけー！」

ルイズは才人を蹴り飛ばし、部屋の外へ追いやった。

郷に入って郷に従わなければ痛い目見る事もある（後書き）

非常に微妙な修正です。ルイズはこの後良い子にして才人にデレるようになつてほしいと思います。お騒がせしました。

はた迷惑な王様

魔王召喚後の四十日目、ディアブロ・コンキスタがトリステインの国境、ラグドリアン湖に到達した。

国という体裁を成していない組織とはいえ一応の手順は踏むのか、一週間前に宣戦布告を出していた。

しかし国境に到達してもすぐ開戦にはならず、両者のにらみ合いが続いている。

ディアブロ・コンキスタの陣営の一つはラグドリアン湖のほとりにある。

碇を下ろした空飛ぶ軍艦が数十隻二万を超える人間の兵とオーク、トロール、オグル等の亜人。

勢力の三分の一に満たないこの兵力で、既にトリステイン軍と拮抗していた。

組織の掲げる共通目標は第一に『魔王討伐』。

そのためにハルケギニアを一つにまとめようという運動なのだが、実際箱を開けてみると村落の略奪が目立つ。

民衆からは恐れられ、発足当時はブリミル教徒中心だったのだが、近年は目先の利益に目がくらんだ貴族や傭兵ばかりが集まっていた。

整列した無数の兵の前には数隻の軍艦。一番大きな一隻の上にはディアブロ・コンキスタ幹部と思われる人間が数人。

護衛を後ろに控えさせ、甲板の上からその光景を見下ろしていた。

そしてその内の一人が声高らかに拳を振り上げた。ブリミル教の司

祭だった。

「諸君！　これから我々は忌わしい悪魔を生んだこの国に鉄槌を下す！」

兵たちは叫びに呼応し、会場となった平原は沸き上がる。

「彼の国は悪魔を討とうともせず、唯その力に屈し、唯糾弾するだけだ！　古い時代の良き時代の信仰が忘れられているのだ！　諸君、勇敢な神のしもべたる兵士諸君に問おう！　トリステインの伝統は生きているのか？」

「否！　否！　否！　否！　否！」

密集した兵たちからは霧のように湯気が立ち上り、その熱気が演説者である司祭を煽り立てる。

「そうだ！　奴らは諸君ら神のしもべとは違う！　トリステインは背信者の集まりだ！　悪魔に屈した弱者の集まりだ！　だが諸君らは違う！　悪魔を討たんと立ちあがった勇者たちよ！　我らの力を奴に見せつけてやるうではないか！　悪魔に天罰を下せ！」

「天罰を下せ！　天罰を下せ！　天罰を下せ！　天罰を下せ！」

「悪魔によって平和を乱されたハルケギニアを救うのは神に選ばれし我らの使命だ！　よいか！　これは唯の戦いではない！　新たな秩序を作り上げる聖戦である！　悪魔に死の鉄槌を！」

「死の鉄槌を！　死の鉄槌を！　死の鉄槌を！　死の鉄槌を！」

演説者は更に拳を振り上げた。

「新教皇万歳！」

「新教皇万歳！ 新教皇万歳！ 新教皇万歳！ 新教皇万歳！」

「ミケール万歳！」

「ミケール万歳！ ミケール万歳！ ミケール万歳！ ミケール万歳！ ミケール万歳！」

兵士たちの熱狂は絶頂に達する。新教皇、組織の首領ミケール・デイーオ。

ディアブロ・コンキスタはロマリアにも戦争を仕掛けるつもりなのだ。現教皇ヴィットーリオを倒し、保守派の巻き返しを図ろうしている。

ロマリアどころか世界中に喧嘩を売っているようなものだった。

会場の注目を一身に浴び満足げに微笑む司祭。だが、下から見上げる兵士からおかしな声が上がった。

「おい、何だあれ？」

司祭が下を見下ろすと自分の上を見上げる兵士が目に着く。それに倣うように上空を見上げようとした。

直後、甲板に何かが激突した。

「何事だ！」

誰かがそう叫ぶのと同時に司祭の首と胸が離れる。甲板の上にいる全員が目を見た。

司祭の首を持った男が不気味な薄笑いを浮かべていたようだった。首を失った体から噴水のように血が吹き出し、男にかかる。真っ白な髪に赤い血がついた。

「魔王だ！　魔王が現れたぞー！」

甲板の上に居たメイジの一人が叫ぶ。十数人の護衛は杖を抜き、呪文の詠唱を始める。組織幹部たちは恐慌状態に陥り、我先にと逃げようと護衛の方に駆けていく。

「敵は一人だ！　恐れるな！　討ち取って名を上げよ！」

それが言い終わる前に首が飛ぶ。呪文のほとんどが完成する前に途切れた。

「悪魔だ！　悪魔を殺せ！」

狂ったように叫ぶ組織幹部。そんな攻撃の意思も悪魔は無視して甲板上で殺戮を繰り返す。

エアキャッター同様の風の刃が量産され、それから逃れた者も殴り飛ばされ、引き千切られていく。

「船を降ろせー！　降ろして数で押すんだー！」

号令と共に下でトロール等の亜人が碇のついた鎖を引き始める。兵士たちは船の下に群がり、今か今かと魔王が降りてくるのを待つ。

「一隻ぐらい犠牲にしてもかまわん！ 竜騎士はどうした！？ ブレスだ！ 大砲を打ちこめ！ 我らはどうなっても構わん！」
「待て、まだ私達が乗っているのだぞ！」

「ああああ！ 来るなあッ！」

幹部同士が争いが起こり、場はますます混乱していく。

船の上は血溜まりの処刑場、船の下の援軍が来るまでまだ数十秒の猶予がある。

魔王が仕事を終えるには十分すぎるほどの時間。

幹部は断末魔を上げる暇もなく絶命した。

「悪魔を逃がすなあー！」

甲板上に生きている人間が居なくなると魔王は上空に飛び上がり、兵たちを一瞥すると去って行った。

同時刻、ガリア側に位置する山の上から二人の人影が敵陣の様子を見下ろしていた。

一人は男。望遠鏡を覗き込み、声を上げて笑っていた。

傍らに控えているのは二十半ばほどの黒髪の長い女性。体のラインが良く分かる服を着ている。

「くくくくくく、はははははは！ 素晴らしい！ 素晴らしいぞ！
魔王！」

青い髪と鬚が特徴的なその男、ジョゼフは子供の様にはしゃぐ。

「はははは！ 奴は食肉処理でもしているつもりか！ 綺麗に首ば

かり刎ねているぞ！ おつ、今度は引き千切りおつた」

歳の頃は見た目三十と言った所か、実際は四十五歳なのだが筋肉質の体が若々しさを醸し出す。

「おおお！ 人間の臍物は結構強いのだな！ あのように振り回すなど流石の俺も初めてだ。あっはっはっはっは！ 奴は俺以上の狂人か！ あんなに愉快的殺戮をする化物は見た事が無い！」

レンズ越しに見える魔王は腸を掴み人間を振り回していた。

「む、もう終わりか。仕事が早すぎるのも考え物だな。楽しみが終わってしまった」

「では更にけしかけますか？」

控えていた女性、シェフィールドがジョゼフに問うた。

「そう急くな、ミューズよ。せつかく見つけた玩具だぞ？ 乱暴に扱い過ぎては壊してしまうだろう。それに殺戮ショーばかりも飽きる。もっと別の方向でも楽しませてもらわねば」

そしてニヤニヤと次に打つ手を考え始める。何かを思いついたように言った。

「所で？例の物？は出来ておるのか？」

シェフィールドは、はっと焦ったかのように跪いて答える。

「申し訳ありません。開発を急がせてはいるのですが、エルフから

技術を引き出す事に難航しておりまして、完成にはまだかかるかと」

「ミューズよ、余はお前を責めているのではない。それに注文通り行かずとも好い。目的さえ達成できればいいのだ。余り時間がかかるとよければ代替案も考えよ。エルフに頼れなくとも既存の物で考えてみる事もしてみる。案外、上手く行くものだぞ」

ジヨゼフの言葉を聞いて天啓が下りたかのようにシエフィールドは目を輝かせた。

「その通りですわ！ 流石我が主人、言う事がそこいらの凡夫とは違いますわ！」

「そつだ。お前は頭は良いのだが、少々頭が固い所が有る。余に忠実なのは良いが馬鹿正直なのは考え物だぞ」

「はっ！ 猛省致します」

そしてジヨゼフは深いため息をつく。ゾクゾクツと体を震わせて、再び笑いだした。

「あの魔法、いやそれ以上にあの動き……流石？先住？の生み出した生物だ。面白い！ 面白いぞ！ あんな奴が存在した事がこの六千年の歴史にあったのか？ 俺の？加速？とどっちが速いかなあ」

手を大袈裟に広げた。シエフィールドは主が喜ぶ姿を満足気に見て答える。

「もちろんジヨゼフ様でございます」

「ミューズよ、賛辞はいい。率直に言え」

微妙そうな表情でジョゼフは言った。シェフィールドは「申し訳ありません」と僅かに考えて言った。

「速度ではジョゼフ様が勝っているでしょう。ですが奴の対応力には目を見張る物があります」

ジョゼフは満足気に頷く。

「そうであろうな。まるで後ろに目どころか、離れた所に目が付いているとしか思えない。ああ！ 奴に会うのが楽しみだ！」

恍惚とした笑みを浮かべる。まるで思い人思つかのようにジョゼフは何とも言えない雰囲気を醸し出していた。

その様子にシェフィールドは苦々しい表情を浮かべる。

「奴を殺せば俺の心は震えるだろうか？ この空虚で満たされる事無い心は埋まるだろうか？ 達成感は得られるだろうか？ 喜びはあるか？」

「ですがジョゼフ様、奴はロマリアが作り上げた体の良い生贄でしかありません。あなた様が手を下すまでもないのでは」

「先ほど実物を見るまではそうだったかもしれん。だが考えてもみよ、都合が悪いだけの生贄が二十年も、あの生臭坊主共を退けてきたのだ。奴らでは役者不足だ。ああ、アイツも下らない神に辟易しているかもしれん。奴は俺と同じなのか？ だとしたら尚更俺が手を下さなければ！」

「ジョゼフと？同じ？。シエフィールドはその言葉に反応を見せる。

「ジョゼフ様と？ あんな男が？ 見た雰囲気は覇気を感じられない男でしたが……唯、力にのまれた愚かな者が？」

甲板上に居た魔王は殺戮を楽しんでいるかのようだった。増長し、敵だから蹂躪して当然と言わんばかりに船上を血の海に変えた。

暴力としての脅威は大きいが、自分の主のような他を出し抜く圧倒的な知性は感じられない。小者、ディアブロ・コンキスタの幹部共同様、シエフィールドは取るに足らない存在だと見ていた。

そんな小者に我が主人が執心している。悪魔ごときが！ シエフィールドは魔王に嫉妬を感じていた。

「そんな事はどうでも良い。魔王が小者だとかそんな事は関係ないのだよ、ミューズ」

そしてジョゼフは嘆いているのか喜んでいいのか、どちらとも取れるような声を上げた。

「ああ、奴は何故トリスティンなどに行ったのだ！ どうせならガリアを壊してくれれば良かった！ シャルルを手にかける前に、こんな世界を壊してくれたならば、俺はこのようにならなかつただろうか？ あの時？ どうして壊さなかつた！？ お前ならばできただろうに」

？あの時？二十年前のガリア王都リュティス。降臨祭でジョゼフは壇上からナツメを見下ろしていた。良く覚えていたものだ。いくら見た目が目立つとはいえ一度見ただけの、悪魔になる前のナツメをジョゼフは覚えていた。

「悪魔よ、お前にはとことん付き合ってもらおう。震えたいのだ、俺は。神を殺し、魔王を殺し、人間も亜人もあらゆるものを壊し、殺し尽くす事で感情を取り戻したいのだ。悲しみを感じたいのだ。人間として、後悔し涙を流したいのだ。そのための対価ならいくらでもくれてやる」

ジョゼフは高笑いして叫んだ。

「世界だ！俺は対価に世界を捧げるぞ！」

魔王が殺戮する数日前、アルビオン王宮の中庭ではちょっとした対立が起こっていた。

「げ、馬鹿エルフ」

「何よちんちくりん」

中庭に備え付けられたテーブルでルイズが休んでいると建物の中からルクシャナが出てきた。

先日的一件で彼女達には深い溝ができていた。

「別に何でもないわ。唯会いたくない奴に会っちゃっただけよ」

「そう」ルイズの刺々しい言い様にルクシャナはどこ吹く風と短く返事をする。

ルイズはその余裕そうな態度に内心地団駄を踏む。何よ涼しそうな顔しちゃって！

「ああ！　せつかくの上品な空間が台無しだわ」

ルイズは負けじと言い返すのだが、ルクシャナは聞き流し隣のテーブルに座る。

分厚い本を読み始めた。その態度が負けず嫌いのルイズの心に火を付ける。

唯のエルフのくせに！

ルクシャナの一挙一動が堂々と気品を感じさせる物である事もそれを助長する。

「大人しく砂漠に引つ込んでなさいよ」

「喚くなら他でやって頂戴。ここはあなたの家じゃないのよ？」

ルクシャナは本から顔も上げずに一蹴する。

「自分の家じゃないって言うならあんたもそうじゃない！」

「私は迷惑かけてないわ。あなたみたいに騒音になってないし」

「そそつ騒音ですって!？」

「ほらまた。あなたみたいなのが公爵家の娘だなんてトリスティンも大変ね。いや、大変なのはあなたの御両親か」

図星を指されてルイズは言葉に詰まった。事実、父であるヴァリエール公爵に大目玉を食らっていた。

しかし同盟には影響しないらしくルイズは胸を撫でおろした。

「何ですって？」

国が減ぶ瀬戸際で同盟を結ぶために来たというのに再度ルイズの頭は沸騰しそうになる。

「ほらまた。あなたそんなに沸点低くてよく大使に成れたわね」

違う。ルイズはそう言いそうになった。

気位とプライドの高いルイズからすれば、取るに足らない？平民と同列？のエルフが自分を一方的に罵倒したから怒りを感じているのだ。

始めからティファニアがそれをやっていたら萎縮するだけで終わっていただろう。

あの時は頭に血が昇ってしまったから抑えが利かず言いたい放題言ってしまった。

一応、反省はしていた。

「アンタこそ他国の大使に手を上げるなんてどういっつもりだったのよ」

「もう罰は受けたわよ。はあ……分かってたけど何か面白くないわ」
ルクシャナは頁を捲りながら片手間に答える。

「アンタも？ どうして？」

同盟には何の影響も及ぼさないからお咎め無しかと思っていた。
ルイズには意外だった。

「任務中に全く関係ない私事。罰がない訳ないじゃない。ま、罰っ

「と言っても叔父様のげん骨だったけど」

任務、おそらく魔王に関する事なのだろう。同盟の交渉の席に他のエルフが同席していた事からも分かる。それにげん骨。自分は父に頬を引っ叩かれた。その事にルイズは僅かに親近感を覚える。

「? あんたも? って事はあなたも叱られたの?」

「う……そ、そうよ」

見た目は自分より少し年上といった所なのに余裕のある態度に敗北感を感じる。

ルクシャナはルイズを見てクスリと笑った。

「何よ」

「べっつに」

「文句があるならはっきり言いなさいよ!」

「もう無いわ」

。

「何か腹立つ」

「私はすっかりした」

「本当、殴りたくなってきたわ。外交なんてどうでもいい」

「傍若無人、残虐非道。血も涙も無い人間の敵……ってしまった！」
ルイズはつい思っていた事を言ってしまった。口を押さえる。だがルクシヤナに怒った様子はなく、寧ろ笑みさえ浮かべている。

「残念、不正解」

「だったら何なのよ。まさか聖人君子とでも言うんじゃないでしょうね」

「そんな訳ないでしょう？ 私気付いちゃった。端的に言うとな彼の性格はあなたと真逆よ」

自分と真逆の性格。ルイズはそれを言われて考え、自分の評価に首を捻った。

やっぱりそうじゃないか。慈悲深い私と冷徹な魔王。どこもおかしい所はない。

「あなたってプライドとか身分的な気位が物凄く高いでしょう？ まあ、実が伴ってるかは置いといて」

「一言多いわ！」

気位の高い事のどこがいけない。貴族たる自分は下の者達に軽く見られてはいけないのだ。

「契約しなくて良かったじゃない。きっと考え方が違い過ぎて上手くいかなかったと思うわ」

魔王自ら平民のような物だと言っていたが、高圧的な雰囲気を漂わせていた。

確かにルイズに対して敬意を払った様子はなかったし、きつと上手くいかなかっただろう。

隙あらば契約しようとした事が思い出され、ルイズは自分が恥ずかしくなった。

傍から見たらキスを迫ってぴょんぴょん跳ねているようなものだったのだ。

「頼まれても契約なんかするもんですか！ あんな無礼で、人を人とは思わないような悪魔なんか、こっちから願い下げよ！」

誤魔化すように声を上げる。ルクシヤナは呆れたように吐息をついて言った。

「うわあ、本当に偏見ばかりね。そんな人じゃないのに……。全く、教会が変な先入観植え付けるから」

「始祖を敵に回すような発言は止めなさい、って意味無かったわね」
エルフが始祖ブリミルの敵というのは六千年前から変わらない。今更の事である。

「そんな人じゃないって、証拠でもあるって言うの？」

「疑り深いわね。だったら直接話してみれば良いじゃない」

「へ？」ルイズは気の抜けた声を出す。ルクシヤナの言った事を理解するのに数秒の時間がかかった。

「は、はは話すつて、その……魔王と？　できる訳ないじゃない！」

ルイズは一応、ブリミル教徒である。信仰のレベルは低いにしても、魔王の敵である事には変わらない。だから対峙すれば殺される、と考えてしまった。召喚した時の対応は気まぐれだったに違いない。取り乱すルイズにルクシャナは手をひらひらと脱力した様子で答えた。

「大丈夫大丈夫。言葉でいくら罵ろうが否定しようが暴力に訴える事はないだろうから。実力行使がないと動いた試しがないもの」

「この間と言ってる事が違うじゃない」

先日の出来事でルイズは散々魔王を貶める発言をした。

それがルクシャナ怒りを増長させる事になり彼女の拳に火を吹くかせたのだ。

「それは私に向かって言ったからよ。当人に言ったら気にも留めな
いか落ち込むか。それともあなた、自分の大事な人が貶されても不
快にならないの？」

「そんな訳ないでしょ！」

家族やアンリエッタを貶めるような事をされたら絶対許せない。

「私だって同じよ」

当たり前の事、本当に当たり前すぎて言われるまで気付きにくい事
だった。

平民と貴族の命、どちらが重いかと言われれば確実に後者が挙げら

れる。

だが大切な人を思う気持ちに貴賤は無い。ルイズはそれを実感したのだが、それが表に出る事は無い。こいつに屈してしまうのは癪なのだ。

「謝らないわよ」

「何を？」

「召喚の事よ。サモン・サーヴァントは召喚する対象を選べないの。召喚は事故。故意にやった訳じゃないわ」

「ああその事。知ってる。あなたも被害者なのよね。ちょっとやり過ぎだったわ」

ルクシャナは軽く流して言った。ルイズはカチンときた。

「何よ今更！ あれだけの事しておいて！ どこがちょっとなのよ！」

「あの時は周りが見えてなかったというか。私って夢中になるといつもこんななのよ」

沸騰するルイズと涼しげなルクシャナ、両者の温度差は激しい。

「はあ……私って何のためにここに来たのかしら」

アルビオンに来たのはティファニアと仲良くしておいたらいろいろとお得になるのでは？ という理由からだった。

だがこの馬鹿エルフのせいで地が出てしまい、ティファニアは怒り

心頭、父には叱られる始末。

唯の足手纏いになっている事にルイズは自分が情けなくなった。そこへルクシャナが堂々と言い放つ。

「私の八当たりを受け止めるためでしょ？」

「藁人形にでも当たれ！」

何とも迷惑な話だ。本当に悪い事ばかりが立て続けに起こる。ルイズは自分の不遇に怒りを感じた。そもそも何で使い魔召喚なんて物が必修なの？ 筆記試験にしなさいよ！

「……使い魔は使い魔で平民のくせに勝手ばかりするし、馬鹿エルフには更にバカにされるし、ってあなたの事言ってるのよ。大体あんたは何なのよ？ 姫様やウェールズ様にも偉そうにして！」

ルクシャナは再び本に視線を移すのを止める。

「何って………聖女？」

頭がおかしいのではないのか？ ためらいがちに言う以前にそんな単語が浮かぶ自体不遜だ。

「はあ？ 何言ってるのよ。あんたが聖女なら私は神だわ」

「御免なさい。自分で言ってるで恥ずかしくなった」

ルクシャナは気まずそうに本で顔を隠す。

「一介の唯のエルフがあんな口を聞いたら、トリスティンじゃ打ち

首物よ。そうでなくても王族に対して失礼だわ」

まず最初に王国、王族ありき、次に自分達貴族が来て、その下は王族と貴族に仕えるべき平民。

神は、王達の始祖。王権を与えた者。その敵という事は自分達の敵である事は疑いようが無い。

ルイズにとってはこれが常識であり、ルクシャナは平民、最近まではそれ以下の悪魔の種族と言う認識だった。

そんな先入観があるから、ルイズにとってはルクシャナの態度は受け付けられた物ではなかった。

「ここアルビオンだもーん」

「それが失礼だつて言ってるのよ！」

「どうして？ あなたは私の上司でも何でもないでしょ？ それどころか仇に匹敵するわ」

「私だつてあんなの呼びたくなかったわ！ ドラゴンとか、マンテイコアとか、グリフォンの方が、いや、最悪猫でも良かったわ。猫の方が万倍ましよ！」

ルクシャナは眉をひそめてルイズを見た。深く息をつきながら分析するように見て言った。

「……猫？ 無理無理。あなたつて猫と上手くやれそうに見えないわ。どちらかというとか犬じゃない？」

犬、馬鹿犬。ルイズがよく口にする才人の呼称。

「あなたって支配欲強そうなもの。よく才人叩いてるし。知ってる？ 猫って、気持ちを押し付けられたら逃げるのよ？」

尻尾を振るのは犬。従順であり、しつけ次第ではいろいろな事が出来るようになる。

反対に猫は基本的に勝手気ままな行動が多い。無理なしつけは返って逆効果。ルーンの効果でもない限りは、人間の命令を聞くようになるのに相当な期間が必要になる。

「召喚されたのがちゃんと猫だったら、あんな扱いしないわよ」

「どうだか。自分より、友達に懐いちゃったら？ 嫉妬するじゃないの？ ティファニアの時もそうだったし」

「あ、あれは使い魔が無礼を働かないように、ちゃんとしつけよう」と

「やっぱりあなた、猫は無理よ」

クスクスと笑いを堪えるルクシャナは猫のようだった。なるほど、気が合う訳が無い。

「何であんたみたいなのに私が……」

「ねえ、さつきから肩書ばかり気にしてない？ それとも私の気のせい？」

「アンタが気にしなさ過ぎなのよ」

ルイズは疲れを感じた。このエルフには何を言っても無駄だ。

「失礼ね。私だって敬意を払うべき人には然るべき態度をとるわよ。王様とか」

「王子とか王女には!？」

「だって、そうしなくて良いって言うんだもの。だったら別に問題ないでしょ?」

釈然としない。ルクシャナ>ルイズ、という構図が出来上がっているようで納得いかなかった。

自分には力がない。有るのは家柄と貴族という身分だけ。

でも目の前のエルフは力もあるし、きつと先住魔法も使えるのだから。自称聖女だが。見た目は……ギリギリで引き分け、いや私の勝ちね!

「必要以上に身分に固執するのは余り良くないと思うわよ? それってその人の事じゃなくて肩書だけ見てる事にならない?」

「……分かってるわよ」

一番自分が欲しかった物は家族に認めてもらう事。それはかなった。魔法などなくても家族は自分を愛していたのだ。

先日とは違い頭が冷えているので自分の非を抵抗が有りながらも認める事ができた。

「そう言えばあなたの使い魔はどうするの? ティファニアが便宜を図ってくれてるらしいけど」

「ティファニアが? あんの馬鹿犬」

ティファニアを頼るなど、きつとあの乳に目を奪われていたに違いない。ルイズはわなわなと震え出した。

「それよ。それがいけないのよ」

「へ？」

「確かにサイト、かなりのスケベだけど、大きいのを選ぶのは本能みたいなものなんだから。ティファニアのアレは流石に反則だけど、少しは大目に見るべきよ」

「アンタ何言ってるの？」

「それに公爵ってかなり身分が高いんでしょう？ 彼みたいに素で接してくれる友達ってかなり貴重だと思うわ。もっと大事にするべきよ」

ルクシャナは聖女に仕立て上げられて以来、以前と変わらぬ態度で接してくれる友達が減っていた。

エルフが大いなる意思という神を崇めている以上は仕方ない事。聖女というフィルター越しに見られない。

そう言う意味において、今のルイズとのやり取りは彼女にとって望ましい物であり、また楽しい物だった。

「友達って、唯の使い魔よ」

「使い魔ねえ。あなたの扱いじゃ奴隷の間違いじゃないの？ いや、使い魔という名の奴隷か」

使い魔は多くが主人に対して好意を抱く。またその逆も多く、初めから相性の良い組み合わせが選ばれる、とも言われている。中には洗脳などという仮説もある。

「違うわ。使い魔はメイジとの信頼で成り立つパートナーよ。奴隷なんかと一緒にしないで」

ルイズにとっては使い魔に対する主導権が無い事が問題なのだ。奴隷は言い過ぎ、精々仲の良い使用人の位置づけか。

「どの辺に信頼があつたの？」

ルクシヤナは首を傾げた。真面目に考えている。

「それはあの犬が……」

「ほら犬って。やっぱり猫無理だわ。いや、あなたって、もしかしてそういう性癖？」

「そんな訳ないでしょ！ いい加減猫から離れろ！」

「だってメイドと仲良くしたぐらいで叩いたりしてたそうじゃない。それも鞭で」

「なな何で知ってるのよ!？」

「サイトが言ってた」

ルイズの中で才人を処刑する事が決定された。

「早めに仲直りした方がいいわよ？ あ、でも彼、結構怒ってたからしばらくしてからの方がいいかもね」

ルクシャナはニヤニヤとルイズを眺めていた。サイトのバカ。何でこんな嫌な奴に相談するのよ。ルクシャナの態度には明らかにからかいが含まれていた。

ルイズは対抗心を燃やして言った。

「アンタに言われるまでもないわ。サイトは私の使い魔なんだから。私が面倒みて当然なんだから！」

はた迷惑な王様（後書き）

この間の奴を修正。

俗物教皇

オルレアン領主の屋敷は臨時でディアブロ・コンキスタ本部になっていた。

敷地を囲う外壁の外には五万の大軍が野営をしている。前線と合わせて七万強。全軍の内、半分を用いてトリステインを攻めていた。

「何という事だ……まさか本人が……しかもこんなに早く……」

屋敷の一室では幹部が長机を囲み、周りには十数人ほどの護衛が控えていた。

「ふんっ、臆したか。悪魔程度に情けない。我々が奴に屈してしまえば、始祖の権威は誰が守るといふのだ！」

弱気な発言をしたのはゲルマニア貴族、勇者の称号の恩恵と教会の献金免除等を目当てに組織に参加した。

そしてそれを諫めたのは元、宗教庁所属の枢機卿、改革派に負けた保守派の一人。

魔王の出現は勢力内部に決して少くない混乱をもたらした。

まさか本人が直接来るとはほとんどの人間が思っていなかったのだ。末端の兵士はもちろん、幹部でさえも、本気で魔王を倒そうと考えているブリミル教の神官以外は。

「貴様のような者がいるから、悪魔憑きが増えるような事になるのだ。全く、空から見下ろしおって……」

悪魔憑き。大体が人間以外の種族を指し、それらは異端狩りを恐れ、アルビオンへ逃げて行く。

結果、アルビオン大陸の人口は増加、異種族が勢力を伸ばす事になった。

アルビオンを除く各王家は、異教徒を罰するお触れを出している。それはもちろんゲルマニアも例外ではなかった。表向きは。

実際は、異種族の持つ先住魔法の有用性に目をつけた貴族が秘密裏に保護をしていたりする。ゲルマニア政府はそれを黙認していた。

「何を言うか……アレは教会から出た膿であろうに」

「貴様、神を愚弄する気か！」

「事実でしょう！ それに神が作り出したのではない。新教徒は宗教庁のやり方に反発した連中が生み出したんだ！ 無理に焼き払おうとするからこんな事に」

「神の教えを遂行しただけにすぎん。貴殿のしている事は神の教えを批判する事、自ら異端に踏み入るおつもりか」

上座に座っていた人物がよく通る声で嗜めた。

「おやめなさい」

その者は白い簡素な修道服に身を包み中性的な顔立ちをしていた。

「このような時に身内で争っていても、解決する物も解決しません。それこそ、神もお嘆きになる事です」

ミケーレ・デイーオ、元はロマリアの枢機卿。教皇選挙でヴィットーリオに大差をつけられた人。

「奴が我々前に現れたのは心を折るため。優位に事を進めるためにこちらに揺さぶりをかけたいのです」

演説中の襲撃。二万を超える者達が見ている前での虐殺は組織内に
少なくない混乱をもたらしした。
事実、襲撃された軍艦の有様を目の当たりにした兵士は、戦意を保
つのが難しくなっていた。

「心を強く持つのです。悪魔に付け入る隙を与えてはなりません。
あなた達がそんな事でどうするのです」

僅か数分の内に組織幹部五人を含む百人近くを葬り、甲板の上は文
字通り血の池が出来上がっていた。

ほとんどの死体が首を刈り取られ、そうでない者も上半身と下半身
が別れてしまった者、四肢をもぎ取られた者もあり、その様相は地
獄と言つて差し支えなかった。

一方的な虐殺。

死の匂いを間近に感じさせるその光景は見せしめとなる。

兵士達の戦意を奪うには十分だった。

「魔王討伐を掲げている以上、遅かれ早かれ、奴とは杖を交える運
命にあるのです。今ここで奴を討ち取れなければ我々の未来は、ひ
いては神の権威も地に落ちる事でしょう。それは避けねばならない」

「ですが、魔王単独ですらあの戦力。これでは無駄に兵を消耗する
事に成りかねません。何か良い手があるというのですか？」

もしかして自分達はとんでもない奴を敵に回してしまったのでは？
だが中にはそんな事もお構いなしの奴もいるようで、そういった連
中はますます血を滾らせていた。余程自分の腕に覚えがあるのか、
唯の馬鹿かは定かではないが。

戦意を失った者は組織を抜けようと試みるかも知れない。だが、組
織幹部の三分の一はブリミル教関係者。加えて先日の襲撃で死んだ

幹部はブリミル教の神官一人、残りは諸国の貴族。ディアブロ・コンキスタを抜けようとする者は敵前逃亡ではなく、彼ら幹部に異端者の烙印を押され、これまでに得た戦利品、及び財産は没収され、見せしめに殺された。

「単独では限界が来るのも早いでしょう。加えて先日の派手な襲撃。しばらくは動けない筈、一人では限界があるのです」

「ではこれを機に攻め込むと？」

「ええ、亜人供を使うのが良い。奴らの神が魔王であれば、救おうと動くでしょう」

ミケーレは何の感情も含んでいない。その言葉を聴くと急に幹部達は色めき立つ。

どんな交渉術を使ったのか、この男はトロール鬼や争いを好まないオグル鬼まで味方につけていた。

「その通りだ……。亜人を利用すればいいんだ」

「そうか、そして奴が疲弊した所を叩けば……」

ミケーレは彼らにとっての朗報を続けて言った。

「ミス・シェフィールドも、策に心当たりがあるとの事です」

後ろに控えていた護衛達の目にも光が宿る。負け戦の空気が漂い始めていたのも終わる。

「おお！ 彼女が！ 姿を見せなかったのはそのためか」

「ですから余計な心配は御無用。この程度の混乱は想定範囲です。それにここで倒してしまえば、ハルケギニアの覇権は我々の物同然」

「その通りじゃないか！ 改革派供を追い出す事も、ハルケギニア統一も、果ては聖地奪還も夢ではない！」

現在の宗教庁が魔王のに対して不干渉であるのは、アルビオンからの寄付金が大幅に増加している事に起因していた。

反面ディアブロ・コンキスタは侵略と略奪を繰り返し、難民を生み出す厄介者。ロマリア連合国内部では人間の難民が溢れ返り酷い有様となっていた。

宗教庁は魔王どころではなかった。討伐などに回す予算の余裕がない、魔王に対して不干渉なのはそんな理由も含んでいた。

「多少の誤差はあれど、我々は計画通りに事を進めればよいのです。忌々しい悪魔も我々の神の前に打ち滅ぼされているのは歴史が証明している事。亜人が人間を押しつけて台頭するなどという事はあってはならないのです」

六千年もの間、人間がハルケギニアを支配できたのは知性を持つ者が多民族よりも圧倒的に多い事と、様々な方面で貪欲さを有していたからとも言える。

一方でコボルトやオグル等、亜人と呼ばれる種族は、知性の方面で若干劣る。稀に現れるコボルトシャーマンのように異常に賢い者も居るのだが数は少ない。

「アルビオンは異常だ。言葉を話す亜人があれほど集まるなど、他に類を見ない。早めに叩いて置かなければこの歴史にも例外を生む事になりかねません。それは神の功績に泥を塗る事も同じ」

ミケーレは拳を固く握り締めた。それを他の幹部に見せる事はなかった。

「で、ミス・シェフィールドの策とは具体的にどのような事なのです？」

幹部のゲルマニア貴族は信仰心という物が薄く、この手の話が苦手なのか、実務的な話に切り替えようとする。

「合成獣キメラです。それもかなり特殊な物だそうで、かなり大掛かりな準備が必要との事。近日中に使えると彼女は言っていました」

その言葉を聴いて幹部達は各々の想像を膨らませる。魔王を屠るために生み出される生物はどのような物なのか。

「彼女も人が悪い。具体的にどのような生物か、教えてくれても良いものを、当日のお楽しみと教えてくれないのですよ？」

ミケーレはおどけて言ってみせた。

「全くその通りですな、あの方は。ですがいい意味で期待を裏切らない」

いつの間にか戦艦や武器その他を奪ってきたり、どこからか金品を調達してきたりとその行動に謎が多い。

疑う者も居るのだが、いつの間にか納得させられてしまっている。もしくは疑える立場にないか。

「俗物供め」ミケーレは胸中で呟いた。この連中は大きな脅威が迫ると取り乱すか、神に頼るしかないのか。魔王を討ち滅ぼすだけの

都合の良い存在が在るとは思えない。

生臭坊主。清貧を奨励する一方で、一番戒律を破っているのは彼ら保守派の神官。過去に肅清されてしかるべき人間だった。

「いやあ、現物を見るのが楽しみですな」

「これで我々の名誉も保たれる」

「ところでこの場合、勇者の称号の所在はどうなるのだ？」

結局この連中も一緒なのだ。あの欲望の塊が人の皮を被った獣と。

貴様らに名誉などあるものか。

この中にブリミル教徒はいない。存在しない。悪魔以前に背信者は貴様らだ。ミケーレは内心嫌悪でむせ返っていた。

「我等こそがこの大地を統べるにふさわしい種族なのです。亜人がこれ以上勢力を伸ばす事は見過ごす事はできない。これは神の意思だ！」

教皇の座などはどうでもいい。悪魔さえ排除できれば手段は選ばない。たとえ？神？に背こうとも。

「そうだ！我等が導かなければ。諸国の王達の不甲斐無さと来たら……無能王は言うに及ばず、トリステインは口だけ、ゲルマニアはそこから金を稼ごうとまでしておる。だが一番問題なのはロマリアだ！」

「ああ。彼奴等は悪魔に不干渉などと、手ぬるい。始祖の敵に情けをかけるなどあつてはならない事だ！」

「現教皇も悪魔憑きなのでは？やはり奴では駄目だ。ここは新教皇が」

口々に賛同の言葉を述べる。ミケーレはその様子を冷めた目で見て

いた。

「全く……俗物どもが」

ミケーレは会議室から人が居なくなると、護衛を外に出し独りごちた。席から立ち上がり、窓から外を眺めた。

「……汚い連中だ。これから隣国を更に汚すのか」

「教皇の言葉とは思えないわね」

部屋の隅には一人の女性が立っていた。

「あなたはいつも突然現れるな。ミス・シェフィールド」

「この方が馬鹿どもの手綱を握るには有用なだけですわ。聖下」

「はっ、心にもない事を。その呼び方はやめろ」

傀儡にしておいてよく言ったものだ。ミケーレは嘲る様に言った。シェフィールドは自分の主人以外に指図された事を不愉快に感じ、顔を僅かに歪ませる。

「そんな態度をとって良いのかしら？ あなたの代わりなど幾らでも居るのよ？」

「私が契約したのはお前ではない。お前の主人だ」

ミケーレはシェフィールドの脅しとも取れる文句を切り捨てる。

「貴様、ジョゼフ様と対等になったつもりか！ あの方とお前では……」

「才覚が違いすぎる、とても言いたいのか？」

自分の言葉を取られてシェフィールドは詰まる。

「代償に人間性をどこかに置き忘れたような狂人でもあるがな。全く、自ら滅びを選ぶとは、馬鹿と天才は何とやら、奴の考えている事はさっぱりだ。おっと、これは馬鹿にしているのではない。褒めているんだ」

無遠慮な言い様にシェフィールドは怒りを抑えられず、仕込んであった銃を抜いた。

「余り調子に……」

だがそれよりも速くミケーレは服の下に仕込んでいたレイピアを抜き放つ。切っ先が彼女の喉元に突きつけられ、銃口は逸らされた。

「唯の傀儡に些か度量が狭くはないか？」

部屋の空気が凍る。シェフィールドは銃を離し、参ったとばかりに両手を挙げる。

ミケーレは銃を拾い上げると、弄びながら言った。

「信用できない者が多くてね。こんな芸当も結構役に立つのだ。近距離では魔法よりも遙かに速い。この銃にしたってそうだ」

ミケーレはレイピアを素振りを始める。小気味良いリズムで空気を切り裂く音が部屋に響く。

「教皇よりも暗殺者になった方が良かったんじゃない？」

ヒュンヒュンとリズムは更に上がっていく。

「目的のためには、手段を、選んでられなくてね！」

剣を振るう速度は人間の限界を超えた。

「その結果がその体という訳？ お前の方が明らかに狂人よ」

「何を言うか。効率を重視したすばらしい体だぞ。人間の英知の結晶だぞ」

ミケーレは骨、関節、筋肉、体のあらゆる部位に先住魔法を仕込み、体を強化していた。

「魔法研究の闇、ね。でもそれで種無しになんかなったら目も当てられないじゃない」

ミケーレは力を得る代わりに生殖機能を失っていた。

「はっ、聖職者に性欲は必要ない。信仰心だけあれば良い。もっとも保守派の連中は性職者だがな」

「お前の狂人っぷりからしたら、あの方の破滅願望など可愛い物よ」

「お？ 自分の主が狂っていると認めるのか？」

くくくとミケーレは笑い始める。

「お前のそれと同じにしないで欲しいわ」

「ああ。私とは全く逆の方向に狂っているよ。あの青髭は。こっちは人間の栄光を取り戻そうとしているのに、向こうは殺そうとする」

ジヨゼフは神や人を焼き尽くそうとしているのに対し、人間至上主義のミケーレは異種族を排し、人間の繁栄を更なる物にしようとしている。

そのためにはアルビオンが邪魔。魔王が邪魔。求める結果は途中で大体同じ。

「全く何が魔王だ！ 亜人などという下賤な者を従えた程度でいい気になりやがって！」

俗っぽい台詞を吐きながらミケーレは椅子を蹴飛ばした。それを見てシェフィールドは言った。

「俗物ね」

魅惑の妖精亭はトリスタニアでも歴史の有る宿屋兼居酒屋である。

『妖精さん』がいろいろいるサービスをしてくれるこの店は料理の評価も高いらしく、ワルドも下積み時代は何度か来た事が有るとの事。

こいつも男と言う事か。

魔王が召喚されて四十二日目、襲撃から二日後の事。
先日の襲撃に対する敵の反応待ちという事で、一時休息、撤退して
王都に戻ってきた。

「あー気持ち悪いし不味い」

ナツメは言いながら赤ワインを呷った。血の色をした赤い液体が喉
を通るたびにこの台詞である。

現在、髪と目の色を変える魔法をかけて変装している。金髪碧眼の
ありふれた容姿になっていた。

「……嫌いと言いながら良く飲みますね」

隣に座った私服姿のワルドはサラダをつつきながら言った。

「酔って気分を紛らわしたいなんて、こんな気分初めてだ……」

ナツメはテーブルに突っ伏して頂垂れた。

「つつか何でこんな店連れて来るんだ。俺は女の子の酌が欲しいん
じゃない！ 美味しい御飯が食べたいって言っただけなのに」

「安くて美味いとなると自然とこうなるでしょう。それよりも良い
のですか？ 前線に居なければ対応も取り辛いでしょ」

ワルドが落ち着かないと言った風な態度を取っている所をナツメは
搾り出すように言った。

「……奴らを甘く見ていた」

二万の大軍の殺気にてられ、ナツメは参った様子を見せていた。

「上層部だけやれば事が収まるもんだと、勘違いしていた。だがそれは間違いだ。逆効果だ。返って逆撫でするだけだった。個人個人の感情や力が集まるとアレだけの暴力を作り出せるというのに。分かってた筈なんだ……」

「皆殺しにする必要が有ると？」

「そういう訳じゃない。と言うかそれの方が大変だ。根本的な解決にもならない。奴らの敵意やら悪意を押し折らなけりゃいかん」

魔王に対する敵意を取り除くできるので怪しい。教会が二十年かけて作り上げた魔王像はハルケギニアで根強く生きている。

「……そも戦争しているというのに油断というのが……」

ナツメはぶつぶつと何か言い始めた。ああ、なるほどこれは一度前線を離れて正解だった。ワールドは自分のグラスにもワインを注ぎ始めた。

「どうしてだろうな。煽った人間が居るとはいえ、個々人とは話せるものなのに、一度群集に飲まれるとおかしくなってしまう。どんなに良い人でも」

「人間とはそういう物だからでしょう」

「駄目だなあ。ジャン・ジャックそれは思考の放棄じゃないか。そんな事じゃ人として進歩しないぞ」

酔っているからだろうかナツメのいつている事は要領を得ない。

「考えるだけ無駄な事という物も有るでしょう？」

「まあ確かに。でもこんな事心理学の領分だけど、考えるべき事だ
と思うよ？ 人の上に立つなら尚更」

「心理学？ 初めて聞きますね。そんな学問分野が有るのですか」

「ああ、そうか。こつちじゃそんな細かい分類してなかった。神学
の一部に含まれてるよ。内容は薄いけど」

下らない会話が続く。戦時中のせいか店内は閑散としていた。

「客、少ないな」

「戦時ですから、税が上がれば節約する。仕方ない事です」

「あゝ本当、戦争つて嫌だね。勝っても負けても人は死ぬし、まあ
時によつては経済効果凄いけど。あ、すいません、ヨシエナベ追加
お願いします」

落ち込みながらもナツメの握ったフォークが止まる事は無い。ワル
ドはその様子にげんなりした。

「まだ食べるんですか」

「美味しい物食べないと活力が沸かない」

味わっているようには見えない食べ方で次々と料理を平らげていく。唯の栄養補給のように。

そんな風に沈んでいる所に場違いな人間が割り込んできた。

「あつらゝ、お兄さん達、何か雰囲気重いけど何か悩み事かしらん？」

筋肉質な、くねくねしたオカマだった。

「あゝ、まあそんな所」

ナツメは突っ伏したまま適当に流す。ワールドは面倒くさそうに呟いた。

「これが無ければいい店なんだが……」

「あらん？ 何か言っただかしら？」

「いえ、おかまいなく」

ワールドは背筋にゾクリと言いつゆの無い寒気を感じた。ナツメはオカマを鬱陶しそうに見て言った。

「店主、何か用か？ 確かにチップは払っていないが、その分料理は頼んでいるだろう？」

この店は『妖精さん』と呼ばれる給仕の娘のサービスに対してチップを払うという暗黙の了解が有るらしい。

ナツメはこのルールを完全に無視していた。

「もう！ そんな事じゃないわん！ 男一人で寂しそうに飲んでから私から熱いサービスを」

「いらない」

体をくねらせながら野太い声を発する店主にナツメは吐息をついた。気持ち悪い。

「もう！ お兄さんつれないわ！ こんな御時世だからこそ、暗い話題は笑い飛ばさなきゃ！」

「詰まりは客がいなくて暇なんだな」

「そうなのよ。でも常連がない分、今日はこんなに良い男がい・い・い・お・と・こ！」

ワルドは吐き気を催し目を逸らした。店主はお構い無しとワルドとナツメの間に入った。

「さあ！ このミ・マドモワゼルに！ その逞しい胸のうちの悩み事を！ 打ち明けて御覧なさい！」

「一々暑苦しい」

いつの間にかテーブルの周りには暇を持て余した給仕が集まっていた。

「さあさあー！」

酒が入っていたせいか、上手い事言えなくなっていたナツメは照れ

臭そうに言った。

「十年会えなかった嫁に、会いに行く時の態度について」

周りにいた給仕の女の子はきやつきやと色めき立った。ワルドはワインを噴出し、対する店主は真剣な面持ちになった。

「いや、これそんなに面白い事かあ？」

ナツメは給仕の反応を見て疑問符を浮かべたような顔をした。女の子はどこへ行ってもこの手の話が好きらしい。

ワルドはおかしくなった話題と雰囲気を含めようとした。

「彼は任務のせいで少し心を病んでしまっているのだ。あまり刺激しないで欲しい」

「なあ〜に言っただ。酒が入ってる以外は正常。任務のせいで病むなんて、今更ねえ〜よ。ちょっと中てられただけで」

ナツメはテーブルに頬をつけて言った。説得力が無い。

「愛し合う二人の望まぬ別れ、ああ！ いい！ いいわあ！ そして二人を阻む障害が次々と迫る中で、万感の思いを胸に感動の再会！ テレビア〜ン！ そんなお歳には見えないけどん」

「まあ、概ねそんな感じか……」

「さあ続きを！」

「何言っただ……このオカマは……」

給仕も他の客も、周囲は期待したような雰囲気です。ナツメを見ている。ワルドも素知らぬ振りをしながらも、聞き耳を立てていた。

「どんな羞恥プレイだよ」と言いながらも、酔いがまわっていたのと実害が無さそうなネタである事から、口が軽くなっていた。

「仕方無しにこっちに飛ばされてね。気が付けば戦争中だし、帰るに帰り辛くなってるし……」

ディアブロ コンキスタ
魔王・討伐が諸国と対立している今、始祖の秘宝を手に入れる絶好の機会である。

「仕事はまだ序盤だったのに、何か疲れてやんなってきたし。原因がこっちにあるとはいえ、放り出して帰れたら本当、楽なのに」

「ちよっ！ 待つ」

ワルドは再び噴出しそうになった。

「でも帰ったら帰ったで、もっと面倒な事になるし……十年も経つと俺も彼女も変わってるだろうし、どう顔を合わせたらいいものか。ああ、気が重い」

店主は嘆くナツメの肩に手を置いて言った。

「ま、仕事は置いていて、詰まりは帰った時にどうなるかが不安なのね？」

ナツメはうん、と頷いた。

「そうねん……。私もえらそうな事は言えないけど、二人の仲にまだ愛があると言つのなら、言葉なんて要らないはずよ。唯、抱きしめておあげ」

「その抱きしめる事に抵抗があるんだよ。必要に駆られたとはいえ、あんなにたくさん人を殺しておいて、胸を張って彼女に会えるのか。別に「俺の手は血に染まつてる」とか言うわけじゃないけど、それを彼女が受け入れてくれないんじゃないかって」

酒で気が大きくなる所か、余計に小さくなつて沈む。

「このご時世でそんな小さい事言う女がいるのかしらん？ あなた奥さんがそうだと言つのなら、そんな狭量な女、さつさと別れちゃいなさいな」

「……言わない、と思つ」

ナツメはまだ見ぬ成長したルクシヤナを思い浮かべた。昔のままていくと笑つて許してくれそうである。

「普通はそれを考える前に、相手の無事を祈る物よ？ そう考えちゃつて事は、その仕事に向いてないんじゃないのん？」

「ああ、もうこれつきりだ。終われば引つ込むさ。終わればな。あー？本物？の魔王がやってきてサクツとやってくれないかな」

本物「ゲームに出てくるような世界制服を企む心身共に強い魔王。」

「そんな都合良くいつたら苦労しないわ。現にうちも客はすっからかん、税の臨時徴収もあるし、今月は赤字よ」

店主は苦笑して言った。

「私も女房に先立たれてね……あなたに葛藤があるのも分かるけど、死んで会えなくなる前にさっさと会いに行つた方がいいわ」

「……スカロン店長」「お父さん……」店主に思う所が有るのだから。給仕の女の子達は感じ入っていた。

「いや、何で死ぬ事前提になつてるんだよ」

「そして二人は熱い抱擁と口付けを！」

店主は抱きしめる仕草をして唇を突き出す。

「気持ち悪い」

「んもう！ つれな〜い！ でもそういう所もス・テ・キ。やっぱりあなたには私から更にサービスを……」

「いない」

遠慮の無いスカロン。筋肉質なので、かなりの力がある筈なのだが、食事する傍ら片手でそれを制するナツメ。

「あのスカロン店長を片手で？」「すごいわ」「あの細い体のどこにそんな力が……」「まるで魔王みたいね」

「はあ……とりあえず気が重いのはどうにかなりそうだ」

「吹っ切れたようね。あなたみたいなの見るとついお節介焼いちゃ

うのよ。ほら、うちって人情も売りにしてるから」

「知らんがな」

今日初めて来た。

「そのオカママも母親代わりって事か。ご苦労なこつて」

「やーね。オカママじゃなくてミ・マドモワゼルよん！」

くねくねするのが復活した。今度は腰をカクカクしている。

「とにかく会いに行ってみるよ。一段落したらだけど」

「そうそう。会って思いつきり抱き締めて上げなさい」

店内はすっかり感動ムード。給仕の女の子達は「流石ミ・マドモワゼル！」「いいなあ私も…」「どこかにいい人いないかしら？」等にやにやとナツメの方を眺めていた。

そうなっている所で、急に羽扉が開いた。新たな客の一群だろうか、と視線がそちらに向く。

先頭は貴族が身に着ける五芒星の紋章が入ったマントを纏った中年の男性。

腹に脂肪がたつぷり詰まり、頭の髪は薄い。明らかに不健康そうな体型と風貌だった。

共に数人の下級貴族を付け、堂々と店の中に入ってきた。空気読め。

「これはこれは、チュレン又様。魅惑の妖精亭へようこそおいでくださいました」

スカロンはもみ手で駆け寄り、貴族の機嫌を取ろうとする。チユレンヌと呼ばれた中年男性は、嫌な笑みを浮かべながら客入りが悪い店内を見回した。

「ほう、店は流行っている様だな。見事に？満席？だ」

嫌味たっぷり、舐めるように給仕の女の子達を見た。

「いいえ、とんでもない！　この所、客入りはさっぱりでして。いやあ戦時ともなると厳しい物です」

「今日は仕事の話で来たのではない。客として参ったのだ。？　いつもの？様にせよ」

この言い様からして？　いつもの？とは碌な物じゃない事が容易に想像される。飯が不味くなる、とナツメはうんざりと呟いた。

一行は中央のテーブルにつくとすぐに酌にやってくる気配が無い事が気に入らなかつたらしい。

「王政府の徴税官に酌をする娘はおらんのか！　我等貴族は貴様らのために杖を振るっているのだぞ！」

取り巻きの貴族も、その通りです、とか、うんうんと頷きながらチユレンヌに賛同する。

「全く、戦時中だというのに何だこの店は。む、見た所まだ余裕がありそうだ。臨時徴収も考えておかなければ」

今度は言いがかりをつけ始めた。棚に入っている高そうな酒を勝手

に開けたり、給仕の娘にヤラシイ目を向けたりと明らかかな営業妨害だった。

この国にその手の法が有る訳ではないが見ている側の嫌悪感を引き出すには十分すぎる物だった。

「この国は戦時中じゃなかったのか？ 総力戦にしても兵力は足りない筈なのに、どうしてメイジが残っている？ ああ、すまない戦力外か」

ナツメは相当イラついたようでワインを一気に呷りながら言った。ワルドは黙ったまま腕を組み目を瞑っている。グリフォン隊の隊長であることは制服でないため気付かれてないらしい。

「何だ貴様は？」

「さっさとこの店から出て行け、肉ダルマ。せっかくいい気分になってきたのに、お前のせいで台無しだよ」

「にく……、貴様！ 貴族に向かってそのような暴言を吐いて唯で済むと思っているのか！」

肉ダルマは怒鳴った。給仕は怯え出す。だがスカロンはどこか余裕が伺える。

「もう今更過ぎて、何も言えん」

ナツメは馬鹿にしたようにため息をついた。肉ダルマは顔に血を上らせ憤怒の色を浮かべる。

「この者を捕らえよ！ 縛り首だ！」

チュレンヌの手下はナツメを囲み杖を抜いた。ナツメは口元を吊り上げて言った。

「ほう、抜いたな。生きて帰れると思うなよ」

「平民風情が何を言う。それはこちらの台詞だ」

チュレンヌが自信たっぷりと言い放つと、ナツメはますます嫌悪感を募らせた。

「どうしてお前みたいなのが堂々と生きていられて、俺は駄目なんだ」

ワルドはやり取りを観察しながら言った。

「殺しては駄目ですよ？ それから外でやって下さい」

「腕か足で我慢しとく」

まるで塵を掃除するかのような言い様に、ますます腹を立てた貴族達は呪文を唱え始めた。

呪文の詠唱が終わる前に一人ずつ首根っこを掴み、器用に分けた窓の外に放り投げていった。

ワルドはワルドで携帯していた短杖で『ブレイド』を唱え徴税官の喉元に突きつけた。

「き、貴様、このような事をして」

「唯で済まないのはお前のほうだ。チュレンヌ」

ワルドは睨みを利かせて言った。流石は魔法衛士隊隊長、威圧感で徴税官の足をすくませた。

「グリフォン隊のワルドと言えば分かるか？」

「グ、グリフォン隊の隊長だと！？ そんな人物が何故こんな所に……」

「任務の報告に立ち寄っただけだ。まさかこんな物を見せられる事になるとはな」

チュレン又は急に態度を変えて平謝りしだした。

「し、失礼しました！」

「謝罪は私ではなく、店の方達にしる。それから、この事は上に報告させてもらう」

「お許し下さい！ それだけのご勘弁を！」

そこへ取巻きを申し終わったナツメが冷たく言い放った。

「駄目。ジャン・ジャックが言わなくても、俺が姫さんが王妃様に言っちゃうから。ああ、この場合はマザリー二枢機卿がいいのか」

既にトリステイン王政府は、アンリエッタ達を勝手に追い出したド・ポワチエ將軍をチエルノボーグ監獄に放り込んでいた。

アルビオンとの交渉も粗方済んでいる様で、アンリエッタはトリステニアの王宮に戻り、溜まった書類にひいひい言っている所であっ

た。

「そんなあ……」

平民風情だと舐めてかかった者は政府の要人に意見出来るほどの人物だった。魔法衛士隊隊長と行動している事からも真実味がある。チュレンヌの顔から血の気が引いていった。

ナツメは茫然自失としているチュレンヌを掴むと、ぺっと店の外へ放り出した。

「容赦が有りませんね」

「だってあれだよ？ 容赦する要素がまるで見当たらない。はあ、俺ってあんなのよりも価値が無いのかな」

ナツメは首を横に振りながら嘆いた。そして、チュレンヌの取巻きから奪った財布をテーブルの上に置いて言った。

「店主、騒がせたな。釣りは要らんから取つといてくれ」

一方的にやり込められる貴族を見て、ポカンと固まった店内。だが次の瞬間、机や椅子を派手に叩く音が響く。

「おお！ チュレンヌめ、ざまあみやがれ！」

「お兄さん達凄いわ！ まさか貴族様だったなんて！」

「ワルド様、素敵！」

スカロンや店の女の子達は二人を一勢に囲もうとした。だが既にナツメの姿は無くワルドが一人店内に残されていた。給仕の娘の一人が言った。

「あれ？ あの方は？」

「逃げたな」

ワルドは諦めたように言った。

真面目な教皇の使い

トリスタニアの街が陰鬱な雰囲気に含まれている頃。アルビオンも戦争の雰囲気次第に広まっていた。

王都ロンドンディニウムは普段と少し変わっていたものの、活気に溢れ、人々が行き交っている。

魔王が踊る妖精亭で酒をかつ食らっていた次の日。

「えーと、次は何とか、工房？　で、鍋？　ああ、修理に出したって奴か」

才人は一枚の紙切れを見ながら唸っていた。ルイズに使い魔をクビになった後、一時的に王宮の雑用をしていた。この日は使いで、店に荷物を取りに行くことになっている。

学業に関して優秀とは言い難い彼にとって、覚えたての文字を読むのは辞書無しでは厳しい。詰まりながらもメモを何度も読む。

「イグニス工房ね、それから包丁も。研ぎに出したって、言っていたでしょう？」

注釈をつけたのはエルフだった。

それも、とびきりの美少女。

日にかざせば透き通りそうなほど白い肌。切れ長の澄んだ瞳。

整った容姿は人間離れしていて、実際エルフなのだが、とにかく美しいものだった。

艶やかな長い金髪をたなびかせ、たおやかに歩く様は妖精のよう。道行く人の視線を奪う。

年齢的には美少女というより美女というべきなのだが、エルフの寿命は人間の倍程度。

今年で三十七歳になる彼女は、人間で言う所の十八〜九歳。丁度、花盛りに差し掛かった頃だった。暇を持て余したルクシヤナは才人の付き添いで城下町に来ていた。護衛のエルフ付きで。

背後から一定の距離を置いて歩いているのだが、才人には気配どころか足音すら聞き取れない。

「あ、そうだった。包丁包丁と」

才人はちよつとドキドキするのを紛らわすように、メモを読み上げる。地球では女の子に縁が無かったから仕方が無い。

「それにしても、才人も素直じゃないわね。せつかくルイズから折れたのに、突っぱねちゃって」

先日、ルイズが才人を放逐した件。直接的な原因となったルクシヤナは、詫びも含めて才人に文字を教えていた。

「はあ！？アレのどこが？」「仕方ないからクビは無しにしてあげる」って俺が悪いみたいじゃん」

大まかに言うと「あんたの暴言は許しがたいけど、たかが使い魔の言葉に一々怒ってたらきりがないものね。仕方ないからクビは取り消してあげる」。

「あちゃー」

ルクシヤナは自分の額に手を当てて、こりゃ駄目だというような仕草を取る。

「ルイズの抱えてる物が辛い物だつて分かつてるけどさ、だからつて何で、あんな敵ばつか増やすような態度……。仲良くなつて楽しい方が良くじゃねえか」

「それができないのが大貴族つてものでしょ？」

ルクシャナは割りと理解しているつもりだった。

「身分に関する先入観を取り除ければ、典型的なツンデレ娘ね」

「何でお前がその言葉を知ってるんだ……」

「小説で読んだ。ライトノベル？ つていうジャンルの奴なんだけど」

召喚されし書物。

また、ルイズが虚無の担い手である事は既に、ビダーシャルやルクシャナ、ヴァリエール公爵の知る所となっていた。ナツメを召喚した事と、才人のルーンを見れば、それが虚無の使い魔『ガンダールヴ』の物なのですぐに分かる事。ルイズ本人には知らされていないが。

「この間言つたでしょ？ 稀に異世界の書物がこつちに流れてくる事があるつて。エルフもブリミルを悪魔呼ばわりしてるけど、あの本達の存在を知れば態度も変わりそうなのに」

「なんだ、エルフも悪魔つて呼んでるのか」

五十歩百歩。互いに罵り合っている様にしか見えない。悪魔と悪魔。あんまし変わんないな。どちらに非があるかは才人には分からない。

「まあ六千年前からそんな関係だし。でも最近、ちょっとずつだけど変わり始めてるわ」

シャイターン
悪魔の門の消滅。

人間が脅威でなくなった事に加えて、エルフにとっての聖地が見つかった事もある。『人間⇨悪魔』という認識は薄らぎ、人間を人間として、唯の一種族として捉えるような考えが広まりつつあった。

「ふーん」

別の事を考えているのか、才人は生返事だった。

「あーもう！ めんどくせえな！ あれのどこがツンデレだよ。9パーセントがツンでデレが1パーセントとか需要ねえんだよ！」

「逆よ。逆に考えるのよサイト。それだけツンの部分が大きければ、デレた時の旨みも大きいわ」

何だこのエルフは。明らかにオタクが言うような台詞。

「こつちに来てそんな返し方をされるとは思わなかったよ」

「どんだけ染まってるんだ。そして我慢が限界に来た才人は小声で言った。」

「さつきから、護衛の人達ってどこにいるんだ？ 全然分かんないんだけど……」

「え？ ちゃんと付いてきてるじゃない」

対照的にルクシャナは、その方を指差した。

「ほら、そこと、そこと、後あっち」

露店で買い物をしている者、ギルドの壁の張り紙を眺めている者、それから屋根の上。

「……忍者かよ」

実際、魔法を使う分、漫画の中の忍者と変わらない。『忍者』という単語に反応したルクシャナは目を輝かせる。

「それって炎のブレス吐いたり、水の上を歩いたりする人達でしょ！ 目に映らないほど速く動いたり……」

「うわ、出たよ。外人の間違った認識」

正確には異世界人だが。才人は面倒だったので知識の訂正はしなかった。

そして急に下を向きながら言った。

「なあ、ルクシャナ」

「ん？」

「何で俺やルイズは、まだこの国に居なきゃいけないんだ？」

アルビオンとの交渉はとっくに終わり、アンリエッタ達はトリスティンに戻った。だが、ルイズは未だにこの国に残っている。才人の

頭には『人質』という言葉が浮かび上がっていた。ヴァリエール公爵は一度トリステインに戻ったにもかかわらず。あの子煩悩な親が娘を一人他国に置いて行くのは考えにくい事だった。

「あゝそれ……」

ルクシャナの目が泳いだ。気まずそうに才人の方を見る。げっ、何だよこれ。やばい。可愛いじゃねえか。駄目だ！ 才人！ それは死亡フラグだ。魔王に殺される。

「……言って良いものか」

ブツブツと考え込み始める彼女は、普段のバカっぽい様相とギャップからか、余計に知的に見える。才人はちょっとドキツとしてしまった。

才人の顔が緩むと、エルフの護衛はそれを感じ取ったのか、睨みつける。

「うっ！」

背筋に冷たい物が走り、足が震えだした。

「……とりあえず、端的に言つと、そのルーンのせいよ」

ルクシャナは才人の左手を指差す。震えているのは見なかったことにするつもりらしい。

才人がガンダールヴで、ルイズが虚無の担い手である事は既にばれていた。ばれていると言つてもビダーシャルとルクシャナだけであるが。ちなみにルイズは知らない。

「これが？ 何で？」

確かに剣が自在に操れたり、身体能力が跳ね上がるのは凄い。でも、その程度では脅威になるとは思えなかった。ルーンが読めない才人は首を傾げるばかりだった。

「まさか、秘められた力とかがあったり……」

「そんな物は無いわ。この前説明したでしょ？」

ルーンが才人に及ぼす効果は、武器の使用方法と、それを扱えるだけの身体能力を与える。それから、主人に対する潜在的な忠誠を植えつけられる。

「この前って、刺青彫った時か」

二の腕にルーンから伸びる刺青。意味の分からない幾何学文様や文字が彫られていた。ルクシヤナ曰く、これで洗脳効果を打ち消すらしい。そういえば少し心持が軽くなった気がする。

「にしても、魔法使って酷え奴らだな。ルーンで洗脳するなんて何考えてんだよ」

洗脳効果は虚無の使い魔特有である。他の使い魔は、自然と相性の良いものが呼ばれるので、そもそも洗脳の必要が無い。

「迷惑な神様からの贈り物だと思って、諦めなさい」

「使い魔ってポケモンみたいなもんだろ。自分で捕まえるっての」

実際は無理。捕まえられないし、捕まえる労力が惜しいから召喚魔法なんて物ができたのだ。未だ召喚対象がランダムな所を見ると、発展はしていないようだ。

「で、このルーンがあると何かまずいのか？」

「そのルーンじゃなくて、正確にはあなたのマスター、ルイズが、ルイズの魔法の系統が問題なのよ」

ルイズの魔法。爆発。確かに凄い。あれが制御できればかなり強いだろうな。才人は頷いた。

「で、脅威が無くなるまで、監視下に置いておきたい。そういう事よ」

害意の無い事をヴァリエール公爵に、再三説明して同意を得ている。殺しても次の担い手が現れるだけで、根本的な解決にならない。だから命を取る事は無いと。

表向きは戦禍が及ぶかもしれないトリスティンに置いておくよりはまし、という事でルイズはアルビオンに残る事になった。その際、ルイズはかなり反発したが。

「……もしかしてルイズって、かなり凄い？」

「さあ？ ……凄いんじゃないの？ あ、工房」

ルクシャナの返答は曖昧な物だった。お使いの目的地に着いた。城下町の外壁に近いこの場所からは、町の門が見える。

門には人だかりができていた。外側では翼人が体の小さなコボルトを持ち上げていたり、狼頭のライカンが屋根の上に上っていたりし

ていた。

「何かあったのか？」

「さあ？ ちょっと見てくる」

ルクシャナはそう言って駆け出そうとするのだが、それを遮った者が居た。

「ルクシャナ様、我々が見て参りますのでお待ち下さい」

「……またそれ？ シャラフ、敵が居るわけじゃないんだから、そんなに過保護にしなくても……」

「あなたに何かあつては、私達の首が飛びます。城下町の散策も、本当はお控えいただきたいのですが……」

……はあ、とルクシャナは深いため息をついた。

「……早く見て来て」

護衛のエルフは一礼すると、人だかりへ走っていく。本当にお嬢様、いや、聖女様なのか、と才人は感心した。それを全く鼻にかける事の無いルクシャナの態度に。

「大変だなあ。うちのご主人とは大違いだ」

聖女とか言われたら、ルイズは増長するに違いない、と才人は想像した。

「それはどうかしらね。貴族とか、メイジとかのしがらみは厄介な物だと思うけど……。あの子が素直になれないのって、その辺が大きいんじゃない？」

ルイズを縛る鎖は、身分や伝統、格式といったトリスティン貴族社会の規範となる物。その頂点に位置するのは神、始祖ブリミル。

というかルイズが聖女なら、才人は殺されているだろう。彼女がそれをいくら拒もうとしても、周囲が平民が使い魔になるなど許す筈が無いから。

「……そこまで考えてるなんて……意外だ」

才人は鳩が豆鉄砲を食らったようになる。人の気持ちを考えないバカエルフと思っていたのだ。

「別に、あの子の事を思ってた訳じゃないわ。唯、私なりに分析してみただけよ。それより才人、用事の方を先に済ませたら？」

「いや、あの人だけが何か分かってから……」

言いかけの所で急に静かになった。才人はルクシャナと共に視線を移す。

人だけが割れだした。

「ロマリアの神官？ 何でこんな所に……」

現れたのは驚くほど美少年だった。女性かと見紛うばかりの中性的な美形だった。

女性は感嘆のため息を、男供は気に入らないとばかりに唾を吐いた。コボルトやライカンのような美的感覚が人間と異なる者達は、ロマ

リアの神官が珍しいだけなようで、次第に散って行く。そして、その少年はルクシャナに気付くと、近づいてきた。エルフの護衛が両者の間に入ろうとする。

「シャラフ、いいわ。私は大丈夫だから」

ルクシャナは護衛たちを下がらせる。シャラフと呼ばれたエルフは不満そうに神官の少年を睨んだ。

少年はルクシャナの前に立つと、髪をかき上げた。キラーンというような効果音が似合うその仕草に、才人は生理的嫌悪感を抱いた。

「こんにちは。僕はロマリアの神官、ジュリオ・チエザーレ。あなたがアルビオンの姫君でございますか？ 噂どおりの……」

ルクシャナは興味無さそうに言い放った。

「ティファニアなら王宮よ」

出鼻をくじかれてざまあ、と才人は思ったのだが、この美少年は折れなかった。

「何と！ あなたのように美しい方がアルビオンに居たなんて……」

「二週間とちょっと前に来たばかりなんだけど」

ルクシャナは冷めた目でジュリオを見た。ジュリオはルクシャナの手を取り口付けしようとするのだが、パシッと撥ね付けられる。

周囲の空気が凍った。才人はポカンと口を開ける。

「ロマリアの神官が一体何用？ エルフの手にキスなんて、穢れる

んじゃないの」

ルクシャナは嘲るように言う。だがジュリオは負けじと齒の浮くような台詞を並べ立てる。

「参ったね。君のような美人に冷たくされると、僕は凍えてしまいそうだ」

「質問の答えになってないわ」

「ああ、ごめんなさい。怒らせるつもりは無かったんだ。僕はディアブロ・コンキスタの情報を持ってきたのさ。今の教皇が『魔王に不干涉』という声明を出したのは、知っているだろうか？」

ディアブロ・コンキスタのせいで発生した人間の難民は、ロマリアに流入している。

そのせいで財政は圧迫され、魔王に構っている暇がない。加えてアルビオンからの献金はガリアに次いで多い事も協力的になる要因だった。

「アルビオンが倒れたら次はロマリアだからね。人事じゃないのさ」

ヴィットーリオ・セレヴァレを引きずり降ろし、ミケーレ・ディーオを教皇に就かせようとしている。

改革派に負けた保守派は再び腐敗を撒き散らす事になり、ハルケギニアは更なる戦乱に巻き込まれる事になる。ルクシャナはそれを聞くと、表情を変える。

「だったら、ますますこんな所で道草食ってる場合じゃないじゃない。王宮に……」

「その前に、あなたの名前をお聞かせ願えませんか？」

「え〜〜？」

心底嫌そうな顔でジュリオを見るルクシヤナ。ジュリオはちよつと顔をしかめる。

「神官が女性に触れたら、戒律破る事にならないの？」

「これから参戦することになるので、一時的な還俗の許可を、教皇より頂きました」

「私エルフなんだけど……」

「あなたの美しさの前では、種族の壁など無意味だ。今、宗教庁では教義の大幅な見直しがされてるしね。もしかしたら、エルフが悪魔じゃなくなるなんて事も……。それに、神は寛大で慈悲深い存在。このくらい目を瞑るといふ度量も持ち合わせているでしょう」

「魔王にとっては、迷惑極まりない神様だけどね」

「ああ、済まない。失言だった。決して怒らせる訳ではないんだ」

口が減らない神官に諦めたのか、ルクシヤナはため息混じりに名乗った。

「……ルクシヤナよ」

ジュリオは無邪気な満面の笑みを浮かべる。

「ルクシャナ！ ハルケギニアじゃ聞かない響きだな。やっぱり君も砂漠から？」

気障な仕草があまりにはまっているので才人はイラツときた。いかにもモテそうなジュリオは隙が無いのだ。ルクシャナはまるで反応を示さないが。

「……聞きたい事があるのなら後にして。さっさと王宮に行きなさい」

余りに直接的な言い方に才人はたじろぐのだが、当事者のジュリオは笑みを崩さなかった。

「へえ、後だったら相手してくれるのかい？ だったら是非ともお願いするよ」

そう言うとジュリオは王宮の方を向いた。

「……終わったら中庭にいるわ」

「え？ いいのかい？」

綺麗な笑みを浮かべるジュリオを、ルクシャナは訝しげに睨んだ。

「ええ。お互い建設的な話ができそうなもの」

「そうかい。じゃあ、また後で」

ジュリオは遠くに行っても手を振っていた。

「なあ、あんな約束してよかったのか？」

才人はルクシャナが面食いだと勘違いして聞いた。若干苛立ったようにルクシャナは返す。

「何か不味い所でも？」

「いや、その、あんなのお茶して、魔王様が嫉妬しないかと……」
才人はうつと押され気味になる。ジュリオのように流せない。

「あんなの……あんなのね……。確かにあんなのだわ」

ルクシャナは反芻しながら眉間にしわを寄せる。

「なーんか嫌な奴。芝居がかって値踏みするように見てくるし、デ
イアプロ・コンキスタ情報って言ったって怪しいし……」

「え、あれ演技？」

「多分ね。アレが素だったら相当、気色悪いわ。是非とも近付きた
くない」

「いや、俺、アレより凄いの知ってるんだけど……」

才人はギーシュの事を思い出した。確か薔薇を口にくわえて二股か
けていた。ルイズが帰省する前に少し話したのだが、凄いなルシス

トという印象が残っている。

「嘘！？ アレよりも凄いの？」

「ああ、自分の事薔薇だとか、皆のギーシュだとか言ってたよ。かなり間抜けだったけど」

ルクシャナは手を握り締めて震えた。

「……あれで序の口だったとは……恐ろしいわ。人間世界」

「少数派だからな？ あれは少数派だからな？ 本当にアレは少数派だからな？」

人間の男に間違った印象を与えないように才人は繰り返した。

「気障の極み……。是非ともこの目で確認しておきたいわ」

「あー、止めておいた方が良くと思うけど」

ルクシャナが爆笑する姿が才人の脳裏に浮かんだ。

ジュリオが書簡を届けた後、中庭で。ジュリオとルクシャナはテーブルで向かい合って座っていた。

「まさか本当に、一対一で話してくれるなんてね」

「一対一じゃないわよ?」

ルクシャナの言葉にジュリオは周囲を見渡す。人の姿は無い。

「へえ、凄いな。まるで気配を感じない。エルフの戦士は皆こんなのかい?」

「こつちに来ているのは、特別な称号を持った戦士よ。エルフの中でもエリート」

「で、魔王は更に上を行くと……」

メイドがお茶や、ケーキの乗ったカートを押してくる。どこか剣呑な雰囲気のある二人に少し怯えた様子である。背後で見守る同僚の姿がジュリオの視界に入る。手を振ると顔を赤らめた。

「で、私に何の用? 唯、話がしたいんじゃないでしょうか?」

ジュリオが持ってきた情報は魔法生物兵器がディアブロ・コンキスタの手中にあるという事だった。どんな兵器かは分からないが、決戦兵器扱いらしく、調査にはビダーシャル達も参加するとの事だった。ジュリオは口調を変えて言った。

「ええ、あなた達には、正確には魔王にですが、お願いがあります」
「お願い?」

「達成の暁には報酬として、ロマリアにある始祖の秘宝を差し上げる、そう教皇は仰っています」

表立って依頼が出せないの？お願い？と言っているのだろう。違和感のある言い方にルクシヤナは頭を捻る。

「？ 始祖の象徴とも言える品でしょ？ そんなに軽く渡して大丈夫なの？ というか他の人間は？」

事がすんなり行き過ぎる。ルクシヤナは裏がありそうなロマリアの思惑に警戒する。

「いいえ、教皇の独断です。この危機を乗り越えられなければ、あつてもなくても変わりないという事で。模造品でも用意しておけば大丈夫でしょう」

「陰謀臭がするのは私だけ？」

上辺だけ聞くと親魔王とも取れる教皇の姿勢。

「いやだなあ、陰謀だなんてそんな事考えてませんよ。あ、大きな声では言えませんが……」

ジュリオはルクシヤナに近付いて耳打ちしようとするのだが、次の瞬間その喉元にはナイフが突きつけられていた。

エルフの護衛がどこからともなく現れてジュリオを囲んだ。

「一々反応しなくていいわ」

ルクシヤナは涼しげに言うのだが、ジュリオは顔を引きつらせる。護衛は再び呪文を唱えると見えなくなつた。

「これが先住魔法か……肝が冷えたよ」

「で、大きな声で言えない事って？」

ジュリオはルクシャナに耳打ちする。ルクシャナは目を丸くした。

「……そんな事、初めて聞いた……」

『教皇は魔王と顔見知り』。事が円滑に進むのには理由があったのだ。

ルクシャナは少し寂しい気持ちになった。こんなに大切な事を自分は知らなかった。教皇が就任したのはつい三年前ほど。ブリミル教徒とあつた交友の事は、ほとんど話してくれなかった。もしかして自分は彼にとってその程度の存在でしかないのでは？

「まあ、詳しい事情は私にも分かりませんが」

自分がハルケギニアに来て何かメリットがあつただろうか？ 感情に任せて人間世界こうちに来たが、彼のために出来た事は？ 急に不安な気持ちになった。

「で、お願いの内容は？」

感情を表に出さないように言った。

「それはこれから話しますよ。でも教皇聖下が直接頼みたいと仰つてたから……」

「それは彼を宗教庁の中に入れるって事？」

「以前も侵入してるんですけどね。まあ、魔王ともなれば、宗教庁

の警備なんてザルでしょうし。強行手段に出ない所を見れば、話し合いで解決しようという姿勢も分かります」

「要は密会って事ね。余計に信用できないわ」

魔王とブリミル教皇。魔王と教皇の面会自体に問題があるのだ。誘い込むための罫かもしれない。

「私達では決められない。本人と話し合わない事には、どうにもならない」

魔王と教皇が顔見知りだと言っても、その意図が分からない。

「ええ、僕もこれに関しては図りかねているのです。どうして彼と直接会おうなどと仰るのか……」

満足いく答えではない。ジュリオは全てを話していない。ルクシヤナにはそう見えた。無理もないことだった。六千年も対立していた勢力が初めて顔を合わせて、はいそうですかと頷ける筈も無い。

「案外何も考えてなかったり」

「ははははははは、そうだったら良いんですけどね。どちらにしろ、彼にはここで倒れられてしまっただけは困る。せめてディアブロ・コンキスタは潰して頂かないと」

「迷惑極まりないわ。というか言葉遣い、崩して良いわよ」

「そうかい」とジュリオは笑った。

「聖地をぶっ壊しておいて、よく言っぜ。こっちだつて大変だったんだ」

若干荒い素の口調は、歳相応の物で気障ったらしい部分はなくなる。

「あら、知ってたんだ」

「そりゃ知ってるさ。これでも教皇の側近なんだ。聖地の情報はハルケギニアで一番知っているさ。分かるだろう？ 密偵がロマリアからやって来ているのは」

「……………」

ロマリアから聖地周辺に調査に来る密偵は、ナツメやエルフの戦士達によって処理されていた。ここ十年は魔王不在だったが。

「十回に一回ぐらいしか帰ってこない所を見ると、魔王の徹底振りも相当だ。以前は三回に一回ぐらいは、帰ってきたつてのに。一体どんな手を使ってるんだい？」

エルフの聖地の出現。その道のりを阻む『精霊が存在しない環境』と『動く木』。途中の山脈に生息する巨大生物。その先にあるものはエルフ達が信奉する神『大いなる意思』。それを一目見ようと挑戦するエルフが後を絶たない。訓練にも熱が入り、自然と戦闘力の底上げが為されていく。

「うーん、魔王の加護？」

「何で疑問系……………」

ジュリオはやり難さを感じた。女性の扱いには慣れているつもりだったが、目の前のエルフはまるで興味を示さない。ピクリとも反応しない。

「単にそっちの錬度が落ちてるだけじゃないの？」

「それは無いな。先住魔法で体を強化したメイジの登用を増やしているのに、この結果は正直あり得ない」

「力が強くなっても、運用する技術がお粗末じゃ同じよ。そもそも密偵なんて出さないで欲しいわ。聖地聖地って、六千年前からエルフの土地なのに」

「そもいかない。聖地奪還はブリミル教徒の悲願とも言えるんだ。無くなったからといって、はいそうですかと、簡単に諦められる物じゃないのさ」

中庭の空気が張り詰める。護衛のエルフ達はジュリオの言葉に反応して殺気立つ。直接的な行動に出る事は無いが、それをジュリオに向ける。

「……はは、凄い殺気だ。何人いるか分からないけど」

強がるように乾いた笑みを浮かべた。

「こっちの手が出ないからって、言わない方が良い事もあるでしょうに……」

ロマリアの神官であるジュリオを殺す事は出来ない。殺せばアルビオンとロマリアの関係が拗れ、始祖の秘宝を穩便に手に入れる事は

難しくなる。

「こんな状況で何がしたいの？ その？お願い？を言いに来ただけじゃないんでしょう？」

ディアブロ・コンキスタの情報の方も怪しい。魔法生物兵器の存在が本当であるにしても、全部を話している訳ではないだろう。信用するのは危険だ。ルクシャナは考え付く可能性を考える。ジュリオは笑みを崩さず彼女を見ている。

「エルフの女性は皆、君みたいに綺麗で聡明なのかい？ これは本当にサハラに行きたくなってきたなあ」

ルクシャナはジュリオの社交辞令を無視して続けた。

「大体、？お願い？自体怪しいのよ。無理難題押し付けて、裏切ったりするんじゃないの？」

「……手厳しいね」

「人間の歴史なんてそればかりでしょ。初めから疑ってかからなきゃいけないなんて、本当に面倒な種族ね」

「へえ……良く分かってるじゃないか。その通りだよ、人間は他人を騙そうとする。誠実なんて言葉、あって無い様なものさ」

神官とは思えないような言葉が次々と。ジュリオは相変わらず無邪気な笑みを絶やさない。

「でも、教皇陛下は裏切らないよ。嘘も言わない」

「本当の事も全部は言わないでしょう？ 戦争してるわけじゃないのに、相手の嫌がる事してたら、上手く行く物も上手く行かないわ」

情報は小出しにして、相手を手の平の上で操作する。厭らしいやり方を感じた。

「？お願い？の他は、宗教庁の上層部が魔王をどうしたいか、どうしようと動いているかって事さ。それからして欲しい事もある」

「上層部？ まだ内部対立してるの？ あなた達も飽きないわね」

「いや、これは対立とは少し違うんだ。一応纏まっではいるんだけど、教皇と枢機卿達では、魔王の扱いが異なる。最終的にどうなるかは分からないけど、とりあえず教皇は彼に、生きていて欲しいとお思いいなっている」

一瞬、ルクシャナや護衛のエルフの思考が停止した。

「枢機卿達は殺したがってるけど、これは本当の事さ。なんなら今ここで誓いを立てようか？」

悪魔を忌み嫌う宗教のトップが、悪魔に生きていて欲しいと思っている。信じ難い。

「聖下も表立って公言できず、心を痛めておられる。何せハルケギニアの最高権力者だから、そう簡単に頭を下げられない」

「あれだけ信徒を殺しても？」

「それはこちら側の落ち度だよ。その時はまだ、狂信者どもを止めるだけの力が無かった」

「今はあるって言うんなら、枢機卿達も止めてよ」

「それは無理だ。腐敗を追い出したとはいえ、改革派の者達も人間だしね。悪魔が怖いのだ」

魔王がトリステインに出現した事は既に各国に知れ渡っている。ロマリヤも例外ではない。

「それって唯の我がままじゃない」

私以上ね、とルクシャナは思った。ディアプロ コンキスタ魔王・討伐は邪魔。でも魔王も邪魔。前者を倒すのは魔王。そして終わったら用済み。

「でもアルビオンの献金が増えているのは、人外達のおかげでしょ？ そんな事したら財政厳しいんじゃないの？」

「ロマリヤ上層部の一部はこう考えてる。悪魔は始祖ブリミルに劣る。下賤な神を信俸する亜人は人間に仕えるべきだ、ってね。要は平民の下に付く奴隷にしようとしているのだ」

平民の下を作る事で貴族への不満を逸らす。将来、今の貴族と平民の関係が、人間と亜人の関係にすぐ変わるかも知れない。そもそも亜人という呼称自体が差別を助長する。

「困った事に、この考えが最近、広がってきてしまっただけ。教皇陛下はお優しいから、そいつらを説得して回ってる。けど表面上は従

っているだけの奴、というのがいる訳で。そいつらに徒党を組まれると、また厄介なんだ。ミケーレ・ディーオも同じ考えだし、奴らの勢力を増やす事になる」

ミケーレ・ディーオ。

ディアブロ・コンキスタの指導者で人間至上主義者。

「……もしかして、教皇の？お願い？の内容って」

ルクシャナは息を呑む。ジュリオはニコニコしたままである。

「いやあ、察しが良くて助かるよ。そいつらの暗殺さ」

「……………」

「どうしたんだい？」

「……放置して帰りたくなってきたわ」

ルクシャナは特大のため息をついた。

「おいおい、君は恋人を置いて、自分だけ逃げ帰るのかい？」

「さっき来たばかりのあなたが、どうして知ってるのよ……………」

「我が教皇はハルケギニアのことなら何でもお見通しなのさ」

「その教皇とは絶対友達になれそうに無い」

そもそも教皇と魔王が顔見知りである事自体問題だ。悪魔と接触し

た者は悪魔憑きと呼ばれ、異端とされる。教皇が異端者だと知れば、どんなことになるかは想像に易い。

「なんか最近、ため息ばかりついてる気がするわ……」

「それはいけない。美人のため息は、周りの寿命を三年縮めると言われてるからね」

「じゃあいいか。私に被害無いし」

「ははは、君は変わってるな」

「よく言われるわ」

物足りない。突込みが無い。美辞麗句ばかり並べ立てられても面白くない。ルクシャナは再びため息をついた。

ジュリオがしゃべっているのを聞き流して、ボーっとしていると急に視界が真っ暗になった。

臉に感じる突然の感触に、心臓が跳ね上り、身がすくんだ。

そして耳に入ってきたのは聞き覚えのある声だった。

「だーれだ」

真面目な教皇の使い（後書き）

後十字以内で、ディアブロ・コンキスタ倒す予定。
次回、砂糖を吐き散らす。

砂糖を吐き散らす（前書き）

砂糖じゃない、これは苦行だ。

砂糖を吐き散らす

「だーれだ」

聞き覚えのある声は少し低くなっていた。

「……………つつつつ!？」

脈はおかしいぐらい速くなり、息が荒くなる。

この声は明らかに彼のものだ。

震える手を持ち上げて両目にかかった暗幕に触る。

それは人の手だった。

血の通った温かい人の手。

振り向いて見たい。

でも確認するのが怖い。

違ったら? 別の人だったら?

ルクシャナはその手を掴んだまま動けなくなった。

中庭にいた者は気を動転させる。

あまりに突然現れたので護衛のエルフは、各々の武器を慌てて取り出す。

しかし、侵入者が何者が確認すると動きを止めた。

「ナツメ様!」

「イーサー救世主……………」

誰かがそう言うと、当人は「は?」と首をかしげた。

「ナツメ様って……………どうしたんですか? それに救世主だなんて…」

…」

十年のブランクがあつたせいで、ナツメは自分が聖者だの、救世主だの祭り上げられている事を知らない。当然、初対面のエルフ達のへりくだつた態度に当惑する。

そしてルクシャナの顔に当てた手を離れた。そして軽い調子で言う。

「いやあ、びっくりしましたよ。まさかこんなに早いなんて」

ルクシャナは椅子に座つたまま、後ろを振り返つた。

目に映つたのは、白髪紅眼の見慣れた顔。

記憶よりも大人びていた。でもその特徴的な色は忘れ難く、見間違える筈もなかつた。

「……………ツツ！」

胸の奥が痛む。強く強く痛む。息が苦しい。声が出ない。

「！　ってうわっ、ど、どうした？」

気が付くとルクシャナはナツメの腕を強く掴んでいた。彼女が立ち上がると椅子が倒れ、テーブルが揺れた。

そのまま倒れこむようにナツメの胸に顔を押し付けた。

「……………ルクシャナ？」

名前を呼ばれると、胸が締め付けられた。

「た、ただいま……………」

ナツメは狼狽しながらもそう言つて、ルクシャナの背中に手を回し、優しく抱きしめた。

目の奥から熱い物がこみ上げ、鼻がツンと痛む。少しばかり落ち着くと、言葉は自然と出てきた。

「…………おかえり」

ルクシャナに回された腕の締め付けは強くなる。裾が捲れて包帯が見えた。戦いでついた傷なのだろう。滲んだ血が固まって変色していた。ルクシャナはその腕を労^{いた}わる様に撫でた。

「おかえり」

もう一度言つて見上げると、ナツメの顔が見える。酷い顔だった。今にも泣きそうな酷い顔。顔の筋肉を強張らせて必死に、笑顔を作っている。さっきの軽い調子はどこかに行つてしまった様に。

「…………ただいま」

嗚咽を堪えた声で言つた。

当然だ。

周りは悪魔^{じあくん}を忌み嫌う人間ばかり。

煽動されたブリミル教徒は呪詛を吐くだけでなく、排除しようと暴力に訴える。

玉碎覚悟でやつて来る狂信者は止まらない。

やめてくれと言つても、退けても、殺すまで止まらない。

「…………会いたかつた…………もう、会えないかと思つた」

人間も悪魔も、殺されれば死ぬ。呆気なく死ぬ。

考えると、意味不明なくらい胸がズキズキと脈打った。
頑張り過ぎたんだろう。

辛くて恐い筈なのに。

逃げたい筈なのに。

それを押し殺して……。

かつての仲間を助けるために、身を削っている。

既に自分の十年を犠牲にしているのに、また。

この優しい悪魔は、知らないうちに無理をするのだ。

それが堪らなく愛しく、そして悲しくなる。

ルクシヤナはナツメの両頬に手を添え、引き寄せ、強引に口付けた。

「
!?!」

驚いて目を丸くするナツメ。ルクシヤナは胸の苦しさ痛みを紛らわすかのように笑ってみせた。

「何？ この匂い。酒臭い」

「ああ、ごめん。ちょっと二日酔い気味でさ」

いつの間にか集まっていた野次馬達メイドなどがキヤー、と悶えている。

「お酒弱いのに……また……」

我慢したの？ と言おうとしたのだが上手く言葉にならない。笑顔も崩れ、むせび泣く事しか出来ない。

会えて嬉しい。

傷ついた姿を見せられて悲しい。

いろんな感情が混ざり合って、頭の中はぐちゃぐちゃ。まともな思考が出来なくなっていた。

「……悪かったよ。ごめん。流石に十年は長すぎたね」

そう言っつてナツメは大きな手で彼女を優しく撫でる。

「謝るな」

「ごめん」

「だから……謝るなど」

「ああ、えっと、ごめん。何言ったらいいか分からない。語彙が貧弱だからさ」

「……わなくていい」

「ん？」

「何も言わなくていい」

彼にとつては十年の時間が飛んでるようなものだ。きつと自分の中のナツメと、目の前の彼は同じなのだろう。身長はずっと高くなっているが、心の時計は止まったまま。ルクシヤナは抱きしめ返すと言った。

「言わなくていいから……」

何百回と夢に見たかもしれない。夢の中で何度も抱きしめられた。目を覚ますのが怖かった。現実でないことを思い知らされる事が怖かった。目を覚まして何度も泣いた。

でも、もう怖がらなくていいし泣かなくていい。現実には抱きしめられると、そう言われた気がして心が落ち着く。

「もっと抱きしめなさい」

温かい。

そのぬくもりはとても心地良く彼女を包み込む。安っぽい言葉よりもずっと心を満たしてくれる。

ナツメは苦笑しながらため息をつく、とても言い難そうに、

「あー、ルクシヤナ？ ちょっと……これは、後にしない？」

彼女の肩に手をかけて言った。

「ほら、人目もあることだし、いろいろと不味いじゃん」

ナツメがそう言うと、ルクシヤナは自分達がどんな状況に置かれているか気付く。

みっともなく鼻水をすすりながら、周りを見る。メイドとティファニアは頬を染めてキヤーキヤー言ってるし、座ったままのジュリオは、どうしたらいいか分からないように固まっている。

ルクシヤナの顔は羞恥で火を噴くほど熱くなった。

「だからさ、そろそろ離れようか」

そう言ってルクシヤナの肩に手をかける。彼女は、なんとなく離したくないと思った。

「やだ」

彼女はナツメの胸にしつかりホールドし、離さない。子供のように顔を胸に押し付けて、自分の世界に引きこもる。そりゃあ恥ずかしい事この上なかったが、戸惑うナツメを見るほうが面白い。長い間ずっと寂しい思いをさせられたのだ。ちよつとからかってやるう。ルクシヤナは悪ふざけの方向に思考を加速させる。

「皆見てるから！　ちよつと、これ黒歴史になるから！」

彼女はクスリと笑って、腕に目一杯力を入れた。ナツメの手にも力が入り、引き剥がそうとする。

「や〜だ〜」

「この！　いい加減に離れる！　十年経ってんのに全然変わってねえ！　今年で何歳だよ！」

相変わらずの馬鹿力に密着していた体が離された。「あ〜」と野次馬が残念そうになる。

「何よ、私に抱きつかれると何か不都合でもあるのかしら？」

「恥ずかしいからに決まってるだろうが！」

するとルクシヤナは顔を真っ赤にして力強く言った。

「私も恥ずかしい！」

「突っ込む気も失せるわ！」

と、突っ込んだ。ナツメはやれやれと言うように吐息をつく。そし

てルクシャナは急にしおらしくなり、声を震わせた。

「……皆が……私が、どれだけ心配したと思ってるの？ 私が閉じ込められたあなたを、どんな気持ちで見続けていたと思ってるの？」
エルフの聖地へ行った回数は百回超えたかもしれない。何度も通いすぎて、ペース配分とか、敵が襲い掛かってくる場所とか全部覚えてしまっている。

「ずっと辛くて、このまま目が覚めないんじゃないかと思って……怖かった。急にいなくなった時なんか……」

からかってやるつもりだったのに本気で泣けてきた。眦まなじりには再び雫が溜まり、溢れると頬を伝って流れる。

「だって……十年よ？ 十年も待ったんだから……このくらい、いいじゃない……このくらい」

「ルクシャナ……」

ナツメは罪悪感で一杯になったような顔をする。そしてルクシャナは泣きながら言った。

「このくらい、からかったっていいでしょ？」

「やっぱ君、変わってねえわ」

「そして私はあなたに、最高の恥ずかしさを送りたい」

「や、要らないから」

そしてルクシヤナは深呼吸をする。鼻声を直して、ポツリと呟いた。
「『僕はルクシヤナを守りたい。好きだから』、確かこんな感じだったかしら？」

「ルクシヤナ？ 何を……」

そして周りの者達にも聞こえるように大きな声で。

「『……愛して欲しい』えーっとは……『この気持ちは理屈じゃない』。ほらほら、もう一回、抱きしめてくれないと言っちゃわよ？」

彼女は考え込みながら次々と、台詞を言っていく。十年前、ナツメが言った赤面台詞だった。

「ああああああ！ 止めて！ お願いだから！ もう駄目！ メイドさん見てるから止めて！」

とナツメはルクシヤナの口を塞ごうとする。だが彼女はひょいっと躲かわした。

そして止めにもう一度言った。

「『愛してほしい。いつもの通り、君のやり方で』」

すると野次馬メイドたちは更に色めき立った。

「え、今のセリフってもしかして……」

「ナツメ様が？ うそ！？ あのうって、あんな恥ずかしい事……」

「でも、ルクシヤナ様がああ言うんだから……」

小さな声でこそ話していたのだが、ナツメの耳にはしっかりとその内容が入っていたようだ。メイド達に聞かれてしまった。唯でさえ恥ずかしい場面なのに、過去の恥ずかしい台詞まで暴露された。この手の噂が大好きなメイド達の事だ、この話は一気に広がる事だろう。

「……死ぬしかない……」

彼の手から力が抜けて、だらりと垂れ下がった。魂が抜けたように白くなる。

「少しやり過ぎたかしら？」

「もう、言う事もねえよ……」

「あら、そんなに感動した？」

「何を言っても無駄って言うてんだよ！」

「そう。諦めたのなら、私はこれをネタに一生あなたをからかい続けて……いや、『聖者の恥ずかしい台詞目録』を……」

「……選択肢、どこで間違えたのかなあ……」

野次馬にティファニアマイが加わり、話は一層盛り上がる。彼女達は地獄耳でルクシヤナが呟いた台詞も拾っていた。

「ルクシヤナって、あんな事言われてたんだ……なんかずるい」

「『僕はルクシヤナを守りたい。好きだから』だって」

「うわっ、凄。でもちよつと言われてみた……」

「『愛してほしい。いつもの通り、君のやり方で』なんて……」

ナツメはさめざめと頂垂れた。

「もつやだ……」

「でも元気出たでしょ」

そう言うルクシヤナが笑顔だった。ナツメは疲れた声音で言った。

「ほんと、お前はいい女だよ……」

ジュリオは一連のやり取りを静かに見ていた。一息ついて、とっくに冷めている紅茶を口に含んだ。

「温いし、砂糖が多いな。次から控えるか」

夕方、報告を終えたナツメは廊下をこそこそと、それでいて早歩きで自室に向かっていた。

彼は今、風の精霊とリンクして知覚能力を大幅に上げている。なるべく城の人間と顔を合わせないように、気配を探りながら歩いていた。

「……はあ……」

ナツメはため息をついた。様々な事が絡み合った結果のため息だった。夕焼けの光がそれを助長する。

「……はああ……」

もう本気で落ち込んでいますという空気を纏いながら歩いていた。最近、心配事が多過ぎる。

知らないうちにエルフの聖者、救世主になっていた。

ディアブロ・コンキスタの魔法生物兵器とか、アンドバリの指輪とか、偽教皇とか。

トリステインは秘宝の引渡しの際に、一悶着ありそうな事を匂わせてるし、ガリアに至っては情報が無い。

救いといえば、ロマリアが、というかヴィットーリオが条件付で秘宝の引渡しに応じる事ぐらいだ。

そして秘宝を破壊しなければ、命の保証が無い。『大いなる意思』に作られた体は、何時止まるか分からない。

「……はああああ……」

だが現在、彼の気をもませているのはルクシャナの事だった。

まさかあんなに泣くなんて……。

確かに十年前の別れ際は大ききされたが、再会はずっと笑ってするような事だと思っていた。

会えて嬉しい事には変わらない。

でも十年の歳月は考えていた以上に重く、彼女にのしかかっていた。あんな顔、見る事になるなんて……。

「……くそっ」

壁を殴りそうになる。だが寸前で止まった。殴ったら城の壁の方が唯では済まない。行き場を失った感情は消化不良で黒くなる。

「あー、やんなる」

自室の前に着く。夕焼けの赤が窓から差込み、赤い光が丁度ドアに当たっていた。

ドアノブを捻ろうとするのだが、これも寸前で止まった。そしてコンコンとノックする。

「誰か居るのー?」

気だるげな声で中に感じた気配に、ドア越しで話しかける。

「……………」

返事は無い。念のため暗殺者の類ではないか、風の精霊を部屋の中に忍ばせて調べる。机、椅子、壁際の本棚、窓は閉められている。ベッドの上には……………。

今一番、顔を合わせ辛い人が座っていた。

ドアノブが重い。エールが満タンになった樽よりも重い。ああ、開かないな。ちよつとその辺ブラブラしてくるか。と逃げようとした所でドアが勢いよく開いた。

「何で入ってこないの!？」

ドアを開けたのはルクシャナだった。学院の生徒が着る制服のような、シャツとスカートと言う格好だった。彼女は夕焼けが眩しいのか目を細める。ナツメは答えに詰まった。

「いや、その……」

ルクシヤナはまごつく彼の手を握ると、強引に引つ張って中に入れる。「おわつ、ちょっと待っ」とナツメが言っのを無視してドアを閉めた。

「……………」

彼女はドアノブを握ったまま動きを止めた。彼を背を向けて。ナツメはそれを見せられると、全身に戦慄が走った。不味い、もしかしくなくてもかなり怒ってらっしやる。

「……………」

気まずい沈黙が流れる。ルクシヤナは体を震わせた。ナツメは蛇に睨まれた蛙の様になった。ああ、これから愚痴られたり、殴られたりすんのかなあ？ 覚悟を決めるか……。

「ッ！」

ルクシヤナは急に身をひるがえ翻すとナツメに向かって跳んだ。素晴らしい瞬発力で、普通の人なら消えたと錯覚するかもしれない。それくらい彼女は速かった。

「うごっ！」

ナツメは情け無い声を上げて、ルクシヤナを受け止める。腹に力を入れていない状態で、彼女の頭がみそおち鳩尾に入った。そのままよろけて後ろのベッドに倒れこんだ。整えられたシーツに皺が入る。

「うあ……き、効いた……」

ナツメは呻きながら視線を動かす。胸の辺りに頭が来て、ふわりと長い髪が広がった。長い耳がぴくぴくと動いていた。

「……えへ、えへへへへ」

なんて気味悪く笑い出すルクシヤナ。鼓動を確かめるかのようにナツメの胸に手を置いていた。にっこりと、そりゃあもう満面の笑みを浮かべて。予測していた反応とのあまりの落差にナツメは呆ける。

「ちゃんと触れるね。それに、温かい」

「な、な、何か悪い物食べたの？ それともこの十年で何があった！？ いや、それとも砂漠を離れて禁断症状が」

「違う！」

ルクシヤナは叫びと共に、ナツメの腹に一撃入れる。「おぶっ！」
再び情けない声を上げて悶絶する。

「うおおおおお、いってええ」

「何で、いつもそんな風に曲解するのよ！ 素直に嬉しいって捉えればいいでしょ！？ この捻くれ者！ どうして……」

笑ったり怒ったり忙しい。そして青い瞳を潤ませて言った。

「どうして……なのよ」

「そういう性格だからだろ？」

「何でこう、口が減らないのかしら……」

ナツメはその言葉の意味する所を考えてみる。捻くれてるとか性格の事ではない。運悪く、封印されて召喚までされてしまったとかそういう事だろう。

「重いな」

「重いとかなうな！」

「重いよ。本当に重い……」

十年の歳月は人を成長させる。ルクシヤナは背も伸び、昔よりずっと多くの知識を吸収し、経験を積んだ事だろう。対してナツメは体が大きくなっただけ。しかも弱体化している。上に乗っているルクシヤナの頭に手を置いて、疲れた声音で吐き出した。

「畜生……重い」

ルクシヤナは黙って動かなくなった。「よっこらせ」と体を起こし、ナツメはベッドに腰掛ける。ルクシヤナと顔が近くなった。

「そんなに重くなった？」

心底不安そうな表情を浮かべてルクシヤナは目を逸らす。

「体重の話じゃ……いや、体重も含まれてるけど、それだけじゃな

いから」

「じゃあ何が重いなのよ？」

「十年分は重いつて事」

相当疲れてる。こんなに後ろ向きなるのは何年ぶりだろうか。ナツメはベッドに仰向けになり、手で目を覆った。そんな彼に、ルクシヤナは言い放った。

「馬鹿じゃないの？ 寝すぎて頭退化した？」

「……馬鹿つて、いや、否定しないけどさ、その言い方はどうよ？」

ナツメはだるそうに視線だけ動かして答える。

「どうせ、下らない事くだで悩んでるんでしょう？ ナツメつてば私の事大好きだから、下らなくても深刻に考えちゃうんでしょ」

うわあ、な赤面台詞を臆面も無く言う彼女に、ナツメは何も言えなくなる。部屋の空気が重く感じて、逃げたくなった。凶星だったから余計に。

「あなたの事だから、また無関係な人はとか犠牲がどうの言つて、力があるからとか格好つけちゃつて、一人でやってたんでしょ？ それで敵に死ねーとか言われたから、そんなに凹んでる。最初から仲間を頼ればいいのに」

ワールドと連れ立って動いてはいたものの、実行に移していたのは全てナツメ単独。

作戦後の護衛を任せていたぐらいで、確かに一人でやっていた。あわよくば、ここで敵の首領を討ち取ろうと思っていた事も否定できない。

ルクシヤナはこちらを見る。

最後に見た時から十年経って、彼女は身も心も成長して……。でも、ナツメが見た彼女は、十年前に見たルクシヤナのままだった。十年前みたいに泣きそうになりながら言った。

「一人で行くなんて、絶対にやめて。あなたが死んだら……悲しいだけじゃ済まないじゃない……」

ナツメは言葉を失う。

そして笑うしかなかった。

何でこんなにも見透かされてるのか、さっぱり分からなかったから。こんなに思われているのに、嫌われると思っていた事が恥ずかしくなったから。

久しぶりに声を上げて笑った。

「あつはつはつはつは」

同時に、辛いつか迷いといった後ろ向きな感情が変わっていくのを感じた。結果がどうあれ、前に進まなければならぬ。彼女と共に居るには絶対に必要な事だった。

笑うナツメを見てルクシヤナははつが悪そうになった。

「十年も会ってなかったのに、よく分かるな」

間違っていないと伝えると、すぐに自信満々の笑顔になる。

「当然でしょ。ずっと寝っ放しのお寝坊さんの事なんて、全部分か

るわ」

それに見惚れて、思った。
本当に僕は駄目な奴だな。

もう自分の居場所を手に入れていた筈なのに、勝手に勘違いして落ち込んでいた。

こんなに長く、強く思われ続けていたのに。
心底安心して、かみ締めるように言った。

「本当に変わらないな」

でも、言われっ放しで、さっきは意地悪までされた。
少し仕返ししたい気持ちになった。

「そう言えば、言い忘れてた」

だるい体を起こした。ルクシャナの耳がピクリと動く。

「綺麗になつたね」

照れ臭い言葉なのに、ナツメは詰まる事も顔が赤くなる事もなかった。

「……………最初に言いなさいよ」

ルクシャナは目を合わせないようにそっぽを向く。顔が紅潮しているのが見えた。

ナツメはルクシャナの顔を覗き込もうとする。

だが、彼女は顔を逸らす。
覗き込む。

顔を逸らす。
覗き込む
逸らす。

「どうした？」

「……何でもない」

「じゃあ、何で顔を……」

逸らすのか？ と聞こうとした所でナツメは気付く。

「恥ずかしくて顔が見れないなんて、思春期の子供か？ お前は…

…」

「だ、だって……」

「まあいいか」

微笑ましくなって、ナツメは彼女を抱きしめたくなった。後ろから手を回すとルクシャナは抵抗せずに委ねた。

すっぽりと腕の中に収まると、その体温を感じて心が安らいでいく。何か気の利いた事を言うべきだろうかと思っただが、思いつかない。思いついたとしても、さっきあれだけからかわれたのだ。言う気になれない。

「……考えてみるとさ、僕が召喚されたのは意図的な物だったかも
しれない。仮説だけど」

結局こんな話しか出てこなかった。

「召喚つて、ルイズの？」

「何だ、知ってるのか」

「うん、ちよつと八つ当たりしちゃって……」

「やっちゃたんだ……。気の毒に」

「ぐ、反省はしてる」

ルクシャナは不自然な程大人しい。

「仮説つて？」

「『大いなる意思』みたいに、虚無にも、その力を司る存在が居るかもしれないって事」

話半分のように聞きながら、彼女はナツメの腕に顔を埋めた。

「虚無に生存本能が有るなら、敵を消そうと動くだろう？ で、ルイズって子の本当の使い魔は才人」

虚無の悪魔^{シャイターン}。話は単純化され、普通の生存競争という事になる。

「それでルイズと才人をあなたと戦わせるって事？ 二人とも戦いなんか無縁なんだし、いくらなんでも無理があるんじゃない？」

「だから仮説だって。それにもしかしたら、化けるかもしれないじゃない。ルイズって知識面は凄いつて学院の先生が言ってたし。才

人は知らないけど」

「一歩間違えば敵なのに、随分と肩持つじゃない」

ルクシャナは剥れた。ナツメは大きく欠伸をする。

「ふあああ〜〜、そうならないように、今動いてるんだろ？」

「でもルイズ、あなたの事悪魔だって言った」

「どうにもならない事だよ。ブリミル教は？一応？生活に密着してるし」

都市や村落は教会を中心に発展している事が多い。その教会が噂を流すのだ。悪魔を忌み嫌う風習は自然と広がる。

アルビオンの場合、教会の神官と修道士はあまり大きな顔は出来ない。ブリミル教と魔王信仰が折り合いをつけて、共存しているから。

「昔は酷いもんだった。左手で与える一方で、右手で大量に掠め取って行くんだから」

それでいて、神の教えを説くもんだから余計に性質が悪かった。現在の宗教庁は、健全とまでは行かなくても腐敗はほぼ取り除かれ、新しい道を歩き始めている。

しかしディアブロ・コンキスタを放置しておいたら、酷かった昔に巻き戻されてしまう。

「あーだるい。もっと皆優しくなれよ。これじゃあ安心して寝れねえよ」

ナツメは小さく息を吐く。疲れのせいか、瞼が物凄く重い。腕の中のルクシャナは温かく、とてもいい匂いがして……。

安心して。もぞもぞと動きながら、抱きしめ直した。びっくりしたのか「ひゃう」と彼女は可愛い声を漏らす。

「ナ、ナツメ？」

重症だ。

こんなに可愛いのに何も感じないとは、かなりギリギリなのだろう。精神はともかく肉体的に。

どうにも眠気に勝てず、ナツメの意識はそのまま途切れた。

唐突に、ルクシャナを抱きしめていたナツメの腕が移動する。

どことなく性的な物を匂わせる手つきで。

ルクシャナはその感触に心臓が飛び上がった。

「ひゃう」

ナツメはゆつたりと息を吐きながら、更に体を密着させた。耳元でその息遣いが聞こえる程近い。

「ナ、ナツメ？」

鼓動はバクバクと、死んでしまいそうなほどうるさい。

体は指の先まで、内側から真っ赤になりそうなほど熱い。

今まで感じた事が無いほど激しい緊張。

胸の奥が狂おしいほど切ない。

どうしよう……。

原因ははっきりしているのに、取り除けない。

抵抗できない。

拒めない。

「
」

まずは落ち着くために呼吸を整えようとする。

だがそんな事をしている暇も無かった。

ナツメに抱きしめられたまま、ルクシヤナは急にベッドに引き倒された。

ちよ、ちよっと待って！ 心の準備がまだ……。

「
……………」

キュツと目を閉じて次に来る衝撃に備える。

ああもうさつきから意識しちゃってお風呂入ったり歯磨きしたりちよっといつもと違う服に着替えたりしたけどやっぱり恥ずかしいしもう少し順を追って迫って欲しいと言うか私に確認取ってから行為に及びなさいよ！

と、思考が加速してドキドキするのを濁す。

だが、ナツメはそこから動かない。

いつまでたっても感触が来ない。

ルクシヤナは思い切って言った。

「……………その、何？」

返事は返ってこない。代わりにスースーという音が聞こえる。もぞもぞと動いて振り返って見ると、肩すかしを食わされた。

「……………」

ナツメは目を閉じ、静かに寝息を立てていた。思わず、私の純情返せ！と叫びたくなるようなほど気持ち良さそうにして。まだドキドキが治まらない。

でも起こす気にはならなかった。久しぶりに見る寝顔に愛しさを感じて。

「ん……………」

癖のない白髪がさらりと移動する。形良い唇と、白い頬に薄い桃色の傷跡が見えた。

もう今日は心臓が鳴りつ放しだ。

「キユン」と何回言った事か。

それなのにこいつと来たら……………」

十年ぶりの再会なのにちよつと冷たい気がする。

昔のように子供のままじゃない。

キスや抱擁だけじゃ物足りない。

それなのにこの生殺しは酷過ぎる。

きつと疲れていたんだらうけど、これは酷い。

ルクシヤナはナツメの重い腕を持ち上げて拘束から逃れる。これ以上、切なくさせられたら堪らない。寝ている彼に毛布をかけると、ベッドの端に座る。そして優しく撫でた。

「どの辺が悪魔なのよ……………」

とても、殺戮をばら撒く化け物には見えない寝顔だった。

「私のこと守りたいって、限度って物があるでしょ……………」

もちろんそれだけが行動原理ではない事は分かる。だが自分もエルフも無関係ではいられないのだ。頼ってくれたっていいじゃないか。守ってもらっただけは嫌だ。

起きたらしっかり話し合おう。

皆で笑って帰れるように。

もう戦わなくてよくなるように。

のんびりとした日常に戻るように。

ルクシヤナは無防備を晒している彼の口に……、口に……では

なく頬にキスした。

顔を少し赤らめて。

それから「さて……」と、万年筆と手帳を取り出して書き込んだ。

『重いよ。本当に重い……』 『綺麗になったね』と。

からかうネタが増えた。

砂糖を吐き散らす（後書き）

何か駄目な部分とか有ったら、感想ついでに遠慮なく書き込んでください。

もう、

「うわああああああ、気持ち悪い！ 気持ち悪いよー！」
と何度頭を振った事か……。

ワッフルワッフルな奴を書いて、18禁の方に投稿という予定はありません。

でてきたルイズ（前書き）

前回は、感想掲示板が盛り上がって楽しかった。

でれてきたルイズ

大切な人が居なくなるのはとても悲しい。

貴族だろうと平民だろうとそれは変わらない。

でも、貴族の命と平民の命は等価にはならないし、なれない。

殺されたのが貴族なら大騒ぎするだろう。

犯人の討伐命令が下され、それに報奨金が出るかもしれない。

殺されたのが平民なら、大した事にはならない。

犯人がメイジだったりすると泣き寝入りしたり、金を出して傭兵を雇ったり。

とにかく貴族は得をして平民が割を食う事が多い。

まあ、そうだったとして悲しむ人がいる事には変わらない。

貴族も平民も悲しむ。

魔王を召喚して四十三日目の午後。

ルイズは、ロンディニウム城の廊下の窓から、中庭を眺めていた。

窓ガラス越しに見る中庭のテーブルにはルクシャナとロマリアの神官が向かい合って座っていた。

突如、他のエルフが出てきてナイフを突きつけていた事から、雑談の類ではなさそうだった。

何の話をしているのかしら？　ブリミル教の神官が悪魔と呼ばれ恐れられているエルフと対話なんて。頭には後ろ暗い話題しか浮かんでこなかった。

すると急に、人が現れた。

白髪で長身の男が。

「はあ？」

魔王が突然現れたのだ。
本当に突然。

ルイズにはどこから出てきたか分からなかった。
だが、次の瞬間もつと信じられない光景を見た。

「……………へ？」

ルクシャナが魔王の胸に飛び込んでいった。

恋仲である事は既に周知の事だし、会えて嬉しいから抱きつくのも無理はない。

でも、彼女は笑っていなかった。

明らかに笑っている様には見えなかった。

それどころかとても辛そうな顔で、泣いていた。

お気楽そうなバカエルフがあんなに……………。

ルイズはそれを見ると酷く嫌な気持ちになっていった。

故意ではないといっても、魔王を召喚したのは自分。

彼女から大切な人を奪ったのは自分。

彼女をあんな風にしたのは……………。

「違う！　悪いのは私じゃない！」

でも、一度抱いてしまった罪悪感はどんどん大きくなっていく。

違う。

悪いのは魔王。

悪い事をしたから天罰が下ったのだ。

そう思わないと、自分が本当に嫌な人間になってしまいそうで。
自分が人を幸せを奪った悪魔に成り下がるような気がして……………。

ルイズは自分が滞在している部屋に向かって走った。

普段、運動をしていないルイズの息はすぐ切れてしまう。

次第に早歩きへと切り替わる。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息が苦しい。イライラする。考えたくない事ばかりが頭の中で蠢く大切な人を奪われる気分はどんな物だろう？

どのくらい悲しい事なのだろう？

どれほど心に重くのしかかるのだろうか？

不意に家族の顔が浮かんだ。

父さま、母さま、エレオノール姉さま、それから、ちいねえさま。

「嫌……」

嫌だ。

自分にとって誰一人欠けてはいけない家族。

それが居なくなるなんて耐えられない。

死んでしまうなんて、絶対に駄目だ。

「ちいねえさま……」

ルイズはカトレアの事を思い浮かべてしまう。

今、家族の中で一番死に近いのは……。

ルイズはその思考を、頭の中から追い出そうと必死に首を振る。

でも、考え出すとそれは自分に絡み付いてくる。

カトレアは体が弱い。原因は分からない。どこかが悪くなると魔法や薬で抑える。すると今度は別の場所が悪くなる。この繰り返しで人間の医者も、見込みが無いと諦めてしまう。

ルイズは彼女が長く生きられないんじゃないかと、不安になる。

カトレアが死神に連れて行かれてしまうのではないかと怖くなる。

そして部屋の前について、扉の前で独りこちる。

「だ、大丈夫よ。父さまがエルフに……」

治療を依頼するって言ってたし、と言い聞かせようとしたのだが、声が出なくなつた。

魔王はエルフ側の人間だ。砂漠からわざわざ迎えが来るのだ。相当地位が高い事が窺える。

その人物に向かつて自分は一体何をした？ 何を言った？

召喚して、使い魔にしようとして、悪魔呼ばわりした。

ルイズの顔は血の気が引く所じゃなかった。

部屋に入るなり、ベッドに飛び込んだ。

「私のせい？」

カトレアが自分のせいで治療を受けられないかもしれない。

自分のせいで病気が治らないかもしれない。

自分のせいで早く死んでしまいかもしれない。

耐え切れないほどの悲しみが溢れて来そうになる。

「……………」

ルクシャナはもう怒っていないと言った。

あんなに悲しそうな顔になるのに、ルイズを被害者だと許した。

そしてもう一人、自分が召喚した男の子の事が頭によぎる。

胸にナイフを突き立てられたような気がした。

「……………じゃあ、サイトは？」

サイトは無理矢理連れてこられてどう思っているのだろうか？

家族は突然彼が消えて、どう感じるだろうか？

想像に難くない。

今の自分のように不安な気持ちになる。

ルクシャナみたいに、悲しむ。心の平衡が崩される。

それなのにサイトは、魔王を召喚したと分かった時、本当に心細かった時、励ましてくれた。

家族と引き離されて、不安な筈なのに。

そのサイトに自分は何をした？

感情に任せて犬扱い、食事抜き、そしてクビにした。

「……最低」

ルイズは酷い自己嫌悪に苛まれる。

腐った貴族は何度か見た事があるし、噂にも聞く。

貴族の馬車が子供を轢いて素通りする。

爵位持ちの親の権威を傘に、好き勝手する馬鹿息子。

領民に重税を課し、自分は贅沢な暮らしをする領主。

気まぐれに平民の女を手込めにして、飽きたら捨てるような貴族。

その影で平民が、どれほど耐えているだろうか？

そんな奴らの様には絶対になるまい、なる筈がないと思っていたのに……。

そいつらと今の自分に違いがあるだろうか？

そんな貴族とは呼べない連中と、自分が同じになるのか？

立派な貴族を、自分が誇れる貴族を目指すのではなかったのか？

「……言わなきゃ」

ごめんなさい、と。

先日の謝罪とは言い難い言葉ではなく。

大貴族が平民に頭なんか下げられない。でも下げなかったら自分の理想すら否定する事になる。

自分を思ってくれる家族の気持ちを否定する事になる。
自分が家族を思う気持ちを否定する事になる。
そんな事、堪えられない。

「バカエルフが嫌な奴でも、私まで嫌な子になる事無いじゃない」
建前にこんな言葉が出てしまつが、揺れていた気持ちは固まった。
謝ろう。

サイトとあのバカエルフに。
魔王はちよつと厳しいけど……。
そう思うとルイズはまた一つ、何か^{つか}痞えが取れた気がした。
まずはサイトから。
思い立ったら即行動と、ルイズはベッドから飛び起き部屋を出た。

エルフと魔王がロンディニウム城で、砂糖をぶちまけていた頃。
ルイズの心が少し丸く成り始めた頃。
ディアブロ・コンキスタがトリステインに進軍を開始した。
その報告を受けて、トリステイン陣営は殺伐とした空気に包まれる。
司令部のテント内には指揮官が集められていた。
將軍と同程度の権限を持つ、近衛である魔法衛士隊隊長も同様に。
グリフォン隊隊長ジャン・ジャック・ド・ワルドは、軍議？の様な
物を冷めた目で見ていた。

「チツ、魔王が現れた割には、まるで影響がないではないか……」
舌打ちをしたのは、すっかりお馴染みの魔王が嫌いな連中。
テント内は、少数の親魔王派、多数の反魔王派、そして増加中の中

立派と綺麗に分かれていた。

「ふん、その魔王の口添えが無ければ、水精霊の協力すら得られなかったと言つに、随分な言い様だな。ロツシエ伯爵」

「だが我等はこれで異端者だ！ グラモン元帥、あなたは此度の責任をどう取るおつもりか！」

「全く、嘆かわしい……老骨打って参戦してみれば、お前の様な腰抜けばかりとはな。いい加減覚悟を決めたらどうかね？ どうせこの戦で負ければ、何もかもが終わるのだ」

陸軍の指揮を取るグラモン元帥は、既に軍務を退く年齢だった。

だが数年前から台頭してきたディアブロ・コンキスタの脅威のため、これを解決するまではと粉骨碎身してきた。

生粋の武人である彼からすれば、開戦しても尚、保身に走っている貴族よりは、一人で敵を打ち倒す魔王の方がまだ良かったのだらう。

「不毛な議論はもうやめにしようじゃないか。勝ち目は十分あるのだ」

「それはアルビオンの援軍があつての事でしょう？ 悪魔の国が裏切らない保証が、一体どこにあるというのだ！」

「その言葉、ヴァリエールの言葉を疑っていると取っていいのかね？」

「ぐっ」トリスティン有数の名家ラ・ヴァリエールの名前を出されて、言葉が詰まる。だが、反魔王派の貴族は折れずに反論する。

「あの国は亜人どころか、平民に甘すぎるのだ！ この戦に勝ったとしても、我等貴族が軽んじられる事は明白じゃないか！ トリスティンの伝統がどれほど残る!？」

「ヴァリエール公爵は誇りを忘れてしまわれたのか。悪魔に魂を売り渡すような事を……」

「姫殿下にも困ったものだ。男に騙されて国を売り渡すなど……」

グラモン元帥は呆れ返ると同時に、怒りを顕わす。

「黙れ！」

テント内に響く怒声は威圧感が伴い、言い争う貴族達の声を止める。

「これは軍議だ。我々は戦争をしているのだ。交戦が始まって、これ以上言い争うのなら、軍法会議にかけるまでもない、私が殺す」

叫び声を上げる反魔王と中立派の貴族は、表情に色を失った。しかしそこまでで、

「伝令！ 敵の亜人が国境に到達！ 数、百五十！」

現実を突きつける報告が届く。

「亜人だと!？ くそ、奴らめ、早速指輪を使いおって!」

「物量で押した後に本隊か」

亜人がディアブロ・コンキスタに参加している原因は、はっきりしていた。

アンドバリの指輪。

生物の『水』に干渉して、対象を操るマジックアイテム。本来従える事の出来ない筈の幻獣が従順になっているのは、これを使われてしまっているためだった。グラモン元帥は落ち着いた口調でなだめる。

「慌てるな。これは情報通りだ。作戦通り事を進めれば対処できる。問題は、水精霊の力が及ばぬ空の方だ」

空軍の規模は明らかに負けている。

軍艦も竜騎士の数も圧倒的に向こうの方が多い。

勝っている物は、空軍内部の纏まりと、平均的な兵の錬度。

それでも物量で押されれば、すぐに瓦解する程度のアドバンテージではない。

「陸はしばらく問題ない。この戦の要は空軍だ」

周りの貴族が頷く。切羽詰って漸くこれではアルビオンに飲み込まれるのは避けられないだろう。

ワルドは卓上に広げられた地図を眺めながら考える。

指輪の力は強い。

水を介して使われれば、数万の人間を操る事もできる。

水精霊が対象に触れなければ解呪は出来ない。

そんな危険物を自ら手引きして、敵の手中に納めてしまった。ワルドはわずかに顔を歪める。

「空だ。空に戦力を集中させるのだ。魔法衛士隊は全て空軍に異動させる」

貴族達の中に動揺が走った。この国で一番の手練達の集まりを、他に回す。保身に走る貴族にとってそれは、命がかかっている状況で

認められる事ではなかった。代表格の貴族が噛み付く。

「な！ それでは陸の戦力はどうするのです！？ 百を超える大型
亜人の軍勢など、数千の戦力に匹敵しますぞ！」

「だが、空はそれ以上の戦力を保有している。水精霊が陸軍に付く
以上、割ける人員は割けるべきだ」

「ですが……」

「君は勘違いしていないかね？ 今は防衛戦だ。向こうは攻める側
陸も戦力を集中すれば、耐え切れる規模だ。地の利はこちらにある
というのに、援軍が来るまでの僅かな時間すら持たせられないと？
それとも何か、他に気掛かりな事でもあるのかね？」

「……………」

その貴族が何か言う前にグラモン元帥は切り出す。

「ワルド子爵がもたらした情報によれば、今動いているのは亜人だ
け。魔王の襲撃により、人間は怖気づいているのだ」

そう言ってワルドの方を見る。ワルドは軽く会釈して前に一歩出た。

「ええ。一時的な物ですが、魔王の襲撃により、多数が恐慌状態に
なっています。この状況で守りとなれば、持ちこたえるのは容易い
でしょう」

貴族の顔色が元に戻る。

「魔法衛士隊の異動は、決定事項だ。異論があるのならば、論破してみせよ」

怒気を含んだ元帥の声に、誰も異論を挟める者はいなかった。

ラグドリアン湖西岸の辺を百数十体のオグルとトロールが、地響きを立てて進む。

太い喉から出る唸りは、数キロメートル離れた地点にいるトリステイン軍にも届いている。

その後方で少数の人間の士官が、それを指揮していた。

そして竜騎士やグリフォンなどの幻獣、それどころか知能が低く使い物にならない筈のワイバーンまでもが上空を埋め尽くしていた。

「くそ、何て物量だ……防衛戦でなければ、軽く飲み込まれるぞ……」

ワルドは自分のグリフォンに乗る前に、上空を見て独りごちる。

アンドバリの指輪を手引きした失敗を、返上するにはここを乗り切らなければならない。

トリステイン軍の構成は、陸は人間のみ。空は空軍の戦艦と竜騎士、魔法衛士隊のヒポグリフ、マンティコア、グリフォン。

人間が乗っている幻獣は、トリステイン軍の方が多いとはいえ、敵の数は倍はあった。

そしてワルドは魔法衛士隊の隊員に向かって叫んだ。

「地上は水精霊が味方してくださる！ 我等は上空の敵に専念だ！」

地上はラグドリアン湖の水精霊の協力で、陸軍の負担は大幅に減っ

ていた。

平原には土メイジが作った溝に、ラグドリアン湖から水を引き、満たされている。

そしてその水に触れた亜人の支配を水精霊が解き、魔王の名の下？保護？するという作戦が取られる事になった。

もつとも、保護されるのは大人しい性格のオグルのみで、気性の荒く、人間嫌いのトロールやオークは処分する事になるだろうが。

「三日だ！ 三日持ちこたえれば、空の国から援軍が来る！ 魔王が率いる強大な軍勢だ！」

軍を率いるのはウエールズ王子のだが、ワールドは隊員を鼓舞するために『魔王』と言った。

この時ばかりは教会が広めた悪評が役に立った。

何せ、一部の高官以外は真実を知らない。

本当は六千なのに、一人で六万の兵を血の海に沈めたとか、彼に潰された村落は両手で数えられなかったりとか、暗殺された貴族は全て魔王の仕業だとか、とにかく民衆を恐怖に陥れた。

そんな『魔王』が率いる軍勢が、味方に付く。

魔王の参戦に、貴族の高官は苦々しげになり、末端の兵士達は息巻く。

祖国の命運がかかっている以上、異端がどうの言っただけならいいのだ。

「深い追いせず、生き残る事だけを考える！ 三日耐えれば、俺達の勝ちだ！ 生きて勝鬨かつどきを上げるぞ！」

気炎を揚げるワールドに隊員達は怒号で応えた。

「遅れないでくださいよ？ 魔王様」

ワルドは皮肉るように言った。

腹の奥から来る信号が、神経を伝わり脳に送られ、そして症状を自覚する。

つまりは、

「……………腹減ったな」

ナツメは割と酷い空腹に目を覚ました。

体がだるい。食事もとらずに寝ていたせいか、体が重い。今は何時頃だろうか、ナツメは眠い頭を動かして窓の方を見た。

「ん?…………」

召喚されて四十四日目。

再びアルビオン王宮の一室。

もう随分日は高く、強めの日差しが眩しい。白く薄い生地のカートンは、光をほとんど遮る事なく、仕事を放棄している。外から部屋の中が見えそうなほど薄いし、お前、付いている意味無いだろうか？とナツメは思う。

「……………だる。寝過ぎた」

眠気を誘いそうな春の陽気は、既に効力を失い、上質のふかふかマットとシーツを温めるだけだった。

背中が痛い。まさか、一日すっぱとして次の日まで寝ていたりしな

いだろうか？

体を起こそうと腹筋を動かすと、胃が刺激される。胃は空っぽだ。ナツメは言い様の無い空腹に攻め立てられた。

「やばい……、腹が減りすぎてやばい」

何か食べに行くか。

ナツメはベッドに座ると、頭を搔く。

「うわっ、気持ち悪……」

髪が若干べとついていた。

「あー、そっぴゃあ、風呂入ってなかった……」

今は入浴の時間帯では無いから、大浴場は使えない。

こういう時、城の使用人に頼めば湯を用意してくれるんだろうけど……。

気が引ける。

ネフテスに居た時は、火石の湯沸し機能が付いた風呂釜があったから気軽に入れたが、ここはハルケギニア。そんな物は無い。筋金入りの庶民感覚が抜けず、使用人に頼むのは憚はばかられる。

「水浴びしてくるか」

冬じゃないし、飯食ったら温まるだろう。

ナツメは着替えを適当に取り、部屋から出ようとするのだが、そこで足が止まる。廊下から足音が聞こえた。

誰……？

城なのに、味方の居る場所なのに警戒しすぎている。使用人の足音

だるうちに、妙に緊張してしまう。

足音は部屋の前で終わり、コンコンッと、扉が叩かれる。ほっと胸を撫で下ろすと、「どうぞ」と。

ドアが開かれると、そこに居たのはメイドだった。

「おまえ、何してんの？」

そこに居たのはメイドだった。レースとフリルのいっぱい付いたメイド服を着込んだメイドだった。

普通のメイド。

カチューシャの横から長い耳が出ていなければ。

彼女は丁寧に一礼すると言った。

「おはようございます。ご主人様。食事と湯浴みの準備が出来ておりますが、どちらになさいますか？」

「いや、風呂が先だけどさあ……あれ？ これ突っ込んだじゃいけないの？」

メイドはルクシャナだった。黒いメイド服に身を包み、少し照れた様子になり、演技を続ける。

「か、かしこまりました。ではこちらへ」

「……駄目なのね」

そうして案内されるがまま、彼女の後ろを歩く。

ぴんと伸びた背筋、両手を前で組み、歩く姿はまさにメイドだった。さらりとした輝く金髪を、後ろで一つに結わえてあるので、きめ細かい白いうなじが見える。それが黒いメイド服によく合っていて、

思わず見とれてしまう。
カチューシャの横から出た長い耳が、メイドっぽくなくて余計に目が離せない。

「……………」

久しぶりに見たルクシヤナは、驚くほど美人になっていた。
そりゃあ昔から、かなり可愛いかった。女性らしさはあまり無かったけれど。

長いスカートの下から見える細い足首、細い腕、細い肩。
後ろから観察していると、彼女はくるりと振り返った。
長いスカートの裾がふわりと跳ねる。

「どう？ ドキッとした？」

「ああ本当、ドキッとしたよ」

いたずらっぽい笑みを浮かべるルクシヤナに、ナツメは率直に言う。
だが、彼女は少し不満そうに顔をしかめた。

「うう、あんまり驚いて無いじゃない。せつかくメイドに借りたのに……………」

「いや、驚いたのはメイド姿じゃなくて、再会して二日目にそんな格好で、僕の前に現れる君の思考回路だ」

「そんなんじゃないくて、『うわ、お前馬鹿！ 何て格好してるんだよ！？』て顔を赤くして、慌てふためく姿が見たかったわ」

「だったらメイドさんを連れてくるな！ 後ろで今か今かって、小

声で言ってるのが聞こえるんだよ！」

とてもわくわくした様子で、五人ほどのメイドが聞き耳を立てていた。ルクシヤナはハンカチを片手に、よよよよ、と泣き真似をした。

「酷いわ。せつかく私が『庶民が親しみやすい気さくな魔王さま』っていうイメージを作ってあげようと思ったのに」

「このいたずらに乗って来る当たり、相当親しみやすいんだろうな……はあ、叫んだら余計に腹が減ってきた」

ルクシヤナは再び丁寧な口調になる。

「では、入浴の後はお食事でございますね。ご主人様」

「それ、まだ続いてたのかよ……」

そしてまた急に頬を赤らめて言う。器用なもんだ、とナツメは思った。

「それで……お食事の後は……？」

「仕事」

一瞬の間が空き、もじもじしてもう一度。

「それで……お食事の後は……？」

「仕事」

そして少し涙目になりながら。

「食事の後！」

「仕事」

「……あなたって相変わらず、期待を裏切らない人ね」

「無限ループにならない当たり、君の愛を感じるよ」

廊下で立ち止まりながら、そんな不毛なやり取りをしていると、近づいてくる人物がいた。

桃色ブロンドが特徴的な少女、ナツメの召喚者、ルイズ。

どこか緊張した面持ちで歩いている。

「あ、ルイズ」

ルクシャナがそう漏らすと、彼女は付いて行けていない様な顔をして言った。

「あんだ、何て格好してんの……」

ルクシャナのメイド姿を見て固まった。ナツメと同じ様な反応を見せるルイズに、ルクシャナは叫ぶ。

「おまえもか！」

「え、何？ 何で？」

ルイズは頭の上に疑問符が浮かびそうな顔をして、ナツメとルクシ

ヤナを見る。

そしてナツメと目が合うと、急に目を逸らした。嫌われている。そうナツメは感じて気まずさを覚える。

「あー、ルクシャナ？ 先に行くわ」

この場を退散しようとする。風呂に関しては、隠れていたメイドにでも聞けばいい。だが、ルイズは彼を引き止めた。

「待って！」

ルイズは気を落ち着かせるように、深呼吸してから言った。

「あなたにも……聞いてもらった方がいいわ」

何かを決心したような顔で、彼女は続けた。

「ごめんなさい」

心からの謝罪。

そう受け取れるほど、言葉に何かが籠っていた。でも何で謝ってるんだろう？ ナツメはルクシャナに耳打ちした。

「ねえ、何でこの子謝ってるの？」

ルクシャナはナツメの頭をバシツと叩く。あれ？ 僕が悪いの？ 意味が分からず、ナツメは困惑した。

彼女は穏やかな表情でルイズをそっと抱きしめると、優しく言った。

「もう、いいのよ。悪いのはあなたじゃないわ」

だがルイズは急に子供のようになり泣き出して謝罪を繰り返す。

「……………ごめんなさい……………私、あなたの……………ごめんなさい……………」

幾分背の低いルイズは、丁度ルクシャナの胸に抱かれる形になる。彼女の目からは、ぼろぼろと涙がこぼれルクシャナの胸元を湿らせる。

ナツメはルイズの謝罪の意味に気付き、背を向けた。泣き顔なんか見られたら、彼女も恥ずかしいだろうと気遣って。

どれほどか経った頃、ルイズは泣き止み、再びルクシャナに言った。

「なんか駄目ね……………。ちゃんと、どう謝ろうか、考えたのに……………全然出て来ないんだもの」

「怒ってないって言ったでしょう?」

「ううん、私がそうしなきゃ済まなかっただけよ。故意じゃなかったけど、あなたの……………その……………恋人? を連れ去った訳だし」

「いいのよ。もう会えたんだし、あなたが気に病む事じゃないわ。ナツメなんて、記憶にすら無かったもの」

ルクシャナの言葉にルイズは声色を変える。

「ええ!?! 何で?」

「だって、ディアブロ・コンキスタっていう問題が転がってるじゃない」

「そうだけど、私は敵の近くで召喚した訳で……」

「それにね、アルビオンの人達は、あなたに感謝すると思うわ。まあ、知らせられないんだけどね」

「え？」意外な言葉にルイズは目を丸くする。

「祖国の危機に、英雄を召喚した事になるでしょ？ この国じゃ、魔王は英雄なんだから。本当だったら、人間世界こじちに来るのは、もう少し先の予定だったのよ。一年か二年。もしかしたら、その時には、トリステインもアルビオンも、火の海になってたかもしれないわ」

十五年前アルビオンの内部分裂で、王党派に付き、貴族派を潰し、人間と亜人の手を結ばせ、国の発展の基礎を作った英雄。一部で神の化身。そんな人物が再び現れて、アルビオンは熱狂した。主に亜人が。

ルイズは首を傾げて言った。

「私が召喚して良かったの？」

「駄目」

「どつちよー！」

「だって私が辛くなるもの。駄目に決まってるじゃない」

「……何か損した気分だわ」

ルイズはげんなりした様子で言った。

ナツメは二人の会話を聞いていて思う。

この小さな女の子がヴィットーリオと同様、虚無の担い手である。敵対する可能性がある。

殺し合いをしなければならぬ可能性がある。

人の痛みでこんなにも泣ける子が、悪い子な筈がないのに。

「サイトにはちゃんと謝った？」

「うん」

「そう。えらいわ」

ルクシャナはルイズの頭を撫でる。

見ている、姉妹じゃないかと思ってしまう光景だった。あまり似ていないけれど。

ルイズは落ち着いた所で、ルクシャナから離れて聞いた。

「どうしてそんな格好してるのよ？」

そしてルクシャナは得意気にナツメを指差して言う。「こういつ時って碌な事言わないんだよな、彼女。ナツメはそろそろ風呂に行きたいなあ、と遠い目になる。」

「この悪魔で遊ぶためよ」

「?で?って言った! ?で?って言った! ?と?じゃなくて?で?って言った!」

「黙って下さいます? 魔王の癖に度量が小さいのではなくて?」

「うわ、むかつく。再会して二日目なのに、すげえむかつく」

そして彼女は満足そうな笑みを浮かべて、

「その顔が見たかった」

「ご期待に沿えて何よりだよ……起きたばかりなのに、もう疲れた……」

空腹もあつてか、ナツメの声には力がない。ルクシヤナは楽しそうな顔をして付け上がる。

「それはいけません。私がお背中、お流しますわ」

「いいから。本当にいいから、一人で入らせて……」

「いけませんわ！ 魔王たるものが、世話係の者も連れずに入浴だなんて！」

「そろそろ本気で疲れてきたんだけど」

ルクシヤナはころっと態度を変えた。

「ん、そうね。ふざけるのはこの辺にしておきましょうか」

「できれば、しばらく自重して欲しいんだけど」

「じゃあ、できない」

「しるー！」

そんな様子が可笑しかったのか、ルイズは「ぷっ」と吹き出した。笑いを堪える様にして言った。

「何で私……あんなに、悩んでたのかしら？ 馬鹿みたい……」

ナツメはそれを見てほっとする。少しだけ気掛かりだったのだ。召喚者の少女が、悪魔を呼び出して、苦悩する事は分かり切っていたから。

「神様気取りの馬鹿が人の都合も考えずに、自分の都合で選ぶからだろ」

「え？ 昨日のあの仮説って本気だった？」

虚無の力を司る意思が存在する、という仮説。

ルクシャナは冗談だと思っていたようだ。ナツメはだるそうに言った。

「あゝ今から説明すると長くなるから、後にしてくれない？ 飯食って午後から会議あるじゃん。もしかしたら、そこで話すかも知れないし」

ルイズは話が分からないようで、

「ちょっと何の話なの？ 私にも関係有るなら、教えて」

するとナツメは呆れたように吐息をついて言った。

「ねえ、ルクシャナ。この子に虚無あのこ教えてないの？」

「うん。言っていない」

はあく、とため息をついて、肩をすくめる。

「当事者なのにな？」

「当事者だからでしょ？」

噛み合わない。ルイズは少し不安そうに尋ねてくる。

「ちょっと、私にも分かるように言いなさいよ。あの事って何よ？」

「えーと……これも一度、話し合わないといけないね。めんどくさいけど」

ルイズに、彼女自身が虚無の担い手である事を伝えるかどうか。

「多分、反対されると思うわ」

「知らせない方が危ないと思うけどなあ」

軽い調子で言うナツメに対し、「危ないって何!？」と、ルイズはますます取り乱す。

「とりあえず、風呂。それから飯だ」

ルイズを無視して、ナツメは自分の要求を提示した。すると、メイド姿のルクシャナは優雅にスカートの裾を摘んで、

「かしこまりました。ご主人様」

と丁寧な礼をした。ナツメには、もう突っ込む気力が無かった。

でてきたルイズ（後書き）

シエスタ可愛い メイド エルフメイド

だんだんシリアスに移っていきます。

戦争の気分じゃない(前書き)

捏造設定大杉

戦争の気分じゃない

午後になってアルビオン王宮会議室では、前線の情報の通達と出撃前の最終確認が行われていた。

ピリピリと緊張した空気の中、書記官が明日からの予定を読み上げる。

「……午前中に合流し、午後の出撃前に、殿下とナツメ様により演説が行われます」

「げっ、初耳なんですけど……」

既に空軍は軍港口サイスで待機している。明朝出発し、合流する事になっていた。演説と聞いて顔をしかめるナツメにウェールズは、

「ああ、すまない。言っていなかったな。でも当然だろう？ 魔王が皆を鼓舞しなくてどうするんだ」

「……そう言えばそうか」

と、ナツメがどこか抜けた声を出すと、会議室内でどつと笑いが起こり、張り詰めた空気が和らいだ。ウェールズは肩をすくめて、

「おいおい、しっかりしてくれよ魔王さま。君の言葉は全体の士気に影響するんだから」

書記官は笑い声が納まると続ける。

「深夜、アルビオン大陸がトリステイン上空に差し掛かると同時に

出撃、先行した小型艇による強襲後……」

今回戦争に参加している種族は、人間に加えコボルト、獣人、翼人、オグルは重量の関係上、戦艦に乗せられないので後方支援に回っている。

空軍に翼人、陸軍にコボルトと獣人。

アルビオン軍は空と陸、合わせて七万の人間と二万の亜人で構成される。

対して、トリステインに展開するディアブロ・コンキスタの軍勢は七万。

数の優位性はそうでもないが、人外の精霊魔法という強力な武器がある。

「……以上です。何か質問は……」

大まかな予定を読み上げると、書記官は席に着いた。ウェールズはそれを確認してから、

「言うまでも無いが、此度の戦は少々特殊な物になる」

ディアブロ・コンキスタが始祖ブリミルの名を掲げる以上、宗教戦争に近い物がある。

「神の名の下に、死を恐れぬ戦士となった敵は厄介だ。恐らく指揮官を討った所で、止まらない兵ばかりだろう。何せ敵にとって、この戦いは聖戦だからな。国の命運がかかった戦いだ。くれぐれも無茶はせず、慎重に動いてくれ」

ウェールズの言葉に王軍の士官や貴族達は頷く。亜人の代表も、エルフ達も。

「では、これで解散だ。各自、明日からの行軍に備えてよく休むように」

会議室から、人が出て行く。

明日からの戦に意気込む者、景気付けに酒でもと笑いあう者、険しい顔をしている者。

そんな中、ウエールズ、ビダーシャル、ナツメの三名は会議室に残っていた。

「それにしても凄いな」

ナツメは一冊の本をぱらぱらと捲りながら言った。タイトルは『新戦術論〜異種族混成軍 各論〜』。内容は文字通り先住魔法と系統魔法を扱う者達の連携の取り方だった。それにウエールズは少し得意気になって言う。

「凄いだろう。まだ理論としては、未完成らしいがね。最後はもう何日徹夜した事か……」

そして遠い目になる。

「そもそも王軍に亜人を組み込む事すら、反対されていたからね。各方面の説得が一番大変だった。それから実験小隊を作って、ああ、それよりも予算が回らなくて……」

するとビダーシャルが長々と語りそうだった彼を制し、

「それで、聞かれて不味い相談とは何だ？」

「ええ、虚無の事で。というかルイズって子の」

ナツメの言葉でウェールズは思い出したように、

「ああ、ヴァリエールの三女が虚無の使い手だって事だったね。また何かあったのかい？ 確かに君の事は嫌っているようだったけど」

「それは別にどうだっていいんだよ。唯、このまま彼女に何も知らせないままで、大丈夫なのかって」

ワールドが彼女の系統に気付いていた以上、他の人間も知っている可能性がある。何もない奴とばかりとは限らない。ルイズがその人間に利用されないと限らない。まあ、そうならないために彼女をアルビオンに置いている訳だが。

「虚無系統の魔法に関する資料はほとんど無い。対処方法が分からないんだ。もし敵に担い手が現れたとしたら？」

「まさかナツメ……お前は」

「現時点で判明している担い手は、二人、ルイズとロマリアの教皇」
死んでしまった彼の母親の話を出す。母の手紙と『炎のルビー』を届けた事を律儀に、？魔王に干渉？という声明を出す事で返してくれた。

ルクシャナの話からしても、その行動の意味を味方と取ってもいいのかも知れない。

ビダーシャルの表情が厳しい物になる。

「教皇だと……何故、お前がそれを知っている？」

「昔、ネフテスに来る前、彼の母親に少しだけ世話になったんです。その時、彼は既に力に目覚めていた」

「どうしてそれを言わなかった……一族を危険に晒すのだぞ？」

「言っただうなるんです？ 彼は本気でハルケギニアで変えようとしている。二十年前からずっと。宗教庁の腐敗が取り除かれているのが良い例だ。その証拠に、秘宝も条件次第ではくれるらしいじゃないですか」

『信仰によりハルケギニアを変える』ヴィットーリオはナツメの前でそう宣言した。現在のロマリアの情勢から、その決意をずっと貫き通している事が分かる。すると、どこか呆れたように、

「……つまり、お前はその教皇と親しいのか？」

「いいえ、全然。唯、僕がした事を、彼が負い目に感じているのは有り得ますね」

今度はほんの少し笑みを浮かべて、

「それで、お前はその負い目に付け込むのか。全く、どちらが悪魔シャイターンなんだか……」

「まあ実際、やり易くなるんだから良いじゃないですか。それよりも、問題は虚無の力についてです」

ウェールズはあまり話に付いて行けていない様子で、困惑した表情を浮かべる。

「ミス・ヴァリエールの力を目覚めさせようってのかい？ でも、君の話からすると、復活は不味いんじゃないのか？」

「一代限りの復活なら、多分問題は起きない。要は、『四つの四』が揃わなければいいんだ。一人のメイジの力で、世界が滅びるなんて事も無いだろうし」

力が目覚めてから秘宝を破壊すれば、その後に虚無の担い手が覚醒する事もない。

ビダーシャルは疲れたように吐息をついた。

「お前の言いたい事は大体分かった。あの少女に魔法を使わせて、効果の程を調べようと言うのだろうか？」

「そういう事です。後二人の担い手が誰なのか、どこに居るか分からない以上、対策はとっておかないと」

「私もそれは考えた。だがあのルイズという少女、感情が不安定な上に、あまり協力的ではなかったではないか。そうすんなり頷くとは……」

「大丈夫だと思いますよ？ さっきちょっとした事があって、仲良くなつてみたいですし」

「お前がか？」

「いや、ルクシャナが」

「ほう、あの子が……」

そう言つとビダーシャルは少し考える素振りそぶりを見せて、

「……ふむ、わかった。それに関しては、お前達に任せておこう。だが、どうする？ 明日からここを離れ、しばらくは戻って来ない。実験には立ち会つべきだ。あの少女一人にやらせるのは……」

「ええ、今の所は、彼女に、自身が担い手である事を伝えるだけになりそうですね。でも丁度良いんじゃないですか？ いきなり言われたら、びっくりするような事だろうし、考える時間も必要でしょう」

虚無に関する資料なら、恐らくロマリアにもあるのだろう。神学が進んでいるので、過去の聖戦の記録も。閲覧許可は下りないだろうが。

ネフテスにもあるにはあるのだが、細かい部分までは載っていない。せいぜい、虚無の呪文に大規模な爆発を起こす物や、魔法を打ち消す物があるとかその程度で、呪文スヘルなどの詳細は不明。

「にしても、随分すんなりと認めましたね。ルクシャナの話じゃ、反対されるって……」

「必要な事だ。将来また異世界から、虚無の使い手がやって来るやもしれん。ここで復活を阻止したからといって、丸切り安全という訳でもないだろう？」

後世に残すための資料という事。そう言つとビダーシャルは、

「話はこれで終わりか？」

ナツメが「はい」と頷くと、緊張した態度を崩して彼に言った。

「さて、昨日はどうだったのだ？」

「は？」

そしてウェールズも、気が付いたように乗って来て、

「ああ、それは僕も気になっていたんだ」

急に二人の視線がニヤニヤしたものに変わる。

「何ですか……そのえらく自然で不自然な笑いは……」

ビダーシャルとウェールズは、息が合っているように示し合わせる。

「いや、何……分かりきっている事だろう？　なあ、皇太子よ」

「ええ、これはもうねえ。知りたくなりますよね、ビダーシャル殿」

ナツメは何もかも逃げ出したい気持ちに駆られた。

明らかに戦争中の雰囲気ではなく、緊張感をどこかに置き忘れたかのように、この部屋の中だけ何かに染まっている。

恥ずかしさのあまり叫ぶ。

「何だよ！　帰ってから皆おかしいじゃないか?!　こっち見てニヤニヤニヤニヤばっかしゃがって!」

すれ違うメイドの視線がちらちらとナツメの姿を捉え、クスリと笑ったり、宮廷貴族なんかもナツメを目にする度、ひそひそと。妙な感情のこもった気まずい視線は精神の別の部分をガリガリと削った。

会議室前に立っている衛士すら、ナツメを見ると妙に暖かな視線を送ってきたのだ。

「で、昨日はどうだったんだい？」

ウェールズはお構い無しと、期待したような目でナツメを見つめる。金髪碧眼の凜々しい容貌はいやらしい笑みで台無し。高貴な生まれを感じさせるのに、言ってる事は下世話だ。ナツメは肩を落として声を絞り出す。

「どうって……何もねえよ」

「……何だって……あれだけ、熱い再会をして置いて……その晩に、何も無かったなんて……本気で言ってるのかい？」

「この世の終わりみたいな顔すんな。大体、エルフは人間より性欲が薄いんだよ」

「君はエルフじゃないだろう？」

因みにネフテスの風習では、婚前交渉はあまり褒められた事ではない。聖者がやったら問題になるんじゃないだろうか。

「本当に何も無かったのかい？」

「無かった」

「何だ、詰まらないな」

「お前……他人の情事なんか聞いて楽しいの？ 自分の恋人の方、考えてればいいじゃん」

アンリエッタが亡命して来た時、どうせよろしくやってたんだろうと。

ウエルズは目頭を押さえ、急に追い詰められたような雰囲気を出し、言った。

「そうだった……」

そして遠い目をして、聞いてもない事を語り出す。

「アンリエッタが、テファに会ってからおかしいんだ。言葉が妙に刺々しくなったり、態度が氷槍ジャクソンだったり……帰る前なんか、もう……。『大きいのばかり見てたかも知ぐ』って」

「唯の嫉妬だろ」

「それにしたって酷いじゃないか。僕は彼女のために、頑張ってきたっていうのに……」

「仕方ないさ。ほら、ティファニアって可愛いじゃない。引っ込み思案で恥じらいがある所なんか特に。顔も綺麗だし。あんな美人が傍にいたら、そら不安になる」

「胸は？」

「大きすぎるのはちょっと……」

「……君はとことん本能に逆らった性格してるな」

「黙れ、仕事中毒」

これまで国中の名家の女性が彼を狙っているのに、浮いた話は一つもなかったらしい。アンリエッタとの関係は徹底的に隠し、亡命の時期まで表に出て来る事は無かった。

縁談や恋文があっても、仕事仕事と突っぱねて既に十九歳。毎日書類と格闘した結果、国は良くなったが、彼の青春はほぼ、仕事に潰れた。勝ち組なのにどこか泣ける。

「でも、一緒に暮らすようになれば、お前の苦労も、分かってくれるんじゃない？」

「いや、治まらない。これは断言できる。彼女はきつと、僕がテファ？とも？結婚すると思ってるんだ。結婚しないと証明しない限り、治まる筈がない！」

跡継ぎ問題。周囲はアンリエッタとティファニアを、ウェールズが同時攻略する事を推奨している。

彼が次期王である以上、仕方のない事だった。手が出せる問題じゃない。ナツメがウェールズ言える事といえば、

「頑張れ」

「くそ！ 彼女の方が、ディアプロ・コンキスタよりずっと手強いじゃないか！」

と、頭を抱えるウェールズ。本当にそうならば、どれほど心強い事か。
すると、黙っていたビダーシャルがナツメに言う。

「で、本当の所はどうなのだ？」

「あんたもか……」

「大事な姪だからな、心配なのだ。長命のエルフといえども十年は長い。お前が居ない間のあの子は……見ていられなかった……。分不相応な肩書きで、友人は距離を置き、町に出れば聖女様、ルクシヤナ様ときたものだ。誰もあの子自身を見ない」

「……………」

ナツメは彼女の様子を見て、理解はしているつもりだったが、改めて言われると何も言えなくなる。

「あの子がここまで来れたのは、偏ひとへにお前信じていたからと言ってもいい。聖地あいのちに何度通っていた事か……。あんなに嬉しそうなのは久しぶりだ」

ルクシヤナはそんな事を億尾にも出さず、あんな悪戯を……。きつと元気付けるためにやってくれたんだろう。

「……………もうしませんよ。僕だって、彼女が苦しむ所なんか見たくない」

「そうか……ならば私から言う事は無い」

ビダーシャルの声は穏やかだった。そして憐れむ様な表情で。ナツメにはそれが不穏当な物に感じられて、嫌な事を想像してしま

う。
「？私から？って……他にも小言を言う連中がいるみたいじゃないですか」

「ああ、帰ったら凄い事になるかもしれん。評議会、親戚一同、特に姉上。だから私からは、もう何も無い」

「げ、ムニィラさん……そんなに怒ってんの？」

「ああ、八つ裂きにすると、血気にはやってそれはもう……な」

ナツメは帰った時の事を想像する。

「……………」

ビダーシャルは優しくナツメとウェールズの肩に手を乗せた。

「まあ、二人とも頑張れ」

才人はルイズの態度の変化に戸惑っていた。

つい昨日までであった高慢な態度は、小さく鳴りを潜め、それに反比例するように素直になっていたのだ。「あなたの気持ちも考えずに、酷い事言っでごめんなさい。あなたは私の事、考えてくれていたの

に……」と言った感じで、急にしおらしくなったルイズに可愛いと
思ってしまったって、とうとうデレ始めたのかとか、そんな思考が頭
中をぐるぐると回り、彼女の謝罪にも全力で頷いてしまった。

才人は自分の前を歩く二人を見る。

ルイズとルクシャナ。

どちらも人目を引くような美少女。

受ける印象は全く対照的な二人。胸に類似性が見られるが。

不意にカチャカチャと彼の背中に背負った剣がしゃべり始める。

「相棒、そんな風に鼻の下伸ばしてつと、また貴族の嬢ちゃんにど
やされるぜ？」

デルフリンガー。自称、伝説の魔剣。錆びた刀身が才人にそれを否
定させる。

「伸ばしてねえ。ただ、あんなにツンツンしてたのに、急に態度が
変わるからさ」

「嬢ちゃんも反省したんだろうよ。おめえさんを理解しようよと、努
力してるんじゃないの？ やー健気だね」

変化が急すぎる。だが、ルイズが本当にそう思っているなら良いと
思う。

「にしても魔王ね……こつちも六千年生きちゃあいるんだが、こん
な事初めて聞いたぜ」

「忘れてるだけじゃねえの？」

「いいや、これは断言できるね。一人で六千も相手する奴が現れて

たら、御伽噺にでもなってるって」

「うん」

それもそうかと才人は思考を別の方向に切り替える。前を歩く二人を見た。

「ルイズが反省って、何があつたんだ？ お前、ずっとあいつの部屋にいたんだろ？」

先日の出来事でかなり二人の間柄は険悪な物になっていた筈だ。それなのに二人がいつの間にか、仲良くなっている。

錯覚ではなかるうか？ 才人は何度も目を凝らすのだが、どう見ても友人にしか見え無かった。

「詳しい事は、おれっちの口からは言えねえよ。ただ、当たり前の事に気付いたのさ」

「当たり前的事？」

「そうさ、あたりめえの事」

そう言われて、聞き耳を立てると才人にも話し声が聞こえてくる。

「もったいぶらないで、教えて。私に関係あることなんでしょ？」

先程からルイズはとても不安そうに、何度もルクシヤナに尋ねていた。

「せっかちな。今、ナツメが叔父さまと話してるから、終わるまで

待ちなさい」

「その叔父さまの許可が下りなかったら？」

「諦めて」

「出来るか！」

いつもの調子に戻っていくルイズを才人は宿め^{なだ}ようとする。

「まあまあ、ルイズ。あんま怒んなって」

「黙ってて。あんたには関係ない事よ」

するとルクシャナは当然のように、

「あるわよ」

「嘘お！？」

忙しい奴だな、と彼は諦めた。

そうして、才人達はある部屋に着いた。

魔王が滞在している部屋。才人は妙な緊張感を覚えた。

余計な装飾もほとんど無く、さっぱりとした部屋。

ベッドと本棚、机の上には何かの本と広げたままのトリステインの地図。

部屋を見た感想としては、豪華どころか、学院のルイズの部屋よりも簡素な物だった。

そういえば魔王っていつても、物語に出て来る様な怖い奴じゃないんだっただけ。学院の方にも便宜を図ってくれたらしいし。才人は

権力に染まらないイメージを魔王に抱いた。

ルクシャナが部屋のドアを閉めると、ルイズは更に不安げに部屋の中を見渡す。

「わざわざこんな部屋に連れて来ないと、出来ないような話なの？」

「そんな所ね。表ざたにしたら、かなり問題になるわ。あなたのお父様には伝えただけ」

「父さまに？」

それを言われてルイズは、考え込むように黙ってしまふ。ベッドに腰掛けたルクシャナは「座ったら？」と才人とルイズに促す。それに従い二人は手近な椅子に座る。

「どちらにしる全部終わったら、あなたにも教える事になるわよ」

「……それじゃ、遅い」

「ねえ、ルイズ」

ルクシャナは肩をすくめて言った。

「私は、今の時点で、あなたに真実を伝えるべきじゃないと思ったわ」

真実。昨日の彼女が言っていた事だろうかとかと才人は考える。ルイズは特別な力の持ち主らしい。人間よりも遥かに強いエルフに脅威と言わしめる力。才人の好奇心が少しうずいた。

「でもナツメは……魔王はあなたに教えるべきだって。どうしても分かる？」

ルイズは首を横に振る。

「多分、あなたの事を信じようとしてるからよ」

ルイズはあまりの事に思考が付いて行かない、といった風に絶句した。敵だ、倒せと忌み嫌っていた相手が信じる？ 確かに、先ほどの魔王から受けた印象から、悪人には見えなかった。だが自分を嫌う人間を信じようとするなんて……。ルイズは上手く言葉が出ない。

「……なん、で？」

ルクシャナはゆっくりと、それでいて確かな口調で言う。

「彼がどれだけ迫害されてきたと思ってるの。ルイズの？ 嫌い？ 程度じゃ、彼にとって涼しい物よ。それに、あなたがそういう考えを持つようになったのは、教会が植えつけた先入観せいでしょ？ あなたは、本当に彼を嫌ったり、憎んだりしていない」

根本にある前提が違ったのだ。

ルイズはナツメではなく、魔王を見ていた。

サイトではなく、使い魔を、平民を見ていた。

ルクシャナではなく、エルフを見ていた。

彼らは自分を見ようとしてくれるのに。

家族がそうしてくれるように自分を見ようとしてくれるのに、自分は相手の肩書きばかり見て……。

「……ルクシャナは、どうして反対なの？」

ルイズの問いに、ルクシャナは心配そうな顔をしながら、
「しぶざけたように、」

「教えたら、何かとんでもない事をやらかしそうで……」

「何それ？」

と、ルイズがルクシャナの発言を聞いた所で、部屋のドアが開いた。

「お、集まってるね」

ナツメだった。ルクシャナは彼が入ってくるなり「どうだった？」
と聞く。

「ん。いいってさ」

と言いながら、ナツメはルクシャナの隣に座った。それを聞いてル
イズは少しほっとする。

ナツメはルイズを見つめて言う。

「それじゃあ、不確定な原因と確定している結論、どっちから聞
きたい？」

凍るような赤い瞳。先入観が拭い去られた今でも、少し怖い。口調
は軽いのに、纏う雰囲気重い。

「……結論から」

ルイズの選択に短く「そうか」と。そして、

「虚無だよ。君が扱える魔法系統は虚無」

虚無。零番目の失われた系統で、始祖ブリミルが使っていたとされる。

伝説の系統。

その力が自分に。

呆けるルイズをよそにナツメは続けて言った。

「才人の左手のルーンがガンダールヴだろう？ 見れば普通分かるものなんだけどな。いや、見なかったのか？ まあそれはそれとして、虚無系統の使い手が増えると、他の四系統、先住魔法の方に不都合が起こるんだよ」

突きつけられた現実ルイズを混乱させる。自分が虚無の担い手だったというだけでも驚きなのに、虚無系統が他の四系統に都合が悪い物？ 話が飛びすぎて付いていけない。

「おーい、ルイズ？ 大丈夫？」

ルクシャナはルイズの目の前で手を振る。

「大丈夫よ。ちょっと驚いただけ。続けて頂戴」

「ちょっと？ 目の焦点合っていないように見えただけ……」

ルクシャナが茶化すとナツメは彼女を小突いて、

「やめろ。今日話したら次は暫く後ひまじなんだから、おふざけは無しにして」

「はい」と言うルクシャナは嬉しそうで、ルイズはまたばつが悪くなる。

「暫く後って……そういえば明日出発だったわね」

「そうそう。今日は早めに寝たいし、説明もさっさと済ませたいから、途中で突っ込まないでね？」

「なんか扱いがおざなりだわ」

そしてナツメは語る。

系統魔法と精霊魔法（先住魔法）の力の源が同じである事。

それを司る『大いなる意思』が存在する事。

精霊の糧『マナ』の存在。

『マナ』は大気中に偏在し、取り込む事で精神力を回復している事。虚無の魔法はその『マナ』を大量に消費、または消し去る効果を持つ事。

「虚無は『マナ』のサイクルから外れてるんだよ。使ったら使ったきり。食い潰すだけで、循環させない力。こんなのがあつたらどうなるか分かるよね」

ナツメはルイズに問いかける。

「……系統魔法がいずれ使えなくなる……。でもどうして？ どうしてそんな力が存在できるのよ」

「虚無の担い手自体が、異世界から来た者だからさ。大方、彼らは『マナ』の循環《サイクル》の事に気付かずに力を使い続けたんだ

ろう。ある時、大規模な虚無魔法を使って『大いなる意思』そのものを傷つけた。殺される事を恐れた『大いなる意思』は大陸の下に風石の鉱脈を作り、蜂起させる事で、彼らをハルケギニアに追い立てた。多分、この中に始祖ブリミルが居たんだろう」

「それって、昔は虚無系統のメイジが、たくさんいたって事？」

「そういう事になる」

ルイズは途切れ途切れだが、ナツメの話を理解した。

「……その話が本当だとして、あんたはどうしてそんな事知ってるのよ？」

あまりに突拍子もない事を言うので、ルイズは根拠を求めた。だがナツメの返答はルイズにとって更に意外な物で、

「聞いたから。『大いなる意思』に」

「……はあ？」

呆れてしまう。神に直接聞く事が出来るなど、どんな神官でも不可能な事だ。

「だから聞いたんだよ。大いなる意思に」

「……ふう。それで、あんたは神の声が聞こえるとも言っわけ？」

「聞こえるんじゃない。話が出るんだよ。それからそいつは神じゃない。エルフや亜人も勝手に崇めているだけで、実際は生物なん

だ。恐らく、人間も会話が可能だと思っ

だが、そこでルクシャナが注釈を入れる。

「それ、ちよつと違うわ」

「え、どこが？」

「人間も会話が出来るって所よ。正確には、一部の人間しか、会話はできないだろうって事」

「マジで？」

「マジよ。あなたが封印されてから十年も経ってるのよ？」 『マナ』
に關しても、いろいろ分かって来るに決まってるでしょう」

ルクシャナは少し呆れた風だった。封印とか十年とか、ルイズは突っ込みたくなるのを押し留めた。

「高濃度の『マナ』に晒され続けるのは危険よ。それで命を落としたりエルフもいるわ。他にも動物を連れて行く実験がされたけど、どうも耐性が有るのと無いのがあるみたいで、多分人間は『マナ』への耐性が……」

するとナツメは彼女の話の話を途中で遮る。

「なるほど。長くなりそうだから、その辺でいいよ。細かい部分は夜にでも聞かせて」

ルクシャナはニヤリと笑いながら、

「今夜は寝かさないから」

ナツメの目が泳いで、

「……やっぱり止めとく」

甘い言葉を言い合っている訳でもないのに、見ているこっちが表現のしようがない恥ずかしさを感じる。そんな関係が少し良いな、とルイズは思ったのだが、才人は違ったようで「モゲロ」と呟いた。するとナツメは苦笑しながら脱線した話を引き戻し、

「とりあえずこつち目的は、将来二度と、虚無が復活出来ない状態にする事なんだ。で、君にはそれに協力して欲しい」

「ちよ、ちよつと待って……」

神を否定する等しい行為。だがそれをしなければ、精霊の住む環境が圧迫され、将来的に系統魔法にもコモンマジックにすらも影響が出る。

「私に何をしろって言うの？ もし私が虚無を使えたとしても、『マナ』を消してしまうんでしょう？」

「君一人が使った所で、環境に影響はないだろう。問題なのは担い手が増える事なんだよ。それに他の担い手がどこに居るか分からない。敵対せず、すんなりこの話を受け入れないかもしれない。ルイズにして欲しい事は、そのための保険を作る事」

魔法の才能が皆無だと言われていた自分の系統が虚無。ゼロと馬鹿

にされ続けて居た自分が伝説の力を……。そして自分の力を必要としているのは、始祖ブリミルの敵とされる悪魔。名誉と不名誉を同時に……。

「まあ、今すぐ決めなくていいよ。これから戦争で、次に会うのは何ヶ月か後になるだろうし。ゆっくり考えると良い」

「待つて！ トリステインが危ないんでしょう？ 私も前線に連れてつて。虚無を使えば……」

これで負けてしまえば、トリステインは無くなる。姫様や家族が敵に蹂躪される。黙って見ていられない。自分に力が有るなら尚更。だが、ルクシャナはルイズの言葉を切り捨てる。

「止めておきなさい。今のあなたじゃ無理よ」

「やってみなくちゃ……」

「無理。というか駄目。今更作戦の変更なんて出来る訳ないでしょう？ それに、虚無に目覚めた所で、すぐに使いこなせるとは思えないわ」

「……それで負けたら……全部終わりじゃない」

するとナツメは面倒くさそうに言った。

「なんでそう、悲観的になるかな……」

「当たり前でしょ！？ 私の住む国が危険に晒されてるのよ？ それなのに……何もせずに、私だけ安全な所に居るなんて……」

「危険だよ。恐らく君は、どこに居ても危険な立場にある」

才人が息を呑む音が聞こえる。ナツメはだるそうに頭を掻きながら、

「あー、これ言つつもり無かつたんだけどな……」

などため息をつきながら、

「今回の事で、ガリアが絡んでるかもしれない」

「ガリアが？」

「いやね、ガリアの王族を勝手に連れてったのに、何も言っ来ないんだ。おかしいでしょ？」

するとルクシヤナは、

「ナツメ、それはちょっと……」

本当に聞かれない話なようで、彼が言つのを止める。小声で何かを言い合っている。「……上層部が……」「でも、あの子は……」

そして、

「ガリアって裏の面がかなり充実してるらしいからさ、油断できないんだよ。連中が虚無の事を知らない保証もないし、この国に居たとしても暗殺者か、浚いに来る連中も居るかもしれない。護衛をつける事になるけど、それでも安心は出来ない」

大国が自分の力を利用してようと動いているかもしれない。規模が大きすぎて、ピンと来ない。

「トリスティンもだ。アンリエッタ姫の考えは知らないが、少なくとも宮廷貴族は駄目だ。知ってるだろう？」

血迷った宮廷貴族はアンリエッタを追い出してしまった。そして反魔王派が多い。

そんな所に虚無の使い手が現れば？

虚無を旗印に、内部分裂なんて事になれば目も当てられない。利用されるだけの駒にされ、使い潰される。

「……………」

「それに才人も」

才人は「おれも？」と。

「虚無の使い魔になってしまった以上、訓練は積んでおいた方が良くい。というかやれ。やって下さい。ルイズが敵に捕まるなんて事になったら嫌だろう？」

ルイズはそれを聞いて才人の反応が気になった。謝ったとはいえ、酷い事を言った事実は消せない。だが彼は当然のように、

「ああ、細かい事は分からないけど、やるよ」

「才人……あなた、元の世界に帰る方法は……」

「その前に死んだら元も子もないじゃん。おれだって無関係じゃないんだろ？　なんか妙な力も手に入れちゃったし」

「何でそんなにお人好しなのよ……私の傍に居たって……」

後ろ向きな事しか言えない。

「打算とか駆け引きとかじゃなくて、おれがそうしたいからするんだ。虚無がどうした。異端がどうした。そんな事で離れるぐらいなら、最初っからお前みたいな奴の味方なんかしねえよ」

胸の中がじわりと温かくなった。目が熱い。少しでも気を緩めたら泣いてしまいそうで、結んだ唇がむずむずと動く。泣くまいと歯を食いしばりやり過ごすと、声を絞り出して、

「本当………バカね……」

と感動的な雰囲気になってきたのにルクシャナは、

「あなたって、本当に面倒な性格してるわね。素直に嬉しいって言えば良いじゃない」

とぶち壊した。「うっさいわ！　バカエルフ！」とルイズは叫ぶ。ナツメはため息をついた。「変わってない」と呟いて、

「何でも正直に言えば良いって物でもないでしょ」

とルクシャナに注意した。

「じゃあ私もルイズみたいに、ツンデレにしとく？　ちなみにツン

が3、デレが7。最初のうちは蛮人と罵りながら……」

「……またその手の本増えたの？ 一体どこから仕入れてくるんだ……」

そしてルクシヤナは頬を染めて照れ臭そうに、

「お、おにいちゃんの事なんか、なんとも思っていないんだから！」

「はいはい。おにいちゃんは大好きだよ」

「そしておにいちゃんは、そのいきり立つ肉棒をわたしの……」

「急に官能小説になった！」

「因みに実妹じつまい」

「もう黙れ！」

才人とルイズはもう、笑うばかりだった。二人はこれから戦争に行くとは思えないほど明るい。ルイズはそれを見て、

「あんた達、ほんと仲良いわね」

「うん！ おにいちゃんだいすき！」

「いい加減ネタから離れる！」

ルクシヤナは慌てるナツメが可笑しいようで、彼が根負けするまで

止めようとしな。ルイズとオ人も面白かったので止めなかった。

魔王の皮を被った小心者

「ふう、という風。」

大陸の絶壁から下の世界を見下ろす。

眼下は、これからの見通しすら曇らせてしまいそうな厚い雲で覆われている。

平時であれば、雲のコントラストでもぼうつと眺めながめて楽しむ事が出来るのに、取り巻く雰囲気それを許さない。

後ろから聞こえる音。

船への詰め込み作業完了確認の怒号。

整列した軍勢が移動する地響き。

人が死ぬ前の音は、気分を暗く濁らせる。

「たく、人の気も知らないで……」

誰に向けた愚痴か、ナツメは誰にも聞こえないように小さく呟く。

内心は緊張感など欠片も無いのだが、先入観込みの白髪紅眼の鋭い容貌は、周囲にそれを感じさせない。

アルビオン南端に位置する軍港口サイスには、戦艦が所狭しと駐留していた。大型戦列艦が二十、中型が百、小型艇が二百、残りが兵と補給物資を運ぶガレオン船。総隻数、七百余り。

ナツメはそこから数キロメートル離れた、大陸の端で立っていた。

「……………」

常識から離れなければならぬ。人が死ぬ事に感情を動かしてはならない。殺す対象を人と思っではいけない。そもそも殺すまで止まらない人は人ではない。道徳観念は邪魔でしかない。

そんな自らも滅ぼすような戒めが、これから成す事においては必要

になる。

不安はもう消えた。

だが、それと闘志の方は別物。

何を言っても聞かない敵がいるから動かざるをえない。

だから戦いに行く。つまりは、

「めんどくせえ……」

彼にとって全てがこれに尽きた。教会の不始末をやらされているような物である。誰が好き^す好^{この}んでこんな詰まらない事するだろうか。猫嫌いが猫と戯れるほうが百倍はましであろう。

まあ、彼に原因が無かった訳ではないのだが、その時は完全に責任転嫁していた。

「ナツメ」

唐突に第三者の音がする。

振り返ると後ろに立っていたのはエルフの少女だった。風でたなびく金砂のような髪。切れ長の青い瞳に人間ではない、エルフの整った美しい顔。

ルクシャナだ。

いつもと違ってゆったりしたローブの下に、皮製の鎧を着ている。

「ん？ もう時間か？」

ルクシャナは首を振る。

「ううん、邪魔した？」

「いや、全然」

「そう」

そして彼女はナツメの横に立って、

「うわ、下は天気悪そうね。大丈夫なのかしら」

「夜までには良くなって欲しいね。これじゃ、コボルトの嗅覚が生かせない」

また、穴倉で暮らす亜人は基本的に夜目が利く。

夜の奇襲はコボルトが小型艇を操縦し、人間のメイジが攻撃するという物だった。敵が戦線を乱した所で、陸軍と空軍を合流させ、反撃に出る。

地の利はこちらにある。

空から攻める事が出来るということはそれだけこちらの攻撃が届き易く、敵からの攻撃が届き難いという事。

異種族の扱っ先住魔法もある。兵力差をひっくり返すにはこれだけでも十分だった。

加えて魔王がついている。かつて六千の兵を一人で壊滅に追い込んだ魔王が。それだけで兵の士気は上がる。

負けるはずの無い戦。少なくともナツメ自身、負けるつもりなんて更々無かったし、誰もがそう思っている。

ルクシヤナはポツリと言う。

「何も言わないのね」

ナツメは分からず聞き返す。

「何を？」

「私が戦争に行く事。あなたの事だから、ここに残れって言うかと思っただ。叔父さまも」

ルクシャナはビダーシャル、そして他のエルフ達と共に陸軍の方に加わる事になっていた。

「別に敵の真つ只中に飛び込む訳じゃないからね。それに、ビダーシャルさんがいいと言うのならいいんじゃないの？」

他のエルフ隊員は反対したが。

「恋人の事なのに、投げやりじゃない」

「仕方ないだろ。僕は君がどれだけ動けるかなんて、知らないんだから」

再会して三日目。十年の隔たりがあるのでナツメにルクシャナの実力の程が分かる筈もない。

安全な場所に残って欲しいと思う反面、付いてきて欲しいとも思う。彼女が危険に晒されないという安心感と、傍にいてくれるという安心感。

迷うぐらいなら彼女が決めた事に反論する気にはならない。

「分からない事ばかり……」

恐らくはナツメが封印されていた十年分の事。

「寝てたからね。これからたくさん話してくれればいいぞ」

「そうね」

そしてルクシャナは隣に座り込むと、どこか遠くを見るような目で、

「あのね、サイト見てて思ったの。ナツメは元の世界に帰りたいと思わなかった？」

「凄いな更な質問だな……」

「……そのね、今も思ったりする事があるんじゃないかって……」

少し不安そうな声に、ナツメははっきりと答えた。

「全然。最初の三年ぐらいは思ってたけど」

そしておどけて、

「どうせなら君も連れて帰りたい。やっぱりさ、エルフは砂漠や森に居るだけじゃダメなんだよ。もっとスーパーとかデパートに出現してさ。百貨店で買い物した後に、ファミレスでご飯食べたり。駄菓子屋とかで、変な物見つけてはしゃぐ君が、ものすごく見たい」

「良く分からないけど、面白そうね……」

ナツメは軽妙な返しを期待していたのに、肩透かしを食らう。

「何だ、今日は悪乗りしないんだな」

「気分じゃないのよ」

「もしかして、僕が死ぬかもしれないとか思ったりしない？」

ルクシャナはそのまま黙った。ナツメはそれを肯定と取る。

「死亡旗^{フラグ}って言葉知ってる？」

ルクシャナは首を振る。

「地球の日本という国で生まれた、人が死ぬ前の前兆を指す事なんだけど、僕はもう既に、その旗を折った。だから死なない」

「……………はあ？」

きよとんとした顔で間抜けな声を出す。ナツメは自信満々で続けた。

「物語で戦争に行く人は、故郷とか安全な場所に恋人を残すと、大抵が死んでしまうものなんだ。危険な前線に君を連れて行くことでこのフラグはへし折られる。特に注意すべきは『俺、この戦争終わったら結婚するんだ』という台詞。恐らくキングオブ死亡フラグ、と言われるこの台詞を言ってしまうえば、死神がやって来て、首を刈り取るぐらいの事にはなりかねない」

今言った『』はカウントしない。それに対してルクシャナは、

「……………え？ 帰ったら結婚するんじゃないの？」

と真顔で聞き返した。

「は？ け、け、血痕？ 結婚ですか？ あの、男女が一緒になる」といつ

「それ以外に何かあるのよ」

誤変換をしてしまう程度に、ナツメはしどろもどろになりながら言う。

「いや……その……そう！ 言葉のあやだって！ 建前だから！ 作法みたいなものだから！」

ルクシヤナが余りに真剣な顔をして言うものだから、僅かに顔を赤くして。こういう事まで直球で言うから困る。

それを察したのか、ルクシヤナは悪戯っぽく笑って、

「そう言えば、婚約もしてなかったわね」

だが、ナツメは譲らずに、

「戦争前の婚約も死亡フラグの一つだからね？ そういっなのは全部終わってから」

「じゃあ全部終わっ……」

咄嗟にルクシヤナの口を塞ぐ。ナツメはほっと息をついた。

「自分でフラグ立ててどうする……」

手を離す。ナツメはそのまま彼女の隣に座り込んだ。

「妙なところで照れ屋なんだから……」

ルクシヤナはナツメの肩に頭を乗せる。いつかそうしたように寄り添った。それがとても幸せな気分させる。自分は封印されていたのに、寝ていて時間が飛んでいる筈なのに、何故だか本当に久しぶりな気がして……。

「終わったらね」

「ん？」

「終わったらやりたい事、行きたい所、いっぱいあるの」

「ああ、そうだな」

「古代遺跡の文献とか出てきてね、凄いのよ？ 本物なら六千年以前の文明の物かもしれない」

「へえ、凄いな。見てみたいな」

するとルクシヤナは小さく頷き、

「うん。見てみたい。一緒に。だからね、ナツメ、あなたに呪いの言葉を送っておくわ」

「呪い？ 魔法じゃなくて？」

そして、

「絶対に死んだら駄目。どれだけ殺しても、何万人犠牲にしても、私はあなたを受け入れるから。死んで戻って来なくて、私の十年無駄にしたら、これから生きていく時間をつまらない物にしたら、絶

対に許さない。死んで神格化されても、私だけは呪い続けるわ。結婚なんて絶対にしてやらない」

そんな呪い言を優しく微笑みながら言った。

下らない死亡フラグなんかよりもずっと強い呪い。それが心に打ち込まれた気がした。

「そっか。それは嫌だな」

自分で言っけて恥ずかしくないのか、とふざける気にはならなかった。

「君も無茶はしないでくれよ？ ビダーシャルさん付いてるから、心配して無いけど。僕だって君が死んだら……いや、止めようこんな話」

「うん」とルクシャナは頷いて、そのまま目を閉じる。ナツメとルクシャナは時間ギリギリまで寄り添っていた。

ロサイスの北にある平原には、全軍の2/3以上の兵が集まっていた。

六万余り。どこそのアイドルなんかのライブよりも遥かに多い。

竜が描かれているアルビオンの国旗が所々掲げられていた。

ナツメは慣れない演説を、魔王と言う着ぐるみを心に被せる事で行なっていた。

「地上の連中は諸君を妬んでいるだけだ！ 自分で作り出す事をせず、唯奪い取るだけの取るに足らぬ連中だ！ そんな下

らない奴らに我等は負けない！ 空に住む我が友人達よ！ アルビオンは勝利する！」

殺戮を助長する言葉を全力で吐き出した。これによって彼らの良心は麻痺し、死をも恐れぬ戦士となる。

いいじゃないか、どうせ、放って置けばもつとたくさんの人が死ぬのだから。ここで殺しておけば、もう馬鹿なことを考える人間もいなくなる。そう自分に言い聞かせる。

「だが勝利は、既に決まっている事。大切なのは生き残る事だ！

生き残った方が勝者！ 死は敗北だ！ 生きて再びこの地を踏め！

幸せを噛み締める！」

言い終わると、平原は凄まじい熱気に包まれた。

人間や、馬鹿騒ぎを余りやらない翼人までしきりに何かを叫び、コボルトや獣人、オグルは咆哮を上げる。

それらが混ざり、轟音となる。

緊張はしても悪い気はしなかった。

それらが全て悪意ではなく、歓迎の声と分かっていたから。

たとえハリボテ魔王の威光に集まっているのだとしても、慕われている事には変わりなかったから。

演説が終わり、自分が乗る船に移動する途中で、

「君の演技も中々だな」

ウェールズはナツメと並んで歩き出す。

下の者が聞いたなら、目を回すような事を平然と言う。

「君？も？つてなんだよ。お前？も？そうなのか？」

「誰が平和を乱す行為を奨励するような事、好んで言うと思う？
せつかくこの国も、勢いに乗ってきたって言うのに」

「その割には、愚痴も結構多かつた気がするけど」

「当然だろう？ 全く、王様にだけはなるもんじゃない。恋人には滅多に会えない、毎日山のような書類仕事がある、嫌な貴族にも笑顔を振りまかなきゃならないし。何より、人の命を天秤にかけなきゃならない」

最後のそれを思っている人が、上にどれ程いるだろうか。

数字の上で犠牲が少なければ良い。

戦争とはそういう物。

小さい頃から王党派と貴族派の争いを見てきたウェールズは、理解しているものの簡単に割り切れる訳でもないらしい。

「簡単に見切りをつけるより、悩みながら進む方が好感持てるけどね」

「そう言ってくれると助かる。僕もまだまだだな。敵に切り込むのは君だつてのに」

「げ、今それ言うなよ。せつかく虚勢で塗り固めて来たのに、崩れるだろうが」

「虚勢じゃだめなんじゃ……」

不意に両者は笑い出す。

「何だ、お互い小心者だな」

「君ほどじゃないさ」

するとウェールズは言った。

「帰ったら酒盛りだ。キツイやつをたくさん飲ませてやる」

「お前も嫌がらせするのか……」

「友情の証と言って欲しいね」

「……自分で言っけて恥ずかしくねえの？」

しかしウェールズはそんな素振りも見せず、

「何が？」

と。アルビオン人はこういった事は、はっきりという物だったかと、ナツメは記憶を掘り起こした。

「さて、僕はこっちだから。君がこっちの損害を少なくしてくれるよう祈ってるよ」

「そこは？君の武運を？だろうが」

「必要だったかい？」

「いや、やっぱいい。気持ち悪いし」

「そうか」と短く言って、ウェールズは船の中に入り、視界から消えた。

夜もふけた頃。

ラグドリアン湖の沿岸は、既に荒れ果てた戦場となっていた。

土メイジによって掘り起こされた溝は、魚の骨のように張り巡らされ水が張られている。森は焼き払われ、平原は大型亜人や、人間が踏み荒らした後で、草がひっくり返されたように茶色くなっていた。

特に、鼻を突く血の匂い。

死んだ人間、トロールやオークなどの亜人、撃墜されて落ちてくる竜などの幻獣。

最初の頃に死んだ者は、そろそろ腐敗で変色を始めている。

ディアブロ・コンキスタが進軍を開始して三日目の夜。

先遣の部隊が到着し、援軍が今夜来る事を伝えると、トリステインの陣営はとりあえず安堵のため息をついた。

しかし、被害は既に千を超える死者。四千未満の怪我人で、そろそろ危険領域に入り始めていた。

アンドバリの指輪で操られていたオグルは、ラグドリアンの水精霊により解呪され、魔王の名の下保護されている。争いを好まないオグルなのだが、助けられたとあって、戦況が思わしくなかったトリステイン側について共闘、大型亜人の大軍はなんとか撃破した。

だが、物量はやはり敵側の方が大きい。

次に控えているのは人間の軍勢。

トリステイン陣営が劣勢なのは明らかだった。

数時間後。

深夜。

夜行性の動物が活発に動き始める時間帯。

ディアブロ・コンキスタ陣営の竜騎士は巡回で空を飛んでいた。

地上は焚き火やたいまつが、上空は雲がかかっていたがその隙間から星が見える。

夜は両軍ともまとりに動く事が出来ない。

暗くて視界が鮮明にならないから。月明かりだけでは心もとない。

この時間帯に攻めて来る奴はいない。

だから兵達は明日の戦いに備えて休んでいる。

巡回の竜騎士は、自らが駆る竜の上から空を見上げた。

「
」

曇天が切れ、そこから二つの月が覗く。赤と白。降り注ぐ月光を背にして、白い髪と赤い目を持つ悪魔がそこに居た。黒い戦装束は夜に溶け込み、頭の白がやけに強調されている。

知らせなければ。と竜の手綱を握り、旋回しようとした。

「
！」

命乞いの情も、逃げ出す隙も与えられなかった。

手綱に力を入れる前に、竜騎士は首を切断され、絶命した。

闇に紛れ、急降下してくる大量の小型艇。

手当たり次第に炎弾が放たれ、敵陣営のキャンプを容赦なく焼き払う。

何が起きたかも分からずに、唯、焼かれる時の悲鳴が上がる。

「奇襲ー！ 奇襲ー！」という声上がる。

だが、それも余り意味を成さない。

目が暗闇に慣れてくるとは言っても、ディアブロコンキスタには亜人よりも夜目が利く者がいない。亜人は操っているだけで、決して協力？している訳ではないのだ。テントや毛布に付いた火が辺りを照らし始めた頃、漸く事態を理解する事になる。

気が付いたそこは地獄になっていた。

黒焦げになって縮んでしまった者、中途半端に焼かれて呻く者がほとんどで、無傷の者は少なかった。

赤く、熱い世界。

雲は薄く雨が降る気配も無い。

火の勢いは増し、周囲を焼き尽くした。

強襲が成功に終わり、夜が明ける頃。

敵陣営では叩き起こされた元アルビオン貴族派の司令官、現ディアブロ・コンキスタ幹部は、覚束無い思考を無理矢理働かせて、報告を聞かされていた。

「夜襲だと！？ 被害は？」

「はっ！ 確認中ではありますが、恐らく七百以上の死者、負傷者は千五百程かと」

そのキャンプには三千程度の兵が駐留していた。その大半が反撃もさせてもらえずにやられた。イライラしながらも、冷静を装い言う。

「その短い時間でだ！？ 冗談じゃない！ 反撃、いや、撤退はしたのか？」

「現在、生存者はこの陣営に向かっております」

くそつ、王家の者どもめ、どこまで私に恥を掻かせるつもりだ！と胸中で罵った。十五年前の王党派と貴族派の争いで領地を取り上げられ、未だ根に持っている人達の一人。国から出て行くとき、大量の金品を持ち逃げした事から、彼の首には賞金が懸けられていたりもする。

そんな五十過ぎ男は、アルビオン王家に、悪魔に復讐するためにデアアプロ・コンキスタに参加していた。まあ略奪やら横領やらで潤うから、それだけでもないのだが。

「尻の青いクソガキが！調子に乗るなよ」

恐らくウェールズの事なのだろう。悪態をついた次の瞬間、彼の居た天幕は暴風に吹き飛ばされた。

荒れ狂う風に、目も開けられず顔を腕で覆う。暴風が治まると、彼は目を開けて前を見た。

「な、貴様は」

白頭の悪魔は凍りつくような目で見ていた。彼を確認すると手を振り上げる。同時に風の刃が放たれて、その命は消えた。そして悪魔は暗闇の中、咆哮を上げる。

「貴様らの指揮官はぶっ殺したぞ！！死にたくなかったら投降しろ！」

復讐の道は呆気なく絶たれ、デアアプロ・コンキスタの幹部が一人、また減った。

因みに魔王が討ち取った場合、賞金は出ない。

夜明け。

東の空が白んできた頃。

漸く正常に機能しだしたディアブロ・コンキスタ勢は、数時間前の襲撃が伝わっている筈なのに、進軍を開始してきた。

深夜の襲撃が終わり小休止を取っていたナツメは、その様子を戦列艦の甲板から眺めていた。

「突っ込んできたね」

「突っ込んできたな」

ウェールズが言うのに対してナツメは相槌を打つ。

敵の数は約一万ほど。それでも疲弊したトリスティン軍には十分過ぎる。

敵が理性的であれば、戦闘が始まっても魔王は姿を見せず待機。『潜在的脅威』として戦術を制限させる事ができるのだが、

「作戦通りになるなあ……はあ、まともに戦ってくれちゃって……」

「まあ、これも予想通りだったって事さ」

「全く、人事みたいに言いやがって」

ナツメは特大のため息をつく。凄まじい攻撃力については先日襲撃で、敵側も把握している筈なのに。

たった一人で、二万人の兵の前に現れ、演説中の幹部とその護衛、五十人ほどを数十秒で皆殺しにした。にもかかわらず、地上では警戒などまるでされていない。

つまり、力押しで行けという事。

昔のように竜巻で地面を掃除、という訳にはいかない。混戦になっているし、巨大竜巻はそう何発も作れない。魔法生物兵器とか言う不安要素もある事だから、力は温存しておきたい。

「それじゃ、行って来るわ」

そう言って、再び船から降りて地上に向かった。

目標はアルビオンの人間と亜人の混成部隊が、敵と交戦している地点。

まだ衝突はしていない。

だが両者とも、ぶつかれば地面が揺れそうなほど凄まじい勢いで突進している。

両者の間、敵側寄りに着地地点を定めた。

風を操る事で風圧と重圧を調節する。

着地の衝撃を圧縮した空気の膜で殺し、地面に足がつくと同時に、

目の前にいた敵兵を力任せに殴りつけた。

いつもの気軽さなど微塵もない。唯、殺気の塊となる。渦巻く突風。唯、殴るためだけの硬い杖を手に、黒い弾丸が疾走する。

魔王と対峙しても、敵は物怖じするどころか喜んで突っ込んでくる。

「くたばれ！ 悪魔が！」

「悪魔野郎を殺せ！」

「神の威光を取り戻すのだ！」

それを振り払い、突き、時に蹴り飛ばす。なぎ払われた人間は剛速球のように飛びながら、空中で^{つし}拉げられる。

混戦であるにもかかわらず、大量の魔法と矢が飛んできた。

「！」

後方へ飛んだ。魔王がいた場所は魔法と矢で埋め尽くされ、同士討ちが起こる。

「怯んだぞ！ 叩け！」

魔王が叫ぶと、後ろで駆けつけたメイジと精霊魔法の使い手達が一斉に魔法を唱え始める。

炎弾と土の塊が敵に降り注ぎ、敵を焼いていく。

「どうした！ 貴様らの望んだ悪魔はここだ！ 殺しに来てみる！」

ナツメは魔王の皮を被った。容赦の無い敵に容赦する必要も無い。自分の本当に譲れない一線を、無許可土足で踏み超えようとする奴らに情は必要ない。

俺の物は俺の物、お前の物はお前の物。

こっちはそれで満足なのに、向こうが満足しない。

だから、こんな馬鹿げた事に付き合う必要なんて無い。

魔王の雄たけびに反応して、矢と魔法が飛んでくる。

大量の木の矢、それに続いて氷の矢、炎の弾、土の弾丸。

魔王は大気の膜をつむぎ上げ、上から下に振り下ろした。

矢と弾は進行方向を手前にずらされ、敵側に着弾、更に同士討ちが起こった。

圧倒的。

味方から鼓膜が破れそうなほどの歓声が上がる。

どうやらその場に居た兵士は、狂信というレベルには遠かったよう

で、顔から戦意が失われていく。

まだ魔王は掠り傷一つ負っていない。

それでなくてもこの数時間の内に、多大な被害を被っているのだ。あっさりと決着はついた。

後は……。

魔王はそれを見るなり、地面を蹴って飛んだ。

一気に矢も魔法も届かない高度まで上がる。

敵軍を見下ろし、指揮官を探した。

最前線からそう遠くない距離、豪華なマントと鎧で身を固めた騎士が居た。

貴族か？

一番豪華な物を身に纏っている事から指揮官だと当たりをつける。ゲルマニア製のゴテゴテした奴だなあ、と関係ない事を考えながら、それを標的定めると、魔王は弾丸のように落ちて行った。

コボルトの神木杖で殴り潰そうとする。

だが恐怖の余り悲鳴を上げた指揮官は身をかがめて、馬から落ちた。

「ぎゃああああ！？ 痛い痛い痛い！ やられた！ ひいひいひい、痛いぞ〜〜〜！」

どうやら杖が掠^{かす}ったらしい。情け無い声を上げて転げまわっていた。

「何言ってるんだ、大した傷じゃないだろ」

魔王は男の腰に差された杖を取り上げ、押し折った。

「大した傷ではないだと！？ 血が、血が出ているではないか！ こんなにたくさん！ 誰か、誰か医者^{いしや}の所へ運ばんか！ わしを囲め！ わしを守れ！ この悪魔を一步たりとも近づけるな！」

「来たらぶち殺すぞ！」

魔王は怒声を上げる。周囲の敵兵は動かなくなった。

「は、は、はは背信だぞ！ これは！ 貴様ら始祖に仕える神官を見捨てて、^{ヴァルハラ}神原に行けると思っなよ！」

どうやらこの男は神官のようで胸当てには、始祖ブリミルが両手を掲げた形のシンボルが彫刻されていた。

「^{ヴァルハラ}神原ね。とりあえず良い所なんだろうな。帰ってきた人居ないし」

魔王は皮肉りながら指揮官を足蹴にすると、

「投降しろ。そうすれば、命までは奪わない」

処遇はどうか分からないが。だがこの指揮官は、

「だ、誰が悪魔なんぞに」

言いかけの所で魔王は指揮官を蹴り飛ばした。きりもみして地面を転がっていった。生きてはいるだろう。そして副官に優しく言った。

「投降、してくれる？」

副官は全力で首を縦に振った。

「戦闘中止ー！ 総員、杖を捨てて投降せよ！」

恐らく、軍の実質的指揮官はこの副官なのだろう。ディアブロ・コンキスタの幹部は元宗教庁保守派が多い。さつき蹴り飛ばした男は政治家で、軍人ではないから、あんな情けない男が……人の事言えないけれど。

副官が幾度か投降する旨を伝えると、兵達は杖を捨て始めた。信仰レベルが低めだった一万の兵は、あっさりと降伏を認めてしまった。

その頃。

ガリアにあるアツテムト領の城の地下室で。

ディアブロ・コンキスタの本拠地であるこの城は、現在、ほとんど人が出払っていた。

地下室はそれなりに広がった。

光を発するマジックアイテムで照らされ、大きなテーブルの上に所狭しと置かれているピーカーや試験管が中身が良く見える。

何かが蠢蠢いていた。

「それが例の物か？」

ディアブロ・コンキスタ首領、ミケーレ・ディーオは、興味深そうにそれを覗き込んだ。

「ちょっと、まだ未完成なんだから触れるな！」

その秘書という事になっている女、シエフィールドはミケーレを制す。

「この矮小な物が、決戦兵器だと？」

「まだ培養段階よ。これから成長させて行けば、間違いなくハルケギニア、いえ、世界を飲み込む化け物になるでしょうね」

「おいおい、人間が住む世界を、残しておいてくれなければ意味無いだろう」

「だからこれには、弱点を持たせてある。悪魔を殺した後で始末できるようにね」

そのシェフィールドの言葉に、ミケールはくっくくと笑いを堪えながら言う。

「虚無とは素晴らしいな！ ええ？ ミヨズニトニルンよ！ これを後世に残して下さった始祖は偉大だな！」

「耳障りよ。馴れ馴れしくしないで頂戴」

シェフィールドは苦々し気に言った。そして、テーブルの上に置いてある、生肉が一欠入ったシャーレを手前に引き寄せる。

蠢く物が入った試験管の内一つを取ると、中身をシャーレに移した。すると蠢く物は、その肉に食らい付き、飲み込んでしまった。

ミケールは毒づく。

「不気味だな。美しくない」

「だったらあなたが作りなさい。造形美なんて、一々気にしてられないの」

「で、この生き物は何と名づける？」

その問いにシエフィールドは少し考える。

「お前が付けないのなら、私が勝手につけるぞ？」

「そうね……勝手になさい」

そしてミケールはその蠢く物を見ながら言った。

「そうだな……食い方が汚いから、ベルゼブブなんてどうだろうか？ いや、そうしよう。こいつの名前はベルゼブブだ！ 悪魔も食い散らかす暴食魔だ！」

そして高笑いを上げた。

魔王の皮を被った小心者（後書き）

はいはい、相変わらず妄想気持ち悪いね。自覚してますよ。

全く、戦いが書きにくい。部屋の中でドタバタしながら、時に外にジョギングに行ったりして体を動かしながら考えてます。

特に山場とか無い、敵がむかつくだけの話

開戦四日目、朝。

明け方、湖から発せられていた霧は気温の上昇と共に消えた頃。トリストインの天幕は衝撃に包まれた。

「降伏だど!? 被害は？」

グラモン元帥は椅子から乱暴に立ち上がりながら、驚きの声を上げた。伝令の兵士は淀みなく答える。

「はっ、一万の内、死者二百名、負傷者八百名。指揮官共々、捕虜にしたとの事です。情報を引き出した後、追って伝えると」

「……信じられぬ……これほどまでとは……いや、ある意味当然の結果なのか……」

六千の相手を一人でするような化け物。

災害クラスの風を使う化け物。

副官達にも喜びの色が浮かぶ。

「早速全軍に通達しましょう!」

「おお! これで士気も上がる。我らにも光明が見え始めましたな!」

その声を聞きながら、グラモン元帥はゆっくりと席に座る。伝令兵はテントから出て行く

そして入れ違いに別の伝令兵が、

「アルビオン側の使者が謁見を求めております。いかが致しまし
う?。」

グラモン元帥は「通せ」と短く一言。だが、伝令兵は躊躇いがちに
なりつつ言つ。

「ですが、少々問題がありまして……その、」

「申してみよ」

「……使者にエルフがいるのです」

エルフ。砂漠の悪魔。相手をするには、その十倍の数を持って来な
ければならない。確かにアルビオンにもエルフはいるが、王室に二
人いるだけで戦力になるものではない。まさか砂漠の……。
グラモン元帥は再び、「通せ」と短く。

「は?」

あっさりと通ると思わなかったのだらう、伝令の兵士はしばし呆然
とする。

「通せといったのだ。聞こえんのか。さっさとしろ」

確かに危機は脱したが、ここから巻き返さなければならぬ。後ろ
に控えている敵はまだ六万。そしておそらく敵も援軍を送ってくる
だらう。気を緩めるには早過ぎる。

「……ですがその、エルフだけではなく、コボルトと獣人も」

「ええい！ もう人種はよい！ 何でもよい！ さっさと通せ！」

グラモン元帥は雑念を振り払うかのように怒鳴った。「ひいっ！」と伝令兵は縮み上がり、慌てて外へ出て行った。暫くすると天幕に人が入ってくる。

人間、エルフ、コボルト、獣人が一人ずつ四人。

普通の人間、尖った耳の人、犬頭、狼頭。

グラモン元帥は息を呑む。

確かに、この光景は異様だった。だがそれ以上にエルフだ。

長い間戦いに身を置いていた事があるとは言え、エルフとこんなにも間近で対峙した事など、未だかつて経験した事が無かった。

茶色いローブを着た、長身のエルフ。

長い金色の髪は腰まで垂れていて美しい、線の細い顔立ち。

四人居た大使の内、そのエルフからは言い様の無い圧迫感が放たれていた。

静かに佇んでこちらを見据えている視線は冷たい。

かといって、戦う前の戦士のような血走った目をしている訳でもない。

ただ、見つめた対象を緊張させる視線。

すると、グラモン元帥の様子に気付いた人間の使者が口を開く。

「ビダーシャル殿、彼らは味方なのですから、そう殺気立たなくて
も……」

「む、そのように見えたか？」

「ええ」

そして人間の使者がまず前に出て、

「アルビオン王立混成陸軍総司令補佐官、ヘンリ・ボウウッドであります」

「ネフテス老評議会議員、ビダーシャルだ」

「コボルト族族長、ジャツコス」

「ライカン族族長、ブランシエル」

コボルトと獣人の態度が良いとは言えない。
無理も無い。

トリスティンの貴族は、大半が悪魔を嫌っている節がある。反魔王派まで存在している事から、その事は明らかだった。魔王を神格化までしているコボルトにとっては受け入れがたい事だ。

だが、今はあくまで共闘している。彼らは合理的に感情を抑え付け、協力関係を結ぼうとしている。

グラモン元帥達は彼らと同様に名乗ると、参謀長ウインプフェンは事務的に言った。

「早速ですが、軍議に移りましょう」

魔王の出現、そして一万の兵の損失。

瞬く間に降伏させたとあつては、敵も慎重にならざるをえないだろう。

状況を覆すにはまたとない機会だった。使者が天幕内にある長机の空いた席に座ると、ウインプフェンは始めた。

「現在敵は、国境を跨いだ状態で停滞しています」

卓上に広げられた地図を指差しながら言った。

「魔王が現れたとなれば、敵は残りの援軍を待ち、それから進軍を開始するでしょう」

ディアブロ・コンキスタの物資は多い。もはや、本拠地のアツテム

ト領を中心にして一つの国ぐらいの力はある。
今回の侵攻はトリステインの力を上回ったという、上層部の判断も
一因していた。

「判明しているもので、期限は約三週間。それまでに我々は後ろに
控えている六万を、無力化、または討ち滅ぼさねばなりません」

それにビダーシャルは唸るように言った。

「難しいな。六万か……」

それにグラモン元帥は、

「どづい事かね？」

「先ほどの戦いのように、戦意を折るのは難しいという事だ。とな
れば……」

ビダーシャルは苦々しげな表情を浮かべる。

「アルビオン側の情報によりますと、厄介な事にこの六万は、本当
に狂っているらしい。恐らく今度こそ、最後の一兵までが死ぬまで
止まらぬ事でしょう」

ポーウッドが言った。その情報にトリステイン側の人間に動揺が走
る。グラモン元帥は眉間に皺を寄せ、言った。

「……うつむ、となると正攻法では被害が大きくなるな……」

ウィンプフェンも頷く。

「ええ。平原である以上、戦術も限られてきます。また水精霊に協力を仰ぐか、もしくは空から戦艦で叩くか」

ポーウッドは反論する。

「空の戦力は敵側も侮りがたい。しばらく、陸に割く余裕は無いでしょうな」

「ではどうするのです?」

するとビダーシャルは、

「魔王が囷になる。敵の背後にナツメを配置し、注意が向かせた所を後ろから叩く。こんな物か……」

自分の作戦を嫌悪するように言った。グラモン元帥はそれに目を見開き、

「彼はそれを了承するのか?」

「恐らく彼も同じ事を考えているだろう。これならばこちらの被害は最小限、誘導して罠に誘い込めれば、根絶やしも可能だ。敵の理性的な指揮官の意見が通らなければ、だがな」

すると獣人のブランシエルは意気込んだように、

「ナツメ様が動くのならば、我らはそれに従うまでだ。魔王が体を張るというのに、我ら獣人が共に戦わぬ道理は無い」

そしてグラモン元帥を除いたトリスティンの者達数名は、

「流石魔王だ！ 一人で大軍を相手にするだけの事はある」

「いやあ、これでこの国の危機は去ったも同然ですな！」

などと悠長な事を言い出した。ビダーシャルは吐息を付く。

「まだ懸念すべき事がある。敵は魔法生物兵器なるものを所持している。それが何か分からない以上、油断するのは危険だ」

するとウィンプフェンが言った。

「ご冗談を。魔王以上の化け物が存在するとしたら、それこそ伝説の巨大竜ぐらいの物です」

『化け物』。

ジャッコスとブランシエルはその言葉に反応して睨みつける。ポーウッドは不快さを表に出し、ビダーシャルは冷えた目で見ていた。

「ウィンプフェン、今のは失言だ」

グラモン元帥も睨むように言った。ウィンプフェンは「申し訳ないと短く咳払いをして、

「強さが化け物じみている、と言おうとしたのです。俄仕込みのゴ
ーレムなど問題ないでしょう？」

ビダーシャルは強い口調、厳しいまなざしでグラモン元帥に告げた。

「その兵器がゴーレムと決まった訳ではない。所在も掴めない。い

くら魔王の強さが抜きん出ていたとしても、その場に居合わせていなければどうなる。我らエルフも今回限りは、出来る範囲での協力は惜しむつもりは無いが、当事者は貴様達人間だろう。そう都合よく彼を使えるとは思わぬ事だ」

天幕内の空気が凍りついた。グラモン元帥はそれに対して、すぐに答えず、深い息を吐くと、

「その通りだ……。とにかく今は、具体的な動きを決めていこう。敵は待つてくれぬ」

軍議は続いた。

ビダーシャル達が出てきた所で、天幕の周りには人だかりが出来ていた。

砂漠の悪魔、エルフが味方に付いたという事でその姿を一目見ようというトリステインの兵士が集まっていたのだ。

ビダーシャルは他の使者達から別れる。

「あ、叔父さま」

声を発したのはエルフの少女、ルクシャナだった。その周りを囲むようにして護衛のエルフが立っている。

「作戦はどうなるの？」

いくら砂漠の悪魔だといっても、その美しい容姿は戦場に似つかわしくなかった。ルクシャナが女性ということもあり、トリステイン

兵の一部は厭らしい視線を向ける。

だが、ハルケギニアの風習に因る偏見ゆえかそれは本当にごく一部で、ほとんどが畏怖、恐怖といった視線だった。「あれが悪魔……」「美しい……しかしあれが……」。

「ああ、アルビオン陸軍が到着後、足並みを揃えたら、すぐにでも作戦開始となるだろう。一週間後といった所か」

ルクシャナの表情が曇る。

「って事は、やっぱりナツメが囿になるのね……」

ビダーシャルはポン、と彼女の頭に手を置いて言った。

「そう気を落とすな。ナツメと共に在ると決めたのだろう？ だからお前は戦場にも行く。奴の心が折れないように支えになると」

「うん」とルクシャナは小さく頷く。そして彼らはそこから移動を始める。護衛のエルフが周囲に目を光らせ、まるでちよつとした敵地に居るかのような光景である。エルフの彼らからすれば、味方になった訳ではない。ただ利害関係が一致しているから、一時的に協力しているに過ぎない。アルビオンとの関係は、また別になっているものの、彼らは人間と必要以上に馴れ合おうとは思っていないかった。

「そう言えば、ナツメは今どこに居るのかしら？」

とルクシャナはビダーシャルに言ったのだが、答えたのは護衛のエルフで、

「ナツメ様は現在『イーグル号』にて、捕縛した神官の尋問をしている所です」

「趣味悪いわね。魔法薬を使えば一発なのに……」

「あの方なりに、考えがあるのでは無いでしょうか？」

ルクシヤナは口元に手を当てて少し考える。そして、

「多分魔法薬の存在自体、忘れてるんじゃないかしら？ 妙な所で抜けてるから」

ビダーシャルも同意見なようで、

「だろうな。アイツは鋭いくせに、どうでもいい所は間抜けだからな」

そしてルクシヤナは急に元気な声になる。

「そうね、じゃあ午後はイーグル号に行きましょう！」

「駄目だ。これから魔法薬に関しては使いを遣ればいい。お前はこれから」

すると護衛たちは揃って言った。

「いいじゃないですか。ビダーシャル様」

「ナツメ様もお喜びになるでしょうに。部隊の打ち合わせでしたら、まだ時間があるのですから」

息の合った隊員達にビダーシャルは肩を竦めた。

「ナツメは深夜から今朝まで戦って疲れているだろうから、気を回したのだから。どうせ尋問は他の人間に任せて、自分は寝ているだろう。ルクシャナが行ってしまえば、休むものも休めない」

「叔父さままでナツメみたいな事言っ……」

「だが、事実だろうか？ 今日のところは控えておきなさい」

「でもでも、ちょっと顔見るぐらいなら」

子供のように駄々を捏ねるのだが、ビダーシャルがじっと見ると、

「分かりましたよ……けち」

膨れて渋々承知した。

午後になって『イーグル号』に設置された取調べ室では、件の神官くだんへの尋問が行なわれていた。

捕虜となった神官は、中年のやや太った男だった。

椅子の背もたれと手すりに、それぞれ体を縛り付けられながらも、厚かましい態度で欠伸をしていた。

「ナツメ様。尋問など他の者に任せて、お休みなって下さい！ こんな取るに足らぬ者の相手など！」

イーグル号の艦長は語気を強めて言った。ナツメは、

「いや、私は見てるだけだから。尋問はそっちの方に任せるから。しばらく経って、何も言わないようなら戻るし」

と讓歩案を提示する。「ですがあなたは昨日から……」と続けるのだが、

「大丈夫、大丈夫。体力だけは馬鹿みたいにあるから」

とかわす。実際の所は、ちょっと疲れている。だが情報を把握しておかないと安心できないので、こうして尋問に立ち会う事にした。

神官は薄笑いを浮かべて言った。

「悪魔に話すことなど無いわ。こんな事して唯で済むと思うな。いつか必ず」

先ほど、戦場での様相から見るに虚勢なのだろう。取調室にいた尋問担当の下士官と艦の兵長、ナツメと艦長は同じような印象を抱いた。

ナツメと艦長は部屋の隅にあった椅子に腰掛けると、「どうぞ、お構いなく」と始めるよう促した。

尋問官は、

「では、元宗教庁所属の枢機卿殿、簡単な事から聞こう」

と開始した。

「ミケール・ディーオはどこに居る？」

「は、知らんな！ 重要な情報など知らされておらん！ いい加減縄を解いてくれんかね」

神官は尋問官に唾を吐き付けた。だが尋問官は眉一つ動かさずに、

「兵長、やれ」

と。すると兵長は短く返事をして、神官の右手の小指に手をかけた。ポキ。

その音と同時に、耳を手で覆いたくなるような悲鳴が部屋の中に鳴り響いた。

「次はどの指がいいかね？ ああ、足の指にしようか」

抑揚の無い声で言う尋問官。神官は頭をがんと振り、錯乱しながら泣き出した。

「分かった！ 言う、何でも言うから……頼む！ 止めてくれ……」

「ミケーレはどこに居る？」

「……アツテムトの城だ。侵攻には直接参加していない。オルレアンの城に居るのは、組織幹部だけだ」

「では、今回の侵攻に参加していない、予備兵力はどこに居る？」

尋問官は周辺地図を神官の前にある机の上に広げた。神官はしばし地図を見つめると、地名をポツリポツリと読み上げていく。

尋問官はその地名を羊皮紙に書き取った。後で他の捕虜から聞きだして整合性を取るのだらう。

「アンドバリの指輪を所持しているのは誰だ？」

「し、知らない」

「兵長」

再び肉体的苦痛を与えようと部下に命令した所で、

「待て！ 本当に知らないんだ！ そもそもアンドバリの指輪とはなんなんだ？」

尋問官は兵長を制止した。

「とぼけるのか？」

「本当だ！ それはマジックアイテムか？ だとしたら、それを管理しているのはシェフィールドだ。ミケーレの秘書だ。奴はガリアの」

すると急に神官の様子がおかしくなった。

急に血の巡りが凄まじく良くなったように、露出した皮膚が赤くなり　ぼこぼここと沸騰したように膨れ上がった。神官の体の内側から魔力が溢れ出る。

あーやばいな。

と、ナツメはその様子を見ながら、隣に座った艦長の首根っこを掴んで、部屋のドアに手をかけた。

「外へ出る！」

そう叫びながら、部屋から飛び出した。

「ぐごオオ！」

そのつめき声と共に、神官の体は？爆発？した。爆風が部屋の壁を突き破り、イーグル号の船内を炎上させたのだ。

「」

尋問官と兵長は、その爆発から逃れる事が出来たようだ。だが爆発で飛び散った破片が、腕やわき腹に刺さり痛々しい姿でつめき声を上げていた。

「水メイジ！ 水メイジは消火に当たれー！」

船員の怒号が甲板で上がる。

「……なるほど、確かに捨石だな」

艦長は呟いた。流石にこの状況には参ったようで、声を震わせた。

「…一体、どのような魔法なのだ……狂っている」

「おそらく、何らかのキーワードに反応するようなルーンを体に刻んでいたのか、それとも魔道具を仕込んでいた？」

「見分けられるのですか？ でしたら」

「いや、爆発寸前まで分からなかった」

ガリアの　、その先の言葉が頭に浮かんで反応、という事だろうか？

火災自体はすぐに消し止められた。だが、爆風の威力でイーグル号の帆は折れてしまい、戦いに出るのは無理になってしまった。

神官の言動からして、彼は自分から人間爆弾となった訳ではないのだろう。眠らされた、もしくは洗脳された隙に、こうなってしまった、と考えるのが妥当。文字通り捨石だった。

投降してくる兵士全てに、潜在的な危険が付き纏う事が分かった。

前線の兵士が人間爆弾となって特攻してくる事もある。

安易に敗残兵を受け入れられない。

これが意味する所は　　皆殺し。

「まずいね　」

ナツメは吐息を付くと、顔を青くしたままの艦長に、

「艦長」

「……は、なんででしょう？」

「捕虜の中に彼と同じような者が居ないか、調べる必要が在りそう
だ。私は捕虜の所へ行ってくるから、君はウェールズにこの事を伝
えておいてくれ」

そう言うと艦長の返事も聞かずに甲板から飛び降りた。

「ナツメ様！」

飛び降りるとルクシャナの護衛のエルフが走り寄って来た。

「今の爆発は一体？」

ナツメは彼を見るなり結果だけを伝える。

「捕虜の神官が、爆発した」

「は……？」

「神官が自爆したんだよ。魔法で。それよりシヤラフさん、何か用があるんでしょう？ 手短にお願い」

「…そ、そうでした。尋問で使う魔法薬を」

と彼が取り出そうとした所で、

「そうだったよ……そんな便利な物があつたのに……」

とナツメは頭を抱える。肉体的な苦痛を与えなくても、情報は引き出せたのだ。あの嫌な悲鳴も聞かずに……、

「それより捕虜だった！」

叫ぶように言った。沈み込んだと思ったら、急に豹変するナツメに付いていけないシヤラフは

「如何なさつたので？」

「ああ！ 道すがら説明するから、付いてきて下さいー！」

とナツメは走り出す。すると遠くでまた爆発音が響いた。

「　　　」
「　　　」

ナツメは舌打ちをすると、シャラフの胸を掴んで飛んだ。彼が慌てふためくのも気にせず。

戦闘が終了して六時間ほどが経ち、捕虜、一万弱の整理が漸く終わろうとしていた頃だった。

捕虜達はどこの国にも属していない人間として扱われる。

また敵組織と政治的取引が困難であるため、平民、貴族関係無く、待遇はほぼ同じである。

反乱を防ぐという事で、兵（ほとんど平民）と指揮官（こちらもほぼ貴族）は離れた場所で拘束する事となっていた。

だがここに来て、

「ホレイシヨー！　しっかりしろー！」

「捕虜を一箇所に纏めろー！　逆らったら殺しても構わん！」

「違う！　オレは爆発しない！　爆発しないから杖を　　　」

捕虜の兵が纏められた広場は混乱していた。

突然の事だった。

突然近づいてきた捕虜が爆発した。

だがそれは反乱ではなく、兵士の一部に自身を？爆弾？に変えた者が紛れていたのだ。

「撃つなあ！　撃たないでくれえー！」

「止まれ！ 止まらんと撃つぞ！」

と恐慌に陥りそうな二者の間に、魔王はエルフを肩に担いだまま着地した。すると撃たないでくれと叫んでいた兵士は、急に走り出し、魔王の手前で何かを呟くと爆発、四散した。

風が結界のように魔王を守り、爆風は彼を避けて通り抜けた。無傷。

その光景に周囲は圧倒され、混乱の声は止んでしまった。

魔王が肩のエルフを下ろすと、そのエルフは一礼して指揮官が集められている場所に向かって走り出した。

魔王はその冷たい目で集められた捕虜を見つめた。これから虐殺が始まろうというのか、と捕虜を取り纏めていたトリステインの士官は息を呑む。

魔王はそのままゆっくりと捕虜に向かって歩き出す。

一人一人観察するように。

すると一人の捕虜の前で止まった。

まだ少年で十三、四といった所で、目には恐怖を浮かべ、ガタガタと震えていた。

だが彼が魔王を見上げた所で、その恐怖は消え去り、睨みつけながら言ったのだった。

「父の仇！」

するとその少年の体も膨れ上がり、四散する。周りにいた捕虜は吹き飛ばされた。しかしそれでも、魔王の体は傷つかず、そのまま立ち続けていた。

「！」「！？」火力が足りないことに気付いたのか、そこから先は一度に三人が飛び掛る。

今度は爆発の前に、首、胸、腰の部分でそれぞれが風の刃によって切断された。

爆発したのは、後者の二人で、首を刈られた者はそのまま、ビチャリと崩れ落ちた。

「口の中か……？」

魔王はそれらの亡骸を眺めながら呟いた。そして叫ぶ。

「これより、暫くの間！ 捕虜は声を発する事を禁ずる！」

捕虜達にざわざわと動揺が走った。友軍の兵士達にも。

「黙れ！ ぶつ殺すぞ！」

魔王が暴風を起こしながら怒鳴ると、彼らは黙った。

「これから貴様らが、爆発しないか検査を行なう！ 検査が終わってから好きなだけ喚け！」

案の定、口の内側にルーンが刻まれていた。

特定のキーワードをあらかじめ決めておき、それを声に出して言うすると発動する。？サイレント？の魔法を唱え、声を失わせても結果は同じだった。

その人間が鍵となる言葉を頭の中で強く唱えると発動してしまう。残存魔力を全てルーンに注ぎ込み、爆発。

魔力を持つメイジ限定の自爆方法。

検査前になって強行に乗り出し、爆発する者が続出した。

声を発する者は、即座に首を撥ねる事になっていたのだが、いかにせん数が多い。

処理が間に合わず爆発に巻き込まれる者もいた。

三日経って検査が終わる頃には、被害は友軍捕虜合わせて百数十名までに上った。

全体としてその損傷は軽微なもの、自らの肉体を犠牲にしてまで殺そうとしてくる敵の存在は、末端の兵士に十分過ぎるショックを与える。

捕虜の検査と隔離のために兵を割く事にもなり、地味に手痛い。

そして両軍の首脳陣は軍議でその事を話し合う事になった。

全長二百マイルほどもある巨大戦艦『ロイヤル・ソヴリン』。その会議室で円卓を囲んでいた。

「特に子供には気を付けて下さい。洗脳しやすい上に、兵が油断しやすくなる。女性も同様に。おそらく今後、この手口を使ってくる事があるでしょうね」

ナツメは地球の古い記憶から、自爆テロについての知識を掘り起していた。

「子供だと……!？」

と僅かな動揺が走る。だが戦争は数勘定、と割り切っている者が多いため、涼しい顔だった。

トリステイン王軍士官の一人が動揺した者に向かって言う。

「無いとは言い切れないでしょう？ 奴らにとっては、神のためならば？ 何でも？ 許されるのだから」

それはこれまでの略奪行為から明らかかな事だった。人を魔法爆弾に変える事も、悪魔達を滅ぼすためならば正当化される。

ナツメは深く息を吐いた後、

「これ以上捕虜は取れない。兵を動揺させる事にも、要らぬ危険に晒す事にもなりません。生憎と一人一人調べていく手間は惜しい。それ以前にそんな手順を踏んでいられるほど、人員にも時間にも余裕が無い。後方に居る敵は？殲滅？するべきだ」

はつきり殺すと宣言した。トリステイン陣営の表情は優れないが、とりあえず反対意見はでなかった。

開戦十日目の午後。

アルビオントリステイン連合軍は、ガリア側に陣を組んでいる敵勢力に向かって進軍を開始した。

イーグル号と同系列の中型戦艦『ファルコン号』の船室。ルクシャナはファルコン号の甲板に風竜を着地させると、飛び降りた。

戦艦の乗組員達が、ビシィッと綺麗な敬礼する。

それに笑顔で手を振ると、「…か、可憐だ……」と？ビシィ？の部分が崩れ去った。

「魔王様の部屋に案内して欲しいんだけど……」

と彼女が言つと、

「じーるうあ！ 何をさぼつとるか！ 作業を続ける！」

と上官が怒鳴り声を上げる。そしてその上官は「ささ、ルクシヤナ様。ナツメ様は、船長室でお休みになられております」

「ああ、出たよ……アーノルド副艦長の女好き」「ナツメ様にぶつ殺されちまえ」「切り落とされる」

などと呟くような部下の罵り言葉。

「こらあ！ 聞こえとるぞ！」

それを見てルクシヤナはくすくすと上品に笑う。

「申し訳ありません。見苦しい所をお見せして……」

「別にいいわよ。変に堅っ苦しいよりは、こっちの方が好感が持てるわ。ちゃんとけじめは付けてるんだし、部下と上司の距離が近いって良い事じゃない」

「……はっはっはっは！ そうなのですよ！ あいつらもアレで気の良い奴らですって」

それから後甲板にある船長室に案内される。ナツメが一番良いベッドを要求したため、艦長は譲らざるをえなかったらしい。

彼はその部屋で、出撃前に最後の休息を取っている筈だった。副艦長はルクシヤナに、上官でもないのに敬礼をして去って行った。

コンコン、と部屋のドアをノックする。そして「入るわよ」と開けた。

「……………」

部屋に入るなり目に付いたのは、掛け布団に埋まっている魔王だった。空の上は冷えるのか、陸のよりも厚い。

そして頭だけ動かして、ルクシヤナに一瞥をくれると、「…………スウー」と鼻息を立てて布団に潜り込んだ。

甲板にいた水兵達の反応とはえらい差である。

まあ元からこんな感じだったが、この対応は少し酷いのではなからうか。ルクシヤナはベッドの端に腰掛けた。

すると、布団の中から手が伸びてきて

「え？」と言う間に強引に引き寄せられた。

どくん、とルクシヤナの心臓が一気に跳ね上がった。

「ちよつと！ やっ、くすぐった……」

それからもぞもぞと背中に手を回されると、ぎゅっと抱きすくめられる。

彼が薄着なせいか、自分の胸にどつくん、どつくん、とゆっくりとした振動が伝わる。

存在を、より近くに感じる。

「うーん。やっぱり落ち着くな、これ」

と少し笑いながら言った。

「久しぶりに会って、それ？」

ルクシヤナは私は抱き枕か！、と突っ込みそうになるのを抑えた。

「まだ五日ぶりだろ。充電……いや、やる気充填中なんだよ。大目に見ろ」

「もう、五日ぶりよ。これ、他の人でやって無いでしょうね？」

「他の人じゃ落ち着かない」

キュン、と言わせるような殺し文句。それを悟らせないようにルクシャナは笑う。

「あはは。あなた、私がいなくなったら如何するのよ」

「……淋しすぎて、死んじゃうかもね」

ナツメは言う。

「こりゃ、どちらか一方が欠けたら負けだな」

ルクシャナかナツメ、どちらか一方が死んでしまったら敗北。そうして回された腕の力は強くなる。まるで独りになるのを怖がる子供のように。

「五十三人」

唐突に言った数字。ルクシャナは突然のそれを理解できず黙る。

「自爆ルーンによる、味方の犠牲者だよ。聞いているよね」

「ええ、聞いた。人間ってとんでもない事するわ」

腕の力は緩められ、離された。それを少し寂しいと思しながら、ルクシヤナはベッドに足を崩して座る。ナツメも同様、隣に胡坐をかいて。

「……頭の隅にはあったんだ。ああいう事が起こるかも知れないって。気付いていたのに、その可能性を言わなかった。多分、会議で気付いている人も居た。でも、間違いすら指摘されなかったよ。ビダーシャルさん以外」

戦って一万を殲滅するよりは少ない被害なのだろうが、敵を味方の陣地に入れてしまった事実は変わらない。トリステイン貴族なら、こぞって非難しそうな事にもかかわらずだ。それを聞いてルクシヤナは目を丸くして、

「ナツメも!？」

「は? ってお前もそうなの?」

「そうそう、マナと精神力の研究論文に明らかかな間違いがあったのにね、皆突っ込まないから、後で気付いたらもう……」

学者連中の気まずい顔が浮かぶ。すると鳥肌が立ち、ルクシヤナは悶え始めた。

「あれは……本当に恥ずかしかったわ」

すると、ナツメは心底嫌そうな顔をする。

「げっ、それってもしかして、救世主効果?」

「そうよ。アルビオンとは方向性違こうけど、覚悟こした方がいいわ。鬱陶ふさしいぐらいちやほやされるから」

それに対してふざけたように、

「……もういつそ、独裁やっちまうか。聖者、救世主、崇めんの禁止！ いいねこれ」

と悪そうに笑うのだが、

「ただし政治的権限は無い」

「じゃあ何があるのさ？」

「……肩書かたがきと、面倒な仕事だけ」

と潰される。ナツメは駄々を捏ね始める。

「ねえ〜楽しくないよー。めんどくせえよー。帰りたくなかったよー」

「あら？ 帰ったらきつと楽しいわよ。とりあえず十年分、溜まりに溜まった遺跡調査の予定で毎日振り回してあげるわ」

「楽しいの君ばっかじゃん！」

ルクシャナはそんなナツメを無視して、

「巨大建造物の遺跡とか無いかしら？ 中に入ると大岩がごろごろ転がってくるのから逃げたり、針で串刺しになりそうになったり、

水責めの罨とか……」

とか言い始めた。

「リアルの遺跡調査は丁寧な穴掘りばかりだけどね」

「そんな現実、私は認めない！」

暗に本の読みすぎと分かる発言だった。

「もっとこう、心躍るような冒険は無いのかしら？」

「これ以上のがあつたら心臓が破裂するよ」

とナツメはベッドに倒れこんだ。疲れているのでも、落ち込んでるのでも無い。満足したような顔で大きく息を吐いた。

繰り返すようだが、今のナツメは薄着であった。倒れこむ際に勢いがあつたためか腹部をだけさせている。人間が作る彫刻のように深く割れた腹筋が覗いた。

ルクシヤナは急にそれが触りたくなる衝動に駆られる。

駄目よ！ 婚姻前に、そんな破廉恥な事！

「……………」

なんて、自分の欲求に正直な彼女が思うはずも無く、気が付くとナツメの横半身に覆いかぶさっていた。

「……………はぁ」

そしてそこから完全に覆いかぶさるようになる。

ナツメの胸に耳を押し当てると、心音の間隔が次第に狭く強くなるのが聞き取れた。

「ルクシャナ……………」

赤い目が見開かれ、彼女をじっと見る。

「…そこから先はまた今度にしよう。外の連中が覗いてる」

は？ とすぐに後を振り返ると遠くで杖を握っている平海尉達が居た。

「？遠見？の魔法とか、頑張りすぎだろ……………」

とナツメは頭を掻きながら体を起こした。ルクシャナは小刻みに震え、顔を真っ赤にして、

「いい、い今の奴全部見られてたの!？」

だがナツメは平然としながら、

「いや、？遠見？の調整が上手く行ってなかったみたいだから、今辺りからだろ」

と窓を開けて外の風を操り始める。？遠見？で覗こうとしていた平海尉達が、何かに殴られたかのように頭を揺らした。

「エロイのは無し。昔話でも聞かせてくれよ。厨房で茶でも貰って来るから」

と、優しく微笑みながら言って部屋から出て行った。

「……………釈然としねえ」

ルクシャナは呟いた。

ああ、お母さま。どうやら私達、男女として次の段階に進むのはもうちょっと先になりそうです。大丈夫よルクシャナ！ 彼も男。ネコネコ言っても、男って馬鹿だから、色気見せればすぐ言いなりよ。

なんてやり取りが頭の中で繰り返された。

ただし彼女の母親はこういった方面に厳しいので実際は無い。

そんなエルフの午後だった。

そしてルクシャナは文句を垂れるように言った。

「『メイドの午後』ってあんまりエロくないのよね……………」

特に山場とか無い、敵がむかつくだけの話（後書き）

投稿しないワツフルワツフルとか、話の終わり方とか考えてたら投稿が空いてしまった。反省はしていない。エロが難しい事が良く分かったから。欲望を文章にぶちまけようにも語彙が足りなかった。

反省といえば、ここまで原作を好き勝手に踏み荒らしてしまって、原作者に後ろめたさを感じます。次はオリジナルにして好き勝手することになります。

ちよっとピンチになった(前書き)

『真面目な教皇の使い』から、後、十万字でディアブロ・コンキスタ倒すとか言ってたけど、ちよっとだけオーバーしそうです。

ちょっとピンチになった

開戦十一日目午前九時。

ラグドリアン平原上空は厚い雲に覆われていた。太陽の光が届かない緑色の草原は生命力を感じさせない。

そこはオルレ안의城と、ディアブロ・コンキスタ陸軍が展開する国境の、丁度真ん中あたりに位置していた。

一人、ぽつんと存在する人影。

人影は上下とも黒い服を着込んだ、白髪赤眼が特徴的な青年がいた。魔王と呼ばれた男、ナツメ。利き手である右には威厳よりも、血の匂いが濃くなってきたコボルト製の杖が握られている。彼は杖の細い方を地面に突き刺して、深呼吸をした。

「はあああ……………心臓に悪い」

初めてデートをする思春期の少年の心のベクトルを真逆にした心境で、ナツメは敵が来るのを待ち構えていた。

そろそろ来る頃かな？ できれば来ないで欲しいけど、来てくれないと作戦に影響が…………。

そんな願望と現実がせめぎ合っていないながらも、索敵のために風の精霊を少しだけ呼び寄せる。

「現実の勝利か…………」

うんざりして呟いた。

五百メートルほど先にあつた小高い丘の方に目をやると、馬に乗り甲冑に身を包んだ人間が一人、鉄杖を構えていた。

それから二人三人、十人、百、千。上空には幻獣乗り。その後方にはどれほどの兵が控えているのか、彼らよりも低い場所に居たナツ

メには分からない。

横一列に広がった騎馬隊は、雲の間から差し込んだ太陽光を浴びた。騎馬が一騎前に出た。身に着けたマントが白く、元は聖堂騎士なのかもしれない。その一人が鉄杖を掲げ下ろした。地上の軍勢は地鳴りを、空に居た幻獣たちは咆哮を上げて突っ込んでくる。

ラアアアアアアアア

！

原始的な恐れを喚起させる雄たけびに、呼吸が止まった。

悪魔に死を与えん。

ただそれだけを呪詛の如く唱え進んでくる。

心の中にどっしりと構えていた筈の覚悟など消え去り、ただひたすら頭の奥で警鐘が鳴り響く。

死ぬ。

殺さなければ自分が死ぬ。

迫り来る熱気は自分に死を予感させる。

だがこの無数に広がった悪意が同時に自分を冷静にさせる。

「フッ！」

と、短く息を吐くとナツメは飛翔ではなく、疾走を開始した。山側に位置するオルレ안의城に向けて。

元オルレ안의城の一室、現ディアブロ・コンキスタ司令部の会議室では議論が飛び交っていた。

魔王が一万の兵をあっさり降伏させ、仕掛けた自爆ルーンの被害すらも押さえ込まれてしまった。

「捕虜をとらなかつただと!？」

「は、奴らは投降を訴えた兵を殲滅して進んでおります」

参謀から伝えられる事実は幹部達を焦らせる。

開戦から十二日目、敵の連合陸軍は国境にさしかかろうとしていた。先日投降した一万の中に、自爆ルーンを刻んだ兵を数十名忍ばせておいた事が、逆に彼らを警戒させる事になった。

「恨みを買つと承知の上か……」

円卓を囲んだ二十人ほどの幹部と指揮官は総じて難しい顔をした。元アルビオン貴族の將軍は言う。

「どうするのです？ 奴らはまだ戦力を温存している。その上、魔王は？ 竜巻？ すら起こしていないのですよ!？」

敵が最も懸念している事、それは魔王の持つ大量破壊兵器、？ 竜巻？ の魔法だった。十五年前の貴族派粛清で嫌と言うほどそれは思い知らされている。

「船に打ち込まれでもすれば、『ウリエール』でも唯では済みません。兵を下がらせ、援軍が到着するまでは守りに入るべきです!」

『ウリエール』号とは全長百五十メートルにも及ぶ大型旗艦。シエフイールドが持ち込んだ東方の技術と、盗み出したアルビオンの技術とで作られた最新鋭の船だった。

「兵の士気はどうする？ あれだけ焚き付けておいて、今更引き返すなどと言ってみろ、反乱が起きるぞ」

將軍に反論したのは元トリスティン貴族のリッシュモンだった。そして、

「お忘れではないか？ 敵は捕虜を取らぬとほざいているが、それは兵士に限った事だろう？」

と問いかける。將軍はその意図に気付いて、

「……まさか、リッシュモン殿あなたは……なりません！ それを
してしまつては我らは、」

「ではどうしろと言う？ どの道負ければ我々は殺されるのだ、悪魔の手に掛かったとなれば我らの名誉は地に落ちるのだぞ」

リッシュモンはそれを封じた。そして再度問いかける。

「近隣の村を人質としてみては如何いなものか？ ？キ制約ア？をかけ、
ルーンを刻み保護させれば、敵を更に動揺させることも出来ましょ
う」

ラグドリアン湖の水精霊が味方に付いた以上、アンドバリの指輪は使えない。用済みとなつた指輪は、彼の右手人差し指に嵌っていた。

「おお、それは名案ですな！」

多数派である元神官の幹部たちは彼の意見に手を叩いて賛成した。そして彼はそのつえに、

「現在トリスティン、アルビオンは国内は手薄だ。魔法学院を襲撃

させてしまえば、生徒も人質となる」

愛国心など欠片も無い、目先の勝利を得たとしても先の無い発言をした。リツシュモンが信じているのは神ではなく金かねである。悪魔を倒した先に、自分が潤えばそれでいい。

もつとも、ディアブロ・コンキスタとは大まかに言つて、上層部に欲望を醜く太らせた神官、下層に敬虔なブリミル教徒を抱えた組織である。

神官は神を信じた結果、財布が膨らみ、リツシュモンは金を信じ、金のために何でもするから財布が膨らむ。

結局どちらも目指す結果は同じだった。

「さすがリツシュモン殿だ」

「アルビオンならば、その辺の平民でも効果があるのではありませぬか？」

怒りや恨みを買う事などまるで考えていない。そもそもガリアの平民は彼らにとって唯の愚民でしかなく、トリステイン、アルビオンは背信者の集まり。

そして、彼らにとってこれは正しい戦いであるのだから、躊躇する理由など無いのだ。

ガリア側のラグドリアン湖沿岸部の町は、ほぼ略奪され尽くしていた。

家畜、作物、財貨、そして人。男は殺され、女は辱められ子供は売り飛ばされる。

同じ神を信じているというのに……いや、寧ろ同じ神を信じているからこそ、彼らは奪っていく。神の権威を取り戻すという理由を免罪符にして、それが必要だからと奪う。

リツシュモンは言う。

「將軍、我らには大儀がある。神の意思を代行するという、崇高にして絶対なる大儀が。そのためならば民も喜んで命を差し出すだろ
う」

神。神神神神神神神神神神……。

神の意思ならば、曲げる事など適うはずもない。正しいのだ。理にかなっているのだ。間違っているのは悪魔ども。リッシュモンの言っている事は　正しい。

將軍が持っていた最後の良心は飲み込まれた。

「魔法学院となると、やはりトリステイン　」

とリッシュモンが続けようとした所で、バン、と会議室の扉が開かれた。円卓を囲んだ十組余りの視線が一斉にそちらを向く。

「で、伝令！　魔王が単身こちらに向かっている模様！」

一瞬、部屋の空気が凍りついた。幹部達の思考が停止した中、更にもう一人伝令兵が入ってきた。

「旗艦『ウリエール』撃沈」

そこで解凍された。司令艦となる船が落とされたという事実に関部達は混乱する。

「そ、外の兵は何をしておるのだ！　簡単に突破されおって！」

將軍は冷静に、

「おそらく船を使ったのでしょう。隠密性と速度に長けた奴を。敵

の新造艦にその類の物があつたと記憶しております。『ウリエール』
速度で劣りますので、中型の戦艦でも囲まれてしまえば、」

だがそんな事を聞いている人間は誰一人としていなかった。

「兵だ、兵を呼び戻せ！ 城を守るのだ！」

「現在魔王を追撃中です！」

「艦隊はどうした？ 迎撃の準備は、」

恐慌状態にはまり込んでしまった幹部達が喚き立てる。すると、扉
が開いたままの入り口から、

「おやおや、そんなに慌てて。どうなさったのです？」

その声はこの場にそぐわない雰囲気です。部屋を満たした。
会話はそこで終わった。

否、終わらせざるをえなかった。

「猊下！」

そこにいたのはミケーレ・ディーオだった。彼の姿を見て幹部達は
顔を青くした。ミケーレは組織の旗印のような物だ。彼が討たれて
しまえば全体の士気が折れてしまいかねないのだ。

「ここは戦場になります故、早々に避難なさって下さい！」

と将軍が言った所でミケーレは、

「いいえ、避難なさるのはあなた方です」

部屋の中にゆっくりと歩を進めながら言った。

「悪魔は一刻もせぬうちにここへと至るでしょう。あなた方にはまだ仕事がある。ここで倒れてしまつては困るのです」

「では戦いを放棄して逃げ帰るのですか？ それでは殉教者達が浮かばれませぬ。彼らはあなた様を信じてここまで来たのですぞ。今更切り捨てるなど……」

リッシュモンは自分よりも力のあるミケーレに取り入ろうと算段し、思つてもいない奇麗事を言った。

「切り捨てるではありませんよ。彼らは神の勝利に貢献してくれるのです」

「何か策がお有りですか？」

ミケーレはリッシュモンの問いに優しく微笑む。

「ええ、その通りです。つい先日、我らの切り札が完成しました。皆様にはその起動に立ち会っていただきたいのです」

その言葉は絶望に染まりつつあつた幹部達の闇を振り払つた。

「おお！ 遂に！ ああ、神の栄光が見える」

「これで正常な世界が戻る。神よ……」

感動に打ち震え、涙する者までいる。それを見たミケーレは、

「さあ、皆さん。外に船を待たせてありますので、急いでください。

悪魔はアルビオンが寝返るのよりも遙かにはやいのです」

笑いそうになっている自分を押し殺した。

街道ッ！

三十分程獣の如き速さで走ったナツメは、山間に見えたその道を視認すると走る速度を上げた。

オルレアンの城に辿り着くには、この道を通るか山を迂回しなければならぬ。

平原から狭い街道へ。

街道は多く見積もつて、横一列に十数騎程度しか通れない。自然と隊列は崩れ、縦長にならざるをえない。

「討ち取れー！ 街道に入る前に討ち取れー！」

逃げるだけでほとんど攻撃してこないナツメに、すっかり強気になった軍勢は引つ切り無しに魔法を放ってくる。当たりそうになる度に、風でその向きを逸らす。

背中は汗でびしょ濡れ、額からも大粒の雫が垂れる。

だが体に疲れは感じない。

それどころか体は程よく温まり、動きにしなやかさがある。

さて、街道に入ったら敵はどう出るか。

そんな事を考える程度にも余裕が出てきた。

理性的であれば、不利である、畏か何かか、と進軍を躊躇する。反対に狂氣的であればそのまま突っ込んできて、こちらとしても殺り易くなる。

前者か後者か。

ナツメは降ってきた氷の矢を鈍器で打ち砕くと、全力疾走に切り替えた。

騎馬との距離が一気に開く。

付いてこれるのは上空のグリフォンやマンティコアなどの幻獣のみ。その内の一騎から火球が放たれた。走る事に神経を集中させているので、防御は風の防御壁のみ。炎の熱さが自分の速度を上げさせた。

街道に騎馬が雪崩れ込む。どうやら狂気は理性に勝っていたらしい。ナツメはいったん速度を緩めると、今度は攻勢に出た。息が荒い。走る快感のせいでついペースを上げ過ぎてしまった。

慣れ親しんだ弧を描くような風の刃をイメージする。

空気を薄く圧縮し、質量を持たせるように。そして精気を精霊に送り込む。

その工程を一息の間に五度ほど繰り返し返す。

「
！」

刃を前方に掃射すると同時に、地面を蹴った。

先頭に居た騎馬が馬ごと切断される。その断面から血飛沫が吹き上がる前に、その後ろで呪文を唱える馬上のメイジに鈍器を振りかぶった。

同時刻。

ラグドリアン湖、湖畔トリスティン側をアルビオン艦隊は進撃していた。

小型艇を積んだ中型戦艦百隻、大型戦艦二十隻が隊列を組んでいる様は壮大。

中でも旗艦『ロイヤル・ソヴリン』号は全長二百メートル、備砲が両舷合わせて百八門、竜騎士隊を乗せた最大の巨艦だった。操舵室の艦長席に座ったアルビオン艦隊総司令長官、ウエールズ・テューダーは眉間に皺を寄せ、不機嫌さを前面に出していた。

「司令、表情が優れませんな。どこか具合でも？」

既に敵艦を二十以上、旗艦と思われる大型戦艦をも撃沈したにもかかわらず、ウエールズの顔色は悪い。

眼鏡をかけた参謀総長ロバートの気遣いに対し、彼は淡々と返す。

「いいや、私はいたって健康体だよ」

憂慮しているのは、敵艦隊の規模が友軍に拮抗している事だろう。

敵もこちらに劣らないほどの巨大戦艦を複数所有している。

と参謀長が考えるのに対してウエールズは、

「戦後処理が大変になりそうで……目を閉じれば、かつて無いほどの書類の山が瞼に浮かぶ。ああ、今度は何日徹夜するんだろう……」

と乾いた声で嘆いた。ロバートは大笑いした。

「仕方ありませんまい！ 実質、あなたは空の王なのですから。日々
の業務が多いのは力が強い証拠、甘んじて下され」

「文官増やす！ 絶対に文官増やす！」

「さて、それほどの人材はいるでしょうか？ ただでさえ人手不足なので、どこも出し渋るでしょうね。今度マザリー二枢機卿に尋ねてみては如何でしょう？」

どうせ属国になるのだから、と言外に匂わせる。

「そうか！ その手があった………いや待て、トリステインも戦後処理で忙しくなるのだから、引き抜きは無理じゃないか？」

「それもそうですね………」

二人して少し疲れた雰囲気をかもし出す。加えて反魔王派をどうやってこちら側に引きこんで行くか。戦争が終結した後もまだまだ問題は山積みだった。他の参謀や航海士達は何ともいえない表情を作った。

三十分ほどして『敵大隊発見』の報告がウェールズの元に入った。

「無事街道に入ったようですな」

参謀の一人が言った。

「残り規模から見ると、割ける戦力は……これぐらいだろうか」

ウェールズは卓上に広げられた駒を動かし始める。

「司令、これでしたらもう一隻、中型艦を………」

「山間やまあいが多くなる。この場所を航行できる船隊は、本隊から抜けて欲しくないんだがね。ロバート、どうだろうか」

すると参謀長は、

「無闇に隻数を増やしても、動きが鈍るでしょうな。街道を襲撃するとなると、彼の？竜巻？を考慮しなければなりませんまい」

と言って、ウエールズが動かした駒から中型艦を取り去り、街道の入り口に大型艦を置いた。

「大砲の積んだ小型艦を発進させ、竜巻が来たら退避」

言いながら駒を動かしていく。だがウエールズは反論する。

「だが大規模な竜巻を起こすとなると、結構な時間が必要になる筈だろう？ 昔式典で見た時は……五分、いや、十分近く掛かっていと記憶しているが」

すると参謀長はニヤリと眼鏡を光らせた。

「手は打ってあります」

そして午前十一時を回ろうとした頃、ナツメは街道沿いを追われながら敵の相手をしていた。

己が進んできた道には、転がる死体。

大多数が人間。馬、竜、グリフォンなどの幻獣まで時折混ざっている。

殺しても殺しても殺しても、後から後から湧いてでてくる。

息もつかせる間もなく襲い掛かる敵は、ナツメの体力を少しずつ奪っていた。

体が半壊したメイジが爆ぜる。

自爆ルーン。

舌打ちをしながらナツメはその爆風を自身の風でいなし、その後居た兵に飛び掛った。

恐らく、自分がある街道の反対側も戦場になっている筈である。アルビオン・トリステイン陸軍と街道入り口とここで挟撃する事になっている。

だが、

「多すぎんだよ……」

毒づいてしまうほど、肉体的な疲労がナツメの体を支配してきた。走っては止まり、風の魔法と杖で殴って応戦。これを何度も繰り返して、とうとうオルレ안의城にまで見えてきた。

無数の傷が痛まない。

矢が掠めた頬や、肩、足の傷は既に血が固まり始めている。

「ああ！ 動脈当たってやがる」

左肘内側の傷を一瞥すると、憎々しげに呟いた。痛みが無い、それは命の危険を知らせる警鐘が麻痺していると言う事。先ほどまでは殺気に当てられただけで、身を焼き尽くす程の恐怖を感じていたのに、今はそれも感じない。あるのはただ、この疲れる流れ作業から解放されたいという感情だけだった。

右手だけで杖を握り、落馬した騎兵のブレイドを受け止める。

集中力が落ちているためか、風の刃を上手く作れなくなってきている。

「くそ！」

と、その騎兵を蹴り飛ばす。そしてまた走り出した。自分にだけ小規模な追い風を起こし、体にかかる負担を減らす。不意に背中に痛みが走った。

「やった……やったぞ！ 遂に傷を！」

敵兵の感動に打ち震えたような声が耳に付く。何か刺さっているかは分からなかった。

……幸い、左肩か。と思いながら、崩れそうになった姿勢を直し、今度は飛んだ。

「飛ばせるなー！ 手負いになった今こそ好機だ！ 討ち取って名を上げよ！」

叫ぶのと同時に、無数の魔法詠唱が始まる。聞き慣れたドットやラインの呪文^{スベル}。その前に大量の矢が飛んできた。風で勢いを殺そうとするのだが走りながらでは制御が甘く、精霊に上手くイメージを伝えられない。

あ。ああまずい、矢尻って刺さると抜く時が痛いんだよなあ。

逸らし切れなかった数本の矢が、自分に届く事が予測された。

だがその時、

「風よ、盾となりて彼の者を守れ」

透き通るような声音は聞き慣れた物だった。

風の精霊がナツメの前で膜を作るように動き、向かってきた矢はナ

ツメに刺さることなく寸前で弾かれる。

「大地に眠る者達よ、壁となりて敵を止め！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

声の主は口語の調べを続けて、言つとナツメの前の地面が走るように高く盛り上がった。

振り向くとその先に居たのはルクシャナだった。

そしてその背後から彼女の護衛達が現れた。次々と口語の呪文を唱え、土の壁を更に強固な物にしていく。そして次の瞬間、魔法が衝突し壁が振動する。

彼女達が何故ここにいるは分からない。だがこの瞬間、助かった事には変わり無い。

ナツメは彼女の方に一瞬目をやる。

すると、彼女はニツと戦場に似つかわしく無い笑顔で応えた。それにナツメは、

「時間稼ぎよろしく！！」

と叫び、杖を放り、エルフ達の斜め後方に飛んだ。

百メートルほどの高度で止まり、意識を風の精霊と同調する事一点のみに全神経を集中させる。体から発せられる精気に誘われ集まるのは、自分にだけ見える青い光の粒子。

それらに指示を送る。

回転させる。渦を巻け。ぐるぐると回れ。

風が激しく回転するにつれ上空の雲が吸い込まれ、下に向かって埒くぐろを巻き始める。

突如、雷撃が地面に落ちた。頭が割れるような轟音が山間に鳴り響く。

雲中の激しい摩擦によって発生した雷が落ちたようだ。ナツメが視線を落とすとそれは幸いにも、甲冑を纏った騎兵に向かって落ち、それを焼いた。

制御が及ばない。ただ回転させることに全霊をかける。

眼下のエルフ達が表示合わせていたかのように散り始める、回転させていた空気は地面に向かって、螺旋を描きながら衝撃を叩き付けた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

雷を伴った竜巻は地面を掘り崩すと共に、砂塵を巻き上げる。

完全にコントローラが利かない規模になったその暴力は、解き放たれた。

「天界直通便！ 発車あー！」

幅二十メートルも無い街道を、直径百メートルの天から伸びる柱が進み始めた。

空を飛ぶ竜や幻獣が吸い込まれる。地上の兵はゴミのように舞い上がるか、吹き飛ばされる。根こそぎ引っこ抜かれた木が街道のど真ん中に落ち、生存者を潰す。通った空間には何も残らない。

「……………はっ、はっ、はっ、」

地面にゆっくりと降りる。

動かし続けた体には疲労が蓄積され、精気もほぼ空だった。地面手前で最後の一滴が搾り取られ、浮遊感が終わる。

ドサツと地面に鈍い衝撃を伴って落ちるとナツメは痛みに唸る。うつ伏せで倒れたままもっ動けなかった。

「……………いつてえ」

緊張が解け、背中に刺さった矢や、その前に付けられた傷たちが一斉に自己主張を始めた。しかしそれにも応える気力が無い。ただ黙ってその痛みを受け入れるだけだった。

足音がした。

甲冑がすれるいやな足音が。さっきの竜巻から逃れた者だろう。ははははは！ これで俺が勇者だ！ と笑いながら走ってくる音が複数。

視線だけを動かすと、兜が取れた人間の兵士が影を作ってナツメの前に立っていた。

「ウフラッ！」

力を振り絞るような声と共に、剣が振り下ろされる。ナツメは右手で地面を押し、横に転がる事でその剣を避けた。そして起き上がるとその兵を睨む。

「へ……へへ、手こずらせやがって」

元平民の傭兵なのだろうか。刃こぼれした剣や所々壊れた鎧など粗末な装備が目についた。

唐突にその男の胸から色付きの剣が生えた。

「勇者になるのは俺だ！ うひゃ、うひゃひゃひゃ！」

男を殺したのはメイジだった。剣は？ ブレイド？ の魔法で、引き抜くと今度はナツメに斬りかかる。

右手にはいつもある筈の杖が無い。さっき捨ててしまったのを思い

出した。馬鹿！ と胸中で罵ると、上段から下ろされたブレイドを体をずらして避ける。同時に地面を蹴り、メイジの顔面に拳を叩き込んだ。

ドチャリ。

品性の欠片も無い音を立て、メイジの頭は潰れた。

「まだ居んのか……」

血染めの両腕。左は自分の血で、右は他人の血。傍から見れば恐ろしい姿この上ないはずなのだが、ここは戦場。恐怖が麻痺した残存兵が切りかかって来る。勇者の称号を手にしようと、剣を、槍を、弓を、杖を向ける。

ナツメは少しだけ、生きる事すら面倒に

「我が契約せし土よ。巨体となりて圧壊せよ」

ならなかった。ルクシャナの声が呪文を紡いだのだった。地面が盛り上がり、太い丸太のような腕を何本も作り出すとその一帯を蹂躪し始めた。

彼女の姿が視界に入る。竜巻の余波で跳んだ泥矢や砂で汚れたのだろう。体中が埃でくすみ、黒い土が付いている。しかし今のナツメにとっては何んな女神にも勝って見えた。

そして彼女はゆらゆらとナツメの方に歩いていくと、

ゴンッ！

拳の動きと同時に鈍い音。

「~~~~!!」

的確に顎を打ち抜かれ痛みよりも、ぐらぐらと脳が揺れる気持ち悪さが先行するパンチだった。ナツメは彼女の前で膝を付いた。

「さつき、諦めたでしょ」

ルクシャナは半眼で睨んだ。

「諦めたって」

「言い訳禁止！」

ナツメは腕を引つ張られ、強引に走らされる。周囲は護衛のエルフが周囲を？カウンター？で守ったり、残党を刈っていた。

「どうしてここに居るんだよ？」

走りながらルクシャナに言った。

「助かったけど、作戦外じゃないか。何かあったの？」

「上から回されたのよ。それで来てみたら……この馬鹿！」

ルクシャナは走りながらナツメの後頭部に綺麗な蹴りを見舞う。ナツメは頭を下げ、ひよいと避ける。上手いもんだと思っていると、

「……………ヒック」

顔を崩し、走りながら泣きはじめた。呼吸が嗚咽に邪魔され、しゃっくりになる。彼女はそのままスピードを上げる。走る先にあったのは三十メートルほどの小型艇だった。

背後から護衛のエルフが走りこんでくる。

「乗り込め！ 退くぞ！」

叫んだのはビダーシャルだった。残党が放ってくる火球を？カウンター？で弾きながら後退していた。

ナツメは浮上し始める船に飛び乗る。傷だらけになった魔王を見て騒然とする船員達を無視して、甲板に大の字になって倒れこんだ。

「って痛！」

背中にはまだ矢が刺さったままだった。

「ふおおおおおおおおお」

ナツメが低い声で唸っていると、ルクシャナに首根っこを掴まれた。

「そこで、蹲すくまつてると……邪魔よ。って重！」

グスつと鼻を鳴らしながら、彼女は両手でナツメを船室まで引きずろうとする。ナツメは足を踏ん張って立つと、

「ごめん、歩くよ」

と自分で甲板の下に通じる階段を下りた。

船室にあるベッドに腰掛けると、ルクシャナはナイフを取り出し、矢が刺さっている部分の服を切り裂いた。

「……！？」

彼女が短く息を呑む音が聞こえた。そして、

「力……抜いて」

ナツメはルクシャナの言葉に従う。矢尻を抜くのだろう。細い指が背中を這うのが分かる。

「……！」

ブチブチと僅かに肉を裂く音。

歯を食いしばるような痛みが頭を貫いた。すうくはあく、と深い呼吸を繰り返してそれ紛らわす。

「刺さるの……より抜くほうが、痛いのもって、どうにか……ふう……ならんのかね？」

カラン。

ルクシャナは床に矢を落とすと、水で濡れた布で傷口の周りを拭き始める。

「契約せし水よ。……傷つきし命を癒せ」

鼻をすすりながら彼女は呪文を唱えた。表面と中の肉が修復されていく。不完全ながらも繋がった部分の痛みは和らぎ、傷が持っていた熱も逃げて行く。

「……………」

無言。

何と声をかけたらよいものか、と持て余しているとルクシャナは俯いたまま、ナツメの前に回りこむ。

左前腕部のきつく縛られた布をほどくと、血がぼたりぼたりと垂れ

た。

同じように下を向いた彼女の頬からも、透明な雫がぼたりと。彼女は傷口に水をかけ血を洗い流す。再び血が出て傷口が見えなくなる前に、

「契約せし、ヒック……水よ、グス、傷つきし、ズー、命をいやぜ」
先ほどと同じ呪文を唱えるとそれは消えた。しゃっくりや鼻をすするのが間に入っけていても、魔法がちゃんと発動する当たり、彼女の實力の高さが伺えた。

「……ごめんなさい」

ナツメは謝る事しか出来なかった。頭を深く下げると、バシツと彼女の二つの手がのしかかった。背中と首筋に力を入れると、

「上げないで」

と頭を上げるのを止められた。ルクシャナはうわずった声で呟いた。

「心配ばかり……うっ」

「……」

だって仕方ないじゃないか、と言うどころかナツメは後ろめたさを感じ、そのまま頭が上げられなかった。

「心配ばかり掛けて！ 一人で突っ込むなんて……自惚れないで。一生独身前だったのよ？ ……待って……よく考えたら心配しか掛けてないじゃない！ 離婚よ離婚、こんな奴……」

声を震わせて、彼の背中を力なく叩いた。

「こんな奴……なんで？　なんで……。猫ばかり好きで、私の事なんてそっちのけだし、なかなか覚悟も決めないし、駄フラグばかり立ててるし……」

「……………」

「そこ！　否定する！　そんな事無い、君しか目に入らないよって否定する！」

「ごめん、駄フラグ以外は否定できない」

すると泣くのをやめてルクシャナはナツメの頬を抓り、顔を上げさせた。

「そっちこそ本命よ！　ティファニアとかタバサとかマチルダとか大穴でシャジャルとか。他にもメイドとかも引っ掛けてるそうじゃない」

「じ、じひゃいでぶ」

「……かいー！？　ティファニアなんか、直球ど真ん中じゃないのー」

頬から手を放した。そして、

「これだけ心配させてるんだから、そっちの方は不安にさせないでよ……」

と抱き寄せられた。服に付いた泥や血混じりの匂い。その下から感じられる体温は、ついさっきまで殺し合いをしていた事を忘れさせる。ナツメはそのまま何も言わず、目を閉じた。

ドォーン、ドォーン、ドォーン。

残党に大砲を打ち込む音が、山間をやまびことなって響く。

甲板からは人の怒号。

でもそれ以上に、彼女の心音が頭の中で多くを訴えていた。

ちょっとペンチになった(後書き)

呪文とか適当です。

シリアスになりきれない決戦

ナツメが気が付いた時はベッドの上だった。

朝の光が、白いカーテン越しに淡い光となって部屋に降り注ぐ。

カーテンを開け、窓の外を見る。

森と泉、そしてキラキラに照りつける太陽。

……オアシス？

砂漠のオアシス……でも……。

昔、居候していた家の風景に酷似していたそれは違和感を与える。

光からはほとんど熱を感じないし、戦艦とか乗って空に居たような気がする。

ナツメは寝ぼけ眼のまま違和感の正体を探ろうと体を起こす。

「……………ん……………んんんっ」

ベッドの端に座った所で声が聞こえた。自分の隣が盛り上がっていることに気付く。

目に入ったのは、白く細い足だった。日の光を浴びて眩しいまでに白い肌。明らかに女性の、しかもバランスの良い、物凄く好みの脚だった。少しドキッとする。

胡坐をかきながら、その足の持ち主を特定しようと視線を上半身側へ滑らせる。

「……………まあ、他の人だったら困るか」

ルクシャナだった。ナツメの独り言が耳に入ったようで長い耳をピクリと動かす。

そしてサラサラとした長い金髪を揺らしながら、ゆっくりと起き上がった。

「……………」

頭にアホ毛のような寝癖を付け、半開きの目を擦りながら辺りを見回す。眠気を振り払うように大きな伸びをぐーっとすると、ナツメの方を見た。

「ナツメ、おはよ。どうしたの？ 何か変よ？」

これは……………何というか……………素晴らしい破壊力があつた。

着ているのは寝崩れた白いシャツ一枚。

ナツメの普段着でぶかぶか、袖の先、カフスから指が少しはみ出ている。

そして白い生足。

……………なまあし。

なまあしなまあしなまあしなまあし！

その曲線美がっ！

中途半端にかかったタオルケットが余計に扇情的で、思わずこのまま押し倒してしまいたい衝動に駆られた。

凄く今更な気がするのだが、まだアレやコレな事は一度も致していない。

（正直になられたらどうですか？）

理性という牢獄の内側に住むケダモノが、外側で牢の鍵を守っている看守ナツメに問いかけた。

（コレは夢なのです？ 管理者さん。あなたは今、戦艦の上にいるのです。戦争中なのです。オアシスが見えた時点でおかしいですよ？）

ケダモノとは思えぬ丁寧な口調。看守ナツメは手に鍵を握り締めて、
（うるさい）

（勤務時間外にご苦勞な事です。ですが、適度な息抜きは必要です

よ？ あなたもこの鍵を開けたくて、うずうずしているのでしょうか？ 私には分かりますよ？)

(黙れ！ 夢の中とはいえ、貴様を解き放ってしまったら、取り返しの付かない事になる。夢が終わって、貴様が牢に戻る保証がどこにある)

(それはあなたが一番良く分かっている筈です。理解しているのでしょう？)

このケダモノの性質は実に単純、くく！なタイムの後、死んだように大人しくなるのだ。事がすめばしばらくは。

(勤務時間外です。あなたの進退には影響しませんよ)

(黙れ！ 黙るんだ！ 俺は、こんな事……)

だがそれに反して震える手は鍵を、鍵穴に近づけていく。

(そうです！ 欲望に忠実になるのです！ あなたの本质はそれだ！)

(くそ、どうして言う事を訊かないんだ！ 俺の心の中にある理性 A君の右腕、命令に背くな！ ……頼むから、ヤメロオオ！)

カチリ。

鍵穴に差し込んで、回してしまった。

ギイイイ。

(ありがとうございます)

牢の扉が開かれ、ケダモノが解き放たれた。

「

ナツメ？」

首を傾げるルクシャナの肩に手をかけ、覆いかぶさった。ほんのり頬を染めたルクシャナはキュッと目を閉じる。ナツメは彼女の胸に

手を這わせた。

「……あ」

ぐによん。

そんな擬音がしそうなほど彼女の胸は大きく手の平からはみ出た。

……え？

ありえない。手の平に納まらないとかありえない。ルクシヤナはもつとかわいらしく小さいはずだ！ こんな手が埋まってしまうような、凶悪な胸な筈が無い！

ナツメはおそろおそろ彼女の顔を見た。

「……ナツメさま」

ティファニアになっていた。

「好きでこんなに大きくなった訳じゃありません！」

「……あ、あ……うあ」

「でも……ナツメさまも大きいので、嫌いじゃありませんよね？ ただ私が少しだけ大きすぎるから、私のがもう少し自重していたら、どストライクですよね！」

ナツメは口をパクパクさせるだけで言葉が出ない。目を潤ませながらはにかむように笑うティファニア。だが次の瞬間、そいつはルクシヤナの声で、

「浮気したらぶち殺すわよ」

夢はそこで終わった。

「はあ……はあ」

なんちゅう夢だ。

ナツメは目を開けると同時に大きく息をした。意識が現実に戻り、目に映るのは眠る前に見たロイヤル・ソヴリンの船室。窓が小さく、光が余り入らないので薄暗い。

「違う違う。あれは違う」

確かに前半は己の願望だったけど、後半は不安が形になったただけだ。昨日ルクシヤナがあんな事言うから……。というかあれだけ殺戮しておいたその日の夢がこんな平和な物だなんて、自分も随分酷い性格している。

「何が違うのかしら？」

ふと聞こえるその声にナツメの心臓は悲鳴を上げた。ルクシヤナが備え付けの椅子に座っていたのだ。夢の妄想が寢言になって彼女の耳に入っていたらかなり気まずい。加えてラストの部分なんかもう……。ナツメは羞恥と戦慄を同時に覚えると、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！」

飛び起きて、膝と手、額をベッドにつけた。土下座。

ルクシヤナはそれを見て、先日のナツメによる単独の囿作戦について、謝っている物だと勘違いした。

「何謝っているの？ 別にもう怒っていないわよ」

「いや、その……何か謝らなきゃいけないような気がして……」

「ふーん」

どこか含みのあるふーんにナツメは冷や汗を掻いた。あからさまに動揺してしまう。

「やや、や、やっぱりなんでもない！」

ルクシャナは腕を組み、無然とした態度で彼を睨んだ。

「怪しいわ」

ナツメの体は凍りつく。

「というか黒ね」

有罪が確定した。

「分かり易すぎよ。顔どころか全身から『私はあなたに悪い事しましたオーラ』が滲み出てるわ。さ、白状しなさい。こつこつのは早いに吐いた方が楽よ」

ナツメは落ち着きを取り戻す。

何が楽になるのか。そんな返しを思いついたものの、碌な事言われなさそうなので、

「二、 フラム！」

意味不明な単語で彼女の気を逸らそうする。だが彼女に効果は無く、「うーん、寝姿がおかしかったし、起き抜けに動揺してるって事はやっぱり夢？ はっ、まさかナツメ、あなた……」

女性は鋭い。浮気とか特に。加えて論理と直観で攻める彼女に死角はなんてものは存在しな……いや、単にナツメがボ口を出しただけなのだが。ルクシヤナは恥じらいのあまり混乱して、意味を成さない言葉を連発する。

「わわわわ、私でアレやコレな事まで！？ まして×××なんて！……どこまでケダモノなの！」

「いや、ニュアンス的にはあってるんだけどね」

「×××　　なんて……とんでもないわ。いくら私でもやっていい事と悪いことがあるでしょ！」

暴走を始めたルクシヤナに『やってない』とは言えず、ナツメは無視したまま体に巻きついた包帯を取り始める。傷は魔法でほぼ完全に塞がっている。打撲などの内出血がまだ残っているが、体の調子は良い。

「ねえ、どうなの？　×××は」

「ところで今はどんな状態？　あれからどうなった？　残党狩りは終わったの？」

引っ込みが付かなくなる前で強引に話を引き戻す。ルクシヤナは器用に態度を百八十度変える。少し機嫌が悪そうだ。

「あなたが寝ている間にほとんど終わってたわよ。というか寝過ぎ。もうすぐお昼よ。二日も寝てるって怠惰にも程があるわ」

「二日も？」

「今はオルレアンを完全に制圧して、船の停泊準備も終わってるわ。被害状況は確認できているだけで、戦死者三千余り。空の方は大型艦一隻、中型艦五隻、小型艇は……現在確認中だったかしら？ 敵の増援は逃げ帰っちゃったみたいだし、あなたも暫く休めると思うわ」

「……そっか」

数の上の大勝。三千と六万。だが比較上の問題ではない。その三千に降りかかる死の苦痛はそれぞれ一度限りだが、その家族や愛する者達は彼らを追想する度に苦しみ続けなくてはならない。

「精気の方はどう？」

「少し回復してきた。後一週間もあれば満タンかな」

「精液は？」

「返答に困る」

「ちっ、もっと面白い返し方はないの？ あなたって精神も語彙も

それどころか下の物も貧弱なのね」

「見てないくせに何で分かる！ 僕はこっちの体になる前から
って何てこと言わせるんだ！」

今日は下ネタで責めてくるつもりだったのか、ルクシャナに恥ずかし
しそうな素振りは無い。

「何？ 私にだけ性的な事を言わせて、自分は清廉潔白でいようと
しているのかしら？ あなたって最低ね。私の事愛してるなら、苦
しみはあなたが背負うべきよ」

「分かち合え！」

「10対0でね」

拒否された。

「で、ガリアは何か言ってきてないの？」

「ん？ 東側の街道には軍が配置されてるそうよ。他は特に何も言
ってこないって」

直轄の王領を占領。

不戦条約も結んでいない、声明も出してない。下手すれば自国の
領土が失われるのに、何も言っ来ないはおかしい。
ルクシャナは言う。

「黒？」

「真つ黒でしょ」

ディアブロ・コンキスタの存在がアルビオン王政府の知る所となつたのは、およそ十年前。アツテムトに亡命していたブリミル教の神官が、アルビオンの貴族派を引き入れたのが発端だった。

アルビオンでさえこの時期に知ることが出来たのだから、ガリア王政府はもっと以前に認知していた筈である。危険因子を孕んでいる事は明らかであつたのに、まだ小規模だった当時で鎮圧をしなかつた。

「他国を侵略するための隠れ蓑……って訳でもなさそうね」

「？ どうして？ 大儀を抜かしてしまえば唯の略奪組織じゃん。戦争で疲弊した国を待機させている軍で叩けば一発だろ？」

「リスクが大きすぎるわ。自分の肉を切つてまで他国を取り込む必要があるのかしら？ 私はガリアの内情に詳しい訳じゃないから、その辺は分からないけど」

「自分にとって腐つてたら肉も切るよ。オルレアンは現王政府と対立していた派閥の筆頭……て今は違うか」

腐った肉は既に切り離された後だった。

「私には人間の腐った部分を掻き集めて、一気に焼き払おうとしているように見えるのだけど」

ナツメは怪訝そうにルクシヤナを見る。

「だってそうでしょ？ 宗教庁の保守派にアルビオンの貴族派、そ

の他三国にいた金の亡者。いずれも改革には邪魔な物だわ。案外今の教皇が差し金なんじゃないの？ 教皇陰謀説」

「ヴィットーリオがね……」

もしそうだったら最悪だ。ルクシャナはそれを見透かしたように言う。

「あなたは人間を信じすぎよ。信じるなどは言わないけど、エルフだって嘘もつけば裏切りもするのよ？ ましてや二十年も会ってない、一度しか会っていない人間を、どうしてあなたは信じられるのよ。それは危険な事だわ」

ナツメはそれに「待った」と言っ

「信じなくてどうするんだよ……。また皆殺しにしろとも言うのか」

「そんな事言ってないわ。ただもう少し警戒する基準を厳しくして欲しいのよ。敵の手段が容赦ないから。トリステインの人達もどこか信用できないわ。この戦争が終わったら、手の平を返してくるかもしれないじゃない」

そう言うと彼女は両手を抱いて震えだした。ナツメは尋ねる。

「何かあったの？」

「子供に自爆ルーンが刻まれていたのよ……。兵士でも無いのに、こうなったのは悪魔のせいだからって……。それで……」

洗脳しやすい子供は格好の標的となる。保護を求めてきた周辺住民に紛れ込ませていたらしい。

「助かった女の子が言っていたわ。軍人さんが来たらこの言葉を言いなさい、そうすればお父さんは帰ってくるよって。神官様が教えてくれたって」

だが実際は違った。その言葉を口にした子供は爆ぜ、アルビオンの仲間を巻き込んだ。

「助かったって、その子のルーンは？」

「消したわ。刺青みたいに彫ってある物じゃないみだから、特定の？解呪？で簡単に消せたの。多分契約魔法の類ね」

「君はその場にいたのか？」

ルクシヤナは頷いた。いつもより攻撃的な言葉は機嫌が悪かったわけではなく、沈んだ心の裏返しのような物なのか。後で何か埋め合わせでもするかと考えながらナツメは言う。

「そう言えば何か用があるんじゃないの？」

「そうそう、ウェールズの話があるらしいわ。次の出撃を決めるから、起きたら操舵室に来いって」

ナツメは少しむっとして、

「何だアイツ、自分の部下にやらせるよな」

するとルクシヤナは急に嬉しそうな顔をする。さっきの陰鬱な空気は何処かに行ってしまったかのように。

「あら、やきもち？　ねえやきもち焼いてるの？」

「いや、そうじゃなくて」

というナツメの弁明も封殺して、

「『お前婚約者いるくせに人の女にまで手え出すんじゃないよ』とか思ったりした？　もしくは『くそ！　ウェールズの奴、俺というものがありながら』」

「待て待て待て！　後者のジャンルは駄目だ！　僕の人格を否定するつもりか！？」

「だって人間の男って中には男が好きなのもいるのでしょ？　ナツメったら、いつもきわどい所で止まって私に何もしないんだもの。もしかしたらそっちの気が」

「無い！　絶対に無い！　さっきの夢だって……」

ナツメは言いかけて声を止めた。

「ちっ」

「誘導尋問！？」

「申し開きは無いの？　無いのなら私はあなたをオス猫でしか興奮できない極めて特殊な性癖だと判断せざるを得ないのだけど」

「僕は夢の中でルクシヤナにいかがわしい事をしました！」

嘘までつく羽目になった。

それからナツメは操舵室に行き、ウェールズに現在の体の調子などを伝えると会議室に連れて行かれた。

会議室では既に作戦が決まり、あとは魔王の回復時間を見込んで軍を動かすだけ。すぐに決議され、次の進軍開始は二日後となった。敵の予備戦力にほとんど船はなく、移動はほぼ馬車。

疲労の少ない後続の船団が空から敵を叩き、本拠地のアツテムトに着く前に全滅させる。

そして六日後にナツメが本隊と合流して本拠地に乗り込むという計画になった。

「（オルレアンに抜ける）街道は暫く使えないそうだよ。相変わらず恐ろしい魔法だな」

「それより飯が不味い」

会議の後食堂で昼食をとりながら、ウェールズとナツメは話し込んでいた。

「マフィンに許せる。何でここまで薄味にするんだ。後から好みの味付けにするったって、いくらなんでもこれは酷い」

と豆のスープに塩を振る。「翼人の方が料理してんじゃねえの？」
と言ってしまいそうな程の味気なさだ。因みにコボルトやライカン

連中は生肉を食っていた。

「台所事情も改革しろよ。紅茶だけじゃんアルビオン」

「無茶言わないでくれ。他国の料理人を雇い入れようにも、君の悪名のせいで人間の移民はほとんど無いんだから」

とウェールズは反発する。

「……すみません」

起き抜け二時間で三回目となる謝罪だった。

「この戦争が終われば、トリストイン人の悪感情も少しは和らぐだろうから、期待できそうだがね」

「どうやって向こうの貴族引き込む？」

「それよりもどうやって早く戦いを終わらせるかだよ。敵から奪った戦利品だけじゃまだ使った総額の半分も補填できない。この分だと後一ヶ月と少しで限界が来る」

この規模の軍を動かすわけではない。敵の空戦力がほぼ無力化された今、戦艦の半数は既に撤退する手筈になっている。

「一ヶ月もあれば落とせるだろうに。問題は何？」

「借金した上で回らなくなる限界だよ。」

ウェールズは実感のこもる声で言った。戦争開始前は三ヶ月を見込

んでいたのだが、予想以上に被害があったようだ。戦費は逼迫しているらしい。

「借金しなかった場合は？」

「十日前後。滞りなく進軍が出来て被害が少なければ、ね。敵の隠し玉が使われる前に終わらせたい」

いくら強力な兵器でも使われなければ脅威にはならない。

「ガリアから賠償金取れないのか？ ガリアで起こった事なのに、アルビオンが犠牲払って解決とか、いくらなんでも無責任だろ」

「いや、むしろ領土侵犯を絶対主張してくるね。賠償金なんてびた一文払わない。なんなら賭けたつていい。戦利品次第だ。次の大規模な拠点はアツテムトだけだから、持ち逃げされる前に押さえないと」

借金取りのような言い様に、だからかとナツメは少し合点がいった。魔王の回復を待たずに進軍を始めるのはこのためかと。もちろん敵の体制を整えさせない、というのもあるのだろうがこっちの方が切実だ。

「結構ぎりぎりなんだな」

「何を他人事みたいに言うね」

「実際他人事な訳ですが」

ナツメにとってアルビオンの財政など知ったことではない。どうせ

住まないんだし。ウエルズはパンに乗せるチーズをナイフで切りながら言った。

「ならアルビオン貴族にも気を付けた方がいい。もちろん亜人にも」

「は？ 何でそうなる？」

「君の血が欲しいからさ。知らなかったのかい？ 魔王の血筋が入りたいと思っている貴族は結構いるんだぜ？ 子供かせという？ 枷かせ？ も出来るから、君も留まる事になって一粒で二度美味しい」

「……もう絶対人間世界住めない」

そして正夢になど絶対にしないとナツメは心に誓った。

アツテムトの城はガリア国境沿い、南北に伸びた溪谷に位置している。山脈は自然的国境の役割を果たし、それを横切る形になっている。この領は、ほんの十年前までは交易において重要拠点だった。

国を繋ぐ集荷地であったこの領は、通行料や商人達から上がりを取るだけで十分に潤っていた。その反面、人身売買、違法魔法薬などの闇市があったりもしたのだが。

しかしディアブロ・コンキスタが勢力を拡大し、ここに居を構えてからは近隣の世情は一変する。

まっとうな商人は寄り付かなくなり、遠回りな交易ルートを築き始めたのだ。

その間に組織は膨れ上がり、大軍を有するようになる。

が大軍を維持するのに必要となる莫大な資金が無い。闇市の上が

りだけでは算段が付かなくなり、組織は隣接するゲルマニアとガリアの土地から略奪し始めた。もちろん神の名の下に。

開戦二十四日目。

やや予定は前後したものの、アルビオン軍はアツテムト領内に入っていた。

「酷いな」

開口一番、ナツメから出て来たのは嫌悪の声だった。戦艦の船首から前方に見えるアツテムト領は、ほぼ真っ黒だった。

森は切り、焼き払われ、黒い土はむき出し。

谷沿いの川には土砂が流れ出てしまっている。

その先に見える石造建築物。

ドォーン、ドォーン。

前方に展開する戦艦から大砲の弾が打ち込まれ、敵軍の人間が飛び散る。

「いかにも悪役が住んでそう……」

アツテムトの城周辺の荒廃模様はディアブロ・コンキスタの残虐性を連想させた。

テンプル騎士団みたいにやればまた違った結果になっていただろうに、などと考えながらナツメが後ろにいるビダールシャルの顔を伺う。

「じ、これは……」

彼の険しい顔は怒りを前面に出していた。

「破綻する手法をこつても簡単に取れるとは、なんと愚かで恐ろしい生き物だ」

エルフの宗教学は環境学に近い物がある。環境バランスが崩れると精霊の挙動が変化するらしい。

「自分の事しか考えない連中の集まりですから、ある意味この結果は当然でしょうね」

「自分達が全ての支配者になったつもりなのか？ 糧を得ている事も忘れて……森の再生にどれほどの時間と労力があると思っっているのだ」

恐らくガリア王政府は、森の再生のような利益に直結しない事はやらないだろう。

広大な土地に総人口千五百万の人間種族。亜人達は自然と共存した、原始的な生活を営む者ばかりで環境が破壊されても微々たる物。

公害なんて発生しない。

他国も似たり寄ったりで、そもそもハルケギニアには自然保護という概念は存在しないし、するわけがないのだ。

「無知とは恐ろしい物だ。彼らはこの事を知って変わるだろうか？」

ビダーシャルは上甲板で話しているウェールズ達の方を見た。ナツメは当たり障り無く答える。

「利益不利益を提示すれば実行すると思いますよ。人間、自分の利益には敏感ですから」

「だといいのだがな……」

とそこで時間になる。小型艇が高度を下げながら加速を始めた。船団を抜けると眼下では大砲を打ち込まれ怯んだ所に陸軍が突撃していた。

甲板兵が叫ぶ。

「前方二時、竜騎士の一団！」

百騎ほどの群れがこちらに向かっていった。

「？竜騎隊？突撃ー！」

甲板から竜騎士が次々と飛び立っていく。

「我々も行くか」

ビダーシャルはナツメに言うと竜に飛び乗る。そこに伝令が飛んできた。

「？魔王？突撃されたし！ 目標アツテムト城！ 突入部隊はこれを援護せよ！ 繰り返す」

ナツメは船の手すりに足をかけた。背後見る。

犬と狼が竜に乗ってる……シユールだ。

そして、

「お互い生きて帰ろう」

と言って船から飛んだ。

功を焦った竜騎がナツメに集中してきた。

風で姿勢を制御し、飛んでくるマジックアローを身を翻ひるがえして避ける。ナツメは高度を一気に上げる。

釣られた竜騎が同じ動きをすると、そこに目掛けて魔法が飛んできた。

味方の竜騎士隊だった。

ここは任せると言う身振りを見るとナツメたち突入部隊は目標に向かって飛んだ。

城の最上階にある空中庭園に着地する。後続の竜から飛び降りた味方の獣人が窓を蹴破った。

「先走るなよ」

とナツメは言いながら風の精霊を城の中に伸ばす。精密ではなく全体を大まかに捉えるように。

「ポチ、右の廊下を曲がった所に人間が二人」

獣人に指示を送る。ポチと呼ばれた白い毛のライカンは凄まじい速度で飛ぶように廊下を駆けた。肉が引き裂かれる音が精霊を介して聞こえる。

「どうなってる？」

やや遅れて到着したビダーシャルは、早速精霊と契約を始めるとナツメに言った。

「人が少な過ぎます。この階には後六人しかいない」

城の周囲は兵で固められていたのだが、中の警備が薄すぎた。

「揃い次第、下の階を調べましょう」

「ふむ」ビダーシャルは地面をトントン、と足で叩くと、

「我が契約せし土よ、構成を解け」

すると庭園の床の一部が砂になり崩れた。

十数秒後の敵を始末してきたポチ、それに続き突入部隊の面々が屋上に揃った。

「それじゃ行こうかね」

ナツメは穴から下の階に飛び降りた。

「嫌な匂いだ」

城の中の探索を始めてしばらくたち、ビダーシャルは違和感を覚えていた。

「敵は何を守っているんでしょうか？」

同じくナツメも。精霊を介して部屋の中を調べていく。

「城の外はあんなに堅く守ってるくせに」

中は殆ど空だった。

外の兵数もおよそ五万。

情報の七万よりも少ない。離反した者が居たのだろうか？

そしてそれに比べても城は手薄すぎる。何か意図があるのか？

「……………」

ふと扉の前で立ち止まる。ナツメは右手を上げ隊員を制止させると、部屋の中の風の網を隈なく敷き詰める。

南北に向かって長方形の形をした部屋。

帰ってきた反応は、調度品の類やロウソクの火が暖かいといった事ばかり。

他の部屋と大差が無いと次に移ろうとした時。

ヒユウ。

と隙間風が部屋の壁から漏れた。

「一、二……………五箇所か」

壁の隙間から冷えた空気が少しずつ。

「この部屋を調べる」と、ナツメが扉の取っ手に手をかけようとした所で、ビダーシャルは彼の手首を掴んだ。

「待て、ここは何かおかしい。精霊が私の干渉を受け付けない」

「……………誰かが契約している？」

「だろうな。かなりの使い手だ」

敵に精霊魔法の使い手がいる事は予想できた。
だが、

「本当に？」

ナツメは半信半疑で聞き返す。

エルフは他の種族に比べて精神力が多く、精霊への干渉力は強い。
そしてビダーシャルはエルフでも最上位に名を連ねる戦士でもある。
敵にエルフがいるという情報は無い。人間の中には精霊を感じ取れる者がいると聞くが、それでも彼のレベルを超えるとは考え難い。

「外から魔法を打ち込むのがいいでしょうね」

「そうすべきだろうか」

ビダーシャルとナツメが頷きあつた所で場の空気が変わった。

「!？」

人が居た。

白い法衣を身に纏った男だった。

ナツメが作り上げた精霊の網目を避けてそこに立っていた。誰も気付けていない。

「ナツメ！」

ビダーシャルの声と同時にそいつは動く。

ほんの刹那、突進してきたそれが容赦なく壁ごと、そこにいた味方を斬り払った。悲鳴どころか、声を上げる事も無く体は崩れ落ち、血を吹き出す。

「！」

ナツメは近くにいた人間の士官を蹴り飛ばすと、その反対側へ跳んだ。

剣穿は吸い寄せられるように追ってくる。

再び地面を蹴って横に跳び、上段から繰り出される剣戟を躲す。

死体の傷口からこぼれ出た臓物を、ぐちゃりと踏み潰す音と共に、声が聞こえた。

「ほう、上手く避けるましたね」

感心したような声。

「お初にお目にかかる。私がディアブロ・コンキ」

スタの首領ミケール・ディーオ、とでも言おうとしたのだろう。ナツメは無視して風の刃を放った。だが、ミケールは曲芸士のように横に回転してそれを躲す。

「全く、せっかちな人ですね。名乗りぐらい上げたらどうです？」

人を食ったような態度で言う。

対するナツメは伶俐な視線を送り、

ナツメは生き残った味方に「城の外へ」と撤退するように言った。

「ナツメ、だが……」

ビダーシャルは躊躇う。ナツメは少し気が立って言った。

「氣遣つて暴れられない。出て行ってください。こいつは俺の敵だ」
そして再び風の刃を放ち、ミケーレが避けた方向に同時に飛び出す。杖と剣がぶつかる金属音と共にミケーレは吹き飛んだ。だが、彼は猫のように体を翻すと、垂直な壁に着地し、再びナツメに飛び掛った。

剣戟が響く。

「その通り！ 倒すべき敵だ！」

剣は金属よりも硬い杖とぶつかり合い、火花を散らす。その音は際限なくリズムを上げていく。ナツメは鏝迫り合いになった所で、ミケーレの横っ腹に風の刃を生み出した。しかしミケーレはそれがあったかも見えていたかの様に、後方に跳ぶ事で避ける。

「見えているのか？」

ナツメは攻撃を止めて、淡々とした口調で言った。
既にビダーシャルたちは退避していて視界には居なかった。

「見ているのではなく、感じているのです。この体は少々特殊だね。先住の力を注ぎ込みすぎたせいかな、亜人やエルフのように精霊を感じ取れるのですよ」

高笑いして語るミケーレを尻目にナツメは窓を開けて、風の精霊を召喚し始める。そして、

「お前、馬鹿じゃねえの？」

戦闘中に長々とした言い合いなど自殺行為に他ならない。

生かさんとばかりに不可視の刃を量産し、逃げ場を無くす。

「愚か者は貴様だ！ 劣等種どもを人間と混ぜようなど、滅びに繋がる事が何故分らないのです！？」

ミケーレが叫んだと同時に、刃が殺到した。

だがそれらは、地面を弾丸のように突進してくるミケーレの肩を浅く傷つけるだけだった。

どうやら、体の表面に特殊な魔法がかけられているようだ。

「げ」

瞬間。

一息の内に距離を詰められて放たれるのは、心臓への刺突。まさに閃光。

体をずらして避けようとするのだが、左腕を掠める。僅かに飛び散った血に日光が当たり、砕けた宝石のように飛び散った。

「速っ！」

「そう、このようにあなたがいくら精霊魔法に優れていようと、完全な人間となった私に、まして風の精霊が少ない屋内、あなたに不利な場所でかなう道理など無い」

「……………完全ね。それでお前は、そこに行き着くまで、何人の人間を犠牲にした？ 人間大好き君が聞いて呆れる」

「発展に犠牲は付き物です。それを恐れていては、何も始まらない。実験で死んだ者も、未来への礎となれてさぞ光栄に思った事でしょう」

そしてミケーレは急に語気を強め、顔を豹変させた。

「だが、貴様が！ 貴様が現れた！ 貴様が現れ、亜人どもを調子付かせたから！ 人間は化け物どもと馴れ合いを始め、中には化け物と交配した者まで！ 人間の血を汚しやがって！ 世界は間違った方向に進んでしまった！」

だがナツメは、

「そこまで責任取れねえよ」

呆れ顔で言った。

「貴様さえ、貴様さえ居なければ……。なあ、居なくなってくれないか？ 貴様さえ居なければ、全て上手く行くんだよ。悪魔が死ぬば、人間喜ぶだろう？」

絶対に話を通じない相手。交渉など不可能。落とし所など無く、相手が折れなければ納得できない人間。人間のカタチをしているだけで自分とは決して相容れない者。生かしておいたら害にしかならない。ナツメがそう思ったところで、ミケーレは姿勢を低くして地面を蹴った。

振り下ろされる剣を、杖で払いのける。剣の勢いは更に増し、ナツメは杖で受けながら風の精霊を召喚し続けた。

爆薬を叩きつけるような一撃は、火花を散らせる。

「滅びよ！」

明らかに人間の動きを超えた速さから繰り出される重い一撃。それ

が何度も。

「　　」

それにナツメは声を漏らした。ミケーレの剣を振るう腕が激しさを増す。絶え間のない、暴風じみた剣。

それを防ぐ事だけに専念し更に精霊召喚を続ける。ミケーレは一度離れると言い放つ。

「いくらあなたが、風の扱いに長けていたとしても、私の？硬化？は破れない！」

「……」

短く嘆息しながら、ナツメはミケーレを睨む。精霊を使役して、空気を圧縮していく。

「だから無駄だと　　！」

勝機と見たのか、ミケーレは隙を見せるナツメに飛び掛る。常人が見れば消えたかと錯覚してしまうほど速く、前に。ドン、と床を砕き石のつぶてが撒き散らされる。だが、

「喋り過ぎだ。バカ」

ナツメはそう言うと、窓から飛び下りてしまった。高圧縮され、液化した空気を残して。

「く、逃がすか！」

ミケーレが追って外に出ようする。

だがその瞬間、音という音全てが失われた。

視覚以外の全てが麻痺した状態で、ミケーレはその光景を見た。スローになって見える。圧縮され小さな球体になった空気が元の体積に戻ろうと、部屋の床や天井を押し、変形させ、破壊した。

爆音と共に、城が内部から破裂したのだ。

あーまず、とナツメはその様子を振り返る。

自分の走る速度では、爆風に追いつかれてしまう。今から飛ぶにしても、加速するまでに爆発に巻き込まれる。

よって、爆風が来る方向に、空気の層を作る事で衝撃を緩和し、一緒に吹っ飛ぶ事にした。

爆発が治まる。

「……………っ」

まだ爆発の残響が耳に残っている。

城は倒壊どころかその場所は抉り取られ、クレーターのようになっていた。

「……………死んだかね？」

ナツメは風の精霊で作り上げた網を敷き詰め、ミケーレの生死を確認する。

既に瓦礫の山となっていることから、その下に埋まっているか、どこかに吹き飛ばされたか、あるいは爆発でバラバラになったか……。

最後の奴はご遠慮願いたい。死体の確認が出来たほうが、枕を高くして眠れる。

唐突に怒鳴るような声が聞こえた。

「ナツメさまあー！ ご無事ですかー！」

背後で呼んでいたのはコボルトの族長ジャッコスだった。走りながら叫ぶという、とても苦しい事をしていた。ナツメは手を振り、それに応える。すると彼は走る速度を上げてきた。

「はっはっはっはっ」とナツメの傍まで来ると、舌を出して犬のような呼吸をする。一応コボルトの皮膚には汗腺があるのだが、体温調節に舌を出す事がある。

「大丈夫だ。それよりも、生きているミケーレを探さない」と

ジャッコスは息を整えながら、

「討ち……損じたの……ですか？」

「いや、さっきの爆発で死んだかどうかの確認をしたい。こういう場合、敵は生きている事が多い」

死亡フラグのいろは。

「お前は人を呼んできてくれ」

「ふう、分かりました」

そう言うとジャッコスは再び走り出そうとして、

「ナツメ様……」

と足を止めた。ナツメは振り返り、

「どうした？ ジャッコス」

「これを」

と言いながらジャッコスは足元の瓦礫をどけていく。ナツメもそれを手伝うと、

「階段？」 「階段ですな」

地下室に通じる階段が見つかった。ナツメは風の精霊を階段に潜らせて、中を探る。

「どうでしょう？」

「気持ち悪い空気が漂ってるな。階段を下りた先に人が一人いる」

「ミケーレでしょうか？」

「多分な。剣を引きずるような金属音が聞こえる」

ナツメは階段に足をかけて言った。

「ジャッコス、付いてきてくれ。下は風の精霊が少ない。お前の嗅覚と夜目が必要だ」

するとジャッコスは尻尾を振って「はっ！」と。そして階段を下り

始めた。

ねっとりとした生暖かい、触れただけで腐ってしまいそうな空気。それは下に行くほど濃くなって、気分を不快にさせる。

「何か分かるか？」

「……ずるずる、カチカチ、ぐちゃぐちゃ。引きずるような音と、何かを潰しているような音がしますね。それにこの匂い、鼻が狂いそうだ」

ナツメでも嗅ぎ取れるこの匂い。きつと嗅覚が鋭いコボルトにとっては拷問に近いのだろう。

「肉の腐った匂い、この生暖かいのは……発酵のよる熱か？」

「それは遠慮したいですね。何の設備も無しに発酵って、病気の元じゃないですか」

「……って静かに」

とナツメは人差し指を立てる。

下で笑っているような、呻くような声が聞こえた。

一番下まで下りるとそこは広い部屋になっていた。壁にはマジックアイテムのランプが等間隔で設置され部屋を照らしている。

そして視界の奥には、

「まったく面倒な悪魔だ。先住の作りし肉体に加え、精霊を自由に行使できるとは。あのような力を人間以外に与えるなど、やはり化け物の神は野蛮だ」

ミケーレがいた。彼は魔方陣が描かれた石扉を背にして立っていた。

「何か喚わめいてますね」

ジャッコスが言うのにナツメは吐息を付いた。

「余分な物が多いんだよ。速いくせにべらべらと喋って。殺すためだけに動けばいいものを」

そしてミケーレはナツメを視認したのか、

「これで貴様らもおしまいだ！ 死んで身の程を知るがいい！」

扉の魔方陣を剣で切った。

すると、石の扉は重苦しい音を立てて開く。中から生暖かい空気が吐き出された。

「
「！」

石の箱の中に何かの赤い肉が圧縮されて押し込まれていた。

その中で、ピンク色の一つの塊がガツガツとその肉を貪り食っている。

一つの塊は、アメーバのような不定型な形を取った生物で、表面に牙の生えた無数の口が、肉を咀嚼し、飲み込んでいた。

「
「」

扉を開いたせいか、肉と血が外に流れ出た。

足、腕、骨、臓物、そして人の頭が血の海に浮かぶ。その中で比較

「撤退する！ 退け！」

その言葉と同時に、ピンク色のアメーバは触手のように体を変化させ、びゅるん、と放ってきた。

「ダズゲロオオオオーーーーーー！！！」

毒々しい醜悪な咆哮と共に、体から無数の手が伸びる。爆発と言ってもいいほどの勢いで周囲にあつた肉を飲み込んだ。力なく動きが鈍いミケーレが飲み込まれるのが目に付く。既に石の部屋に押し込まれていた肉は完食。次の標的が動いているヒトになるのはごく自然な事だった。

「全力で外まで走れ！ 外にいる連中も撤退させる！」

ナツメは下りてきた石段を駆け上がる。

らせん状になった階段は速度を殺す。時折、壁走りになりながら上を目指した。

地上に上がり、城の外に出るとナツメは叫んだ。

「全軍撤退ー！ 撤退しろー！ やばいのが出たー！」

その声を聞いて、「撤退ー！ 撤退だー！」と命令が連鎖的に広がる。敵の兵士は分かりやすくナツメに向かって走り出した。ナツメはビダーシャルを見つけると彼の所まで行く。

「どうしたのだ？」

と問いかける彼にナツメは、驚きで乱れた呼吸を整えて言った。

「やばいのが出ました」

「やばいのだと？ もっと具体的に言え」

「具体的に表現できないほどやばい奴です。とりあえず移動しながら
ら……」

言いながら走り出そうとするのだが、

「おい、そのコボルトおかしいぞ」

ビダーシャルがナツメの手を指差した。

「く、くるし……」

「ジャツコスー！」

首根っこを掴んだままで、絞まっていた。

そして離して下ろした瞬間、背後で。

爆発。

瓦礫が飛び散る中、そのピンク色の奴は蠢蠢いていた。
目を丸くしたビダーシャルは呆けた口調で、

「……なるほど。確かに表現できない」

アメーバのような、不定形なその生き物は、地上に現れて良いとは思えない、とてつもなく巨大で、醜い化け物だった。

体中に牙の付いた口が敵味方など関係なしに貪り食らう。

「うわああああ！ 助けてくれえええ！」

「死にたくねええええ！」

「嫌だああああ！」

悲鳴が上がった。狂ったような、恐怖に染まった悲鳴が。そして化け物はその悲鳴ごと飲み込んでいく。

「あれが……」

唯、無慈悲に食らい尽くすだけの生物。
本当の化け物。

ナツメは伸びてくる粘質の液体を風の刃で断ち切り、その捕食を妨害する。

ポツ、と生暖かい空気が無数の口から吐き出される。

その口から、風の精霊により知覚能力が鋭すぎるナツメには酷くおぞましい、叫びたくなるような音が聞こえてしまう。

アメーバ状の生物の中である音が、肉を溶かす際の人の悲鳴が、骨を砕いて咀嚼する音が聞こえてしまう。

くちやり、ぼきり、ぞぶり、イタイ、ヤメテ、シニタクナイ。

意識があるのに食われている。

生きのまま食われている。

唯の栄養分にされている。

こんな存在すら無意味な生物の栄養に。

「ナツメ！ もう兵は退いた！ 私達も離れるぞ！」

ビダーシャルが言うと、ナツメは無言で踵かかとを返した。

シリウスになりきれない決戦（後書き）

自分の頭を撫でる大きな手。

そして白い髪の少年は口元を綻ばせ、優しげに笑う。

顔は霽もやがかかって思い出せない。

「おにいちゃん……」

夢の中の自分は呟くように言う。

懐かしい夢を見ていた。

故郷の村の夢。

寂れた場所で暮らしは裕福ではなかったが、それでも幸せだった頃の夢。

家族が居た時の幸せだった時の夢。

当時物心が付いたばかりの自分にとっては、それが当たり前で気付かなかった。だが失った今となっては、それが至上の幸せであったと痛感する。

太陽が眩しい砂浜。

丁度夏の終わりで、涼しくなり始めた頃、彼はふらりと村に現れた。周りの大人よりも背は低いのに、恐ろしく力持ちだった。

近所の人に居候しながら、村の力仕事を手伝っていた。

いつの間にか村の子供の面倒まで見始めて……。

そして、場面は一変する。

村は赤く熱い炎に包まれ、自分が泣きながら逃げ惑う光景。

夜だったのに、その炎によって昼間みたいに明るくなっていたのをよく覚えている。

メイジが魔法で自分を焼き殺そうとした時、庇ってくれた女性。

そしてそこで現実に引き戻されてしまう。

「……なんて夢だ……」

汗でベッドのシーツが湿っているのを感じる。

アニエスは目を開けると同時に呟いた。もしこの夢の前半が他人に覗かれてもしたら、恥ずかしさで死んでしまっただろう。そもそも？ おにいちゃん？なんて呼んだことはなかった。

「私の願望だとしても言うのか……」

二十三にもなつて？おにいちゃん？とか

無い。

ましてや自分はもう、

「隊長だというに……」

アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン。

先日、彼女は反魔王派によって反逆が起こった時、ディアブロ・コンキスタに内通していた貴族を立件し、討ち取った。

その反逆事件を切欠に新設された近衛隊、銃士隊。

非メイジ、それも女性の平民だけで構成されたこの隊は、主にアンリエッタの身边警護を目的としている。

アニエスはその隊長に抜擢された。そして貴族の称号シュヴァリエと姓を名乗る権利を与えられたのだった。

だが、まだまだだと、彼女は満足しない。

もう二十年……。

ダンゲルテールの虐殺から二十年。

まだ夜明け前のようで外はまだ暗く、起きるにはまだ早い。アニエスは再び目を瞑る。

あの熱い炎はまだ身を焦がし続けている。

家族と恩人を焼いた炎が。

まだ、あの忌まわしい命令を下した連中が生きている。
あの白髪の少年を悪魔を仕立て上げ、故郷を滅ぼした事すらも正当化した者どもが。

幼い頃の自分は、何故彼が悪魔と呼ばれ、忌み嫌われているのかが分からなかった。

孤児院の仲間にそれを話して、笑われる理由も分からなかった。
ただ、預けられた孤児院でその事を尋ねると、シスターは決まっ
てこう言う。

「その事を決して言いふらしてはいけません」か「忘れなさい」と
今ならその意味がはっきりと理解できる。

欲にまみれた汚い人間が、彼を穢し、自分の故郷を蹂躪したのだと。
その事実が奴らにとって都合が悪い物だから、その罪を彼に押し付
けた事も。

そしてロマリアから賄賂をもらって作戦を立案した、リツシュモン
元高等法院長は、ディアブロ・コンキスタの幹部として生きている。
復讐してやりたい。その汚い坊主どもを八つ裂きにしてやりたい。
何度もそう思った。だが敵は余りにも強大で、自分一人では土台無
理な事だった。

ディアブロコンキスタ
魔王討伐。

その腐った坊主達と、アルビオンの貴族派という魔王に追い出され
た連中を中心とした組織。

真実を知る身としては、道化極まりない主義主張を掲げる組織だっ
た。

存在しない虚ろな偶像を倒そうなどと言っているのだから。

その虚ろな偶像によって奴らは潰されようとしているのだから。

だが、私はどうすればいい？

彼が全て終わらせてしまったら、自分の復讐心は、激情はどこにぶつけばいいのか。

自分の村を焼いた『魔法研究所実験小隊』^{アカデミー}は彼によって皆殺しにされている。

王軍の資料室でそれを見たときは、仇が既に討たれていてすつとしたのか、それとも自分で手を下せなくて悔しいのか分からなくなつた。

それに加えて、リッシュモンまで彼によって討たれてしまったら？
自分の二十年は？

何のためにここまで剣の腕を、銃の技を磨いてきた？

まだチャンスはある。

それはアンリエッタが前線に赴く時。

その時に作戦に加わる事が出来れば、あるいは……。

それにもしかしたら、魔王^{かれ}に会う事があるかもしれない。

「おにいちゃんはないな。うん、ありえない」

あの時から二十年も経っているのだ。当然向こうもおじさんと呼ばれる年齢になっている筈である。ナイスミドルな白髪の男性。それを想像してアニメスは少し頬が熱くなつた。

という没ネタ。

敵がどうしても小物になってしまいます。プロットが雑。

決戦かと思つたら……

話は遡ること二ヶ月前、フェオ（4）の月、ヘイムダルの週始め。ディアブロ・コンキスタはまだ進軍する前の、ちょうどルイズが魔王を召喚した事を知らされて三日後の事だった。

タルブ村はトリステイン南西部の平原にある。中心に教会がある典型的な村。

草原には牛や羊などの家畜が放牧され、比較的やせた土地ではブドウ栽培も行なわれている。

「ありがとうございます」

シエスタは馬車から降りると乗せてもらった商人にお礼を言った。いつものメイド服とは違って、木綿のシャツ、茶色のスカートと木の靴という格好である。

「いや、いいんだよ。君のお父上には、良くしてもらっているからな」

そして「始祖のご加護を」と言うと商人は馬を走らせた。

「あーいい天気」

深呼吸をしながら久しぶりの故郷を眺める。

抜けるような青空の下に、瑞々しい緑が眩しい草原。風に揺らされた草がサラサラと音を立てる。

彼女にとってほっと安心させる故郷の風景だった。

「さーて、タケオおじいちゃんは生きてるかな」

おじいちゃんと言っても曾祖父。他の人とは違った響きの名前は異世界人の物。最近までは信じていなかった。だが才人が召喚された事により、彼女の中でそれは真実味を帯びた。

才人さんの事教えたらびっくりするだろうな、と思ってクスリと笑う。

そして実家に向かって歩き始めた。

家に着くと家の中で家事をしていた姉妹が彼女を迎えた。午前なのでまだ男達は仕事に出ている。

「お姉ちゃん、おかえりー！」

「シエちゃんどうしたの？ 休みはまだ先じゃない？」

「おみやげは？」

「休暇を取ったの。残念ながらおみやげは無し」

お土産を要求した小さな弟は、期待をばっさりと切り捨てられ、「……なん、で……」と大げさに倒れこんだ。

「じゅめん、冗談」

と彼女は笑いながら、かばんから包みを取り出す。弟は態度を反転させ「わーい」と包みをつぱらおうとするのだが、シエスタは、

「ダメ。お母さん、焼き菓子だから」

と母親に渡した。

八人兄弟姉妹、父母、祖父母、曾祖父の大家族。なので台所の管理者たる母に渡さなければ、お菓子なんて一瞬にしてなくなる。母は怪訝そうに聞く。

「急にどうしたの？ 学院は新学期でしょう？ まさか辞めさせられたとか……」

学院メイドの給金はこの家の貴重な収入源でもあるのだ。

「違うわ。ちゃんと休暇申請したわよ」

魔法学院の場合は普通の奉公先の貴族とは違い、割と自由が利く。

「申請？ またどうしてこんな時期に？」

「タケオおじいちゃんに、言っておきたい事があるの。そろそろ限界が近づいてきているから、手遅れになる前にとって」

と言った所で裏手のドアがギィ、と開いた。

「だーれが、限界だって？」

しわがれた声は彼女の曾祖父の物だった。

「おじいちゃん！」

「おお、シエスタ！ 帰ったか」

と二人は抱擁を交わす。

「わしが逝くのはまだまだ先よ。百まで生きて、ようやく倦怠期じや」

歳は九十近い。平均寿命が低いハルケギニアにおいてはかなりの高齢だ。(ただしオールド・オスマンは例外で)

にもかかわらず足取りはしっかりしているし、背筋は針金の入った人形のようにピンと伸びていた。

「で、どした？ シエスタはわしに用があるんじゃない？」

シエスタはかばんを放り投げるように置くと、興奮気味に言う。

「そう！ そうなの！ あのね、学院の貴族様が人間を召喚したのよ。二人も。その、使い魔召喚の儀で」

「ほう、人間を」

「うん。それでその呼び出された人が言ったのよ。自分は日本人だつて」

「……？」

思いがけない事に彼は頭を押さえながら「ああ戦時中に殴られた古傷が」と錯乱した。

「もう！ 本当なのよ！ 貴族様に勝っちゃうぐらい強いんだから」

タケオ老人は？強い？という単語に反応して、

「まさか、その日本人は、ナツメ・サエキ、と名のらなかつたかね？」

「？ ヒラガ・サイトさんだけど……どうして魔王の名前が出てくるの？」

「ああ、いや、忘れなさい。ヒラガ・サイトか……なるほど日本人の響きだ。懐かしい……」

と言って、彼は近くの椅子に座り、目を閉じた。おそらくその瞼には故郷の風景が浮かんでいるのだろう。

「それで、ヒラガ君だったか。彼はどうした？ こちらに来て、不自由して無いかね？」

「大丈夫よ。一緒に呼び出された人が取り計らってくれたんだって」

「一緒に？」

「うん。もう一人は白くて長い髪でね、魔王みたいでちょっと怖い人だったんだけど」

「顔は見なかつたんか？ 瞳が赤なら」

その質問にシエスタはぶんぶん首を横に振る。

「怖い事言わないで！ 本物が出たら殺されてしまうわ！」

タケオ老人は笑って、

「そんな事にはならん。前に言っただろう？ 彼は昔、タルブに来た事があるよ」

「本当にそれ同じ人なの？ 名前だけ同じで、別人じゃないの？」

「別人なものか。あれは丁度二十年ほど前の事じゃった。ここに来た時、魔道具で顔を変えておった」

「二十年前って、ダンゲルテール事件があつた時？」

「ん。彼は旅の途中でな。わしの故郷がどうなつたか、たくさん話してくれたよ」

「旅の途中って、逃亡中だったんじゃない……」

「……あの事件は、ただの新教徒狩りだった。悪魔が出たなど、後から付けられた方便にすぎん。巻き込まれた彼は、抵抗した。抵抗した結果が、小隊の全滅。それが事の始まりじゃ」

聞いていた母以外の家族は息を呑んだ。「おじいちゃん！」「まずいわ。そんな事神官さまに聞かれたら」と彼を諫めようとする。そんな中、シエスタは黙って聞いていた。

「何を今更、と言うかもしれないが、わしは怖かった。わしだけではない。真実を知る者たちはみな、怖かつたのじゃ」

おそらく彼が真実を叫んだとすれば、村全体が焼かれる事になつていたかもしれない。真相は当時の教会にとって、不都合以外の何物でもなかつたのだから。

「彼はただ、人情で動いておった。母の手紙を息子に届ける途中じやった」

「でも人がたくさん死んでるわ。善い人ならどうして？」

「教会が騒いだせいじゃろう。あの本、あの本……イーヴァルデイの勇者だったか。考えたもんじゃ。子供向けの本ならば、刷り込みも容易かるう」

教会の言っている事と噂は鵜呑みにしない。昔からよく言われていた事に、シエスタは今になって納得した。

「アルビオンでは英雄みただけど、一体どっちが本当なの？」

トリステインには、貴族も平民も魔王を嫌う者が多数である。教会が情報操作をしているので、あまり良い噂がこの村に伝わってくる事は無い。

彼女は魔法学院に留学しているアルビオン貴族から、そういった話を聞いていた。

「見る人によって変わる事だ。ある人から見れば善人でも、別の人から見れば、とんでもない悪人にもなる」

だから亜人たちに崇められもすれば、ディアフロ魔王・コンキスタ討伐などという組織が出てくる。

「さあ、話は後じゃ。みんな、仕事が残っておろう？ シエスタも手伝いなさい」

とタケオ老人は集まった家族に促す。

「いけない、お昼の支度しなくちゃ！ ああシエスタ、お菓子はお昼の後に開けましょう」

母が慌てて台所に入っていた。既に日は真上に近づき、正午前と言った所か。部屋の中に集まった一同は解散した。

その夜のこと。

家の前に置かれた椅子にタケオ老人は一人で座っていた。天気が良かったせいか、空には満天の星が老視の彼にもよく見えた。だが、見上げるために動かした首はすぐに疲れてしまう。いくら歳の割りに元気だと言っても、衰えは着実に姿を見せている。

「おじいちゃん」

彼を心配して外に出てきたシエスタの手には毛布。

「フェオの月でもまだまだ夜は冷えるわ。はい」

曾祖父の肩にそれをかける孫。彼はそれに一言「ありがとう」と。シエスタは隣に立つと一緒に空を見上げた。

「……きれい」

快晴だったせいか、いつもよりたくさん星々が彼女の視界に入る。サイトさんと一緒に見たかったなあ、と思いながらも本来の用事に意識を向ける。

「おじいちゃんは、魔王にあった事があるんだよね？」

孫から投げ掛けられた質問に、タケオ老人は少し悲しそうな顔になつて、

「悪魔じゃないんだよ。彼はサエキ・ナツメという、わしと同じ、日本人だ」

シエスタは心臓が止まりそうになる。

魔王がおじいちゃんと同じ世界の人？ そんなことが外に漏れてしまったら……いや、信じる者は居ないだろう。せいぜいが白い目で見られるぐらいだ。だが運悪く神官が騒ぎでもしたら……。

「魔王、じゃなかった。ナツメ……さん？ もサイトさんやおじいちゃん、同じ世界の人？」

「そう。わしが居た時代より、ずっと先の人間だ」

「おじいちゃんも魔法とか、使えるの？」

「使えんよ」

「なあんだ、私も何かできるのかって、期待しちゃった」

シエスタはつまらなそうな振りをして、さっきの思考を捨てる。タケオ老人は首を横に振った。

「過ぎた力は争いを引き付ける。彼のが良い例じゃ」

教会が先だったとしても、退ければ退けるほどその激しさは増す。

ロマリアからの討伐隊を皆殺しにして魔王という肩書き。アルビオンで貴族派を肅清した事で名実共に成った。

「今も生きていれば……そうじゃな……スカロンと同じぐらいか」

「スカロンおじさんと?」

「オカマが、じゃないぞ? 歳が、じゃぞ?」

「さすがにそんな解釈はないわ」

二人は冗談交じりのやり取りに笑う。

「わしは幸せ者だ」

シエスタは唐突な態度の変化に戸惑った。

「最初は帰りたい一心じゃった。だが家族が増える度にな、その考えは薄れていった。わしにとつては多分、良い事だったんだろう。子供が生まれ、孫が生まれ、更にひ孫が。この上ひいひい孫の顔が見れば、思い残す事も無いんじゃないが……」

とタケオ老人はシエスタを見る。その意味を読み取ったシエスタの脳裏には、異世界から来た少年の事が浮かんだ。まだ会ったばかりなのだが、

「い、いやだわ、おじいちゃん。まだ相手すらいらないもの」

と少し赤面する。

「でも気になる人はいるようだね」

「だからサイトさんとはまだそんな関係じゃ……」

そこまで言つて、シエスタははつとする。年の功のせいか、彼女の曾祖父は、結構な所まで理解してしまつたらしく、

「ほう、彼か……」

と。

だがタケオ老人はからかう事をせず黙りこくってしまった。目を閉じ、深く息をしている。何かを思っている。

シエスタは急に沈んだ様子になつた曾祖父が、同郷のせいなのか、サイトと重なつた。そして。

「……帰りたいと、思つとるかもしれんよ？」

サイトが、だろう。

タケオ老人は、子供が勇者に憧憬するように、元の世界に焦がれていた。今となつてはその気持ちも、無いと言つていい程薄い。しかしサイトはどうだろうか？ まだこちらの世界に来て一週間が過ぎたばかりである。きっと帰りたいと思うに違いない。

「……」

シエスタは急に胸が苦しくなつた。

「すまん、すまん。お前を悲しませたいんじゃない。だから、そんな顔をしないでくれ」

それを察したタケオ老人はシエスタの頭を撫でる。

「話題が悪かった。……そうだ、シエスタ、彼を家うちに連れて来なさい。わしも一度話してみたい」

「……でも、相手は貴族様の使い魔だし……」

「貴族といつても、人の自由までは縛らんだらう。サイト君の主は、そんなに酷い人か？」

「……ううん。いい人よ」

ムチ打ちは少しやりすぎだが、平民に無茶を言わないあたり、ルイズは比較的善い貴族に分類される。

魔法は使えない。

でも勉強や練習を怠らない努力家である。

貴族を怖い物として見ていたシエスタにとって、魔法が使えない分はちよつとした親しみに変わる。

ルイズに対する認識はそんな所であった。

「なら大丈夫だらう」

シエスタは頷いた。

「ねえ、おじいちゃんのは？ 私の事ばかりじゃない」

「年取るとな、若いもんの愚痴が生きがいのなるもんじゃよ。でも、そうじゃな。できるなら、ナツメ君にも、もう一度会って話したかった……」

とまた空を見上げた。

「できるならって……おじいちゃんも百まで生きるんでしょう？
まだチャンスはあるんだから……」

「村の外に出るには、年を取りすぎたよ」

「……」

「……そうじゃな。だったらシエスタが、見てきてくれるかい？」

難しい注文……なのだろうか？ 曾祖父曰く、魔王は怖い人じゃな
いらしい。

学院の生徒や使用人の間では恐怖の対象である。しかしこの家の者
は、魔王に対する悪感情が少ない。

「でも、どこにいるか分からないわ」

魔王は十五年前に人間世界から消えた。

既にトリストインは秘宝を要求されていたのだが、その情報はタル
ブにまだ届いていなかった。

「いいや、会いに行く必要は無い。もし、偶然会うことがあれば、
でいいんだ」

昔とは違い、雲の上の存在になってしまった魔王ナツメに会うのは難しい。
しかもトリストインで嫌われているとあっては、遭遇する可能性な
ど無いだろう。

タケオ老人は微笑んだ。

「さて、冷えてきたし、家に入るう」

そして「よっこらせ」と椅子から立ち上がった。

シエスタは曾祖父と自分が座った椅子を持ち上げると、振り返ろうとするのだが。

ヒュウウウウー、ツガツ！

「え？」

妙な音に、シエスタは勢いよく振り返った。

「おじいちゃん？ どこ？」

道は暗く、家の中に入るまで三十メートルほどの距離があった。タケオ老人は、つい数秒前に歩き始めた筈だった。

老人の足でその距離を、その短時間で移動する事は不可能だ。身がすくんだ。

「おじいちゃん!!」

不意に嫌な匂いが鼻につく。

錆びた鉄の匂いが、今、曾祖父が居たであろう場所から。暗い場所に目が慣れたシエスタには、それが粘質のある、赤い液体である事が分かってしまう。

「え……、な、にこれ……？」

息が荒くなる。

恐怖と混乱でパニック状態になる。

シエスタは家の中に駆け込んだ。

一番に父親が目に入る。

「お父さん！ タケオおじいちゃん入ってきた？」

父親はシエスタの慌てようを見て、ただごとでは無いと判断して、

「どうした？ 落ち着いて」

「おじいちゃんが、おじいちゃんが居ないの！」

泣き出してしまった。

それを聞きつけた家族が、どうしたどうしたと集まってくる。

「シエスタ落ち着いて、落ち着いて話すんだ」

と父親はシエスタをなだめる。

「ひっぐ……変な音がしたと思ったら……急に居なくて」

「音？」

「ひゅーって後に、バツて……」

「それじゃあ分からないよ。他には？」

「……地面に血が……」

「……そうか。お父さんは外を見てくるから、シエスタはここに居

なさい」

シエスタがうん、と頷いて大人しくなると、父は弟と共に外に出た。彼女は母に抱きしめられながら震えていた。

夜通し捜しても、タケオ老人は発見されなかった。

翌日、すぐに村人達で捜索が始まるのだが、三日経っても何の成果も上がらなかった。

タルブ伯に捜索を嘆願しよう、という意見もあったのだが無意味だった。老人が一人消えた所で、貴族が動くはずが無いのだ。案の定、嘆願を出したのだが、タルブ伯はその訴えを棄却した。

結局、それから更に三日経った所で、タケオ老人の捜索は打ち切られてしまった。

「撃てええ！ 撃ちまくれえ！」

指揮官は叫ぶ。

ドドドドドドドドツッ！

大砲が火を噴きながら弾丸を発射していく。

肉の色をした壁に着弾すると爆発と共に硝煙が上がる。

「手を休めるなー！ 次弾を装填しろー！ 手が空いた者は魔法を放てー！」

「火のメイジは前線出でろー！ 化け物を焼き尽くせ！」

だがその攻撃は壁を浅く焼くだけで、目だった損傷は与えられなかった。

!!

大地すらも揺らす咆哮を上げる。

壁は所々を巨大な触手のように変化させ煙の中から砲兵隊に襲い掛かった。

アルビオン軍撤退直後。

ディアブロ・コンキスタは、突如、本拠地に現れた化け物の対応に追われていた。

末端の兵士には魔法生物兵器ベルゼブフの存在は明かされていたのだが、その概要は知るところではなかった。

従って戦場には、アルビオン軍が開発した新兵器、魔王が生み出した新たな悪魔などという情報が錯綜していた。

上空、竜の上から見ていたナツメとビダーシャルは敵を観察していた。例によって竜を操っているのはビダーシャル。

「明らかに動物だけを食べてますね。熱探知の能力でもあるのか？

しかもさつきよりも大きくなってる」

後に座ったナツメが言うとビダーシャル硬い表情で頷いて、

「ああ。だがアレだけの巨体を作り上げるとなると、一体どれほどの犠牲が出たのか……」

上空から見た魔法生物兵器は、ピンクを基調とした明るい極彩色の大きな肉塊だった。ビダーシャルは考え中なのか、あまり関係が無さそうな事を口にする。

「名前はベルゼブブというらしい」

「ハエしか浮かびませんよ……」

「ナツメ、アレを処理するにはどうしたらいいと思う？」

「北の渓谷を山を削って塞いで、南側は土の使い手たちに堤防を築かせる。船で上からありったけの油と火薬を撒いて火をつける。足りない火力は竜のプレスで。これでどうですか？」

完全に物量任せの作戦だった。ビダーシャルは渋い顔をする。

「……むう。敵の特性や弱点を見破ろうとは思わんのか」

「弱点ですか……確かにあの手の生物は定石だと、成長を調節する核となる物があったり、弱点となる物質や、生物的な欠点があったりしますけどね」

「何の定石だ……」

ビダーシャルは呆れと感心が混じりに、

「分かり易く最短の手段に逃げたい気持ちも理解できる。だが最短が最善とも限らない。寧ろ最善な方が稀だ。ナツメ、これからお前は、みなに規範を示さなければならぬ位置に立たされる。上辺だけではいずれボロが出るぞ」

「手厳しい。というか人の本質なんて、早々変わるものじゃないでしょ」

「変える努力ぐらいはしろ」

とたしなめる。

「だが核というのは良い着眼だ。魔道具が使われているかもしれない」

「別に褒めなくたって拗ねませんよ。小さな子供じゃあるまいし」

「……………」

「核ねえ……ありきたり過ぎて信憑性薄いなあ。そんな間抜けな弱点で作るのが怪しい」

核の中にある遺伝子、成長速度とその限界を魔法で狂わせている。だがその概念はこちらの世界には無いものだ。誰かが発見したか、もしくは召喚された本か。捜せばいろいろと出てくる。読める者がいるかどうかは別として。

ナツメは冗談のつもりで言ったのだが、ビダーシャルは意外そうにする。

「ありきたりなのか？ 私からすれば新鮮に聞こえるのだが」

「そういえばこっちじゃ微生物学ってなかったか」

せいぜいが光学顕微鏡で確認できる範囲で、あまり研究は進んでいない。

ビダーシャルは手綱を引き、竜をアルビオン艦隊に向けて飛ばす。

「核の存在を前提として、どうやって捜すんですか？」

「精霊の力による作用は小さかった。おそらく系統魔法だな。成長調節の核と言っただろう？ 魔法で狂わせているのだとすれば、？」

「ディテクトマジック？に反応するはずだ」

「魔法の射程よりも、触手の射程の方が長いのに？」

「エルフの精霊魔法は地上でないと効果が半減してしまう。だが核は中心部にあると相場が決まっているのだ。」

「？^{カウンタ}反射？防ぎつつ、メイジに魔法を唱えさせればいい」

「眼下のベルゼブブは『ロイヤル・ソヴリン』並の体積があった。そしてまだ巨大化し続けている。ディテクトマジックも一度や二度では済まないだろう。」

「つまりまたアレに近づくんですか……嫌だなあ」

「生理的な嫌悪が半端無いのだ、あの生き物は。」

「だがナツメの中にはそれ以上に怒りがあった。軽口で誤魔化さなければ、周囲に当り散らしてしまいそうなほどはつきりとした感情。それをあの巨大生物の開発者に感じていた。それから数秒間の無言の後、」

「一体何の意図があつて、あんな物を……理解できぬ。人間とは何故こつとも同族で争える。自らを食らい尽くすような外法を、何故こつとも容易く用いられる？」

「ビダーシャルは搾り出すような声で言った。大なり小なり彼もナツメと同種の感情を抱いていた。」

「何も考えてないんでしょう。連中は悪魔を殺した後の事なんか、何も考えちゃいなかった。だからこんな事が出来るんだ」

何とかなると思っていたのだろう。

悪魔を倒せば方々に大きな顔ができる。それを利用して後始末をするつもりだったのか。幹部が行方不明の今となっては分からない。

「とりあえず船に戻ろう。これ以上考えていても、状況は良くならぬ。戻って作戦を立て直す」

『ロイヤル・ソヴリン』に戻るとすぐに作戦会議になった。

「では竜騎士隊による核の搜索、平行して殲滅作戦の準備という事になりますな」

「各艦の火薬を、一箇所に集める必要がありますな。それに壁を作る土メイジも」

作戦内容が定まり、参謀たちは今後の動きを具体的に決めていく。

「少し待ってくれないか。君たちの勢いを殺すようでは悪いんだが…」

突然ウエルズが言った。

「提案が……あるんだ」

それに会議室内の視線が集まる。

「艦隊は一度撤退させようと思っ」

ウェールズの言葉に一同は動揺した。

「司令、一体何をお考えなのですか？ あのような化け物を放っておけば、世界が終わりかねないのですぞ！」

「分かってる。分かっているさ。だが一度、少し事から離れて、考えてみてくれ」

参謀長は彼が一番心配しているであろう事をの指摘するのだが、

「戦費の事でしたら、お気になさらずとも、諸侯から寄付金が集まるでしょう」

「ロバート、金の事じゃない。あの化け物ヘルゼラフを倒す事に集中しすぎて、肝心な部分が抜けてると言ってるんだ」

戦闘モードの指揮官たちは思考が及ばないようで、返答に詰まった。ウェールズは少しイライラして、

「ああ、もう！ 本当に分からないのか？ 背後にガリアがいる可能性だ。あの化け物を倒せたとして、その隙に攻め込まれでもしたら……」

指揮官たちが言う。

「その線は薄いものではありませんか？ ガリア内部で、組織の被害に遭っているのは、現王政府派、元シャルル公派とも偏りがない。侵略行為に何も言わないのは不自然ですが」

「そうです。敵とするには、いささか根拠が足りないかと……」

だがウェールズは、

「可能性はある。あの化け物の処理は、ガリアに引き継がせるべきだ」

と言った。

「ガリアが認めるでしょうか？」

「認めるではなく、そうせざるをえないだろう。あの生物は、更に餌を求めて南下していくだろう。こちらがあれを放置してしまえば、ガリアも軍を動かさなければならぬ」

それに参謀長は、

「司令、何を考えているのです？ それでガリアが渋れば？ 無駄に犠牲を増やす行為です。賛成できない。世界がなければ国も成り立たないのですよ？」

と嫌悪を顕わにした。だがウェールズに考えを改める様子は無い。

「あの生物を倒すための戦力を動員してしまえば、アルビオンはしばらくは戦えない。この戦いに勝利したとして、もしガリアが宣戦布告してきたら？」

結果は明白。ガリアはハルケギニア最大の国家である。消耗したアルビオンなど取るに及ばないほどの戦力を保有している。

組織が壊滅状態の今、あの化け物を倒した所でメリットはあまり無

い。

「……確かにそれ、ありかもしれない」

何かに気付いたようにナツメが呟く。

小さな声だったのだが張り詰めていた者達には聞こえていたようだ。一斉に彼を見た。

「ナツメ殿、何か？」

「あ……ええ。あの化け物の倒し方、なんですけど……放って置けばいいんじゃないかと」

考えがあまり纏まっていなかったせいか、しどろもどろに答えた。

「ナツメ！ お前は何を言っている？ あれを放って置くなど、正気とは思えんぞ……」

ビダーシャルは表情こそ変化させないものの、語気を強めた。

「いや、すいません。放っておくっていうのは違いました。様子見です」

「様子見？ ガリア軍が消耗させた後に叩くのか？」

「いえ、むしろあの化け物を、倒してしまうかもしれないって事です」

すると指揮官達はどよめく。

「自作自演だとも言うのですか？」

「あれの開発に関わっていたのなら、その処理方法も知っている事になる。組織との繋がりが前提になりますけど」

つまり尻尾を出すまで監視し続けると言う事。

もしその通りだった場合、こちらの損害はほとんどでないだろう。だが指揮官達の顔に喜びの色は、あまり見られない。

それもそのはず、この作戦はかなり卑怯な上に、ガリアが白だった場合はとんでもない数の死者が出る。

そして巨大化し続けたベルゼブブを倒せるとは限らない。

可能性がある今、叩くべきなのだ。

だが黒だった場合、アルビオンはガリアに蹂躪される事になる。

どっちをとつても痛手を被る。

……………。

会議室はしばらくの間、静寂に包まれる。

そんな中、参謀長がまず口を開いて、

「司令、ご決断を」

とウエールズに迫った。

彼は気を落ち着かせるために、何度か深く息をすると答えた。

「……………我が軍は……………」

春も終わりに近づき始めた、ニユーイ（6）の月、ダエグの曜日（週末）。

ガリア王国首都リュティス。ヴェルサルテイル宮殿の中庭は暖かな陽気が射し、南薔薇花壇は色とりどりのバラを咲かせていた。

約二キロ平方メートルの土地に、赤、黄、白、中でも一際異彩を放つのが青。

幾度となく品種改良を重ね、ようやく完成した青いバラ。

王族の青髪にちなんで？ラ・ガリア？と名づけられた。

この薔薇園に投じた資金で小国が一つ運営できるそう。まったく、超無駄遣いである。

「無意味だったな」

言ったのはこの国の王、ジョゼフだった。薔薇園の中には愛人だった女性の死体。ナイフを突き立てられた胸からコポツと血が湧き出た。

そばにあった油壺の油を花壇に向けて撒いた。微塵も躊躇することなくぶちまけた。火打ち石でその油に火をつけた。

あつという間に燃え上がる数万エキュアの楽園。

ジョゼフはその光景を感情の無い目で見ていた。

「つまらん」

髪と肉の焼ける匂いが嫌悪の感情を呼び起こす。

くさい。油は死体を避けてかけるべきだったと、少し後悔する。

そうして炎を見つめていると、その向こうから一人の女が現れた。

両腕に大きな包みを抱えている。目深にローブを被り、燃え上がる炎を、熱を感じていないかのように歩いていった。

ジョゼフに忠実な使い魔、シェフィールドであった。

悪臭に顔を歪めそうになりながら、

「ジョゼフ様、アルビオンがベルゼブブを放置して撤退したようです」

「撤退？」

「はい。最新の情報ではオセルを超えた所です」

アツテムトから船では半日とかからない距離。それにジョゼフは類を緩ませる。

「勘付かれたか」

「どうなさいますしょう？」

その様子を見てシェフィールドも笑みを浮かべる。

「どうもしない」

「？ それでは南諸侯も飲み込まれてしまいますが」

「かまわん。これも実験だ。この国の善き貴族達がアレに食われて、余が悲しむかどうかのな」

最初はベルゼブブを倒そうという動きもあるだろう。だが勝てないと分かれば、逃げる少数の貴族、食われる多数の平民という結果が見える。

そしてその先にあるものは、ロマリアとガリアの国境線。

「ああ、ロマリアに着く頃には、どれだけ成長しているか楽しみだ」
シエフィールドはジョゼフの隣まで移動し包みを地面に置く。そして彼と同じ方向を向く。

「その頃には人の手で止める事はかなわないでしょう。何せ一番の有効手段は火、ですが魔王の属性は風です。核を壊そうにもあの中に飛び込んで、無事に済まないでしょう」

「おおミューズ！ 余のミューズ！ お前は どうしてこんな面白い化け物を思いついた！」

とジョゼフは彼女をきつく抱きしめた。シエフィールドの頬の筋肉が歡喜を表す。

「異世界の技術あつての魔法生物ですね。まさかあれを解読できる者がトリステインに居たなんて」

「その者には礼をしなければな。どこにおるのだ？」

それに彼女は「少々……」と言って、地面に置いた包みをほどいた。側面が透明なガラス張り、上下が金属の円筒。

「ほう、この者が」

ジョゼフはしげしげとその中身を見た。

「はい。名をタケオ・ササキ。異世界人です」

筒は液体と人の頭部一つで満たされてた。白い髪、しわくちゃな肌。

その臉がゆっくりと開かれる。

『何時までこのような愚事を、続けるおつもりか……お嬢さん』

疲れた嘆きがその口から漏れた。シエフィールドはその言葉も無視して、

「？^{ギアス}制約？をかけているので、命令に逆らえないようになっております」

それにより召喚されし書物（ただし日本語に限る）を解読させたのだった。

実際、中身はそれほど詳しく分かった訳ではない。

現在シエフィールドが理解している部分でさえ、ガリアの研究者たちと頭をひねっていた。

だが大まかな概念、曖昧な基準でも、ベルゼブブという恐ろしい生物を生み出してしまうのが魔法の恐ろしい所である。

「くつくつくつくつく、あははははははは！ ミューズよ、お前は最高だ！ はははははは、苦しいぞ！ こいつはどうやって生きておるのだ！」

「中の水が生命維持の役割をしているのですわ」

ジヨゼフはこれ以上に無いほど腹をよじらせて笑った。シエフィールドはそれを見て満足する。

『人の尊厳を奪う事が、そんなに楽しいのかね？ だとしたら狂っておる』

「首が喋っておるのだ、笑わずにはいられまい！ それにお前は、既に人ではないだろう？ 人間の首というただの肉の塊だ」

『こんな事……神でなくとも許す筈がない』

だがジヨゼフは無邪気に笑い続ける。神を焼こうとしている彼にとつて、神罰は恐れる対象ではない。

「俺を許すのは俺自身だ。お前に言われずとも、これが一般倫理からかけ離れている事など、とうに理解しておるわ」

『ならば何故……』

「さつき言っただろう？ 俺は悲しみたいのだ。ただ人と同じように、涙を流し嘆く程の悲しみを、感じただけだ」

心が震えない。

だから震わせるために世界を壊す。

城も街も村も、そこに住む人々もすべて破壊する。

そうすれば少しは心が動くだろうと。

それは今のジヨゼフにとって、究極的な願望……なのだが、

『できる訳が無い』

首に否定される。

「……何を言っている？」

『お前さんには、悲しむ事など出来ない。そう言っておる』

たかが首。それも平民のじじいの。しかしそれは粘ついた泥のようにジョゼフに絡みつき、言葉を強制する。

「……………どういう意味だ？」

『お前さん、さきほどの女性……………己の近しい人を手にかけておる。だが泣けない。そんな人間が、自分と無関係の者を殺した所で、どうして泣ける。人が人の死で悲しむのは、死者がその者にとって占める所が大きいからじゃ』

数は関係ない。ジョゼフにとって必要なのは質の良い悲劇である。大量に殺した所でそれは彼にとって、日常の延長でしかない。

「ならばどうしろと言っただ？ 俺はどうしたら泣けるのだ？」

最愛とも言えた弟を手にかけてしまった今、自分に近い者は居ない。居るのは昔の嫌な自分を映し出すような娘と、自分に復讐を企んでいるであろう姪。どちらも自分が殺して、心が動くとは考えにくい。

タケオ老人の首は、

『知らん』

と一言。

ジョゼフは命令する。

「答える。これは命令だ」

？^{ギアス} 制約？が発動する。魔法の光が目にと宿り、タケオ老人の首は虚ろになる。

『知らん』

それでも答えは変わらなかった。

「答えなさい！ 私は今すぐにもお前を殺せるのよ？」

『殺す？ もう既に死んでおるよ。今のわしが生きていたら、それは悪い冗談だ』

「コケにして……」

シエフィールドはあからさまな動揺を見せる主人に焦燥した。

彼女は主人の手駒である。一番優秀な。

だが主人が揺らぐような事があれば、駒としての存在理由が脅かされてしまう。

ジョゼフはさほど動揺しているわけではないのだが、

「……質問の仕方を変えよう。実のある感情を呼び起こすにはどうしたらいい？ 怒りでも憎しみでも構わん。どうしたら満たされる？ 俺は空っぽなんだ」

と聞いてしまう。

異世界人であれば、また違う考え方が得られるとも思ったのだからか。

しかしそれでも老人の首は答えない。

『知らんよ。会ったばかりのわしが、王さまの心内など、理解できるはずなからう。知りたいのなら、そちらのお嬢さんにも聞け。わしよりもずっと建設的な意見が聞けるぞ』

「ならば何を根拠に俺が泣けないとした？」

『わしの惨状を見て笑ったのが、何よりの証拠じゃ。破壊を繰り返した所で、悲しめやせん。むしろそれで笑うのだろうか？』

完全に否定された。

だが、そんなことでこの男が行動を改める筈もない。

「ミューズ、これを仕舞え」

シェフィールドは黙ったままシリンダーを布に包んだ。

ジョゼフは自分の感情が動くまで止まらない。

止まってしまえば、弟殺しにも意味は無くなる。

止まらないし、止まる気も無い。

ジョゼフは、テーブルの上に置いてある伝声用の鉄管を取る。

風魔法が付与されたガリアならではの魔道具は、同じ建物内のぐらいなら声が届く。

だがその鉄管を持った所でジョゼフの手は止まる。

^{アルビオン}魔王を落とすか、^{ロマリア}神を焼くか少し迷って、

「魔王にするか」

アルビオンとガリアの関係は、かなり悪い。

魔王に対する悪感情はロマリアに次ぐ。

ジョゼフは両用艦隊司令に繋ぐと、

「^{バイフテラル・フロットテ}両用艦隊、^{シーテ}軍港サン・マロンにおいて？種？を搭載せよ。目標、アルビオン王国」

いきなり命令を出した。
菅の向こうにいた提督は耳を疑い、

「……出撃でありますか？ 宣戦布告は」
と確認しようとするのだが、

「そんなものはいらん。どうせ悪魔の国なのだ、全て破壊しろ。城、街、村、人、全てだ」

「ですがアルビオンはたった今、組織と交戦中ではありませんか！
陛下が散々、討伐を遅らせ、彼らに押し付けてたのでしょうか！？」

「いいから命令に従え。奴らは消耗している。今が叩き時だ。ああ、
他国の干渉は面倒だから、貴様らはこれ以後、反乱軍を名乗れ。空
に上がって亡命するのだ」

「我々に始祖を裏切れとおっしゃるか！ 何を意図にそんな！」
いつもならただ命令に忠実なこの提督も、今回ばかりは我慢ならず
呆れた。
しかし、

「魔王の側に付く、と偽ればよからう。行った先で暴れまくれ。上
手くいったら、お前にアルビオンをくれてやろう」

上手い餌をちらつかされ、提督は揺れた。
アルビオン。

魔法技術と農業で急成長を見せる国。

亜人やエルフは邪魔だが、今のところ人間に比べてその数は少ない。

ジョゼフは無能のレッテルを貼られてはいるが、物欲や権勢欲を持ち合わせていないので、気前が良く見えるのだ。やると言ってやらなかった物は無い。

そういった人物像を加味して、提督は思考を巡らせ、

「了解しました」

と欲の勝利を示す返事を寄越した。

ワールドが活躍の決着直前

アルビオン軍がてんでこまいになっていた頃、トリスタニアは勝利で湧いていた。

『アルビオン軍の協力により、トリステインはディアブロ・コンキスタ撃退』という張り紙が街のそこかしこに貼られていた。

だが戦地となったラグドリアン湖は、まだ荒れ放題。現地では王軍が主導して復興を進めていた。

トリスタニアは、戦費による税が上がった事以外は、いつもと変わらず平穏だった。庶民限定で。

王宮の中は、役人が行ったり来たりと忙しい。

そんな城の周りを、当直のグリフォン隊が闊歩していた。

そろそろ交代の時間という事で、ピリピリした空気が少し和らいで来た頃だった。

「どうよ、後で一杯」

「踊る妖精亭いつもの店か？ お前、ほんとジャンヌちゃん好きだな」

「なな、何言ってるんだよ、遊びだよ遊び。平民相手に本気になるわけ……」

「大丈夫なのか？ 親御さんには何て話すんだよ？ 確かに平民との例はあるけど、かなり厳しいだろう？」

「だから違ってる！」

小声でそんな無駄話をしている所に、

「おい、まだ交代には一時間あるぞ。気を緩めるな」

ワールドは緊張を解き始めていた衛士を注意した。

「は！ 申し訳ありません！ リックの奴が恋の障害に悩んでいたもので」

「は！ 申し訳ありません！ だ、だから違うって言うてるだろうが！」

呆れたワルドはため息をついた。

「いいから……警戒を続ける」

「隊長もこの後どうです？」

「断る。あそこの店長が嫌だ」

そうして門の前に差し掛かった時だった。

「おーい、ジャン・ジャック！」

城の塀の上から人の声がした。隊員全ての注意がそちらに向く。そこには金髪で、四角い黒ぶち眼鏡をかけた男が座っていた。魔道具で変装したナツメである。白髪赤目の時とは違い、どこか温かみのある容貌であった。

「な、何奴！？」

侵入者に向かって、衛士の一人が叫んだ。

ワルドはその人物が誰か確認すると、

「あー、杖を下げる。知り合いだ」

ナツメは高さが十メートルほどの塀から、そのまま飛び降りる。

「今日はどういった御用向きですか？」

隊長が丁寧に対応するので、それなりの人物であると思ったのか、隊員たちは警戒を解いた。

「ジャン・ジャック、お前？偏在？得意だったよね？一度に何体まで出せる？」

と逆に質問されて、ワルドは嫌な予感がした。

「……六体ですが、それより前線はどうなっているんです？」

「結構酷い状況だよ。今日はお前を借りに来た。とりあえず話は現地であるから付いて来て」

「いや、ちょっと待ってください。何が何だか……それに自分はまだ当直の仕事が」

「それは大丈夫。さっき姫さんに言っただけだから」

「……なんですって？」

それはワルドだけでなく、隊員たちも似たような事を考えた。彼らはひそひそと、

「おい、王宮であんな人、見た事あるか？」

「いや、見たことない」

「誰か覚えてる奴いるか？」

「ウェールズ皇太子の使いとか？」

「それにしたって、？姫さん？は馴れ馴れしいだろ」

それを地獄耳で聞いていたナツメは、書簡から許可証を取り出して言った。

「だからアンリエッタ姫殿下に、直接申し出て、許可貰ったんだって」

書面には、『グリフォン隊隊長を扱き使っていいですよ』という内容の後に王家の捺印。

ワルドはそれを見て泣きそうになった。

「……分かりましたよ。行けばいいんでしょう？ 行けば……」

「ん。よし、じゃあ行くから、グリフォン降りて」

「え？ 船まで行くんでしたら、こいつに乗って行った方が……ってまさか……」

ワルドは少し青くなった。

「当たり前だ。船で行ってたら二日はかかる」

ナツメはむりやり引きずり下ろすと、彼を肩に担いだ。

「ちょっと待ってください！ だったら風竜を使いましょう！」

「その倍速で飛ぶから。ああ、酔っても今度は吐くなよ？」

ダミーの短杖を取り出し、「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ」

と、？フライ？の呪文を形式上だけ唱える。
すると、ふわり、ではなく、ゴオオオオ！ という音と共に二人は
打ち上げられた。

「いや、本当に待って！ アアアアアああああああああ
ああああ！」

空に彼の悲鳴が響き渡った。

彼らが去った後、残された隊員たちは、

「すごい？フライ？だ……」

「確かに、あんな凄いメイジなら、姫殿下と知り合いでもおかしく
ないな」

「ところで隊長、どうなるんだろ？」

「さあ？ 大丈夫だろ。あの人優秀だし」

と納得していた。

アツテムトの城から南に二百キロメートルほど南下した地点。

あまり高い山ではないが、平野が一望できる山の上にナツメたちは
いた。

彼の他には、ビダーシャルやルクシャナを始め、エルフの諜報部隊、
王軍の風メイジが七人、魂の抜けたワルドが一人。

風メイジは全員スクウェア、いずれも？偏在？を扱える者たちだっ
た。

地図を岩の上に広げたビダーシャルが、状況説明と作戦概要を伝え
ていた。

「散開し、八方向から調べていく。外延部に異常が見られなかった場合、残念ながら我々は、アレの中身を調べなければならぬ。そこで？偏在？だ」

開戦二十六日目、午後。

アルビオン王軍の撤退が、ジョゼフに伝わる少し前。

ナツメたちは残り、少数でベルゼブブを倒す手立てを探していた。

「近づけばあの触手が、絡めとろうと襲ってくる。我々エルフは、君たちの作り出した分身を援護する。偏在で近づき、ディテクト・マジックを唱えてくれ。魔力反応があれば、逐次報告するように。敵の弱点の可能性がある」

説明の間にも、三キロメートルほど先から極彩色の塊が近づいていた。ベルゼブブの進行速度は馬車よりも少し遅い程度だった。

獲物を見つけた部分だけが速度を増し、変形して襲いかかる。

「上層部の命令は、可能ならば奴を撃破せよ、との事だ。まあ、ほぼ無理だろうが……。それから作戦終了には、信号弾を三回、打ち上げる」

「敵は同じ形状を保っていないでしょう？ 核を見つけたとして、後からどのように、その場所を判断するのです？」

王軍のメイジがたずねると、

「船にバリスタ用の槍が一本積んである。ディテクト・マジックに反応するルーンを刻んだ特別製だ。目印に打ち込んでおけばいい」

「で、その彼は？」

別の者がワルドを指差した。
ナツメが連れて来たとはいえ、他国の人間である。人間もエルフも少しばかり警戒していた。

「彼は」

とビダーシャルは言葉を切り、説明しようとナツメを見た。

「トリステインからの協力者ですよ。彼は組織のスパイとして潜伏していました。偏在の不足要員です」

息を吹き返したワルドは、
酔いがさめた

「グリフォン隊長、ジャン・ジャック・ド・ワルドだ」

といつものようにビシッとキメ顔でそう言った。

「おお、かの？閃光？か！」

「なるほど、彼が……」

と彼を知る者は賞賛するような事を言い、そうでないエルフ達も、ナツメの協力者という事で疑心を取り去る。

実際、彼の實力は高い。偏在を扱わせれば、今いるメイジたちの中でも抜きん出ていると言っていていいかもしれない。

ナツメは小声でワルドに言った。

「頑張つとけよ？ 活躍しとけば、な？」

アピールアピール、と。

「……」

ワルドは小刻みに頷きながら、これはチャンスだと胸中で呟いた。これは自分が聖地に行くための、念願をかなえる足がかりだ。拉致同然で連れて来られたことなど忘れて、拳を固く握り締めた。

「では、班分けを発表する。メイジー一人につき、エルフ二人で」
「ビダーシャルがと紙に書かれた名前を読み上げていく。予行演習の時間がないので、急ごしらえの連携だった。全員が分かれたところで、

「ワルドだが、彼にはナツメとルクシヤナで組んでもらう。一番危険な場所になるから、注意するように」

「はっ！ 謹んでお受けします！」

見る者が気持ちよくなるような直立姿勢だった。対照的にナツメは嫌そうな顔をしていた。

それからビダーシャルは、敵の妨害があつた場合などの、細かいトラブルについての説明をした。

「理解していると思うが、この作戦に多くの人命が左右される。この先にいる者が、諸君にとって、疎ましい人間であるかもしれない」
既に飲み込まれた村もある。そしてベルゼブブの向かう先にあるのは神の国^{ロクスリア}。ここにいるメイジたちは一応、ブリミル教の信者だが、それ以前にアルビオンの人間である。宗教庁から目の敵にされて、良く思う者はいないだろう。

「はっ、ちょっとした妬みでしょう！ 言わせておけばいいんですよ！」

「それよりビダーシャル殿、アレを倒した時の褒章について聞いてませんか？」

やる気は十分だった。

説教じみた話はいらなかった。

「では散開。各自幸運を祈る」

ビダーシャルが言うと、一同はわらわらと散って行った。

それから数分が経つと、巨大な塊がナツメたちがいた場所に到達した。

通った後には草一本残っていなかった。分かりやすく茶色い地面がむき出しになり、それが北の方角に伸びていた。

肉を食った後に、野菜が食べたくなったとも言っのか。

「あんまり大きくなってないわね」

「動くのにエネルギー使ってるんだろ。食べるたびに使うから大きくなる」

見た瞬間の形状は、大体円形で、直径三百メートルといったところか。ルクシャナが言うのにナツメが答える。

「食っちゃ寝じゃなくて、食って動いて大きくなる……これだけ言

うと、なんだか凄く健康的ね」

「見た目は、超気持ち悪いけどな」

五百メートルは離れているというのに、酷い匂いだった。

ルクシャナは鼻を摘んだ。流石の彼女でも嫌悪感が好奇心に勝ったらしい。

「……………あんなもの、どうやって」

初見だったワルドはそれ以上に、憔悴していた。

「はいはい、気持ち悪がるのはそこまで」

ナツメは、ぱんぱんと手を叩いて言った。

「じゃあルクシャナは外延部で、彼の本体を護衛してて。ジャン・ジャック、一回目の偏在。まずは一体からで」

とナツメは言うと、ワルドは頷いて呪文を唱える。

「ユビキタス・デル・ウィンデ」

すると風が人の体を構成して、ワルドを造りだした。

何度見ても不思議だ。こんなに精巧な分身をどうやってイメージしているのか。良く見ると杖の傷まで再現されている。目を凝らしてみると、精霊が構成しているのが見える。

「お前がその調子じゃ、アレの中に放り込めないじゃん」

ナツメは動揺しているワルドに言った。

「ちょ！ アレの中に行くんですか？ 私が？」

偏在ワルドが叫ぶように問うた。

「うん。だってそのための偏在だし」

「放り込んだ所で、すぐに捕食されます！」

「というか偏在って、何で体温まで再現してるの？ 体温さえ再現されてなかったら、こんな苦労せずに済んだのに」

ベルゼブブが熱探知で動物を探しているのは、この時点ではぼ明らかだったのだ。

「文句は始祖に言ってください。というかあなたは使えないんですか？」

「使えたらお前なんか呼ばない。大丈夫だって、ちょっと心に傷が残るぐらいだから」

「……忘れないでくださいよ？」

「そんなに心配しなくても約束は守るさ。生き残れたらね。ああ、用済みになって後ろから刺すとかはしないから、そっちの方も安心して」

冗談でもそんな事を言われて、ワルドは想像してしまう。彼は自分を信用していたとしても、エルフは、例えば自分を援護する彼女は？

気が抜けない。

このジャン・ジャックという人間が、どのような者なのかを行動で示す事で、聖地行きをより円滑に進めるのだ。

本体と偏在は同時に頷いた。

彼らのやり取りを見て、疎外感を覚えたルクシヤナはナツメに聞く。

「約束？ 何のこと？ まさか二人して、いかがわしい店に行くとかじゃないでしょうね」

「違っつて。彼がシャイターンの門、見たっただけだよ」

シャイターンの門？ 現地での呼び名だろうか。いや、というかナツメ、何喋ってるんですか！？

「？ 彼も狂信者？」

「そうなのか？ ジャン・ジャック」

とナツメとルクシヤナはワールドを見た。二体のワールドはぶんぶんと首を振って否定する。

「違っつてね」

「ふーん。……後で詳しく聞いときなさいよ？」

ナツメは「はい」と軽い返事をして、

「それじゃ、作戦開始といこう」

偏在と共に飛んだ。

同じ頃。

ネフテス評議会本部、カスバの会議室。

「森林環境課、礼拝堂管理委員会、ん？ ……失礼、イスマイリ在住のラーミーさん、以上が聖地に関する情報開示を要求します」

書記官が議員に囲まれて調査書を読み上げる。

「正式にはありませんが、カスバに直接、開示を求める者も六十名ほどいます」

「となると潜在的には、もっと多くの者が気付いているか……」

議員の一人が呟く。連鎖的にそれは広がり、ある者が、

「そうですね。うちでも十歳のひいひい孫が、『あの森林の回復速度は普通の森とは違う』と得意気に、レポートまで突きつけおった。子供が気付いている異変だ。おそらくは……」

他の一般人も異変に気付いている、と続けなくても簡単に予想できた。

するとナツメが封印されてから当選した、若い議員が、

「優秀なお孫さんですな、ヤイーシュ殿。ですが今は、孫自慢の間ではありませんぞ」

「だが事実じゃ。おまけに『救世主さまに何かあったんじゃないの？』じゃと！もう末恐ろしくて、ちびったわ！」

「下品な物言いは止めていただきたい。会議中ですぞ。それとも、そのような事も分らないほど耄碌しましたか？ そろそろ引退なさっては？」

ヤイーシュ議員は嘲るように言う。

「ふん！ 若造が言いよる。わしは少なくとも、ナツメ君が帰ってくるまでは、現役続行よ」

ムキになった若い議員、マジドが言い返す。

「その呼び方はいささか無礼ではありませんか？ 彼の者の許しを得たとはいえ、聖者、神と同義なのですよ？」

老人はあからさまにため息をついた。

「はあ……これだから若造は。直接見もせず、よく言えたもんじや。彼は年寄りを大事にする好青年じゃよ」

すると若い方は言葉遣いを崩して、

「くそジジイが。アンタこそ、救世主をそこらの畑に生えてるにんにくと勘違いしてんじゃねえのか？」

そこでダンッ！ と机を叩く音。

「耄碌ジジイも、見識の足りん若造もいい加減にしろ」

議長席に座っていた初老のエルフ、テュリユークは重々しく言った。

「話を戻すと、そろそろ限界だ」

情報規制が。すぐさま切り替えたマジドが尋ねる。

「となると、発表なさるのですか？」

「虚実を混ぜて伝える事になるだろうがな」

虚無シャイターンが連れ去った、という事実をそのまま伝えれば、彼らに起こる感情は一つ。

怒り。

暴動から戦争に発展しかねない。

『救世主は人間世界へ、シャイターンの復活を止めに行った』と発表するのが無難な手だった。

だがそれでも、その後にかかるであろう諸々の問題が彼らを悩ませる。

バン！

議員達が沈黙し、策を練ろうとした所で会議室の扉が勢いよく開いた。

「アリーか。一体どうしたのだ？」

まさか最悪の事態が？ と会議室内の空気が反転しそうになった所で、

「人間世界から、連絡が来ました！」

と書簡を取り出した。そしてテュリユークの席まで行き、それを渡した。アリエーは一礼して下がるうとするのだが、

「聞いていくといい。彼とは友人なのだろう？」

とテュリユークが引き止める。

「いえ、友人などでは……」

アリエーは少し逡巡して「わかりました」とテュリユークの後ろに立った。

そして書簡から紙を取り出すと読み始める。アリエーは後ろから文面を盗み見た。

「ふむ……個人的な物も混じっておるようだな」

一枚、二枚、三枚と流し読んで机に伏せていき、六枚目になってようやく本文に入った。

「……なるほどな。回して読んでくれ」

と六枚目と隣の議員に渡した。

テュリユーク頭領が話を始めないことから、よほど事態が悪化しているのかと雰囲気为重くなった。

全ての議員が目を通す頃には、一時間近くが経っていた。

ナツメの無事に議員各々は、ひとまず胸を撫で下ろしたのだが、

「さて、報告を読んで状況は理解したと思う。まったく、困った救世主だ」

テュリユーク頭領は疲れたように言った。

「ですがむしろ、この程度で済んで良かったほうです。空の国など、話に聞いていたよりも、ずっと友好的ではありませんか」

「確かに驚きだ。信仰する神が違う、まして異なる種族が、同じ土地に……にわかには信じられん」

それにマジドが苦言を呈する。

「だが戦争を始めるとは、些か軽率ですな。事態が急を要するのなら、増援が来るまで開戦を引き伸ばすべきだった」

「今、彼が言ったように、増援は必要だと私は考えるが」

と頭領は見回す。異論は無いようで、各々が頷いて応えた。

公式にナツメが人間世界に行った事を発表すれば、勝手に人は集まるだろう。集まり、救世主の力にならんとする運動が起こるだろう。放置しておくほうが寧ろ危ないのだ。

「では 軍を派遣する。率いるのは……私はマジド議員を推薦するが、他に意見は？」

反対意見は出なかった。先ほどいがみ合っていたヤイーシュ議員もうんうん頷いていた。

マジドはそれに歓喜した。頭の中だけで。

因みにマジドは戦士としては下から数えた方が早い。精霊の扱いについても。ただ、頭と舌だけは良く回った。

だから『大いなる意思』に会ったための試練は抜けた事がない。自らが信棒している神がどのような者なのか、残りの一割ほどは理解し

ていなかった。

「ではマジド議員、うちの困った救世主を、向こうの国に取られないよう、頑張ってきたまえ」

可決するとテュリユークが言った。

会議が終わり議員達は席を立ち、部屋から出て行く。

マジドは上機嫌でアリーイーに話しかけた。

「ところで、アリーイーと言ったね。君は救世主と近しいそうじゃないか。君から見て、ナツメ殿とはどのような人物なんだい？」

「性格破綻者です」

アリーイーは考える素振りも見せず、反射的にそう言った。
マジドはペチっと自分の頭を叩いて、

「いやいや、君、友人なのだろう？　いくらなんでもそれは」

「性格が破滅しています」

余計悪くなった。

「そうですね……今でこそ、もう恨みはありませんが、奴と私は相容れない存在なのです」

「喧嘩するほど、ということではないのか？」

「ありえませんが。アイツに文句は言えても、賛辞や友情の類の言葉は……正直、胃に穴が開きそうになる。マジド様も気を付けた方がいいです。アイツは義理堅いが、気のない振りをして、油断した所を搔っ攫っていく狡猾さを持ち合わせています」

「いくらなんでも、そこまでは」

「いいえ、あなたの信仰心がその目を曇らせているんです！ アイツは聖者とは程遠い、猫好きの変態だ！」

アリーは拳を振り上げて力説した。

「そもそもですね、アイツが聖者たる根拠は、まったくの偶然なんです。偶然アイツが大いなる意思に選別され、その聖地を偶然発見したから、今のような状況になっているんです！」

「その？偶然？が、神に選ばれた、その事実が重要なのではないか？」

「……その神の選別基準、どんなものだったと思います？」

マジドは「分からない」と即答した。

『大いなる意思』に関する記録は、ここ十年でかなりの数になっている。そのほとんどに目を通していたが、代行者の選考基準など聞いたことも無かった。

「壊れにくい精神、だそうです」

「……高潔な、とか清廉潔白、とか付いたりしない？」

「付きません。むしろ縁遠い！ 欲望に忠実な男です」

だがそこまで言っていてアリイは言葉を止める。しまったと弁解に移る。嫌いでも憎んではないのだ。

「……………ま、まあ、これはあくまで私の見解ですので、参考程度にお考えください」

「あ……………ああ、覚えておこう」

巷ではナツメの親友とされていたのだが、間違いだっただのか。物事は実際を見るまで、その本質は分からないものだ。それと同じ事だろうと、マジドはナツメの評価を下方修正しておいた。そしてこれは後に、実際見たときのがっかり感を減らす事になるのだが、それはもう少し先のことだった。

ヒュウオオオツ！

上空から硬質で鋭利な風が振り下ろされる。

先端が槍のように圧縮された空気は肉塊に深々と突き刺さり、解放される。

爆発音と共に肉片と液体が飛び散る。

直径が二メートル程、底までが三十メートルほどの穴が出来上がった。その穴に風を押し込む。押し込んで、肉を引き裂いて、穴をどんどん広げていく。直径が五メートルほどになって、

「いきますー！」

ワールドは合図と共に、ナツメは彼の偏在を一体、穴に落としした。作戦開始から、一時間ほどが経過した頃。ベルゼブブの外延部にはやはり核は無く、中心部を調べる事になった。

視界が一面、肉になる。幸い牙の生えた口は、徐々に増え始めているものの外側ほど多くはない。だがその壁面を目を懲らして見た瞬間、

「うっ……！」

思わず目も鼻も、生暖かい風を感じている皮膚、関係の無い他の五感も遮断したくなるような光景が目の前にあつた。

千切れた手足、胴体、頭、どれも消化されかけたもので、全身の毛が逆立たせる。

種類は人間、家畜、亜人。細かく分類すると、更に多かつた。そして規模が違いすぎた。

人間が抵抗できるような代物ではない。

これに飲まれて無事であるのは栄養にならない無機物ぐらいだ。

……しばらく肉は食べそうにない。

そしてナツメが制御している風により、ワールドは浮いたまま呪文を唱え始める。

通常、メイジは一度に二つの魔法を行使できない。発動後、効果が残るタイプならば別だが、フライを唱えながら、探知ディテクト・マジックなどという芸当は、普通出来ない。

吐き気がすると同時に、不謹慎ながら、新鮮な体験だと思った。ディテクト・マジック探知を発動する。

光の粉が宙を舞い、肉の壁を透過するように伸びていく。魔法効果が切れるまで待っても、反応は無い。

ギョオツ！

急に肉の壁から触手が伸びる。

風に阻まれ、寸での所で止まった。

「はあ、はあ、はあ……」

ごくり、と喉を鳴らし、再度、呪文を唱える。

肉がガンガンと風の防壁を叩き、突き破ろうとする。

二度目の探知は……ディテクト・マジック……やはり反応が無かった。

ワルドはそこでもうこの偏在に、魔法を唱えるだけの精神力が残っていないと判断し、

「限界です！ 引き上げてください！」

と叫んだ。

聞こえているのだろう、風が偏在の体を上昇させ始めた。

だがその間にも、おぞましい肉塊はワルドを捕食しようと、ゴリゴリ風の壁を締め付け 遂にはそれを突き破ってしまう。

「 ……！？」

だが幸いにも、そこで偏在に綻びが生じ、消滅した。

「はっはっはっはっ……」

分身の記憶が本体に戻ると、顔と背中から汗が吹き出た。

言い知れぬ恐怖が全身を支配し、思うように体が動かなくなった。

「急に凄い汗……。だ、大丈夫？」

ワルドを気遣ってか、ルクシャナはハンカチを取り出すと、彼の顔に当てる。

「……大丈夫……です。お気遣い無く」

と強がる。

気力を振り絞り、恐怖を思考の隅に押しやり、無理に体を動かす。地面に手を掴み、草を耄り取るように力を入れると立ち上がった。そして深呼吸する。

視線、数百メートル先に、蠢動する肉塊が遠ざかっていく。さっきまで自分はアレの中にいた。

分身の命は偽物だが、恐怖は本物だった。

ワルドがそこまで考えた所で、ナツメが飛んできた。着地すると、彼の方に走り寄る。

「どうだった？」

ワルドは首を横に振った。

核は発見できなかった。

ということは、再度、分身がアレの中に入る必要があるという事。気が滅入る。

「……お前、顔真つ青だぞ」

ワルドの変化を感じ取ったナツメは言った。

「大丈夫です。次は上手くやれます」

「あれは穴を開ける場所が違ったんだ。とりあえず、まだ時間的な猶予はある。少し休もう」

「だから大丈夫だと……！」

ナツメの申し出に、ワルドはムキになった。

「明らかに大丈夫じゃない。休まないとダメだ。十分か二十分でもいいから、落ち着こう」

ワルドはその場に座り込んだ。

「……あの壁を直視したんだな」

ナツメも精霊を介して見ていた。ワルドは声を荒げた。

「アレは一体何なんだ？ 組織があんな物を作っていたなんて、俺は聞かされていなかった！ 知っていたらあんな物……」

「お前のせいじゃないさ」

「でも知っていたら……あんな物……」

「知っていても、どうにもならない事の方が多し。お前が悔やんでいる物は、そういう類の物だ」

だがそこでルクシヤナが、

「うわあ、汚ねえ……こいつ今、責任転嫁したよ」

と蔑むような視線をナツメに送った。

「……………まあ、そのねえ……………分かってるけどさあ……………！」

組織はナツメがいろいろやり過ぎた結果なのだ。それがワルドを追い詰めるような事になり、彼は非常にばつが悪くなった。ルクシヤナは目に涙を溜め、

「酷い！ 何て酷い人！ 何が酷いかって、もちろん責任転嫁もだけど、さっきから私に全然構ってくれないじゃない！」

「作戦の内容上、仕方ないからね」

「だからって『大丈夫？ 怪我はない？』の一言も無いじゃない！ お年頃の乙女な私は、そういう甘い言葉を欲している！」

「じゃあ、あれか？ 『そうだね……………ごめんよ、愛してる。許しておくれ』とでも言えばいいのか！？」

「……………げ、気持ち悪っ」

「どうしたらいい！？」

「定型的な突込みしか出来ないあなたが気持ち悪いわ」

「しかも時間差攻撃だった！」

とナツメが叫んだ所で、ワルドが「はははっ」と笑った。

「あ、復活した」

とルクシャナ。ナツメは疑わしげに、

「はあ？ 笑わざるをえなかったんじゃないの？」

「いえ違います！ 違うんですよ。本当に……違うんです」

言うてから、ワルドはおもむろに空を見上げた。

「なんだか、あなた達を見ていたら、両親の事を思い出してしまっ
て……」

「……やだ、私達そんなにおしどり夫婦に見える？」と頬を染める
ルクシャナに対し「いや、ここの空気は読もうよ」と呆れ顔のナツ
メ。

「そうですね。でも私の両親は、そんなに賑やかではありませんで
したよ」

賑やかではなかった。

過去形にしてしまっているという事は、おそらく彼の両親は……。
ナツメは彼に対し、申し訳なさがこみ上げてきて、

「ジャン・ジャック……、すまん。辛い事、思い出させちゃったみ
たいで……」

しかしワルドは、

「何を言ってるんです？ 私の両親は健在ですよ？」

「は？ でもさっき過去形にしてたじゃん」

「それはここ数年、スパイに戦争と、忙しくて実家に帰れなかったからです」

という事は、とナツメが気付いた時には遅かった。

「『すまん。辛い事、思い出させ」

「その口を閉じる！」

早速、ルクシャナが真似を始めた。そんなルクシャナを見てワルドは呟いた。

「……なるほど」

「お前も僕をからかうつもりか！」

「そうではありませんよ（今のところは）……少し、反省したのですよ」

それからワルドは急に意気盛んな様子になり、

「さっきは申し訳ありませんでした！ たかが分身が死ぬ程度で、あのように取り乱すなど、私もまだまだですな！」

はははは、と笑い出す。

既に二体の偏在と、十回弱の探知ディテクト・マシニングを使用している。

そこから自分の精神力残量で、できる事を大まかに計算する。

「後二体の偏在、あの化け物の中に、放り込んでください。このワルド、？閃光？の名にかけて弱点を見事、探り当てましょう」
決まったと思ったのだが、

「おい、ルクシャナ、あんな恥ずかしい格好つけた言い回しは、からかう対象にならないのか？」

「そもそも、あなた以外の人をからかう、という発想が私には浮かばないわ。どうでもいい人をからかって、何が楽しいの？」

ハルケギニアの価値観は、二人には当てはめられなかった。
ワルドは決まりが悪くなった。

そうして偏在、二人目。

先ほどと同様の合図と共に、ワルドは穴の中に飛び込む。

一回目に見た、人や動物の残骸は、肉屋が家畜を解体する時の臓物程度の物に収まる。

探知を唱える。反応は無い。

そうして、捕食されながら五回ほど探知を唱えて、それも成果無しに終わる。

他の組は、外延部でエルフが肉塊を魔法で削り、そこにメイジが探知を唱えるという手法をとっていた。

核、ということであるからには、中心部に存在するのが常である。
すなわち発見の可能性は、ワルド達が一番高いと思われていたのだが、

「ナツメ！ 北西だ」

一番深く掘り進んでいたビダーシャル叫ぶ声が精霊によって拾われる。

「ワールド、見つかったかもしれない」

偏在ワールドを担ぎながら、宙に浮いたナツメは言った。

「核ですか？」

「ああ、あっちだ」

とナツメはビダーシャルのいる方角を指す。

これから三回目、ラストワールドを穴に放り込むところだったのだが、手を止めてビダーシャルの所へ飛んだ。

ビダーシャルの居る場所に到達すると、

「そのままそこで聞け！ この先にわずかだが、反応が見られた！」

カウンター

と？ 反射？ で巧みに肉塊を退けていた。もう一人のエルフは炎を操りながら、ビダーシャルが防ぎ損ねた触手を、的確に焼いていた。

そして限界が来て、ビダーシャルたちは撤退した。

「何と言っていたのです？」

騒音に混じって、声が聞き取れなかったワールドは言った。

「ここに核があるかもしれないんだとさ」

言いながらナツメは最初と同じ手順で、ベルゼブブに大穴を開ける。

「さて、これしくじったら、次はかなり先になると思っけど、何か言う事ある？」

メイジが精神力を消費しきると、その回復にはそれなりに時間がかかるのだ。一週間、一ヶ月と。

「私よりあなたの開けた穴が、間違いという可能性の方が高いと思いますかね」

「……じゃあ、もうちょっと広くしておこうか」

すると穴の中に風が吹き込み、ギリギリと穴を更に広げた。ワルドは自信有り気に、

「言ったでしょう？ 次は上手くやれると」

と穴に飛び込んだ。

三回目ともなると、敵の動きを目で追うぐらいの余裕が生まれる。

核が近いせいなのだろうか、取り込んだ生物は完全に消化され、壁は滑らかなピンク色だった。

また肉の動きは激しい。風の結界を締め付ける力も強く、先の二回よりも時間は無いだろう。

ワルドは探知を唱える。

早速、小さな反応が返ってきた。

光の粉を撒き散らしながら、方向を絞っていく。

素早く三度ほど繰り返し返すと、それはほぼ確定する。

残りの探知は二回。

行ける！

そう思ったところで、触手が偏在の、残り少ない命を摘み取ろうと伸びてくる。

ワルドは反射的にブレイドを唱えた。

ギチリッ。

粘質の強い肉を切り裂くのは力が要った。

しかし鉄杖で払いのければ良かったと気付き、ほんの一瞬だけ悔やむ。

残された精神力は、探知二回には足りなかった。かといって一回には多すぎる。

ここで取れる最善の行動は　。

「ナツメ！　結界を解いてください！」

ワルドは叫んだ。

風が動揺する。おそらくこれは彼の感情が伝わってきているのだろう。

再度、声を張り上げる。

「結界を！　解け！」

すると彼を守る風は取り払われた。

触手が伸びてくる。

無防備な姿をさらし、無抵抗のままワルドは壁に取り込まれていく。探知の呪文を唱えながら。

詠唱が終わると同時に肉に沈み込む。

杖からでる探知の魔法を操り、調べる方向へ伸ばしていく。

グチャボキリ。

彼の左腕が 牙のついた口にだろう 噛み千切られた。
偏在の構成を保とうとする意思と、千切られた部分から崩壊しよう
とする動きがせめぎ合う。

感じる不快感はまるで痛みそのものだった。

そうした数秒の間に、探知の魔法は奥へと進んでいく。
徐々に返ってくる反応は大きくなり。

捕らえた！

そこで偏在ワルドの頭は大きな口に飲まれ、潰された。

ワールドが活躍の決着直前（後書き）

クリスマススイヴにこんな……不毛な妄想を吐き散らすなんて……。主人公にほれ薬とか飲ませてみたい。真実の鏡イベントとかもやってみたい。だがもう少し書かないと、話の流れがそれを許してくれない。

シリアスしたいのに、何時の間にか変な方向に行ってしまう。

とりあえず一区切りの決着

ズキン。

軽い頭痛と共に胃の中の物を吐き出しそうになる映像が頭に流れ込む。

偏在の記憶が本体に転写される衝撃。

通常よりも強烈なその記憶は、強く瞼に焼きついた。そうして痛みが引くとワールドは、よろよるとなりながら、

「……見つかりました。今、ナツメが開けた穴の、高さ十メートル、南南西に七メートル程の場所に……」

と報告するのだが、ビダーシャルは彼に肩を貸して、

「お疲れのところすまないが、もうひと踏ん張りだ」

彼は先ほど合流し、ルクシャナと護衛を交代していた。

風石の付いた指輪を発動させ、少し速い？飛行^{フライ}？の魔法ぐらいのスビードで飛んだ。

「核は親指ほどの球体でした。信じられない、あのような小さな物が……これほどの破壊を……」

「できそうか？」

核の破壊。

上層部の命令では『可能ならば』という事だったが、

「……そうですね、可能でしょう。新しく穴を作り、火薬を放り込

めば。ですが、あの生物の中は水のようにでした。核の位置は変動するかもしれない。早く手を打たなければ」

それを聞いたビダーシャルは舌打ちをし、ナツメのいる方向に向かって叫ぶ。

「聞いたか！ 核は移動する！ 新しい穴をすぐに開ける！ こっちは火薬を用意する」

直後、不自然なそよ風が彼らの周囲に纏わりついた。ナツメからの返答である。現地とここでは、三キロメートルほど離れている。ワルドはそれに舌を巻いた。

そうして待機していた小型艇の甲板に着地する。ビダーシャルは近くに居た見張り員二人に指示した。

「作戦は終了だ。信号弾を」

言うと、二人は敬礼をして、一人は操舵室に、一方は信号弾に点火をした。ボシュボシュボシュツ、と三発の光が上空に上がった。それから二人は操舵室に行く。ビダーシャルは入るなり、

「船長、船をナツメが飛んでいる場所まで飛ばしてくれ。作戦部隊の回収は後回しだ。あの化け物、倒せそうだぞ」

変更を簡潔に伝える。

すると船長は、

「それはなんと！ 流石は魔王だ！」

「ナツメではない。核を発見したのは彼だ」

ビダーシャルはワルドを指して言った。
すると操舵室の面々は、

「おお、トリステインの！ 若いのにやるな」

「全くだ。トリステインは腰抜けぞろいかと思えば、中々骨があるな！」

と褒めそやす。ワルドは疲れた様子をおくびにも出さず、いつもの格好いいワルドだった。

「他の連中にも伝えてきます！」と伝令の者が部屋を飛び出そうとすると、ビダーシャルは、

「砲術長に、火薬を集めるように言ってくれ。予備も含めて全部だと付け加える。」

「火薬ですか？」

「ああ、核の近くで爆破するのだ。あの生物、図体はでかくとも弱点は小さな球体だ」

ワルドは人差し指を親指で輪っかを作り、大きさを示しながら説明した。

船長は「……なるほど、よし」と。そして、

「出撃だ！ 碇を揚げよ！ 帆を張れ！ 目標は南東に御座す魔王様だ！ あの怪物は倒せる！ 我々が、あの怪物を倒すのだ！ あの方はその手伝いをして下さる！」

それは瞬く間に伝播して、船の中は沸き上がった。

「南南西に七メートル、と」

ナツメは先端を鋭利な形状にした槍のような風を、ベルゼブブの体に突き立てる。

ギョルギョルと肉を断つ。

びゅるん、と上に向かって突き上げられる肉の触手。術者を捕まえようと這い上がってくる。

嫌な感触。

確かに他の個所とは違う。消化されつくしているので生き物の残骸は無く、切断面は滑らかだ。

しかし空気は生暖かく、擬音に表すのが憚られるような音が精霊を介して伝わってくる。

このまま自分の攻撃が核に直撃してくれば終わりなのに、と思っただけが早々上手くはいかないらしい。穴を広げても、肉は相変わらず活発に蠢いていた。

「……そろそろ疲れて」

きた、と言いつうになった所で、小型艇が接近するのを感じた。

十数メートル離れた地点で船はホバリングすると、

「火薬袋を穴に放り込め！」

ビダーシャルの声だけが風の騒音を掻き分け、耳に入る。

甲板には火薬袋が導火線で束ねられた人間三丁四人分ほどの物と、一袋の物。そして大砲が穴に向いている。

彼の意図を読んだナツメは火薬袋を風で操り、一袋の方を手元に、束ねられた方を穴に落とすとした。

火薬袋の口を開け、黒い粉末を撒く。それらは風で巻き上げられ、一筋の黒い線上になり、穴に伸びていく。宙に浮いた火薬の導火線そして爆音と共に、ルーンの刻まれた砲弾が炎を纏い飛び出す。

それに合わせて火薬の線を操作し、砲弾に接触させる。バチバチバチつと炎が走り、穴の中に消える。

導火線に燃え移ると、走る炎は瞬く間に連鎖的な反応をする。それは文字通り、瞬き一回もない間だった。

頭が割れるような轟音。

魔法効果の付与された、大量の火薬は凄まじい爆発を引き起こした。炎の柱が穴から飛び出し、怪物はおぞましい悲鳴を上げた。

キノコのように煙が上がり、爆発の方が治まると、「どうだ?」「やったのか?」「死んだのか?」という声が拾われナツメの耳に届く。

「生存フラグ立てるなよ……」

ナツメは叫びそうだったが、理解できる者が居ないので一人呟いた。それから十数秒が経ち、肉の内側から黒ずみだす。

ピンク色の奥から黒い絵の具が這いまわるように。

それと共にベルゼブブの活動は徐々に弱まる。

終には、活動を停止した。

ワアアアアアアアアアア!!

甲板から歓声が上がった。乗っているのは三十人ほどなのだが、聞く者がその何倍も居るような錯覚を受けるほど、彼らは叫んでいた。字面通り最大の敵。何万もの人間と生物をのみ込んだ化け物を、自分達の手で滅殺した。

その達成感に打ち震える者達。

「ひとまずは安心……………じゃないな……………」

ナツメは長い息を吐く。

区切りはついた。

しかしこれだけ苦労して、手に入れた秘宝は二組。トリスティンは引き渡しの際に一悶着ありそうだし、ロマリアは何か隠してそうだし。

あと何回だろうか？ 死ぬような目に遭うのは。

それにガリア。

尻尾を出させるつもりだったのだ。

ベルゼブブへの対応次第で、黒だとはつきりすれば攻め込む大義が立つ、のだが、

「やっつけちゃったからなあ」

多数は手放して喜んでいるようだが、ナツメはそんなにはしゃげない。

次があると分かっているから。

あの化け物を野放しにしておけば更なる犠牲が生まれる。それを防げたのは良かったのだが……………。

そうしてネガティブな思考で染まりつつある所に、

「うおーい！ ナツツメー！ 置いてくわよー！」

とルクシヤナが甲板から、満面の笑みで手を振っていた。

ナツメは仏頂面を崩し、笑みを浮かべる。

まあ、悪い事ばかりじゃないか。

ひとまずそこで後ろ向きな思考は打ち切り、今は素直に喜んでおくことにした。

走る。

息が苦しい。全身の筋肉が休ませると叫ぶ。

だがそれも、徐々に分泌されるアドレナリンのせいかな痺していく。トランス状態になりながら全身の反復運動を繰り返す。

才人は森の中を走っていた。

木々の間から射す陽が、点滅するカメラのフラッシュのように眩しい。

それと一人で走っている訳ではなく、

「どうした！ ペースが落ちているぞ！」

後ろから走りながら彼を叱咤するのは女性だった。前で切りそろえた金髪が風で巻き上がる。

アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン。

トリストイン銃士隊の隊長で非メイジ、才人の戦闘訓練を担当している。

才人は彼女の怒声を聞くとムキになってペースを上げた。どうせ後少しの距離、限界を越えてみようと懸命に体を動かす。

地面に足をつき、蹴るたびに苦痛がどんどん自分を締め上げる。

だがゴール、モード大公が所有する農場の入り口が見える。

それとルイズが見える。

彼女は椅子に座りながら本をめくっていたのだが、才人に気付くと顔を上げる。

そしてラストという事で、アニエスがペースを上げてきた。何度も負けているがそろそろ勝ちたい。女性（一応だけど）に負けるのはどうか？ ルイズに格好悪い所は見せたくない、男の意地が才人の中で湧き上がる。

「はっはっはっはっはっ」

破裂しそうな心臓と足を更に動かして、才人はアニエスと並んだまま、農場の門を通過した。

「……頑張るわね」

ルイズは、ゼーはーゼーはーと荒い呼吸の才人に水筒を渡す。「ありがと」と、才人はそれを受け取ると口の中をゆすいだ。水を吐き出すとねばついた唾液が薄まり、不快感が取り除かれる。アニエスはある程度呼吸を整えると言う。

「十分後に剣だ」

才人はそれに短く返事をしながら、胃液で酸っぱくなった口の中を更にゆすぐ。

「うあー、きつ」

と大の字に寝ころんだ。

抜けるような青空、流れる白い雲、気持ちの良い風。それらが言いようのない爽快感を与えてくれる。

「だいぶ走れるようになってきたじゃない」

ルイズは感心して言った。

「最初は全然ついて行けてなかったのに」

まだ一ヶ月も経っていない。

とは言っても、地球で高校生だった才人は運動部に所属していた訳ではない。体育の時間に走っても横っ腹が痛くならない程度。ほとんど空の器に水を注ぐように、やればやるほど体力は向上していく。だがそれは、裏を返せば急なハードトレーニングだったわけで、

「無理してない？」

ルイズは、毎日限界を超えるような事をしている才人が少し心配になる。

「結構きついけどさ、やってると意外と楽しいよ。明日の筋肉痛は怖いけど」

「あんだ、つづいたら凄い事になってたもんね」

訓練二日目の朝、ぴゃう！ あぶん、やめてえ！ と悶えていた。才人はそれを思い出すと、

「……仕方ないだろ。こつち来る前はこんなに動いた事なんかなかったんだから」

と少し赤面する。

才人は無性にやり返したくなる。だからからかう話題が見つからない。

「お前の方はどうなんだよ？」

「うん。これと言って成果は無し。どれも肝心な事が載ってないのよ」

とルイズは首を振った。持っていた宗教庁監修の『始祖の祈祷書』の二頁を才人に見せる。簡単な文体であったので才人にも読めた。

「ほらここ『彼らを脅かす敵が現れました。ブリミルは弟子たちと協力し、脅威を打ち払いました』って、どうやってやってんのよ！過程がこれっぽっちもないじゃない！」

「他のもこんななのか？」

「……うん。『光が』とか『魔法が発動すると消え去った』としか書いてないのよ」

「……まあ、こういうこともあるさ」

「というか、こういうことばかりだけど」

ルイズは厭世な笑みを浮かべて自嘲した。

一応、この一ヶ月足らずで進歩はあった。

自分の系統を自覚したためか、コモンマジックはきちんと発動するようになった。

相変わらず、系統魔法は爆発しかない。系統別にコントロールや爆発の威力が違う事があったりするのだが、これは以前から分かっていた。

「始祖が残した偉大な魔法なんだから、呪文^{ルーン}ぐらい残しておきなさいよね」

担い手以外は唱えても無駄なのだから、とルイズは文句を垂れる。

「……やっぱり秘宝じゃないと駄目なのかしら」

ふう、と疲れたような息を吐く。

今のところ、アルビオンの秘室は、代々財務監督官を務めているモード太公家が保管している。

自分の役目は虚無の魔法がどんな物なのかを解明する事。

だがそれはナツメと、そしてエルフたちに協力することであり、アルビオン王政府の依頼ではない。なのでナツメがディアブロ・コンキスタを倒し、契約を果たさない限りは、使う事はできない。

「テファを拝み倒して……」

ぶつぶつ言い始めた。財務監督官はティファニアの異母兄が務めているので拝み倒す対象が違う。

また前と同じように、出口の無い迷路に嵌まり込むのでは？ とルイズは嫌な未来を思い浮かべてしまう。コモンマジックが普通に発動した時は、もう、天にも昇る気持ちだった。だが、今度試す魔法は得体の知れない伝説である。他国の陰謀もあって、魔王に頼られて、ルイズはいっぱいいっぱいだった。

そんな彼女を見た才人は、

「お前こそ、あんま無理すんなよ？」

と言って立ち上がった。するとそこで、

「時間だ。剣を取れ」

アニエスが木剣を投げた。
この後才人はボロボロになるまでしごかれた。

その晩。

テーブルの上には大皿に乗った料理の数々とワインの瓶。
ここ最近の食事はテーブルマナーなど無く、気軽な物で才人にとつてはありがたかった。

反対にルイズはまだ落ち着かない様子である。ちまちまとパンをちぎって食べている。

「ねえ、アニエス」

唐突にルイズは言った。

「トリステイン人のあなたが、どうして才人の訓練をしてるの？」

テーブルを囲んでいるのはティファニア、アニエス、それからルイズと口いっばいに食べ物詰め込んだ才人。

「……それはアンリエッタ様に申し出たからだ」

「そうじゃなくて、どうしてトリステインの武官が来てるのかって事よ。サイトの訓練だったらこの国の軍人でも問題ないわ。少し無理を通さないと、来れないと思うんだけど」

「……むう、確かにそうだ……」

アニエスはとても言いにくそうになり、フォークを持つ手の動きが

遅くなる。

機密とかではなさそうだけど、まずい話題だったかしら？　と思っ
たルイズは弁解する。

「ごめんなさい。やっぱり聞かないでおくわ」

そしてアニエスの手が完全に止まる。少し下を向いて黙ってしまっ
た。

これ私のせいなの？

何気なく話題を振ったつもりなのだが、裏目に出てしまった。使い
魔召喚の儀から、言う事成す事が大抵嫌な方向に行ってしまう。ア
ニエスも無自覚に傷つけてしまったのか、と後悔しかける。

ルイズはアニエスをそっと盗み見る。

すると偶然か、目が合った。

「……………」

両者の間に妙な空気が生まれる。

「……………あ、あの」

堪えきれなくなったのはアニエスだった。昼間のキラキラした鬼の
ような雰囲気はなく、おずおずと言った。

「な、なに？」

ルイズが返事をする。

その落差を見た他二人は、ぽかんとしていた。

そしてアニエスは何かともない事を聞くように、

「……う、うむ。とても言いにくいのだが、その……ああ、どう言
つたらいいのものか」

と首を横に振った。

「その……だな……」

他三人はゴクリと息を呑む。

「……ナツメ、とは一体どのような人物なのだ？ その……殿下や
お前たちは、彼と話した事があるのだろうか？」

何が怖いのか、おずおずと。才人にはそう見えた。

ルイズはほっとして、

「何重々しくしてるのよ。すごい事言うかと思っちゃったじゃない」

「それで、お前たちから見てどうなのだ？」

「どつって……」

ルイズは返答に困った。才人も何を言ったらいいか分からず首を傾
げた。

そんな二人を見て、アニエスは「分かる範囲でいい。見た目とか」
と付け加える。

すると才人が言う。

「赤い目が怖い」

「あ、それは私も思った」

ルイズも同意する。

「実際は良い人だし、話してみるとそうでもないんだけどさ、やっぱり見た目は魔王だったな」

「うん。イーヴァルディの挿絵は全然似てないけど、確かにあれは魔王の顔だったわ」

と彼らが言つと、アニエスは眉をひそめていた。

「アニエスさん？ どうしたんすか？」

才人がそう言つと、はつとしたように次を促す。

「い、いや、他には何かないのか？」

ルイズは唸りながら記憶を探る。ルクシヤナと仲直りしたのは、戦争に行く直前だったのでそういった話が乏しい。

「うーん……話したつて言つても数時間だったし、個人的な話じゃなかったから……。サイト、何か聞いてない？ あんた、ルクシヤナに読み書き教わつてたでしょう？」

「でも惚気話ウソだぜ？ 絶対美化されてるつて」

するとアニエスは、

「……………惚気？ 惚気だと！？ 惚気られるような相手が存在するのか！？」

テーブルを叩いて身を乗り出した。
ルイズは意外と平気だった。ティファニアは黙ったままである。才人はビクツと身を縮ませながら答える。

「えと……はい、なんかもう、聞いてるこっちがムカついてくるような惚気で」

それを聞いた後、自分が取り乱している事に気付いたアニエスは気まずそうに座った。

見ていただけのティファニアはここで初めて口を開く。

「好きなんですか？」

「そそそそ、そんな訳ないだろう！ だいたいあの時、私は三歳だったしむしろその強さが憧れというか」

「あの時？」

ティファニアが復唱すると、アニエスはしまったと口を手で覆う。

「なんかあやしいです。何でそんなに取り乱すんですか？ というか何で頬を染めてるんですか？」

「染めてなどいない！ これは……そうだ、酔っているのです。私は酒に弱いものですからな！」

まだワインはグラス二杯目である。

「この前一人で三本ぐらい開けてたじゃないすか」

サイトが昼間の仕返しとばかりに、容赦のない追撃をした。「貴様……覚えてるよ」すぐに後悔することになった。

ルイズは小さくなっていくアニエスが少しかわいそうになって、

「よしなさいよ。人の言いたくない事、根掘り葉掘り聞くなんて。あんたたち、何かいじめてるように見えるわ」

助け船を出した。

だがティファニアは強めに反論する。いつもの大人しい様子ではない。

「そもそもルイズが話題を振ったのが発端でしょ。それにこれは、はつきりさせとかないと」

「へ？ 何ですよ？」

とルイズは気の抜けた声で言った。

「これ以上犠牲者を増やすのは忍びないから」

「犠牲者？ 何の事でしょうか？」

大仰な言い様に、アニエスは分からず聞いた。

「犠牲者は犠牲者です。具体的に判明してるのはマチルダ姉さんと……その、私ですけど……」

と詰まりながらティファニアは言った。

初めて聞く名前だったり、会った事が無いので他三人は彼女との共

通点を見いだせない。

ルイズは魔王やナツメと聞くと、生き死にのような物騒な事しか浮かばないので、

「何の犠牲よ。生きてるじゃない」

だがティファニアは拳を固く握り締めて、

「……いろいろ殺されました」

言った。

「私なんか……もう、グス……大事なところも、それどころかあられもない、生まれたままの姿まで見られて……もうお嫁にいけない！」

と、ナツメが聞いたら卒倒しそうな事を、べそをかきながら言った。才人は「うおおい、あの人がやってんの!？」と吠え、アニメスは顔面蒼白になる。だがルイズは、

「それ最近の事じゃないでしょ。おしめ替えられたとか、お風呂入られたとかでしょう?」

「なんでルイズが知ってるんですか!？」

「時系列とか考えたら当り前よ。それに、そう言う事は本人に言うてやりなさいよ。いつそからかってみれば?」

「そ……そんな私が、か、からかってもいいんでしょうか……?」

それで……あれがああなつて」

ティファニアは顔を赤らめてやんやんと首を振った。

「無理無理。あのエルフ、今頃あなたの妄想よりもずっと凄い事してると思つわ。あんただとせいぜい手を握つたりとかでしょ」

「言い当てないで下さい！」

「もういい加減、諦めた方がいいんじゃない？ 二番目も三番目も存在しないんだし、使用人も」

とそこでルイズは言うのをやめる。

そしてティファニアは急に乾いた笑みを浮かべて自嘲する。

「『大きすぎるのはちょっと……』ですか？ 聞きましたよ。ええ、メイド達が憐れむ視線がそれはもう、痛くて痛くて。『特殊性癖って残念ですね』だって。面白過ぎて泣けてきます！」

ティファニアの実家は大公家である。

王宮に使いを遣るなんて事はよくある。彼女も使用人から聞いたのだろう。

才人は激昂した。

「大きすぎるのは駄目って……それ、おかしいよ！ 絶対におかしい！ そんな素晴らしい、完璧なのをけなすなんて、絶対に間違ってる！」

机を叩いて、まるで大悪を憎むかのようだった。

ルイズは呆れながらも、コンプレックスを刺激されて、

「あんたは、なな、何を熱くなってるのよ。た、確かに大き過ぎると駄目って言うのは、あ、ありかもしれないじゃない」

魔王の方を擁護する。

才人は酷く嘆いて、下を向く。

「ナツメさん……おれには理解できないよ……。みんなが好きな物を、一人で嫌いだと無理して、一体何になるって言うんだ！」

『ティファニアの胸を否定する』

才人にとってそれは、この世界の半分を否定する事に等しく思えた。ついには、

「……あれ？ だから異端者？」

妙な方向に思考が行ってしまう。

ルイズは本当に呆れだして、

「いや、それは無い。魔王になるほど大きな胸が嫌いって、それは無いわ」

そこまでいくと最早、憎しみのレベルである。

ナツメも一応、ティファニアが可愛いとか美人であると言っていたのだが、使用人にとっては『大きすぎるのはちよっと……』のインパクトが強すぎた。

その他の褒め言葉は全て聞き逃されていた。

そんな訳でティファニアは恨めしそうにルイズとアニメスを見比べて、

「どつちが好みなんでしょうね？」

声だけ笑っていた。

ティファニアは王族なので、アニエスは『いい加減胸から離れる』と怒鳴りたくなるのを抑える。

「なんとなく分かった。もういい」

これ以上は思い出を穢されるようで、気兼ねした。

「アニエスさんはどうしてナツメ様の事を？」

聞かれて少し逡巡した後、今はもう機密でも何でもない事なのだと考えて、

「……彼とは少し縁があるのだ。ダングルテールの事件は知っているな？」

他三人が頷く。才人も詳細は知らなかったが、その名前だけは知っていた。

「私はその生き残りだ」

アニエスは一呼吸置いて言った。

他三人は今度こそ本当に緊張していた。

「当時は小さかったがな、はっきりと覚えているのだ。両親を焼いた炎と、私を助けてくれた女性、それから……」

言葉を切る。グラスにワインを注ぎ、飲む。酔って感情を麻痺させ

なければ、あの時の恐怖がこみ上げてきてしまいそうで……。

「おにい……ナツメは事件の一ヶ月ほど前に来たのだ」

今口を滑らせたことを突っ込む者はいなかった。突っ込みたくなかったが、彼女の話に耳を傾けるだけにした。

「働き者な上に面倒見が良くてな、村の力仕事を一手に引き受けていた。子供の相手も。でも私の、村人の前では、一度も魔法を使わなかったよ。彼がメイジだと分かったのは、襲撃が起こってからだった」

ティファニアが首を捻る。

「メイジ？ ナツメ様はメイジじゃありませんよ？ 扱えるのは風だけだって。それに杖も剣の代わりで、魔法には必要ないって」

「そうなのですか？ ……いや、まあその辺はどうでもいい。とにかく彼は、その時私を助けてくれたのだ」

「そして惚れた？」

ルイズは核心だと思っ た事を言ってみた。

「お前たちの頭の中はそれだけなのか？」

アリエスは飽き飽きして言った。

どうにもこういった色恋沙汰な話は苦手なのだ。

知らないと言ってもいい。

女であることを捨てたように剣に打ち込み、復讐に生きてきたのだ

から。まあ、自分が憎む者たちが生きているかどうかはさておき、復讐心は簡単に折り合いがつくものではない。

「そんなわけないじゃない。私の頭の中は、どうしたら魔法が使えるようになるかでいっぱいよ」

ルイズが言っと、ビクウツ！ とティファニアが反応した。食器を落とし、陶器が割れる。床にはサラダがぶちまけられた。

「ああ！ ごめんなさい」

と彼女はしゃがんで破片をとっていく。

「使用人にやらせればいいじゃない」

とルイズは言うのだが、

「まあ、外ではそうだけどね。家だといつもこんな感じなの」

「あんたちの教育って一体どうなってるのよ……」

そう言いながらも隣にいたルイズは破片を片付けるのを手伝う。才人は箒と塵取りをとり立ち上がった。

「そっいえばテファも魔法、使えなかったわよね？」

カチャ、とティファニアの破片を拾う手が止まった。

「あなたのお母様は使えるのに、どうして？」

「……そんなの私が知りたいぐらいです。エルフなのに精霊の存在を感じ取れないし、杖と契約はできて魔法は発動しないし」

「ふーん。私は最近まで爆発ばかりだったけど……ん？」

ティファニアの様子がおかしかった。

どこか気後れしたようにルイズから目を逸らすのだ。

「ティファニア　もしかして」

ルイズは唐突に気付いた。彼女もまた、王家の血筋であることに。ティファニアは更に目を逸らした。

「ウル・カーノってやってみて」

”発火？の呪文である。

「へ……？　どうして？」

「いいから。杖持って精神力を練って、『ウル・カーノ』、はい」

ティファニアが躊躇うのだが、強引に杖を持たせて促した。

「……………本当にやらないとだめ？」

青い目を潤ませて、ルイズを見つめる。「うっ！」と才人は悶えた。

「可愛いけどだめ。残念だったわね、わたしが男だったら「やらなくていいよ」って言うっちゃう所だわ」

「うっうっ……、こ、このことは内密にお願いします！」

そして発火のルーンを唱える。

すると杖の先端からキラキラしたものが出て行き、才人に纏わりつく。

「あ」

ティファニアは間抜けな声を漏らした。

「！！！」

急に才人の挙動が変化した。顔色が悪くなり、机に突っ伏すと「おええええ〜」さつき食べたものを戻した。せつかく片付けたのに台無しである。

「サイト！ 一体どうした!?!」

「いやだ……男なんて……いやだ」

胃液を吐きながら死んだ。アニエスはメイドを呼んでくると部屋を飛び出した。

「だからやりたくなかったんです……」

ティファニア半泣きだった。だがルイズは、

「凄いわ。一体何をしたの?」

と目を輝かせた。

「え、つとね？ あんまり使ったことないから分からないんだけど……心に作用するみたいなの」

「へええ、で、サイトのは？」

ルイズはぐったりした彼を指差して言った。ティファニアは才人の泣き顔を見て推測する。

「多分、嫌悪感を催すものを見たんじゃないかと。火だと熱くて、水だと冷たいイメージのものが見えるみたいなの」

だから才人は暑苦しい男のイメージ。

「他の系統は？」

「怖くて試せないわ」

自分を実験台に魔法を使ってみたのだ。そうそう気軽には使えない。さつきは気が動転してつい才人を生贄にってしまったが。ルイズは興奮気味に彼女の手を握った。

「虚無の可能性ありね！ 秘宝よ秘宝！ 指輪つけてオルゴールよ！」

ブリミル教と魔王は相性が悪い。

それはもう、とても。そこに始祖の系統である虚無。

ティファニアは自分の系統に薄々気づいていた。だが恩人と対立するような事になるのを恐れ、隠していたのだ。

そしてルイズが今何をやっているかも知らない。

なので、

「そんな！ 無理です！」

激しい拒否反応を見せる。

「大丈夫！ ちょっとだけ、ちょっとだけだから！」

「ルイズ、手つきと言葉遣いが卑猥だわ」

「そうと決まれば財務監督にかけあいましょう！ さあ、早く！」

「いや！ ちょっと、駄目だってば！」

ティファニアの手をしっかりと握り、ルイズは部屋を飛び出した。部屋にはゲロまみれの才人が一人残された。

「ひでえ……」

ゲロは胃液の酸っぱい匂いが強かった。

とりあえず一区切りの決着（後書き）

ティファニアの虚無設定、ねつ造。

一組目、強奪

王宮は現在、戦後処理で出入りが多いためか、城の警備は張り詰めていた。三つの魔法衛士隊は引つ切り無しに動き回り、文官は戦場となった領の復興についての書類に忙殺されていた。またアルビオンとの同盟の是非について堂々巡りの論議が続いていた。

魔法生物ベルゼブブを撃破して二日後の午前。

執務室でマザリー二枢機卿はアカデミーから届いた書状を読んでいた。

「……………むう、好き勝手言いおつて……………」

苦い顔をする内容は『魔法研究所の現体制の維持』の要求だった。

加えて、研究費を削るな、アルビオンから干渉させるな、秘宝を魔王に渡すな、と。

最後の要求を受け入れる事は難しい。「あのエロジジイに預けたのはいいものの……………」と自分でも聞き取れるかどうかの音量で呟きながら、どうすべきかと頭を抱える。

そうしてしばらく経つと、トントン、と扉を叩く音。

この時間、面会の予定は無かったはず、と思いつつも、

「通しなさい」

すると扉が開かれる。

そこにいたのは、グリフォン隊長のワルド、それから……………金髪碧眼の黒ぶち眼鏡をかけたナツメ。エルフの技術で作られたこの眼鏡は？変化？の効果が得られる。系統魔法の力ではないため、当然デイトクト・マジックには反応しない。

ワルドは帰還の挨拶を形式的にした後、戦いの経過と顛末を報告し

ていく。

「……これでようやく一区切りか」

報告を受けていたマザリーニ枢機卿はほっとため息をつく。だが、表情に喜色は無く、むしろ堅い。

「ええ、ですが……」

ワールドは背後に立っているナツメを、チラリと見た。

「……秘宝の引渡しは如何なさるのですか？」

魔王^{ナツメ}は条件を満たした。しかし、秘宝の譲渡に強く反発する者が、トリステインにはまだ多くいる。特に魔法研究所^{アカデミー}の研究者。ほとんどの人間が反魔王、アルビオンとの同盟反対派である。

「……今は信用できる者に預けてある。引渡しは後日、こちらからアルビオンに出向く予定だ」

「具体的な日時は？」

間髪居れずナツメは尋ねる。

「こちらとしてもいろいろあるのですよ。性急に事を進めると内部の反発もあるので……。分かってください」

「そうは言っても契約だと、すぐ頂けるとおっしゃったでしょう？
なんだったら私から取りに行きますよ。預けた方は誰なんです？」

「そこを何とか……」

マザリーニ枢機卿は連日の激務のせいか顔色は良くないし、頼もかけているように見える。ナツメは少し同情を覚える。それに自分の言い回しが闇金融の取立てみたいだったので、内心決まりが悪くな

った。

でも、

「まかりませんよ。こっちは何度も死にそうになってるんですからそれはそれ、これはこれである。マザリーニは過労で倒れそうだが、死ぬわけじゃない。」

「わざわざ嫌われてる連中のために無償奉仕なんて、私は御免被ります。そっちが出し渋るなら、勝手に調べて奪いに行くという手もあるのですが……」

「……………」

秘宝の破壊は彼の命を左右する事柄である事をマザリーニは知っている。ナツメの言い様から、ここで手に入れることにこだわっているという事が分かる。それは焦りとも取れた。

「引渡しにはまだ問題が……。反対派の人間は減少傾向にあるのですが、依然、頑なに自分達の主張を曲げない者がおります。彼らの意向を無視してしまえば、内乱が起こる可能性も」

「だからどうしたと言つのです?」

完全な拒否、というような態度。ナツメの態度が冷たく起伏の無い

ものになる。

「私はそちらの要求を呑んだ。組織の壊滅に協力した。ですが、あなた達は報酬を渡さない。これがどういふことか分かりますよね？」

「……」

言葉に詰まったマザリーニをよそに、ナツメは続ける。

「こんな要求出す以前に、反発があることぐらい簡単に予想できませよ」

こうして訪問しているのも、その反発を見越しての事だった。

「ならば何故？」

「その危険を冒しても手に入れる必要があるからです。この前話したでしょう？ 虚無の系統が世界に及ぼす影響を。ああ、子爵にも話してあるのであしからず」

「ですが……そのために血が流れるのです。必要と言ってしまえばそれまでですが、関係の無い人間も巻き込まれるでしょう。あなたはそれを良しとなさるおつもりか？」

「さあ？」

ナツメは曖昧な返事をした。

「別にアカデミーが反発しているって言うても、それは順応できない者の理屈でしょう。実力のある者なら、研究の趣旨が変わった所

でほとんど問題は無いと思いますが」

アルビオンの魔法研究所もそうだった。アカデミーの研究員は総じて灰汁あくが強い。研究に対するこだわり方が、もの凄く偏っている。しかし研究内容はさておき、結局扱うものは魔法。メイジとして、メイジとして優れている研究員はきちんとやっていけるのだ。

「まるで私どもが秘宝を渡さなくとも、いつでも奪えると言っているようですね」

「できますよ?」

ナツメはなんでもないように言ったのだが、マザリーニはハッターリだと思った。

「……ほう、ならば私が秘宝を預けた者もすぐに分かるとおっしゃるのです? でしたらわざわざ聞かずとも良いでしょう?」

挑発とも取れる発言にナツメは、はぁ、とため息をついて、

「オスマン学院長」

「……」

マザリーニの息が止まる。どこでばれたのか、と思考を巡らせるが答えは出てこない。

そんな彼を見たナツメは早々に交渉を諦めて、

「だんまりですか……。まあ、結構です。そうやって拒むのなら、実力行使に移るだけですから」

部屋から出ようとする。

そして思い出したように言う。

「ああ、そうそう、独り言は控える事をお勧めしますよ。どこで誰が聞いているか分かりませんからね」

まさかさっきの咳きか！？ マザリーニの背中に冷たい汗が流れた。ナツメが出て行きしばらくは部屋に沈黙が充満していた。

「子爵、何故君は、彼に協力する？」

マザリーニの唐突な質問にワルドは、少し考えてから、

「私には目的があります」

「目的？」

ワルドは淡々とした口調で、

「ええ。それを達成するには、彼に貸しを作ることが最短だった。それだけでございます」

「それは一体どのような……いや、今のは忘れてくれ」

「ご心配なさらずとも、この国に不利益になるような事ではございません。極めて個人的な目的でございます」

今の所、人間では自分^{ワルド}だけが聖地に行く。それも秘密裏に。そしてそれを口外しないように口止めされている。

ワールドはあまり信心深くない。

聖地に行くのは信仰心を満たすためではない。ただ、真実が知りた
いだけ。

だから敬虔なブリミル教徒であるマザリーニを出し抜くことに後ろ
めたさは無い。

「それはそうと、彼をこのままにしておいてよろしいのですか？

おそらくこの後、魔法学院に向かうかと。要求を呑むか、お止めにならなければ」

はっとその事に気付いたマザリーニは、

「そうだ！ 今すぐ学院に使いを送らねば！ 子爵は彼を呼び戻せ」

「……戻らないと思うのですが……、というより、自分に説得は不可能です。というより、これは彼なりの気遣いじゃないのでしょうか？」

「どづいつことかね？」

「彼が秘宝を強奪すれば、枢機卿や財務卿に責が及ぶ事はないでしょうっ？」

盗られたとしても、押し入ったのが魔王である。仕方ない、で済む可能性が高い。情報漏洩に関してはどうとでも言える。

「……言われてみればそうか……しかしな……」

マザリーニは疲れた声で言った。

「どうかなさったので？」

「近頃、貴族達に怪しい動きが見られるのだ。分かるだろう？ 子爵、君にも働いてもらう事になりそうだ」

「はっ」と歯切れの良い返事をするワルド。だが内心では、また追加の仕事か、とうんざりする。ここ四日で物凄く疲れているのに……。

「不満そうだな、子爵」

指摘されると言いたくもなる訳で、

「滅相もございません。無理難題ばかり押し付ける姫様や宰相殿に文句など、滅相もございません。もっと有休寄越せなど、口が裂けても申しませぬ」

「……………」

もっと休んでいいよとは言えない枢機卿。少数派の彼らは、猫の手も借りたいほど人手不足なのだ。

「もう少し、もう少しの辛抱だ。ここで踏ん張らなければ、全てが終わるぞ。それも我々にとって最悪な終わり方で」

すなわち”死”である。社会的な可能性よりも、物理的な可能性が圧倒している”死”である。異端の処刑方の定番といえば、火刑など……。

マザリーニは敬虔なブリミル教徒だというのに、異端扱い。

これを取り切らなければ、彼も汚名を被ったままその生涯に幕を下

ろしかねない。

ゆえに必死になって、過労で倒れる寸前まで働く。現在、彼の疲労は眠気を感じなくなるといふ危険域に達していた。

「……そうですね。頑張るとしましょう。死ぬのは嫌ですからな」

ワルドとマザリーニは一緒になって疲労感いっぱいのお笑みを浮かべた。

王宮から出たナツメは、風の精霊の網を広げた。

トリスタニアは広くない。探査精度を落とせば、全市中を網羅できる。目的地周辺を鮮明にして、歩き出した。

……裏切り……ではないな、とナツメは胸中で呟く。

ただ少しだけ、出し抜かれただけ。

元々悪魔を憎む者たちが、悪魔を出し抜いただけなのだ。

ブリミル教徒であるマザリーニ枢機卿も、ナツメにとっては信用に値しない。契約は秘宝を強奪するための、ただの免罪符だった。

これで心置きなく奪える。

これで自分の行動を正当化できる。

そう思いながら目的地に向かって、貴族街を通りぬけようとしていた時だった。

「……アベル……ああ、どうして……」

女のすすり泣きがナツメの耳に入ってきた。

「約束したのに……帰ってくるって、約束したのに……どうして、

「どうして！」

声を荒げていた。その声を聞いて、ナツメは立ち止まってしまった。戦勝に街がわいている中、そこだけ悲しみに切り取られていたようだった。

精霊で探る。丁度、通り過ぎようとした屋敷の二階からだった。お腹の大きな、妙齢の女性がベットに臥せて泣いていた。その傍らには年端のいかぬ子供が立っている。親子だろうか？

「どうして、悪魔が生きてて、アベルが死ななきゃいけないの！」

聞かなければいいのに、ナツメは聞き入ってしまった。初夏であるというのに、寒気がした。

どうやら彼女の夫が戦死したらしい。残ったのはその妻と小さな息子、それからまだ産まれていない命。

女性の嗚咽と息遣い、少年が奥歯を噛み締める音。

女性の声色は次第に、悲しみから憎悪に変わる。

「……………悪魔さえ、悪魔さえいなければ……………」

その先の言葉はない。夫は死ななかつた、とでも言うのだろうか。その変化を感じ取ったのか、少年は部屋の外へ飛び出した。「僕が……………」と呟くのが聞こえた。

ナツメはそこまで見て、風の精霊とのリンクを断った。

「……………悪魔を憎む少年の出来上がり」

近くの壁に寄り、ぼそつと呟く。

自分を落ち着かせるために、何度か深呼吸をした。

恨まれても仕方がない。復讐の対象になっても仕方がない。自分は

もう、復讐される存在になっている。
戦場では麻痺していたそれを実感した。
死ぬ原因を作ったのは、自分と一部の人間の勝手だ。
それを思えば彼らの憎しみは、あながち的外れでもない。魔王がいなければ魔王討伐運動なんて起こらない。聖地回復運動という別の形で起こるかもしれないが。あるいはナツメが殺さず、逃げ続ける事が出来ていたら。

「たら、れば言ったらきりないか……」

怖気を払うように呟いた。
息と一緒に不快なものもいくらか出て行き、再び歩き出した。

ナツメが以前ワールドと来た居酒屋、『魅惑の妖精』亭の向かいにある喫茶店にルクシャナはいた。別行動をとる前とは違う格好をしていた。スタイルの良い華奢な体に纏っているのは、学院の制服のよくな白いブラウスとプリーツスカート。？変化？を常時発生させる銀の首飾りはそのままだった。そのせいでエルフの尖った耳ではなく、丸みを帯びた人間の耳になっている。
そして呑気に紅茶を飲んで休んでいる。護衛のエルフは連れてきていないので、気配はない。
ナツメは彼女を視界に収めると、早足で歩み寄った。

「おかえり、早かったわね」

「ああ、やっぱりダメだった。こっちから出向かないと」

「え、契約なんでしょう？ どうして？」

ルクシャナは心底驚いた、というような顔をする。

「どうしてって……そりゃあ、向こうさんが僕の事嫌いだから。契約なんて破っても心が痛まないんだろうよ」

「それでのこのこ戻ってきたなんて……あなた、それが自分の命に関わってるって事、自覚してるの？」

ルクシャナはやる気の無いようなナツメの態度を非難する。

本当にやる気がない訳ではない。算段がついているので、落ち着いているのだが、それが彼女にはやる気がないように映ったらしい。ナツメは店員を呼び止め、会計を済ませると言う。

「自覚してるよ。だから打って出る。場所は分かってるから」

「ならいいんだけど……」

「理解したならさっさと行こう」

ナツメはルクシャナの手を取った。

柔らかい手の感触と温もり。それを感じた瞬間、彼の中に嫌な感情が湧き上がった。

空っぽで虚しくて、死にたくなるような喪失感。魔王に対する憎しみから生じた攻撃が彼女を殺すかもしれない。彼女を失う瞬間が脳裏に浮かんだ。

「痛っ」

「あ、ごめん」

手を握る力が強くなったのかルクシヤナは少しばかり顔をしかめる。ナツメが離すと手をぴらぴらさせた。

「……」ナツメは黙りこくっている。

「もう、どうしたの？ そんな辛気臭い顔しちゃって」とルクシヤナは困ったように笑う。

「いや、特に問題はないよ。戦いが終わったのって昨日今日だったじゃない。それでちょっと殺気立ってた」

「そう？」

「ん。じゃあ、行くつか。ああ、早く終わらせてだらだらしてえ」とナツメが街の出口に向かって歩き出そうとした時、

「ところで、何か私に言う事ない？」

期待した目でルクシヤナはナツメを見る。ナツメは呆れた風に言った。

「無駄遣いは良くないよ。耳が引っ込むだけではれないだろうに。つか、いくらしたんだよ、その服」

「違う！ 似合ってるとか、かわいいとか」

「今はそういう時じゃないでしょうに」

「何よ、今日はバカみたいに真面目じゃない」

「いや君、分かってていつてるでしょ？」

始祖の秘室の一組目が手に入るかどうかという所なのに、本気にならないというのはありえない。四組全て破壊して、ナツメはようやく『大いなる意思』から解放されるのだから。

「それにさあ、そんなに露出の多い服着てたら　！？」

そこまで言っただけでナツメは気付いた。今から行く場所が誰がいるのか。

トリスタニアの街を出て、十数分飛ぶと学院の建物が見えてきた。中心部の本塔を囲んで、五芒星の頂点に各塔がある。本塔は他の五塔より高くなっており、学院長室はそこにあった。

「へええ、随分面白い形してるのね」

ナツメの横でふわふわと浮いているルクシャナが言った。ナツメは眼鏡を外し、元の白髪赤目に戻る。

そして本塔最上階の学院長室の窓の前で、止まると中を覗き込んだ。

「ん、いたいた」

机について白い口ひげを弄りながら、サラサラとペンを動かしている老人、オールド・オスマン学院長がいた。

「凄いヒゲ……あのおじいさんが学院長？」

ナツメは「ああ」と頷いた。コンコン、とガラス窓を叩くとオスマンはビクツと少し驚いたような動きを見せる。

もう一度、コンコンと叩くとオスマンは、ナツメたちが覗いている窓の方を見た。

ナツメの姿を確認すると、とても渋く嫌そうな顔をした。

だが、その隣に居るルクシャナを見た途端、目尻が下がり、鼻の下が伸びた。

そしてオスマンは、

「ほうほう、よく来たの。さ、入った入った」

と窓を開けた。

あからさまに反応するオスマンを見て、ナツメは連れて来て正解だったのか、そうでなかったのか、複雑な気持ちになった。

部屋の中に入ると、ルクシャナはきよろきよろと中を見回し始める。ナツメは早速、

「秘宝寄越せ」

と言った。オスマンは呆れたようにため息をついた。

「……せつかちじゃのう。やれやれ、最近の若いもんは……宝はそんなに急がんでも、逃げやせんよ」

「いやいや、現に逃げてるから。逃げてるからここにあるんでしょ？」

「その様子じゃと、枢機卿にはもう会ったと……。まったく、あや

つめ……反対派を押さえられなかったんじゃない」

「ええ。ですから、直接出向いたのです。こら、部屋の物を勝手に弄らない」

ルクシヤナが本棚に手をかけたところで、ナツメが言った。ルクシヤナは手を引つ込めると、膨れっ面でナツメを睨む。オスマンは顔をほころばせて言う。

「ほっほっほ、よいよい」

「そうですか、では……」

ナツメは、壁についている金庫を無理矢理こじ開けようと、手をかける。

「これ、おぬしはダメじゃ」

「……男女差別かよ。教育者だろ、あんた」

ナツメが言うのを、オスマンはまるきり無視して、

「ところでそちらの綺麗なお嬢さんは？　そろそろ紹介してほしいんじゃない」

などと言ってきた。

イラッ、とナツメの中で何か不快なものが湧き上がった。

「何言ってるんですか。どうして友人でもないあなたに、そんな事しなくちゃならないんです？　というか使い魔に下着をのぞかせる

な！」

「ケチ」

オスマンはつまらなそうに呟く。ルクシヤナは慌ててスカートを押さえる。ナツメは彼女の足元に近づいていたハツカネズミを睨んだ。

「……潰していい？」

呟くと、そのネズミは一目散に、オスマンの方へ逃げた。足をよじ登り、膝の上でぴくぴくと震えていた。

「おお、モートソグニル。怖かったのう」

ネズミは切羽詰ったように、ぢゅうちゅうと涙を流して泣いているように見えた。

「なんじゃ？ ふむふむ、なんと！？ 見える位置まで行けなかったと……それは残念じゃ。ご苦労だったの」

ポケットからナッツを取り出し、ネズミの前に置いた。すると今度は、ぢゅうちゅうと普通に鳴いた。

「そうか……逆らうのはよした方がいいか。分かっているよ、モートソグニル。わしを心配してくれるのじゃな。ありがとう」

ネズミと会話をするオスマンに興味が湧いたのか、ルクシヤナは覗き未遂はそっちのけ、彼らのやり取りをじっと見ていた。

「おじいさん、眷属の言葉が分かるの？」

「ほっほっほ、少しじゃがの。伊達に歳はとっておらん」

ルクシャナは目を輝かせて、興奮気味になる。

「エルフでも聞き取りが難しいのに……凄いわ！」

韻竜や一部知能の発達した動物達が用いる言葉である。適性のあるエルフは、特殊な訓練を受ければ理解できるのだが、人間には低い唸り声だったり、ただの鳴き声にしか聞こえない筈……。因みにエルフよりも耳がいいナツメは、先住言語を学ばない事になっている。だってそうじゃないか、昔食べたドラゴンが言っていた言葉を理解するなんて、怖くて出来ない。

好奇心を刺激されたルクシャナは更に質問をしていく。

「何でも聞きなさい。答えられることは何でも教えてあげよう」

気を良くしたオスマンは、それらの質問にすらすらと答えていく。連れて来たことで話が円滑に進みそうになったが、ナツメは釈然としなかった。

嫉妬ではない、微妙な不快さを感じた。

「ところでの、お嬢さん、おぬしは魔王の御付か何かかね？」

「いいえ、婚約者よ」

「……ほえ？」

オスマンは目を点にして聞き返す。

「すまんのう、耳が遠くての。もう一度言ってくれんか？」

「婚約者よ。帰ったら式を挙げるの」

にっこりと、ルクシャナは即答した。

オスマンはちよつと照れ臭そうにしているナツメの方を向いて、

「……ふ、ふーんだ、悔しくなんかないんだからね！」

と言って拗ね始めた。

「なーんとわしに冷たい世界なんじゃろ。わしは一人だというに、魔王はこんな美人さんとイチャついておるなんて……。神様は随分と酷な事をなさる」

面倒なばかりであり敬えない年寄りだ、とナツメは思った。

オスマンはナツメに言う。

「こんな美人を利用して、わしの心に付け入るなんておぬしは悪魔か！」

「そろそろふざけるの、止めませんか？ 本当、切れてしまいそうです」

「そうそう、秘宝くださいな」

ルクシャナも乗ってきた。

するとオスマンは、

「いいじゃろう、持って行きなさい」

すんなり了承した。だが次の瞬間、とても重苦しい口調になった。

「ただし、条件がある」

ナツメはまた無理難題を押し付けられるのかと、身構える。オスマンは重々しく、目を瞑った。

「条件、ですか？」

「うむ、それ次第では、おぬしらが秘宝を持って行ったとしても、わしが枢機卿に言い含めておこう」

そしてオスマンはルクシヤナの方を向いて、

「そう、そちらの」

「ルクシヤナよ。おじいさん」

「そう、ルクシヤナ嬢の……し、尻を揉ませて」

とそこでナツメの表情から温かさというものが根こそぎ失われた。

「やっぱり奪ってくか」

金庫の扉に手をかけると、目一杯、力を入れる。その怪力はオスマンがかけた？ ロック？ をものともせず、ベキリ、と鍵を破壊した。

「カー！ そんな風に事を強引に進めるから、悪魔だ魔王だと諍りを受けるのじゃ！」

「うっさい！ エロジジイのセクハラに比べたらそっちの方がマシだ！」

ルクシャナは声を荒げているナツメを見て、少しボーっとしていた。ナツメは金庫の中を調べていく。ほとんどが金品や書類だった。魔力反応があるものは、とナツメは目を凝らす。すると、水色の宝石が嵌った指輪とやたらと古めかしい本。その二つが、今まで感じた事があるものとは違う、違和感のある反応を見せた。

「ん、これか？」

水のルビーと始祖の祈祷書。ためしに祈祷書をぱらぱらと捲ってみる。

ページは全て白紙だった。

ルクシャナはナツメの後ろから覗き込んで、

「あれ？ 何も書いてないじゃない。偽物？」

「いや、多分本物だよ。一ページ一ページ、全部に何らかの魔法がかけられてるし」

「ん、分からないんだけど……」

「持ってて」とナツメは両方ともルクシャナに渡す。彼女は持って来たかばんにそれを詰め込む。

「持ってかれると本当に困るんだけど、わし」

オスマンが言った。ナツメは笑って、

「困ればいいよ」

「反対派に処刑されちゃうかも」

「大丈夫だよ。粘ってれば、むしろ反対派の方が危ない」

と言いつ合っているところで、コンコンと部屋のドアがノック音が響く。

「シユヴルーズです。オールド・オスマン」

他の教師が来たようなので、ナツメはルクシャナに目配せする。ルクシャナは窓の方に移動する。

「じゃあ、そういうことで。気が向いたら、また」

ナツメとルクシャナは窓から飛び出した。

オスマンは彼らが飛んで行った方向をしばらく見つめていると、

「開けますよ？ オールド・オスマン」

教師が入ってきた。

「オールド・オスマン？」

窓を開け放ち、外を見ていた様子を不審に思ったのか、教師は怪訝な顔をする。

オスマンは窓の方を向いたままだったが、その口元は僅かに緩んでいるように見えた。

「模造品イミテーション、混ぜといたのに引つかからなかったのう。言い訳どつし
よ……」

その眩きは教師には聞こえなかった。

ルイズんちが大変なことになった

話は空に戻る。

ルイズはティファニアを連れて、意気揚々とモード大公の執務室の扉を叩いた。ティファニアが虚無の担い手であるかどうかを試すためだ。それには秘宝貸与の許可が必要。興奮しているせいか、ゴンと少々乱暴な音が響く。

「ルイズ、やめましようよ」おどおどしているティファニア。

「ここまで来て何言ってるのよ」対照的にノリノリのルイズ。

まるで悪ガキと、それに流される気弱な子供だった。

「何用でございますか？ ティファニア様」

扉を開けて対応したのは執事だった。誰か来客が来ているようで、中からは話し声が聞こえる。

「えと、ルイズが用事があるみたいで……」

「ちよつと、大公さまにいにお話したい事があるの。取り次いでくださる？」

それが中に聞こえたらしい。「……イズ？」「……ここ……んですの？」「ええ、後で」

それらの声はルイズに聞き覚えのあるものだった。扉の隙間から覗き、中に居た人々を見て 反射的に言ってしまった。

「げ、かあさま！」

居たのはヴァリエール公爵と執事ジェローム、婦人カリーヌ、長女

エレオノール、それから病床に臥せっているはずの次女カトレア。若きモード大公を囲んで椅子に座り、何か話していた。ルイズは小さく驚いたつもりだったのだが、

「？げ？とは何ですか、？げ？とは」

カリーヌはルイズの方を向かずに行った。何という地獄耳。ルイズは扉を開けてそのまま中に入る。

「とうさまにねえさまも！ どうして？」

つい叫ぶように言ってしまった。たまらなく嬉しい、これは本当に現実？ としばらく四人を見渡す。ついでに頬も抓る。嬉しい痛みだ。

公爵が少しばかり困ったような表情になって、

「これ、ルイズ。大公殿の前で失礼だろう」

「ごめんなさい、でも本当にどうして？」

それにモード大公が答える。

「トリステインで少々あつたらしくてね。君のご家族はしばらくここで匿^{かくま}う事になったんだよ。なにぶん急な事でね、決まったのは今日だ」

「トリステインで？」

「ああ。反魔王派が、という事らしいが……」

とヴァリエール公爵の方を見た。公爵は軽く咳払いをして、

「うむ、魔法研究所アカデミーの連中を筆頭に、各地で魔王を快く思わない者達が集まってな。奴らは見せしめにヴァリエールを選んだ。私がこの国に橋渡しをしたからな」

「信じられない！ かあさまが居るのにヴァリエールを選ぶなんて！」

それにカリー又は低めの声で、

「ルイズ、お前は母を怪獣か何かと勘違いしていませんか？」

「むしろ怪獣より」

と言って口を塞ぐ。危ない危ない、外にまで母の戦闘力を知らしめる必要はない。

「敵の物量が遥かに上だったのだ。いくら単騎の戦闘力があっても難しかったよ、あれは。魔王でもなければ無理だった。幸いこの国からの協力者の方が早くてな、私達は死んだ事になり、こうして逃げて来れたわけだが……」

「王政府はどうしてるんですか？ 姫様は？」

「今回は王政府じゃ間に合わなかった。連中は領民の一部を買収して水面下で動いていた。戦争中だったからな。不安に付け込めば容易かっただろう。こちらが悟った時にはもう……な」

「じゃあヴァリエール領は？ 屋敷の人たちは？」

「……」

公爵は言葉に詰まる。

分かる。これは救おうとした人間に裏切られたのだ。ディアブロ・コンキスタが攻めてきたから、それを退けようと奮闘した結果、手の平を返された。頼った先が悪魔だから。

裏切った者達は、貴族以前に恥を知らないのか。それともその恥は恥ではなく、神が与えたもうた試練だから躊躇ためらわないのか。

ナツメもエルフも、亜人たちも悪魔なんか程遠いくらい、いい人たちばかりなのに。

歯噛みしている父、気落ちしている上の姉を見てルイズは胸が押しつぶされそうになった。

ルイズの様子を悟ったのかカトレアが声をかけてきた。いつものようなニコニコとした表情をルイズに向けて言う。

「ねえ、ルイズ。あなたの後ろにいらっしやる方は？」

背後で少しだけ反応。ルイズが答える前にモード大公が言った。

「ああ、話題が暗いせいで紹介が遅れました。彼女がアルビオンのエルフ、ティファニアです。ティファニア、ご挨拶を」

「は、はい。初めまして、ティファニア・オブ・モードと申します」

萎縮している。ティファニアの耳は少しばかり垂れ下がっていた。

「エルフ！ 初めて見ましたわ」

「あ、あの私はハーフで。純粋なエルフは母なんです」

カトレアの反応にティファニアは戸惑っている。他国ではエルフは憎しみの対象、悪魔と変わりないと恐れられているからだ。

「大丈夫よ、ちいねえさまってこういう人だから」

「そうなの？」

ルイズがそう言うと、僅かに不安が削がれたようで胸を撫で下ろす。

「ちいねえさま、お体の方は大丈夫なの？ 長い距離の移動は大変じゃなかった？」

「大丈夫よ、近頃本当に調子がいいの」

カトレアは本当に元気そうだ。病は気から、と言うように治る可能性が見込めるようになったからなのか。

モード大公はそれに対し、

「なんとお体が！ それはいけない。すぐに部屋を用意させましよう」

と執事に申し付ける。カリィもルイズとカトレアに言った。

「ルイズ、話はまだあります。夜も遅いのでカトレアに付き添って目に映ったのはいつもの強い母ではなかった。

背筋はいつものようにピンと張っている。顔や手の皺が増えたりしているわけでもない。

だというのに、母がいつも放つ威圧感というか気迫というか、力強

い印象を与えるものが見あたらない。
既に年齢は50に近いが、それを感じさせないほど若々しかったのに。虐げられ、何も出来ず、絶望している平民のような顔。少し前の母なら、ドラゴンが見れば逃げ出すほどだったのに、今ならネズミにすら馬鹿にされそうで……。
ルイズは胸を潰された。

サイトやアリエスに戻らないと伝えるよう、ティファニアに頼んで別れる。
ルイズとカトリアは部屋の用意が終わるまで、廊下の長椅子に座りながら待つ事にした。

「それにしてもびつくりしたわ。お世話になる屋敷にルイズがいるんですもの」

「びつくりどころじゃないわ！ ヴァリエールが……ヴァリエールが大変なんですよ？」

ルイズは齒噛みした。
帰れないし、帰っても何も出来ない自分が情けなくて、怒りすら感じる。
逃げてこれたのは一部の使用人と、私兵のメイジ数人。残りはどうなったのだろう。酷い目に遭わされないだろうか。具体的な想像をすると、恐くなって体が震えだした。

「何で？ 悪いのは魔王じゃないんでしょう？ 私達は悪くないじゃない？ どうして……？」

ぼろぼろと涙が溢れてきた。悔しい、悲しい、辛い、恐い、そんな感情がぐちゃぐちゃに混ざる。
正しい事が認められないのが悔しい。
家族や知り合いが酷い目に遭わされて悲しい。
信じていたものに裏切られ辛い。
自分もその悪意に晒されるかもしれないと思うと恐い。

「大丈夫よ、ルイズ。きっとみんな無事だわ」

ルイズは、隣に座っていたカトレアに抱きしめられる。優しく頭を撫でられる。

ふんわりとしたい匂い。その温かさにたが籠が外れてしまう。声を上げて泣いてしまった。

「あああああうううあああ」

「ルイズ……」

強く抱きしめられる。カトレアの体も僅かに震えていた。
本当に辛いのは自分ではない。事を直接体験した姉の方だ。ルイズは自分が少し落ち着くとそれに気付いた。

「……ちいねえさま？」

「駄目ね……ついこの間の事だから、すぐ思い出しちゃって……」

違った。治る見込みが症状を和らげたのではない。希望が彼女を強くしたのではない。生きたい、死にたくない、という渴望がそうさせたのか。

ルイズは体を震わせる姉の背中をさすった。

カトレアが大事に飼っている動物達は連れて来れなかった。それもあってか、カトレアもかなり参っているようだ。もしかしたらこの後、もつと症状が悪化するかもしれない。

「ねえ、ちいねえさま。今晚そつちのお部屋で寝ていい？ お屋敷の人には私から頼んでみるから」

「ご迷惑じゃないかしら？」

「大丈夫よ、この人たちって魔王を匿ったりした事もあるのよ？」

「……魔王？」

カトレアは怯えた反応を見せる。自分を救う手立てを持つ者が、家族や知り合いを危険に晒す原因でもある。それが複雑なのだろう。

「魔王って言ってもね、見た目だけで全然それっぽくないのよ。エルフの尻に敷かれてるし」

「……まるでとうさまとかあさまね」

「あ、でもちよつと違うの。恐怖じゃなくて言いくるめられてるみたいで」

そうして、世間一般の魔王のイメージがどれほどおかしいかを説明し、ここ最近何をしているかなどを話す。するとカトレアの顔は次第に綻んでいった。

「ルイズ、あなた少し変わったわね」

「へ……そんなことないわ」

「あは、変わったわ。だって魔王なんて、平民なんてって言うていたじゃない。それなのに今じゃ種族の違いなんて小さい事みたいに」

「だってそう思ったもんだもの」

「ルイズがそうだったのって、やっぱり魔王様が原因なのかしら？」

「？様？は余計です。ナツメなんて魔王か悪魔で十分だわ」

「あら、魔王様ってちゃんと名前があるのね」

「なかつたらおかしいでしょ、教会がつけた称号なんだから」

「で、ルイズはそのナツメさんが好きなのかしら？」

「いや、それはない」

即答だった。

「ありえないわ。ちいねえさまったら何をそんな的外れなこと」

「あら、残念。本人を目の当たりにして、あわてるルイズが見れると思っただのに」

本人？ 目の前？ そんなおかしなことを言い出す姉にルイズは首をかしげた。

カトレアを見る。その視線を追う。

「げつつ!!」

心の底から出てきた『げ』だった。
本物の魔王がそこにいた。白髪赤目の凍りつくような容姿の悪魔が、
鞆を片手に立っていた。エルフの少女はいない。
悪魔はとてもし訳無さそうに、

「……いや……本当、すまない。僕のせいでもんでもないことにな
ったみたいで……、ごめんなさい」

と頭を垂れていた。ルイズは姉の体から離れて、

「あんだ、どこから聞いてたの？」

「公爵の話から全部」

「何で聞こえてるのよ……」

「そういう能力だから」

「戦争は？」

「終わった」

「何でいるのよ?」

「荷物を取りに。それから君渡すものがあって」

そして、鞆の中から古ぼけた本と綺麗な指輪を取り出した。

「始祖の祈祷書と水のルビー、君の仕事に必要な道具だ」

始祖の秘宝。虚無の担い手が、魔法を使えるようになるのに必要だと言われている秘宝。これがあれば魔法が使える。ルイズが欲して止まなかった魔法を手に入れることができる。

だが今はそんなこと、どうだってよかった。むしろそれを見て頭にきた。結局悪魔は悪魔だ。自分の事ばかりで、屋敷を襲った貴族と変わらない。

「何それ？ 原因を作ったのはアンタなのに！ …… アンタ、この期に及んで私に協力しろって言うの！？」

「分かってる。これはこっちの不手際だ。屋敷を襲った連中は追い払う」

「ここでそれを言って何になるの？ ここからヴァリエールまで何リীগがあると思ってるのよ！」

そうやって魔王を罵りだすルイズ。カトレアは急に態度が変わった妹に言う。

「どうしたの、ルイズ？ そんなに怒鳴り上げるものじゃないわ」

「だってちいねえさま！ こいつが！ こいつが魔王だったから、魔王なんかやってるから私達は！」

自分の言っている事はただの八つ当たりだ。それをルイズは理解している。魔王なんてものは教会の建前を守るための偶像に過ぎない。目の前にいる男は魔王ではなく人なのだ。

でも心の奥底にいる自分が叫ぶ。そんな下らない偶像のせいで私達

は、と。
理屈でなく感情ばかりが先行する。胸の内に納まらない感情が勝手に入り口をこじ開けて出て行ってしまった。

「そうね、私も辛いわ。でも彼は償おうとしてるじゃない」

カトレアはルイズの手を握る。まっすぐ見つめて言った。

「原因はどうあれ、助けてくれようとする人の手を払うものではないわ。ルイズも屋敷の人たちが心配でしょう？」

「うん……」

「それに今は許す許さないじゃないでしょう？ 望みがあるんだから」

その通りだ、とルイズは頷いた。まだ終わっていない。理不尽な暴力も、この魔王ならば虫刺されに過ぎない。屋敷を襲った兵士達も、蟻程度にまで成り下がるに違いない。

カトレアはナツメにも言う。

「あなたは私達のために戦ってくれるんでしょう？」

だがナツメは、

「いや、僕は一度たりとも他人のためになんか戦わない。これはルイズが僕の協力者だからです。ルイズが協力できる状態を作らないと、僕が困るから。恩に感じるような言い方は止めてください」

「強情な人ね」

「よく言われ……のかなあ？」

「変な人」

「それはいつも言われてます」

するとカトレアは、うふふ、と少しばかりの笑みを見せる。
そして真剣な眼差しをナツメに向けて、

「約束してくれます？ 絶対に私の大切な人たちと家を、取り返してくれると」

ナツメは頷かなかった。

「それは無理。絶対なんてこの世に存在しない。可能な限りは善処はしますけど」

「男ならそこは頷きなさいよ」

ルイズが文句を言った。だがナツメは変わらず、

「絶対、なんて言葉を使っているのは、神様ぐらいのものだよ。悪魔には絶対にできない」

とおどけた。するとカトレアは、

「うふふふふ」

なぜか笑い始める。あまり面白くなかったのに、と思いつつながらルイ

ズは姉の顔を覗き込む。ナツメもそれに居心地の悪さを感じたのか、微妙に苦い顔をしていた。

「あ、ごめんなさい。噂の魔王とあなたが全然違うから、おかしくって」

「そうかい」

「ええ。とても優しくそんな方で安心しましたわ」

と、満面の笑みを浮かべた。

？、とルイズの頭に疑問符が浮かべる。そしてポカン、と言葉を失っているナツメを見た。

新雪のような輝く白い髪、夕焼けのような茜色の目、と言い方を変えればなるほど、確かに優しくそうに見える。一応、顔の造りは整っているわけだし。

ナツメはカトレアの抱いた印象に関して疑っているようで、首をかしげている。

「う〜ん、優しくそう？」

「はい、うちのナツメみたいで」

「は？」

「ちいねえさま……あの猫の名前、結局それにしたのね……」

ルイズがやれやれもう諦めた、というように脱力して言った。
すると、

「猫！」

ナツメは喉から重低音を響かせ、嵐のように『猫！』と叫んでいた。カードが裏返るように豹変した彼に、ルイズとカトレアは固まった。はっ、と自分の醜態を晒した事に気付いたナツメは、特に気まずそうにするでもない。元の顔に戻り、

「あ、すまん」

「……お好きなんですか？ 猫」

恐る恐る、といった感じでカトレアは尋ねた。ナツメは妙な気迫を発しながら、頷いた。

「ええ、それはもうね」

するとカトレアは、笑顔を咲かせて冗談を言う。

「まあ、それでしたら今度ぜひ、ラ・ヴァリエールへいらしてくださいな。かわいい子がたくさんいますから」

「いや、というか明日辺りにでも行くつもりなんです……」

「あらあら、そうでしたわね」

また、ふふと笑う。

作り笑いか、とルイズは思ったが、すぐに否定する。カトレアは元々こつという性格だし、病気がちで外にはほとんど出ていないから、人間の汚さもあまり見てないはず。何より、駆け引きじみた作り笑いは、彼女に似合わない。

「ということは、猫も人質、もとい猫質ねこしちになつてるのか……」

対するナツメは、さっきの態度よりも更に真剣な面持ちになつていた。

「あなた、人間の時とはえらい違いじゃない」

「人間はあまり好きじゃない」

「人間にだつていろいろいるわ」

「そんなことはわかつてる」

「だつたら……」

何か言おうとしたのだが、上手い言葉が見つからなかった。ナツメはルイズの後に続けてに言う。

「……必要以上に群れる人達が信用ならないんだよ。個人個人が優しくても、集団が大きすぎると大抵、どこかおかしくなるからね。人間もエルフも。まあ、ルイズや公爵は割と信用してるから、こっちのやる気に関しては心配しなくていいよ」

「割とつて……アンタね」

信用、それは利害の一致から生じたもの。

だがやはり、彼が虐げられている存在だからだろうが、ナツメの言葉はルイズの中にすんなりと落ちていった。

部屋の用意が終わったことをメイドが告げる。するとナツメは、

「さて、今日の所は退散しとくよ。いろいろあって混乱しているみたいだし」

と踵を返した。

「待って」

ルイズが言うと、ナツメは歩を止め、振り返る。

「何かあるのか？」

「……やるわよ。わ、私にしか出来ないんでしょ？ その、虚無の力を調べるの……」

「いいのか!？」

「いいわよ……。前倒しになっちゃうけど」

ルイズはそっぽを向く。素直に引き受けることが恥ずかしかったのか、どうにも顔が熱かった。それを見たカトリアは口を押さえて、

「あら？ あらあらまあまあ」

「ちいねえさま、何を勘繰っているのかこのルイズにはわかりませんが、あなたの考えている事は絶対に違います」

ルイズはその反応を、流れるそよ風の如く冷静な心で受け流した。ナツメもカトリアが苦手なのか、存在を認めないかのように無視し

て、

「そっか……ありがとう」

いつものように顔を赤くしながら、照れ隠しをするルイズを期待していたカトレアは、

「ルイズ、あの可愛かったルイズが冷たい……うっ」

と、ハンカチを噛みながら恨みがましく見ている。明らかに嘘泣きだった。

ナツメは再度秘宝を取り出す。右手には水のルビー、左手に始祖の祈禱書。

「じゃあ、お願いします」

と、ルイズの前に差し出した。

これが始祖の秘宝。

これがあれば、ルイズは魔法を使えるようになる。コモンマジックではなく、自分の適した系統の魔法を使う事が出来る。

だが同時に責任も発生する。

人間に恐れられているエルフが恐れる、とんでもない力を手に入れることにもなる。

だがルイズは決めていた。自分の魔法は人のために使おう、と。

ルイズは両手を前に出す。

ナツメの左手から書を受け取り、右手から指輪を

「つつ！」

急にナツメが、弾かれたように手を引いた。指輪が足元に落ち、金

属質の音が響く。ナツメは目を白黒させて、地面を踊る指輪を見ていた。

「ちょっと、なにしてんのよ」

ルイズは落ちてしている指輪を拾い上げる。

「あれ？」

指輪を手にした時、妙な感覚がルイズの体に奔った。

「ルイズ？」

「……なんでもないわ、ちいねえさま」

気のせいだったのか、とルイズは首をかしげた。ナツメまで怪訝そうに聞く。

「……ルイズ、なんともないのか？」

「もう、なんでもないわよ」

ルイズは大きさとわんばかりに答え、ナツメの姿を視界に納め

「……!?」

驚愕に身を強張らせた。

「ルイズ、ルイズ？ どうしたの？ どこか調子悪いの？」

カトレアに揺すられて、ルイズは正気を取り戻した。

「……へ？」

今のは何？ 今の感覚は？

ナツメの姿を見た瞬間、ルイズは酷く可笑しなことを考えていた。それは今の彼女からすれば、常識外れもいいところで、限りなく悪に近いことだった。

「ルイズ、あなた、やっぱりどこか悪いんじゃないの？ 唇が青いわ」

とても心配そうに自分の顔を覗き込む、姉の顔が視界の大半を占めていた。

「大丈夫。多分、少し疲れてるだけだから」

「本当に？」

「うん。だから今日はもう休むことにするわ」

ルイズは出来る限り取り繕った。もしかしたら姉は、その演技を見破っているかもしれない。でも付き合いの浅いナツメは騙せる。十分だ。

「ナツメ。家のこと、あなたにお願いするわ」

「ああ」

ルイズはナツメの方を見ないで言ったのだが、力強い返事が返って

きて、安堵を覚えた。

やっぱり彼は、自分達の味方だ。

だからさつき思ったことは間違いだ。味方に対して、あんな酷いことを考えるなんて、絶対におかしい。

ルイズは逃げるように部屋に入った。

整えられたばかりのベットに潜り込む。シャツやスカートが皺になるだとか、些細なことには気が回らない。

ドクン、ドクン、と脈は早くなり、呼吸も少し荒い。

今さつき頭の中に浮かんだことが、信じられない。本来の自分ならば、こんなことは絶対に考えない。

でも、確かにその通りだと思った。

「ちがう……」

自分の善と呼べるものから酷く逸脱しているにもかかわらず、それは自分の底から湧き上がった思いだった。

必死で否定する。

しかし後から後から、それは意思を持つ水あめのように、ルイズに絡み付いてきた。

「なんてこと考えてるのよ……」

その時、ルイズは確かに、しかし漠然とこう思ったのだ。

私はナツメを殺せる。

『猫のたまり場』は、ロンディニウムに数年前開店した喫茶店である。

猫の形をした看板が目印の、輸入したお茶やコーヒー、軽食を出す店である。内装は女性向けの物で、のほほんとした雰囲気売りしていた。

午前中だが虚無の曜日であるせいか、喫茶店の客入りは良かった。

「うげ、何これ……」

その美少女はコーヒーを口に含むと、顔を歪めて呟いた。

日差しに輝く長い金髪、切れ長の青く澄んだ瞳。信じられないほど整った顔立ち。スタイルの良い華奢な体に纏っているのは、学院の制服のような白いブラウスとプリーツスカート。胸の辺りに銀の首飾りをしている。服装は街娘なのだが、どこか気品を感じさせる。

「だからやめとけって言ったじゃない。この辺はコーヒー飲む習慣ないんだから、淹れ方が雑なのは当たり前だろ？」

その隣にいるのは、四角い黒ぶち眼鏡をかけた金髪碧眼、長身の男。街路に出たテーブルにその二人組は座っていた。

とりあえず分かんと思うが、少女の方はルクシャナである。身に付けられた銀の首飾りは？変化？の効果があり、耳は長くない。

男の方はナツメ。同じくその眼鏡は、ネフテス製の容姿を変える魔法道具である。髪と目の色がルクシャナと同じだが、顔の造りが違うため、兄妹には見えない。二人とも有名人で顔が割れているが故の変装である。

帰還後、一夜明けて二人は城下で休息を取っていた。

「ほら、クックベリーパイは美味しいよ」

ナツメは「口直し口直し」と言いながら、ルクシャナの方にパイとフォークの乗った皿を置く。

彼女は少し視線をずらすと、ニヤ〜と悪巧みをしているような顔になり、

「食べさせて」

と、皿を押し返す。

「はあ？」

ナツメが気の抜けた声を出すと、ルクシヤナは店内にいるカップルのテーブルを指差した。

「はい、あ〜ん」というのをやっている最中だった。戦争の後だといつても、出征しなかったらしい人間のやり取りは暢気なものだった。

「……………あれ、やんの？」

「うん」

「マジで？」

「うん」

「恥ずかしいだろ」

「恥ずかしいわ」

と言いながらもルクシヤナは、

「あ〜ん」

少し頬を染めながら、かわいい口を小さく開いた。

「……いや、「あ〜ん」じゃなくてさ……」

ナツメは躊躇した。周囲の視線が痛くてやりたくないのだ。

大方の原因は目の前の、人間離れた美貌を持つ彼女にある。というか人間ではない。

妖精といっても遜色ないその美しさに、道行く男は欲望の、女性は羨望の眼差しを向けている。ナツメには、憎しみと嫉妬のこもった男の眼差しだが。

「ほら、早くして。早く」

文句を言いつつ、「あ〜ん」と再開する。

ナツメはその仕草を見てみると、だんだんと心拍が早くなり、体温が上がる。悟られるとからかわれるので、思考を逸らすことで動揺している感情を修正する。今日の晩御飯何かな、近頃料理してないなあ、など。そして、

「小さな子供じゃあるまいし、自分で食べるよ」

一般論で対抗するのだが、

「そういうのじゃないの、分かってるくせに。それにやってくれないと、また後で後悔する事になるわよ？」

それは弄り回すという意味なのか、ルクシヤナは悪戯っぽい笑みをナツメに向ける。

「うう、分かったよ……」

皿を引き寄せ、サクツ、とパイをフォークで切ってから、刺す。手を添えて、無言のまま彼女に突き出した。

「あ〜ん、は？」

「……あ、あ〜ん」

ナツメが折れると、ルクシャナは満面の笑みを浮かべて「はむっ」とパイにぱくついた。

「あ、ほんと。おいしい」

……かわいい、とナツメは思う。

それにこうしていると、なんだか幸福で満たされているような気持ちにもなる。周囲の視線は先の細いフォークの如く、ナツメを刺す

が。
「じゃあ私も、お返しに」

パイを飲み込んだルクシャナは、自分のシフォンケーキにフォークを入れた。生クリームのたっぷりついた奴である。

「はい、あ〜ん」

「……」

フォークの先に乗ったケーキと、ルクシャナを見比べる。「食べて」

と目が言っていた。

もう恥ずかしくないのか、頬は染まっていない。

「うう……」

羞恥を押し殺し、彼は彼女の「あくん」を受け入れた。

「おいしい？」

「……おいしいです……」

「そう、じゃあもう一回」

と言って再び「あくん」をやってきた。

もうどうにでもなれ、とナツメは彼女の言うがままに食べさせられる。

で、三回目になったとき、

「あ、ごめん、クリームついちゃった」

ルクシャナの手元が少し狂った。

「ああ、いいよいいよ。このぐらい問題な」

ナツメは自分の頬についたクリームを取ろうとするのだが、ルクシヤナがそれを制す。

「じつとして。取ってあげる」

彼女は身を乗り出して、彼の顔に手を添えた。ナツメの中でくすぐ

られるような恥ずかしさが駆け巡る。

そして口元についた生クリームを人差し指で絡め取る。

何を思ったのか、急に頬を染めた。

指先についたクリームを数秒ほど、熱^{ねっ}っぽく見つめた後、

「……………ナツメの白くて甘いクリーム……………」

ぺろり。

「へへ……………おいし」

はにかんだ笑みをナツメに向けた。雰囲気^{きふき}が台無しになった、とナツメは思った。

……………今のはダメだろ。本当にダメだ、これは。凝視^{けいし}している男達を殺した……………は大げさとして殴り飛ばしたい。

そう思いながらも、ナツメに咎める気力は無く、

「はあ……………これ食べたら、すぐ出るからね」

何事も無かったかのようにスルーした。

彼の対応が気に入らなかつたルクシヤナは、

「ナツメの白」

繰り返そうとし、

「ねえ、今のそれが自爆^{じばく}って事、理解してる？」

ナツメは指摘すると、ルクシヤナは眉をひそめた。

「さつきからいい加減はずかしいのに、一体どこまでやれば気が済むんだよ……」

「……あなたが慌てるまで」

「絶対動じないから。君が裸踊りを開始しても他人の振りして帰るから」

「婚約者の奇行を許すの?!」

「うん。僕はそういつた所には理解が深いからな。僕自身そうだし、ルクシヤナは敗北を認めたのか、これ以上蒸し返すことはなかった。

「そういえば、こうやって二人で街に出るなんて、初めてじゃないかしら?」

「そだっけ?」

ナツメは首をかしげた。
向こう（ネフテス）では結構な頻度で、お使いとか一緒に行っていたような気がする。

「そうじゃなくて、恋人になってからよ」
言っていないのに読まれた。

「ああ、なるほど」

「つぶつぶ……」

普通の人にはかわいらしく見えるのだが、ナツメの目には不気味に映る。次のネタをもう考え付いたのか、飽きないな、と身構えてしまふ。

「な、なんだよ……」

「初デート」

ルクシャナは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「そういえばそうか……、と合点がいったのだが、ナツメにはどうにも本気では楽しめなかった。気を遣われている、と感じていたから自分の心が折れる事の無いように。」

絶対生きてやるうという気持ちが枯れないように。

「あのさ、ルクシャナ。僕はもう大丈夫だから」

「え？」

「そんな風にしなくても僕はまだ戦えるから」

「……本当に？ 昨日から変なのには？」

「ああ、本当に大丈夫。昨日のはちょっとね、大公の屋敷でルイズに会ってさ」

ナツメは昨日の出来事を話す。屋敷襲撃という裏切り者への見せしめ、ルイズの家族が亡命してきていること、一刻を争う事態であること。

「僕は今日の夜からヴァリエールに向かおうと思う」

「……」

「聞いている？」

するとルクシャナは両手を振り上げて唸った。

「ああ〜聞いているわよ！」

「怒ってる？」

「怒ってるし嫉妬もしてる！」

いつもの通り正直だった。

「なんであの子にそんなにかまうのよ？ 担い手の協力が必要だと
して、あなたがそこまでする必要が本当にあるの？」

「理性的に考えると無い」

「感情では違うのね」

「感情、なのかな……確かにそれもあるけど……」

ナツメは右手を強く握り締めながら、言葉を濁した。
ルクシャナは途端に苦い顔になり、

「ナツメ、あなたって小さい子が好きなの？」

ナツメは紅茶を吹いた。それを見た店員が慌ててテーブルを拭きに来る。「イチヤイチャしゃがって」という音が聞こえた。他の力ツプルにも言え。

「僕の行動のどこにそんな誤解を誘発する要素があった?! 二ヶ月の行動を振り返っても思い当たらないよ!」

「だって……」

「誤解しないように。あと曲解も」

「だって言葉にしてくれないんだもの。十年前言ったきり」

私は言ってるのに、とルクシヤナはポツリと呟く。そして何か、いや分かりきったことを期待する目でナツメを見つめる。

「あくなるほど。うん、好きだよ、愛してる。とてもすごく非常に」

「却下。私は心のこもった一言が欲しいの。この場であれば尚良し」

「お前はどこまで僕を赤面させたいんだ!?!」

「だって好きなんだもの」

とナツメに笑いかけた。

「……………」

ナツメは返す言葉が見つからず、ただ沈黙した。

ドクンッ、と急に心臓が跳ね上がる。『あ〜ん』の時とは違って、

脈のコントロールができず、上から下まで熱くなった。

「あゝ、顔赤くなってる〜」

悪巧みの笑顔でルクシヤナが指摘されて、ナツメの顔はますます紅潮していく。

感情が乱されたおかげで、風の精霊の網は滅茶苦茶になってしまった。周りのテーブルで不自然な暴風が起こり、小石やゴミ、果ては重い木のテーブルまでも飛ばした。給仕の女の子がスカートを押さえて、その動作に道行く男が視線を奪われていたりもした。

少し後ろめたさを感じながら、被害が広がる前にナツメは精霊とのリンクを切った。

「すうう〜、はあああ〜……すう〜、はあああ〜」

白旗とばかりに深呼吸していると、飛んでいたテーブルが落ちてくる。

硬い地面に当たると、乾いた音と共に破片が飛び散った。店の人のめんなさい、と思いつながらナツメはルクシヤナを睨んだ。そんなナツメの気持ちをよそに、

「ちょっと！今のあなた、かわいいんだけど！」

彼女は率直な感想を述べた。

「いや、男にそれはちょっと……」

「いいじゃない、私がそう感じたんだから」

「まあ、感じる思うは自由だけどさ、場所を選んでくれよ……」

ナツメは周囲に怪我人がいない事を確認して、ほっとする。

「あら、自分の落ち度を人のせいにするの？」

「……ずるいぞ……」

反省の色が見えないルクシャナに、少し腹立たしくなる。

「あら、さっきのお返しよ」

「とにかく！ そういうこと言うのは周りに人がいない時をお願いします」

二人とも皿の上の物は、既に胃の中に納まっていた。ナツメは席を立つ。財布を取り出し会計を済ませようとする。

「あれ、もう行くの？」

「うん、戻って出発まで休む」

「今休んでるじゃない」

「その休むじゃなくて、寝るってこと」

「添い寝してあげようか？」

いい加減しつこいので脅すように、

「襲つよっ？」

と返すのだが、

「私是一向に構わない。準備はいつでも出来ている」

むしろ乗り気にさせてしまい吐息をついた。

「べ、別にいいんじゃない？ どうせ夫婦になるんだし、ナツメも責任とってくれるんでしょ？……って聞いているの！？」

ふざけながら少し頬が上気しているルクシヤナ。

ナツメがはいはい、と生返事をする、「もー」と頬膨らませる。かわいい。

愛しい。

心の中では何度でも言えるのに、口にするのは難しい。というか難しくなくても言っちゃらない。ナツメも、ルクシヤナがこうして膨れているのを見るのが好きだから。彼女とのバカで不毛なやり取りが好きだから。

だが、そんな日常が来るのか。

ナツメはそんな不安にばかり苛まれていた。

ルイズんちが大変なことになった（後書き）

この後ガリアが攻めてくるのを忘れてない？ とか思ったりしても突っ込まないでください。覚えてますので。後の展開もちゃんと考えてますので。

カットした部分。

トリステインでは数年前から『イーヴァルディの勇者』シリーズが歌劇になっている。タニアリージュ・ロワイヤル座では頻繁に公演されている。脚本は劇場によって細部が異なるものの、剣士が主人公で、最後に魔王が悲惨な最期を迎えるということは共通していた。

「そこまでだ！ 魔王ナツメ！ もう貴様の好きにはさせん！ 覚悟しろ！」

「ふん、人間風情が何をほざく」

甲冑を着た役者と黒いローブをたなびかせた白髪カッラの役者が対峙している。

「さあ！ 我が闇の軍勢よ！ 勇者を血祭りに上げよ！」

すると竜の着ぐるみを着た役者が勇者役に襲い掛かり、

「私は負けん！ 死んだ仲間のため、愛する者のため、そして神と始祖のために！ うおおおおおおおおお！」

「ふはははははは！ 破壊と殺戮こそが、この世の全て！ 神がど

うした？ 始祖などただの虫けらよ！ 貴様も我が野望（世界征服）の前に屍を晒すがいい！」

「違う！ 世界はもつと美しい！ お前という存在がそれを歪めてしまったんだ！」

「ふふん、ならば証明して見せよ。我と貴様、どちらが正しいのかはつきりさせようじゃないか」

傲慢な態度の魔王役。勇者役は竜をばったばったと倒していく。キン！ 勇者の剣が折れてしまった。

「ふつ、やはり人間は人間。脆弱な生き物だ。我に勝つだと思い上がるな！」

「くつ、ここまでなのか！」

「くつくつくつくつく、ああ……これで世界は絶望と暗黒に満ちる。人間を排除し、亜人が支配する闇の世界が……」

観客は手に汗を握りながら見守る。

そして舞台の横から神官の格好をした役者が現れて、

「勇者よ！ この剣を！」

と投げた。勇者役はこれを器用にキャッチする。

オオオ！ と観客は声を上げる。

「これは……！ 始祖が伝えたとされる聖剣、デルフリンガー！ よし、これで勝てる！ 魔王、覚悟！ うおおおおお！」

魔法効果できらきらと光る剣。この歌劇、劇場側から予算が結構下りているので、小道具も凝った物が使われているのだった。

グサ！ 魔王の体を勇者の剣が貫く。観客から猛烈な歓声があがる。貴族の中には子供連れも多い。

そういつた子供たちは、本当に真剣な目で劇に見入っていた。

「……………ぐ、な、なんだと……………この私が人間風情に……………」

「貴様は人間を、我らの信仰心を甘く見すぎていたのだ！ この世界に貴様は不要だ！ 早々に消え去るがいい！」

「認めぬ！ 認めぬぞ！ ブリミルが創り上げた世界など、我は認めぬ！」

ナツメが聞いたなら全力で脱走するような台詞を連発している。もしルクシヤナにでも聞かれたら、これをネタに延々と彼を弄^{いじ}るだろう。そして魔王はバタリと倒れる。すると歌姫達が賛美歌を歌い始めて、魔王役は舞台から消え去った。

「悪は滅びた！」

勇者役が高らかに叫ぶと、観客は凄まじい拍手を送った。

二階奥の特別鑑賞席は、国内で有数の大貴族のみが使える。十あまりのオーク椅子がゆったりと並び、出入り口はカーテンで仕切られている。

そこで仮面をつけた貴族達が、じっと、その演目を見ていた。

「いやいや、気持ちのいいものですな」
「悪魔の最後は、やはりああでない」と

閉幕と同時に出てくる声は上機嫌なもので、口元は綻んでいる。だが、一人が漏らした言葉に、

「歌劇ではあありませんが、実際はどうするのです?」

一同は沈黙する。

そして僅かな静寂の後、

「姫殿下には困りますな。悪魔に誑かされた拳句、国まで売り渡そうと言っているから」

「まったくだ。街に化け物を入れるなど、正気の沙汰ではない」

口を開いて出てくるのは、現王政府の批判ばかりだった。加えて、

「ラ・ヴァリエールは一体何を考えているのだ。本来、規範を示さねばならぬ立場だというに……まことに嘆かわしい事です。かの伝統ある貴族が悪魔に寝返るなど……」

大使を務めた者に文句をつける。

「このままではこの国、ひいては世界が揺らぎかねませぬ。悪魔に支配される世界……」

彼らはそのまま、言いたい放題を続ける。

「だからこそ、我らが立たねばならないではありませんか？」

貴族達の背後から、男の声が響いた。貴族達が振り返ると、カーテンの隙間から年配の貴族が現れた。小姓だろうか、短い金髪をした十歳ほどの少年を連れている。いずれも仮面を着けていた。

「ゴ……グリ・シニョール灰色卿」

本名を言いそうになった貴族が言い直す。

「ここでわたくしをその名で呼んではなりませんよ。悪魔がどこで聞き耳を立てているか分かりませんからね……」

灰色卿は冗談を言っつて、笑う。

「さて、本日お集まりいただいた目的は、既にお分かりかと思いません。皆さんは、いずれも名のある、この国にとって重要な方々ばかりです。とまあ、前書きはよしましょう。事態は一刻を争うのですから」

貴族達は一斉に頷いた。灰色卿は続けて、

「思えば二十年前から狂い始めたのです。空は無秩序に伝統も制度も、名誉もを破壊し、それを地上の者にまで強要している。何食わぬ顔をして、神に唾を吐いているのです。これを捨て置くなど、あなた方のような、旧き善き貴族には堪え難い苦痛でしょう」

「卿、あなたは殿下や宰相に、諫言されると申されるのか？」

灰色卿は首を縦に振った。

「そうです。我々は、現王政府の目を覚まさせなければなりません。始祖の秘宝を悪魔に渡すなど、もつてのほかだ」

一同の体が強張る。

『我々』つまり、自分達も含まれている。

これが意味する所は、

「徒党を組み、政府に嘆願なさるのですか？ それでは、些か説得力に欠けるのでは？ 失敗すれば立場を悪くするだけですぞ」

数ではまだまだ反魔王派が勝っているのだが、現王政府には勢いがあつた。このまま放っておけば勢力図は塗り替えられる。ちよつとした小言では、彼らの考えを改めさせる事が出来ないのだ。

灰色卿は首を横に振った。

「ではどうなさるのです？ まさか我らに反乱をけしかけるおつもりか？ 軍が政府についている今、勝ち目があるとはとても思えませぬ」

「いいえ。言つたでしょう？ 嘆願ではなく、諫言だと。悪魔の甘言に惑わされた者達の目を覚まさせるのです。神に逆らう事の愚を知らしめるのです。手段に少々の武力が伴うのは、致し方ないこと

……」

貴族達一同は、その言葉の根拠が薄く、根拠に欠けるものだと思つた。

ディアブロンキスタ

魔王討伐の十五万の軍勢ですらできなかった事を一体どうやって…

…。呆れてため息をつく者が多数。灰色卿は、表には出さないものの苛

立つ。

「……卿、我々はそのような絵空事に付き合うつもりはございません。あの悪魔を取り除く術すべがどこにあるかというのですか？」
「そうです。刺客を送り込んで失敗したという噂を何度耳にした事か……」

諦めの色が濃くなっていく。

しかしここにいる者は全員、魔王の排除を望んでいた。戦いの後も前も。

戦争後、魔王に対する市民の認識が修正され始めている。
人気の程はさておき、今のところ知名度だけは始祖ブリミルに次ぐ同盟が結ばれた後、数多の嫌悪が好意に転じてしまえば、彼らにとって非常に面白くない。というか現在も面白くない。

「悪魔を消す事ができなくとも、この国から排除する事は可能でしょう？」

灰色卿は氣勢を削ぐまいとする。

「同盟締結、これはなんとしても阻止せねばなりません。この辺は皆さんも既にご理解かと」

「ふむ……それならば可能性も皆無ではないが、この議題は王宮でも堂々巡りでしょう？」

「姫様もあの鳥の骨も、頑として首を縦に振りませぬ。このままずるずる行けば、なし崩しに事が進んでしまう」

「彼らの首を縦に振らせるには……、やはり実力行使……」

すると灰色卿はニヤリと口元を歪める。

「そうではありませんよ。いるではありませんか？ つい最近、我々を裏切った背信者が」

ラ・ヴァリエール。

その名が一同の頭に浮かんだ。伝統あるトリステインでも、一番か二番目に古い貴族である。

「国のためとはいえ、卑俗な悪魔に寝返るとは……堕ちたものです。そして、我々はその裏切り者のおかげで、窮地に立たされている訳だ」

窮地、とは相対的に貴族の立場が下がり、平民の、そして亜人の立場が上昇するという事。

「我々は教会に代わり、奴らを粛清しなければなりません。王政府が少数派でありながら強気ているのは、我々が本気でないと思っているからです。今一度、悪魔に与することがどういう結果を招くか、教えてやらねばならないのです」

一同は再び、戸惑いながらも頷いた。

全員、灰色卿の考えに賛同はしている。

アルビオンとの同盟はどうあっても受け入れられない。平民よりも下賤な悪魔の下につくなど、絶対にあってはならない。彼らの上に立つのは王と、王権を与えた神と始祖だけなのだ。そして今度は、具体的な話を始める。

「して、方法は？ 人質をとるにしても、あの家には、かの？烈風？がいるではありませんか。そう一筋縄でいくでしょうか？」

「もう引退して三十年ですよ、それにいくら烈風といえども、あの

悪魔に比べればかわいいものです」

「長女はどうですか？ アカデミーの主任研究員ですよ。これなら我らも手を出しやすい」

「しかし、彼女は現在休暇を取っているぞ。大方、こちらの動きを警戒しているのだろう」

ここでしたらまずいような話なのだが、既に次の演目、『君の騎士になりたい』が始まっている。彼らを注視している者は皆無だった。

閉幕時間となり、劇場から人がいなくなった。

二階席にいた貴族達は希望に満ち溢れた顔をして、解散した。

しん、と舞台だけ明かりがついている劇場。どこか不気味で妖魔が出て絵になるような空気を孕んでいる。

灰色卿の隣にいた少年はおもむろに空いた椅子に座って、

「お話は弾んでいたようですが、報酬の五十万エキュー、払えるんでしょうね？ ゴンドラン議長」

ずっと閉じていた口を開いた。

ゴンドランと呼ばれた老紳士は、金額に目を丸くして、

「ごじゅ、冗談じゃない！ 分かっているだろう？ ダミアン君。

この国は戦争が終わったばかりなんだ。三十万。それ以上は出せん」

そして彼はアカデミーの意思決定機関、評議会の議長である。

「でも研究予算の名目で作ってますよね？」

裏金を。

ゴンドランの顔から血の気が引く。

「そこからちよつと、捻出してくれば、済むんですけどね」

「……!?!」

一体どこからそんな情報を仕入れたのか。ゴンドランは無邪気な顔で言うダミアンに戦慄を覚えた。

「三十五万」

「四十六万」

「三十八万エキュ、これ以上出したら私の身が破滅する」

するとダミアンはうん、と唸ってから渋い顔をする。しばらく首を振ったり、歩き回ったりして、

「その金額でしたら、条件付でお受けしましょう」

と折れた。

「条件?」

「ええ。十万エキュ前払いで。それと必要経費はそちら持ち。これでしたらこちら都合がつくので」

そんな金額をさらりと言う子供。

見たままの年齢と言っわけでもないだろう。もし見た目どおりなら

ば、将来碌な大人にならない。
ゴンドランは「いいだろう」「と低い声で言った。

「ありがとうございます。これで貴国の伝統は守られますよ」
そしてこの少年を見て考える。

「……そんなに稼いで、一体何に使ったね？」

無意識の内に声に出していたようだ。
しかし、

「答える義務はありませんね」

と、ダミアンは笑ったままだった。

結局、前金十万エキュー、二十八万エキュー後払いで折り合いがついた。

ダミアンはゴンドランと別れて、そのまま夕方の路地裏に入った。
しばらく奥に向かって歩いていくと、後ろから筋骨隆々の男が近づいてきた。

「大丈夫なのかい？ 兄さん」

男がダミアンに声をかける。異様な光景だった。ロープの下からはちきれんばかりの筋肉が見える大男が、十二丁三の男の子を兄と
言ってるのだ。

ダミアンは立ち止まり、

「何が？」

とんでもないように言った。

「何がって、これじゃあ二重契約だろ。今後の信用に関わるじゃないか！ あの王様にばれたら、ただじゃすまないぜ？」

「大丈夫だって、ジャック。成功したら、ばれてもお目をこぼしてくださいさ。ああ、寛大なあの方には感謝しなきゃな！」

「それにしたってぼったくりすぎだろ！ 前金十万里キユーなんて正規の報酬並みじゃないか！ ダミアン兄さんが悪魔に見えてきたよ」

「人聞きの悪いこと言うなよ。これはれっきとした任務だ。それにさ、陥れようとしている奴を逆に陥れるって、楽しいだろ？」

ダミアンは嗜虐的な笑みを浮かべた。

「僕たちの夢には金があるんだ。有る所がくれるって言うんだから、ここは甘えておくべきだよ」

「信用、がた落ちだぜ？ この国じゃ、もう依頼が取れないじゃないか
いか」

「いいんだよ。どうせアルビオンに飲み込まれちゃうんだから」

「わかったよ……。でもあの王にこれ以上、扱き使われるのは癪だなあ……」

ジャックと呼ばれた大男は、やれやれと野太い息を吐き出した。

「しばらくはこの街を拠点にするって、ジャネットとドウドウーに伝えておいておくれ。僕は交渉で疲れたから宿に戻るよ」

「わかった」

「特にドウドウー、あいつに釘を刺しておくのを忘れずにね？」
『騒ぎを起こさない事』。いいな？」

「……わかった」

ジャックの表情が難しい物になった。それを見たダミアンはぶつと吹き出し、

「あいつ、ちょっと頭が足りないからなあ……。もしもの時はポコポコにすればいいよ。明日から僕も一緒に行動するからさ、頑張ろう、僕たちの理想のために」

ジャックの後ろに回り、ぼんぼんと背中を叩いた。

この後ヴァリエールの屋敷を襲撃して、元素の兄弟がアルビオンへの内通者で、という予定だったのですが、ノートPCのHDがとんだのでカットしました。もう一度書こうと踏ん張ったのですが、この辺で挫折。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8531m/>

異世界で殺伐とするかもしれないお話

2011年4月24日03時52分発行